

Ace Combat side story  
of 5 —The chained  
war—

びわ之樹

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

The chained war ——連鎖する戦い。欲望は、戦火は、怨恨は、そして人の想いは、鎖のごとく連なつてゆく。

——2010年8月、凄惨な結末を迎えた『ベルカ戦争』から15年。大国オーシアとユークトバニアの対立と時を同じくして、オーシア東方諸国にも暗雲が立ち込めていた。

ベルカ戦争で力を見せつけ、諸国の雄たるべく勇躍するウステイオ。超兵器の力を手に、覇権を望むラテイオ。衝突する両勢力を見定め、漁夫の利を図るゲベート。オーシアの隙に乘じ、東方諸国の盟主たるべく動き出すサピン。怨恨と策謀の連鎖は、東方諸

国の中央に位置するレクタ共和国をもやがて巻き込んでゆく。

これは、恩讐と策謀に翻弄された、名もなきパイロットたちの物語。

\*\*\*\*\*

・この作品は、ゲーム作品『Ace Combat 5』を題材とした二次創作小説です。以前に投稿させて頂いた、『Ace Combat side story of ZERO | Skies of seamless |』の続編となります。ゲーム本編とはやや離れた舞台でのストーリーとなりますので、独自設定・独自解釈が多くなりますが、ご容赦下さいませ。

・前作から引き続き、本作中にはゲーム本編には登場しない実在機体も登場します。機体の知識に関しては依然不安も多々ありますので、お気づきの点がございましたらその都度ご指摘頂けると有難く存じます。

・2019/02/24 最終話投稿を以て完結としました。

・2019/03/08 続編『Ace Combat side story of 3 | Emotional Sphere |』の連載を開始しました。

# 目次

第1話 三日月の飛行隊 | 1

設定資料集 | 21

第2話 雷雲の足音 | 32

第3話 Curtain | 54

第4話 境界の炎碑 | 77

第5話 境界を越えて | 103

第6話 Tyr sua spada | 130

130

第7話 雨下に舞う三色旗《トリコロ

リ》 | 149

第8話 ラティオ西郡迎撃戦(前) | S

ky High | 173

第9話 ラティオ西郡迎撃戦(後) |

‘GALM’《鬼神の後裔》 | 199

第10話 英雄の面影 | 223

第11話 三日月(メツザ・ルーナ) |

244

第12話 獅子たちの休日 | 274

第13話 Above the clo

uds | 298

第14話 深層海流 | 328

第15話 逆風の中で | 350

第16話 争覇の地(前) | The

round table in 201

0 | 373

第17話	争覇の地(後)	—	Red	第27話	Breaker	—	673
and	Black	II	—	第28話	聖剣の立つ地(前)	—	尖鋭な
第18話	報復の旗手	—	428	る短剣	—	—	695
第19話	仲間、7騎	—	464	第29話	聖剣の立つ地(後)	—	報復の
第20話	‘灰色’の亡霊	—	486	末路	—	—	720
第21話	月が沈む刻	—	507	第30話	ウツセミ	—	746
第22話	終わり始まり	—	534	第31話	The moon rise	—	—
設定資料集(後編)	—	—	557	s again	—	—	766
第23話	報復の短剣(ダガー)	—	—	第32話	巢立ちの刻	—	792
572	—	—	—	第33話	The shine in	—	—
第24話	過去の残影	—	594	the dark	—	—	821
第25話	攻防、171号線	—	619	第34話	‘ガラム’救出作戦(前)	—	鎖
第26話	白い闇の中で	—	643	を断ち切る者	—	—	847

第35話	‘ガラム’救出作戦(後)	—	三
日月(メツザ・ルーナ)II	—	—	871
第36話	Return of the	—	—
Demon	—	—	901
第37話	託す想い、宿る想い	—	937
第38話	Break of Dawn	—	—
(前)	くろがねの双頭竜	—	961
第39話	Break of Dawn	—	—
(中)	‘Cipher’	—	997
第40話	Break of Dawn	—	—
(後)	The chained wa	—	—
r	—	—	1032
第41話	Break of Dawn	—	—
pair	—	—	1132
番外編2(前)	Skies of des	—	—
lie	—	—	1102
最終話	The chained be	—	—
+	—	—	1061
—	ヒカリ	—	—

## 第1話 三日月の飛行隊

雲を突き抜けた先で、太陽が刺すように目を打つ。

速度域グリーン、失速の恐れなし。それだけを確かめ操縦桿を引くと、キャノピーの外で天地が転がり、しばし茶色い大地が『頭上に』広がった。

南方に広がる、聳えた柱を鑿<sup>のみ</sup>で削り取ったような山脈。徐々に低く平らとなり、北方へと連なつてゆく広大な平野。そして、地面の暗色にコントラストを映えさせる、低空域にぼつぼつと浮かぶ白い雲。自然が織りなす雄大な光景の中で、その雲の周りを鳥のように飛び交う小さな影だけが、その自然の中に人の気配を紛れ込ませている。

「くそっ！もうこれだけか！」

雲の合間に見える友軍の数は、4。離陸した時点では12機から上がっていた筈だが、自分たちを含めても今や半数ほどしか残っていない。驚きと苛立ちに、思わず出た舌打ちが零れる。

機体も技量も、不足していたとは思わない。それなのに、最前線を護る主力部隊の自分たちが、たった2機に翻弄されるなんて。

煮えくり返り返りそうな胸中に、雑音交じりの声が被さった。

《中尉、小隊長たちが孤立しています！》

「ハルヴ4、行くぞ！せめて奴らに一泡吹かせてやる！」

僚機に言われるまでもなく、青年にもその様は見取れた。『敵』の2機は1機ずつに分かれ、友軍の2機2組の連携を乱しながら距離を詰めている。その一方が、自分たち的小隊長を含む集団であろうこともはつきりと見て取れた。

機体が一回転し、機首がまっすぐ地面へと向かう。軽量な機体に高出力のエンジンという組み合わせに加え、加速性能に優れた形状、そして何より重力を活かせる上空からの逆落とし。まるで地面に吸い込まれるように機体は加速し、その鋭い鼻先を目標へと向けてゆく。風を纏った翼は瞬間に音速を越し、敵の死角となる斜め後上方から一気に距離を詰めた。

眼前で、小隊長機含む2機の後ろに敵機が就く。敵のレーダーがその背を完全に捕捉し、ミサイルを放つまで約2秒。それだけあれば、何とか後方には喰らいつける。一瞬で追いつきミサイルと機銃を叩き込めば、撃墜は一瞬だ。

攻撃範囲に捉えるべく、フットペダルをやや緩めて速度を調節する。ガラスにぼやりと浮かぶガンレティクルが、その背を捉え始める。

もう少し。

小隊長の僚機が翼を傾ける。



もう少し。

小隊長が『撃墜』され、ゆっくりと機首を翻す。

あと、一步。

まるで絵に描いたような一撃離脱の接敵法そのままに、青年は引き金に指をかけ――

《ハルヴ4、撃墜判定だ。離脱しろ》

《えっ……？ウソ、いつの間に!?!》

「……なっ!?!」

唐突に飛び込んだ男の声に、青年は照準器に張り付けていた視線を咄嗟に引き離れた。

ハルヴ4、斜め後方。

そちらを振り返ると、こちらの援護に就いていた僚機――ハルヴ4の後方に、別の友軍を抑えていた筈の敵機がその背を捉えていた。

速度を活かした高空からの奇襲。それすらも、あっさりと読まれていたというのか。ならば、せめて目の前の敵だけでも。

舌打ち一つ、操縦桿を握る手に力を籠め、青年は視線を前に戻す。その先に、敵の姿は……ない。確かに背後を取っていたのに、忽然と消え失せている。

「…!?消えた!?!」

《ハルヴ2、敵から眼を離すとそうなる》

「……………つ!後ろ…!?!」

《『撃墜』だ。演習各機、帰還せよ。1740より講評を行う》

コクピットを満たす、無情な電子音。『2秒間のロックオンアラートで撃墜判定とする』——今回の演習のルールに則れば、これで自分も立派に戦死であった。

くそつ。腹立ち紛れに、青年は右手の甲でヘッドレストを殴りつける。おそらくこちらが後方に気を取られた隙に、目の前にいた方の敵は急減速し、こちらのオーバードレストを誘発して後方を捉えたのだろう。企図していた一撃離脱をあつさり見破られた所から考えるに、そもそもわざと隙を見せて罫を張っていたのではとも勘繰りたくなる。つまりは、見事にハメられたのだ。

《いやああ流石は教導隊、コテンパンにやられたなこりや。講評が怖いぜ。エリク、ヴェルさん、クリス、降りようか》

「はああ……………。了解」

演習結果、0対12の惨敗。それもさして意に介していないのか、あつけらかんとした小隊長の声が通信を揺らす。この結果では、講評は『怖い』どころでは済まないだろう。

雲間に覗く基地の滑走路目がけ、青年——エリック・ボルストはゆつくりと機体を旋回させた。重い気分を、せめて機体の軽やかな機動に紛れさせながら。

時に、2010年8月30日。オーシア東方諸国のほぼ中心に位置するレクタ共和国の、ウステイオおよびラテイオとの国境にほど近いヘルメート空軍基地。合して14の機影が、その空から舞い降り始めていた。

\*\*\*\*\*

「ああああもう！教導隊だからって偉そうによー！」

悪夢の講評が終わってしばし後。小隊に充てられた格納庫の脇に設けられた搭乗員詰所に、エリックの姿があった。詰所と言うものの実質は休憩スペースと言ってよく、コーヒーメーカーに雑誌や新聞を収めた棚、そして誰かが拾ってきたのであろう古びた雑貨や道具類が棚に詰め込まれ、概して乱雑とした様相を呈している。エリックはその中の雑貨の一つ、中身の覗いたソファに体を放り出し、赤みの強い金髪をぐしゃぐしゃとかき回した。酷評と評していい先の講評を腹に据えかね心を乱しているのは、その様からも明らかである。

「わぶつ、先輩、このソファに飛び込むの止めて下さいよー。埃が物凄く舞うんですから……」

後をついて詰所に入る小柄な人影は、埃を避けるように顔の前で掌を扇ぎながら、空

いたソファへちよこんと腰を下ろす。エリクと同じく先の講評が堪えているのか、表情こそやや暗いものの、これもこれで勉強だと落ち着きを取り戻している風情だった。額に張り付いた栗色の前髪は、先程流した冷や汗の名残なのだろう。

『ハルヴ4』——クリステイナ・ファン・レイデン伍長。それが、彼女の名である。軍に入つて日が浅く新米の部類に入るものの、国境に近いこの基地に配属され、しかも戦闘機隊の末席に収まる辺り、将来を嘱望させる資質が評価されたのだろう。実際、技術面では未熟さが目立つものの、最前線に収まり続ける度胸は人並み外れているとも言えた。

「気持ちが悪くさくれ立った時は、甘いものが気持ちを落ち着けてくれます。ココアでもお淹れしましょうか」

「ヴィルさん……。すみません、ありがとうございます。俺コーヒー加えてカフェモカで」  
「あ、私はミルクマシマシでっ」

続いて入つて来た『ハルヴ3』ことヴィルベルト・ブロック曹長が、3人分のマグカップを持って冷蔵庫の前へと歩いてゆく。190cmを越える筋肉質な巨体と色黒の肌、パンチパーマの黒髪、そして厚い唇と鋭い目。一見してボクサーかと思まがうほどの強面だが、その実思いやりは人一倍強く、エリク自身もメンタル面で何度も助けられた覚えがある。階級に関係なく、同僚から敬意を持つて『ヴィルさん』と呼ばれ慕われている。

るのも、その人柄あってこそだろう。

ことん、と湯気を立たせたマグカップが前に置かれる。カカオの甘い香りにコーヒーの香ばしさが合わさったカフェモカは、エリクの好きな飲み物の一つだった。ちらりと他のマグカップを覗けば、クリスのそれは『ミルクマシマシ』の要望に違わず、うつつら褐色のついたミルクという様相である。もはやココアの味がするかどうかすら怪しい気もするが、それを飲んだクリスの目尻が満足そうに緩んでいる辺り、おそらくあれで正解だったのだろう。一方で、ヴィルさんの方はスタンダードなミルクココアに、さらに割った板チョコを入れていた。見た目とのギャップが著しいが、こう見えてヴィルさんは結構な甘党である。

マグカップを口に運び、香りと甘さを確かめるように一口を含んでゆっくりと味わう。程よい甘味とそれを引き締める苦み、そして鼻孔をくすぐる芳醇な甘い香り。そのバランスは、まさにコーヒーとココアの黄金比が成せる業だろう。流石はヴィルさんである。

「ああ、空に上がった後のココアはまた格別ですね。エリク中尉、落ち着きましたか？」  
「ええ、まあ多少は……。まだ呑み込みきってはいませんがね」

マグカップを置いて溜息一つ、エリクは黒い湯面に視線を落とした。

内省に向かえば、記憶に蘇るのはつい先程の『講評』の様。多少の時間は経ったもの

の、思い返せば今でも腹立ちは募ってきそうだった。

\*\*\*\*\*

『……………』

『……………』

講評を始める、と教導隊の隊長が言つて十数秒。その間に、奇妙な沈黙が横たわつていた。ミーティングルームの座席側には演習に参加していた中隊の面々。そしてホワイトボードを背にした前の方には教導隊の3名。隊長の黒髪オールバックの男——アルヴィン・ヴィレムセン少佐は口元を一文字にしたまま一同を眺め直し、ホワイトボードの左右に位置する眼帯の男や背の低い銀髪の女も一言も口にしない。

重苦しい空気を破つたのは、冷徹な男の声だった。

『諸君がこのレクタの国境を護っていることに対して、私は驚嘆している。諸君の力量があれば、いつウステイオやラテイオの侵攻を受けようとも、この地は瞬く間にそれらの有となるだろう。中隊戦術の不備、小隊間連携の不足、戦術的観察眼の欠落。どれをとつても隙が無い』

痛烈な皮肉だった。隣国の軍が我々を破るのは容易であり到底防げないこと、部隊として満足できる点が何一つ無いことを、勘を逆なでする言葉で批判したのだろう。それを分かっているながら、エリクは思わず拳に力を込めていた。

ぎり、と誰かが奥歯を食いしばった音が聞こえた。もしかするとそれは、エリク自身だったのかもしれない。

『我々『スポーク隊』は、諸君の技術向上のため、しばらくこのヘルメート空軍基地に駐屯する。緊迫している国際情勢を鑑み、諸君が一日も早く国境を護るに足る兵となることを期待している。次、個評に移る。パウラ准尉』

最後まで心をささくれ立たせる言葉を残し、アルヴィン少佐が後ろへ下がる。ホワイトボードとともに一歩前に出て来たのは、先程まで後ろに控えていた銀髪の方だった。よくよく見れば色素の薄い金髪らしく、わずかに黄金色が見て取れるが、極めて色が薄いために銀髪にしか思えない。正規兵にしては低身長、それどころか体のつくりもどこか華奢であり、一見すれば10代半ばそこらにすら見える姿だった。シヨートの銀髪に癖があり、毛先が適当な方向に跳ねていることも相まって、見た目の印象はさしずめ猫といった所だろうか。

パウラ、と呼ばれたその少女が引つ張り出して来たホワイトボードには、演習に参加した面々の編制図と顔写真が貼られていた。向かって左側から第3小隊、第1小隊、そしてエリク属する第2小隊の順に並んでいる。エリクは小隊内では最も右翼側に位置するため、中隊全体から見ても最も右側にその名前があった。

『30点。旋回の反応が鈍い』

おもむろにペンを取った少女が、最左翼の機体の上に数字を書き落とした。30点、とはすなわち100点満点での各人の評価ということなのだろうか。抑揚のない声で端的に告げられる評価は、まるで首元に突き付けられた匕首を思わせるほどに鋭く辛辣である。

10点、25点。予想を絶する低評価に、面々の表情が歪んでゆく。中隊長ですら40点であり、誰一人として50点以上を叩き出していない。うなだれる者、歯を食いしばる者。失望と屈辱のその波は、やがてエリク達ハルヴ隊へも波及していった。クリス10点、ウイングマンとしての役割が果たせていない。ヴァルベルト35点、後方警戒が不足。そんな中で、続いた小隊長は45点と相対的には高評価だった。曰く、戦況を見極め、自らを囿に立て直しを囿ったのはまずまず、とのこと。

ごくり。すっかり暗くなった空気の中で、唾を飲み込む音が響く。あとは最後の一人、エリクの評価を待つのみである。

少女がペンの先をエリクの機体マークの上へと触れさせる。その先端は、しゃ、と丸を一つだけ描き………終わった。

『0点。だめ。』

沈黙、数秒。その間、エリクの頭は考える機能を失っていた。

え。0点、とは。だめ、とは。そもそも何がどうダメだったのか。



エリクが椅子を蹴るように勃然と立ち上がるまで数秒を要したのは、その脳が衝撃から我を取り戻すのに、それだけの時間を要したためだったのだろう。

『ま…待った待った待った！0点って何がどう…！』

『小隊内連携が取れてない。直上からの急加速で機体を傷めかけた。機体性能を活かされていいない。僚機の状況確認が疎か。戦術が見え見えだった。敵から眼を離した。以上失点100。追加で理解力不足と客観評価の欠落でマイナス20。』

『が、ぐ……………！』

言葉が突き刺さる、とはまさにこのことだろう。矢継ぎ早に放たれる低評価の弾幕に、エリクはもはやぐうの音も出なかつた。しかも腹は立ちこそすれ、言われていることは確かに外れてはいない。隊長やヴィルさんと分断されてしまったこともそうであるし、急降下で機体フレームに負担をかけたのも事実。挙句、一撃離脱の奇襲戦術は早いうちから見破られてしまっていた。

これまでのパイロット勤務で技術は磨いてきた積りであるし、他の部隊との演習では勝率は悪くない。今の今まで築き上げて来たそんな自信が、この一日で崩れ去った気分だった。それも、明らかに年下な小娘の言葉によって。

『明日の演習は0730時より、小隊ごとに実施する。詳細は各小隊長へ追って通知する。以上、解散』

解放の一声は、しかし一同にとって暗く重たい。これから数か月間、今日のような思いをしなければならぬのだから。拳を握りしめたままのエリックも、それは同様だった。

詰所に至るまで、以上の経緯があつた訳である。

\*\*\*\*\*

「何なんだよホント0点って…ダメって…」

「おつす、皆お疲れ…って何だどうした落ち込んで。ヴィルさん、とりあえず俺にもココアちよーだいココア。」

「あ、隊長！明日の予定、どうでしたか？」

どんよりと項垂れたままのエリックをよそに、開口一番に明るい声で現れたのは、『ハルヴ隊』小隊長の『ハルヴー』ことロベルト・ペーテルス大尉だった。小太りの体格に刈り上げの金髪、常に笑つたような表情と、見た目は人当りの良い市井のおじさん、といった雰囲気的人物である。これだけで、かつての『ベルカ戦争』に参戦した履歴もあるベテランパイロットというのだから、ヴィルさんともども『外見は当てにならない』という格言を体現する存在と言えるだろう。

「明日は第3小隊の次だから、午前9時半から演習開始だな。それまでしつかり機体を調整しておいてくれ。俺たちの機体もいい加減旧式だ。労わって使つてやらなきゃな」

ロベルト大尉が、親指を立てて窓の方を指差す。格納庫に面したその先には、『ハルヴ隊』の配備機たる4機の姿があった。

鋭角的なシルエットに、機体を印象付ける無尾翼デルタ。機体の形状とコクピット横の丸いエアインテークは『ミラージュⅢ』や『ミラージュ2000』に代表されるミラージュファミリーを彷彿とさせるが、より鋭角的に細まってゆく機首や、エアインテーク上部に設けられたカナード翼が、その印象を一際違ったものにさせている。

『クファイルC7』——それが、エリク達ハルヴ隊に与えられた機体だった。名機と謳われた軽戦闘機『ミラージュⅢ』をベースにエンジンの換装やカナード翼の増設が行われた発展機であり、特にこのC7型は電子機器や搭載量を増加させた強化仕様である。こう書くと『ミラージュⅢ』の正式な強化発展機のようなのだが、その実この機体は正式に『ミラージュ』の名を継いではいない。その背景には、20年以上前のベルカ連邦崩壊に端を発する複雑な事情があった。

1980年代後半、軍事支出が増大し経済の悪化を招いたベルカ連邦は、その国土の一部を独立させ、負担の軽減を図った。この時に独立を果たしたのが、ゲバートとウステイオであり、ベルカ連邦時の設備を流用しつつ、それぞれが独自に軍備を整えることとなった。この際、ウステイオは調達数を抑える代わりに質を重視し、当時の新鋭機たるF-116『ファイティング・ファルコン』等を導入したのだが、ゲバートは数を重視

して『ミラージュIII』や『ミラージュF1』等のやや旧式の機体を揃える方針を取った。ところが、独立後間もない両国は、軍備や体制を整えるのに資金を費やし、早くも経済危機に直面した。結果、独立から3年を経てウステイオは国土の東部を隣国のラティオに割譲し、ゲベートは南部を『レクタ共和国』として独立させるに至ったのである。

当然、新興したレクタ空軍のためレクタは軍備を整えねばならず、当面はゲベート空軍時代の機体をそのまま流用することとなった。ところが、主力機たる『ミラージュIII』のエンジンや電子機器の生産工廠はゲベート側が持つており、レクタ国内での生産は不可能となっていた。ゲベートから輸入して調達するにしても、予備を含めれば調達数は膨大であり、おまけにゲベート側も価格を釣り上げたため、調達は遅々として進まない状況が続いていた。かくして、レクタ国内にはエンジンが整備できず飛べない、あるいはそもそもエンジンが無い『ミラージュIII』が溢れることとなったのである。

この情勢に目を付けたのが、東方諸国に影響力を扶植したいオーシア連邦だった。レクタに安価な主力軽戦闘機F-5E/F『タイガーII』等の機体を輸出するのみならず、『ミラージュIII』に搭載可能なエンジン等も提供し、レクタ国内で生産できるよう図ったのである。

この結果、ゲベート由来の『ミラージュIII』にオーシアのエンジン技術を組み合わせて生まれたのが『クファイル』であった。このような背景を持つため、『クファイル』はゲベ-

トには存在してない。

以上の複雑な経緯を経て誕生した機体だが、配属当時から『クファイル』に搭乗しているエリクは、この機体を気に入っていた。かつて練習機として乗ったことのある『ミラーージュⅢ』と比べれば、エンジンが強化されている分加速の伸びがよく、増設されたカナードのお蔭で低速域でも機体が安定しやすい。唯一の不満は、ゲベートが配備している『ミラーージュⅢ』や『ミラーージュ2000』と外見が紛らわしいことくらいだろうか。

「…お、噂をすれば教導隊の2機が上がるみたいだぜ。やれやれ、よく働く人達だ」

「見た目は普通の『タイガー』なのに…なんであんなに動きが違うんでしょう」

「さあてね…。エースパイロットっていう奴かね」

大尉の言葉に、ふと格納庫の向うへと視線を向けると、エリクの目にも滑走路を走る二つの機影が見て取れた。グレー系統の迷彩を主にしたレクタ空軍機とは異なり、エメルドグリーンとオリーブグリーンを用いたダズル迷彩を纏った機体は遠目にも非常に目立つ。

ナイフのようなスマートな機体に、小さな切り欠き三角翼。至ってポピュラーなその姿は、クリスの言う通り、一見何の変哲もないF-5E/Fだった。もともと、後で聞いた所によると、彼らの機体はレーダーを換装し、火器管制系統や兵装搭載能力を強化

した近代化改修機なのだという。アルヴィン少佐の方は複座のF-5F、パウラの方はF-5Eに乗っているようだが、いずれも近代化改修の結果、『タイガーⅢ』と呼称されているらしかった。

いずれにせよ、機体性能そのものは『タイガーⅡ』と大差ない筈の機体で、機動性に優れる『クフィール』12機を返り討ちにする彼らの技量は、やはり尋常ではない。納得しかねることだが、この空には機体性能による不利を覆す『エースパイロット』は確かにいるのだろう。15年前のベルカ戦争を舞台に、そんな話はいくらでも聞いてきた。

エリクに『エースパイロット』の語を口にさせていたのは、脳裏にひっかかったそんな思いだったのかもしれない。

「ま、何にせよああいう存在がいるっていうのは有難いことさね」

「ええ?!…中隊のみんなはもうウンザリって顔ですよ?それにエリク中尉も」

「まあそうだが…ああいう連中がいるからこそ、こつちとしても一層腕を磨こうって気にさせる。あれも一種のやり方なんだろうな。最近はここいらも海の向うもきな臭いし、練習積んどくに越したことは無い…ってことであいつらも派遣されたんだろうさ。

あれも仕事だ、分かってやりな」

「………まあ、そりゃ分かりますけどー」

「……たはは……流石に0点は手厳し過ぎるかもしれないがな」

今度は胸に溜まった憤懣を飲み下すように、カフェモカをぐくりと飲み下す。腕が足りないというのは今日いやというほど実感した。技量を早急に高めないといけないというのも分かる。それでも、毎日あの罵倒を受け続けねばならないことを思うと、やはり気が重くなってくるのは否めない。

そして強行とも言えるそのやり方は、言い換えれば隊長の言う通り、彼らや上層部の焦りと見てもいいのかもしれない。それほどに、今の国際情勢は荒れていた。

最も大きいのは、海の向うの大国、ユークトバニア連邦の先鋭化である。ユークトバニアはオーシア連邦と対を成す大国だが、1990年代初頭までは周辺諸国との紛争を抱え、オーシアとも冷戦状態にあった。それが、15年前のベルカ戦争においては一致協力することとなり、その時から両国の関係は劇的に改善したのだった。ベルカ戦争以降の15年は、ユークトバニアは国として穏やか相貌を纏っていたと言つて良いだろう。オーシア領内のバセット国際宇宙基地の共同建設や大気機動宇宙機『アークバード』の共同開発は、両国の融和の象徴として大きく喧伝され、両者の間に友好ムードすら漂っていたのだ。

ところがここ数年、その方針に変化の兆しが見え始めた。首脳部の人員刷新も然り、各軍の戦備増強も然り、そしてオーシア東方諸国への経済援助の働きかけも然り。いずれをとつてもオーシアとの関係悪化は避けられず、まるで冷戦時代へと逆行するような

方針を取り始めたのである。殊に、東方諸国のうち、隣国ラテイオやベルカの東隣りに位置するファトなどには、既にユークトバニアの援助を受け入れたとの報道もある。いずれにせよ、オーシア・ユークトバニア間の関係には、暗雲が立ち込め始めたと言つて良い。

そして、その暗雲は今まさに、ここオーシア東方諸国をも包み始めていた。

発端は、ウステイオとラテイオの関係悪化である。先に述べた通り、ベルカ戦争以前のウステイオは経済的に困窮し、領土の一部をラテイオに割譲することで糊口を凌いでいた訳だが、ベルカ戦争後は一転して先進国の仲間入りを果たした。俗に『円卓』とも言われる資源埋蔵地帯の開発は莫大な利益を生み、同時に航空機を始めとした産業も勃興。数は少ないながらも練度に優れた軍をも備え、ウステイオは瞬く間にベルカを追い抜き、東方諸国の雄たるサピン王国と並んだのである。

戦争によつて得た隆盛、そして経済発展。その進展とともに、ウステイオ国内では領土返還要求が口にされるようになった。すなわち、『ラテイオはウステイオが経済的に困窮している時代に、金をちらつかせて領土を奪った。国が発展した今こそ、この失つた領土を再び手にするべきだ』という論旨である。もちろん、ウステイオ側は割譲時と同額を提示しての金銭的な交渉を持ちかけているが、領土割譲を受けて20年近くが経過し、相応に投資を行つてきたラテイオがそのまま呑める筈も無い。おまけに、ラテイ



才は近年ユークトバニアと連携を深めている節もあり、ユークとしてもせっかく影響力を扶植したラティオの弱体化を見過ごすことはできない情勢である。

各国の思惑、そしてその背後にある網の目のような国際情勢に押されて、二国間の感情は先鋭化した。今やウステイオーラティオ国境で両国の戦闘機が飛ばない日は無く、いつ戦端が開かれてもおかしくない情勢である。

もしそうなった場合、レクタはどうするのか。『その時』にどのようにも動けるように、練度を高めておくに越したことはないというのは、分かる話ではあった。

「ともかく、今日は今日、明日は明日だ。しっかりと晩飯食って英気を養おうや」  
「まだ交代時刻まで一時間ほどありますよ、大尉」

「げ、マジか。…ひもじいなあ畜生…」

「ココアなら浴びるほど飲めますよ、隊長？」

どんよりとした空気を入れ替えるような隊長の言葉に、ヴィルさんの、次いでクリスの声が被せられる。よほど空腹らしく、隊長は萎れるようにうなだれて、恨めしそうに壁の時計を見上げた。その様がどこか子供を思わせて、エリクも、クリスも思わずつられて笑い声。ヴィルさんは、眩し気にその様を見て微笑んでいる。

笑い声収まらぬ中、暗くなり始めた外を見渡すようにエリクはしばし視線を窓へと向けた。格納庫の中を照らす薄暗い電球の下で、『クフィールC7』の尾翼のエンブレムがぼ

んやりと浮かんで見える。

ロベルト隊長が考案したという、4つ連なつた三日月のエンブレム。4機の連携と団結を示すその図式は、隊の発足以来変わらず尾翼に刻まれ受け継がれている。

願わくば、このまま欠けることなく在つて欲しい。緊迫した、それでいて穏やかな時の中で、エリクはそう思わずにはいられなかつた。

遙か先、格納庫の外は一面の真つ暗闇。暗い夜空の只中には、ハルウマーン三日月が顔を出し始めていた。

## 設定資料集

・こちらでは、小説本編に関わりのある登場人物や部隊設定を補足的に記載させていただきます。また、ストーリー進行の点で独自解釈部分が多くなりますので、参考までにゲーム原作のうち関わりが深い出来事と、小説本編の出来事をまとめた年表も併せて記載します。

いずれも適宜更新を行って参りますので、本編をお読みになる際の参考にしてやって下さいませ。

\*\*\*\*\*

### 【登場人物】

#### 《レクタ共和国空軍ハルヴ隊》

○エリク・ボルスト(25)

・レクタ共和国空軍第2航空師団第8戦闘飛行隊、通称『ハルヴ隊』の2番機を務める空軍中尉。レクタ北部の出身で、空軍士官学校卒業後からパイロットとして従事している。2010年8月時点では実戦の経験こそないものの、国境付近の配備ゆえに領空侵犯機への対処に頻繁に出撃しており、レクタ空軍の基準で見れば空戦能力は並以上の

部類に当たる。

・2010年8月現在は、基地配属時から乗り続けている『クフィールC7』を愛機としている。機体性能を活かした一撃離脱戦術を得意とする他、隊長であるロベルトの采配では特攻隊長的な先鋒を担うことも多い。また、小隊内で2機1組の小編成（エレメント）に分かれる際には、4番機のクリスと組むのが常となっている。

『テュールの剣』破壊作戦の際に撃墜され、その後は『グリペンC』を搭乗機として使用している。

・誠実ながら快活な性格だが、細かい点を気にしないややズボラな部分もある。外見は色白の肌に赤みがかった金髪のショート2ブロック。

○ロベルト・ペーテルス（44）

・『ハルヴ隊』隊長機を務める空軍大尉。レクタ生まれベルカ育ちという変わった経歴を持ち、長いパイロット歴の経験を活かして臨機応変の指揮を行う。戦場を見据える観察眼と動体視力に長けており、状況に応じて編隊を4機編制、2機×2編制、単機編制（散開）などに組み分けるといって定型を持たない戦術が得意。

・15年前の『ベルカ戦争』の際には戦闘機パイロットとして参戦していたらしく、時折自慢げに話題に上らせる。本人曰く、激戦が繰り広げられた『円卓』での空戦も経験があるとのこと。

・臨機応変を体現しているのか、物事に拘泥しない性格で、適当な部分も目立つ。人当りは軽く、常に笑っているような細かい目と刈り上げにした金髪が特徴。小太りの体格も相まって、外見的にはその辺にいる一般人のおじさんといった雰囲気醸し出している。

○ヴィルベルト・ブロック（45）

・『ハルヴ隊』3番機で、階級は曹長。生粋のレクタ育ちで、輸送機パイロットを経て戦闘機部隊へと転向した経歴を持つ。堅実な飛び方が特徴で、ロベルトとエレメントを組む際には僚機としてその背をサポートする。

・15年前の『ベルカ戦争』時には既に従軍していたが、レクタ共和国の参戦は戦争の終盤であり、かつ当時は輸送機のパイロットでもあったので、直接戦場には立っていない。

・色黒の肌に黒いパンチパーマ、厚い唇にいかつい体格とかなり強面な外見だが、丁寧な物腰と思いきや深い性格で隊を支える縁の下の力持ち。隊の最長老ということもあり、小隊メンバーからは『ヴィルさん』と慕われている。ちなみに、外見に似合わずかなりの甘党。

○クリステイナ・ファン・レイデン（20）

・小隊唯一の女性パイロットで、『ハルヴ隊』4番機に当たる伍長。パイロットとなつ

てから日が浅く、技量も心許ないものの、いざという時の度胸は人一倍。2番機のエリクとエレメントを組むことが多く、散開して自由戦闘となった際にも無意識に誰かの後方に就く傾向がある。

・外見は色白の肌に、栗色のボブヘア。明るく真面目な性格だが、軍人となって日が浅いこともあり甘さや緩さも目立つ。ややおつちよこちよい。

《レクタ共和国空軍スポーク隊》

○アルヴィン・ヴィレムセン（48）

・レクタ共和国空軍第5航空師団第99教導飛行隊、通称『スポーク隊』を率いる空軍少佐。演習などで仮想敵役を務める、所謂アグレッサ―部隊に所属し、年齢に似合わない鋭い機動を以て演習相手を翻弄する。その優れた技量と指導力で、パイロット達の技量向上に貢献してきた。基本的にはコールサイン『スポークー』を用いるが、後席のフィンセントと区別を図る際にはTACネームの『アウル（フクロウの意）』を用いることもある。

・搭乗機は、近代化改修を施したF-5F『タイガーⅢ』。アグレッサ―部隊らしく、緑系統のダズル迷彩という目立つ塗装パターンを施されている。後に同様の塗装を施した『グリペンD』に乗り換えた。

・黒髪のアールバックに鋭い目、笑みを見せない口元と、ヴィルベルトとはまた別方

向で強面な外見。性格も見た目に違わず峻厳だが、身内に対しては時折思いやる素振りを見せることもある。

○フィンセント・デ・フロート（38）

『スポーク隊』に所属する曹長。かつてはパイロットをしていたが、『ベルカ戦争』において負傷し左目の視力を失ったため、現在はアルヴィン機の後席で補助を行っている。堅実な観察眼を持ち、時として前線航空支援として管制官役を務めることもある。ちなみに、同じ機体に搭乗しているため通信では彼も『スポークー』を名乗るが、アルヴィンとの区別のためTACネームの『カルクーン（七面鳥の意）』を用いることも多い。

・上述の理由で、左目に眼帯を付けているのが特徴。髪にはこだわりがあるらしく、茶髪の髪をソフトモヒカンに整え、折を見ては櫛で整えている。敵役を担う部隊の立場上他の部隊とは仲が悪化しがちな部分を緩和すべく、緩い物腰で立ちまわる場面が多い。

○パウラ・ヘンドリクス（20）

『スポーク隊』2番機を務める空軍准尉。アルヴィンと彼女の父親はかつての戦友であり、父が戦死した後はアルヴィンに扶養されて育ってきた履歴を持つ。そのため、アルヴィンに対する信頼は篤い。耐G性が高く、特に近距離の格闘戦を得意とする。搭乗機はアルヴィン機同様に緑系統のダズル迷彩を施された近代化改修型のF-5E『タイガーⅢ』。後に同様の塗装を施した『グリペンC』に乗り換える。

・白い肌に、色素が薄く銀色に近い金髪。髪型にこだわりは無いようで、癖つ毛のシヨートを適当に整えている。体は歳不相応にいろいろと小さく、耐G性の高さもここに起因していると思われる。峻厳な扶養者（アルヴィン）に影響されたのか演習の相手役に対する対応は厳しく、時に辛辣。口数はやや少なく表情にも乏しいため、一見何を考えているか分からないことも多い。

### 【部隊について】

○レクタ共和国空軍第2航空師団第8戦闘飛行隊『ハルヴ隊』

・レクタの西部の南寄り、ウステイオやラテイオとの国境に位置するヘルメート空軍基地に駐屯する航空部隊。2010年8月現在は『クフィルC7』を装備しており、主にラテイオ国境警備に従事している。隊の名称は、レクタの言葉で三日月を意味する『ハルヴマーン』に由来。その名にちなみ、部隊エンブレムは三日月が4つ、順々に下へとずれつつ重なる様子が象られている。隊長のロベルト考案の意匠だが、『バナナの房みたい』という理由で一部では不評。

・2010年10月10日の『ラグナロク』作戦に際し、左翼中ほどから黒地に4つの三日月を重ねる部隊専用塗装が新たに用いられた。遠目には重なる三日月が斧の刃のように見えることから、交戦したラテイオ軍によって『斧持ち（メツザルーナ）』と呼称される。本作戦の際に小隊は全ての機体を失い、以降は『グリペンC』を運用するこ



ととなった。

○レクタ共和国空軍第5航空師団第9教導飛行隊『スポーク隊』

・レクタ国内の空軍基地を転々とするアグレッサー部隊。レクタはそもそも教導対象である空軍の規模が小さいことから、本隊も最小単位の2機で構成されている。2010年8月現在は、F-5E/Fを運用。旧式機であるものの、レーダーを最新のものに換装するなどの近代化改修が行われており、俗称は『タイガーⅢ』となっている。ハルヴ隊同様、ラグナロク作戦後は『グリペンC/D』を運用している。部隊の塗装パターンは、境界にグレーを用いたエメラルドグリーンとオリーブグリーンのだズル迷彩。

### 【歴史】

注) ○はゲーム本編での出来事、☆は本作品での出来事を示す。

○(1985年以前)：デイトリッヒ・ケラーマン率いるベルカ空軍ズイルバー隊、マインツ山脈においてレクタ解放戦線の戦闘機隊と交戦、制空権を奪取。解放前線が居を構えるコールへの侵攻を確実なものとする。

○1988年2月8日：ゲベートがベルカから独立。

○1988年5月12日：ウステイオがベルカから独立。

○1991年8月：ファトがベルカから独立。

○1991年8月29日：ベルカ連邦の経済悪化に伴い、五大湖と北方諸島をベルカ

からオースシアへ割譲。

○1991年8月～12月：レクタがゲベートから独立。

○1991年8月～12月：ラテイオがウステイオ東部を併合。

○1995年3月25日：ベルカ戦争開戦。モデル制圧戦でベルカ空軍とファト空軍が交戦、ファトのF-14D部隊、インデイゴ隊により壊滅。

○1995年4月3日：オースシア軍、反攻を開始。以降、周辺国が次々と参戦する。

○1995年5月28日：ベルカーウステイオ国境付近の空域『円卓』にて大規模な制空戦が発生。激戦の末、オースシアを始めとする連合国が制空権を確保する。

○1995年6月5日～6日：バルトライヒの決戦。ベルカ軍による核の使用により戦況は混乱し、凄惨な消耗戦となる。ベルカ軍、バルトライヒ山脈の北方へ撤退。

○1995年6月20日：ベルカ戦争終結。

☆2010年8月30日：レクタ共和国ヘルメート空軍基地に教導隊『スポーク隊』が赴任し、演習を開始する。

☆2010年9月21日：レクタ・ウステイオ・ラテイオ国境付近にて、国境で対峙していたウステイオ・ラテイオ軍機による領空侵犯未遂事件が発生。ラテイオ軍機撃墜から戦闘に突入し、レクタ空軍『ハルヴ隊』とラテイオ航空部隊が交戦。ラテイオ航空部隊を退ける。

○2010年9月23日：オーシア領西端のサンド島へ国籍不明機接近。編隊長バーレット他1名を残し、出撃部隊が全滅。

☆2010年9月27日：ラテイオ共和国、ウステイオ共和国ならびにレクタ共和国へ宣戦布告。ラテイオ軍は開戦と同時にヘルメート空軍基地へ空襲を行い、その戦力を半減させる。同日午後、ラテイオ軍は機甲部隊を進発させ、レクタ各地へ進軍を開始。ハルヴ隊、レクタ中部へ進軍したラテイオ部隊を辛くも退ける。

○2010年9月27日：ユークトバニア、オーシアへ宣戦布告。同日中にオーシアのセント・ヒューレット港へ空襲が行われる。

☆2010年9月30日：レクタならびにウステイオ、対ラテイオ攻勢作戦である戦域攻勢計画8601を発令。これに伴い、レクタ軍はラテイオ北西部へ侵攻。謎のレーザ兵器による攻撃を受け損害を受けるも、ラテイオ領内に橋頭堡を築くことに成功する。

○2010年9月30日：オーシア領内イーグリン海峡にてユークトバニア軍の奇襲。同時に展開していたユークトバニア軍戦闘潜水空母シンファクシにより、オーシア軍航空母艦バルチャー、バザード撃沈。

○2010年10月4日：ユークトバニア軍によるサンド島上陸作戦。同島航空部隊の活躍により上陸は阻止され、シンファクシが撃沈される。

☆2010年10月21日：ウステイオ・レクタ連合軍、『ラグナロク』作戦を発動。ウステイオ軍エース部隊『ガラム隊』とエリクラ『ハルヴ隊』の活躍により、ラテイオ軍が擁する多塔式高層化学レーザー兵器『テュールの剣』の破壊に成功。10月28日には残存部隊を撃退し、その占領に成功する。

○2010年10月22日：和平交渉のため中立国ノースポイントへ向かうオーシア大統領ハーリングの搭乗機が墜落。8492飛行隊によって救援（拉致）される。

○2010年11月1日：オーシア、ユークトバニアへ上陸作戦開始。

☆2010年11月2日：サピン王国、レクタ・ウステイオとラテイオ間の戦争に対し武力介入を表明。同日中にレクタ・ウステイオ軍と交戦を開始する。

☆2010年11月5日：サピン軍空母艦載機、ウステイオ・レクタ領内を空爆。ノースアジア州ステントールからの補給路が寸断される。

☆2010年11月7日：ウステイオ・レクタ連合軍、『円卓』を強行突破し空中輸送を敢行。サピン航空部隊の妨害に遭うも、辛くもこれを退ける。

☆2010年11月12日：ラテイオ軍、レクタ首都コールへ攻撃機による無差別攻撃を実施。都市南部へ損害を与えるが、攻撃部隊は全滅する。

○2010年11月14日：ユークトバニア軍戦闘潜水空母リムファクシ撃沈。

○2010年12月6日：サンド島の航空部隊を主軸としたオーシア軍、ユークトバ

ニア軍クルイーク要塞を攻略。

○2010年12月7日：スパイ嫌疑を受けたサンド島中隊、同島を脱走。同日中にオーシア空軍機によって撃墜される。

○2010年12月9日：『ラーズグリーズ』を名乗る謎の航空部隊により、ベルカ領内に幽閉されていたハリリング大統領救出。ユークトバニア戦線は泥沼化し、オーシア軍はユークトバニア首都攻略に失敗。

○2010年12月19日：オーシア軍、大気機動宇宙機『アークバード』によるユークトバニアの都市攻撃を企図。ラーズグリーズ航空部隊によりアークバードは撃墜され、計画は頓挫する。

○2010年12月29日：セレス海海戦発生。ラーズグリーズを有する小規模機動部隊により、交戦したユークトバニア、オーシア両艦隊が全滅する。

○2010年12月30日：スーデントール制空戦が発生。同時にベルカ残党による翌日、ベルカ残党の計略により地球へ向け落下する戦略衛星軌道砲『SOLG』をラーズグリーズ航空部隊が迎撃、これを破壊する。

## 第2話 雷雲の足音

深緑の絨毯が、銀翼の下を流れてゆく。

雲量7、今日はレクタの空にしてはやや雲が多い。雲を隔てて穏やかになった太陽の光を受けて、穏やかな色を映えさせる樹々の姿は、高度3000フィートの上空から見ても心を落ち着かせてくれる。

緯度が高く、一年を通して冷涼なレクタ北部では、森林の多くは針葉樹林で構成されている。緑の平原は、レクタからさらに南へと広がって、やがてウステイオやラティオの地にまで至るのだろう。オーシア東方諸国の中心に当たるレクタやゲベートは豊かな針葉樹林や山脈に恵まれ、とかく自然が多い。

地に国境の線は引かれていても、樹々はそれを越えて彼方へと繋がっている。それに引き換え、人はその国境の上で、幾度となく小競り合いを繰り返す——それを思うと、これから自らが向かう任務に対しては、何やら皮肉な思いさえ浮かんできそうだった。

2010年9月21日、レクタ西部南端、ウステイオおよびラティオとの国境付近。鈍色に映える4つの三角翼が、地を隔てる線の上へとひた駆けていた。

《ヘルメート基地管制室よりハルヴ隊各機へ、方位190に変針せよ。ウステイオなら

びにラティオ軍機は対峙を続けながら依然北上中。間もなくレクタ国境に差し掛かる》  
《ハルヴー1了解。方位190に向かう》

《改めて令達するが、明確に攻撃を受けるまでこちらからの一切の発砲は禁じる。只でさえ今はデリケートな時期だ。機銃弾の1発でも掠めさせたら国際問題になると見え》  
《分かっている、心配しなさんな》

軽口一つ、『ハルヴー1』——ロベルト大尉の機体が右に傾き、指定された方位へと鼻先を向けてゆく。ゆっくりと舵を返すその様を見やりながら、編隊最右翼に位置するエリクも操縦桿を倒して、その位置を維持しながら愛機『クフィルC7』を旋回させた。後方警戒ミラーの中で、左翼側のヴィルさんやクリスも同様に旋回しているのが確認できる。

旋回の利きが悪く小回りに劣ると言われがちなデルタ翼機であるが、戦闘速度で飛ばしでもしない限り、その旋回半径は通常機と大差ない。『クフィル』は安定性を高めるため機首にカナード翼も持っており、むしろ旋回性能は同世代機の中でもまずまずの部類と言えた。

小隊構成を維持したままの旋回機動は着任当初から叩き込まれた技術である上、4年以上も乗り続けた『クフィル』の操縦特性は熟知している。おまけに教導隊『スポーク隊』が着任してからの演習で幾度となく繰り返し返したこともあり、旋回の最中から後にか

けても、ハルヴ隊の雁行隊形に乱れは無かった。一見なんでもない技術のようだが、編隊行動の維持はいざという時にも役に立つのだ。

続く管制官の声に、エリクは耳を傾ける。期せずして、その操縦桿を握る力が僅かに強まった。

一切の先制攻撃の禁止——それは機銃や誘導性能の悪いAAMが主流だった半世紀も前ならいざ知らず、現代では極めて大きな制約と言つていいだろう。視認範囲に至るまで先制攻撃ができないという事は、相手がその気ならば視界外からの一方的な攻撃で殲滅することだって容易だからである。殊に、現代のリーダーやミサイルの技術発展は著しく、一度撃たれば回避が困難となる場合すらある。フレア等、一通りの防衛兵装を搭載している『クフィールC7』といえども、その点の事情に大きな違いは無い。

いざという時、最初の一撃は甘受せよ。言外のその言葉に、エリクは知らず奥歯を噛みしめた。

《ハルヴ隊へ、その他追加情報あり。当該空域に確認される航空機は両軍合わせて10機前後、いずれも反応は小さいことから、戦闘機が主と考えられる》

「戦闘機か……。ハルヴ2より管制室、向うの機種は分かるか？」

《すまない、両軍の機種はいずれも不明だ。接触の際に確認されたし》

機数10機前後、いずれもおそらく戦闘機。新たな情報を頭に叩き込みながら、エリ



クは浮かんだ疑問を口にする。機種は流石にレーダーサイトからは判別できないとのことだったが、こればかりはやむを得ない事情もあった。

ウステイオやサピン等、軍事へ向ける予算に余裕のある先進国とは異なり、オースリア東方諸国の多くでは前線での監視や指揮を担う空中管制機の導入が進んでいない。ただでさえ調達予算に余裕がない上、精密機器の塊と言つて良い機体の維持管理に多大なコストを要することがその理由であり、さして国土の広くないレクタでは地上のレーダーサイトで十分という認識もそれに拍車をかけていたのである。非常時にはレーダー性能に長ける機体が前線空中管制を行うという体制は取られていたが、どうしても前線の状況を速やかに把握するという観点では、今回のような場面では正確性に欠ける部分は否めなかった。

《加えて、現在ウステイオ中部から東部にかけて低気圧が発達しており、国境付近では今後雷雲の発生も予想される。天候にも十分に注意せよ》

《了解した。何とか雷雲に巻き込まれる前に終わらせよう。ハルヴーより各機、増速せよ》

「了解、追従します」

左前方を飛ぶロベルト大尉の『クファイル』と、徐々に距離が開き始める。先の指示と同時に速度を上げたのだろうが、軽量なうえ加速性能に優れる『クファイル』だけに、速

度の伸びは早い。エリクはロベルト機の位置を見定めながらフットペダルを踏み、その機位を本来の部分へと位置させた。

嵐は、航空機乗りにとって大敵である。風雨と暗さで位置を見失いやすく、雷でレーダーやミサイルの誘導にも悪影響を受ける。そうそうあることではないが、直接機体に落雷すれば、精密機器の故障だつて起こらないとは限らない。そのリスクを考慮してのことだろう、大尉が選んだ巡航速度は、通常より幾分速いものだった。

単発のエンジンが軽快な唸りを上げる。邀撃任務に当たる際には増槽と一般的なIR誘導型AAMの装備に留めるため、戦闘装備の時と比べれば加速の伸びは格段に良い。背に風を受けて飛ぶ足取りも軽やかに、加速を始めて15分とかからず、ハルヴ隊の4機は目指す国境付近へと到達した。

雲量、先程より増えて9。空は一層灰色を増し、南西方向には空高くまで発達した積乱雲の姿も見て取れる。まだ幾分遠いのか、風のままに流れる雲の動きは緩慢であり、直視しただけでは空になんら動きは見えない。

——いや。

いる。幾つもの黒い影が、濃灰の背景を泳ぐように動き回っている。その数、10：いや、12。位置にして、レクタ国境のわずか数百メートル向う側。ほとんど国境上と言つて良い場所で、それらは複雑な幾何学模様を描いている。位置や数から見て、情報

にあったウステイオとラテイオの戦闘機だろう。

「よし、目標を視認」

《……隊長、あれって……!》

《ああ……予想以上にのつびきならない状態らしいな。こりやドンパチが起こりかねんぞ》

両軍機の動きを観察したらしいクリスが、焦りを帯びた声を漏らす。大尉の通信を待つまでもなく、エリクにもその意味合いを察することはできた。

『対峙』している。当初の情報では、確かにそんな表現だった。国境侵犯とその対応のセオリーからして、おそらくは両軍の機体が面と向かつて牽制しあっているか、あるいは平行して変針を促しているのだろう。そんな当初の予想を遥かに上回るほど、今日の前で繰り広げられている光景は緊迫していた。

鋭角的な小型の機体が、鋭く旋回して相手の後ろを取る。それを牽制するように切り欠きデルタの機体が真横から突っ込み、衝突ぎりぎりの所で翼を掠めて抜けてゆく。急旋回、ドッグファイト、そして斬り合うような至近までのヘッドオン。機銃弾やミサイルこそまだ飛び交っていないものの、それらの動きは空中戦と何ら変わりがない。大尉の言う通り、まかり間違えばこのまま戦闘にまで発展しかねないだろう。

《ハルヴ2、国際周波数であいつらに呼び掛けてくれ。ハルヴ3、4、念のため対空戦用

意

《りよ、了解!》

「分かりました。聞く耳持つてくれてるといいんですが…。ハルヴ2先行します」

懸念こそあるものの、ひとまずは彼らの交戦を止めないとこちらまで巻き込まれる。ロベルト大尉の指示を受け、エリクはその横をすり抜けるように機体を加速させ、編隊からやや距離を取った。後方では自分が抜けた穴を埋めるべく、ヴィルさんの『クフィールC7』が編隊右翼へと位置を変えている所だろう。

計器盤を操作し、ダイヤルを捻つて通信の周波数を国際周波数へと合せる。基本的に、事故等の緊急時にしか用いない周波数ではあるが、今は間違いなく緊急時である。何より各国が独自に周波数を設定している以上、両軍同時に通信を送るにはこれ以外に方法も持ち合わせてはいない。

かちり、とダイヤルが合わさる。同時に、雑音に入り混じった言葉の奔流が一挙に耳へと飛び込んで来た。

《………の、…郎……!いい加減に帰れよ、ウステイオのコソ泥どもが!》

《こつちの弱みにつけ込んで領土を奪つておきながら、どつちがコソ泥だ!お前たちこそ俺達の土地を返せ!ここは元々ラテイオじゃない、ウステイオ東郡だ!》

《ふざけんな!んなこと言つたらお前ら元々ベルカだろうが!国丸ごとベルカに返還し

たら話くらいは聞いてやるよ!」

「あーあー、通信でもやってるな…。」

ラテイオとウステイオ、それぞれの訛りを帯びた言葉の奔流は、ある意味で目の前のドッグファイト以上に白熱した様相すら呈していた。事の起こりが領土を巡るデリケートな問題とはいえ、両国がこれほどまで感情的に先鋭化したことは近年に例がない。通信の内容を吟味するまでもなく、そこには互いへの不信…否、憎悪とさえ言つて良い感情も芽生えているように感じられる。

溜息、一つ。こちらにすら気づかないほどに白熱した空を前に、エリクは通信回線へ向けて口を開いた。

「こほん。空域展開中のラテイオ、ならびにウステイオ軍機に告ぐ。こちらはレクタ空軍第2航空師団第8戦闘飛行隊『ハルヴ』。貴軍らは現在レクタ国境に接近しつつある。速やかに引き返されたし。繰り返す、貴軍はレクタ国境へ接近中。ただちに変針せよ」

《何…!?!》

《レクタ国境!?!なんてこった、いつの間に…》

通信に響いた、驚いたような声。空戦の緊迫は一旦途切れ、暗さを増す空に一瞬の虚が訪れた。よほどに空戦に熱中するあまり、現在の機位に意識を向けていなかったのだろう。互いの位置を見定めるように、切り欠きデルタの後方に就いていた灰色の機体が

旋回してその背を離れたのも、その証左と言えるかもしれない。

このまま進めば、こちらもレクタ国境を越えてしまう。エリクは一旦機体を旋回させ、両軍の反応を見守った。常に互いの位置と国境線を意識しなければならないほど、国境を挟んでの対峙は距離が近い。ここに至りようやく、エリクは両軍の編成を見定めることができた。

角ばった主翼を持つ小柄な機体は、おそらくウステイオ所属のF-16『ファイティング・ファルコン』だろう。数は4、サブタイプ記号までは分からない。一方、葉巻型の胴体に切り欠いたデルタ翼を持った機体は7機。こちらもサブタイプ記号は判然としないが、ラテイオ所属のMiG-21『フィッシュベッド』と思われた。残る1機は2枚の垂直尾翼に翼端を欠いたデルタ翼を持った機体だが、空が暗い上に戦闘機動中ということもあり、機種が判然としない。絶えずウステイオのF-16を牽制する動きを見せている辺り、ラテイオ側の機体だろうか。

出方を伺うように、ウステイオのF-16は2機ずつの小編成に分かれ、ラテイオ側は機動を緩めつつ散開隊形を立て直し始めている。

じりじりと焦りを覚えそうな、長い時間。実際には数秒ほどの時間に過ぎなかったのだろうが、その沈黙はいやに長く感じられた。

《…おい、退けてよ》

《……あんたらが退いたらこっちも帰るさ。ここでドンパチはしたくないもんな》

《いや待て、退くのはそっちが先だろう。あくまでウチは侵犯された側なんだからな》  
《まだ言うか！人の土地を分捕っておいて……！》

「……。両軍、とにかくレクタ国境から離れられたし。これ以上接近を継続する場合、国際法に従って対応する」

そつちでドンパチするのは構わんから、頼むからレクタを巻き込まないでくれ。

言外にそう付け加えながら、再び通信で火花を散らし始めた両軍に対し、エリクは嘆息を禁じ得なかった。

国際法に則った対応とは、言わずもがな一般的な領空侵犯機への対応——すなわち警告後の撃墜処分だが、実際には『こちらから先制するな』と重々釘を刺されている以上、まずそこまでは発展しない。相手が燃料切れで撤退するまで粘るか、警告射撃が精々だろう。そもそもそこまで至らずとも、彼らが相互の争いを脇にどけてひとまずレクタ国境から離れてくれれば、それでこちらの役目は終了なのである。それを、論争を再燃させて空域に居座られ続けられれば、こちらも警告を続けない訳にはいかなくなる。

気分としては、まさに馬耳東風。心から湧き起る徒労感に、エリクは思わず後方を振り返り、やや離れて飛ぶロベルト大尉の方を見やった。もう俺じゃ無理です、代わって下さい。そんな意志を無言の目に滲ませながら。

その瞬間だった。

「……ん？」

上空に立ち込める厚い雲。その中で、何かがきらりと光った。

強烈な光も音もなく、落雷ではない。よくよく目を凝らすと、コントラストの低い灰色の背景に、辛うじて赤い炎の尾らしきものが見て取れる。ジェット機。いや、小さい。ミサイル。

たった1筋のそれは、雲間を割き、真下を指して進み——その先を飛んでいたMiG—21に突き刺さり、小さなその機影を赤黒い火球へと変えた。

《パパヴェロ7!?!》

《馬鹿な……!レクタ軍機め、本当に撃ちやがった!俺たちはまだレクタには入ってないぞ!》

「な……!?ま、待て!今のは俺達じゃない!誤解だ!」

《言っておくが、ウステイオこっでもないぞ。あんたらの自作自演じゃないのか?》

《……!越境前の撃墜、ならびに国境侵犯後の示威行動。レクタおよびウステイオの国際法違反は明確だ。パパヴェロ各機、安全装置解除!これは正当な防衛である、ラテイオ国境を防衛する!》

粉々になり、血のような赤い炎に包まれて墜ちてゆくMiG—21。薄暗い曇天を背



に墮ちてゆくそれは、まるで落とされた戦いの火蓋そのものだった。

散開していたラティオ機が左右両翼に分かれる。中央にはウステイオの4機。それを、まるで掌を合わせるように、7機が挟撃して逃げ場を塞いでゆく。

ミサイル、7筋。左右からの攻撃を突破すべく加速したF-16にそれらは襲い掛かり、最後尾にいた1機に2本が刺さって爆発した。ラティオ機は残る3機を追わず、まっすぐこちらに向かつてくる。

「くそっ……大尉!」

《訳が分からんが、この状況だ……聞き入れちゃくれないか。かといってここはレクタ領内だ、引き下がる訳にもいかん。エリク、周波数を通常に戻せ。ハルヴ各機、2セル編制。向うの加速は速い、まず上にいなすぞ》

「了解……クリス、ついて来い!」

《はっ……はい! 支援位置に就きます!》

正面、機影7。周波数を切り替え、小隊に合流したエリクはフットペダルを押し込むとともに、思い切り操縦桿を引いた。

エンジンが唸りを上げる。大地と曇天の半々に分かれていた視界が、一気に灰色一色に染まる。

機銃掃射とともに、正面から迫るラティオ機。その光の網に捕えられるより一瞬早

く、4機の『クファイルC7』は鉛直方向へと急上昇して難を逃れた。一度加速さえついでしまえば、『ミラーージュIII』譲りの『クファイル』の上昇力は折り紙付きである。

左手側に見える、ロベルト大尉とヴィルさんの機体。それが上昇から宙返りに転じるのに合わせ、エリクも操縦桿を引き、宙返りへと移行した。おそらく、後方のクリスも同様の機動を行っているだろう。

逆さまになった天地。頭上となった大地の方で、ラティオ編隊は二手に分かれ、こちらを指して上昇しつつある所だった。

《こちらヘルメート基地管制室。ハルヴー、ロベルト大尉！一体どうなっている、状況知らせ！》

《こちらハルヴー。今取り込み中なんだが、後じゃダメかね？》

《たつた今レーダーから数機のロストを確認した。一体何があった》

《んあー…。簡潔に言うとならティオ軍機から攻撃を受けた。正当防衛として現在交戦中。どの道レクタ領内にも侵入されている、とても切り上げられない》

《な…!?ここ、交戦中だ?!ロベルト大尉、貴様国際問題を引き起こす気か！何故早く報告しなかった！》

《んー…国際周波数にして通信遅れなかったとか、緊急事態が起こってそれぞれろじゃなかったとかいろいろあるけども、正当防衛なんでここは一つ。取り込み中なんで

ちよつち切りますね。ハルヴ各機、回線変え》

《おい、待て口べ》

ぶつん、と断ち切るような音が鼓膜を揺らし、管制官の声が途絶える。こんなこともあるうかと……とは語弊があるかもしれないが、混線や傍受対策のため、ハルヴ隊では小隊固有の周波数もまた独自に設定してある。管制室や他部隊との連携を阻害するためつたに使うものではないのだが、今は戦略よりも、目の前の戦闘に意識を払わねばならない時である。その点、隊長の選択が今は有難かった。

ダイヤルを捻り、小隊員のみが知る周波数へと数値を合わせる。管制官の声はもとより、先程まで聞こえていたラティオ・ウスティオ両軍の罵倒合戦も断ち切つて、エンジン音の音以外は静寂に包まれた空。それは、エリクにとつて初めての『戦場』だった。

《さて……こうなつたらやるしかないかね。ラティオの指揮官機は……『ファルクラム』、あれだな。絶えず隊の中心で僚機の位置を確かめてる》

《厄介ですね……。『フィツシュベッド』はともかく、我々の機体では荷が重い》

《任せときなヴィルさん、『円卓』を生き残った俺が断言する。空戦は機体性能じゃない、戦術次第つてな。——んな訳でハルヴ各機、聞け！》

演習の時もそうだが、ロベルト隊長の観察眼は相変わらず鋭い。自分が判別できなかった敵機の機種を一発で見抜いたばかりか、その挙動と位置取りから指揮官機を見破

り、敵の戦術を考慮して瞬時に作戦を構築したのは、やはり15年前の『ベルカ戦争』から積んだ経験の成せる業だろうか。

続く隊長の指示に耳を傾け、その『作戦』を飲み込んでから、エリクは操縦桿を握る力を強めた。

宙返りの頂点で機体をロールさせ、遙か先にラテイオ機を見据えながら斜めに降下へと入ってゆく。その先、二手に分かれたラテイオ機の挙動は、先程同様に左右へと大きく描かれた弧。おそらくは、先程ウステイオ軍機へ仕掛けたように、広げた掌を閉じるように左右から同時にかかる戦術だろう。左右上下、いずれかへ回避するには距離的に余裕がない。中央を突破するにしても、タイミングを誤れば両側から襲われ逃げ場を失う。よほどに演習と試行錯誤を積んだのか、よく練られた戦法だった。

方や、ハルヴ隊は二手に分かれたまま、それぞれに迫る編隊へと正面から向かってゆく。ロベルト隊長とヴィルさんの方へはMiG-21が4機、そして自分とクリスの方へはMiG-29『ファルクラム』1機とMiG-21が2機。すなわち、それぞれで見れば2対4と2対3と、正面きつた数としてはこちらが不利である。武装数で手数を補うにしても、こちらはAAMを2発しか装備していない。

どの条件を取っても不利しか見いだせない戦場。それでも、隊長が示した明確な一手を信じ、エリクはラテイオ機の真正面から接近を続けた。

距離が3000を、2000を、1500を切る。

天候、そしてミサイルの性能を考えれば、有効射程は概ね1000。まだ遠い。

大きく息を吐く。落ち着け、演習と同じだ。演習でもヘッドオンは何度も繰り返し返してきた。

生唾を飲み込む。

掌に汗が滲む。

落ち着け、迷うな。改めて自分に言い聞かせる。

信じる。『クファイル』を、隊長を。

電子音が耳に響く。

HUD（ヘッドアップディスプレイ）に四角形のミサイルシーカーが表示される。

機体の眼が、エリクの目が、正面の『ファルクラム』を捉える。

距離、1200。射程の一步外。

《ハルヴ各機、1セル》

隊長の声。

瞬間、目の前で『ファルクラム』を中心とした編隊が揺らいだ。異常を察知したのか、機動が弱まった一瞬の虚を経て、『ファルクラム』は眼前で急旋回し、こちらの左側を抜ける進路へ機首を向ける。追従していた2機も慌てるように機首を翻し、こちらへと無

防備な腹を向けた。

「クリス、今だ！」

《はいっ！》

はじき出した声とともに、エリクは指に力をかけた。

煙の尾を曳くAAM、そして機銃弾。殺到するそれらが、ラテイオ機の腹へと向かってゆく。同時にエリクの横目には、その3機の『斜め前方』から、別のミサイルと機銃が襲い掛かる様も写っていた。

ごう、という擦過音を残してラテイオ機と馳せ違い、機位を立て直した先には、2つの機影。三日月のエンブレムを刻んだデルタ翼の機体は、紛れもない『クフィールC7』——そう、隊長達の姿があった。後方を振り返れば、クリスの機体にも目立った損傷はなく、健在な三角翼を風に舞わせている。そしてその先——馳せ違ったばかりのラテイオ編隊の方には、黒煙に包まれた機影が2つ、破片をばらまきながら地上へと墜ちてゆく様も見えた。

ロベルト隊長が立てた戦術は、つまりはこれ——挟撃を挟撃で返すことだった。

すなわち、2機2組に分かれたハルヴ隊は、それぞれの正面から迫るラテイオ編隊へ直進。互いが有効射程に入る直前に、隊長とヴィルさんの2機は急旋回し、エリク達の正面にいた3機へと鼻先を向けたのである。正面のエリクらに加え斜め前方の隊長か

らの圧力を受けて、『ファルクラム』は思わず攻撃を断念して回避に入ったというのが、先のラテイオ機が採った機動の理由だった。

『ファルクラム』には性能面で勝ち目がない。『フィツシュベツド』相手ならば加速性能は五分だが、旋回半径では『クファイル』が小さいため、こちらの急旋回にはついて来られない。互いの機体性能を熟知した隊長のアイデアが無ければ、到底できなかつた戦術だつただろう。挟撃を受けてなお健在な『ファルクラム』は、やはり流石と言ふべきか。

「ラテイオ機2機、撃墜を確認！」

《指揮官機は回避したか…いい腕をしてる。…さて、これで帰ってくれりや万々歳なんだがね》

《…残念ですが、そうもいかないようですね。5機ひとまとまりで反転してきます》

相手の出方を伺うべく、4機編隊が左へと旋回する。先の交戦で高度を失つた今、機位はラテイオ側の方が上空の優位を確保しており、まだ機数としては向うの方が多し。加えて、ラテイオ側にしてみれば僚機を3機も失つたことも大きいのだろう。『ファルクラム』を中心として一塊となつた5機は、明らかにラテイオとの国境ではなくこちらを指向していた。すなわち、撤退する気は皆無ということなのだろう。

他国の領内で敵機に囲まれ、援軍の見込みも無い。それはとうに承知しているのだら

う、恐れを知らない正面からの接敵を目論むその機動は、悲壮感すら滲んでいる。

《…なんで、そこまでして…!》

《連中、まだやる気か。…仕方ない。ハルヴ各機、1セル維持。せめてすつぱり終わらせてやろう。連中の下を抜けてから、一気に高度を稼ぐ》

覚悟を固めた相手に、正面から向かうのは愚策。鋭い敵の尖峰はいなすに限る。隊長の言葉からその意識を読み取りながら、エリクはロベルト機について加速した。互いの位置と『クファイル』の加速性能を考えれば、一気に下を抜ければ攻撃を受けるリスクは少ない。

——だが、これをいつまで続けられいいのか。敵が全滅するまで、ひたすら切っ先を突き付け合うような戦いが続くのだろうか。怖れと狼狽を孕んだクリスの呻きに、エリクはなぜかそんな感慨を抱いていた。

そして。

その感慨すらも、戦場は一瞬で裏切った。

《スポーク1、セミアクティブ空対空ミサイル発射》

ラテイオ機よりもさらに上空、雲を割いて急降下してくる二つの機影。その片方の翼下に炎が閃くや、鋭い矢のような一閃は『ファルクラム』の背目がけて直進。回避運動を取るその尾を正確に捉え、胴体中央からその機影を引き裂いた。



一体、何が。唐突な出来事に混乱するエリクをよそに、『ファルクラム』の破片がゆつくりと地面へ向けて堕ちてゆく。予想だにしなかった直上からの一撃に、脳裏は束の間思考を忘れた。

《こちらスポークー、『カルクーン』！遅くなつてすまない、低気圧に巻き込まれて迂回に時間がかかつてしまった！》

《スポークーよりハルヴ隊へ、ラティオ部隊は撤退を開始。深追いの必要はない、当機へ集結せよ》

狷介なアルヴィン少佐——『スポークー』の声に、やつとのこととで脳裏が回転を始める。一層暗くなつた空の下で、生き残つた4機の『フィツシユベツド』は確かに国境方向へと機首を向け始めていた。編制が崩れ算を乱しているように感じられるのは、それだけあの指揮官機を失つた衝撃が大きかつたのだろう。

どつと力が抜ける感覚を覚えながら、エリクは『クファイル』の機首をアルヴィン少佐の『タイガーⅢ』へと向けてゆく。その間も、アルヴィン機の後席に座る『カルクーン』——フィンセント・デ・フロート曹長は何度も遅参の詫びを述べ、凝り固まつた空気を幾分軽いものにしてくれていた。人を寄せ付けない峻厳さを持つアルヴィン少佐や、口を開けば厳しい言葉を繰り出すスポーク2——パウラのことを思えば、精神衛生的にこの人にどれだけ救われているか分からない。

《のつびきならない状況になったな。情報にあつたウステイオ機は?》

《さて: : : どうもレクタ領空への侵入を避けて退避してみたいですね。あるいはこつちの出方を探っていたか》

《: : : いずれにせよ、明日からは気が抜けないだろう。最悪、行きつく所まで行く可能性もある。: : : 全機、帰投する》

『タイガーⅢ』が翼を翻し、その背に『クフィール』が続いてゆく。自身も基地への進路を取るべく操縦桿を握った所で、エリクはその手が小刻みに震えていることに気が付いた。慣れない機動に一気に疲労が溜まったのか、それとも遅ればせに心身に襲い掛かる恐怖だったのか。あるいは、アルヴィン少佐の言う『行きつく所』——すなわち戦争の訪れに、言い知れない不安を抱いたためだったのだろうか。今は心に渦巻くものが多すぎて、冷静な分析は到底できそうにない。

ふう、う。

腹の底から大きく息を吐き、エリクは国境が横たわる南の空を見やった。ぱつ、ぱつと彼方に爆ぜた幾つかの光は、落雷か、それとも待ち構えていたウステイオ軍機に喰われるラテイオ機の断末魔だったのか。国境は、そして戦場は遥か彼方で、その様は全く窺い知れない。

空に刻まれた幾つもの光を飲み込んで、南からは積乱雲が迫っている。

雷雲が、  
レクタにも訪れようとしていた。

## 第3話 C u r t a i n — u p

《……長い歴史を誇る我らがラテイオ共和国が、これほどの脅威に晒されたことは、実に半世紀を遡るオーシア戦争以来の事である。力を以て現状を変えんとする隣国の脅威の前に、我らはひたすらに耐え、争いを回避すべく努力を重ねて来た。近年幾度となく領空侵犯を受けながらも、互いに死傷者を出していないことこそがその証拠である》

煌々とした一室の外に、夜明け前の薄暗い闇が佇んでいる。

時刻にして午前4時36分。蛍光灯の強い光は空の光をかき消して、東に面した窓の外には朧な星の光一つ見て取ることはできない。月はとつくに西の彼方へ傾いており、太陽を待つ朝際の空は、常以上に暗く静かに沈んでいるように見えた。窓にべたりと張り付く蛾の群れも、この暗闇よろしく朝日とともに消え失せてしまうことだろう。

この時刻に起きていることは夜間の邀撃待機を除いて他になく、その場合もせいぜい2、3名で駄弁っているのが常である。ところが、今この場——搭乗員詰所に屯する面々の数はエリクを含め10人。司令部に出頭している中隊長と補佐を除けば、ここへルメート空軍基地の全パイロットが揃っている勘定になる。

まだ深夜に近いと言って良い早朝に、10人からのパイロットが集って頭を巡らし、

1台のテレビを食い入るように見つめている。その様は、明らかに普段の姿と形を異にした光景だった。

テレビの中には、眉が薄い禿頭の男が一人、カメラのフラッシュが明滅する中で正面を向いて言葉を紡ぐ様が映っている。その姿は、テレビや新聞でたびたび見た覚えがあった。つい先日事を構えたラテイオの元首である、大統領その人である。

不慮の交戦があつた直後のタイミングで、大統領自らの『重大発表』。それが持つ意味は、誰の目にも明らかだった。

《しかるに、再三の警告にも関わらず隣国ウスティオは我が領土を侵犯し続け、我が軍と緊張状態を作り続けた。∴そして去る21日。国境付近で勃発した戦闘において、ウスティオ軍機と、それに片務的に味方したレクタ軍機によつて8名の尊い命が失われる結果となった。度重なる領空侵犯に加え、無警告のままに我が軍の航空機を一方的に撃墜したことは、重大な国際法違反である。我々は即日両政府に抗議したが、本日27日に至るまで納得のいく回答は得られていない。》

ラテイオ大統領の言葉が先日の交戦の件に触れた時、隣に座るクリスの顔が僅かに響められた。エリクも表情にこそ出さないものの、胸の底には苦いような、名状しがたいもやもやしたような鬱屈が澱んでいる。ただの一戦闘ではない複雑で快からぬ思いが、その記憶には滲んでいた。

もつとも、その内容に関してはラテイオ大統領が言うそれと大分異なる。去る6日前——すなわち2010年9月21日、エリクから『ハルヴ隊』が、国境付近で対峙するウステイオ・ラテイオ両軍に対応すべく邀撃に当たったのは確かに事実である。だが、警告に関してはエリク自身が両軍に行っており、一揉めしつつも両軍撤退の方向で纏まりつつあったのもまた確かだった。結果的に戦闘に入りラテイオ軍機と交戦することになったのは、出所不明のミサイルがラテイオ軍機を撃墜し、以降ラテイオ側がこちらに聞く耳を持たなかったことに原因がある。

その点『無警告』の指摘は当たらない上に、レクタ側からの領空侵犯など笑止と言う他ない。国境に近いヘルメート基地ですらそのような事態は把握しておらず、ウステイオと違い領土紛争を抱えていないレクタ側から領空侵犯をするメリットなど皆無に等しい。当日の悪天候で件のミサイルの出自はついぞ知れないままだったが、状況を踏まえるとウステイオ軍の別動機によるものと考えるのが最も自然だろう。軍の上層部もそのように考えているらしいことは、エリクも仄かに漏れ聞いている。つまりは、ウステイオに一杯食わされて片棒を担ぐ破目になったというのがその真相という所だろうか。

とはいえ、たやすく看破できそうなウステイオの意図に、ラテイオが気づきませず踊らされているのが妙といえれば妙ではあるが。ラテイオ首脳部は、そこまで分析を行わな

かったのだろうか。

「…妙だな」

「ですね。こんなにあっさりとラティオが乗せられるものでしょうか」

同時に同じ疑問を感じていたのか、クリスと逆隣に座るロベルト大尉がぼつりと呟く。やはり、大尉も引つ掛かりを感じているのだろうか。そう判断し応じたエリクの潜め声は、しかし続く言葉に打ち消された。

「そうじゃない。いくらラティオが由緒正しき元大国だからって、何世紀前の話だよ。いくらユークの支援を受けているからって、2国同時に喧嘩を売るなんて無謀なことするかね？第一、ウステイオはオーシアと同盟を組んでいる。東方諸国（こごい）からユークの勢力を駆逐したいオーシアも、この機会を存分に活かそうとするだろう。これじゃ、無謀どころの話じゃないぞ」

「あ…。…何か、裏があるってことですか？」

「うーん、分かん。2国同時に相手ができるようなトンデモない物でも持つてるんかね？」

ロベルト大尉の言葉に、エリクの脳内の疑問が躰いた。言われてみれば、大尉の言う通りである。近年のラティオはユークトバニアから新鋭の兵器を取得しているものの、それでもレクタとウステイオの2国を同時に相手どるともなれば、不利は誰の目にも――

—おそらく当のラテイオから見ても明らかだろう。ウステイオには15年前から培った精強な軍の伝統があり、そしてその背後にオーシアの姿もある。近年ユークトバニアとの関係が悪化しているオーシアとしては、できる限り周辺国からユークの影響力を消したい筈だ。つまり、ラテイオは悪くすれば1対3の劣勢に陥る破目になる。

だが、もしそれがエリクの考えた通り『引つかかった』のでなく、明確な意思として敢えて行われたとしたらどうか。しかし、それで誰が得をするというのか。ユークが、ラテイオと同盟関係にある周辺諸国か、それとも別の誰かなのか。

複雑怪奇な国際関係は、考えれば考えるほどに頭が痛くなってくる。ロベルト大尉の言葉でそこまで考えてみたが、エリクは頭をぶんぶんと振り、余計な思考を追い出すことにした。いずれにせよ、事態はもう動いているのだ。軍人ならば、とにかく目の前の事に全力で取り組められればそれでいい。

《事ここに至り、我らラテイオ共和国はウステイオ、ならびにレクタ両国に対する安全保障協定を破棄。国際的慣例、ならびに国際緊急事態特別措置法に基づき、三軍に対する臨戦態勢を発令した。本日只今、午前4時40分を以て、ラテイオ共和国は、ウステイオ共和国、ならびにレクタ共和国に対して——》

—そう、事態はもう動いている。おそらくここにいる全員が、この会見によって来る事態を予見している。エリクは、大尉は、ヴィルさんは、クリスは——皆が、文字通



り固唾を飲んでその一言に耳を傾けた。

《宣戦を、布告…》

ラテイオ大統領の言葉は、そこでかき消された。

耳をつんぎくけたたましい警報と、壁に設けられた回転灯の赤色によって。

《警報！警報！方位170より国籍不明機多数接近！邀撃待機搭乗員は速やかに搭乗、離陸せよ！繰り返す、各員速やかに出撃せよ！！》

「な…空襲!?!」

「馬鹿な、宣戦布告は今の今だぞ!?!」

「言ってる場合か、とつとと離陸だ！中隊長は!?!」

「司令部から直接向かった！俺たちも行くぞ!」

精神をざらつかせるサイレンが、心と耳を苛み続ける。最早誰もテレビに見向きもせず、慌ただしい喧騒の中を、それぞれの装備品をロッカーから引っぱり出してゆく。

「いきなりとは…穏やかではありませんね」

「おーやだやだ。朝はのんびりしたいもんだがね…。エリク、ヴィルさん、クリス。乗ったらすぐに通信を入れっぱにしておけよ」

急いでヘルメットを掴んだ自分やクリスとは対照的に、ロベルト大尉やヴィルさんは落ち着いている。これが、15年前の『ベルカ戦争』を経験した男たちの姿なのか。冗

談めかした大尉の言葉にそんな思い一つ、そちらへと向けた自分の笑顔はきつと強張っていたに違いない。

額の冷や汗一筋拭い、ロベルト大尉に続いてエリクは駆けだした。

暖機運転を済ませていたのか、格納庫は既にエンジンの唸りと熱気、人の喧騒がひしめいている。エリクは扉から二番目の自身の愛機に取りつき、身を翻すようにコクピットへと納まつて無線のスイッチを入れた。酸素マスクよし、計器類OK。今回は邀撃待機だったため、武装は短距離AAMが4基のみ。手早くチェックを済ませる最中にも、飛び交う通信が耳へと入り込んで来た。

《編制順だ、第7戦闘飛行隊より順次タキシングに入れ!》

《サテリトウ1了解、タキシングに入る。敵の距離、数、機種知らせ》

《こちら管制塔。敵編隊距離、既に10kmを切った!数およそ10、機種不明!》

「10km:!?くそ、到底間に合わないぞ!」

《最初の一撃を支えられるかどうかだな。あー、こんな時に『スポーク隊』がいてくれりゃな》

数10、距離10km以下。通信を聞いた時、エリクは思わず動揺とともに喚いた。おそらく超低空を接近しレーダー波を掻い潜って来ていたのだろうが、それでも10kmもないとなればあまりにも猶予が無い。陸上兵器ならいざ知らず、昨今のジェット機

ならば数分とかからない距離である。こちらの状況を省みれば、2機離陸できるかどうかすらきわどい所と言わざるを得ない。

そして悪いことに、この重要な時に限って教導隊の『スポーク隊』は不在であった。基地の収容能力や周辺各基地の航空部隊への教導の事も考えて、スポーク隊は司令部直轄の基地に駐屯し、そこから近隣基地へ赴くという形式を取っている。ヘルメート基地駐在ではないため、このような緊急時に必ずしもいてくれるとは限らないのであった。――だが、よりによつてこんな時に。

《敵機視認!…ダメだ、間に合わん!サテリトウ1離陸中止、狙い打たれるぞ!》

《ネガティブ。<sup>拒否する</sup>今上がらんと一方的にやられる!サテリトウ1、2、離陸する!》

《無茶だ、サテリトウ!》

《敵機接近!管制塔各員伏せろ!!》

目の前の滑走路で、赤白い炎を噴いた『クファイルC7』が徐々に速度を上げてゆく。

しかし、遅い。エンジンの立ち上がりこそ早いものの、『クファイル』のようなデルタ翼機は揚力を得にくいいため、通常の機体より離陸に要する距離も長くなる。武装を搭載し、重量が増えていればそれは猶の事である。

『クファイル』が脚を速める。

轟音が近づく。

サイレンが鳴り響き続ける。

滑走路の先の空には、薄闇に浮かぶ暗いシルエツト。見覚えのない姿。敵。

『クファイル』が漸く揚力を得てふわりと舞い上がったその瞬間、その三角翼へと機銃弾が殺到する。

蜂の巣となつたそれは赤い炎に包まれて、滑走路の先で轟音と炎の花を咲かせた。

《サテリトウ1、2、墜落！》

《くそ……後続来るぞ！》

基地内のそこかしこに居を構えた対空砲が、暗い空へ向けて曳光弾の網を刻み始める。

重なる轟音、爆ぜる破片、空から降り注ぐ機銃弾とミサイル。阿鼻叫喚の光景の中で、建物がいくつか炎を上げ始める。

やや大型の機影が最後に空を駆け抜けた直後、向かい側にあつた格納庫の一つから、地を揺るがすような轟音とともに猛火が轟々と上がり始めた。

《第3格納庫に爆弾が直撃！》

《くそ、各員損害状況知らせ！》

《て、敵第一波通過！今だ、サテリトウ3、4、離陸せよ！》

「くそ……敵は山ほど、こっちは2機ずつしか上がれない。このままじゃモグラ叩きに

……」

《整備班！俺とエリクの機体からAAMを外せるか?! 1発でもいい、軽くするんだ!》

混乱の中に混じった大尉の声。数で勝る敵を相手に、虎の子のミサイルを外す——反射的に反論を口にしたエリクは、しかしいや、と思いついた。考えてみれば、いくら虎の子を抱えていようが離陸できなければ話にならない。そして『クファイル』における最大の弱点は、デルタ翼機ゆえの長大な滑走距離である。ならば、今は攻撃力を犠牲にしてでも離陸の成功率を上げることが第一にして、後続と基地の安全を確保するべし。隊長の意図は、きつとそれに違いない。

目の前で、攻撃の間隙を縫った『クファイル』が2機、速度を速めて滑走路を走り抜けてゆく。その光景を前に、エリクとロベルト大尉の機体に取りついた整備員が、必死の形相でミサイルを外す作業に取り掛かり始めた。幾分機構は簡易になっているとはいえ、やはり多少の時間は要する。

《サテリトウ3、4、離陸！ハルヴ隊は離陸を待て、敵編隊が反転し再接近中!》

《こちらサテリトウ3、可能な限り持たせてみせる！下手に滑走路に出て狙い打たれるなよ!》

「分かつてる!……頼むぞ……!」

無事滑走路を飛び立った2機を尻目に、再び幾つもの轟音が迫り始める。こちらは格

納庫の中でもあり、整備員が作業中でもあるため避けようがない。

迫る。

近い。

掌が汗でぬるつく。

《来る！伏せろ!!》

瞬間、エリクは祈った。

機銃弾が、屋根を貫通して破片をまき散らす。滑走路を護っていた自走式対空砲が直撃を受けて爆散する。暗さゆえに敵も正確に狙いが付けられていないのだろう、降り注いだ数の割に、地上への被害はそこまで出ていないらしいのが救いだ。それでも破片で傷ついたらしく、格納庫の床には幾筋かの血がこびりついている。

《敵機通過！今だ、ハルヴ隊行け！行け行け行け!!》

《ミサイル解除よし！ロベルト大尉、エリク中尉、いつでも行けます！》

《よし、各員機体から離れる！ハルヴ1、タキシングに入る！》

「ハルヴ2、小隊長に続く！」

フットペダルの操作とともに、機体がゆっくりと格納庫から滑走路へと侵入してゆく。既に滑走路も機銃弾で凹みだらけだが、爆弾による大穴は今の所見られない。

東の空が白み、空の黒へ青と白が徐々に混じり始める。夜から朝へと移ろう空の下

で、2機の『クファイル』が滑走路に並んだ。正面に、滑走を妨げるものは見当たらない。  
《敵機再反転。ハルヴ隊急げ!!》

左前方、隊長の『クファイル』に火が灯り、その速度を徐々に速めてゆく。ミサイルを外したこともあり、その速度は普段見慣れたものより速い。

ふうふうう。深く息を吸い、エリクは正面を見定めながら、ゆつくりとフットペダルを踏みこんだ。落ち着け、いつもの離陸と同じだ。焦る必要はない。

隊長の『クファイル』が舞い上がる。機体に徐々に速度が乗り、外を流れる光景が瞬く間に後方へと去ってゆく。速度90、100、110。遙か先には、赤い炎に包まれたままの中隊長機。

《ハルヴ2、2時方向!》

「つ!?…くそ、こんな時に!!」

管制塔の通信に、右斜めを見上げたエリクは思わず舌を打った。

こちらを指す機影が二つ、機首を下げて明らかに狙い撃つ体勢に入っている。こちらの速度は、離陸にはまだ足りない。

胸にまで汗が滲む。

速度計と敵を交互に見やる。

速度、115、120、125。

早く。

フットペダルを幾度も踏み込む。

速度130、135。

早く。もつと早く早く。

速度、140。

敵機、有効射程内——。

「……そっ！」

轟く機銃の発砲音。それと同時に、機体は炎に包まれた。

——そう、エリクの『クファイル』ではなく、眼前の敵機の方が。

「……!?!」

《無事か、ハルヴ2！早く上がれ！》

残った敵機の後方に、『クファイル』がミサイルを放ちながら追い縋っている。その声音は、先に離陸した第1小隊——サテリトウ3のものだった。被弾したのか既に炎を噴いているが、それでもこちらの離陸を支援すべく敵機を機銃掃射で妨害し続けている。

速度、150。機体がふわりと浮き上がり、汗に濡れた体が一気に浮遊感に包まれる。

滑走路を抜け高度を稼いだこちらの下方で、サテリトウ3に追われていた敵機は速度を速めて離れていった。基地上空に差し掛かったサテリトウ3の高度は概ね100、な



んとか射出座席で脱出は可能な筈だ。

「サテリトウ3、助かった！後は任せて脱出しろ！」

《：：：そうもいかなかった。今ここで脱出すると、滑走路に落っこちる。俺が味方を妨害する訳にはいかんだろ？》

「な…：。…おい!?サテリトウ3！」

《そういう訳だ。…：：後、頼んだぜ》

虎口を切り抜け火照った体が、心が、ぞつと一気に冷えてゆく。

思わず操縦桿を握りしめたエリクの下で、サテリトウ3の『クファイル』は力を振り絞るように右旋回し、ぐらりと機体を傾けさせた。

脱出可能な高度とは言ったが、あくまでその進路を維持できたら、の話である。100に満たない高度で急旋回しバランスを失えば、それも基地の敷地を抜けるまでコクピットに留まり続けられ、脱出は確実に不可能になる。それでも、その『クファイル』は高度を失いながら、徐々に基地の敷地を抜けていった。まるで、全て承知とその背で語るように。

爆発。基地の敷地の一步外、明かりの無い暗闇に咲いた赤い花。その上に、落下傘の姿は見つからなかった。

「……………」

《サテリトウ3墜落！敵機反転、また来るぞ！しつこい奴らめ……！》

「……くそ、くそ!!ラテイオめ、卑怯者どもめ……!!」

《ハルヴ1よりハルヴ2、敵はMiG-29Gが2機と、Su-22M4が7機だ。

『ファルクラム』はこつちで何とか抑える。『フィッター』の方を頼む》

「了解……もう遠慮はしない。叩き落としてやる……」

最早、先の宣戦布告演説を聞いた時の微妙な気分は消え失せていた。宣戦布告直後からの卑怯な先制攻撃、施設を執拗に狙った戦術、離陸中の戦闘機を狙い撃つ行為。そして、サテリトウ3の身を賭した壮絶な最期。戦意——否、殺意とすら評していい激しい感情が、その心を浸してゆくのをエリクは知覚していた。

空中で反転し、エリクは戦況を俯瞰する。敵編隊は、基地から見て西と北北西の2方向。葉巻状の胴体に切り立った機首、主翼の中ほどから可変翼を装備したその機影は、確かに隊長の言う通りSu-22M4『フィッターK』に見て取れた。積載能力に優れた単座戦闘攻撃機だが、空戦能力に限って言えば純粋な戦闘機である『クファイルC7』の敵ではない。

蹂躪する。叩き潰す。その他に、サテリトウ3の——犠牲となった皆の魂を慰める術はない。エリクは操縦桿を傾けて機体を翻し、基地上空へと機位を移行させた。高度250、方位270。西から侵入する敵編隊4機の、真正面から接敵する位置。

薄暗い西空を背に、黒い闇のような機影が真正面から近づいてくる。淡い光で縁取られたガンレティクルに、中央の1機が捉えられる。だが、まだ遠い。『クファイルC7』の搭載機銃である30mm機関砲は、一般的な20mm『バルカン』と比べ威力に優れる反面初速に劣り、それゆえに命中精度もやや下がる。確実に命中させるには、より接近しなければ直撃を与えるに至らない。

距離、目算で800。まだ射程には程遠い。

600、500。『バルカン』なら命中を期せる距離だが、30mmではまだ欲しい。

『フィッターK』が衝突を避けて左右に散らばる。大きな可変翼が特徴的なシルエツトを背景に刻む。ガンレティクルの中で、葉巻型の機体が灰色の腹を見せる。

距離、400。

力を込めた引き金に応えるように、機体の下から響く唸り。『クファイル』から放たれた30mm弾は照準器の中心目がけて軌跡を刻み、『フィッターK』の可変翼を中ほどから引き裂いた。

爆炎を抜け、操縦桿を引いて縦へ旋回したのち、機体をロールさせ水平へと引き戻す。一連の機動——インメルマンターンで高度を稼いだエリクの眼下には、残った『フィッターK』3機が攻撃を断念し、散開する姿があつた。

「逃がすか……！」

機銃弾とはいえ、30mmともなれば『ファイター』相手にも十分な威力を示す。これならば、AAMを装備していなくとも敵を全滅させることだつて不可能ではない。

エリクの目は、既に次の獲物を見定めていた。こちらから見て左斜め下方、可変角を最大にして旋回に入っている『ファイターK』。距離はおおよそ1400、『クファイル』の加速力ならば難なく追いつける。

フットペダルを踏み、旋回で失った機体の速度を上げてゆく。背を追うこちらに対し、可変翼を広げたまま『ファイターK』は旋回の機動を崩さず、こちらを格闘戦に持ち込もうとしているのが見て取れた。

低高度域ならば『ファイター』の運動性はMiG-21『フィッシュベッド』シリーズにも匹敵すると聞くが、無理に相手の得意に合わせる必要はない。要は格闘戦に付き合わずに、一撃離脱で叩けばいいのだ。機体形状に加え、ミサイルすら装備しない機体は軽く、その加速は常以上にいい。相対距離は瞬く間に1200を、1000を、800を割っていった。

照準器が、敵機の胴体を捉える。あと数秒、それで必中を期する射程内に収められる。距離750、700。

高まつてゆく敵の機動への集中力。それは、空から降つて来た別の声にぶつぷりと断たれた。

《待てエリク、深追いするな！ヴィルさんとクリスを支援してやれ！》

「……しまった、そうだ！」

敵機を落とすことに集中するあまり、頭から抜け落ちていた目的。それを今更ながら思い返らせた隊長の声に、エリクははっと息を呑んだ。そうだった、本来の任務は味方が上がるまでの時間稼ぎである。敵機の撃墜に集中して間隙を突かれては元も子もない。

機体についた加速そのままに機銃を発射し、『フィッターK』の後方を駆け抜ける。命中を確認する暇もなく、エリクは薄闇の下に、滑走路の様子と敵機の姿を探った。

「……いた……くそ、済まないヴィルさん、クリス！間に合うか……!？」

燃える対空車輛が照らす滑走路には、既にヴィルさんとクリスの『クファイルC7』の姿が認められた。そして、その離陸を妨げようと企図しているのだろう、滑走路と直角に侵入すべく、3機の『フィッターK』は編隊を組んで高度を下げつつある所だった。すでに敵編隊と滑走路の距離は狭まっており、おそらく1200もない。

思わず叩いた舌打ち。エリクは奥歯を食いしばりながら、先の一撃離脱で乗せた加速を止めることなく敵編隊の後方から距離を詰めていった。

距離は、確かに狭まっている。しかし眼前の『フィッターK』はいずれも可変翼を畳んだ高速形態にあり、先の敵機ほど速やかに捉えることは叶わない。

距離1000。

900。

くそつ。せめてミサイルがあれば。

あと、せめて300。それだけ詰めれば、少なくとも弾は届く。

速度計の数値が飛ぶ。

エンジンの回転数が赤へと近づいてゆく。

2機の『クファイル』が滑走を開始する。

その位置、敵機の真正面。

間に合うか。

いや、間に合う。

間に合え。

《ハルヴ2、後方に敵だチエツクシツクス！》

「くそつたれえええ!!」

焦燥の声。ロツクオン警報。

入り混じる使命感と焦りの中で、エリクは闇雲に引き金を引いた。

30mm機関砲が唸りを上げると同時に、その背からも衝撃が襲い掛かる。

後方——敵機。おそらく、先程一撃離脱をかけたSu-22。コクピットに収まる工

リクの身体にも、被弾の衝撃と思しき振動と金属同士が当たるような不愉快な音が一つ、二つと響いてくる。

喰われる。

もはや射撃の成否も、後方を確認する暇もない。急ぎ敵の射線から逃れるべく操縦桿を倒しかけた刹那、エリクの目に信じられないものが映った。

破片をまき散らし、ぐらりと揺らいだ眼前の敵機。そのさらに正面から別の機影が現れ、こちらへ向けてミサイルを放ったのだ。

「ぬ、おあぁっ!?!」

反射的に操縦桿を倒し、機体を左へとロールさせる。

真正面のミサイルは煙の尾を曳きながら、主翼を掠めるように通過。その後方——すなわちこちらを追っていた敵機へと真正面から突き刺さり、その機影を爆発とともに虚空へと散らせた。ミサイルを放ったその機体は、爆炎を裂いてこちらの上空をすれ違つてゆく。

今更ながら心臓が早鐘を打つ。額に汗がどつと噴き出す。もう少しロールが遅れていれば、後ろの敵機ごとこちらが心中していたのではないか。

離陸する2機の『クファイル』の上空で、汗を拭ったエリクはやつとのことで後方を振り返る。こちらの後方上空には、緑系統のダズル迷彩が施された単座の小型戦闘機——

F-5E『タイガーⅢ』が1機、その小さな翼に朝日を反射させていた。

見覚えのあるあの塗装は、まさか。

《スポーク2よりスポーク1、1キル》

《こちらスポーク1、『カルクーン』。こちらでも確認した。：間に合ったみたいだな。敵編隊は撤退へと移行中》

《スポーク隊……救援要請が間に合ったか！こちらヘルメット基地、助かった。感謝する》

「……………なんてこった、あいつか……」

スポーク2——確かパウラとかいう准尉。以前、演習の際に酷評を食らった小柄な女パイロットである。以来苦手意識がくっついて離れないのだが、よりにもよってその相手に助けられる破目になるとは。そう思うと、先とは別の意味で冷や汗が流れそうだった。

とはいえ、助けられたのは事実である。スポーク隊の増援を察知したらしく、ラテイオの残存機は編隊を組み、南の方角へと離脱してゆく所だった。彼らの増援がなければ、この基地の被害はより大きくなっていたことだろう。

編隊を組むスポーク隊と、ヘルメット基地残存機。ふと思い当り、エリクは機体をやや傾け、スポーク2——パウラの『タイガーⅢ』と並行した。年下で生意気な相手とは



いえ、一応礼を言っておかねば決まりが悪い。

「ハルヴ2よりスポーク2。さつきは助かった。礼を…」

《5点》

「…は？」

《後方警戒が甘い。近接防衛装備使用等の応用力欠如。敵の深追い。以上に私語で減点追加》

「……………」

言うんじやなかった。冷や水を浴びせられた気分とは、まさにこういうことを言うのだろう。他の機体へも通信は通じていたらしく、無線は誰かが噴き出す音も拾っていた。たぶん隊長だろう。

《スポーク1よりヘルメート基地へ、着陸許可求む。最前線で第二波に備える必要がある》

《了解した。現在滑走路上の残骸除去に取り掛かりつつある。しばし待機されたし》

スポーク1——アルヴィン少佐の声に引かれるように、エリクもしばしその目を地上へと走らせた。

漸く差し始めた朝日の下で、重機が数台、横転した車両の傍へと向かっている。滑走路の周辺にはいくつもの弾痕が刻まれており、まさに戦場そのもの、惨状と評していい

有様となっていた。この様子では、あと少なくとも1時間は要することになるだろう。

来るべきものがついに来た。印象としては意外というより、むしろ当然と感じる部分が大きかったと言えるだろう。先日の国境での戦闘しかり、事態がここまで入り組んでしまえば、あとは力を以て解決する他ないのは火を見るよりも明らかだった。

だが、開戦直後からこれほどの打撃を受けて、自分たちは——レクタは耐えきれぬのだろうか。戦火はどこまで拡大するのか。そこまではおそらく誰も、読み切ることはできていないに違いない。

地上では中隊長機が、そしてサテリトウ3の機体が今なお焔に包まれている。

空から見下ろしたその炎は、開戦の犠牲となった兵士を悼む送り火のようにも見えた。

## 第4話 境界の炎碑

《ハルヴ1、テイックオフ離陸する》

『クファイルC7』の小柄な機体が、眼前を奔り空へと舞い上がってゆく。

夜明け前の宣戦布告と、時を同じくした奇襲攻撃から半日あまり。傾いた太陽の下で朱に染まるヘルメート空軍基地は、再び戦場の喧騒に包まれ始めていた。

慌ただしい。開戦から1日を経てすらいなの中で、様々なことが起こり過ぎ、脳が熱を帯びているような感すらある。タキシングから滑走路へと入り、乗機『クファイルC7』の中で離陸を待つ青年——エリクは、胸にこみ上げたその思いに深くため息をついた。

《ハルヴ1、離陸確認。ハルヴ2、離陸を許可する。滑走路の片方はまだ復旧していない、脚を折って滑走路を塞ぐなよ》

「今更そんなハマするかよ。ハルヴ2、離陸する」

はっ、と短い笑い一つ、エリクはフットペダルを踏みこむ力を強めてゆく。最初はじわりと、そして徐々に速く、速く。『クファイル』は徐々に速度を上げ、正面の計器類がその数字を見る見る上げてゆく。

もつとも、今回は対地攻撃任務ということで、今日の機体は重い。9か所を有する

ハードポイントのうち、増槽とIR誘導式空対空ミサイル<sup>A</sup>で3か所を占有した他は全て無誘導爆弾<sup>B</sup>を搭載しており、その装備重量は『クファイル』の最大搭載量である6tにも迫る。戦闘機にすらフル装備の爆装を施して対地任務を担わせなければならぬという辺りに、ラテオの初撃で戦力の半分を失ったヘルメート基地の苦衷が色濃く滲み出ていた。

管制官の言う通り、片方の滑走路が爆撃で使えない今、この滑走路まで塞ぐ訳にはいかない。エリクは滑走路の端まで機体を加速させ、十分に速度が乗った所で操縦桿を引き起こした。ふわり、と空に舞い上がった機体は、しかしやはり上昇が鈍い。操縦桿の手応えにこそ普段と差は無いものの、実感として『クファイル』が重たがっているようにもエリクには感じられた。

《ハルヴ2離陸完了。続いてハルヴ3、離陸せよ。ハルヴ4はタキシングへの進入を許可する》

ゆるゆると昇ってゆく機体から、しばし基地の方を振り返る。

『中身』ごと燃えて潰れた第3格納庫、熱でひしゃげた対空砲、基地を護るべく危険を冒して離陸し、直後に敵に喰われた中隊長機の残骸。そして基地の敷地の一步外、離陸中のこちらを護るため最期まで足掻き続けたサテリトウ3が、地に墜ちて刻んだ機体の墓標。夕焼け色に染まったヘルメート基地は、卑劣な初撃で血を流したレクタそのもの

の象徴にも見える。

だが、これしきで怯んではいられない。中隊長に、そしてサテリトウ3に護られた自分が、今度は護る側になるのだ。小隊の皆を護り、基地を護り、ひいてはレクタと言う国を護る。そのためには血を流すことも、血が流れることも厭わない。その信念は、決して折らせはしない。知らず、エリクは操縦桿を握る力を強めていた。

2010年9月27日、16時45分。オーシアとユークトバニアの開戦に世界が揺れたこの日、人知れぬ辺境の地でもまた、戦火がひっそりと燃え立ちつつあった。

\*\*\*\*\*

《スポーク1、『カルクーン』より各機へ。今回は臨時編成につき、当機が前線航空管制を行う。緊急時には本官の指示に従われたし》

《ハルヴー1了解。こっちは多分対地攻撃につきつきりだ、指揮頼んまつせ》

先頭を飛ばすスポーク1——正確には後席の『カルクーン』ことフィンセント曹長から、令達の声が耳に届く。どこか馬が合ったらしいハルヴー1——ロベルト大尉の冗談めかした会話に、フィンセント曹長が応えるという応酬数巡。重なるそれらは、スポーク隊2番機のパウラが『うるさい』と短く一喝するまで繰り返された。

ラテイオによる今朝の先制攻撃で、ヘルメート基地の受けた被害は甚大だった。ハルヴ隊こそ全機無事だったものの、迎撃のために先行した第1小隊——サテリトウ隊は4

人中3人が戦死。出撃待機中だった第3小隊に至っては格納庫に爆弾が直撃し、その全員が戦死してしまったのだ。スポーク隊の2機が臨時に基地航空隊に加わったとはいえ、戦力が半減した以上、航空基地としての機能は著しく低下したと言っている。

フィンセント曹長の言う『臨時編成』というのも、いわばその苦衷を含めた現状を指したものである。スポーク隊の2機にハルヴ隊の4機、そしてサテリトウ隊の生き残り1機では、機数も役目も異なり偏りができてしまう。そのために、今回は指揮官機たるスポーク1を除き、2機ずつの3分隊に分けて編制するように申し合わせをしていた……というのが、その実態であった。すなわちスポーク2——パウラとサテリトウ4が第1分隊、ロベルト大尉とヴェイルさんが第2分隊、そしてエリクとクリスが第3分隊となる形である。指揮に専念できる複座機はスポーク1のF-5Fのみであり、各々の乗機や技量を考えると妥当な配置と言えるだろう。ミーティング通りに推移した場合、各機が爆撃を完了した後に、対空・対地それぞれに分かれて2機編制で行動することになる。

《スポーク1より各機。あと5分で戦闘空域に入る。火器管制を再度確認、警戒を厳にせよ》

明るい雰囲気フィンセント曹長とは打って変わって、アルヴィン少佐の峻厳な声がびしりと空気を引き締める。はるか彼方に見えるいくつもの黒煙は、国境警備隊や陸軍の戦闘の痕跡だろうか、たなびく靄のように色濃く見て取れた。ちらりと目を走らせた

時計は、既に17時と20分。戦闘開始から既に1時間以上は経過している計算になる。

先制攻撃でレクタの空軍をまず叩き、その後に支援を無くした陸軍を電撃的に攻略する。ラテイオの描く戦略はまさにそれであり、近現代的な電撃戦の模範ともいえるべき道筋を辿って構築されている。その点、いかにして制空権を確保するかが重要視される現代戦において、最初期から出遅れたレクタの不利は文字通り致命的だった。航空支援の無い機甲部隊の脆さは、過去のいくつもの戦いが証明しているのだ。

その状況が、既に1時間も経過している。事前情報によるとラテイオは戦闘攻撃機や空挺戦車まで投入しているとのことであるから、友軍は包囲の憂き目を見て苦境に立っているのだろう。いや、目の前に広がる黒煙の数からすると、もしかすると既に。

こみ上げるのは、不安、焦り、そして怒り。脚元を掬いかねないその全てに、エリクは懸命に耐えた。焦るな、焦らなくていい、焦る必要はない。焦った所で『クファイル』の脚は早まらず、そして侵攻中の敵は逃げはしない。たとえ前線を突破されようとも、それ以上侵攻させなければこちらの勝ちなのだ。

見えた。

たなびく黒煙の下、いくつもの砲火が飛び交う大地の上。そこには小高い丘陵を間に挟み、いくつもの車両が対峙しているのが見て取れた。南側はラテイオ軍、北側はレク

タ軍だろうが、レクタ軍の一部は西側の森林地帯にも対峙しており、その上を絶えず航空機が飛び交っている。戦場のあちこちには既にいくつもの車両が残骸となり、炎を上げながら横たわっていた。

《こちらレクタ第5航空師団スポーク隊。展開中のレクタ陸軍、誰か応答しろ！生きてるか、状況はどうなっている!?!》

《…やつと来たか！こちら第2機甲師団第6機甲大隊『ブラウンベール4』！もうこっちは大隊長以下半分がやられた。南と西からも包囲されている！早いとこ片付けてくれ!》

《了解した。まず敵の機甲部隊を叩く。各分隊、編制順に爆撃を実施せよ。目標、丘陵南のラテイト部隊》

《了解。スポーク2より爆撃を開始します》

親身なフィンセント曹長とは対照的に、アルヴィン少佐とパウラの機械的な応答が鼓膜を揺らす。編制順の対地攻撃を取るにあたり、取った隊形は斜め一列。パウラを先頭とし、右手側に捉えた敵部隊へ順々に降下して波状攻撃を仕掛ける戦術である。航空指揮を執るためである、スポーク1のF-5F『タイガーⅢ』は高度を上げ、1300フィート付近に位置取った。

増槽を捨て、火器管制を今一度確認する。武装選択、UGB。対地爆撃は初めてだが、



演習では何度も経験している。戦車を始めとした多彩な車両が居並ぶ様は壮観でこそあれ、やることは一緒だ、気負うことはない。

先頭のF-5E『タイガーⅢ』が機体を傾け、斜めに降下してゆく。数秒の間を開け、サテリトウ4が、ロベルト隊長が、そしてヴィルさんが続いてゆく。

降下してゆく、ヴィルさんの『クファイル』。それに続くように、エリクも機体を右へと傾け、目標へ向けて機体を降下させていった。既に爆撃を受けた敵の最左翼からは濛々と黒煙が上がり、恰好の煙幕となっている。

機体に速度が乗る。『クファイル』の三角翼が煙幕を突つ切る。時折空気を裂くように光を刻む曳光弾が、正面から、横から、機体を掠めて飛び去つてゆく。

黒煙を抜けた、その先。エリクの目に真っ先に飛び込んできたのは、殺意のようにこちらを指した4門の砲身だった。

「……対空戦車か！」

思わず、詰めたような声が吐き出される。

上から押しつぶしたような平らな砲塔、車体下部のキャタピラ、そして全面に取り付けられた4門の砲身は、ユークトバニア製の対空戦車：確かZSU-23-4と言つただろうか。チャフやフレア等で欺瞞できる地对空ミサイルとは異なり、妨害手段のない実弾による対空砲火は低空侵入時の大きな脅威となる。特に23mm機関砲4門に加え

レーダーをも備えたZSU-23-4の迎撃性能は高く、十分に注意するよう周知されただばかりであった。

——それが、真正面からエリクとクリスを狙っている。

「ちっ……クリス、正面对空戦車！俺が叩く、迷わず抜ける！」

《えっ……!?は、はい!》

逡巡は、命取りとなる。エリクは咄嗟にボタンを押し、その場でUGBを全弾投下させた。UGBが直撃すればそれでよし、外れたとしても破片と砂煙はしばらくレーダーと視界を遮ってくれる。何より、いち早くクリスへの脅威を除かねばならない以上、このまま無手で上空を通り抜ける悪手は回避しなければならない。

慣性に従い爆弾が斜めに落ちてゆく。入れ違いに、正面から23mm弾が殺到する。コクピットに響く衝撃、そして金属を穿ったような音。いくつかが装甲を貫通したのだろう、激しい炸裂音が耳朵を叩き、上空を擦過してからもこちらの背を追いかけてくる。歯を食いしばりそれらに耐えた直後、乗機の後方でいくつもの爆炎が上がり、後方警戒ミラーに何か吹き飛ばす様が見て取れた。

第3世代機の中でも比較的後期に開発された『クファイル』は搭載能力が高く、1つのハードポイントにUGB3発の搭載が可能である。すなわち、投下されたUGBは実に12発。流石に本職の攻撃機には一步譲るものの、同世代の制空戦闘機の範疇では、地

上への制圧能力は優れた機体だったと言つて良いだろう。

操縦桿を引き、敵の対空迎撃から逃れるべく機体を急上昇させる。後方眼下では、煙幕を抜けたクリスが敵部隊右翼寄りへ爆弾を投下し、装甲車やミサイル車両を撃破する様も見えた。先攻攻撃した4機は既に上空にあり、全てが健在のようである。

《各機投弾完了。予定通り、以降2セルで行動する。第2分隊は西に迂回した敵部隊を可能な限り撃破せよ。第1、第3分隊は戦域の戦闘攻撃機の排除に当たれ》

「ハルヴ2了解。敵は…あれか。今朝基地を襲つたのと同じ奴だな」

《直線翼の機体も複数混じっているみたいです。あれは…確かSu-25だったでしょうか。ちよつと自信ないですが…》

アルヴィン少佐の下命に従い、ロベルト隊長率いる第2分隊が西の森林部へと鼻先を向け、パウラの第1分隊が友軍の上空から攻撃する敵機目がけて降下してゆく。エリクも機体を傾けて徐々に高度を下げながら、敵の状態を見定めた。ざつと上空から見た限り、総数は7機。うち5機は今朝ヘルメート基地を襲つたのと同じ、葉巻型の胴体に可変翼を装備した戦闘攻撃機、Su-22M4『ファイターK』と伺い知れる。残る2機はエリクも見覚えのない、胴体真横にエンジンを装備した直線翼の機体である。クリスの言を信じるなら、対地攻撃機として名高いSu-25『フロッグフット』だというが、実物を見たのは初めてだった。『フロッグフット』を第一の脅威と見なしたのか、機動を

見る限りパウラはその一方を狙っているらしい。

『『フロッグフット』は第1分隊に任せよう。目標、2時下方の『ファイターK』。ミサイルを浪費するなよ』

『了解です……みんなの仇を、ここで……』

「応ー」

機体を傾け、見定めた敵の位置目がけて操縦桿を倒して降下してゆく。目標は、2機1組となつて機銃掃射を続けている『ファイターK』。既に対地兵装を使い切つたらしいとはいえ、機体上面を撃たれ続ければ地上部隊には脅威となるだろう。いち早く排除しなければ、戦線の瓦解にも繋がりがかねない。

目標との距離、目算で1400。友軍の自走式対空砲が絶えず砲火を上げていることもあり、敵機はこちらに気づく様子すらなくひたすらに掃射を続けている。低空の運動性では『ファイターK』に分があるとはいえ、後方警戒を怠っている今ならば『クフィール』得意の一撃離脱で片を付けられるだろう。

目標へ向けて、エンジンが唸りを上げる。降下の加速が乗った『クフィール』は瞬く間に距離を詰め、ヘッドアツプ<sup>H</sup>ディスプレイ<sup>D</sup>上の敵機にダイヤモンド<sup>D</sup>シーカー<sup>S</sup>が重なる。

電子音が告げるロックオン。漸くこちらのレーダー照射を察知したらしい『ファイターK』が身を振つて回避運動に入るが、到底逃れうる距離ではない。躊躇いなく引か

れた引き金は、そのまま煙の尾を曳くミサイルとなり、向かって右側の敵機へと吸い込まれて爆発した。

爆炎が爆ぜ、部品が飛び散り断末魔を上げる『ファイターK』。それでも、強靱さで知られた機体は、よろめきながらも今だ墜ちることを拒んでいる。

「流石に頑丈だな……。クリス、止めを頼む」

《了解、仕留めます！》

中破した敵機の脇を抜け、エリクは左側に逃れたもう1機の『ファイターK』の背を追った。既に可変翼を最大まで開き、速度を落としたり低速旋回で回避に入っている。低速時の安定性に劣る『クフィル』の欠点を見越し、横方向への機動で回避する戦術を咄嗟に取った辺り、一筋縄ではない相手のようだ。

ならば、狙いはただ一点。エリクは機体の速度を落とさず、左旋回に入る敵機の斜め後方から一気に距離を詰めた。

電子音がロックオンを告げる。距離が900を割る。近すぎず遠すぎない、AAMが『ファイターK』の機動に追従できるぎりぎりの距離。必中を期した間合いを見定め、エリクはその引き金を引いた。

だが。

全てを見越していたのか、右への急旋回へと入った『ファイターK』から放たれる真つ

赤な<sup>フレア</sup>火球。高熱を放つそれは、この上なく機を捉えたタイミングで放たれ、最後の一発となったこちらのAAMをあらぬ方向へと逸らしていった。

勝ち誇ったように、悠々と右旋回に入る『ファイターK』。おそらく目標を捉え損ねたこちらを嘲笑うかのように、そのパイロットは後方を振り返り——そして、驚愕の眼を見開いたに違いない。振り切ったと思っていた『クファイル』が、速度を緩めぬまま旋回の予測位置へと突進してきたのだから。

「そう来ると思つたよ……格闘戦で、『クファイル』の弱点を突いて来るつてな！」

照準器の中心に捉えられるは、装甲下のない唯一の急所——すなわち、『ファイターK』のкокピット。放たれた銃弾はその目標へと寸分違わず着弾し、ガラスをその中身ごと砕き散らした。

いくら『ファイター』が格闘戦能力に優れるとはいえ、至近距離からのミサイルを回避するにはフレアの使用が不可欠である。加えて、ミサイルが誘導性能を失った所で直進は続けるため、被弾を避けるためには旋回で針路を変えなければならない。左旋回に入っていた『ファイター』が採りうるのは上右下の三択だが、低空ゆえに下には逃げ場がなく、速度が下がった状態で上旋回に入れば必然的に動きは鈍る。そこで、エリクはその回避方向が右側しかないことを事前に予測し、AAM発射直後にその予測位置へと機位を向けていたのだ。爆弾を捨てAAMも使い果たし、機体が身軽になっていたのも

幸運と言えた。

墮ち行く敵機を飛び越え、エリクの目が戦場を探る。パウラらが追っていった『フロッグフット』は1機が既に墮ち、もう1機もその背を追われつつある。クリスは……といえ、機銃にまだ慣れていないのか、先の『ファイター』に対して今だに致命傷を与えられず、徒に曳光弾の筋を刻み続けていた。

先の『ファイター』2機の例を引くまでもなく、眼前に集中したパイロットは警戒が疎かになりがちになる。今のクリスもまた、まさにその中であつた。その背を別の『ファイターK』が捉え始めているのに気づく素振りもなく、緩やかなヨーを小刻みに続けていたのだから。

《この、このっ！おっかしいな、なかなか当たらない……》

「クリス、急旋回しろ！チエックシックス後方敵機!!」

《えっ!?!い、いつの間に!?!》

「牽制する、すぐ離れろ！」

ちっ。思わず零れた舌打ち一つ、エリクは横倒しにした機体を急旋回させ、クリスの背に迫る敵機の方へと機首を向けた。互いの進行方向が異なる上、速度が乗っていることもあり、ヘッドオンには到底間に合わない。下手を打って余計な機動で時間を費やせば、それだけクリスが受ける脅威も大きくなる。

それなら。

強烈なGの中、エリクは敵機の進路と直交するように旋回を調整。クリス機へ迫る敵機の鼻先を掠めるように、横合いから機銃弾をばら撒いた。

針路を塞ぐ銃撃に、『フィッターK』が直進を諦め、斜め上へと旋回に入る。急旋回で揺れる視界では命中を期すことはできなかつたが、なんとか攻撃を断念はさせ得たようだ。クリスはほうほうの体でこちらの後背に位置どり、きよろきよろと周囲を警戒している。初撃で被弾した『フィッター』は、煙を吐いて徐々に高度を落としてつつあった。

《た、助かったあ…。ごめんなさい、エリク中尉…》

「無事だったみたいだな。次十分注意すればいいさ」

《二人合わせて5点》

「……目ざとく見てるのはいいですけど、戦闘中はそれ止めてはくれませんかね准尉殿」  
いつの間にか見ていたのか、パウラの短く冷たい声が耳を打つ。反省点があったことは分かつてはいるが、これを戦闘中にやられると士気が下がるというか、端的に言えば気分が滅入るのだ。わざと敬語で、それもため息交じりで応じたエリクの言葉尻には、そんな皮肉も滲んでいた。

ともあれ、今一度見渡した戦況は徐々に好転しつつある。『フロッグフット』2機の姿は既になく、煙を吐いて落伍していく機体を除けば、『フィッターK』も残るは4機。ミ



サイルはすでに無いものの、機体性能を鑑みれば撃退は可能といい。

そんな予断を裂いたのは、戦場を俯瞰する別の声だった。

《スポーク2よりスポーク1、敵残存数4。引き続き掃討を行う》

《『カルクーン』了解、そのまま……いや、待て。……！第2、第3分隊、すぐに高度を取れ！ラテイオの増援を確認、大型機4を含む6機！南西だ！！》

「増援?!このタイミングで……?」

《南西……アレか。ひいふう……確かに6機だ。機種は、と……》

フィンセント曹長の声に、戦況を探る目が南西の空へと向かう。夕焼けに赤く染まった空は雲一つなく、影絵のように黒くなった機影を背景の赤に浮かび上がらせていた。数は確かに大型を含む6機、高度差は概ね1000以上。たなびく飛行機雲の帯が、まっすぐこちらを指している。

ロベルト大尉の『クファイル』が、担当していた森林の上空から離れ、探るように南西の空へと鼻先を向ける。機種を探っているらしいその声に、はっと息を呑む気配が伝わったのは、ほんの数秒後だった。

《……やべえな。ハルヴ1よりハルヴ全機、高度2000まで上がる！急がんと間に合わんぞ！》

《どうしました、隊長？そんなに慌てて》

《ヴィルさん、よく見てみな。ありやI—76『キャンディッド』だ。確かブリーフィングの時に言つてたよな、ラテイオ軍が空挺戦車も投入してゐるつて》

「……まさか……！」

《間違いない、奴ら空挺戦車を追加投入して、今夜中にこの一帯を制圧する積りだ。陸の連中はあの状態だ、降ろされたらひとたまりもない。——行くぞ！》

輸送機、空挺戦車。それらが意味するものを察した瞬間、エリクから——いや、おそらく一同からさつと血の気が失せた。

おそらくラテイオ軍は、電撃戦を確実なものとするため、何としてもこの地を確保する気なのだ。航空部隊は対地兵装を使い果たし、陸軍の消耗は既に限界に達している以上、新たに投入される戦車部隊に対抗できる戦力は無い。おまけに、今は夕暮れ時から夜に移る頃合いである。一度基地へ戻り爆装することには日も暮れ、爆撃は困難を極めることになるだろう。そして一たびこの地を確保されてしまえば、亀裂の入った堰のようになり、この地からラテイオ軍が続々と侵入してくるようになる。そうなればレクタは東西に分断され、消耗しながら呑み込まれてしまふに違いない。

——戦車を、地上に降ろさせる訳にはいかない。度重なる加速で酷使したエンジンに鞭打ちながら、ハルヴ隊の4機は敵の進路へひたすらに加速を重ねた。

闇色が進む、西の空。距離が近づくとつれ、増援の6機の姿が徐々に大きくなってゆ

く。中心は、ダイヤモンド隊形に組んだ、後退翼に4発のジェットエンジンを備えた輸送機。その両脇を固める2つの小さな機影は、葉巻型に切り欠きデルタ翼を備えた制空戦闘機、MiG-21『フィツシユベツド』系列と見定められた。敵も既にこちらを認めたらしく、2機の『フィツシユベツド』が機体を傾け、こちらへと迂回しながら降りし始めている。

《この針路じゃ間に合わん……！エリク！クリスを連れて、正面から一撃かけて隊列を乱せ！俺とヴィルさんはその間に迂回して後ろからかかる！》

「……分かりました、やってみます！」

《間に合うかどうかはお前らにかかっている、頼んだぞ！くれぐれも護衛機に気を付けてな！》

いつもながら、隊長の判断は速い。進路を変えず敵編隊の斜め下から接近するロベルト隊長らと別れ、エリクは敵機の進行方向へと進路を変更。加速を一気につけ、敵編隊の正面へ躍り出られるよう、その予測進路上へと機首を向け直した。

エンジンの回転数が高まり、機体が空へと奔ってゆく。

目標高度、2000。高度計がその値を指すのと同時に、エリクは操縦桿を思い切り引き、『クファイル』の機体を宙返りさせた。敵機、既に真正面同高度。距離、800。インメルマンターンを企図していたが、この距離では機体をロールさせる時間もない。

やって、やる。視界一杯に広がった、逆さまとなったI1-76の巨体。急軌道でぶれる視界の中、エリクは懸命に照準器を覗き込み続けた。狙いは、一点。機体正面の最も脆い場所、コクピット――。

「このまま行く！腹括れ!!」

《う、ぐ、うううううっ―!!》

凄まじいGと背面飛行の不快感に歯を食いしばっているのだろう、クリスの通信はもはや言葉になっていない。

冷や汗が滲む。身が冷える。それでも目は、頭は冴えている。照準器の真ん中で、敵のパイロットが目を見開く。距離――400。

引き金を引くと同時に、耳元を過ぎ去ってゆく凄まじい轟音。命中を確認する余裕もなく、エリクはすぐさま機体をロールさせ、前方に迫っていた2機目のI1-76を回避した。

《ナイスだエリク、クリス！そのまま反転して護衛機に備えてくれ！ヴィルさんは左の奴を頼む！》

《ハルヴ3了解。隊長、後方機銃に気を付けて》

《…やった！やりましたよ中尉！》

「ギリギリな……！まだ敵が残ってる、すぐに反転するぞ！」

左右に分かれたロベルト大尉たちと馳せ違い、息を吐き出したエリクがやつこのことで後方を振り返る。I—76の3機は、依然健在。そのやや下方で、先程先頭にいた1機がぐらりと揺らぎ、きりもみを描きながら墜ちていく様子がエリクの目にも捉えられた。おそらくコクピット以外は無事だろうが、あの機動ならば空挺戦車を降下させることは叶わないだろう。

残るは、3機。

十分に加速が乗った今の状態ならば、横方向への旋回よりも縦方向へのインメルマンターンの方が素早く方向転換ができる。宙返りに宙返りを重ねて頭痛を覚え始めた体を抑え、エリクは操縦桿を引き上げて機体を反転。機動にみしりと軋んだコクピットの外で、暗さを増した空が再び逆さまになった。

敵輸送機との距離は、先より離れて概ね1500。ロベルト大尉とヴィルさんはそれぞれ『キャンディッド』の後方に就いているが、機銃のみの攻撃で有効な打撃が与えられずにいる。手をこまねく二人をよそに、大きく迂回してきた2機の『フィッシュベッド』が、二人の背を捉えようと横方向への旋回に入り始めていた。

「ロベルト大尉、後方に敵護衛機！」

《分かっている！今回避行動に入ったらコイツに逃げられる。後ろ頼む！》

「ですよね……！クリス、大尉の方を頼む！俺はヴィルさんを支援する！」

《はいっ！今度こそ、当ててみせる……！》

圧倒的に速度差がある輸送機相手では、戦闘機は必然的に速度を落とさざるを得ない。スロットルを絞ってI—76の背を撃ち続ける二人の速度は相応に低下しており、旋回を終えつつあるMiG—21は瞬く間にその背を詰めつつあった。インメルマントンで高度を稼いだこともあり、『クファイル』の加速は十分に乘っている。その一方で、『フィッシュベッド』もまた加速性能では引けを取らない。このままAAMの射程に到達されれば、ウイルスさんは――。

エリクは歯を食いしばりながら、その絶望的な距離をひたすら詰めた。距離、1300、1200、1100。速度差が小さいこともあり、MiG—21との距離は容易に縮まらない。考えろ。何か手は無いか。敵を撃墜できなくとも、敵の攻撃を断念させる手段は。そう、敵の――。

極限まで集中した頭は、時として普段思いもよらない閃きをもたらす。咄嗟に脳裏に浮かんだそのアイデアを、エリクは反射的に口にした。

「ウイルスさん、加速して輸送機の前方に！」

《エリク中尉?!…いや、なるほど。分かりました!》

それは以心伝心というべきか、それとも戦場の緊迫がもたらした本能的な共感とでも言うべきか。ウイルスさんの『クファイル』は銃撃を中断するとともに一気に加速をかけ、目

標としていた輸送機の前方へと遷移。結果的に『クファイル』の機体は大柄な輸送機に隠れ、後方の死角を一時的に『敵輸送機で』封じる形となった。輸送機に前部機銃は無く、そして間に輸送機を挟めば『フィッシュベッド』はヴィルさんを攻撃できない。苦し紛れの突拍子もない発想が、今はぴたりとはまったと言つていい。

予想外の行動を前に、『フィッシュベッド』に一瞬の虚が生まれる。その間にエリクは距離を詰め、その背へと機銃を発射。咄嗟の急旋回で回避こそされたものの、掠めた機銃弾の数発がその方向舵を抉り飛ばすのを、エリクは確かに目に捉えた。ヴィルさんが攻撃を加えていたイー-76は、既にエンジンに被弾したらしく高度を下げ始めている。右翼側を省みれば、ロベルト大尉が追撃していた輸送機も炎を噴き、速度を落とすて落伍しつつある所だった。

《エリク中尉、いいアイデアでした。肝を冷やしましたよ!》

「へへっ、どーも!」

《ヴィルさん、安心するにはまだ早いぜ。あと1機だ、全員でかかるぞ!》

残るは、輸送機1機。しかし左右の2機に時間を取られ、すでにそれは投下位置——すなわち友軍北側へと到達しつつある。数は減ったとはいえ、南と西に加え北からも包围を受ければ、陸軍部隊はもう耐えきることはいえない。

だが、まだ追いつける。機銃のみの武装とはいえ、先のヴィルさんのようにエンジン

を全て潰せば撃墜は不可能ではない。先攻するロベルト大尉とヴィルさんに続き、エリクは再びクリスと編隊を組んで逃げるIー76を追尾した。

ロベルト大尉、ヴィルさん、同時に機銃掃射。過たず左右のエンジン部へと機銃弾が叩き込まれ、それらが炎に包まれる。

敵護衛機、横合いから急襲。大きく機首を下げて回避した大尉が、速度を速めて輸送機の前方へと抜けてゆく。

残り、エンジン2か所。寸胴なエンジンユニットが照準器の中央に捉えられる。被弾し、高度を落としてなお、敵の輸送機は逃げる素振りすら見せない。

距離、600。あと一步――。

《……っ!!中尉、後ろっ!!》

「…なっ!？」

引き金に指をかけたその瞬間、エリクの『クファイル』を衝撃が包んだ。

破裂音、金属の割れる音、鳴り響くアラーム。咄嗟に操縦桿を左へと倒した瞬間、こちらを追い抜いて前へと出たのはMiG-21ではなく、煙を噴いた葉巻型の可変翼機

――『フィッターK』の姿だった。

《『フィッター』…!?!…まさか、さっきの!?!》

「なんて執念だ、こいつ…!？」



馬鹿な。喉まで出かけたその言葉を、エリックは飲み込んだ。

至る所に銃創を刻まれたその姿は、まさしく先程クリスが撃ち漏らした『フィッターK』に間違いない。機体が中破したにも関わらず、おそらくは輸送機の危機を察して戦域へと駆けつけたのだらう。傷ついた可変翼を一杯に広げ、今なおこちらの背を取ろうと旋回を続ける様からは、仲間を何としても守るという執念すら感じられる。

至近距離で機体が馳せ違い、背を取らんと互いの軌跡が交差する。螺旋を描くように旋回し機体が傾いたその瞬間、『フィッター』のパイロットと目が合った——ような、気がした。

パイロットとしての意地と矜持を見せ、無惨に傷つきながらも仲間を護らんとする戦闘機。敵でありながら共感を覚えたその姿に、エリックは束の間サテリトウ3の姿を重ねていた。

そう、その後方から殺到した機銃弾が『フィッターK』の機体を切り裂いた、その瞬間まで。

《ハルヴ4、1キル！やりました、中尉！輸送機を追いましょー！》

「あ……。……。ああ、そうだな。ハルヴ2、追撃を続ける！……。せめて、俺も自分の仕事は成し遂げないとな」

《……？》

焰に包まれた機体が、薄暗くなつた空の中で四散五裂して果ててゆく。細かな破片へと別れ、流星のように炎の尾を曳いて墜ちてゆく無数の残骸。燃え尽きてゆく悲壮なその輝きが、なぜかエリクの目には一際鮮やかに焼き付いていた。

空に残る目標は、I-176ただ1機。もはや護る者がいなくなったその機体へと、ややもすれば乱れそうな心のまま、エリクは静かに照準を向けた。狙いはその心臓部、機体両側に残つたエンジン。残り僅かな残弾を全て絞り出しながら、エリクの『クフィール』はその心臓へと弾痕を刻んでいた。

揚力を失つた巨体が、がくと揺れて高度を落としてゆく。もはやその翼を空へと押し上げる術は無く、ただ墜落を従容として待つ他ない。いくつもの命を抱えたその巨体の上を通過しようとしたその時、エリクはふと、I-176の後部ハッチが開放されたことに気づいた。

《ちゆ、中尉、あれ……!》

「……まさか、あいつら……!? 本気か!？」

まさか。その疑念は、機体後部から箱型の姿が覗くのを捉えて確信に代わつた。間違いない、あの輸送機に積まれた空挺戦車は、辛うじて水平を保つ機体から降下しようとしている。地上に降りた所で、他の空挺戦車もなく孤立することも——否、空中で狙い撃たれる可能性すら高いことをも承知の上で、ただ一心にその任を果たそうとしている

のだ。

無謀。そう一笑に付すには、その姿は余りにも壮烈過ぎた。

《エリク、後は何とかなる。念のため周囲の警戒を頼む》

1つ、2つ、3つ。燃えたつ機体の胎内から、白い落下傘が合わせて3つ、地面へ向けて吐き出される。

戦闘機と比べればあまりにも遅い降下速度。その落下傘がロベルト大尉の『クフィール』に撃ち抜かれ、白い葬煙となって墜ちてゆく光景は、言ってしまえば当然の帰結である。それでもエリクは、その心に何か疼くものを感じずにはいらなかった。

《スポーク1より各機へ、敵残存部隊撤退中。周囲に新たな増援なし。敵機甲部隊の撤退を確認したのち、我々も離脱する。ブラウンベール4、無事か》

《こちらブラウンベール8、ブラウンベール4は集中砲火を浴びて撃破された。スポーク1、ブラウンベール4に代わって救援に感謝する。ありがとう》

《……………了解した》

地上に咲いた無数の炎に照らされて、幾つもの塊が南を指して蠢いている。航空支援を失い制圧は不可能と判断したラティオ機甲部隊だろう、西からも合流した数多の影は、縦列となってラティオの地へと向かい始めていた。

意地と矜持に死んでいった、敵味方の炎の墓標。日が暮れた夕闇の大地の上で、炎は

生者を静かに照らしていた。

## 第5話 境界を越えて

雲一つなく晴れ渡った空が、遠く南の彼方まで続いている。

9月30日、秋の最中の朝空は、遮る者一つなく抜けるように高い。愛機『クファイルC7』の照準器に反射した日の光を受け、中に納まる青年——エリクは、思わず心地よい溜息をついた。

「いい天気だ……。清々しいな」

爽快な気分である。言葉に表すならば、最もしつくりくるのはその表現だけだ。う。

澄み渡った朝の青空は、人の心を洗ってくれる。朝目覚めてカーテンを開けた時に、快晴の空を見上げた時の特有の爽やかな感覚は、おそらく誰しもが経験のあることではないだろうか。ましてそれが、今のように過ごしやすく穏やかな春や秋ならばなおの事である。

だが、エリクの心に湧き起こる爽快な感覚は、青空によるものだけと言っては真を損ねるだろう。何せ空を飛ぶ航空機パイロットともなれば青空は見慣れたものであるし、穏やかとは言え今は隣国との戦争の最中なのである。ただ単に朝の快晴だけで気分を

よくするなど、軍人らしからぬ無邪気さ、ないし能天気さと言わねばならない。

《ウィットウベールより各車へ、これよりラティオ国境を突破する。警戒を厳にせよ》  
《スポークより各機、敵迎撃機に注意せよ。これより敵領だ》

その爽快さの根源を物語るもの——空と地に無数に動く鉄くろがねの群れから、沈着な男の聲が響く。これまでは国境を超えられる側だったものが、こうして国境を超える側になった。この戦争で初めての局面であるだけに慎重にならざるを得ないのだろう、指揮官の声を待つまでもなく、警戒と素敵は事前に過剰なまでに念を押されたことだった。

そう、エリクが、そしておそらく皆が共通に持つ、言い知れない爽快感。それは、これまで防戦を強いられてきたラティオが、今初めて反撃に転じられたことによるものだった。

27日の開戦以来、レクタは継続的にラティオからの攻勢を受けて来た。エリクの所属するヘルメート基地周辺で見ても、開戦直後の空襲に加え当日中の国境防衛、そしてたびたび領空に侵入するラティオ機への警戒と、神経をすり減らすような守りの手ばかりを取らされてきたのである。

ところが、昨日——すなわち8月29日に、形勢は大きく動いた。レクタの同盟国であるウステイオ方面へ侵攻していたラティオ軍が、ウステイオ軍による集中反撃に遭い、大損害を受けて潰走したのである。15年前の戦争で首都を含むほぼ全土を制圧さ

れながら領土回復を成し遂げた経歴と、量より質を重視した伝統の軍制。ウステイオの逆境への強さを示すそれらの要素に加え、かつての『鬼神』を思わせる精鋭部隊の集中投入により戦況を打破したウステイオ軍は、追撃の勢いのままに国境を突破し、ラティオ西部より侵攻を開始するに至った。

戦場は別でこそあれ、相手取る国が同じラティオである以上、状況は糸のように繋がっている。ウステイオ方面軍の壊滅に合わせてレクタ方面に展開していたラティオ軍の攻勢も一気に弱まり、その体制は明らかに攻めから守りへと移った。一局面の大勝が、戦局をも左右したのである。

もつとも、ウステイオ軍はラティオの西端と接しているため、ラティオ西部からレクタ国境方面へ至るには時を要する。その支援として、ラティオ内部に楔を打ち込むというのが今回の『プレリユード』作戦の肝であった。『序曲』の名の通りこれ自体が戦況を左右するものではないが、成功すれば以降の部隊展開を容易にしうる上、ウステイオ方面への援軍も防ぐことにも繋がる。対ラティオへの攻勢を維持する上で、この作戦は地味ながら重要なものでもあった。

《こんだけの部隊が集まると、流石に壯観だな》

ちらりと下を眺めたのだろう、機体を僅かに傾けたロベルト隊長が、通信越しに声を紡ぐ。空に、地に満ちる味方の軍勢。釣られるように改めて眺めたその様は、確かに壮

観な光景だった。

空には、前線指揮を執るスポーク隊の『タイガーⅢ』が2機とエリクからハルヴ隊の『クフィルC7』4機が上空掩護に当たり、対地攻撃を担う爆装したA-4N『スカイホーク』8機とAH-64D『アパッチ・ロングボウ』2機が低高度に付随している。地上はといえば、戦車8両に加え対空戦車2両、そしてそれに付随する装甲車や兵員輸送車、橋頭保となる陣地構築のための工兵隊が続ぎ、緑の平原に軌道の跡を刻みながら進軍を続けていた。空から降り注ぐ光を受けて、それらは甲虫のように背を輝かせながら地を這っている。

耐え忍んだ雪辱の機会は、必ずものにして見せる。レクタ上層部の言葉なき意志が、南部全域から戦力をかき集めたようなその布陣に見て取れるようだった。

《お：。『カルクーン』より各部隊へ。方位180、40kmに複数の車両が布陣中。方位095と205からも機影が接近中、いずれも反応は小型、095の方は5機、205の方は4機。しっかり玄関でお出迎えしてくれてるぜ》

《機種は？》

《スポーク2、すまん、そこまでは分からん。ただ、大した速度じゃない。先にこちらが敵機甲部隊に到達するはずだ。他には周辺に敵影なし》

スポーク1の後席、『カルクーン』ことフィンセント曹長の通信に耳を傾け、状況を整



理する。

敵陸軍の布陣は真南、すなわち現在の進行方向上。迫る機影は迎撃機だろうが、方向はてんでばらばら、数も多くなく、その上速度も到底こちらの攻撃に間に合うものではない。大方攻勢の情報を得ておっとり刀で出撃してきたので、部隊間の連携が取れていないのだろう。距離が遠いのならこちらの攻撃機への危険も少なく、こちらから迎撃に向かえば各個撃破できるに違いない。

攻撃側の高揚、そしてこちらの戦力の利を活かせる位置取り。エリクは思いの至るまま、意見具申の形でそれを口に出した。

「ハルヴ2よりスポーク1。敵迎撃機は連携が取れておらず、少数です。こちらから向かい、先行して排除すべきでは？」

《0点》

「……んな……」

咄嗟の思い付きは、しかしいつも通りと言うべきか、スポーク2——パウラの冷たい声でかき消された。前回と言いこれといい、彼女はこちらの案や行動を肯定することはまずない。加えて、エリクは際立って低得点にされている感すらある。

階級も年も下の相手の、にべもない否定の言葉。流星に癪に触れたその態度に抗弁しかけた刹那、別の声がそこに被さった。

「何でだよ、今なら敵はバラバラなんだからこっちが有利に……!」

《待て、エリク。俺も同感だ。》

「……隊長!」

《言葉で表せないが、俺の勘だと何かある気がする。考えても見ろ、連中がウステイオに負けて防戦に入ってから丸一日は経ってるんだ。陸軍を無防備に置いて、しかも今更に撃機をチンタラ向かわせるか? 奴らだってそこまで間抜けじゃない》

《ハルヴー、いい読みだ。ならばその真意はどう読む?》

《スポークー、あくまで俺の勘ですがね。例えば囀の迎撃機でこっちの戦闘機を引き離したら、攻撃機と戦車は無防備だ。何かしら対空兵器やへりを隠してて、こっちが近づいた瞬間に一網打尽……なんてのはどうです?》

《……》

スポークー——アルヴィン少佐の感嘆と、ロベルト隊長の読み。数秒の沈黙の間に、エリクも熱くなりかけた頭を今一度落ち着かせた。言われてみれば、確かにラテイオの布陣は隙があり過ぎる。ロベルト大尉の言う通り、防戦体制に入っているのなら、数日前までのエリクらのように常時哨戒機を配置しなければならぬ上、スクランブル体制だつて整っている筈である。それを明らかに遅れたタイミングで、慌てたように派遣するのは道理に合わない。何かしらの罠があるのか、それとも単にラテイオの防空体制

が追い付いていないだけなのか。

いずれにせよ、決断は指揮官のものである。自然と目を『タイガーⅢ』へと注ぎながら、エリクは沈黙の数瞬が破られるのを待った。

《スポーク隊、ハルヴ隊、敵陣地へ先行し機銃掃射で露払いを行う。ネプテユヌス隊はそれに続き攻撃を実施せよ。攻撃各機増速、敵迎撃機到達前に初撃を終える》

《なるほど、身を以て向うの出方を確かめる訳ですな。りよーかい、お供しましょう》

心なしか、笑っているように感じられた隊長の声。その残響を振り切つて、『タイガーⅢ』を先頭とした6機が増槽を捨てながら、高度1000前後の低空にまで徐々に降下を開始した。

一面に広がる緑の絨毯、所々盛り上がる丘。地上のそこかしこには針葉樹の林が群がり、地上の視認を困難にもさせている。眼下を流れる緑の海は徐々に速く、速く、まるで吸い込まれそうな程に近づいてくるような錯覚すら感じさせた。

流石に音速機ともなれば、低空侵入でもその速度は速い。友軍に先行して数分ほど後には、緑の海に浮かぶ小島のような、ラテイオ軍の陣地が見て取れるようになった。ほぼ円形になるよう柵と土嚢で急造陣地を組み、中には戦車や対空車輛、地対空ミサイルの姿も見える。歩兵陣地はその左右両翼、それぞれ林を背負った位置。逆に陣地前面には樹木はほぼなく、陣地の全容は容易に見て取ることができた。射界を妨げるものが少

なく、ラティオ側にとってみればSAMによる迎撃が容易な半面、攻撃側のこちらにとつては陣地急所への打撃も与えやすくなる。いわば、迎撃に特化した陣地構成に見受けられた。

《あくまで様子見だ、加速して一気に抜けるぞ。変に狙おうとしなくていい》

「了解。対空戦車相手はこの前で懲りましたしね」

《そういう訳だ、餅は餅屋。…さて、行くか！》

ミサイルアラートが鳴り響く。対空砲が銃線を刻む。陣地への距離を詰めるごとに苛烈さを増す殺意の雨を、2機の『タイガーⅢ』と4機の『クファイル』がぐり抜けてゆく。

選択は30mm機関砲。低い初速から対空戦には使いづらいものの、殊対地攻撃に関してはその威力は非常に頼もしい。引き金に指をかけながら、ガンレティクルの中で瞬間に流れていく目標へと、エリクはその眼を見定めた。

スポーク1、スポーク2、掃射を終えて左右に散開。焰を上げる燃料タンクを避けたハルヴ1が、30mmを対空戦車へと叩き込んでゆく。

目標、中破。履帯を切られ動きを鈍らせたそれへ、エリクは機首を向けて引き金を引いた。

機銃が唸る。

正面の敵が断末魔の砲火を上げる。

すれ違い、一瞬。

腹に風穴の空いた敵兵。

直後に上がる炎。

目が合ったそれらを切り抜け、エリクは目の奥の残滓を振り切って、陣地後背の林を抜けた。

瞬間、だった。

「…っ!?何っ!?」

衝突警報。

突如鳴り響いたアラームに、エリクは正面へ向けた目を思わず見開いた。真正面、何もいないはずの林の影から、突然機影が姿を見せたのである。

距離、僅かに300。もはや思考を働かせる間もなく、エリクは反射的に操縦桿を引いて乗機を急上昇させた。

空を切る音が遠ざかる。アラームが消え、宙返りのコクピットで視界が逆転する。

いきなり、一体何なのか。反転した天地の中でエリクは地上を見上げ、そこに驚くべきものを捉えた。

「…林の影に…敵機!?!」

《く……まさかあの場所に潜んでいたとは……!》

同じ光景を捉えたのだろう、ヴィルさんが驚きの声を上げる。

死角となっていた、敵陣地後方の林の影。ハルヴ隊が通過するのと時を同じくして、隠れ蓑をかなぐり捨てるように、そこからいくつも機影がゆつくりと上昇を開始していたのだ。上空から見た限りでは、AV-8『ハリアー』シリーズに似た小柄の機体6機と、キャノピーが段になった複座のヘリコプター2機。おそらく予想外のこちらの攻撃に慌てて離陸したのだろう、高度確保を優先しているためにその速度は極めて遅い。

《Mi-35P『ハインドフ』にYaK-38『フオージャー』…なるほどな。こっちの護衛機を引き剥がしてから、隠してた垂直離着陸機で攻撃部隊を料理する腹だったか。手札さえ見えればこっちのもんだ》

《スポーク2、ハルヴ隊、離陸した敵機を優先的に攻撃せよ。ネプテユヌス隊は続けて攻撃に当たれ》

「本当にいたなんて……。……ハルヴ2、了解!」

その瞬間抱いた感覚を、どう表現すればいいのだろう。畏れ、羨望。分解してみれば多々あるが、一言で言えば最も近いのは『驚愕』だろうか。

敵迎撃機の出方に注力していたエリクに対し、パウラはそれを『0点』と一蹴し、ロベルト隊長は状況を読んで、敵の作戦を正確に言い当てて見せた。それも、事前情報も

機体の走査能力も、同じ条件下にあったにも関わらずにである。自分には見えていない何かが、ロベルト隊長やパウラには見えていたのか。自分に今足りないものは、一体何なのか。

——いや、迷うな。今はただ戦えばいい。生還さえすれば、時間は腐るほどある。その時に、改めて考えればいいだけのことだ。

そう、生還さえすれば。

渦巻く思考の釜に蓋をし、エリクは操縦桿を引いて、機体を宙返りから直下への下降へと移行させた。目標、高度を上げつつあるY a K—38。垂直方向に推力を割いているため、その水平方向への機動はまるで歩くように遅い。

ほとんど静止目標と化したそのコクピットへ、エリクは照準器を定めた。

林を掠めるのも構わず、『フォージャー』が徐々に前進し始める。

パイロットがこちらを見上げる。

絶望に満ちたその目が合う。

引き金。

一瞬赤く染まったそのコクピットは、続いて降り注いだ次弾で跡形もなく砕け、爆散。エリクは『クファイル』を水平に立て直し、地に炎をまき散らす残骸の上空を駆け抜けていった。

周囲を見渡すと、他のハルヴ隊メンバーの攻撃によるものだろう、既に他にも『フォージャー』3機が墜ちている。残る2機は懸命に速度を上げ、攻撃体勢に入りつつあるネプテユヌス隊の『スカイホーク』迎撃に向かいつつあった。純粋な戦闘能力や積載能力は通常の制空機に劣るとはいえ、『フォージャー』は曲がりなりにも対空戦能力を有する。正面から迎撃に遭えば、いかに頑丈な『スカイホーク』といえども被害は免れないだろう。

《あつ……隊長、2機抜けました！『スカイホーク』の方に向かってます！》

《おう。エリック、クリス、その2機を頼めるか？俺とヴィルさんは『お客さん』の相手をしなきゃならんようだ》

《あれは……接近していた敵の迎撃機ですね。了解、ハルヴ！》

「こつちも了解。任せて下さい。クリス、右の奴を頼めるか？」

《はい！》

『お客さん』——ロベルト大尉の言葉に空を見上げ、エリックもその意味に気づいた。

高度、概ね2500。戦域の上空に見える4つの飛行機雲が西からまっすぐ伸びているのが、エリックの目にも映った。おそらく『カルクーン』の情報にあった、方位205から接近していた4機の迎撃機。その機影は徐々に高度を下げ、こちらを指しつつあるようにも見える。



『フォージャー』を始末し終えていない以上、こちらは両方に戦力を二分しなければならぬ。機首をもたげるロベルト大尉らの『クファイル』を潜り抜けるように、エリクとクリスの『クファイル』は加速しながら『フォージャー』の背を追った。

垂直離着陸機の『フォージャー』に対し、『クファイル』は加速に優れるデルタ翼機であり、もとより加速能力には雲泥の差がある。その尻尾は瞬く間に『クファイル』の間合いへと引き込まれ、蛇行する背を目前に晒し：その迷彩色の背に、ヘッドアップディスプレイのダイヤモンドシーカーが重なった。

当然ながら、敵もまた防衛兵装を持つているであろうことは過去の経験からも推察される。過去の戦闘から予測を立て、エリクは捉えたその背へAAMを1発放ち、間を置いてもう1発のボタンに指をかけた。

『フォージャー』の背を白煙が追う。

ミサイルの軌跡が、不意に揺らぐ。

『フォージャー』の背が光る。防衛兵装——フレア。

放たれた高熱の塊が、ミサイルを誘いその誘導を狂わせてゆく。

敵機、急減速。こちらのオーバーシュートを誘う、絶妙のタイミング。

その、一瞬。エリクは指に力を込めた。

オーバーシュートを競う至近距離ならば、ミサイルの飛来は1秒と経たない。速度を

落としていた『フォージャー』はフレアを散布する余裕もなく、放たれた第二射に尾部を砕かれ墜ちていった。僅かに残った飛行能力を、傍らを擦過した『クフィル』の余波で奪われながら。

敵機、１キル。旋回がてらに右翼側を見渡せば、クリスはまだ『フォージャー』を撃墜できないでいるようだった。中距離射撃が苦手らしいことに加え、ミサイルを放つタイミングも完璧に読まれているらしく、加減速とフレアでいいように翻弄されている。

《中尉、エリク中尉いゝ！当たり前せん、助けて下さいー！》  
「お前な…。待つてろ、そいつを逃がすなよ！」

まるで蝶を捕まえられず闇雲に虫取り網を振り回す子供のように、涙声で泣き言を漏らすクリス。呆れ半分、先輩風半分の溜息一つ、エリクは機体を右へロールさせ、操縦桿を引いて横方向への旋回に入った。幸いにもクリスの追撃で、敵の進路は『スカイホーク』隊から離れつつある。その意識もクリス機に奪われている以上、横方向からの一撃離脱を狙うのが最も効果的だろう。

敵の予測進路上へ鼻先を向ける。傾いた主翼が林を掠める。距離、８００。もう少し。

——だが。狙いを定めたその敵機は、横合いから別の射線に貫かれて揚力を失い下降。照準器の中で四部五裂し、樹木に躓いて地に転がった。

横合いからの、狙いすましたかのようなタイミング。まさか。

不意に兆した嫌な予感。案の定と言うべきか、その黒煙を割いて上空を通過したのはパウラの『タイガーⅢ』だった。

《遅い》

《な……何なんですかもう！私が追って、先輩が隙を狙って追い込んでたのにその言い草！》

《私語でマイナス5点》

《……ぬぬぬ……せ、先輩も何か言って下さい！》

「まあ、おいおい慣れるだろ。ハルヴ2よりスポーク1、低空域の敵機排除完了。指示を請う」

慣れとは恐ろしいものである。先のように状況によって腹を立てこそすれ、パウラと初の邂逅から約1か月を経れば当初より耐性もできるものらしい。いつの間にか合間合間の暴言にさして腹を立てていない自分に、エリク本人も幾分驚く思いであった。……もつとも、多分に悲しい環境適応の姿ではあったが。

ともあれ、戦況は順調に推移している。

ロベルト大尉の看破のお蔭もあり、ラテイオ軍の秘策だったY a K—38は全機が撃

墜。Mi-35Pもパウラの手で先んじて撃墜されていたらしく、その姿は既に空に見当たらない。敵陣地へは8機の『スカイホーク』が襲い掛かって打撃を与えている最中であり、既にその戦力は半減。上空を見上げれば、まだ撃墜の炎こそ見えないものの、隊長たちは敵の4機と互角に渡り合っているようだった。アルヴィン少佐のF-5Fも敵機を牽制しつつ状況を俯瞰しており、隙は皆無と言って良い。肉眼にも電子の眼にも映る機影は上空の敵機を除いて他に無く、どこから見ても敵の脅威は確実に潰えつつあるように思えた。

だが、現実とは時として人の想像を超える。

エリクは、そして今この場にいる全てのレクタ軍人は、おそらく失念していた。この地を巻き込んだ15年前の戦争で、人の想像を『超えた』超兵器が確かに存在していたことを。そして、それらは今なお世界の各地の存在し、脅威となっていることを。

《こちら『カルクーン』。ハルヴ2、早急な対応感謝する。周辺空域に他の脅威なし、増援の5機も視界外でウロウロしてるだけだ。上空の戦域に加勢し、残る4機を撃退してくれ。スポーク2、お前も加勢を頼む》

「ハルヴ2了解。ハルヴ4とともに上空へ移行する」

《スポーク2了解。ただちに…》

パウラの通信を背に受けながら、機首を上げかけたその刹那。まるで近くに落雷した

かのように空が光り、エリクの視界が一瞬白に塗りつぶされた。

何だ、これは。

落雷ではない。空は依然快晴のまま、雷雲など影一つない。湖や機体そのものへの太陽光の反射でも無論ない。

光の瞬間、脳裏に挟まった違和感。

それは一瞬後、空を引き裂く轟音と、機体を殴りつける凄まじい暴風に掻き消された。

「う、あ、あああつ!?何だ、何が…!?」

《きゃあああああ!!》

《な…何だあ!?今空が光ったぞ!?》

悲鳴、そして混乱。もはや誰の声かすら聞き取れない暴風の中、エリクは木の葉のように舞う機体を辛うじて立て直した。

まるで台風の中にあるような、空気の塊を叩きつけられたような凄まじい衝撃。だが幸いにして機体に損傷は見られず、手早くチェックした限りエンジン出力、通信、いずれも異常は見られなかった。キャノピーや主脚等の破損、兵装類の異常といった致命傷も危うく免れている。

だが、一体何だというのか。

計器類に向けた目を上げて、キャノピー越しに見下ろした先。そこには、目を疑う光

景が広がっていた。

地表に刻まれた、焦げたような黒い円。辺縁の草木は焼け焦げ、その周囲に原型を失った鉄屑がいくつも炎を上げて転がっている。そして、先程までその空域を飛んでいた筈のネプテユヌス隊のうち、4機の姿が見えない。

文字通り一瞬の光芒、灼けた大地、そしてロストした機数と一致する残骸の数。

まさか、そんな馬鹿な。

《ね…ネプテユヌス2、3、4が撃墜…くそつ、ネプテユヌス8もだ！何だ、何が起こったんだ!》

《さ、散開、散開だ！陸軍、あんたらも林の影に隠れる!》

《こちらウィットウベール1。直掩の空軍機へ、いったい何が起こった。状況知らせ》

《分からん！空が光ったと思ったら、一瞬で『スカイホーク』4機がスクラップになった！何なんだありや、聞いてないぞ!》

勝利の色濃い空と地が、再び恐慌と悲鳴に塗りつぶされてゆく。攻撃を中断し個々に散開する『スカイホーク』。進行を止め、空を見回す陸軍部隊。混乱と恐怖は一瞬で人々から統制を奪い、戦場を混沌へと変えてしまったかのようにだった。

そして。その恐怖すら嘲笑うかのように天から注いだ第二射は、今度は継続的に照射されていた為だろう、エリクの目にも明瞭に軌跡が捉えられた。まるで何かの冗談のよ

うに、恐ろしくはつきりと。

「これは…レーザー!?!…馬鹿な、こんなものが!」

《何だこれは…!逃げろ、各車丘に退避しろ!急げ!》

《…『エクスキャリバー』…!?!》

最後に上げた声は、隊長のものだったのだろうか。それすら判然としないまま、エリクは噴き出た汗を拭う間もなく機体を翻えさせた。

危うい所で、光が翼を掠めて過ぎる。光は縦横に地を奔り、草木を裂き、人を焼いてゆく。先ほどと違い、装甲の厚い戦車などは外装が焼けるのみに留まっているもの、それとていつまでも照射を受ければ耐えられるものではないだろう。事実それを証明するかのように、光線の交点に位置した不運な装甲車が一台、先の『スカイホーク』同様に融けて灼ける様が目に映えた。

《なんとという有様だ…!スポーク1より空軍各機、無事か》

《ネプテュヌス1、残存各機は健在。ヘリ部隊2機も無事です》

《ハルヴ1異常なし。ハルヴ隊大丈夫か、死んだ奴は返事しろ…。よし、ハルヴ隊損失なし》

「そんな適当な生存確認ありますか…。とはいえ何とか無事、に…」

流石に隊長の言は各機の無事を確かめた上での冗談だろうが、ともかく通信から判断

する限り、敵の第二射は機甲部隊を狙ったものだったらしい。航空機への損害こそ無かったものの、地上の有様は目を覆いたいほどの光景だった。黒焦げになった肉体、半ばから融けた車両。もちろんと燃え始める草と、衝撃で振じ曲がった幹。被害を受けたその全てが、原型を留めていない。

左から右へ、被害を確かめるべく視界を巡らせたエリクの目に、空に漂う黒煙が映つたのはその時だった。後方のクリスは無事、他の機体も健在。地上から立ち上る黒煙とも、方向が違う。ならば。

その主を眼で追った先。そこにあつたのは、右尾翼と主翼の一部を切り裂かれたパウラの『タイガーⅢ』の姿だった。

「…な…スポーク2、大丈夫か!? ハルヴ2よりスポーク1、スポーク2が機体損傷! 尾翼と主翼の一部が欠落しています!」

《なんだと…!? スポーク1よりスポーク2、ただちに基地へ引き返せ》

《スポーク2より1、まだ飛行は可能です。…少佐、お願いします。私は一緒に…》

尾翼どころか、揚力の源たる主翼の一部まで失った痛々しい姿。それでもなおパウラの技術が成せる技なのか、『タイガーⅢ』は辛うじてバランスを保ち、よろめきながらも飛行を維持していた。

もつとも、それもいつまで持つか分かったものではない。緻密な計算で構成される航



空機は、ひとたびバランスを崩せば容易に墜落しうるのである。F-15『イーグル』などは片翼を失ってなお生還した伝説を持つ名機だが、それは高出力のエンジンと優れた機体構造が成し得た例外に過ぎない。まして、エンジン出力が小さく主翼も小型な『タイガーⅢ』ならばなおの事、飛行の継続は至難と言わざるを得ない。

抗弁するパウラの声は、それでもいつになくしおらしい。それに被さるアルヴィン少佐の声音もまるで囁んで含めるようで、どこか親子のような、不思議な印象を感じさせた。

《パウラ。状況は悪化している、お前を庇う余力は無い。…いずれにせよ当地の確保は不可能だ。レクタ各部隊はこれより敵兵器射程外まで撤退する。陸軍各隊、ただちに反転し後退せよ。空軍各機は上空を支援する。ハルヴ2、撤退するスポーク2の護衛に就け》

「な…！何で俺…いや自分が!？」

《そ、そうですよ！なんで中尉が!？》

《友軍機を丸腰で退かせる訳にはいかん。ハルヴ1と3は上空、4は技量が心許ない。位置としてもハルヴ2が適任だ。行け》

《ま、よろしく頼むぜエリク。俺らは追撃機撤いたら適当に逃げて来るからよ》

「…了解。スポーク2、追従せよ。これより撤退する」

《……………》  
 まさかの護衛役抜擢に、思わず重なるエリクとクリスの声。惑う若人二人の言葉は冷たい声に押さえられ、隊長の追撃も加わりそのまま押し切られる結果となった。納得いかない、そんな3人の沈黙を残して。

操縦桿を傾け反転する『クファイル』。パウラの『タイガーⅢ』は、無言ながらも緩やかに旋回し、エリクの左横に機位を就けた。同高度真横に位置するだけに、溶断された主翼の断面はキャノピー越しにもつぶさに見て取れる。

凄まじい熱量と暴風、そして複数本が重なれば装甲をも溶断する威力。それを至近距離で受けたのである、中のパウラは果たして無事であるのかどうか。エリクの脳裏に束の間過るは、レーザーの直撃を受けて黒焦げになった歩兵の姿。目に焼き付いたその光景を思わず想起し、エリクは微かに身震いした。

《……………》  
 「…ハルヴ2よりスポーク2。体の方は無事か？どこか傷めたりしてないか？」

《……………》  
 「通信装置の故障か…？スポーク2、応答を…」

《私語》

「……………ああもう、いつそ減点でもなんでもいい。とにかく怪我はないんだな？」

《……………》

「もうちよつと融通の幅があつてもいいと思うぜ、スポーク2」

《……………》

「…………分かった、悪かった。もう黙るよ」

エリク・ボルスト25歳、これまでの人生でここまで会話が續かない相手は初めてである。私語厳禁は分かるが、せめて怪我の有無の確認くらいは許容してくれた方がいいではないか。それも、一応別部隊とはいええこちらが上官かつ年上だというのに。

もつとも、結局はその先輩たる意地が却つて足枷となる。積もり積もった不満は口に出ることなく、ふてくされたような言葉一つ残して胸の奥にしまいこむに留まった。思うがままに口は出せず、何ともこの世は世知辛い。

——ところが。通信回線を切りかけた矢先、不意に声が響いたことに、エリクは思わず驚いた。

《ハルヴ2》

「…!?何だ、やつと話す気に…」

《正面機影3》

「な!?!…馬鹿な、一体どこから!?!」

パウラの声、そしてその中身。二重の意味で驚いたエリクは、思わず心臓を跳ね上げた。

頭が冷える。目が、レーダーとHUDを交互に捉える。反応は確かに3、距離わずかに1600。眼下は林と平原ばかりで、基地はおろか滑走路すら見当たらない。

だが、遠目に捉えたその姿に、エリクは思わず舌を打った。極めて小さな正面の面積、そして機体上部の回転翼。間違いない、先と同様、ラテイオ軍のヘリコプター。おそらくはこちらの撤退ルートを読み、こちらの通過後に埋伏したに違いない。

《機種確認、Ka-50『ホーカム』。AAM搭載の可能性あり》

「…冗談だろ…！パウラ、回避行動は取れるか!？」

《急速旋回、ならびにロールは不可》

再び、額に汗が滲む。

状況は極めてまずい。機関砲程度しか対空兵装を持たない『ハインド』と異なり、眼前の敵機——『ホーカム』はパウラ曰くAAMを搭載できるという。レクタ陸空軍を手取る予測ルート上に配している以上、対地兵装しか装備していないというのは甘い考えだろう。そして何より、パウラの『タイガーⅢ』は実質回避を封じられており、正面からミサイルを撃たれば成す術がない。つまり、初撃で3機すべてを撃墜しなければならぬことになる。

ところが、ここに問題が一つ。先ほどAAMを2発使ったため、現在のエリク機にはAAMが2発しか残っていないのである。機銃も装備してはいるものの、ただでさえ小

さいへりを相手に、威力と引き換えに正確さの劣る30mmでは直撃を狙うのは難しい。どうする。

迷う間にも、相對距離は瞬く間に詰まってゆく。

距離1500、1400、1300。あと数秒で、パウラの機体もAAM射程内に入つてしまう。

くそつ、へり相手に苦戦する筈も無い音速機が、まさかこんな状況で追い詰められるなんて。

何か手は無いか。ミサイルはもう2発きり、1発を2機に当てる神業など到底不可能。ならば、2発を確実に当て、一か八か機銃で勝負を挑む他ない。それも音速機の強みを活かし一気に加速をかけ、パウラへの脅威を最小限に食い止めながらである。そう、音速機の強みを活かして。

——音速。

待てよ。確か昔、空軍士官学校で——。

「……パウラ、進路そのまま！」

《…了解》

記憶の底に眠った知識。不意に蘇ったそれは閃きとなり、短い言葉となつて口に昇つた。

目標、左右両翼の『ホークカム』。同時に踏み込んだフットペダルは、瞬く間に『クフィール』の鼓動を高めてゆく。

距離、1000。

ダイヤモンドシーカーが『ホークカム』の機影を捉える。

選択、AAM。

続けざまに放たれたミサイルが、両翼の2機へと殺到する。

爆炎。

ミサイルアラート。

咄嗟に傾けた機体の脇をミサイルが掠めてゆく。

加速で照準がぶれる。

ロールで機体が安定を失う。

翼が、音を越える。

まともに見定められない照準、ロールで射線を外れた敵機。

エリクは引き金を引くことなく、衝突ぎりぎりの位置を掠めて、『ホークカム』のすぐ傍らを擦過した。

《あ……》

「……成功だな。スポーク2、このまま帰還しよう。追従を。……ふー、冷や汗ものだな」

機銃での射撃を逸したエリクとすれ違い、後続の『タイガーⅢ』を射界に捉える筈だった『ホーカム』。しかし、高い安定性を誇る筈のその機体は右方向へと回転を続け始め、その正面を失いつつあった。よくよく見れば、その回転翼やキャノピーの一部が砕け散っているのが判別できる。

エリクが咄嗟に行ったのは、『クフィール』の加速性能を活かした兵装を使わない攻撃方法——すなわち、音速飛行時の衝撃波を利用した部位破壊であった。航空機が音速を越えた際に生じる衝撃波は、その飛行物体と近ければ近いほど当然威力も大きくなる。殆ど零距离で擦過した『ホーカム』の受けた衝撃は、おそらく想像を絶するものだっただろう。機体自体はもちろん、『中身』も無事では済んでしまい。

《…15点》

「うん？」

《機体損傷のリスク大、リスク管理意識の欠如。…発想はまずまず》

「…そりやどーも」

緩やかに墮ち行く『ホーカム』を尻目に、二つの機影がラテイオの地を駆けてゆく。

一線を越えた戦況、降り注ぐ光芒、そしてその先にある言い知れない脅威。

それらを微塵も感じさせない、爽やかな晴天の日差しを浴びながら。

## 第6話 Tyr sua spada

ぎい、というドアの軋みが、耳障りな残響を鼓膜に残す。

蛍光灯に照らされた室内は、ぎつと見渡した限りおおむね30人程度が収容できる程度の会議室という所か。長机等は無く、既に集まっている面々が適当な位置に椅子を置いて座を占めているせいか、一目見た印象では部屋の容積の割にずいぶん混んでいるようにも見えた。

ドアの軋みに応じて上げられたいくつかの視線は、こちらに向くのもほんの一瞬、交わることなくすぐに伏せられる。敵意、あるいは無関心。男のうちの一人などは、露骨に嫌そうな溜息をついている。

向けられた感情と態度に表情一つ崩さぬまま、入口の作戦士官から資料を受け取った少女——パウラ・ヘンドリクスは、適当な場所を見定めて椅子に腰を下ろした。事務仕事の関係で、今日のブリーフィングは少佐や曹長は欠席することになっている。

壁掛け時計の針は、9時半に5分ほど届かない頃。緊急のブリーフィングとして設定された開始時間にはもう少々時間があり、雑談が満ちる部屋の中は少々騒がしい。そんな中でも自身に話しかけて来る物好きは誰一人おらず、パウラはただただ時計の短針を



一心に見つめていた。

無理もない。いつそこまで分かりやすいと清々しいくらいである。

この点、パウラらと一般部隊の関係性は複雑であった。

そもそも、各地の基地に配属される一般部隊と操縦技術を基に選抜されたパウラら教導隊は、殊レクタにおいてははしつくりいつていない例が多い。本来の任務である一般部隊への演習指導に加え、今のように有事の際には臨時に部隊指揮を執る場合もあるなど、何かと一般部隊より一段上の存在に位置付けられているというレクタ特有の理由がその最たる原因であろう。他国でも多かれ少なかれ類似の事例はあるが、軍としての歴史が浅く、指揮を行える兵の数が少ないレクタにおいては、その傾向は甚だ強い。

おまけに、パウラらスポーク隊に限って言えば、着任から開戦までのほぼ毎日に渡ってヘルメート基地戦闘部隊を演習で痛めつけている過去もある。パウラにしてみれば任務として当然のことをしていただけのだが、痛めつけられていた当然の本人たちにしてみれば、けしていい気持ちのものではないというのが人情としては当然の所だろう。

もつとも、その際のパウラの指導が極めて辛辣なことも、スポーク隊が好かれていない要因の一つである。多くの兵にとって年下の、それでいて技量では圧倒的に上回る相手から辛辣な言葉を浴び続けられ、いくら任務の範疇とはいえ腹に据えかねる感情も膨れてゆく。本人は全く自覚していないものの、この点を省みればヘルメート基地航空部

隊の逆恨みだけが原因と断じる訳にもいかないだろう。

「いよう、パウラちゃんお疲れ。元氣？ちゃんと飯食ってる？」

「ええ、どうも」

「お疲れ様です、パウラ准尉」

「ええ」

不意にかけられた男の声に、そちらをちらりと一瞥する。見覚えのある二人の男の姿に、パウラは軽い会釈とともに短く応じた。

前に立ちひらひらと手を振る小太りの中年は、『ハルヴ隊』小隊長のロベルト大尉。やや後ろに並ぶ強面の巨漢は、同隊3番機の：確かヴィルベルトといっただろうか。開戦序盤からのラティオの猛攻を受けながら、一人も欠けずに生き残っている幸運な小隊のメンバーである。

ヴィルベルトに関しては可もなく不可もなく、まずまず一般的な技量と言って良い。小隊内の自らの位置を十分に理解し、アタツカーの支援を第一とした立ち回りを心掛けている辺りは評価に値するパイロットである。

ロベルトについては、おそらくこの基地航空隊では最もマシなパイロットと言っていいだろう。短身に小太りという気の抜けたような外見をしていながら、空戦機動は実に臨機応変。僚機の位置をよく見ながら、的確に小隊を分散し時に集中して、変幻自在な

戦術を展開するのに長けているのは大きな評価点だった。先日の『プレリユード』作戦でも同行したが、その際にも少佐はロベルトを評価していたほどである。曰く、まるで今は亡きベルカのエース部隊を見ているようだ、と。

それに加えて、と言うほどの事ではないが、ロベルトは非常に話好きである。これまでも幾度か会議等で同席する機会があったが、たいいていの場合はこちらの反応に関わらず、どんどん自分で話題を進めては賑やかに笑い飛ばすのが常だった。企図せずして隣あう位置になってしまった今日も同様で、適当に相槌や一瞥を向ける程度で話が勝手に進んでいつている。曰く、ご飯食べてるのはいいけども、コーヒーは飲むか。コーヒーはいいぞ、心身リラックスできる。俺はミルク多めが好きなんだがパウラちゃんはどうなのよ。ちなみにヴィルさんは超甘党でな、コーヒーにもミルクたっぷり砂糖山盛りなんだよ、すげえよな。がはははは。等々。

馴れ馴れしいのは頂けないが、このような待ち時間の暇潰しにはまあ有用な性質と言つて良いだろう。お蔭でと言うべきか、開始予定時刻まではあと2分。既に作戦担当士官らも部屋に入り始め、ブリーフィングに向けプロジェクターを操作し始めている。

何やら騒がしい声とともに、廊下の方からどたばたと足音が聞こえ始めたのはその時だった。

「やばいですもう時間がありません！ダッシュユシマシしよう先輩、ダッシュユー！」

「もう全速だよチクシヨウ！こんなことなら俺も時間確認しとくべきだったー！」

ばたあん、と思ひ切りドアを開けて姿を現したのは、金髪の男と栗色髪の女。先のロベルトと同じ隊の、エリクと…クリス、何だっただろうか。彼らの皆が略称としてクリスとしか呼んでいないので、記憶もそれで定着してしまっていた。

開始予定時刻直前、勢いよく開けたドア、そして事前に喚きながら廊下を走るといっておまけ付きである。否応なく殺到した視線を避けるように、二人はそそくさと腰をかがめてドアの前から逃れていった。

「おう、エリク！クリス！こつちだこつち。どうした、もうちよいで遅刻だぞ？」

「すみません！私、開始を10時半からだど勘違いして覚えてて…」

「…で、時間を忘れた俺はクリスにそれを聞いて、鵜呑みにしたって寸法です」

「まあ死ぬような内容じゃなし、これから気を付けりゃいいさ。ほれ、それよりこつち座れこつち。若いモンは若いモンでな」

「え。隣、つて…」

隣に座っていたロベルトが、エリク達へ声をかけながら腰を浮かせ、二つ分席を開ける。エリクとクリスに、そこへ座れということらしい。一瞬惑ったように椅子を交互に見やったエリクはともかくとして、クリスの方は露骨に嫌そうな表情で、エリクの一步後ろへ引き下がった。

一応自分とクリスは同じ年齢となつてはいるが、階級も部隊も違うということもあり、特にこれといった会話をしたことはない。むしろ新米らしい未熟さと僚機に頼った機動ばかりが目につき、演習の際はエリクに次ぐ低い評価を申し渡していた事ばかりが記憶に残っているくらいである。クリスから自分への印象は想像に易く、自分からクリスへの印象もまたおそらく大きくは変わるまい。特に馴れ合いを求める気もない以上、関係性としてはむしろ今のままが丁度良かった。

互いの空気を察したのか、はあ、とため息をついたエリクが隣に腰を下ろす。クリスはその隣、すなわちエリクとロベルトの間に落ち着いた。

人当たりはともかく、隊長のロベルト程に話題は持ち合わせていないのか、それとも自分と話す話題を見つけられないでいるのか。先のロベルトとは打って変わって、エリクとの間には妙な沈黙が漂い始める。

元より、自分は静かな方が好きである。ぺちやくちやと人と話すのは性に合わないし、話すにしても少佐たちのように気心の知れたごく少数と話す方がよほどいい。先のロベルトとの雑談に関しては、あれは会話と言うよりは、暇な時にラジオを流し聞くような感覚に近いと言った方がいいだろう。いずれにせよ開始時間まであと僅か、大して交わす言葉もない以上、静かな状態の今は自分の性に合っている。その筈である。

だが、それにしても心が妙に浮つくような、そわそわとした気分になるのは何故だろ

うか。ブリーフィングの内容が——前回の出撃で洗礼を受けた『あれ』が、よほど自分でも気になっているというのか。

「パウラ、この間は……体は大丈夫だったか？」

「怪我はしてない、問題ない」

「ならいいが。……機体は？」

「少佐が検討中」

「あー……そうだったのか。それじゃ、場合によつては新型に乗り換えとか……」

「もう始まる。少し静かにして」

「……………。はいよ、悪かった悪かった、『スポーク2』」

不意に紡がれたエリクの言葉に、その口元を一瞥する。怪我が無かったことも機体の手配のことも、少佐からロベルトを通して伝わっている筈だが、何を今更。そう思いつつも、パウラは短く言葉を切りながら、既に知っているであろう自分の情報をエリクへと返した。こちらに顔を向けるエリクの向うでは、クリスが視線だけこちらに向けて様子を窺っているのも見て取れる。

この間というのは、2日前——9月30日に行われた、対ラティオの侵攻作戦である『プレリユード』作戦の事である。戦況を優位に進めていたレクタ軍だったが、突如謎のレーザーによる攻撃を受け、戦力を消耗。パウラ本人も機体を中破させられ、撤退を余

儀なくされたのである。その際に護衛を任されたのが、このエリクであった。

この際、撤退ルート上で待ち伏せしていたラテイオ軍の戦闘ヘリ『ホーカム』を退けた戦法もそうだが、エリクはロベルトと違って真つ向から、『クファイル』の加速性能に頼った機動をすることが多い。加えて、自身や機体に無茶を強いて損耗を速める傾向すらある。事実、上述の『ホーカム』3機との遭遇で用いた戦術は、一歩間違えればエリクもパウラも撃墜される可能性が高い危険なものだった。パウラがこれまでエリクを酷評してきたのも、機体の損耗という観点の欠如に加え、小隊副隊長らしからぬ機動を多用する点が大きかったのである。全滅の危険も顧みず、一か八かの戦術で以て任務完了に向かうなど、将来の指揮官候補として相応しくないことは言うまでもない。護衛対象が、そこまですて護る必要の薄い旧式機たかだか1機では尚更である。

時間がなく、そして何ら生産性も無い会話。特にこちらから問うべき話題も無く、ぴしやりと区切ったパウラの言葉に、会話はそこで断ち切られた。苦笑い半分、呆れ半分といった表情でエリクは顔を正面に戻し、その向うではクリスが息を漏らして視線を外している。

視線を正面に戻して数秒、ヘルムートの基地司令が前に立ち、ブリーフィングの口火を切り始めた。パウラも手元の資料を開き、映し出された映像とともに意識をそちらへと傾ける。妙に浮ついた心を、男の声に紛れさせながら。

「予定時刻となった。これより、緊急のブリーフィングを開始する。なお、スポーク隊のアルヴィン少佐とフィンセント曹長は、事務作業で参加できないとの連絡があつた。後ほどパウラ准尉より報告をお願いする」

マイクの質が悪いのか、割れた基地司令の声。その末尾にはい、と応じながら、パウラは刻々と表示を変える正面の映像を目で追つた。傍らの作戦士官がパソコンを操作しているのだろう、一杯に表示された東方諸国一帯の地図は四角の枠が重なるごとに拡大されてゆく。東方諸国からラテイオへ、ラテイオからその中部へ、さらにその中ほど、旧ウステイオ領との国境付近へ。オーシアから提供された衛星画像と偵察写真が組み合わされたそれは精密で、山脈や主要街道の状態すら明瞭に見て取ることができた。

「今回緊急で集まつて貰つたのは他でもない。先日、『プレリユード』作戦において我が軍へ甚大な被害を及ぼした、ラテイオの新兵器の詳細が判明した。オーシアと連携した諜報部の奮闘と、偵察隊の決死の行動の賜物である。アントニー中佐、説明を頼む」

司令が傍らへ移動するのと時を同じくして、制服姿の別の男がスクリーンの横へと就く。先ほどアントニーと呼ばれていた作戦士官だろう、書類の束を手にし、かつちりと制服を着こんだその姿はいかにも内務系の軍人といった空気を纏っている。

「それでは、私から報告を行う。まずは、結論から申し上げよう。問題の敵新兵器の正体は、旧ウステイオーラテイオ国境に設置された多塔式高層化学レーザー兵器である」



「レーザー……」

「おいおい……凄まじいな、SFかよ。何てもん作ってやがんだ」

エクスキャリバー。

ざわつきを帯びる面々の中で、パウラの脳裏に反射的にその単語が浮かんだ。

15年前、ベルカ公国と周辺諸国との間で勃発した『ベルカ戦争』。その戦争の中で、高い技術力を誇るベルカ軍によって使用されたのが、その聖剣の名を冠する高層化学レーザー兵器である。高さ1km、最大射程1200kmを誇ったという超兵器の名に相応しいその存在感は凄まじく、当時敵対していたオーシアやウステイオ、周辺諸国の受けた被害は深刻なものだったという。実物は当然見たことはないが、パウラも当時の記録から、その存在と脅威はよく知っていた。

もし、かのエクスキャリバーと同様のものが、ラテイオ国内に建造されていたとしたら……。かつての戦いの例を引くまでもなく、その脅威は計り知れない。

「兵器のコードネームは『テュールの剣』。地上部の構造は、中央のジェネレーター収納部と、そこから5方向に延びるエネルギー供給通路。そして、それらの先端から伸びる5本の主砲塔から構成されている」

ざわめきがひと段落してから、作戦士官が画面を切り替える。真上からの衛星写真らしく、そこには円形の中央構造物から5本の腕を伸ばした、雪の結晶のような形の建造

物が映し出されていた。別のウィンドウに映写されたワイヤーフレームCGによると、それらの腕の端からはそれぞれ高層の塔が伸び、特徴的なシルエツトを形作っている。コードネームに『剣』と銘打ってはいるが、現代の建造物からおおよそ離れたその姿は、まるで神殿や遺跡のようだった。

「諸君の中には、『ベルカ戦争』の際の『エクスキャリバー』を知っている者もいるだろう。基本的なシステムはそれに近く、おそらくはユークトバニアからの技術提供で建造されたものと思われる。もともと、先の戦闘記録を基に実施されたシミュレーションでは、その1基当たりの出力は『エクスキャリバー』のそれを大きく下回るとの推定が出た。理由は不明だが、数本のレーザーが同一目標へ照射されることで初めて、『エクスキャリバー』と同等の威力となるらしい。一度に5本のレーザー照射を受けた友軍攻撃機部隊が一瞬で消滅した一方で、2本のレーザー照射を受けたパウラ准尉の『タイガーⅢ』は主翼の溶断に留まっていることから、それは裏付けられている」

ふー、と隣のエリクが深いため息をつく。おそらく、脳裏にあの時の光景——照射を受けた『スカイホーク』4機が一瞬で撃墜された光景でも蘇ったのだろう。

光の速さで殺到するレーザーを、意図して回避する術はない。それが目に映った時は、すなわち自分に命中する瞬間である。事実、回避技術には自信のあるパウラでさえ、『テュールの剣』とやらの攻撃で機体を中破させられたのだ。

気づいた時には攻撃を受けている。回避しおおせられるかは、運一つしかない。戦争で理不尽を訴えるのはナンセンスだが、実際に目にした以上の事実を省みれば、ぞつとするような思いを抱かずにはいらなかった。恐怖とも理不尽とも違う、言うなれば『忌まわしい』。自分でもしつくりくる表現が見つからないが、強いて言葉にするのならそれが最も近いだろう。

「いずれにせよ、『テュールの剣』が我が軍に与える脅威は極めて大きく、目下進行中のラテイオ侵攻作戦にも支障を来す恐れがある。幸い、同盟国であるウスティオ軍の攻勢は破竹の勢いを保っており、あと数日でラテイオ西郡の鎮圧を終えるという。ウスティオ軍の体勢が整い次第、我が軍はウスティオ軍と連携して、『テュールの剣』破壊作戦を実施することになる」

「そりゃあいい。いつまでもエクスキャリバーもどきにビクつくのは御免だ。とつととへし折つちまおうぜ」

「…ところがだ、ロベルト大尉。事はそう簡単ではない」

「へ？そりゃなんでまた」

「要因は、大きく分けて二つだ。まず一つだが、偵察情報によると、『テュールの剣』周辺からラテイオ中部にかけて大量の観測用気球が設置されており、厳重な監視網が敷かれている。諜報によると、ラテイオはかつてのベルカのような精密照準器の開発技術を

持つておらず、射撃精度を気球で補っているとのことだ。これらが、接近する敵機の捕捉にも役立つことは言うまでもない。かつての『エクスキャリバー』同様、『テュールの剣』攻略には航空機による拠点奇襲攻撃が必要となる訳だが、この監視網が生きている限り成功は見込めないことになる」

あくまで陽気な声で合い打つロベルトに、気落ちしたような作戦士官の声が被さる。

かつて読んだ、15年前のエクスカリバー破壊作戦——連合軍内作戦名称『ジャツジメント』の報告書によると、ベルカ戦争の際に用いられた作戦は、作戦士官の言う通り航空機による拠点攻撃だった。それも、ベルカ内陸に位置する『エクスキャリバー』を長駆して攻撃するため、対地攻撃装備を施した少数の戦闘機に空中給油機を随伴させただけの、ごくごく小さな部隊によるものである。多数の部隊を動員すれば、それだけ早期に発見される危険もある以上、これは当然と言えば当然であった。

攻撃隊が少数、それも敵地の只中に攻撃を加えるとあつては、当然ながら攻撃隊の負うリスクは極めて大きい。事実、ウステイオ軍が主となつて実施した『ジャツジメント作戦』においては、奇跡的に攻撃隊そのものへの被害は少なかつたものの、空中給油機や四部隊を含めた多数の機体を喪失している。直近では7年前にユージア大陸で勃発した大陸戦争の序盤で、地对空レーザガン『ストーンヘンジ』破壊のために類似の作戦が実施されたものの、護衛戦闘機の迎撃を受けて部隊は全滅したのだという。

過去の事例が実証しているように、拠点攻撃の成否は『いかに早く』、『いかに捕捉されないように』接近できるかが肝要になる。この点で、多くの観測気球を随伴させた『テュールの剣』への攻撃は、どう考えても無謀なものだった。

ロベルトもすぐにそこまで思い当たったのだろう、もううんざりと言わんばかりに大きく頭を振って見せた。

「もうなんか一気にやる気が削がれて来たなコレ……。…で、もう一個あるんでしたっけ？」

「そうだ。もう一つの障害だが、『テュールの剣』はラティオ軍の『ベレッツィア要塞』敷地内に建造されている。要塞自体は半世紀以上前の旧式のものだが、施設は十分に機能しているらしい。対空兵器やレーダーに最新のものが配備されているのは言うまでもなく、既に付近では野戦飛行場の建設も開始されているとのことだ。『テュールの剣』攻略に当たっては、これら要塞の設備は大きな障害となるだろう」

「……………隕石落ちてこねえかなー。ベレッツィアの辺りにー、なるべくゴツイ奴ー」  
「現実から逃げるなロベルト大尉。皆同じ気持ちだ」

腕を広げて体を椅子に預けるロベルト。深く息を詰めるエリク。眉を顰めて顎に手を遣るヴィルベルト。下を向き頭を抱えるクリス。反応こそ多様だが、パイロットにも他の一同にも共通しているのは、絶望の二文字だった。技術不足を補う観測気球の大量

配置に旧式の要塞の再利用と、アナログ的な手法でこちらの動きを封じて来るとは一体誰が想像しえただろうか。それも、ユークトバニアからの最新鋭の機器を組み合わせて、最も効果的に戦術を構築して、である。『歴史こそ長いが、有史以降の戦争に関しては弱国』——そんな定評すらあつたらテイオの面影は、もはやそこには見て取ることができない。

溜息と、沈黙。重苦しい空気を最初に割いたのは、ハルヴ隊3番機の巨漢——ヴィルベルトだった。

「2点、宜しいでしょうか」

「ああ。ヴィルベルト曹長、質問を許可する」

「まず一つです。『エクスカリバー』に類似しているとのことですが、『テュールの剣』の射程距離はどの程度でしょうか」

「残念ながら不明だ。だが、『エクスカリバー』の主砲塔が高さ1kmなのに対し、『テュールの剣』は500ないし600m程度と推定されている。ジェネレーター出力や天候にも左右されるが、おそらく600km程度というのが作戦本部の見方だ。……ただし、『エクスカリバー』同様、鏡面加工を施した航空機にレーザーを反射させることで射程を延伸させてくる可能性もあるため、断言はできない」

ヴィルベルトの質問に、パウラは内心頷いた。年の功と言うべきか経験の賜物と言う

べきか、見るべきところはやはり見ているらしい。最終的には長距離の奇襲作戦になる以上、射程距離の把握は極めて重要である。真つ先に絶望感から立ち直り冷静に判断した辺りは、十分に評価点だった。

もつとも、射程距離の予測については、まだ話半分程度だろう。数値を反芻する限りは単純に主砲塔の高さから算出しただけに違いなく、実質的には作戦本部もほとんど掴めていないと白状したに等しい。

動きの遅い事である。僅かに足首を動かして組み直した脚に、パウラのそんな思いが滲んでいた。

「了解しました。二点目ですが、『テュールの剣』破壊に向けた、具体的な作戦行動予定はどのようになりますか？」

「ウスティオ軍との詳細な討議が行われていないため、現状では未定である。レクタ内で検討中の案としては、観測気球を少数の戦闘機隊で少しずつ潰していき、精密射撃能力を低下させた後に本拠点襲撃を実施するというものがある。オースアの『アークバード』による支援も要請しているが、オースアはユークトバニア方面で手いっぱいなため、望み薄だ。いずれにせよ、正式決定は今後のことになる」

ヴィルベルトの質問に続いた作戦士官の声は、実質的に何一つ決まっていないこともあつてか、流石に暗い。何といつても、ラティオやかつてのベルカのような超兵器を持

ち合わせないレクタのみでは、これといった打開策を出せないというのが実情なのだ。少なくともウステイオの協力がなければ成功は覚束ない以上、こればかりは仕方なかった。

頼みの綱は同盟の首魁であるオーシアだが、開戦以来、絶えずユークトバニアから攻撃を受けている現状では期待はできない。当面は自国の防衛で精一杯であろうし、レーザー兵器を持つ大気機動宇宙機『アークバード』にしても自国の為に使いたいというのが本音に違いないからだ。

結局の所、当面の脅威はレクタとウステイオで解決する他ない。誰もがその結論に至ったのだらう、以降の思いを巡らすのに精いっぱいなのか、『質問は?』という作戦士官の問いに応じる者はいなかった。

『テュールの剣』攻略作戦に関しては、詳細が確定し次第諸君へと令達する。その時まで、諸君においては存分に技術を高めておいて欲しい。ブリーフィングは以上だ。解散」

今後への絶望と、沈黙に沈んだ重苦しい空気。一様に暗い顔をした一同の中を、パウラは表情一つ変えず、いち早く席を立ててドアへと指した。どんな戦場であろうと、どんな戦況であろうと、自分は少佐の命令通りに戦えばいい。その他の戦いの仕方も、その他の生き方すらも自分は知らない。それが兵士として正しいことだと信じている以



上、自分は少佐のために戦うだけだった。

時刻、10時半を回ること数分。申請をすれば、基地の予備機で上空を飛ぶことくらいはできる時間である。パウラはとん、と地を蹴って、早足にドアをくぐっていった。

『よつし、とりあえずコーヒー飲んで落ち着こう。パウラちゃん、一緒に……あれ?』  
そんな口ベルトの言葉を、背中で振り切りながら。

\*\*\*\*\*

——同日、夜。天井の古くなった蛍光灯が絶えず明滅し、一層陰鬱に照らされた食堂前の廊下。人の気配がとうに絶えた薄暗い廊下に背を向けて、声を潜めながら電話口に向かう男の影があった。

「ええ、ええ……はは、まあこっちはうまくやっています。まったく、ベルカのアレといいこっちといい、『剣』が最近流行ってるみたいでしょ?……:……:……ええ、……:……:……はは、任せて下さいって。レクタに勝って貰わにや俺も困りますし」

途切れ途切れの光が、男の横顔を薄暮に浮かび上がらせる。平均身長以下の短身に小太りな体格、刈り上げにした金髪、そして切れ長の目。間違いなく、ハルヴ隊隊長の口ベルト・ペーテルスその人であった。元々人の出入りが多く防音処理が施された壁に、声を潜めていることも相まって、その言葉は詳細までは聞こえない。話し相手の声に至っては、声音を聞くことすら困難だった。

「ところで、スーデントールの方はどんな感じですか？……ほうほう。……おー、そりや何より。『新作』ができたらまた呼んで下さい、ベルカまで馳せ参じますよ。……つと、今はオーシアでしたかね、ははは。……ええ、……ええ、……ええ、……ええ、こちらこそ。久々にベルカの言葉が聞けて嬉しかったですよ。……ええ、それじやまた、『大尉』」

がちや、り。

静かな廊下にはいやに長く響いた音を残して、ロベルトはこつり、こつりと足音を刻みながら、自身の居室へと向かっていった。その足取りは、まるで何事も無かつたかのようにならぬやうに軽い。

後に残つたのは、明滅する古びた蛍光灯。そして、傍の柱の陰に背を預けた、パウラの小柄な姿。

「……………」

沈黙、数瞬。遠くに消えた足音を探るように。パウラは静かに一步、一步と歩を進めた。まるで謎かけのような、それでいて単なる雑談のような先の会話を反芻しながら、それでも足音は一定の速さを刻んでいる。

誰かに、伝えておくべきだろうか。少佐に、曹長に、あるいは――。

最後に浮かべた例の青年の面影を振り切りながら、銀髪の少女は、扉を開けて闇の中へと潜っていった。

## 第7話 雨下に舞う三色旗《トリコロリー》

地に、呑み込まれる。

音速に近い速度で眼下を流れていく地表は、そんな錯覚を覚えそうな程に近く、暗い。高度計は200を指しているものの、空を覆う曇天と、絶え間なく降り注ぐ大粒の雨がその目測を狂わせているのだろう、実際の印象は木々に腹をつかえそうな低さにも思える。左右に隆起した低い丘と鬱蒼と生い茂る林の様は、さながら大地が両腕を広げて横たわっているかのようだった。

ただでさえ集中力を消耗する超低空飛行に加え、視界の悪い雨天下ともなれば、心身にかかる負担は想像を絶する。まして、いつ敵が襲い掛かるか分からない戦時の空ならばなおの事である。

目の奥が、ずいぶん前から重い。ひとしきり目を強く瞑り疲労を紛らわさせながら、愛機『クファイルC7』のコクピットに収まるエリクは、疲れた目を再び前へと向けた。できることならば目の上からマツサージしたい所だが、悲しいかな今はヘルメットが邪魔でできそうもない。

《ハルヴーより各機へ。敵監視エリア侵入まであと5分だ。ハルヴ隊は上空、ヴェイナ

ス隊は対地警戒を厳にせよ。全機いいな、速度を落とさず行くぞ」  
《ヴェイナス了解。空はあんたたちが頼みの綱だ、しつかり頼んだよ》

ハルヴ隊の後方から、攻撃隊である『ヴェイナス隊』指揮官の声が耳に届く。レクタでは珍しい女性の指揮官らしく、張りのある自信に満ちた声がエリクにも印象的だった。

本作戦の参加は8機。うち4機は護衛を担うハルヴ隊だが、今回は対地攻撃も目的の一つであるため、無誘導<sup>U</sup>爆弾<sup>B</sup>を搭載した爆装での出撃である。9か所あるハードポイントのうちの4か所にUGB3つずつを搭載している他、IR誘導式<sup>A</sup>対空<sup>A</sup>ミサイル<sup>M</sup>2基と増槽を下げていることもあり、機体の加速は少々鈍い。

一方、攻撃の主力であるヴェイナス隊はその後方、4機のA-4N『スカイホーク』により構成されている。機体サイズに対し優れた搭載量を誇る攻撃機ではあるが、それでも小型機であることを考慮すると、その攻撃力にも限りがある。施設への攻撃部隊としては些か少ない感が否めないが、これに関しては『テュールの剣』防衛に関するラティオ軍の配置に要因があった。

開戦直後の3日間を除いて敗走を続けて来たラティオ軍が、敗勢を食い止めるべく選んだ拠点——『テュールの剣』。かつてベルカ公国が有したレーザー兵器『エクスキヤリバー』を彷彿とさせるその威力は凄まじく、勢いに乗ったレクタ軍の攻勢を留めるのに

十分な威容を誇っていた。

ところが、この『超兵器』に思わぬ弱点が見つかったのである。

そもそも、かつてのベルカ公国同様のレーザー兵器を自力で運用できる国は限られており、就中開発まで可能な国といえ、ベルカの実験データを接収したユークトバニアを除いて他に無い。当然ながらこの『テュールの剣』もユークトバニアの技術提供があつて初めて建造できた訳であり、その運用ノウハウにも実施スタッフにも、ユーク関係者が多く関わっているとされる。勢力を増やすために同盟国へ手厚い保護が必要な点は、冷戦期から変わらない先進国の責務でもあつたのだ。

とはいえ、ユークトバニアにとってレーザー兵器関係技術はいわば虎の子であり、同盟国とはいえ易々とすべての技術を与える訳にはいかない。万一ラティオが敗北して『テュールの剣』そのものや技術情報がオースシア同盟側へ流れると、自国へも脅威を与えかねない為である。そのリスクを踏まえての事だろう、ユークトバニアからラティオへ提供された技術には、一定の制限が課せられる結果となつた。具体的には、精密照準機器のグレードダウン、ならびにレーザー偏向・射出装置の簡略化等が上げられる。

結果、『テュールの剣』は、いわば劣化『エクスキャリバー』程度の能力しか得ることができなかつた。すなわちレーザー射出部の耐熱機構簡素化によるレーザー出力の制限、それに伴う一基当たりの威力および射程の低下、精密照準機器の能力不足による超

長距離狙撃の精度低下など、いくつもの弱点が露呈したのである。

当然ながら、ラティオもこれを座視することは無く、独自に改良を施すとともに、運用方法にも工夫を加えた。『エクスキャリバー』同様の単塔式から多塔式へと構造を改め、目標に対し複数のレーザーを集中させることで威力を補えるよう改修を施したのもその一環である。また同時に、レーザーを反射して目標への照射を可能たらしめる、専用の改造を施した航空機部隊の編成も行われたという。狙撃精度の向上に関しては、周辺域に多数の簡易レーザー施設と観測用気球を配置することで補うこととなった。

施設そのものへの改修は今更如何ともしがたいとして、現状最も厄介なのは後者——すなわちレーザー施設と観測用気球の存在だった。多数の目を以て精度を補うという手法は単純ながらも効果的であり、現にレクタ軍機はラティオ中郡へ近づくことすらできずにいたのである。裏を返せば、これらの『目』を一つ一つ潰していけば、『テュールの剣』の死角も増やせるということにもなる。

以上の状況を踏まえ、レクタ軍は少数部隊によるラティオ監視網への攻撃を立案した。すなわち、低空から少数機を進入させてレーザー網を掻い潜り、監視の主となるレーザー施設への奇襲を行うという訳である。最終目標はレーザー施設へ電力を送る発電施設だが、まずはその前段としてラティオ前線の監視網に穴を開けるのが今回の目的となる。

もつとも観測用気球も存在する以上、攻撃隊の存在は瞬く間に露見し、『テュールの剣』の攻撃に晒されることは明白である。それを考慮して、本作戦では部隊全滅のリスクを避けるべく、複数部隊による同時攻撃が成されることとなった。1部隊が攻撃されている間は、他の部隊は安全と言う訳である。当然ながら、攻撃を受ける方の部隊は全滅のリスクすら抱えることになる。施設攻撃にしては少ない戦力も、このリスクを最低限に抑えるための策と言えないことも無かった。

引き金を引いて、放たれるのは五筋のレーザー——まったく、泣けるほど凝ったロシアンルーレットだことだ。昨日受けたブリーフィングの内容を反芻し、思わず漏れ出た溜息は、酸素マスクの裏に籠もって消えた。

《ハルヴ3、目標確認。大尉、レーダー照射を受けています》

《こんだけ近づきや当然か……。ヴェイナス隊へ、うちらが先行して露払いする。きっちり一撃で仕留めてくれ》

《あいよ、ヴェイナス了解。戦闘機隊の手並み、見物させて貰うよ》

小隊内でやや高い位置に占位するヴィルさんが、いち早く発見の報を告げる。既に速度は亜音速、毎秒数百mを飛ぶ計算である。先頭から2番目に位置するエリクの目にも、その目標の姿はすぐに捉えられた。

天を指す、器のような白いパラボラ。コンクリート製の、背の低い施設。周辺に立つ

アンテナと、対空兵器と思しき車両複数。曇天に沈んだような暗い彩りのそれらが、丘の合間の開けた地点にこぢんまりと集っている。間違いない、ラティオのレーダー施設だ。

フットペダルを押し込む。

増速、距離概ね2000。後続の『スカイホーク』が徐々に離れてゆく。

音速に近い今の速度なら、投下された爆弾は慣性で投弾地点より前方へと流れてゆくことになる。ヘッドアップディスプレイに表示された予測着弾地点は、機体速度と高度を考慮してか相当に先にあつた。

兵装選択、UGB4基12発。

投下ボタンに指をかける。

雨がキャノピーを打つ。

対空砲が砲火を刻み始める。

正面、2両。右奥にさらに1。

火線が交わる。

照準が重なる。

距離、1200。

《投下》



隊長の声とともに、力を込めた指。

がちり、という音と共に、重量物を捨てた翼がふわりと跳ねあがる。機首が指すのは、曇天の空。降り注ぐ雨の向う。

後背に重なった幾つもの爆音を、『クフィール』の翼は軽快に振り切っていった。

眼前の隊長が翼を翻し、それに倣ってエリクも操縦桿を傾ける。右に傾いて俯瞰した先には、四散した対空砲の残骸と抉れた地面。そして、その上空を過ぎた4機のA-5Nがレーダー施設へ殺到し、コンクリートの箱を寸分変わらず粉碎する光景が映っていた。

小規模部隊とはいえ、レーダー施設一つを破壊するには些か過剰な火力だったのだろう。4機の『スカイホーク』が通過した下には跡形もなくなった施設の壁が転がり、僅かに残ったラティオの国旗が炎の中に燃えていた。

「ハルヴ2よりハルヴ1、ヴェイナス隊の攻撃完了を確認。レーダー施設と護衛部隊は沈黙した模様です」

《低空侵入、緊張したあゝ。思ったより敵の数が少なくて助かりましたね》

《まあ、レーダー施設バカバカ作ったのと、大本の要塞防衛に戦力割いてるせいだろうな。ハルヴ1より司令部、目標の沈黙を確認。撤退指示を請う》

クリスの言葉に応えた隊長へ、エリクも意を得て首肯する。クリスの言う通り、前線

のレーダー施設にしては防備が手薄な点が引つかかっていたのだ。

その実態を推測すれば、おそらくは隊長の言った通りだろう。急造したレーダー施設の数は多く、同時に『テュールの剣』そのものの防衛も万一を考えると外す訳にはいかない。結果的に1か所当たりに配置できる戦力が限られることとなり、最前線と言うにはあまりにも脆弱な防備にならざるを得なかった、という所か。

眼下で燃える、パラボラの残骸。呆気ない程に作戦は成功し、ラテイオの監視網に穴を一つ開けることに成功した。——だが、あと『目』はどれだけ残っているのか。そして、それをいくつ潰せば『テュールの剣』へ至ることができたのか。ここへ至るまでに溜まった心身の疲労を省みれば、先の見えぬ徒労感がどっと増えたようにすら感じる。必死に上った険しい山道が、実際には一合目にすら至っていない時の気分を想像すれば幾分は近いだろうか。

とはいえ、今回の目的は果たした。以降のことは、帰ってから考えればいい。どうせそれを決めるのは上の人々なのだから。

緊張をほぐすように、襟を緩めようと手を伸ばすエリク。その耳に飛び込んで来たのは、予想を裏切るものだった。

《司令部よりハルヴー、現在友軍の第3攻撃隊がレーザー照射を受けている。攻撃が他の隊へ集中している今がチャンスだ。この隙に、貴隊周辺の観測用気球を撃墜せよ》

《はあ!? そんなことしてる間にこっちにもレーザーが…》

《そうならない為の気球撃墜だ。悪天候のためレーザー照射の精度も落ちている。元より気球撃墜も目標の一つである、急ぎ撃墜せよ》

「…つたく、人の命をなんだと…」

《…まあそうばやくなエリク。鬼畜メガネ…上官さまの命令は絶対だ》

《聞こえているぞ、ハルヴー》

友軍へのレーザー攻撃、その隙を突いての監視網への打撃命令。命令にすれば簡潔なものだが、いざ実施する段になれば溜息が漏れそうな思いだった。現在攻撃を受けている友軍がいつまで持つかは分からず、気球の撃墜前に目標がこちらへ切り替われば目も当てられない。まして、あのレーザー兵器は文字通り必殺の威力を持ち合わせているのだ。命令する方がいいだろうが、実際に請け負う方にとっては堪ったものではない。

とはいえ隊長の言う通りここは軍。悲しいかな、上官の命令は絶対である。やれやれと嘆息しながら後頭部を掻こうと伸ばした指先は、ヘルメットに阻まれた。

仕方は無い。観念したように操縦桿を引き上げ、エリクは機首を再び上空へと向ける。事前情報によれば、気球の配置は高度1000から3000と幅広い。加えてサイズは戦闘機と比べて小さく、リーダーにも映りづらいという三重苦とくれば、果たして空域の全機を撃墜できるかどうか。おそらく雲の上にも数機が浮かんでいるだろうが、

この分厚い雲を隔ててはこちらを捉えてはいまい。それらは無視してしまつていいだろう。

ちらりと見やったレーダーには、案の定反応が無い。目視できる限りでは、同高度付近に2つ、高度2000付近に5つ。おそらくミサイルも誘導しないであろうことを考慮すると、機銃での撃墜が理想だろう。30mmでの狙い撃ちは正直苦手だが、今はある意味命の危機でもある。苦手でもなんでも、やる他ない。

「くっそ、小さいな…」

散開して各々の目標へと向かっていく僚機たち。その下方を抜けながら、エリクは同高度の一つを見定め、そちらへと機首を向けた。

照準器の中心へと捉えた姿は、しかし小さい。見慣れた戦闘機の機影と違い距離感が掴みにくく、機銃の有効射程へ入ったかどうかの判断が思いの外つきにくい。静止目標なのが唯一の救いだった。

距離：おそらく900、800、700。スロットルを絞つて機位を微調整し、機首の延長線上に砲弾型のシルエットを捉えていく。低速下での精密射撃は『クファイル』の得意とする所ではないが、今回ばかりはやむを得ない。一撃で確実に仕留めなければ、それだけレーザーの脅威も増すのだ。

焦りを帯び始めた、曇天の脳裏。その目前、レーダーサイトに不意に光点が映つたの

は、何度目かの微調整をした時の事だった。

「……何だ？」

気球ではない。目の前のそれとは位置が異なるし、何より数が違う。先攻して2、やや離れて5。何より、それらは明らかにこちらを指して動いている。特に先頭の2つは、明らかに速い。

まさか。冷たくなる脳裏の中、エリクは計器類へ次々と目を遣る。方位150、ベレッツィア要塞方面。進行方向、こちらへ直行。敵味方識別装置反応、——ラティオ機。「チツ……ハルヴ2より各機、方位150より機影2、遅れて5！ラティオの迎撃機と推定！」

《早い……もう敵が!?!》

《ま、敵さんの領地だしな。ヴェイナス隊、悪いが気球の対処は頼む。俺たちは敵の迎撃機に当たる》

《ヴェイナス了解。悪いね、任せたまよ》

低空域で掃討を続けるヴェイナス隊を残し、ロベルト大尉を先頭とした4機が機首を上げてゆく。機数では勝っているとはいえ、上空を取る有利はどの戦場でも変わりはない。

しかし、速い。

レーダーの光点は見る間にその距離を詰めてゆき、やがて眼前にその機影が現れた。こちらの予想を上回る速度で、ラティオの2機は既に上空の優位を占めている。

上空を指すこちらをよそに、斜め上にいち早く占位したラティオの2機。それらが翼を翻してこちらへ正面から向かうのと、けたたましいミサイルアラートが鳴り響くのは数秒と無かった。

《散開!》

「くそ、正面なら……!」

《待て、無理に狙うな!……エリク、ヴィルさん、レーダー誘導されてる!大きく旋回して躲せ!》

《これは……S A A M (セミアクティブ空対空ミサイル)!?》

「この……『クファイル』の機動、舐めるなよ!」

隊長の声に、エリクは反射的に操縦桿を横へと倒した。

横転する雲、傾く地面。操縦桿を横から手前へと引き込むと同時に、視界が地面の茶一色に染まってゆく。右下方への急旋回、次いで水平位からの機首上げ。胃袋を苛む圧力を受けながら、景色が目まぐるしく回転する。

擦過、一瞬。

敵機2機が編隊を抜けると同時に、背を追っていたミサイルは誘導能力を失い、地面

へ向けて蛇行しながら落ちてゆく。左右を省みれば、同様に攻撃を受けたヴィルさんも無事に回避できたらしく、『クフィール』の健在な姿を空に翻していた。

機首を上げて左右に散開する敵機は、見慣れない姿だった。ロケットのような細長い胴体に、高い位置に設けられた水平尾翼。何より印象的なのは、全長に対して極めて小さな主翼だろう。アスペクト比が小さく方形に近い形状に加え、形式も今どき珍しい直線に近い配置となっている。その様は、まるでミサイルそのもののような奇妙なシルエットを形作っていた。

《あれは……F-104『スターファイター』ですか。珍しいですね》

《どうもラティオ仕様のS型だな。後続の5機もいる、とつとと2セルで落とそう》

「了解。クリス、支援頼む」

《はいっ、後ろは任せて下さい！》

素早く態勢を立て直した『クフィール』が、2機一組となって分かれた『スターファイター』を追い始める。それに呼応したのだろう、眼下を旋回して機位を変える『スターファイター』の機動は、しかし小型機の割に非常に大きい。上空の優位を失い下方への逃げ場を塞がれた今、ロケットのようなその機影は徒に低空域を蛇行し身を振らせていた。

元々、F-104『スターファイター』は上昇力と加速力に重点を置いて設計された、

邀撃専用機と言って良い機体である。空力的に洗練された細長いフォルムも、胴体に対して異様に短い翼もその目的のために最適化された故の形状であり、一つ事を極めたその設計思想は後のMiG-25『フォックスバット』の先蹤を成すものであった。

しかし、長所は翻せば短所にもなる。優れた加速性能を発揮するための機体形状の代償として、F-104は旋回を多用する格闘戦に弱いという欠点をも抱えることとなったのだ。近代化改修を加えたとはいえ、ラティオ仕様のF-104Sでもこの点は変わらない。

敵機の斜め後方で反転し、逃げ惑うF-104Sの背を取る。右旋回、次いで左。その機動は、先の突撃速度が嘘のように鈍い。クリスの機銃掃射で逃げ道を塞がれたその機体は、反射的に回避行動を取ったのだろう、エリクの眼前に無防備な姿を晒した。距離、900。運動性に優れる機体ならまだしも、邀撃専用機には必中の距離。

ダイヤモンドシーカーがHUDの中でその背を追いかける。エリクの目が、『クフィール』の眼が、過たずその背を捉える。鳴り響く電子音。『スターファイター』の致命を告げる、ロックオン。

貰った。

ミサイ<sup>F</sup>イル<sup>x</sup>発射——。

「……あ」



引き金を引きかけた刹那、それはまさに『あつという間』だった。『スターファイター』のкокピットから風防が弾け飛ぶや、白煙に包まれた座席が空高く舞い上がったのだ。跳ね上がった先で開いたパラシュートをよそに、主を失った『スターファイター』が地面へと吸い込まれていったことは言うまでもない。

不利を察しての、緊急脱出。

パラシュートを避けるように機体を翻しながら、エリクはその白い傘を目で追った。降りしきる雨の下を、それはゆらゆらと揺れて風に流れてゆく。

勝利というには苦い快感。それを振り払うように、エリクは機体を翻して隊長の下へと向かった。首尾よく撃墜できたのだろう、2機の下方には四散した『スターファイター』の残骸が転がっている。

『よーしお疲れ、凄いだな。後続の5機に向かおう。ヴェイナス隊、気球の対処までどの程度かかる?』

一層激しさを増す豪雨の中、翻る4つの翼。その上方で、ヴェイナス隊の『スカイホーク』は散開し、各個に観測用気球の排除に動いていた。近代化改修を受け、搭載機銃を30mmに改造されたA-4Nの機銃掃射を前に、気球は一たまりもなく次々と撃墜されてゆく。この調子ならば、万一こちらが標的となっても精度の高い射撃は困難となるだろう。いつ例のレーザーが向くかと気が気ではなかったが、何とか杞憂に終わりそう

だった。

『スカイホーク』が、また一つ気球を撃ち落とす。初速の劣る30mmで寸分違わず中央を撃ち抜いたその手腕は、例の隊長機のようなだった。

末路の見えた戦場、来るべき撤退の機。それらをひっくり返す予想だにしない一瞬という意味では、『それ』もまたF-104の脱出劇同様、『あつという間』だった。

《ヴェイナスよりハルヴ1、見事な手並みだったよ。見える限りだとあと1つだ。すぐに落としし…》

瞬間、空から光が注いだ。

彼方から注ぐ光の筋は、合わせて5本。僅かに桃色を帯びたそれらは、刻一刻とその軌跡を変えてゆく。まるで、光そのものが意志を持って、獲物を探るかのように。

——これは、まさか。

数日前にも目の当たりにした、数多の機体を灼いた様と寸分違わない光景。

エリクの心がぞつと粟立つのと、集った光が『スカイホーク』を一瞬で両断したのは同時のことだった。

《…!?何だ、今のは…?…おい、応答しろ、ヴェイナス3!》

「…ロベルト大尉!今のは…!」

《見逃しちやくれねえか…!各機散開!聞こえるか、ヴェイナス隊!すぐに後退しろ!》

《馬鹿言うんじゃないよ！あと一つくらい、すぐに落としてやるさ！気球さえ落とせば精密照射は……！》

《無茶だ！『あいつら』がいる限り、レーザーはまた来る！》

突出するヴェイナスの『スカイホーク』を、ロベルト隊長の通信が追いかける。気球を潰しても無駄、『あいつら』。その言葉の意味する所に、エリクもはつと思ひ当る節があつた。

先ほどの攻撃は、レーダーと気球をほとんど潰したにも関わらず、その照射はこちらが見えているかのように正確だった。しかも明らかにこちらの斜め上空からの照射であり、明らかに『テュールの剣』の高さを上回る位置から放たれたものであることを物語っていた。加えてこちらに接近していた、レーザーの本数と符合する5つの機影。

そういえば、最初に『テュールの剣』の攻撃に見舞われた作戦の時にも、こちらと一定の距離を保った敵編隊がいた。記憶が確かならば、その数もまた、5。——つまり。エリクの、そしておそらく隊長の頭にも浮かんだであろうその仮説。それは待つまでもなく、直後に立証された。南東の空に浮かぶ5つの機影と、そこから放たれた5筋の光がヴェイナスを貫く光景によって。

《ぐうっ……!?この、ヤロウ……！》

《事前情報通りだ……奴ら、航空機にレーザーを反射させて長距離射撃をしてやがる。

ヴェイナス1、脱出しろ!」

《…まったく、何てザマだい…。ハルヴ1、ウチの部下のこと頼んだよ》

《おうとも。ヴェイナス隊、聞こえたらすぐに後退しろ!背中俺らが守つてやる!》

左翼を失った『スカイホーク』から、パラシュートが空に舞う。残った2機の『スカイホーク』は、滑るように低空へと機首を向けて、帰路となる北西方向へと鼻先を向けて行った。豪雨の戦場に残ったのは、4機の『クファイル』と上空の5機。そして空を裂く雷鳴と、彼方に聳える5つの塔。

《困りましたね。気球を潰したものの、あれらがいては迂闊に帰れない》

《そ、そうですよ……このままじゃどこにいても背中を狙い撃ちされます。何なんですか、あの反則兵器……!》

《まーまー落ち着けお二人さん。エリク、どうするね?》

レーザーの充填に時間を要しているのか、しばし止んだ光軸の雨。その隙間を縫うように、ハルヴ隊の4機は各個思い思いの機動を描きながら上空を見上げた。機種は判別できないが、上空の5機は雁行に近い、逆U字の隊形でこちらを見下ろしている。小隊内でも高度差と幅を設け、広範囲にレーザーを照射しうる独自の隊形なのだろう。いずれにせよ、この位置関係では不利は否めない。

ロベルト隊長からの試すような問いに、エリクはできる限りに頭を巡らせる。とはい

え、状況が状況であり、元々咄嗟に作戦を考えると、いう器用なことは得意ではない。せいぜい今利用できるもので突破口を開きたい所だが、AAMと機銃しかない今の状況では高が知れている。『クフィル』の加速度を活かして逃げたいのが本音だが、そうすればクリスの言う通り容赦なく背中を狙い打たれるだろう。一心に加速をかければその分機動は鈍り、先程の敵機同様に回避を困難にするだけとなる。

そう、先程の『スターファイター』のよう、に…。

「……………」

《…先輩？》

「…よし、全力で加速をかけましょう」

《ほう》

「ただし、敵の方に」

《…ほほう》

口角を上げたような、大尉の含み声。それで、方針は決まったようなものだった。機首を上げる。4機が4機、一斉にエンジンを吹かし加速をかけてゆく。

見る見る数値を上げてゆく回転数、速度計、そして高度計。速度の高まりとともに、風防を穿つ水滴も勢いを増してゆく。

高度差、1500。上空の5機が隊形を崩す。

中心に1機。やや高度を下げて両翼に2機。さらに下、より幅を取って残りの2機。殺到するこちらを焦点に捉えるような、扇を広げたような隊形。

《2セル！目標両翼端！》

2機×2隊形、目標は左右端の敵機。

命令を咀嚼し、エリクは目標を見定める。狙いは向かつて最右翼の敵機。紡錘状の胴体に、後退翼と機首下のエアインテークを備えた、小柄な機体。機体下部に鏡を備えた、空飛ぶ反射鏡――。

《来るぞ！両翼分散！》

目前で、不意に敵機が機体を傾ける。回避行動とは異なる、扇形の中央へと機体下部を向ける独特の挙動は、まるでステージを照らすライトのようにも見える。

――照射準備。

脳裏にその言葉が浮かぶと同時に、エリクは操縦桿を右へと倒す。

先程まで飛んでいた位置に、桃色の光が照射されたのはその直後のことだった。

《案の定……照射中は……》

「その位置を変えられない！」

掠めるレーザーを潜り抜け、奔った一筋を翼に刻まれ、それでも機体は音速を越えてゆく。目標、斜め上方。兵装選択、AAM。距離、900。外す筈も無い、射程距離内。

「貰ったっ!!」

《てえええっ!!》

動けない筈の位置、外す筈のない距離。

——それならば、その『結果』は、偏に敵パイロットの技量によるものだったのだろう。

4発のミサイルの軌跡が見えているかのように、眼前の敵機は急減速しつつ機体を傾けて、投影面積を一瞬減少。小柄な機体を活かしてエリクのミサイルをすり抜けると同時に意図的に失速を生じさせ、クリスの2発をも見事に回避しおせたのである。有り余る速度差に機銃掃射の暇もなく、その敵機はあつという間に二人の前から消え失せていった。

《嘘…!?!》

「冗談だろ…! 何だ、あのデタラメな機動!」

《く…! 申し訳ありません、こちらも外してしまいました》

《たは…: まあ、納得つちや納得かね。見てみる、あの塗装》

ロベルト隊長とヴィルさんも同様らしく、目標としていた左翼端の敵機を逸して編隊上空を抜けてゆく。

隊長をして攻撃を当てさせない、驚くべき技量。存外に落ち着いた声音の隊長に引か

れるように散開する敵機を見下ろしたエリクは、思わず驚愕の声を上げそうになった。鏡張りの機体下部と裏腹に、その機体上面には一般機とは一線を画する塗装が施されていたのである。機首を中心点とし、赤、白、緑と、放射状に彩りを変えてゆく特殊な塗装パターン。戦争の空におおよそ似つかわしくない、ラテイオの色に染め抜いたカラフルなその姿は、子供の頃に航空ショーで見たことがある。

あれは――。

《…『バンディエーラ・トリコロリ』?!?……ほ、本物?!?》

《専用塗装のG・91に、先程の操縦技術…悲しいことに、そのようですね》

ラテイオが誇る曲技飛行隊、『バンディエーラ・トリコロリ』。ラテイオの言葉で『三色の旗』を指す、世界でも指折りの技術を持つ飛行小隊である。旧式ながら軽快で運動性に優れるG・91を駆り、他国の曲技飛行隊では真似できない技を軽々とこなすその様は、テレビでも幾度となく紹介された有名なものだった。

だが、それが今や敵だとは。彼らが、戦争の空を飛ぶことになるとは――。

命の瀬戸際にある事をも忘れ、苦い思いを嘔み潰すエリク。だが、敵は敵。レーザーの中継点となる彼らから逃げおおせることが、今は最優先事項である。

省みた顔を、エリクは再び正面へと戻す。低空から見上げた唯一の活路、空一面の曇天へと。



「……とにかく！『作戦は成功』です。全機、このまま雲へ!!」

《——だな！あんなのに追われちゃ体が持たねえ、とつとつとずらからうー!》

再び編隊を構成し反転する5機をよそに、音速を越えた『クフィル』が厚い雲へと突入する。ばちばちと爆ぜる雨滴とエンジンの轟音を残し、視界は一時闇へと包まれた。

エリクが考案した作戦とは、すなわち以上のように機体特性を活かした一撃離脱であった。

『クフィル』の加速力の高さはこれまでも経験して来た通りであり、一たび加速がつきさえすれば、ほとんどの機体を引き離すことは容易である。攻撃で敵編隊を崩した上で逃げに徹しさえすれば速度が下がる危険もなく、安全な撤退が可能と言う訳である。つまりは、先の『スターファイター』が仕掛けた理想的な一撃離脱戦法を、上昇する形で再現したのである。唯一の心配である『テュールの剣』からの狙撃も、気球の大部分を潰したため心配する必要はない。雲の下からでは目視でこちらを捉えられない以上、バンディエーラ・トリコロリーによるレーザー中継も不可能と言って良いだろう。まさに、機体特性と天候に救われた形だった。

《…それにしても、あのバンディエーラ・トリコロリーが敵だなんて…》

「……………」

轟音と暴風に消え入りそうなクリスの眩きが、その絶望を物語る。

オーシアの曲技飛行隊『アクア・エンジェルズ』と並び、空を飛ぶ者が一度は憧れる存在。そんな彼らが、ラティオの超兵器を支える戦力となつて立ちはだかるなど、一体誰が想像し得ただろうか。声には出さねど、そこに抱える複雑な思いは、おそらく自分も、隊長やヴィルさんも変わらない。

不意に眼前が明るくなり、機体が雲を突き抜ける。

轟音を背に、宙返りから反転する『クファイル』。武装を全て使い果たした機体は、思った以上に軽い。

雲の上に広がるのは、澄み渡った晴天と太陽。

キャノピーの水滴に反射する日の光が、何故か今日はいやに冷たく感じられた。

## 第8話 ラティオ西郡迎撃戦（前） — Sky High

「…たった、これだけか…」

銀翼の眼下、遠い大地の背景に灰色を映えさせる機影を数え終えて、最初に口を突いたのはその言葉だった。

機数、わずかに7。それも漏れなく機体にはいくつもの銃創が刻まれており、煙を噴く最後尾の1機に至っては今にも墜落しそうな様にすら見える。

降って湧いた、ラティオ軍による大規模反攻攻撃の情報。同盟国ウステイオとの連携を待たずして、レクタ独自に派遣された邀撃部隊の成れの果てがこの姿だった。事前のブリーフィングによれば、第一次邀撃隊は新たに導入された最新鋭機『グリペンC』を加えた計28機。それが、実に四分の一にまで減少し、落ち武者さながらの姿となって撤退するこの光景は、エリクにとって大きな衝撃だった。

こちらと入れ違い、レクタ領内へと飛んでゆくそれらを目で追いながら、同時にこちらの後方や左右に翼を翻すいくつもの機影へと目を走らせる。

レクタ第二次邀撃隊として派遣されたのは、総勢18機。先頭をスポーク隊の『タイ

ガーIII』2機が行き、そのすぐ後方にエリクが属するハルヴ隊の『クファイルC7』4機が続く恰好である。左右両翼にも、それぞれ『クファイルC7』4機ずつから成る2小隊が並び、部隊の最後方には『グリペンC』4機が続くという編制となっていた。

機数こそ第一次邀撃隊より少ないものの、主として本土防空の迎撃任務に当たっていた第一次邀撃隊と比べ、開戦前後から前線の防空に当たっていた自分たちはいわば練度に優れた百戦錬磨の部隊と言えなくもない。おまけに、今回はウステイオ空軍との共同作戦となるため、実質的な機数は倍以上になる計算である。場数を踏んだ自分たちの存在と、少ない機数を練度で補うウステイオ軍機の存在があれば、第一次邀撃隊と同じ運命に陥ることは無いに違いない。

そう強引に予見を結んだ自分が、気づけば藁にも縋りたい思いでいることに気づき、エリクは思わず舌打ちをした。逼塞していた敵軍の決死の大反攻、そして立ちふさがった友軍部隊の敗亡。その様を目にして、曲がりなりにも勝ち進んで来たレクタの運命に不安を抱いているとでもいうのか。

ふうっ。酸素マスクの内側で、エリクは深く息をつき、余計な存念を頭から追い払った。

後方警戒ミラーの中に映った、煙を噴いた『ミラージュF1』が墜落してゆく様を、極力視界に映さないようにしながら。

雲量1、快晴。14時を少し回った真昼の空は、果てなく明るく広い。10月に入り、秋の穏やかさを纏った空気は空の上でも変わることは無く、空をも埋める大編隊が迫っている逼迫など微塵も感じさせなかった。遠方まで見渡せるのは迎撃において有利にも働く反面、雲に隠れて爆撃機への奇襲を行うといった搦手は使いにくい。爆撃する側にしても、目標が雲で覆われる曇雨天では都合が悪いと判断したのだろう。晴れ渡ったこの日を狙って万端に準備を進め、乾坤一擲の語に相応しい大部隊を送り出したラティオの意気は、推して知るべしという所だった。

そもそも、この戦争において、ラティオは初戦を除き敗退を続けて来たと言える。

開戦直後の電撃戦はレクタ・ウスティオそれぞれで食い止められ、返す刀の逆電撃戦でラティオ西郡の防衛線は次々に突破。レーザー兵器『テュールの剣』で辛うじて進軍を食い止め、戦線を膠着させるのが精一杯の状態にあったのだ。

防戦一方の状況を、『テュールの剣』を梃てこに挽回てんげんしたいラティオの事情。その状況に情勢が拍車をかけたのは、つい先日のことだった。

先日——すなわち2010年10月4日。目下攻勢を受けていたオーシアの最西端たるサンド島に、ユークトバニア揚陸部隊が上陸作戦を敢行したのである。9月27日の開戦以来、攻勢を仕掛けつつも有効な打撃を与えきれいかなかったユークトバニアが業を煮やし、オーシア本土へ直接橋頭保を築くべく先手を仕掛けた形だった。サンド島

を護る部隊は僅かな航空部隊に過ぎず、対してユークトバニア軍は10隻以上の護衛艦艇と強襲揚陸艦に加え、噂の最新鋭戦闘潜水空母『シンファクシ』まで投入するという念の入れようだったという。その戦いの帰趨は、自ずと明らかだった。

だが。その大方の予想は見事に裏切られた。オーシアの誇る大気機動宇宙機『アークバード』の戦線投入、そしてサンド島航空部隊の決死の抵抗により、ユークトバニア揚陸部隊はことごとく壊滅。満を持して投入された『シンファクシ』も撃沈の憂き目に遭い、ユークトバニアによる上陸作戦は部隊の全滅という結末に至ったのである。

予想を裏切った同盟国の勝利に、オーシアのみならずレクタも沸いた。翌日の朝刊の第一面にはその報がでかかど載り、レクタの国威発揚に一役買ったほどである。

忙しさにかまけて詳細までは読み込んではいないが、エリクの印象に残ったのはサンド島海岸に漂着した『シンファクシ』の残骸、そして防衛を担ったサンド島飛行小隊の写真だった。彼らの乗機なのだろう、犬のエンブレムを施されたF-5E『タイガーII』と、それを背にした4人の男女。真ん中の一際大柄な男が隊長なのだろうか、太い左腕には青年が抱え込まれ、右腕は後ろに立っている男の顔を隠してしまっている。そしてその傍らには、呆れたような、あるいは見守るような、落ち着いた目をした女の姿もあった。いずれも概して若く、その戦績も相まって、読者の印象にも好ましく映ることだろう。何よりエリクには、『仲間』を印象付ける気の置けないその距離感が、一際印象に

残っていた。

ともかく、この戦闘の結果は一局面の勝利に留まらず、オーシア・ユークトバニア間の戦局にも大きな影響をもたらした。これまで対オーシア戦の主軸を担っていた『シンファクシ』の喪失に伴ってユークトバニアの攻勢が止まり、オーシアに戦線を構築する余力が生じたのである。

周知の通り、オーシアはウステイオやレクタと、ユークトバニアはラティオと同盟を結んでいる。オーシアとユークトバニアの力関係の微妙な変化が、オーシア東方諸国にも影響を与えるのは最早当然の帰結だった。すなわちラティオ側においてはユークトバニアからの支援の遅延という課題が、ウステイオ・レクタ同盟においては『テュールの剣』攻略に向け『アークバード』投入の可能性が生じたのである。

膠着を続けられ、やがて不利を免れなくなる。ラティオの抱いた危惧はまさにそれであり、その打開のために出せる限りの航空戦力を投入するというのはある意味で常識的な判断だったと言える。この機に集中したレクタ・ウステイオ連合の陸軍主力を殲滅できれば、戦況を五分以上に戻すことも可能だからだ。

《…聞こえるか、こちらウステイオ空軍第6航空師団所属、空中管制機『イーグルアイ』。接近中のレクタ軍機へ、指揮官の所属およびコールサインを知らせ》

甲高く、それでいて落ち着いた声が、エリクの内省に終わりを告げる。事前情報に

あつたウステイオ軍の空中管制機だろう。まだ『クファイル』のレーダーにそれらしき反応は無いが、こちらの存在を遠方から正確に捉えている辺り、その電子性能の高さが窺い知れた。

《こちらはレクタ空軍第5航空師団第99教導飛行隊、スポーク1。貴機の誘導に感謝する》

《了解した。イーグルアイよりスポーク1、ラテイオ戦爆連合が防空エリア内に接近しつつある。ただちに方位095へ変針し、展開中のウステイオ軍機に合流されたし》

《了解。レクタ各機、本機に続け》

アルヴィン少佐の『タイガーⅢ』が僅かに機首を右へと傾け、パウラの『タイガーⅢ』、ロベルト隊長の『クファイル』がそれに続いてゆく。エリクもそれらに倣い操縦桿を傾けながら、視線は二つ前のパウラ機を追っていた。

見る限り旋回の様子は常通り、本人の言う通り負傷も特になく、これといった不安要素は見取れない。先日の作戦で『テュールの剣』による攻撃を受けて機体を中破させたパウラだったが、元々の技術面では自分を上回ることもあり、万一の心配も杞憂に終わりそうだった。唯一異なる点といえば、緑主体のダズル迷彩を施されたアルヴィン機と異なり、その機体が灰色一色の塗装に留まっている点くらいだろう。教導隊が保有する予備機を回してもらったとのことで、急拵えの配備である以上、この点は仕方のない



ことだった。

機体を奔らせ十数分、雲一つない蒼穹に、黒い影がぼつりぼつりと浮かび始める。やや大型の機影のみ、はじめは少数。距離を詰めるにつれ、その周囲の小さい機影も徐々に捉えられるようになってくる。ざっと見渡した限りだと、電子戦機や空中給油機と思しき大型機が2機、戦闘機16機という所だろうか。戦力で言えばレクタ軍と同数で、迎撃戦力は倍増する勘定になる。

《ウスティオご自慢の精鋭部隊か。頼もしいねえ》

《空中管制機の存在も有難い限りですね。これだけの数だ、連携も大変でしょうから》

ウスティオ編隊の隣に並び、隊長とヴィルさんのやりとりに耳を傾けながら、エリクもその様子を顧みる。背中に大型のリーダードームを乗せた、おそらく『イーグルアイ』と思しき管制機——E-767を中心に、周囲を囲む戦闘機は大きく分けてわずかに2機種。高額な高性能機を少数と、安価でコストパフォーマンスに優れた主力機の混成——いわゆるハイ・ローミックス構想を徹底してウスティオ空軍は構成されており、他国と比べてそもそも機種が少ないのが特徴である。この時も、編隊先頭のF-15C『イーグル』4機を除き全てF-16『ファイティング・ファルコン』系列で構成されており、一般的なウスティオ軍という様相を呈していた。軍の一部を傭兵で賄っているという点と併せ、このような軍編制の特徴は『ベルカ戦争』当時から変わっていないとい

う。

《イーグルアイより連合軍各機へ。これよりラテイオ編隊迎撃を開始する。敵編隊は高度3500前後を飛行中、大型機10、小型機28で構成されている。さらに高度4500にも小型機4を確認。各隊は高度4000へ移行し前進せよ。バハムート隊、ならびにメイス1から8は先攻し、敵護衛機を爆撃機から引き剥がせ。メイス9から12は上空の4機を排除したのち空戦域に合流せよ。レクタ各隊は敵爆撃機への攻撃に専念されたし》

《こちらバハムート、了解だ。イーグルアイ、遅刻してる連中に伝えておいてくれ。お前達が遅いから先に頂いちまうぞってな!》

《こちらスポーク、了解した。ウステイオ機に続いて攻撃を実施する。レクタ各機、いな》

戦闘に巻き込まれかねない空域に、無防備な空中管制機を置く訳にはいかない。『イーグルアイ』と空中給油機を後に残し、連合軍の戦闘機は一樣に機首を上げて高度を取りながら、接近しつつあるラテイオ編隊へと鼻先を向けていった。合わせて34機もの戦闘機がひと塊となつて統制行動を取る姿は、流星に圧巻である。ベルカ戦争以降軍縮が進んでいた各国のことを思えば、これほどの部隊はおいそれとはお目にかかれなうことだろう。

——しかし。

時間にして、わずか数分。やがて目の前に現れたラティオ編隊は、そんな偉観すらも小さく見えるほど、想像を超えたものだった。

《……なんて、数……。あれが、全部敵だなんて……》

通信に思わず零れた、クリスの声。私語を挟んだクリスを窘める声一つ聞こえないのは、全員がその様相に圧倒されていたためだろう。

事前情報通り、敵は大型の4発爆撃機を中心にした38機、そして離れて頭上に4機。いずれも遠く機種は窺い知れないが、大型の爆撃機が加わっている関係上、その編隊規模は数以上に大きくも見える。戦闘機の数だけ見ればこちらが上だが、その強みも相手の機種や技量次第ではどうなるか分かったものではない。

敵編隊が眼下に近づく。頭上の4機は後方の『イーグルアイ』を狙う積りなのか、下方に位置するこちらを素通りする挙動を示していた。それに反応して機首を上げた左翼の4機は、おそらく先程指示を受けていたメイス隊のF-16だろう。相對している互いの体感速度は速く、その距離は瞬く間に長距離ミサイルの有効射程範囲を割ってゆく。

《バハムート、メイス各隊、かかれ！》

セミアクティブ空対空ミサイルとともに放たれた声。それに弾かれるように、左翼側

のウステイオ軍機は一斉に機体を翻し、眼下の敵編隊へ向けて殺到した。

先行したS A A Mにラテイオ機の1機が撃ち落とされ、真正面から放たれた空対空ミサイル<sup>A</sup>をもろに受けたF-16が四散する。F-15Cが敵編隊を断ち割り、閃光と白煙が錯綜する。飛び交う砲火の応酬に、先ほどまでの整然とした編隊は一変して、一瞬にして混戦の渦へと飲み込まれていった。倍する敵にも関わらず統制を乱しおさせた辺り、流石は練度を誇るウステイオ軍と思わせる手並みである。

ウステイオ軍機が敵編隊を突つ切る。左右両翼に分かれた護衛機があるいは追い、あるいはこちらへ機首を向けて来る。既に敵機は遊撃の体勢に入り、爆撃機に張り付いているのは僅か4機程度に過ぎない。大柄の爆撃機と、こちらを指す護衛機。その間に生じた『穴』が、エリクの目にもはつきりと映った。

《レクタ各機、突撃！目標、敵爆撃機！》

《敵さんは『ベアH』か！食い過ぎて腹壊すなよ！》

アルヴィン少佐の声とともに『タイガーIII』から増槽が捨てられ、左へ傾いた小柄な機影が急降下してゆく。エリクは同様に増槽を捨て、左下方へと傾いた機体からその敵の姿を見やった、

急な後退角を描いた主翼に、左右二つずつ設けられたエンジン。その先端に回るプロペラは、その機構が今頃珍しいレシプロ形式——正確にはターボプロップエンジンであ

ることを如実に物語っている。間違いない、その姿はラティオが保有する大型爆撃機、T U — 9 5 『ベア』。ロベルト大尉の言葉によるならば、その中でも新鋭型のT U — 9 5 M S 『ベアH』だろう。1 0 t を優に超える兵装搭載量、そしてその機数を考えれば、まともに攻撃を受ければヴァーレ・トリツアの駐屯地など容易に壊滅してしまう。

通す訳には、いかない。今更ながらの決意一つ、エリクは照準の先に横たわる機影を視界の中心に捉えた。真正面から迫る敵機は1 2 機、2 枚羽根の尾翼はM i G — 2 9 『ファルクラム』か、S u — 2 7 『フランカー』系列か。機種を確かめる余裕もなく、エリクは操縦桿を右斜め手前へ引き、同時にフットペダルを和らげる戦闘機動——バレルロールで以てその矛先を回避した。後方で爆発の光が生じたが、それを確かめる余力はない。

敵戦闘機と馳せ違う。

『穴』の最中へ機体が飛び込む。

狙うは、前から2 番目の『ベアH』。レシプロ機では最速と謳われる機体といえども、音速を越える『クフィール』とは元より速度が違う。斜め上からの攻撃という直撃を期し難い相対位置でも、低速の相手ならば命中は容易に違いない。

距離、1 5 0 0。1 2 0 0。1 0 0 0。今まで相手にしたことのない大型の機影に、ややもすれば距離感が狂いそうになる。

この際、目は頼りにならない。距離が900を割り、『クフィール』が上げたロックオンの声を頼りに、エリクは操縦桿のスイッチを押した。

機体から放たれ、直進する2筋の白煙。それを追う間もなく、エリクは操縦桿を引き上げ、急降下から右斜め上昇へと機動を変えた。敵編隊の下方へ抜けるのが一番安全ではあったが、高高度迎撃戦で迂闊に高度を失えば、以降の追撃に支障を来しかねない。高度計の針が数を刻む最中、振り返ったその後方では、ミサイルの直撃を受けた『ベアH』が3機、ゆつくりと高度を落としてゆく様が目に入った。

《敵護衛機反転。スポーク1より各機、散開。各個に追撃を続行する》

《ハルヴ1了解。ハルヴ各機、2セルで行く。絶対に2機体制を崩すな、敵は山ほどいるぞー！》

「了解……！クリス、後ろに就け。何かあったらすぐに言えよ」

《分かりました！絶対に先輩の後ろは取らせません！》

言うようになつたもんだ。後輩の意気込みに思わず眩きながら、エリクは『クフィール』の小柄な機体を右旋回させ、爆撃機編隊の後方を取るべく機首を翻した。これで、残存機は残り9機。戦場を俯瞰すると、先程ウステイオ機を追っていた敵護衛機も空域に戻っており、そこへ再び乱入したウステイオ機と併せて、戦場は乱戦の様相を呈し始めていた。上空、下方、左右、前後。その全てにいずれかの戦闘機が舞い、絶えず火線と

爆炎を刻んでいる。

60機に迫る多数の機体が入り乱れ、命を削り合う空。これほどの大規模な空戦は、エリクのみならず両軍の兵士にとっても初めての体験だっただろう。

狙うべき獲物は、どれだ。交錯する空の中で、エリクは目を走らせる。ウステイオのF-116に散らされたMiG-21か、友軍の『クファイル』を追うSu-27か、それとも『グリペンC』とドッグファイトを演じ隙だらけのMiG-29か。追わんとする連合軍と、それを懸命に食い止めるラティオ軍機の乱舞。規則性のない渦のようなその空間から、2機の機影が抜けたのはその時だった。

ウステイオの国籍マークが施された、2枚尾翼の大型の機体。遁走するTu-95MSを追うその2機に気づいたのか、護衛機2機が旋回してその背を追いつつある。切り欠いたデルタ翼を持った、レクタ機とは異なるあの意匠は間違いない。

「ウステイオの『イーグル』……まずいな、優位を取られてる。クリス、急ぐぞ！」  
《わ……分かりました!》

フットペダルを思い切り踏み込み、生じた加速に体がシートへと押し付けられる。周辺の空戦を後に残し、エリクとクリスは『クファイル』の加速を活かして、追撃するその背を追った。

『イーグル』の背を追うのは、2枚の垂直尾翼と尻尾のような長いテイルコーン、すら

りと伸びた機首を持った大型の戦闘機。機体形状からS U—27『フランカー』系列と見られるその2機は、『イーグル』の後方斜め上空に占位し、徐々に距離を詰めつつあるようにも見える。後ろから頭を押さえられる不利を強いられる位置だが、おそらくウステイオのパイロットもそれを承知の上で爆撃機を追撃しているのだろう。敵の護衛機が友軍を押しとどめている今、誰かが追撃を仕掛けなければ『ベアH』に振り切られるのは明白、という訳である。

だが——『フランカー』が『イーグル』を射程に収めるのに、果たして間に合うだろうか。

「く、流石に速いな……」

《……ッ！せ、先輩！後方敵機2！》

「何？……くそ、こんな時に……！」

《一旦回避しましょう！このままじゃ二人とも……！》

唐突に入ったクリスの声に、思わず舌打ちが漏れた。顧みた後方には、確かに小さな機影が二つ。機種は判然としないが、その進路は明らかにこちらを指向している。友軍機を追うこちらの排除を目論んでいるのは、考える間でもなく明白だった。

回避のために左右に分散すれば、矛先をかわすのは容易である。だが、一旦速度を緩めてしまえば、『ベアH』はおろか、背を追われている『イーグル』に追いつくことすら



ままならなくなる。唯一敵の防衛網を抜けたあの2機は、言うなれば希望。ここで失う訳にはいかなかった。

ならば。

「駄目だ、ここで緩めたらあの2機がやられる！…クリス、『奥の手』を使う。サンドウィッチで縦に挟むぞ！」

《へ？…あ、あつ、はい！奥の手、サンドウィッチ…分かりました！》

間の抜けた声を返すも一瞬、クリスもすぐに意図する所に思い当つたらしい。ぐん、とこちらを抜いて一気に加速したクリス機の横で、エリクは操縦桿を引いて、『クファイルC7』の機体を急上昇させた。

エリクの意図は、後方の2機を所謂サンドウィッチ戦術に嵌めることだった。すなわち、僚機を追う敵機に対してこちらは上昇・減速し、下方を追い越してゆく敵機に上方から襲い掛かる古典戦術である。もつとも、今回は敵機が複数である上、一時でも速度を落とさざるを得ないこの戦術は、常ならば適正とは言えないだろう。

それを知ってか知らずか、エリクは上昇する機体からちらりと後方を見やる。思った通り、敵機の片方はそのまま直進してクリスを追い、残る1機がこちらを追って上昇に入る所だった。葉巻状の胴体を持つその機影は、MiG-21系列に違いない。

喰いついた。

口角に浮かんだ笑みを嘯み殺しながら、エリクは『奥の手』の鍵たる正面操作盤のボタンを押し込んだ。

正面操作盤の脇、多目的ディスプレイに表示されていたモード表示が、『COMBAT』から『CM・PLUS』へと置き換わる。こおお、と深呼吸をするかのような音が、一瞬コクピットを満たす。

瞬間。

一際強くなったエンジンの唸りとともに、エリクの『クファイル』はぐん、と速度を速め、後方に迫るMiG-21を一気に突き放した。十分に速度と高度を稼いだ所で眼下を見やれば、同様に速度を速めたクリスの『クファイル』を、ラティオのMiG-21が懸命に追っている姿が見える。

狙い通り。

操縦桿を元に戻したエリクは、間髪入れずそれを前に倒し、機首を下方へと向けてゆく。眼前には、こちらの存在を完全に意識の外にしたMiG-21の姿。

ヘッドアップディスプレイの中でダイヤモンドマークに捉えられたそれは、一瞬後に放たれたAAMによって、三角の主翼を空に飛ばして落ちていった。振り返れば、後方のMiG-21は遙か彼方にある。高度は向うが高いとはいえ、この速度差では追いつくことはできないだろう。

『奥の手』というのは、すなわち『クファイル』のエンジンにのみ備わったこの特殊な機能——『コンバット・プラス』と呼ばれる機構であった。

戦闘機の推力強化機構としては、エンジンの排気に燃料を吹き付けるアフターバーナーが知られている。航続距離と引き換えに最大推力を引き出すこの機構は戦闘機にとって一般的なものだが、『クファイル』の場合はそれに加えて、この『コンバット・プラス』機能が備えられていたのである。短時間ながら推力を5%向上できるといふこの機能は、まさに『クファイル』のみが持つ奥の手と言うにふさわしいものと言えるだろう。

《流石です、エリク中尉！》

「気を抜くなよ、本番はこれからだ！射程に入り次第撃て！」

《はいっ……ハルヴ4、FOX2！》

『コンバット・プラス』が功を奏し、詰まりつつある『フランカー』との距離。その背へ向けてクリスがAAMを放ったのと同時に、エリクも目標へ向けてAAMを一発撃ち出した。クリスとはもかく、その後方にいたこちらはそもそももとにも狙いをつけないままの射撃である。尾部へ命中し、僚機から落伍してゆくクリス側の『フランカー』とは対照的に、エリクの方の『フランカー』は運動性を活かして左方向へと急旋回。連続した左右への旋回で迫るAAMを振り切り、近距離からの攻撃を見事に回避しおおせて見せた。もつとも、回避運動でその高度はかなり失われてしまっている。ウステイオの

『イーグル』が攻撃位置に就くにはおそろく間に合わないであろう。

《こちらバハムート3。ありがとな、助かったよ。お札に獲物は山分けてどうだ?》

「お札は嬉しいけどな、こっちは弾切れ寸前だ。いつそ全部貫つてつてくれ!」

《イーグルアイより各機、敵編隊が攻撃可能ラインを突破しつつある。急ぎ撃墜せよ》  
ウスティオ空軍機のおくまで呑気な声に応じた所へ、イーグルアイの督促が拍車をかける。

攻撃可能ライン——すなわち、『ベアH』が搭載している可能性の高い空対地ミサイルの想定射程範囲。その意味を読み取ったのだろう、2機のF-15Cは雑談もほどほどに、それぞれ『ベアH』の後方へと機位を向けていった。

「…クリス、残弾はいくつある?」

《AAMは残り2発、機銃は合わせて200強です》

「こつちももうAAMは1発しかない。…あいつらに頼る他ないか…!」

それぞれ爆撃機に食らいつく2機の『イーグル』の後方で、エリクは後方の戦場を顧みる。絶えず火線こそ上がっているものの、機数でほぼ同等な戦場から他に抜け出る機影は見られず、爆撃機を巡る攻防戦は膠着しているように見受けられた。緑のダズル迷彩を施されたタイガーIIIが一步抜け、その横からSu-27が掃射を仕掛け妨害する。こちらを指したラティオのMiG-29を、ロベルト隊長の『クファイル』がかき乱す。互

いの足を引つ張り合う混戦の中では、こちらへの支援は期待できそうもなかった。つまり、この4機で残る敵爆撃機を全て落とさなければならぬ。

くそ。口内に吐きながら、エリクは編隊最左翼の『ベアH』に狙いを定めた。速度差があり、先のMiG-21と比べれば捕捉は容易である。

ロックオン。電子音が響き、『ベア』の致命の時を告げる。

右から回り込んだクリスと同時に、放たれたAAM。合計3発のミサイルが、その機体へと殺到した。

機体尾部、エンジン、主翼付け根。それぞれに爆炎を刻んだ機体が傾き、大穴の空いた主翼が根元からへし折れて脱落してゆく。大きく機体を傾けた『ベアH』は、直後にバランスを失ってきりもみ状に落下していき、爆散。その破片の渦の中に、落下傘の白色は一つも見ることができなかった。

先に『イーグル』がそれぞれ1機ずつを撃墜したこともあり、残機数はこれで4。既にウステイオの2機は次の目標へ向けてミサイルを放っているが、攻撃可能ラインへの到達に間に合うかは非常に危うい。ミサイルが尽きたとは居ても立ってもいられず、エリクとクリスは『ベアH』の後方に取りつき、機関砲で以て銃撃を浴びせかけた。大型の機体相手ゆえに命中は容易であるものの、相応に頑丈な『ベア』はなかなか火を噴かない。尾部の23mm機関砲の火線をロールで回避しながら、エリクは必死に照準を覗き

込み、引き金を引いて機銃弾を浴びせ続けた。

墜ちろ。間に合え。間に合え——。

《よし、2機ダウン。バハムート4すまん、こっちは弾切れだ。あと1機頼んだ》

《了解。ラス1、お言葉に甘えてゴチに…》

掃射を受ける『ベア』の左右で、『イーグル』に追われていた2機が黒煙とともに落伍する。その黒煙に幻惑されたか、攻撃に専心するあまり気づかなかったか、あるいは残存機が減って幾分でも生まれた余裕のためか。唐突に降って湧いた警報に、エリクの思考は沸騰した。

「…接近警報?!——ぐうっ!!」

《先輩っ!!》

《…!?しまっ…!バハムート4!》

直上からの、殺気。些か抽象的に過ぎるが、表現するならその言葉の他無かった。真上から閃光が奔り、それが擦過すると同時に黒い何かが『クファイル』を掠め去ったのだ。停止した思考に、それが真上からの機銃掃射だったと知覚できたのは一瞬後のことだった。

腕にじわりと刻まれた痛みは歯を食いしばりながら、エリクは手早く計器盤へと目を向ける。計器類は全てグリーン、主翼に穴が開いた他は特に損傷は見られない。被弾の

際に内装が爆ぜたのか、飛び散った金属が右の二の腕を掠め、その跡に血の筋を刻んでいるのが損傷といえは損傷だった。

おそらくは、先程見逃したMiG-21。稼いだ高度からこちらを見下ろし、隙を見計らって一撃離脱を加えたのだろう、既にその軌跡すら追えない手並みは敵ながら見事なものだった。おまけに、同時に放ったミサイルはバハムート4の『イーグル』を貫き、一撃でもって爆散せしめたらしい。

バハムート4の爆炎を振り切って、残ったのは機銃すら弾切れ寸前の『クファイル』2機と、同じく残弾を使い果たした『イーグル』が1機のみ。方や、爆撃機は銃撃を受けた『ベアH』が高度を下げているものの、残る1機は無傷のまま健在である。戦闘能力を失い、後続機が突破する気配すらない友軍の状況を顧みれば、状況は絶望的だった。

《そんな…》

「……………くそっ！もう時間が無い。…一か八か、正面に回り込んでコクピットを…！」  
《待った。もう奴は爆弾庫を開いてる。到底回り込んで反転する時間は無いな》  
「そんなこと言っちゃって…もうそれに賭けるしか無いだろうー！」

絶望的な現状を分かっているのか、状況を楽しむようなバハムート3の声に、エリクは思わず苛立ちを返す。無理だろうが何だろうが、たとえ1発でも攻撃を許せば、彼方の先で友軍が何人と死ぬことになるのだ。任せられた任務を全うできず、むぎむぎ友軍

を死に向かわせていいのか。それも、目標たる爆撃機を目の前にしながら。

軍人として、レクタに生まれ育った者として、そんなことを許す訳にはいかない。その地に根差さない傭兵には分からないかもしれないが、これはいわば軍人としての矜持の問題であった。

操縦桿を握る力を強める。瞳を向け、狙いを定め、肚に力を籠める。たとえ無謀でも、やってやる。そう、たとえ可能性は低くても。たとえ、この身をぶち当ててでも――。

《まーまー落ち着き給え。ここはいつちよウステイオ傭兵の技量に頼つて貰おうじやないの》

「…へ?」

勝負を賭けてフットペダルを踏みかけた矢先、被せられた軽い声に思わず素っ頓狂な声漏れる。

傭兵、の、技量。

その意味する所が判然とせず、脳裏が不意に混乱したその一瞬。バハムート3の『イーグル』はアフターバーナーの炎を曳いて一気に加速し、瞬く間に『ベアH』の頭上へと占位した。後方にしか武装を持たず、コクピットを機体前方に設けた『ベアH』の死角には違いない位置だが、ミサイルも機銃も失った機体で手出しができるものではない。そう、その他に攻撃する手段といえば。



そこまで思い至り、エリクは思わず息を呑んだ。

先程自らの中に生じた、『体当たり』の文字。それが不意に、眼前を飛ぶ『イーグル』の背に重なったのである。

まさか。このパイロットは。

「何を……！……っ！馬鹿なことは止めろ!!」

《そうさ、体当たりなんて馬鹿の極致だ。良い子は真似すんなよ!》

「……!」

まるで、先のこちらの内省を読み切っていたかのような言葉に、エリクは今度こそ言葉を飲み込んだ。

『イーグル』の昇降舵が動く。

アフターバーナーが和らぎ、日の煌めきが翼に反射する。

機首が、真下を向く。

やめろ。

その声は声にならないまま、エリクは眺めることしかできなかった。速度というエネルギーを以て急降下した『イーグル』が、その左主翼で『ベアH』のコクピットを両断する様を。

「……!」

《…嘘…!》

「……………馬鹿、が……!」

コクピットを失った『ベアH』が制御を失い、ほとんど真つ逆さまとなつて地表へと吸い込まれてゆく。『イーグル』と墜落する『ベア』から生じた黒煙に視界を阻まれながら、エリクはそう絞り出すだけで精一杯だった。

ウステイオ空軍の主力を成すという、傭兵。金のために戦う欲得の兵士、というこれまでの印象に、計り知れない何か加わつた瞬間だった。国の為に戦う訳でもないのに、何が奴らをあそこまで駆り立てるのだろう。何が、奴らを戦いに向けさせるのだろう。

内に問うても答えは出ず、エリクはただ目を地上へと向けた。砕け散つた主翼の破片の他に『イーグル』の残滓を残すものは、最早そこには見えない。墮ち行く『ベア』の破片も、漂う黒煙も、その中にきらりと見える灰色の右翼も。

——右翼。

いや、待て。ちらりとしか見えなかったが、先程バハムート3が当てたのは左翼ではなかったか？

どくん、と跳ねた心臓が、エリクの目を黒煙の中へと奔らせる。

待つこと、数秒。黒煙を割いて見えたその姿は、間違いなく『イーグル』。左主翼を失

いバランスを崩してなお、その翼は空にあった。

《せ……いせ、先輩！あれって、まさか……！》

「は……はは、は……信じられん、なんて奴だ……！」

《うえっほ、げっほ。言っただろ、俺馬鹿だからよ。それにな、傭兵はどんな手を使つても生きて還るのが信条だ。覚えときな。——んじやまた地上でな！》

思わず、心からこみ上げた笑い。それを背に受けながら、バハムート3はコクピットから射出され、数秒後にはパラシュートの白い花を虚空に開かせた。墮ち行く『イーグル』、煤だらけであろうその姿。それでもなお、エリクにはその姿が、妙に輝かしいようにも感じられた。

《こちらイーグルアイ。ラティオ爆撃機の全機殲滅を確認した。よくやった。各機、残存機の掃討に当たれ》

「……よし、行くか。もう一仕事だ」

《はい。後ろ、任せて下さい》

同じく笑っていたらしいクリスの方を見やり、頷き一つ。

2機の『クファイル』は機首を上げ、戦火絶えぬ空戦域へとその機体を向かわせていった。

パラシュートの白い花と、爆発の紅い花。それらが咲き乱れる、蒼穹の中へ。

\*\*\*\*\*

同刻、空戦域より南方30 km。

高度10000に満たない極低空域を、いくつもの機影が地表を舐めるように疾駆する様を認めることができる。

《サラヴェイ6よりサラヴェイ1。周辺に機影なし》

《連合の連中、まんまと引つかかったらしい。クークー口隊の連中は気の毒だが…》

《その分、ユーク直伝の奇襲戦を味わわせてやりますよ》

可変翼を携えた高速爆撃機、Tu-22M3『バックファイアC』。地を焼き尽くして余りある弾薬を携えた翼は、まるで空に咲く花から身を隠すように、蒼穹の下を駆け抜けていった。

# 第9話 ラティオ西郡迎撃戦（後） — GALM 《鬼神の後裔》 —

《先輩、後方機影！！》

「食いついたな。編隊解除、左から回り込め！」

操縦桿の傾きに機体が呼応し、『クファイルC7』の三角翼が航跡を曳いて右へと傾く。斜を取る空、千切れる雲、白と青の最中へと飛び込んでゆく視界。後方敵機1、顧みただ先には葉巻型の小型機——MiG-21『フィツシユベツド』の姿。『ライオンの仔』を意味するその名よろしく、回転数を上げる『クファイル』のエンジン音は、まるで背後の獲物をつけ狙う唸りのようにも聞こえる。射程距離にはすでに近く、こちらににじりと忍び寄る『フィツシユベツド』の気配すら肌身に感じ取れそうな程だった。

《…！後方、さらに1機！》

「俺がカバーする。そのまま行け！」

緊迫と緊張の中で、本能が研ぎ澄まされる。僚機——クリスの慌てた声にも、瞬時に彼我の位置を脳裏に描いたエリクは、挟撃の指示を崩さぬまま機体を僅かに上昇させた。

迎えた角が抵抗を受け、『クファイル』の速度が一瞬落ちる。後背に迫っていた『フィッシュベット』にとつて、それは刀折れ矢尽きた好餌の最期のあがきにも見えたことだろう。それこそ、後方に迫るクリスの『クファイル』の存在を一瞬忘れさせる程の魅力を以て。

上向いた視界に、雲が広がる。

殺意。ロックオンアラート。けたたましい機械音が耳を苛む。

フットペダル踏下、加速。

視界を上げる。

重力を払って上昇するこちらに、『フィッシュベット』が迫る。

その背に迫るは、カナード付き三角翼——『クファイル』。

『クファイル』の機首が光り、まさにこちらを喰らおうとしていた『フィッシュベット』を背後から嘯み砕いてゆく。

閃光、爆炎。

操縦桿を引き、宙返りから素早く上下を返す。

目の前、クリスを追っていた敵機の姿。やや斜め下方、距離700。二枚尾翼、中型

——MiG—29。

距離が500を割る。

指に、力を籠める。

言葉を交わす間すらない、一瞬の交叉。1秒に満たない機銃掃射の中で、『ファルクラム』は機体中央に30mm弾を穿たれ、二つに割れて墮ちていった。

「上手くなつたな、クリス。敵も相当減つた筈だ」

《えへへ…先輩の機動のお蔭です》

クリスが後方に就くのを待つ間、機体を傾けたエリクは、しばし戦域を見渡した。

脅威だつたラティオ軍爆撃機の姿は既に無く、小ささまざまな弧を描いているのは全て小型の戦闘機ばかりとなつている。遠目でそれぞれの機種は判然としないが、その機数は当初の半分近くにまで既に減つていのように見受けられた。殊にラティオ軍機だろうか、灰色無地の機体の消耗は著しい。

作戦参加戦闘機数、実に70機近く。現代空戦史稀に見る大空中戦は、既に佳境へと差し掛かりつつあつた。

「燃料と残弾は？」

《燃料は帰路分も含め多少なら余裕があります。残弾は30mmが約100発》

「了解した。こつちも残りは僅かだ、あんまり長居はできないな。隊長達に合流しよう」

クリスの返答に応じ、エリクもちらりと残弾計へと目をやる。元来弾丸が大きく、それゆえに搭載弾数が限られる30mm機関砲である。先ほどの爆撃機追撃戦で機銃弾を

消耗したこともあり、エリクの『クファイル』には既に50発ほどこしか残っていなかった。この量ではせいぜい1掃射しか持たず、到底抄々はかばかしい戦闘はできそうもない。隊長の下へ合流するという決断も、つまりは少ない手数を機数でカバーするという、弾数不足を補うための判断に他ならなかった。30mmの高威力は魅力的だが、当てづらさと弾数の難を考えると、オーシア機等で主流となつている20mm機関砲を羨ましく思う気持ちも無い訳ではない。

ともあれ、合流しないことにはどうしようもない。飛び交い馳せ違う戦闘機の中から何とか隊長とヴィルさんの『クファイル』を見つけ出し、その方向へと操縦桿を倒しかけた刹那。通信回線を震わせたのは、空中管制機『イーグルアイ』からの甲高い声だった。『イーグルアイ』よりウステイオならびにレクタ戦闘機部隊へ、緊急連絡。ヴァーレ・トリツアの東南東80km地点に、大型機を含む10機程度の編隊が確認された。同時に、方位060より敵増援を確認、機数16』

『な……冗談だろ、このタイミングでかよ！もう残弾はほぼゼロぞぞ！』

『図られたな……ユーク得意の囲戦術だ。敵の本命はおそらくこの爆撃機だろう。現在、迎撃機を急ぎ差し向けている。ウステイオ各機、敵増援を食い止める。レクタ各機はただちにラテイオ爆撃機編隊を追撃し、1秒でも多く時間を稼げ』

『くそ……分かったよ、やってやる！バハムート1よりレクタ戦闘機隊、後ろは任せただぞ』



！

《スポーク1、了解した。レクタ各機、急ぎ参集せよ》

「……了解……くそ、こんなやつてアリかよ……！」

急転直下の情報に、思わず呻きにも似た声が漏れる。

『イーグルアイ』の言葉を借りるなら、先程の大規模な戦闘機隊もTu-95からなる爆撃機も、全ては囷だったという。つまりは大部隊をわざと正面から当たらせて機体と弾薬の消耗を強いて、その隙を狙って低空を忍び寄った本命の爆撃機が本拠を突く、という計画だったというのだ。まるで、いくら犠牲を出そうとも、ヴァーレ・トリツアの陸軍さえ叩けられるなら手段は選ばないと言うかのように。

事実、現在ヴァーレ・トリツアに集結している陸軍連合部隊は、ラティオが頼みとする『テュールの剣』、そしてラティオ中郡を制圧するのに不可欠な頼みの綱である。これを失うことはラティオ早期制圧の道が断たれることと同義であり、戦争の泥沼化は避けられないだろう。そうなれば、『テュールの剣』を擁しユークトバニアの支援を背にしているラティオ相手では戦況の逆転すらもありうる。それを考えれば、ラティオの戦術は悔しくも妥当と言えるだろう。

さらに悪い事には、ラティオに対してユークトバニアが機体や資材の支援のみならず、人的・技術的支援さえ始めたらしい形跡が感じられることである。

その仮定の抛り所は、今回ラテイオが採った戦法にある。真正面から大規模な団部隊を進軍させ、その隙を低空侵入した少数機が突く——空の大海戦術とでも言うべき大規模なその戦法は、24年前にユークトバニアが実行した手法そのままなのだ。

24年前——すなわち1986年。ユークトバニアと隣国カルガ共和国の間で、後にチユメニ紛争と呼ばれる戦争が勃発した。その最終局面であるジミトル上空戦において、ユークトバニアは今回と同じように、高高度から大規模な部隊を侵入。それに応じたカルガ空軍の迎撃機が高高度へと移行した頃合いを見計らい、低空から侵入した攻撃機がジミトルの街を灰燼に帰したのである。浮足立ったカルガ迎撃部隊が、ユークトバニア軍によって殲滅されたのは言うまでもない。結果、一連の戦闘で制空権を確保したユークトバニアは、チユメニ紛争における最終的な勝者となった。

かつての戦争で目覚ましい成果を上げ、確立された戦術。目下、かくも見事に当てはまった状況を見るに、ユークトバニアの戦術士官がラテイオへ直接指導を行ったと見ても何らおかしくはないだろう。言い換えれば、ユークトバニアもオーシア東方諸国の戦乱に本腰を入れ始めたということになる。

戦争に道義も公平も意味をなさないことは分かっている。だが、これではまるで後出しジャンケンではないか。

苦みの混じった愚痴一つ、口中の渇きに焦りを滲ませながら、エリクは編隊序列に随

い機位を固定させた。

《スポーク1より各機、針路固定。巡航速度を10分維持》

《追いついた所でたつたこれだけじゃ何もできん。増援に期待するしかないな》

呟くような誰かの声が、晴れ渡る空に虚しく消えてゆく。

ラティオの叵戦術は、確かに功を奏していたらしい。それを物語るように、当初は18機を数えていたレクタ軍機は、今や半数近くにまで機数を減らしていた。先頭を飛ばすスポーク隊の『タイガーIII』2機、エリクラハルヴ隊の4機は健在であるものの、他に2小隊が参加していた『クファイルC7』は3機しか残っていない。最新鋭機の『グリペンC』に至っては1機しか残っておらず、先の大空戦の壮絶さを如実に物語っていた。外見から判断する限りほとんどの機体はミサイルも使い果たしてしまった後らしく、戦闘能力はほぼ無いに等しいと言っても過言ではないだろう。

《バハムート2、ダイブしろ！後方にフランカー2機！》

《メイス3被弾！脱出する！》

《メイス5、メイス隊指揮を引き継げ！》

後方の空域では、一時鳴りを潜めていた炎と煙が再び盛んに生じ始め、しんがり殿のウステイ才軍機とラティオの増援が交戦状態に入ったことを告げていた。

既に距離が離れつつあり戦況を見定めるのは困難であるものの、虎の子の『イーグル』

半数を失い、弾薬も消耗したウステイオ軍機では、いかに優れた技量でも不利は否めないだろう。敵の増援の数を踏まえると、戦力比は1:2、ないしそれ以上に不利な比率にもなる。背後で交わされる通信の声は、その戦況を反射して緊迫に満ちたものになっていた。

《遅れていた友軍機もじき到着する。それまで何としても持ち堪えるんだ》

《んなこと言っても限度が…ッ！レクタ機へ、4機抜けた！…クソッ、さらに2機！すまんが追いきれん！》

《こちらスポークー。追撃する敵機種知らせ》

《全部『スターファイター』だ！悪いが追う余裕が無い！》

「…:よりによつて…:！」

機数で劣る状況では、やはり突破阻止にも隙ができる。爆撃機追撃の焦燥に加えて、後方から迫る新たな脅威に、レクタ編隊にもさつと緊張が奔った。

悪いことに、ウステイオ機の阻止を抜けて迫るのはF-104S『スターファイター』が6機だという。機動性はこちらに分があるとはいえ、元々加速性能では同世代機の追随を許さない機種であり、殊今のような追撃においては旧式といえども十分すぎる脅威になる。おまけに、こちらは燃料を消費しており巡航速度で飛ぶ他無く、対する『スターファイター』は最高速度で迫ってくるのだ、速度の領域ではそもそも勝負にすらならな

い。速度に雲泥の差がある以上、射程内に捕捉されるのは時間の問題だろう。

《まずいな…。カルクーンよりアウル、このままでは全滅します。何機か殿に残さなければ…》

《く…。やむを得ん。スポーク2、ただちに反転し追撃を阻止…》

《イーグルアイよりスポーク1、待て。間もなく友軍の増援が到着する。針路そのまま飛行されたし》

《…!?増援、つて…》

《無茶だ、もう捕まるぞ!》

カルクーン——スポーク1後席のフィンセント曹長とイーグルアイが通信の問答を繰り返す間にも、後背からは『スターファイター』が瞬く間に距離を詰めて来る。ちらりと振り返った後方では、既に短く薄い主翼を持った特徴的な機影を判別できる程にまで、その距離を狭めて来つつあった。

到底、逃れきれない。しかし一度でも回避運動に入ると、爆撃機編隊に追いつくことはもう叶わなくなる。ぎり、と歯を食いしばり、エリクは再びその眼を、絶望に染まっていた空へと向けた。いくらイーグルアイの言う『増援』が優速であれ、6機相手ではもはや——。

《二人とも、聞こえたな。第一目標、レクタ編隊を追う6機。第二目標、ラティオ軍爆撃

機編隊。友軍の迎撃は間に合わない、諸君だけで目標を殲滅せよ》

《了解。目標を視認、交戦します》

イーグルアイの甲高い声と、初めて聴く声。脳裏を通り過ぎたそれらを意識する余裕もなく、エリクの目は正面と計器盤を行き来する。

速度、マツハ0・8。推力強化機構『コンバット・プラス』を使用し燃料を消費した以上、これ以上の速度は到底出せない。

対する敵機は後方、亜音速。迫る殺気はリーダー照射を告げる機械音へと変わり、やがてロツクオン警報を告げる耳鳴りのような音へと移ろってゆく。

捕まった。

距離、概ね900。外しようのない、有効射程距離。

凶らずも早まる鼓動に、エリクは思わず緊急脱出レバーに手をかけて備えた。一瞬後に来るであろう、背中を貫く衝撃に。

《交戦を許可する。頼んだぞ。——ガラム隊》

《ガラム1、FOX3》

衝撃、爆発。

背中に感じたそれは、しかし予期していたより遥かに軽い。

『増援』。今更ながらにその言葉が脳裏に実感を持って浮かび、エリクは緊急脱出レ

バーから手を放して後方を振り返った。

そして、驚愕した。

後方に迫っていた筈の『スターファイター』のうち、4機が煙を噴いて脱落しつつあったのだ。残る2機の『スターファイター』も、後方から迫った別の2機からそれぞれ機銃掃射を受け、回避も叶わず被弾。爆発の炎とともに四散し、細切れの破片を地上へ向けて散らしていった。後方の優位を取っていたとはいえ、6機を一瞬で屠ったその技量は尋常ではない。

追撃のため重ねた速度のまま、ウステイオの増援の2機はこちらの頭上を追い越してゆく。

単発のエンジンに、傾斜を設けた1枚の垂直尾翼。端を切り欠いた三角翼は、機体そのものが小型なためか幾分大きい印象を与える。

特徴的なのは、他に例を見ないその塗装パターンだろう。2機とも基調は一般的な灰色だが、先頭の機体は両主翼端と水平尾翼端を青く塗装し、後の機体は右翼の中ほどから先を赤く染め抜いている。機体形状こそ一般的なF-16『ファイティング・ファルコン』シリーズと見受けられるが、その色彩が、2機の印象を際立たせたものへと変えていた。

「F-16…？変わった塗装だな」

《いや、F-16にしては主翼とエアインテークが大きい。たぶん攻撃機型のF-2A  
だろう。にしても…。……………『ガルム』…?》

《…?どうしました、隊長?》

《……いや、何でもない。それにしてもいい腕だ、羨ましいね》

耳に馴染みのないコールサインのためか、それともその技量ゆえか。いつになく感嘆した様子のロベルト隊長をよそに、2機のF-2Aは先頭の『タイガーⅢ』と並走し、何かしら通信を交わした後に編隊先頭へと機位を取った。無駄のないその機動からは、確かな技量も感じ取れる。

背後に飛び交う戦火を振り切り、飛ぶこと数分。じわりじわりと精神を圧迫するような時間が過ぎ、地平の先にヴァーレ・トリツアの平原が見え始めた頃になって、ようやく眼下にいくつかの機影が見え始めるようになった。その数、概ね10前後。高度1000に満たない低空を這うその様は、間違いなく求めるラテイオ編隊に違いない。

《ガルム1、目標視認。Tu-22M『バックファイアC』6機、Su-30MK『フランカーF1』8機と推定されます。我々が先に仕掛けますので、レクタ軍の皆さんは散開した敵機を追撃して下さい。ガルム2、支援をよろしくお願いします》

《こちらガルム2、了解した。存分にやれ、ガルム1》

《スポーク1了解。レクタ各機、ガルム隊に続いて攻撃を仕掛ける》



まだ相当の距離があるにも関わらず、いち早く機種と数を見定めたのだろう。敵編制を見取り戦術を定めた『ガルム1』の声は、まだ若い青年のそれを思わせた。『ガルム2』の声が年を重ねた壮年のものに聞こえることもあり、エリクにはどうにも、その様子がどこかアンバランスな印象だった。

2機のF-2Aが機体を右へ傾け、機首を下げながら敵編隊へと向かってゆく。まずはガルムの2機が突破口を開き、その隙を後続のレクタ編隊が攻めるといふ戦術である以上、ガルム隊の直後にすぐ続いては敵の迎撃に遭ってしまう。レクタ編隊長のアルヴィン少佐が機体を傾けたのは、それから数秒を経てのことだった。パウラが、ロベルト大尉がそれに続き、エリクも機体を傾けて敵編隊へと舵を切っていく。

こちらに気づいたのだろう、『バックファイアC』が左右に広く散開し、護衛の『フランカーF1』が4機1組となって左右へと反転してゆく。右の4機はやや内側へ、左の4機は大きく旋回してまっすぐにこちらへ。ガルムの2機は開いたその中央を突っ切る針路で、背を見せる『バックファイアC』へと殺到していく。敵の機動を見る限り、右はガルム隊の入れ違った後間髪入れず後ろを取るつもりなのだろう。Su-27『フランカー』シリーズの運動性に加え、機首にカナード翼を設けたSu-30の機動性は、並の戦闘機とは一線を画する格闘戦能力を有する。いくらF-2Aとはいえ、まともに格闘戦を構えられる相手ではない。

だが。その読みを、眼前の2機はいとも簡単に打ち破った。

《ガルム1よりガルム2、左右散開》  
サイドオーブン

《ガルム2了解。FOX3》

敵編隊との距離がおよそ1200を切ったその瞬間、2機のF-2Aは突然左右へ散開。ガルム1は右、ガルム2は左の4機へと一瞬で相対し、間髪入れずミサイルを放ったのだ。

いち早く攻撃を加えたガルム2が放ったのは、FOX3のコードから判断する限り中距離高機能空対空ミサイル<sup>A</sup>。本来は長い射程を活かして敵射程外から一方的に攻撃するのに用いる兵装だが、今回は敵の虚を誘うために敢えて至近距離で使用したのだろう。その読みは過たず、同時に放たれた4発はそれぞれの目標へ向けて直進。『フランカーF1』は泡を喰って回避に入るも叶わず、3機が胴体に直撃を受けて爆散。残る1機も尾部に被弾し、片方の尾翼とエンジンカウルを砕かれて空に散らした。

爆炎を裂き右旋回に入る、赤い片羽のF-2A。その先では、両翼を青く染め抜いたガルム1が、真正面から敵編隊を突っ切る所だった。すれ違う直前に空対空ミサイル<sup>A</sup>を放ったのだろう、細い首にミサイルを受けた2機の『フランカーF1』が爆発に包まれ、巻き上がるそれがガルム1の背を覆い隠し、同時に残る2機の視界を塞ぐ。

F-2A相手ならば、背を取るの容易。そう判断したのだろう、黒煙の中で即座に

旋回し、2機の『フランカーF1』がガラム1の背を指す。機体性能の優位と仲間を失った同様のゆえのその判断は、しかしこの時ばかりは命取りとなった。濛々と漂う爆煙のため、2機の『フランカーF1』からはガラム2が迫りくるのが見え、その大柄な背を赤い片羽の前に晒してしまったのである。

AAM1発、次いで機銃掃射。たったそれだけの攻撃で、全ては終わった。煙に包まれる2機の『フランカーF1』を追い越して、早くもガラム隊の2機は逃げ惑う『バツクファイア』の背を捉え始めていた。

「何て奴らだ…。化け物じみてる」

よろめく最後の『フランカーF1』が、スポーク1に喰われて断末魔の轟音を刻む。それすらも顧みず、2機のF12Aは最右翼の『バツクファイアC』を血祭りに上げ、敵編隊前方へと回って旋回に入った。

最初の接敵から爆撃機撃墜まで、わずか1分にすら満たない一瞬。たったそれだけの間で、それも戦闘爆撃機たるF12Aで、ガラムの2機は戦闘機7機と爆撃機1機を瞬く間に撃墜して見せたのだ。

力を含めた手に、じわりと汗が滲むを感じる。——化け物。これ以外に、どう形容する言葉があるというのか。

《いやはや…驚きました。15年前に噂は聞いたことがあります、まさかこれほどと

は

《……いや、どうもありや違うな。スマート過ぎる》

《……？》

《ともあれだ。スポーク1、このままじゃあの2機に全部取られちゃう。いつちよ我々も頑張りましょうや》

《……そうだな。ここまで来て全てウステイオ軍頼みでは、レクタの沽券にも関わる。各機、遊んでいる暇は無い。速やかに落とすぞ》

呆気に取られる面々の中、辛うじて方針を示したアルヴィン少佐が、『タイガーⅢ』の機速を速めていく。それに引かれるようにエリクも速度を速めながら、心は奇妙な感慨に囚われていた。

戦況をわずかな時間でひっくり返す存在——エース。心強いことは勿論だが、今の奇妙な感慨の中には、それ以上に得体の知れないものに対する恐れ——言うなれば畏怖のような感情が混じっているようにも感じられたのだ。彼らは、一体何者なのか。同じ軍人で、なぜこれほどまでに違うのか。

森林の緑を眼下に、白みの強い『バックファイア』の塗装が映える。

猟犬の狩場となったその空の下で、青い両翼に翼を噛み千切られた『バックファイア』が1機、その巨軀を緑に吞まれ、爆炎へと沈んでいった。

\*\*\*\*\*

同日、午後8時。空前の大空戦を終え、常の静謐さを取り戻したヘルメート基地居住区の中に位置するシャワー室。ざぶざぶと注ぐ水の音が止み、光漏れるドアを開けてタオルを引っ掴むエリクの姿が、その一室の中にあつた。

結局、あの子の爆撃機追撃戦は、ガルド隊の働きもありほぼ一方的な虐殺に終わった。戦闘機はもちろんのこと、『バツクファイアC』も6機のうち4機をガルド隊が撃墜し、その全機の掃討を以て作戦は無事に終了したのだつた。ヴァーレ・トリツアの陸軍は敵弾の1発も撃ち込まれることなく、無事集結を終えてラティオ中郡へと進撃を開始していった。

作戦参加機のうち、喪失は約半数。損害は大きかつた一方で、ラティオ軍機も半数以上を撃墜し、かつ攻撃の阻止に成功した所から判断すれば、一応連合軍の勝利と言つていいのだろう。批評は数々出るだろうが、エリクにとつては、ハルヴ隊もスポーク隊も、1機も欠けずに生還できたことが何よりの成果だつた。

だが、その代償と言うべきか、今日はひどく疲れた。緊張に次ぐ緊張で、既に頭も体も重い。戦闘続きの日常である、これまでも疲労を覚えることは多々あつたが、今日ほどの疲労は今までに無かつただろう。体が鉛のよう、とは今日にこそ相応しい表現に違

いない。

ともかく、今日は早く休みたい。その思いゆえ、作業はどうしても早くぞんざいになる。手早くタオルで水分を拭い、ドライヤーで髪を軽く乾かし、よれよれの肌着を纏うまでわずか数分。クリスからはもつと衣類に気を遣えと口うるさく言われてはいるが、どうせ人に見せる訳でもない以上、エリクは特に改善は考えていなかった。

さっぱりとした気分で口ずさむ鼻歌は、オーシアの人気バンド『ROLLING THUNDER』が最近リリースした新曲である『フェイス・オブ・コイン』。激しさと切なさが入り混じる熱いメロデーが、エリクの琴線に触れたのだった。

ひとりっきりの狭い空間ゆえの、だらりとした自由の空気。それに浸り油断しきっていた為だろう、鼻歌交じりにシャワー室のドアを開けたエリクは、そのすぐ前にいた小柄な人影に思わずぎよつと心臓を跳ねさせた。

「おわっ!？」

「……………」

暗い廊下で姿を見定め辛いが、色素の薄い銀髪に低い身長と細い体の線は、スポーク隊2番機のパウラの姿だった。無言でこちらを見上げるも一瞬、パウラは無言を言わずこちらを押し進め、シャワー室に押し込めながら後ろ手に鍵をかける。その様をされるままに見過ごすしかできなかったのは、偏に予期せぬ遭遇で呆気を取られたためだっ

たのだろう。

「おい、ちよ、ちよ、ちよと待て。待て待て待て！お前な、一応デリカシーつてもんが……」

「……………」

「パウラさんちよつと、もしもしー？」

常からよくわからない人間だとは思っていたが、今日こそエリクはパウラへの理解に窮した。あつさりと有無を言わさず押し込められた訳だが、これは階級差を抜きにしてもいろいろと大問題ではなからうか。方や湯上り肌着の上官、片や軍服の士官である。外面的には、少なくとも健全なそれとは言い難い。

方や、こちらの困惑もどこ吹く風、パウラはきよきよと屋内を見渡し、しきりに何かを探っているようにも見える。軟禁紛いの真似をして、一体何なのか。深くため息をつきかけた刹那、壁を背にしたエリクの方へ、パウラはずいと顔を寄せた。

「……………どう思う？」

「……………何が？」

「ロベルト大尉」

「……………は？」

過程と前提を放り投げたパウラの質問に、思わず怪訝な声を返すエリク。量りかねる

質問の真意にパウラへと向けた視線は、真正面から見据えるパウラの目に押さええられた。

「どう、つて…。ウチの隊の隊長だし、普段は多少ちやらんぼらんだけど頼れる人だなんて…」

「違う。ウステイオの『ガルム隊』との、今日の事」

「………どういう意味だ？」

「…気になることがあって、来歴を照会した」

「………？」

相変わらず要領を得ないまま話を進めるパウラ。文句の一つでもと開きかけた口は、しかし一際声を潜めたその様子と、尋常でないその気配で、再び嚙まざるを得なかった。

「15年前のベルカ戦争当時、傭兵としてレクタ軍により雇用。当時中尉相当官。戦争終結後の1995年12月、ベルカ残党掃討戦のためアヴァロンへ出撃、行方不明になる。その後生存が確認され、1999年4月に再び雇用を希望。人材不足のレクタに、今度は正規兵として編入された」

「…それがどうかしたのか？俺も聞いてるし、別に変な所は無いだろ。まあタフな来歴だなとは思うけどな」

パウラの口から語られた大尉の来歴は、エリクにとつては今更の情報だった。かつて



のベルカ戦争で戦闘機パイロットとして参戦したことも、かの『円卓』の空を飛んだことも聞いているし、間を置いて正規兵となったことも本人の口から聞き知ったものにも他ならない。ベルカ戦争の後はこの国も人材が不足しており、敗戦国となつて職を失つたベルカの軍人や傭兵を雇用するといったことは他国も行っていた事である。事実、これまで特に妙と思つて聞いたことは無かつた。

「今日の空戦で、大尉は『ガルム隊』を知っている様子だった。それも噂を聞いたのでなく、直に見たような口ぶりだ」

「ガルム隊な……どこかで聞いたと思つたら、後で俺も思い当つたよ。都市伝説と思つてたけど、実在したんだな」

「黙つて聞いて。肝心なのはそこじゃない」

「んな……」

平易な声音に一抹の苛立ちを含ませ、パウラが声を被せる。今更腹を立てるでもないが、やはりむつとすることには変わりはない。

『ガルム隊』の由来に思い当つたのは、基地へと帰還し一息ついた頃の事だった。15年前のベルカ戦争で、鬼神のような戦果を上げて連合国を勝利へと導いたという、ウスティオの伝説の傭兵部隊『ガルム』。戦史を扱う雑誌でその記事を読んだ記憶はあるものの、その戦果があまりにも常識から外れており、大方戦意高揚のでつち上げの類と

思つて気にも留めていなかったのである。それが実在の部隊と知つたのは、その話題でヴィルさんと話しての事だった。曰く、当時は戦闘機乗りの誰もが憧れた英雄だったと。

「公式記録では、ガラム隊はウステイ才奪還の後、ベルカ南郡の攻略に参戦。その後、ベルカ残党の掃討作戦にも従事し、常に最前線で戦闘に参加。そして、1995年末のāvアロン攻略作戦を最後に、公式記録から消えた。一方で、レクタ軍は常に後方の維持や防空に従事して、最前線でウステイ才軍と共闘した事例は無い」

「ロベルト大尉はāvアロン攻略に参加してたんだろ？その時なんじゃないか？」

「可能性は無い訳じゃない。でも、ガラム隊を除く護衛機は、『ガラム』が制空戦に入るまでに全滅してる。敵地で空戦を眺める余裕があつたとは思えない」

「……………何が言いたいんだ、パウラ」

「ロベルト大尉が、ガラム隊を見ている筈はない。少なくとも、その経歴が事実なら」  
乾いた額に、冷や汗が一筋流れる。

ロベルト大尉の経歴が事実なら、大尉はガラム隊を見る機会はない——裏返せば、ガラム隊を見たという今日の様子が真実ならば、その経歴に偽りがあるということになる。

もしそうだとして、パウラは一体何の積りでそれを自分に伝えたのか。たった一筋の

言葉の綾から確証の無い推論を引き出して、自分から何を引き出そうとしているのか。彼女の、パウラの真意は何なのか。

感情を湛えないパウラの瞳。交わる事数秒、それはふ、と逸らされ、パウラは寄せていた顔を離れた。ごくりと飲み下された生唾が、一体どのような感情の働きによるものだったのか。脳裏にも判然としなまま、パウラの体がドアの方へと向くのを、エリクは茫然と眺めていた。

「何も知らないなら、いい。それだけ」

「……待てよ………一体、何の積りなんだ。何で俺にそんなことを……」

「ロベルト・ペーテルスには気を付けた方がいい」

「………」

ぴしやりと宣告するようなその言葉に、エリクはまるで金縛りに遭ったように、体を動かすことを忘れた。

ロベルト大尉に、気を付ける。何について、どうやって。何故。心が千々に乱れる間に、ドアを僅かに開けたパウラはするりと短軀を滑らせて、まるで何事も無かったかのようにシャワー室の外へと消えていった。

「……おい……」

数秒の、刻。ようやく収まった鼓動を抱え、エリクはドアを叩き開けて廊下へと声を

荒げる。

薄暗い電灯が明滅する廊下には既に人影はなく、ただ蒙漠とした闇が広がっていた。

## 第10話 英雄の面影

白みの強い朝の陽射しが、東の空を淡く彩っている。

秋深み、冷たさも増す朝空は、光の加減も相まつてか大層寒い。高く抜けた空は夜の間、に地表の温度までも彼方へ飛ばしてしまつたらしく、着陸直後の愛機『クファイルC7』から濛々と立ち上る水蒸気がその寒さを物語っている。

電子機器の管理や機体の冷却を顧みると、戦闘機にとつての適度な低温環境は必ずしも悪いことではないのだが、生身の身体はそうとも言つてはられない。酸素マスクをはずり取つたばかりの呼吸で濡れた皮膚に、朝の冷気が滲みるような冷たさを感じられた。

2010年10月20日、ウステイオ共和国南端に位置するモリスツェフ空軍基地――ウステイオ軍内通信コード『グリパヘリル』とも称される、森と冷気の中にぼつりと浮かんだ人工物。朝冷えに包まれた広大な滑走路の傍らに、ハルヴ隊をはじめとしたレクタ航空機部隊の姿があった。

それは、まさに壮観だった。

ずらりと並ぶ灰色の機体群は、大型機も含めれば20機以上。滑走路の逆側に佇んで

いるウステイオ軍機も含めれば、その総数は何十機に達するであろうか。勿論基地防衛戦力も踏まえれば、その全てが次の『作戦』に参加する訳では無いだろうが、地を覆うほどの航空機を動員していることはまさに驚嘆に値する。同時に、先のラテイオ爆撃機迎撃戦で大損害を受けたとは思えない膨大な戦力の裏には、レクタ、ウステイオが限界まで振り絞った死力と、必ずや勝利を掴むという意気込みも感じられた。

決戦である。

負けられない。負けるはずがない。高まった意気と熱を吐き出すように、エリクは実際大きく息を吐き出した。

冷気に触れ、雲のように立ち上る水蒸気。追って見上げた青空は、レクタのそれと変わらなかつた。

「エリク、見ろよ」

「え？」

「上上。こないだの2機だ」

レクタ軍の最後の機体が着陸のブレーキ音を響かせる傍らで、ロベルト隊長が顎をしゃくつて上空を示す。釣られて見上げたそこには、上空警護に当たっていたらしい2機の戦闘機の姿が見えた。

小さな胴体と切り欠いた主翼形状、スマートな軽戦闘機らしいシルエットは、ウス

ティオ軍で主力とされるF-16『ファイティング・ファルコン』シリーズと認められる。灰色ベースのウスティオ軍らしい機体色ながら、先の機体は両翼端と尾翼端を青く染め、後ろの機体は右翼の中ほどを赤く塗り欠いており、その存在感を際立たせたものにさせていた。塗装。パターンから判断するに、先日の戦闘で見えた『ガルム隊』のF-2Aに違いない。

旋回の航跡が空に見えない線を引き、翼が滑走路へと向いてゆく。速度を抑え、主脚を展開し、地上を目がけて降り立つ姿はまさに着地する際の鳥そのもの。タツチダウン・ラインに寸分違わず着地した2機は、滑走速度を徐々に緩めて、本来の駐機位置であらう場所にその機体を収めていった。

「鮮やかな手並みだことだ。戦闘の技といい、先代ほどじゃないが腕してるぜ」  
「本当ですよね！私、この間の空戦でびっくりしましたもん！」

先日の戦闘を想起したらしく、クリスがはしゃいだように声を上げる。エリクも、その技量が凄まじいものであることは確かにこの目で見た。瞬く間に追撃機を撃墜し、隠密行動していた爆撃機も護衛機もろともそのほとんどを撃墜せしめたその腕前は、自分など足元にも及ばないだろう。

だが、『ガルム隊』を見、ロベルト大尉の反応を聞いて、エリクが想起したのは別のことだった。

『ロベルト・ペータールスには氣を付けた方がいい』

脳裏に蘇るのは、先日の戦闘後、唐突にそう告げたパウラの声だった。

ロベルト大尉の経歴の矛盾を指摘し、15年前のベルカ戦争で『ガラム隊』を見ている筈はないと論断して、暗にその経歴が偽りであることを仄めかしたパウラ。だが、それを以て何をどう具体的に『氣を付け』ればいいのかを、何一つ言わぬまま彼女はその場を去ったのである。

以来数日、エリクの心は悩みに回った。

もし大尉の経歴詐称が真だとして、最も疑わしいのは他国の——この場合当面の交戦国であるラテイオのスパイということである。相手国の懐に、それも前線で戦う分情報も入りやすい戦闘部隊にスパイを忍び込ませることの利益は極めて大きく、想像が真つ先にそこへと行きつくのはいわば当然であった。

しかし、ロベルト大尉がベルカ戦争で一時消息不明になった後、再びレクタ軍に所属してから既に10年以上が経過している。果たしてラテイオが、10年以上も前からウステイオ・レクタ侵攻の野望を研いでいたものだろうか。近年のユークトバニア接近・対外強硬派路線は確かにその意識が滲んでいたにせよ、それはここ数年の話であり、定期的に考えても矛盾があると思わざるを得ない。第一、ロベルト大尉はこれまで最前線でラテイオ軍と戦い、少なくとも戦果を上げているのだ。信頼を勝ち取るためというに



は度を越えており、到底スパイが行う行動ではない。

結局、考えても悩んでも、答えが出るものではなかった。そもそもが些細な綻びの上  
に立った、パウラの推測なのである。内容が内容であり、まさかロベルト大尉本人に聞  
く訳にもいかない。

こうなつてくると、恨めしいのは漠然極まりないパウラの話し方である。確証も無い  
話で心を乱し、不信任を煽つておいて、一体何の積りなのか。お蔭でエリクの中では話  
が尾を曳き、ロベルト大尉に対してどこか奥歯にもものが挟まったような対応になつてし  
まっているのだ。

ガルム隊を遠目に見やり、無邪気に騒ぐクリスの傍らで、エリクは人知れず溜息をつ  
いた。

「あつ！先輩見て下さいあれ！ガルム隊の1番機ですよ！凄い、生ですよ生！」

「落ち着けクリス、ウステイオの連中が変な目で見るだろ。ミーハーかお前は」

「いやほら、だつて見るの初めてですから…。えー、でもあれ、私とそんなに年が変わら  
ない感じですよ。凄いなあ…」

コクピットから降りた『ガルム』の姿に、一際声を大きくするクリス。その頭をがっ  
しと掴み、パウラの件を頭の外に追い出しながら、エリクもその声が指す方を見やった。  
遠目で些か不明瞭だが、青い翼端のF—2Aから降りたのは、整えた短い金髪に白い

肌、華奢な四肢と、到底ウステイオを代表する戦果を上げたエースとは思えない、まるで少年のような姿の男だった。クリスの言う通り、年代はおそらく20前後、下手をすると10代になるだろうか。むしろ赤い片翼の方が、がっしりした体に顎鬚、角張つて意志の強そうな輪郭と、いかにも歴戦の兵士然とした雰囲気醸し出している。風采と身のこなしを見る限り、そちらは40前後といった所だろう。

二人は整備員や基地スタッフに囲まれながら、司令塔の方へと脚を進めて、人の中にその姿を消していった。

「賑やかですね。クリス、ガルドム隊は見られましたか？」

「あ、ヴィルさん！見ました見ました、生ガルドム！ヴィルさんもう少し早かったら見られたのにー」

「おうヴィルさん。頼まれごと、首尾はどうだった？」

「ええ、それくらいならお安い御用と、快く引き受けて頂きました。整備の方々には、後でワインをお持ちしましょう」

「頼まれごと……何のことですか？」

着陸後、一時姿を消していたヴィルさんの姿に、クリスと隊長が声を交わす。隊長とヴィルさんとの会話の中に意味ありげに混ざった『頼まれごと』の言葉に、エリクは怪訝な顔を見せるも、それに帰って来たのは二人の意味ありげな笑みだった。

「なーに、ちよつとしたいくい事だよ」

「はあ？」

「え、何なに、何ですか？」

「いい事、いい事さ。後はお楽しみ、な？」

「はい、いい事ということ。二人ともきつと喜びますよ」

「えー、ちよつと気になるじゃないですかヴィルさん。教えて下さいよー」

「そうですよ！二人だけ楽しそうにしてー！」

先までの深刻な悩みも何のその、楽し気に顔を見合わせる大人げない40代二人に、若人二人も思わず笑みが零れる。

空は青く、高く広く、そしてそれを覆うように戦禍は広がってゆく。

迫る決戦の時を前に、それは兵士たちにとって、ささやかなひと時の安らぎだった。

\*\*\*\*\*

時間にして1時間ほど後。エリクからハルヴ隊の姿は、モリスツエフ空軍基地の敷地東に位置する司令塔、その1階に設けられたブリーフィングルームにあった。正面の大型スクリーンを映し出すためか部屋はやや薄暗く、そこに数十人には達しようというパイロットが所狭しとひしめいていた。人いきれのためか室内の熱気は10月と思えないほどとなっており、今日ばかりは冷房も稼働する有様となっている。

わざわざエリク達レクタ軍が、前線から隔たったウステイオ領内くんだりまで来ることになったのも、この基地での作戦会議に出るのがその主たる目的だった。これまでもウステイオとの共同作戦で事に当たることが多かったレクタ軍だが、次の作戦は規模から見てその最たるものになる。事前の打ち合わせや補給の便宜を考えれば拠点を一所に集中するのが良く、そうなると国力の關係上レクタ側がウステイオへと赴く形になる。國際關係上、こればかりはどうしようもない。

流石にウステイオのパイロットの中でも一目置かれているらしく、『ガラム』の二人はモニターが見えやすい最前列にいたようだった。列にして6つを隔てたこちらからは、その後姿を拝むのも難しい。まして、その周囲に人が集ってはいはなおさらの事である。

その正面に、基地司令らしき人物と作戦士官が入ってくるのと、『ガラム』の周りに集った人壁が散じるのはわずか数秒の間。どきどきに背伸びしてちらりと後姿を拝もうとした算段は、すぐさま張り上げられた司令の声に遮られた。

「ウステイオ空軍モリスツエフ空軍基地司令、ボフミール大佐である。親愛なるレクタ空軍の諸君に、ここモリスツエフの地で見えられたこと。ならばに今世紀始まって以来の作戦に共に臨めることを光榮に思う」

太った体の基地司令は、体格そのままの大きく響く濁声で声を張り上げる。やや短い

手足と綺麗に剃ったスキンヘッドから、エリクは思わずカエルの姿を連想した。

「開戦以来破竹の進撃を続けた我ら連合軍だったが、ラティオが建造した超兵器『テュールの剣』の前に、我らは幾度となく辛酸を舐めさせられてきた。しかし、地道な破壊工作によりその防衛網は着実に剥がされ続け、今やその本体を残すのみに至ったのである。さらに、先日の大航空戦では、諸君らの奮闘により、ラティオの航空戦力をことごとく壊滅せしめた。我らも疲弊したが、それ以上にラティオは弱っている。この機会を逃す手はない。我らはここに力を合わせ、『テュールの剣』破壊作戦を実行に移す！ 渾身の死力を振り絞り、ラティオの最後の要をへし折るのだ!!」

カエルの独唱——もとい演説に、万雷のような拍手が巻き起こる。腹に響くその振動の中に、エリクは来るべきものの到来を感じていた。

ユークトバニアの支援によってラティオが作り上げたレーザー兵器『テュールの剣』は、その絶大な威力と射程によって劣勢のラティオを支え続けて来た。差し向けた爆撃機部隊は幾度となく壊滅し、死角となる地上も反射鏡装備の航空機を中継した狙撃によってカバーされ、地上からの侵攻も覚束ない状況が続いていたのである。結果、連合軍はその射程外を遠巻きに包囲し、一進一退を繰り返すという停滞の中にあつた。

だが、停滞の中にあつても戦局は絶えず動く。ウスティオ軍を主として、連合軍は少数の戦闘機による破壊工作を敢行。『テュールの剣』の目となる観測用気球を少しずつ

破壊し続け、やがてその観測範囲に大きな穴を穿つことに成功したのである。噂によると、この破壊工作では『ガラム隊』も相当に戦果を上げたらしい。

これに加え、基地司令の言う通りに、先日の大航空戦の戦果が後押しをかけたことは想像に難くない。逆転を賭けてラテイオ軍が敢行した拠点攻撃は失敗し、その戦力のほとんどを消耗したのだ。参加機数を考えたらテイオ中郡の戦力を総動員したに違わず、その消耗はすなわち『テュールの剣』を護るべき戦力の低下にも直結するという訳である。逆を言えば、この機会に『テュールの剣』を落としてしまわなければ、ラテイオに劣らず戦力を失った連合軍の挽回は困難になるとも言える。

敵戦力の低下、そして速攻をせざるを得ない連合軍の事情。それを踏まえれば、この機会を活かした攻略作戦というのは当然の帰結だったと言えるだろう。

正面では基地司令が退き、説明の場を作戦士官へと譲っている。眼鏡に整った制服姿と、いかにも作戦士官といった風情の男が、一同を舐めるように見渡した後に口を開いた。

「それでは、作戦を説明する。知つての通り、ラテイオ軍が建造した『テュールの剣』はその長射程もさることながら、周辺に幾重にも設置された観測用気球と対空陣地により、これまで我が軍を寄せ付けて来なかった。しかし、我が軍の決死の作戦行動により徐々に観測用気球と対空陣地を排除。結果、『テュールの剣』北西方向に、防空網の穴を

生じせしめたのである」

正面のモニターにラテイオ中郡の地形がワイヤーフレームで示され、その中央に位置する『テュールの剣』を囲ういくつもの同心円が続いて描かれる。射程範囲を示すらしい同心円の中や外縁には小さな円がいくつも描かれ、それが対空陣地の防衛範囲や観測気球の索敵範囲を示すことを物語っていた。右上に表示された日付が進むごとにその円は数を減らしていき、同心円も左上が徐々に凹み始めてゆく。2010年10月20日——今日の日付を指すころには、北西方向の円はそのほとんどが消え去り、同心円も北西だけが大きく凹んだ歪な形状と成り果てていた。

「この方位に限れば、『テュールの剣』はその威力を十分に発揮できない。たとえ照射できたにしても、その制度は著しく低下している筈である。我が軍はこの方位に全力を傾けて攻略に当たる。…少なくとも、ラテイオはそう考えるだろう」

そこまで解説した所で、不意ににやり、と作戦士官の口角が上がった。才子らしい、あまり人好きのする笑顔ではない。

「誤解なきように言っておくと、我が軍の陸空の主力は北西方向の侵入ルートを取って攻略作戦を行う。本作戦ではそれとは別に小規模の攻撃部隊を編成し、警戒の手薄な方位から低空侵入。『テュールの剣』への直接攻撃を敢行するものである。本体の攻撃能力が低下した頃を見計らい、総攻撃を行う」

そこまで言葉が紡がれた時、にわかにながめきが広がった。

搦手を用いた側面攻撃——それ自体は歴史上しばしば使われてきた手であり、そこまです斬新な作戦と言う訳ではない。問題は、この戦術をレーザーやミサイル飛び交う現代の戦場で使うことである。作戦上、別動隊は対空陣地が生きており精密射撃の射程内にもなる敵の真つただ中を進むことになる。仮に攻撃に成功したとして、本隊の総攻撃が始まるまでは『テュールの剣』以外の戦力が健在なのだ。袋叩きに遭う可能性は極めて高く、決死行は免れないのは目に見えている。そもそも、少数の機体で『テュールの剣』まで到達できるのか。

ざわめきは専らそのまだ見ぬ決死隊への茶化、そして作戦に対する疑念。それらの裏には、別動隊指名からは逃れたいという思いが滲み出ているようにも思えた。

「質問。別動隊とはいえ、『テュールの剣』へ打撃を与える必要があるならば相当な戦力が必要となります。その編成は？」

「意見の通り、『テュールの剣』に打撃を与えるには相当な戦力を要するだろう。一方で、多数で行動すればそれだけ捕捉の危険も高まる。そこで、別動隊には量ではなく質を以て任命することとなった。：別動隊の機数は、6機だ」

あまりにも少ないその編成に、ざわめきは一層大きくなる。たった6機でラティオの対空陣地を突破し、『テュールの剣』本体へ肉薄するなど自殺行為でしかない——それは



誰の目に明らかだった。

願わくば、その指名からは逃れたい。いくら国の名を背負つての戦争とはいえ、あの世への片道切符など元より御免である。

隣ではクリスが両掌を組み、懸命に祈っている。いつの間にか自分も拳を握っていたことに、エリクは今更ながら気づいた。

「まず、攻撃の主力だが：ウステイオ空軍『ガルド隊』を指名する。対地装備で武装を固め、『テュールの剣』攻撃に専念してもらいたい」

「はい。必ずや攻撃を成功させて見せます」

気負いを帯びた若い声——おそらく『ガルド』の一番機——が、作戦士官の指名に応える。隣の男は二番機だろう、一つ頷いて、異存の無いことを告げていた。

ウステイオきつてのエース部隊による拠点攻撃である。直後に上がったどよめきは、いわば当然ともいうような納得の響きを帯びていた。

「残る4機は『ガルド隊』に先行し、敵対空陣地および空中の脅威を排除して貰う。相応の技量、そして何より運が求められる任務である。この役割は、レクタ空軍『ハルヴ隊』にお願したい」

「え」

「!?」

前触れなく、唐突に呼ばれた自身の部隊名に、エリクは思わず目を見開いた。傍らのクリスは屈めていた上半身をがば、と跳ね上げ、ロベルト隊長はぼかんと口を開けている。

硬直、数秒。何かの聞き間違いではないのか。何かに縋るような希望も、構わず続く作戦士官の解説に打ち消され、エリクはロベルト隊長と顔を寄せて声を潜めた。

「(な、ななな何でこの流れで俺たちが『ガラム隊』のお供なんですか! どう考えたつてウステイオ空軍の出番でしょ!?)」

「(おおお俺が知るか! 冗談だろ、控えめに言つてもダイナマイト抱えて飛び込む鉄砲玉役だぞコレ!)」

「ハルヴ隊の諸君は、『ガラム隊』に先んじて規定ルートを侵攻。対空陣地に打撃を与え、『ガラム隊』のルートを切り開け。対空陣地突破後は対空戦闘に移行し、可能な限り『ガラム隊』への脅威を排除せよ」

「(何度聞いても無茶ですよ、旧式『クファイル』がやる仕事じゃないですよコレ!)」  
「(落ち着けエリク、クールになれクールに。何とか言い逃れる術を考えるんだ。ひとまずお前かクリスに仮病になって貰ってだな…)」

「……………ええええええええ!?!」

「!?!ちよ…クリス!?!」

顔付き合わせるダメ元の作戦会議は、突拍子もないクリスの叫び声であっさり断ち切られた。指名の衝撃からやっとなをを取り戻したのだろう、その表情は現実を把握した絶望と混乱に満ちていた。

「な、何で私たちがそんな大役なんですか!?! 私なんて、隊長や先輩に比べたら全然下手くそなのに……!」

「く、クリス落ち着け! すみません今大人しくさせますんで……」

「私が推薦したのだ」

「!?!」

椅子を立ち後ろからクリスを羽交い絞めにするエリク。もはやセクハラも何も気にする余裕はなく、沸き上がった騒ぎに周囲の視線は否応なしに突き刺さってくる。ああ、できるならば色んな意味ですぐにでも倒れたい。

そんな喧騒の中で告げられた落ち着いた声は、『スポーク1』アルヴィン少佐のものだった。その声は、その瞬間は騒動を鎮める救いの声として、そして直後に絶望を突き付ける匕首として、エリクの耳に響くことになった。

「我がレクタ軍は開戦から多くの消耗を強いられてきたが、この『ハルヴ隊』は一人たりとも欠けることなく困難な任務を達成してきた。ロベルト大尉以下、優秀な人材と幸運があつてこそその結果だ。その実績は、今次作戦にも参加に堪え得ると判断し、私から推

薦させて貰った次第である。何より、ウステイオ軍に頼りっぱなしでは、我が軍も立つ瀬がないのでな。…そういう訳だ、エリク中尉、クリステイナ伍長。よろしいな？」

「……………は……」

「……………は……」

言外に込められた拒否を許さない威圧感に、二人はそう答える他無かった。

少佐の発言と、先の作戦の際の様子から察するに、少佐は先日の空戦でほとんどの戦果をウステイオ側に持つて行かれたことを相当気にしているのだろう。今次戦争でも基本的にウステイオの補佐とでも言うべきポジションにあるレクタ軍は、それだけ立場も弱い。その上で今度の作戦まで戦果をウステイオに取られては、発言力の低下はもはや避けられないと判断したゆえの進言であろうことは、エリクにも想像がつく。

…ならば、少佐が自分で志願すればよかつたのでは。そうは口が裂けても言えないエリクであつた。

「続いて本体の編成に移る。第一次攻撃部隊はウステイオ軍20機、レクタ軍12機で……」

定まってしまうた絶望への既定路線を前に、もはやその後のブリーフィングは上の空だった。部隊編成への悲喜こもごも、眼前にある『テュールの剣』への脅威。説明されるそれらの言葉も頭の上を行きかうばかりで、ブリーフィングが終わってみれば頭に

残っているのは絶望の二文字しかない。ふと気づけば、既にモニターの電源は切られ、人が散じ始めている頃だった。

「終わった…私の人生…終わった…」

「こいつ、柄に無く死んだようなツラしやがって。ヴィルさん、悪いが先にクリスを格納庫に連れて行ってやってくれ」

「分かりましたが…隊長は？」

「俺はエリクとちよつと挨拶に行ってくる。後で俺らも向かうよ」

「挨拶？」

「おう。折角先陣切ることになったんだ。『本命』に一言繋いでおかなくちやな」

なにやらぶつぶつと口走り、ぐったりとしたクリスがヴィルさんに担ぎ上げられ席を立ててゆく。二人に踵を返し、くい、とロベルト隊長が顎で指したその先には、最前列の席から腰を上げる二人の男の姿があった。

『ガラム隊』の二人。ロベルト大尉とガラムの組み合わせに、思わずパウラの言葉を再び想起しながら、エリクは歩を進めるロベルト大尉の後についていった。

「どーも、レクタ空軍第2航空師団第8戦闘飛行隊、『ハルヴ隊』のロベルト・ペーテルスつす。今回水先案内人を務めることになったもんで、一言挨拶をと思ひましてね」

「同じく、『ハルヴ隊』2番機のエリク・ボルストです。よろしく願います」

あ、と声を上げるも一瞬、姿勢を正してこちらに向いたのは、まだ少年の面影すらある若い男だった。先ほど遠目に姿を見たものの、間近で見るとその雰囲気はやはりエースらしきとは無縁のものと言って良い。色白な肌や甘いマスクと相まって、どちらかというところテレビの中の方が似合っているような姿だった。

一方、傍らを固めるのは2番機の男だろう。こちらは遠目の印象と変わらず、灼けた肌と鑿<sup>のみ</sup>で削ったような武骨な体がいかに豪傑らしい。所々に見える古傷も、却って歴戦の戦士らしい威厳を加えているように感じられた。

「ご挨拶が遅れました。ウステイオ空軍第6航空師団第66戦闘飛行隊、『ガルス1』パスカル・ジエイク・ベケット大尉です。この度はお世話になります、お互いに頑張りましょう」

「PJ、固くなり過ぎだ。天国の叔父さんが笑ってるぞ?…おほん、同じく『ガルス2』、レイモンド・レッドラップ中尉だ。R2でも呼んでくれ。『テュールの剣』をへし折れるかはあるたらかかかっているんだ、頼んだぞ」

「そりやもう。折角の『ガルス隊』との共闘なんです、露払いは任せて下さいな。…そういうやパスカル大尉、先代の『ガルス』は…」

「取り込み中すみません!パスカル大尉、レイモンド中尉、機体の調整が終わりました。すぐにでも上がれます」

「了解しました、ありがとうございます。…それではすみません、ロベルト大尉、エリク中尉。我々はこれにて失礼します。明日は、どうかよろしくお願いします」

「期待してるかな！レクタ人！」

割り込んだ基地スタッフに呼ばれ、ペこりと挨拶を返した『ガルム1』——パスカル大尉はその場を後にしてゆく。激励の積りだったのだろう、去り際に拳を突き出した『ガルム2』——レイモンド中尉に胸を突かれ、エリクは思わず咳き込む羽目になった。不思議な二人である。相棒のようでもあり、どこか家族のようでもある。年齢も性格も全く違う二人ながら、そこには確かに目に見えない絆が感じられた。

「…そういえば、大尉は『ガルム隊』を知っている感じでしたよね。どこで会ったんですか？」

「ん？ああ、ベルカ戦争の時の『円卓』だ。もちろん面識なんてありやしない、機体をちらっと見ただけさ。あんときは緊急任務で後方から前線に出ることなんて日常茶飯事だったからな、見るチャンスもあつたつて訳さ」

「なるほど…」

「もつとも、15年も前だ。パイロットはとつくに変わってるだろうな。そんなことより、早く格納庫行くぞ格納庫。お楽しみはこれからだ」

それとなく話題に上げた『ガルム隊』に対し、大尉が返した答えは矛盾のないものだっ

た。

そういうことならば、後方にいることが多かったレクタ軍でも、当時の『ガラム隊』に会っていたという説明はつく。パウラが疑っていたような、経歴との矛盾は起きないという訳である。疑惑にひとまずの解決を見出し、エリクはそれ以上の口を噤んだ。話題を逸らすような早口の言葉に、一抹の違和感だけを抱いたまま。

隊長の導きに随うまま、エリクは司令塔を出て、割り当てられた格納庫へと脚を進めてゆく。晴れた空からは日が注ぎ、ようやく気温も上がり始めていた。滑走路では上空警戒の部隊だろう、ウステイオのF-16が2機、まさに滑走に入る所も見える。

格納庫の裏手の扉を開き、エリクの目に『クファイル』のエンジン部が飛び込む。そのすぐ傍、主翼の横に立てられた脚立から機体を見下ろしていたクリスと目が合った時、クリスは脚立から飛び降りてこちらへ駆け寄って来た。

「先輩！見て、見て下さい！凄いですよ！」

「た、立ち直りの早い奴め……。落ち着け、一体何なんだよ」

「いいからいいから。かつこいいですよー」

先の落ち込んだ様子もどこかへ吹き飛んだのか、いつもの明るさそのままにクリスはエリクの背中を押して脚立の方へと体を押しやる。言われるままにエリクも脚立を上り、『クファイル』の姿を上から捉えた時、目に入った『それ』に思わずあつと声を上げた。



灰色地の主翼に、先程まで無かった筈の塗装パターンが加わっていたのである。左翼の三分の二ほどが黒く染められ、そこに並ぶは短い間隔で連なつた黄金色の三日月が4つ。翼端方向へ向かうにつれて少しずつ位置を下にずらす4つの月は、概して見ればひと繋がり大きな三日月にも見える。機体尾翼のエンブレムにも做つたその様は、まさに夜空を背にした月そのものだった。

「おおお！ど、どうしたんですかコレ!?!」

「なーに、ブリーフィング前に整備班にお願いといたのさ。大作戦前のゲン担ぎにな。言つたら、いゝい事だつて」

見上げるロベルト大尉の顔に、悪戯小僧のような満面の笑みが浮かぶ。エンブレムと部隊名をそのまま身に移した愛機の姿は、否応なしにエリクの心を熱くさせる力があつた。

『ね！ね！凄いでしょ！』と脚立の下から届くクリスの声に、エリクも思わず笑みが零れる。

夜空を背に、翼を彩る三日月の姿を、エリクは飽かずその眼に焼き付けていた。

（ハルヴマーシ）

## 第11話 三日月（メツザ・ルーナ）

上空警戒の『ミラーージュⅢ』が、轟々とエンジン音を響かせている。

時刻、午前10時と20分。三角翼の背に映える空はあくまで青く透き通るようで、今日の快晴を予感させた。

背には、滑走路に並んだ『クフィールC7』が4機。尾翼のエンブレムに加え、機体左翼には三日月を象った真新しい塗装が施されており、エリク達レクタ空軍『ハルヴ隊』の機体であることを無言のうちに物語っている。

そして、機体の前に並んだ『ハルヴ隊』4人の前に集うは人、人、人。その誰もが、エリク達に声をかけ、握手をしては次の人へと入れ替わってゆく。その多くは一大作戦に向けて集ったお偉方のようなのだが、中にはモリスツエフ基地のスタッフやパイロットの姿も混じっている。

敬意、同情、そして形ばかりの激励。人によつて握手に込める感情は様々だが、そこにはいずれにも共通して、ほとんど決死隊と変わらない任務を与えられたエリク達に対する複雑な思いが下地に横たわっている。何せ、わずか4機で敵の警戒の隙を突き、『ガラム隊』の道を切り開けというのだ。当然敵の只中に抜け道などある筈も無く、仮にそ

の任を果たせた所で弾薬も燃料も消費した旧式機が生き残れる確率など万に一つもないだろう。

だが、そんな絶望に等しい中で、エリクは不思議と落ち着いている自分があることに気がついた。

無論、心の表面は今も波が揺らめくようにざわざわと揺れている。敵の配置に変化はないのか。本当に敵が主力に気を取られるのか。僚機は、果たして大丈夫か。気にし始めればきりがない心配事は次々と浮かんでくるものの、その下には不思議と、まるで揺らぐことのない水底のような、覚悟とでもいうべき確とした感覚も感じていた。

軍人である。どんな状況でも、命ぜられたことはやるしかない。言うなれば、そんな一種悟りのような思いに至ったと言えば最も近いだろうか。隣で如才なく握手に応じるロベルト大尉も、落ち着いた様子で話すヴィルさんも、きつと同じ覚悟に達しているのだろう。唯一クリスだけは人々の中でもみくちやになり、まるで小動物のようにきよときよとと落ち着きがない。もつとも、慣れない場というのがこの場合大きいのだろうか。

出撃の時間が迫り、人波が遠巻きに離れていく。背を向け行く人々の中に、こちらへ向かう3つの姿を見つけたのはその時のことだった。峻厳な表情を崩さないアルヴィン少佐、相変わらず無表情で小柄なパウラ、今日ばかりは明るい表情も鳴りを潜め、神

妙な面持ちのフィンセント曹長。同じレクタ空軍の教導飛行隊、『スポーク隊』の面々である。

「…すまないな。私から推薦したとはいえ、極めて困難な任務に君たちを駆り出してしまおう」

「なーに、これでも軍の飯食つてますからね。死にそうな目には慣れてます」

「…お前ら、絶対生きて還つて来いよ！ウステイオの連中から上等のウイスキーを賭け取つて来たんだ、それ飲むまで死ぬんじゃねえぞ！」

「おお、それはいい。当てるにサピンのレーズンでもあると最高ですね」

厳しい表情のまま、一抹の情を籠めた少佐の言葉、そしてフィンセント曹長らしい激励。二人と対照的な笑顔で答える隊長達の姿は、とても出撃前の様とは思えない。ややもすれば、スポーク隊の方が落ち着いていないようにすら見える程だった。

アルヴィン少佐の傍らで、俯いたまま黙っていたパウラが口を開いたのはその時だった。

「…期待してる」

「——ああ」

上がった視線は、明らかにこちらだけを見据えたもの。

あまりにも彼女らしい言葉選びに、思わず苦笑が漏れた。これでもきつと、最大限の

激励の積りなのだろう。こんな中でもやる気を奮い立たせてくれるのだから、言葉が持つ力とは不思議なものである。

せめて、もう一言二言だけでも続けようか。そんな思いも、時計の針ががちりと打ち消していった。

「出撃定刻10分前！出撃搭乗員は搭乗せよ！」

「おつと……んじや、レクタの意地背負いにぼちぼち行つてきますわ。足腰持つかね？」

「年ですもんね隊長。湿布でも用意させときますか？」

「バッカお前40代舐めんな。……なははは、まー行きますか！」

心の底に名残惜しさ一つ、エリクは踵を返して愛機の方へと脚を進めてゆく。陽光を照り返して煌めく『クファイル』の機体が、今日は言いようも無く頼もしい。

整備員が常以上に丹念に清掃したのだろう。コクピットには、泥どころか塵一つ落ちていなかった。

《あー、あー、通信テスト、小隊内通信テスト。》

「隊長？」

《いいかお前ら、他の奴らは悲壮感溢れること言ってくれてたが、あんな『エクスキヤリバー』もどきのために心中してやることはねえ。危なくなったら迷わず脱出しろ。……隊長として厳命する。どんなに無様でもいい。命だけは持って帰れ。》

「……へへ、言われなくてもですよ。華の二十代、まだ死にたくないですしね」

《あの『ベルカ戦争』でも運よく生き残ったんです。まだまだ運だつて残ってますよ》

《……！はい、生きて還ります……絶対!!》

多くの言葉が、エリクの胸に入つて来る。目を閉じれば、浮かんで来るのは多くの顔。操縦桿に籠もる力は、今日はどこかいつもより力強く感じた。

《第二次攻撃隊、発進せよ》

通信の声に押されるように、ロベルト大尉の『クファイル』が滑走路へと滑り出してゆく。エリクもそれに倣いながら、視線を不意に横へと向けた。

滑走路の脇に並ぶ、帽子を振る整備員の列。後方に佇む、『ガラム隊』を始めとした多くの機影。そしてハルヴ隊のすぐ後ろ、2機並んだスポーク隊の『タイガーⅢ』。

機体が、滑走を開始する。徐々に加速して風を孕んでいく機体が、声を、残影を、後ろへと残して速度を得ていく。

ふわり、と尻に感じる浮揚感。

ちらりと向いた後方警戒ミラーの中で、緑の迷彩の『タイガーⅢ』は既に小さくなつていた。

\*\*\*\*\*

遠い空に五筋の光軸が奔り、ついで蒼穹に爆炎が刻まれる。

遙か彼方ということもあり、飛び交う機影がどちらのものかは判別が付きがたい。しばしば入り混じる通信の声だけが、数kmを隔てたその混迷を唯一物語っていた。

《バスター5撃墜！》

《くそつたれ、『テュールの剣』か！…ラティオ編隊直上、突っ込んで来るぞ！》

《こちら『スポーク』、カルクーン！上は任せろ、全機とにかく動き回れ！動く相手にレーザーはそうそう当たらん！》

《ウスティオ軍め、レクタまで従えて調子に乗りやがって…!!》

《『バンディエーラ・トリコロリ』、爆撃機を優先して照射しろ！レクタ軍機はもの数じゃない、ウスティオ機に注意するんだ！》

飛び交う声を再び光軸が割き、大型の機影が爆炎に沈む様子が遠目に見て取れる。上空に生じた幾つかの光は、レクタの護衛機とラティオの迎撃機の戦闘によるものだろう。一つ、二つと光は炎と煙に変わり、空色を背に爆発の華を咲かせている。

厄介なことに、通信には明らかにラティオのものも混ざっているのが聞いて取れた。高出力のレーザーを絶えず照射し、空気中の分子の電離が促されたために空域の電位が不安定になり、混線をもたらしている。事前にオペレーターはそう推測していたが、エリクには何のことかさっぱり分からなかった。いずれにせよ、相手の状況把握には役立つ反面、めったなことを口にしてはこちらの目論見も露見してしまう。注意しておくに

越したことはないだろう。

《佳境だな。そろそろ行くかね》

《ハルヴ隊の皆さん、本当は我々も同道するのが筋ですが、今回ばかりは敵中突破をお願いします。：申し訳ありません》

侵入ルートへと機首を向けたロベルト大尉に向けて、後方を飛ぶ『ガルム1』から通信の音がかけられる。翼端を青く染めたF-2Aの翼下には最大量まで対地ミサイルが懸架されており、さながら空飛ぶ攻撃陣地を思わせた。わずか2機で『テュールの剣』の戦闘能力へ打撃を与えるためとはいえ、流石のF-2Aでもいささか過積載のきらいがある。

《なーに、道は綺麗に清掃しとくから、空き次第急いで来て下さいな。きつちりあの剣、へし折って下さいよ》

《はい、必ず。——ご武運を》

後へと継いで残すのは、短いそんな言葉。それだけを後に残し、4機の『クファイル』は増槽を捨て、弾かれたように低高度へと馳せ飛んでいった。ここから先にはラティオの防衛陣地と『テュールの剣』、敵以外にない砲火の渦中。目の前に現れる機影は、全て破壊すべき敵である。

高度、わずかに500。地形追従レーダーが迫る丘陵の合間を読み、計器と正面を行



き来する目が状況を読み、緊張と高揚で研ぎ澄まされた神経が敵の殺気を読む。耳に届く一定のリズムを保った呼気の音は、未だわずかな乱れも無く、糸一本で繋ぎとめた緊張と深い集中を物語っていた。

不意に、対地レーダーが地表の反応を拾う。数にして5、いや6。距離1600、正面右手の丘陵の脇。機位を確かめ、エリクは頭に叩き込んだ地形図からその位置を照合した。間違いなく、最初の関門であるラテイオ軍の対空陣地に違いない。

「2時方向、目標確認」

《ここまで来たらもう後戻りはできねえな。全員<sup>ハラ</sup>肚括れ》

目線を前へと保ったまま、エリクは操縦桿のボタンを操作し、兵装の安全装置を解除する。

今回は対地攻撃が主な任務でもあり、乗機『クファイル』の武装はそのほとんどが対地装備で固められていた。9か所あるハードポイントの内、それに属さないのは先ほど投棄した増槽<sup>G</sup>1つと自衛用の短距離空対空<sup>A</sup>ミサイル<sup>M</sup>のみ。残り6か所のうち4か所には無誘導爆弾<sup>B</sup>が、残る2か所には小弾頭をまき散らす特殊な爆弾であるところの自己鍛造小弾頭爆弾<sup>S</sup>を装備する形となっていた。

ヴィルさんやクリスの機体も同様の装備だが、唯一ロベルト隊長機だけは、SFFSの代わりに滑走路破壊用特殊爆弾を2基4発搭載している。事前情報によると、一部の

防衛陣地や『テュールの剣』本体には野戦滑走路が設けられており、護衛機を随時離着陸させて対空警戒を行っているという。そこで、対空陣地の撃破後に、ロベルト大尉は敵陣の奥深くまで侵攻し、ラテイオ軍野戦飛行場に打撃を与えるという任務も帯びることとなった。

滑走路破壊用特殊爆弾は投弾と同時にパラシュートを展開し、地面に垂直になった所でロケットに点火。滑走路に深く突き刺さった後に爆発し大きなクレーターを形成するという、いわばミサイル的特性も持ったものである。わずか4発とはいえ、滑走路を使用不能にすることは不可能ではない。

ともあれ、まずは眼前の目標である。

兵装選択、UGBハードポイント2か所。

ヘッドアップディスプレイ<sup>H</sup>の表示が対地爆弾のものへと切り替わり、機体軸と着弾予測円を示す薄緑色のラインが映し出される。

迫る地形が、大地が、陣地が脅威を告げる。隊長の言う通り、ここまで来ればもう後戻りはできない。

小さな基地施設が眼前となり、緑と褐色の大地にクリーム色の舗装色が映える。

着弾予測円、固定。目標、向かって右の対空砲。

射程——今。

《行くぞー！『ガラム』の道を切り拓く！！》

「応！！」

機体の速度を背負って、翼下から放たれたUGBが弧を描いて落ちてゆく。

唐突な敵機の出現に呆気にとられたのだろう、その頭上を通過する瞬間となっても、対空砲弾の1つすら打ち上がることはない。

通過、轟音、風圧。それらに見舞われたラテイオの対空陣地に、最後に降り注いだのは各機から2か所6発ずつ放たれた、漆黒の爆弾の雨。

エリク達が遙か過ぎ去って後、後方に幾つも生じた爆炎は、その小さな敷地を黒と赤の二色だけに塗りつぶしてしまっていた。

《なんだ…？第15対空陣地、通信途絶》

《最外郭の陣地だ、構うな……くそつ、『テュールの剣』の冷却が追いつかん！第3次迎撃隊上がれ、前面のウステイオ軍を防ぎきるんだ！》

戦闘の狂騒と混乱が、正確な状況把握を妨げているらしい。彼らの切り札である『テュールの剣』の乱用により、通信に混線障害が起きているのもそれを後押ししている様子は、通信口に怒鳴るラテイオ軍人の声からも察することができた。

残る目標は、3か所。先と同様の対空陣地、レーダー施設と続き、『テュールの剣』本体の手前に大型の防衛陣地が存在するという構図である。レーダー施設の破壊を確認

した時点で後方の『ガラム隊』が突入し、一気に敵本拠へ肉薄するという手筈という訳だ。距離としては次の対空陣地との間がやや狭く、一方でリーダー施設へは少々隔たっているため、事前の取り決めでは次の陣地を撃破したのち、攪乱のために一時減速。頃合いを見計らい、リーダー範囲内へ一挙に突入することになっている。

《次だ。各機UGB用意、一回で行くぞ》

丘を左旋回で抜けた先に、次の陣地が広がっているのが見えた。事前情報では地对空ミサイル<sup>S</sup>3基が配備されているというが、それでもその規模は小さく、せいぜい対地目標の反応も7つほどしか確認されない。

先と同じ要領で、兵装に残るUGBを選択する。

高度を下げ過ぎては、こちらにも爆風の被害が生じる。一瞬高度計に目を奔らせ、エリクは僅かに機体の高度を上げた。機体の挙動に随うように、着弾予測円もふわりと宙へと浮かび上がる。

針路よし、目標射程圏内まで少し。

このまま――。

《……隊長！ヘリが上がってきます！》

《……Ka—50か！俺が引き受ける、そのまま投弾しろ！》

「チッ！このタイミングで……！」

クリスの通信に、視線が思わず跳ね上がる。

陣地の上空には、確かに小さな機影が二つ。機体上部にローターを設け、機体側面に小さな翼を持ったその姿は確かに戦闘用のヘリコプター。それも、隊長の言を信じるなら以前も見たKa-50『ホークム』とのことだった。以前の例を見るまでも無く、AMの搭載が可能な戦闘ヘリであり、動きが鈍重な今となつてはその脅威は決して低くない。

敵機の機首と翼がちかちかと光る。

敵機、発砲。ミサイルアラートが鳴り響く。

ロベルト隊長がミサイルを回避する。

『ハルヴー』、機銃発射。炎に包まれた『ホークム』1機の回転翼が弾け飛ぶ。

残った『ホークム』が機銃を放つ。

投弾位置。

曳光弾。距離、至近。

ぶつかる。

反射的に倒した操縦桿。傾く予測円に爆弾が吸い込まれるように向かっていく。

左右それぞれに分かれ、陣地上空を擦過する4機の『クフィール』。その後方で立ち上つた黒煙は、しかし咄嗟の回避で狙いを外したためだろう、陣地の全てを破壊するに至ら

なかった。

《こ、こちら第9対空陣地！低空侵入したレクタ機に攻撃を受けている！『クファイル』が4機、左翼に『斧』の塗装のヤツだ！》

《バレたか。こうなりや時間ずらしにのんびりしてる訳にもいかねえな。エリク、俺は止めを刺してくる。ハルヴ3と4を連れて先にレーダーを潰してくれ》

「…了解！」

くると反転するロベルト大尉の『クファイル』を残し、エリクは機体を再び加速させる。

大尉の言う通り、既にこちらの存在と進路が露見してしまった以上、ラティオ軍機の迎撃を受けるのも時間の問題である。ガラム隊の侵入ルートを切り拓くことを考えると、こちらの進路上に敵機が現れるのは作戦遂行上大きな問題となる。事こうなれば、時間との勝負といって良かった。

雁行の3機が、樹を掠めるように低空を滑り抜けてゆく。後方の爆発が冷めやらぬ中、遙かに見える白い皿のような設備は、明らかに対空警戒用のレーダー。ここからは丘も起伏が乏しく、目標への攻撃を妨げる地形は少ない。それは裏を返せば、レーダー波を遮る盾も最早ないことを意味している。すなわち、もはや猶予はない。

「ハルヴ3、ハルヴ4、レーダーは機銃で仕留める！対空砲に気を取られるな！」

《了解！》

レーダーの左右に設けられた対空砲がばらばらと光を放ち、曳光弾が機体の傍を駆け抜けてゆく。

炸裂音、衝撃。破片が爆ぜ、キャノピーの左側にヒビが入る。それでも30mmの照準は、白いレーダーから眼を逸らさない。

引き金に応えるように、機体下部に振動が響く。

移動目標ならいざ知らず、『クフィル』の30mm機銃は対地攻撃において優れた火力を叩き出す。吐き出された機銃弾にレーダーは瞬く間に食い散らかされ、一瞬走った火花によつてその機能を失った。

《第5レーダーサイト反応消失！》

《間違いない、さつきメッサルーナの『斧持ち』だ！早く戦闘機を向かわせてくれ、『テュールの剣』まで突破されるぞ！》

「ハルヴ2よりガルム1、レーダーサイトを破壊した！もう来てくれ、出口はしつかり撃いで見せる！」

《ガルム1了解。ありがとうございます！これより進発します》

《ハルヴ2、上空から敵機が降りて来ています。機数8》

反射的に見上げた空に、黒い影がいくつも浮かぶ。その数、確かに8。まだ遠く機種

までは見定められないが、こちらへ鼻先を向けて急降下するその様は、明らかにこちらの迎撃を意図したものだ。可能ならば排除して後顧の憂いを断りたい所だが、この空域に下手に留まれば『ガラム』の存在がばれてしまう。

背が悶えている以上、エリクにできることは一つしか無かった。

「――振り切つて突破する！ 何とか、最後の敵陣地を……」

もはや敵に見つかった以上、極低空を維持する必要性は薄い。エリクは操縦桿を引いて高度を1200前後に保ち、ひたすらに『クファイル』を加速させた。最深部へ侵入しているこちらが攻撃針路を取り続ければ、後方を狙う敵機もさらに後方の『ガラム隊』への警戒は必ず疎かになる。当然ながらハルヴ隊は周囲から狙われることにもなるが、今はただ、その道を作ることに専念すればいいのだ。そう、たとえ命を捨てる覚悟をしてでも。

『命だけは持つて帰れ』

耳の奥に、出撃前の隊長の声が蘇る。

隊長、そうは言つても、この敵の数です。命の一つや二つ賭けないと……少なくともそう覚悟しないと、こんな敵の渦中で平静保つてなんていられませんよ。

大丈夫、覚悟だけです。そう簡単に死にはしませんから。

苦笑、一つ。ふ、と息を吐き出して、見据えた瞳にもはや笑みの残滓はない。



睨んだ先には、下方に見える最後の陣地。そしてその後背、さらに数km先に聳える『テュールの剣』。巢を護る兵隊蜂のように周囲には絶えず戦闘機が舞い、未だに塔の先端から放たれる光軸が空を灼いている。防空陣地には野戦滑走路も設けられているらしく、垂直離着陸機らしい小さな機影も1つ2つ上がり始めていた。

《う…後ろ、喰われます！『フィツシユベット』『ファルクラム』各4…：ろ、ロックオン警報が…!!》

「くそ…！クリス、攻撃を断念して回避行動に移れ！攻撃はこっちで受け持つ！」

《で、でもそれじゃ先輩が…きやあつ!?》

「…クリスッ!!」

焦燥した声が爆発音に途切れた時、エリクは血の気が引くのを感じた。後方、8機。被弾音。

まさか。

叫ぶが早いか、エリクは攻撃のことも一瞬忘れて後方を振り向いた。

距離1500に満たない距離を猛追する敵機。やや間を開き投弾体勢に入るヴィルさん。その下方で、クリスの『クファイル』は火を噴いて編隊から落伍しつつある。幸い直撃ではなかったようだが、あれでは機体はもう持たない。

「クリス、脱出しろ！もういい、十分だ！」

《げほ、ごほつ……ごめんなさい先輩、あたし、あたしっ……!!》

「いいから!!命を持つて帰るんだ!」

《グスツ……はいっ!!》

クリス機のコクピット付近に煙が爆ぜ、キャノピーが吹き飛ぶ。射出座席で空へと弾き出された小さな人影は、次いで開いたパラシュートに吊るされて、墮ち行く『クフィール』と対照的にふわりとその体を宙へと舞わした。

ほつと胸をなで下ろすも一瞬、エリクはその煙に紛れ、『クフィール』を斜め下方へ降下させ始める。狙いはその先、『テュールの剣』を護る最後の対空陣地。西側に滑走路を擁し、数多の対空砲とSAM、高射砲で身を固めた、これまでとは比べものにならない最後の防壁。

兵装選択、SFFS2基。激しい対空砲火の中でHUDの照準が変化し、Iの字を縦に長く伸ばしたようなものへと切り替わってゆく。

SFFSは金属の小弾頭を内部に持ったクラスター爆弾の一種であり、その真髄は広大な攻撃範囲にある。すなわち、照準の縦のラインがその散布範囲を示し、その範囲にあるあらゆるものへ金属の小片が降り注ぐという訳である。小弾頭そのものは爆弾ではないので爆発を伴わないものの、対空兵器やレーダーの破壊、作業人員の戦闘能力を奪う程度は訳なくしおおせられる。

高射砲弾が炸裂する。

爆炎が視界を塞ぎ、曳光弾が目の前を遮る。

正面、ミサイル警報。天を指す矢がこちらを指向する。

チャフ散布。狙いを見失った鏃が穂先を逸れ、あらぬ方向へ飛んでゆく。

炸裂。

近い。視界の右の端に炎が上がる。

自分の機体ではない。自らの右主翼、そのさらに先の1機。

ヴィルさんの『クファイル』。

「ヴィルさん!？」

《なんの、まだまだだ！投弾用意ですよ、エリク中尉！》

「……………応!!」

破片を散らし、炎を纏い、それでもその翼は止まらない。存念を振り払い、エリクは眼前の敵に、剣を護るべく最後に聳える壁へと意識を集中した。散布帯予測範囲の中に納まるのは、対空砲とSAM2基、そして駐機しているYAK-38。

HUD上のデジタル表示が、ぐんぐんと数値を下げていく。機体を急降下させていることに加え、元より加速が乗っているのだ、その速度は驚く程に速い。互いの距離が近づく程に射撃も正確さを増し、エリクの機体の装甲を見る間に削り取ってゆく。

1200。

1100。

1000。

互いに、必中。外さない距離。

「…っ撃え!!」

高度が3桁に至った瞬間、エリクは操縦桿を思い切り引き上げ、次いで投弾のボタンを押した。

翼の下からがちりと音が響き、重量物を脱した反動で機体が上へと跳ね上がる。速度を得た機体の背に襲いかかるは殺到する機銃弾、レーダー波の警戒音、そして——爆発の衝撃。後方警戒ミラーの中では、小弾頭が地上へ雨のごとく降り注ぎ、あらゆる地上兵器に穴を穿って誘爆の炎を盛んにまき散らしている様子が映し出されていた。弾薬に引火でもしたのでろう、最後に生じた爆発の威力は凄まじく、上空に滞空していたYaK-38を粉々に吹き飛ばして、黒と赤の領域を辺りへと広げ続けている。

「なん、とか…」

《すみません、エリク中尉。私の機体はそろそろ限界のようです。お先に脱出しますの  
で、また後でお会いしましょう》

「ヴイルさん…。了解です。敵兵にくれぐれも気を付けて」

《エリク中尉こそ、命を大事に。——それでは》

右翼側、炎に翼を包まれた『クファイル』が、右へと旋回して徐々に高度を下げてゆく。程よくラテイオ陣地から離れた辺りで脱出する積りなのだろう、機体の挙動はクリスと比べても危なげない様子に見受けられた。高度は十分に保っている所から、脱出の危険も少ないだろう。

——問題は、自分の方だ。

「ハルヴ2よりガルム、目標への到達ルートクリア!…早く来てくれ、道はじきに閉じるぞ!」

《凄い!…ハルヴ2、ありがとうございます!あと1分で当該空域に到達!》

「了解。…1分か、長いな」

《くそ、第2防衛陣地、戦闘能力喪失!空軍は何をしていたんだ、『斧持ち』が1機抜けて来たぞ!》

《うるさいな、どうせ手負いの1機だ。尊敬の念を持って、罠り殺してやるさ》

狂騒の中に生じた、一瞬の虚。ラテイオの通信を流すように聞きながら、エリクはまるで他人事のような面持ちで周囲を見やった。

高度、概ね1300。クリスを撃墜した8機は対空砲火の巻き添えを避けていたのか、今は2000程度の距離を保って左右後方に4機ずつ旋回している。眼下からは、

辛くも誘爆を逃れた野戦滑走路からY a K—38『フォージャー』が2機。眼前わずか1 km程度には『テュールの剣』が聳え、その後方に位置する野戦飛行場からは固定翼機が絶えず離着陸している様も見て取ることができた。方やこちらはロベルト隊長が遅れ、ヴィルさんとクリスは撃墜され、わずか1機。それもA A M 2発のみしか装備せず、機銃弾と破片の銃創で満身創痍の旧式機というおまけ付きである。1分も撃墜を免れれば、奇跡としか言えないだろう。

さて。考えるのは苦手だが、たった一人とあつては指示を待つ訳にもいかない。周囲の敵意を見定めて、エリクはしばし頭を巡らせた。

ガラム隊侵入経路を開くという最低限の役割は果たした以上、最も理想的なのはそのまま脱出、ないし離脱することである。だが、脱出した所でここは敵地のど真ん中。離れた位置で脱出したクリスやヴィルさんと違い、脱出後も戦闘に巻き込まれることは十分にありうる。最悪、ガラム隊の空爆に巻き込まれてそのままお陀仏しかねない。逃げるにしても、下手な方向に逃げればガラム隊の存在が察知され、攻撃の成功率を下げることにもなってしまうだろう。

それなら、できることは一つである。

どんな手を使つてでも、1分間逃げおおせる。それ以外に、選択肢は無い。

「泣けて来るな。悪いな、相棒。もうちょっと頑張つてくれ」

ぼん、と計器盤を軽く叩き、エリクは愛機へと声を向けた。

思えば、パイロットとして着任してからこのかた、この『クファイルC7』はエリクにとって最初の、そして唯一の乗機だった。既に旧式となつて久しい機体だが、この機体に命を預けて乗っていたエリクにとっては、いわば無二の相棒だったと言つていい。どんな任務でも、どんな窮地でも、こいつは常に応えてくれた。

左右両翼後方から、ラテイオの戦闘機が迫つて来る。右側がやや早いのは、MiG—29『ファルクラム』で構成された編隊ゆえだろう。遅れた4機のMiG—21『フィッシュベッド』は、こちらの回避の隙を狙い撃つ積りに違いない。

伸ばしていた手をそのまま下げ、正面計器盤のボタンを押す。

モード表示、『CM・PLUS』。最早満身創痍となつた『クファイル』に残された、最後の切り札。経戦時間と引き換えの、出力強化機構——。

「行くか。最後の晴れの舞台だ」

エンジンの唸りが高まり、エンジン回転計がぐんと針を振り切る。それは、まるでエリクの声に『クファイル』が応えてくれたかのようなようだった。

右後方、ミサイルアラート。

チャフ、次いでフレア散布。同時に操縦桿を左へ倒し、『クファイル』を左旋回させる。曳光弾、擦過。ミサイルが遠ざかり、その後を機銃弾が、次いで『ファルクラム』が

過ぎてゆく。

続くミサイルアラートは真後ろ、『フィッシュベッド』4。

フレア散布、残数わずか。同時に左ロールからの背面下降。逆さになった天地の中で、4筋の煙が尾部を掠めて遠ざかる。

『ファルクラム』、上方で旋回、次いで下降。低空域へ逃れたこちらを追う姿勢。ち、と舌打ち一つ、操縦桿を引いて機体を引き起こす。高度わずかに600。

接近警報。

正面。

しまった。思わず口内に言葉を囁む。

真正面わずかに上方に、機影2。失念していた、後から離陸していた『フォージャー』。その鼻先は完全にこちらを向いている。

増速。チャフ散布、残量ゼロ。真正面から攻撃を避けて下方を抜ける針路を取る。どのみち機銃が機首下方に設けられている『クファイル』では、機首を上げた所で上方の敵には届かない。

ミサイル、擦過。爆発。その合間を縫うように、機銃弾が『クファイル』の翼を穿つてゆく。

「ぐっ！」



衝撃。数十センチ側を貫いた閃光が左のカナード翼を弾き飛ばし、破片がコクピットの中を跳ね回る。

喰らった。近い。しかし、怯んでいる暇は無い。

2機の『フォージャー』の下を抜け、エリクは操縦桿を引き機体を急上昇させる。

だが鈍い。動きが遅い。元より運動性をカナード翼で補っているデルタ翼機である、その要を失えば、機動性の低下は目に見えている。

後方、2：いや、4。反転した『ファルクラム』。上昇で速度が落ちたこちらへ、機銃弾が殺到する。

「痛ッ……く、そっ……!!」

咄嗟に急旋回へ舵を切るも、曳光弾の筋は『クファイル』を打ち据えてゆく。いくつかの銃弾は機体を貫通し、補助翼が弾け、主脚がへし折れ、機体が黒煙を噴き始めた。

熱い。

脚と額にぬるりとした感触が感じられる。汗とはまた異なる、熱を持ってゆつくりと溢れるその感覚はおそらく流血。跳ね回った破片が当たるか突き刺さるでもしたのだろうか、今更場所を確かめる余裕は無い。

正面、機影4。『ファルクラム』の隙を補うべく近づいていた『フィッシュベッド』。

先の被弾で方向舵も損傷したらしく、旋回すらままならない。しかしヘッドオンとな

れば、こちらは間違いなく撃墜される。

ここまで、か。

血が汗と混ざり目にでも入ったのか、赤みを帯びた視界でエリクは時計をちらりと見やる。

交戦開始から一分経過まで、あと——10秒。

《よくよく引つ掻き回してくれたもんだ。——ここまでだ、『斧持ち』！》

操縦桿を引き、機首を上昇させる。

敵機との距離、目算で2000。数秒もあれば互いの射程に入ってしまう距離である。ただでさえ速度が落ちた状態から上昇すれば、当然速度はさらに落ちる。最も投影面積が大きくなる機体の腹を晒したその姿は、敵機に取って恰好の好餌に見えたことだろう。

《悪あがきを……この針路ではミサイルは当たらん、機銃で狙い撃つぞ》

通信の混線が、敵の挙動を具に伝える。おそらくは機首を上げ、こちらの予測進路上に機銃をばらまく積りだろう。不思議な集中と静謐の中で、エリクの脳裏には彼我の距離が、位置が、思惑が描かれる。

好機。

こちらがわずかに高位を保ち、敵がまっすぐ直進する、今。

操縦桿を押しして機首を水平に戻し、何も無い虚空へとエリクは引き金を引いた。

《何!? まだ動くのか?!?》

《…! 凶られた! 両翼に開け!!》

初速が遅く、銃弾も重いため、『クファイル』の30mm機銃は20mm『バルカン』と比べて対空用途には不向きとされている。一つには、その重さゆえに弾丸がエネルギーを失いやすく、20mmより手前で弾道が落ちてゆくためである。言い換えれば、直射で目標を狙う場合、有効射程がどうしても短くなってしまふのだ。

30mmは、確かに直射には向かない。しかし、もし目標が『こちらに直進し』かつ『こちらの下方にいれば』どうか。速度を失い弧を描いて落ちてゆく銃弾の軌跡が丁度目標の進路と交わった場合、それは本来ならば不可能な筈の射程外攻撃となりはしないか。アウトレンジ

まして、機銃を機体下部に設け、発射位置が低い『クファイル』ならば。

偶然か、それとも意図か。『クファイル』から放たれた機銃弾は弧を描き、山なり弾道を取って敵編隊の斜め上方から降り注ぐこととなった。遠距離ゆえに照準の正確さは望むべくもないが、1、2発が『フィッシュユベッド』の主翼を穿ち、狼狽えた隊長機が散開を指示している。

エンジン回転数、増大。『コンバット・プラス』機構で出力を強化したエンジンが、最期の咆哮を上げる。

目標は、左へわずかに迂回し、こちらをヘッドオンで仕留めんと機体を翻す『フィッシュユベッド』。

操縦桿を左へ倒し、機体をロールさせる。方向舵が効かない以上、ロールと自重を利用して方位を変える他は無い。逆さまになった天地の中で、エリクは操縦桿を引いて背面下降。上昇する『フィッシュユベッド』と相対した。

距離、900。

700。

機首を引き、敵機の腹の下を潜り抜けるコースを取る。

AAM、発射。敵機はわずかに揺らぐも一瞬、フレアを放出してその矛先を逸らす。

時に、距離500。

防御の為に、敵の意識がわずかに逸れた、ほんの一瞬の機。

馳せ違う、銃撃の応酬。

機銃の搭載位置と口径は、些細ながら時として勝負を決する。

腹下をすり抜けるコースを取った『クファイル』に対し、機首側面に機銃を設けた『フィッシュユベッド』の火線は交わることなく擦過する。一方で、下方に火線を展開した『クファイル』は敵機を丁度正面から捉え、30mm弾をその機体へと刻み込む結果となった。

至近の爆発が、エリクの『クファイル』を揺らす。粉々になった『フィッシュユベッド』の左右前方で、残った3機は慌てたように急旋回に入ってしまった。

《パロケットーが墜とされた!》

《馬鹿な……くそ、逃がすな! 罅り殺せ!!》

被弾した主翼が黒煙を引き、残ったカナードも脱落してゆく。周囲の敵は、しめて9機、いずれもこちらを方位する体勢。満身創痕と言うもおろか、スクラップ寸前となつた『クファイル』の中で、しかしエリクは充足した笑みを浮かべていた。思わず声を上げて笑つてしまいたいくらい、今の気分は心地よい。

なぜならば、ほら。南の空に、機影が3つ浮かんでいるのだから。

「もうこっちは限界です。後、任せますよ。——隊長」

《了解だ、エリク。後は任せな。——ありがとよ、お前のお蔭だ》

《ハルヴ隊の戦いを無駄にはしない……! 『ガラム1』、交戦!》

《あんがとな、『ハルヴ2』。まるで昔のあいつを見てるみたいだつたぜ。——『ガラム

2』、交戦!》

空域へと滑り込む、3つの機体。その航跡に触れた敵機は、一つ、また一つと爆炎に変わつて落ちてゆく。一航過で2機、針路を妨げる敵をさらに3機。大鎌を振るうがごとく戦力を削り取るその様は、まさに鬼神だった。

《3機抜けた!》

《くそ、司令部へ緊急電!南方直掩中隊壊滅!敵機『テュールの剣』へ侵攻中!》

《あの塗装は…間違いない、『円卓の鬼神』だ!》

《馬鹿な……。い、急いで野戦飛行場から迎撃機を上げろ!攻撃機でも損傷機でもいい、とにかく奴を止めろ!!》

《ガルム隊が突破した!連合軍、一気に押せ!!機甲部隊は前進し、防衛陣地を排除せよ!》

ラテイオ軍の恐慌が、通信を揺らし続ける。ロベルト大尉は東側へ針路を取り、敵の野戦飛行場へと舵を取っていくのが見えた。事前の手筈通り、滑走路の破壊に赴くのだろう。迎撃機の発進さえ防げれば、あとは勝ったも同然だった。

戦闘の狂騒が去った空で、エリクはボロボロになった愛機を今一度見やった。既に計器は殆どが機能を停止し、残弾もほとんど残っていない。飛行に必要な能力の殆どを失い、鉄屑のような姿となって、辛うじて空に漂うその姿。それが、エリクには何故かこれまで見たすべての機体の中で、最も美しい姿に見えた。

「ありがとう、相棒。誰が何と言おうと、お前はこの世で最高の戦闘機だ。今まで、ありがとう。——じゃあな」

光が明滅し、機能を半ば失っているHUD。機体の命を物語るようなそれを最後に撫

で、エリクは脱出レバーを引いた。

キャノピーが吹き飛び、射出された座席から体が放り出され、一瞬後にパラシュートが花のように開かれる。吹き荒れる風は冷たく、汗と血に濡れた体にはいつそ心地よい。

彼方で光軸が輝き、そのたもとを潜り抜けた2つの機影が聳える城塞へ肉薄してゆく。

轟音、爆炎。

炎と共に高層の塔がへし折れ、噴煙の中に沈んでゆく。その上を悠然と舞う2機は早くも目標を見定めたのだらう、再び高層目がけて降下し、残る塔すらもその牙で噛み砕くべく翼を翻していった。

断末魔を刻む『テュールの剣』。そしてその傍らに咲いた、炎で象る愛機の墓標。血で濡れた掌を掲げ、エリクはその全てに敬礼を送った。

## 第12話 獅子たちの休日

「ひさし庇越しに見上げた空に、羊雲が物憂げに漂っている。

航空基地らしいいたたましいエンジン音が遠く感じるのは、出撃の中心が距離を隔てた隣の滑走路となっているためだろう。日陰の下で目を細めれば、滑走路にはウステイ才軍のF-16『ファイティング・ファルコン』が並び、出撃の時を待っているのが遠望できる。爆弾を満載した戦闘機、それらを導く誘導灯、見送りに出る整備員達の姿。全ては数百mの先である。

機体のある連中は、羨ましいことだ。

緊急出撃用に設けられた、モリスツエフ空軍基地の端に当たる第3滑走路。その脇に駐機された『ミラーージュIII』の翼の下で、エリクはごろんと体を投げ出し、頭を固いタイヤに預けながら呟いた。

時に、2010年10月25日。秋深く、涼風抜ける陸の上は、空気が籠もる施設内よりもいつそ気持ちいい。

「あ、いたいた！先輩、こんな所でサボって！」

「サボってない。事務も終わって、やることも無いだけだ」



機体の下で寝転ぶエリクを目ざとく見つけたらしく、クリスが走りざま、翼の下に身をかがめる。当のクリス本人も、フライトジャケットの前を大きく開いて最低限の待機装備しか整えていない辺り、邀撃待機という埒の明かない任務に暇を持て余しているのが窺い知れた。手には何やら紙片を携え、一体何を気にしているものやら、ちらりと周囲に目を配っている。

「隊長がいれば、せめてもう少し身動きが取れたかもしれないけどな」

「…そうですね。味方は出撃の真つただ中、国際情勢は緊迫の真つただ中…そんな時に、私たちは飛ぶこともできないなんて。…隊長、無事だといいですけれど」

「ロベルト大尉のことだ、どうせけろつとした顔でふらつと帰って来るさ。お土産でも抱えてな」

「……そうですね。きつと……」

傍らにクリスが腰を下ろし、その拍子にふわりと揺れた栗色の髪から甘い芳香が漂う。女を意識させるその香りに我ながら整理しがたい感覚を抱きつつも、話は今の彼女の身の上へと移っていた。エリクの冗談に応じるクリスの笑顔も、状況が状況のためか些か硬い。

事実、彼らを取り巻く環境には、いくつかの大きな変化が生じていた。一つには部隊について、そして一つには国際情勢に関してである。

それらを語る前に、まずは先の大規模作戦である『ラグナロク』作戦——ラティオ軍多塔式高層化学レーザー兵器『テュールの剣』破壊作戦の顛末について説明せねばなるまい。

結論から言うと、『ラグナロク』作戦は完遂されず、その目標達成率は7割に留まった。

本来の作戦目標としては、絡め手の侵攻ルートから潜入したウステイオ空軍エース部隊の『ガラム隊』が『テュールの剣』へ先制攻撃を仕掛けてその戦力を減らし、その隙を突いて空軍主力が侵攻しジエネレーターと制御設備を破壊。その後陸軍機甲部隊が進軍し、『テュールの剣』を占拠するというものだった。これが成功すればラティオ中郡の守りは最早無いも同然であり、眼前にラティオ共和国首都セントラムを望む状況になっていた筈である。

ところが、事前情報よりラティオ軍の防衛体制が強化されていたこと、ならびに『テュールの剣』を護る曲技飛行隊『バンディエーラ・トリコロリ』を始めとした防衛部隊の奮戦により、友軍への被害も予想を上回るものとなった。結果、『テュールの剣』のレーザー砲塔5本のうち4本を破壊したものの、ジエネレーター本体と1塔は残存することとなったのである。周辺の敵陣地もいくつかは戦力を維持し、実質的に陸軍による早期占領は不可能となった。

この状況を受け、連合軍はラグナロク作戦の継続を決定。攻撃から4日を経た今と

なつても空陸の戦力を展開し続け、本土中郡を死守せんとするラテイオ軍と血みどろの戦いを繰り広げていた。消耗した戦力を補うため、両国が総力を振り絞って人員や資材を捻出し続けていることは言うまでもない。依然戦況は埒が明かず、さながら血と資源を無限に飲み込む底なし沼のような状況を呈していた。

さて、当のハルヴ隊である。

先の作戦において、エリクラハルヴ隊は部隊全滅の憂き目にこそ遭つたものの、その身を賭して『ガラム隊』の侵入ルートを切り拓き勝利に貢献した。その塗装パターンからラテイオ軍からは『斧持ち（メツザ・ルーナ）』の異名を頂戴し、友軍からは勇氣ある先兵と讃えられ、帰隊した時はさながら英雄のような扱いを受けたものである。

そんな彼らに現在与えられた任務——それは、敵軍による基地への攻撃に対応する『邀撃待機』であった。つまり、敵が来たら迎え撃つて撃退する、と言う程度のものである。こちらが攻勢をかけている今は機材に余裕がなく、予備機の『ミラージュIII』を充てている辺りからも、連合軍がその任務にさして重きを置いていない様子が垣間見える。

最前線部隊たる彼らが、今敢えてこの後方任務に充てられている理由は大きく分けて二つ。一つには機体配備の遅延、そしてもう一つは指揮官の不在である。

前者については言を俟たない。先の作戦で小隊の『クファイルC7』は全て失われ、元

のヘルメート空軍基地でも「クフィール」は払底していたことから、一時的に彼らの搭乘すべき機体が無い状態となったためである。これに関しては、一応レクタ本国から補充機材を輸送する旨の通達があつたため、さほど心配することではない。

問題は後者である。

先に述べた通り、先日の作戦でエリク達に与えられたのは『ガルム隊』の侵入ルートを確認する対空・対地任務だつた訳だが、ロベルト隊長だけは『テュールの剣』に付随する野戦航空基地への爆撃任務も与えられていた。エリクの撃墜後に空域に到達し爆撃に向かつたロベルト隊長は、そのまま消息を絶つたのである。

この野戦航空基地は空域の制空権を担う重要な拠点であり、『テュールの剣』の後方——すなわち首都セントラム方面に近い東側に建設されたものだった。そこへの爆撃を行つた以上、たとえ脱出できていたとしても、そこは敵軍のど真ん中。友軍陣地への脱出が、果たしてできていたかどうか。あまつさえ、周辺では今も敵味方の陸軍が戦闘中なのである。

以来4日間、隊長の行方は杳<sup>よ</sup>として知れない。勢い、エリクら部隊員の焦りと不安は募らざるを得なかつた。あの人に限って死ぬなんてことはない。きつと、いつかひよつこり帰つて来る。——でも、まさか、万一。口にこそしないが、不意に頭をもたげるそんな不安を、エリクは冗談で紛らわすことしかできなかつた。

ともあれ、上層部としては指揮官不在の小隊を作戦に向かわせるのは不安と判断したのだろう。ハルヴ隊が主力を外された理由は、以上2点に尽きる。

一方で、『ラグナロク』作戦以降の国際情勢は、緊迫の一途を辿っていた。

その中で最たるものは、第一等の大国、オーシア連邦の方針転換である。

ユークトバニアとの戦端が開かれてから約1か月、オーシアは劣勢に立たされ続けて来た。一時は自国領の打ち上げ基地や内海にまで攻撃を受け、国力の衰退すら囁かれた程である。それでも、10月上旬に行われたユークトバニア軍による上陸作戦では、オーシア西端サンド島の防衛に成功し、ユークトバニアの戦力の一翼を担っていた潜水空母『シンファクシ』をも撃沈せしめたことから、以降両国の間での交戦は膠着化しつつあった。殊に、オーシアのハーリング大統領は融和派として知られており、戦況が膠着した機を逃さず、中立国ノースポイントを仲介してユークトバニアに和平を呼びかけていたという。

ところが、この10月下旬に入り、そのオーシアが急遽方針を転換した。埒の明かない和平交渉に業を煮やしたのか、突如ユークトバニア本土侵攻作戦の発動を発表したのである。これまでの融和政策をかなぐり捨てたようなその豹変は、周辺諸国を驚かせた。何と言つても、このオーシア東方諸国で繰り広げられている戦争は、一枚めくればオーシアとユークトバニアの代理戦争という側面を持っているのである。オーシアと

ユークトバニアの戦力の変化は、そのままこちらの戦況にも繋がりにかねない。

この状況の変化に早速反応したのが、東方諸国最大の戦力を有するサピン王国だった。先のオーシアの発表の翌日——すなわち今日になって、『地域の平和と安定のためにウステイオ・レクタとラテイオの停戦を呼び掛ける。異議ある場合は武力介入も辞さず』との声明を発表したのである。オーシアがユークトバニア本土侵攻作戦に乗り出すということは、当然東方諸国へ手をかける余力も減る。そのタイミングを狙い、オーシアともユークトバニアとも異なる、第3勢力として影響力を拡大するための声明であることは誰の目にも明らかだった。

ここまで犠牲を出しながら勝利を重ねている連合軍にとって、今更振り出しに戻れという声明が呑める訳はない。サピンの声明に反発するように『テュールの剣』への攻撃を続けているのも、連合国とすれば当然の対応だった。一つには、オーシアの勢力を背にしている連合軍には、サピンといえども迂闊に手は出せまいという首脳部の観測もあるのだろう。

厄介なのは、このサピンの声明に、レクタの隣国であるゲベートが協調路線を示していることである。

地図を俯瞰すると、その厄介さが見て取れる。各国の地理的な繋がりを整理すると、ベルカ共和国から見て東にファト連邦が接し、そこからゲベート、レクタ、ウステイオ

と南にかけて数珠繋ぎに連なっていく。ラティオはレクタの南とウステイオの東に接し、その南西にサピンが連なるという形である。もしサピンが宣言通りに武力介入を開始し、ゲベートがそれに同調した場合、レクタは北のゲベートと南のラティオから挟撃を受けることになる。ウステイオも南のサピンと東のラティオから同時に圧力を受けるため、形勢は2国にとって一気に不利となるのだ。親ユークトバニア路線を取るファト連邦の向背も懸念の一つであり、緊張の度合いは一挙に高まったと言っている。

加えて、レクタはゲベートから分離独立した国であるという背景上、レクタとゲベートの仲はお世辞にも良いとは言えない。仮にサピンが武力行使に慎重な姿勢を見せても、同調したゲベートが意図的に戦端を開けば、それに引きずられる可能性も無いとは言えないだろう。そこに付けここに付け、クリスらの心が落ち着かないのも当然と言えども当然だった。

「どこと戦うにしたって、決めるのはお偉いさんだ。俺たちがじたばたしたって仕方がない」

「それはそうですけど…。今朝の新聞で読んだら世論も真つ二つみたいですし、どうなっちゃうんでしょうね…」

相変わらず寝そべったまま『さあな』と返したエリクに、クリスは不安げに目を俯ける。下から見上げる形になっているためか、線の細いクリスの輪郭も、伏せられた睫毛

も、エリクからは明瞭に見て取れた。存外に、睫毛は長かつたんだな。そんな、場に応じた感じを抱きながら。

クリスの言う通り、レクタは国の方針としてサピンに反発を示しているものの、報道や市民の反応は硬軟様々である。

開戦からわずか1か月ではあるが、初期に猛攻を受け、以降もウステイオとともに攻撃を重ねていることから、レクタの国力の消耗は凄まじい勢いで進んでいる。このままラテイオへの首都制圧まで進むことになれば、それは一層進むであろうことは想像に難くない。幸い要衝『テュールの剣』はそのほとんどを破壊し、曲がりなりにもラテイオ中郡まで制圧し終えた今、停戦を促すサピンの声明は渡りに船である。形勢が有利な今停戦条約を結べば、有利な条件を含めることができるだろう。

報道で見た限り、以上が和平派の論調と言えるだろう。その要旨は、確かに領けるものがある。

一方で、継戦派の論調は感情的であるが、それゆえに人の心に迫るものがある。曰く、この戦争で先制攻撃と侵略を受け、軍民の死者や被害は計り知れない。卑怯な先制攻撃と市民に対する被害の報復を徹底し、正義を示すべきである。さらに、今サピンの仲介で停戦条約を締結すれば、サピンは武力を背景に占領地の放棄や条件の緩和を強いて来るだろう。和平派の言う有利な条件が得られるとは到底思えない。第一、ウステイオと



サピンはベルカ戦争以来の同盟国であり、その背にはオーシアもいる。たとえ声明に反発しようとして、サピンがウステイオやレクタへ武力介入することはありえない。——内容は報道機関によって多少の違いこそあれ、共通する内容は概ね以上の通りだった。クリスは世論が真つ二つと言っていたが、今朝の新聞やニュースを見た限り、エリクは和平4に対し継戦6という所と感じた。戦場から離れた内地では、往々にして主戦論が高まるものである。

「……………あの。ところで、先輩」

「ん？」

ふと拍子を改めたクリスの声に、その顔へと頭を向ける。まっすぐ交わった視線にクリスは狼狽えたようにきよろきよろと目を泳がせるも一瞬、意を決したように2枚の紙片をエリクへと向けた。先ほど背に隠していたのはこれらしい。書類には『休暇申請書』と書かれており、エリクとクリス、それぞれの名前が記されている。違う所といえば、クリスの項には既に判が押され、エリクの部分はまだ空欄である所だろうか。

「あの、えっと、もし良かったら…いえつ、あの本当に良かったらでいいので…一緒に、近くまで出かけませんか…？」

「休暇、申請…って、お前いつの間に。しかも俺の分まで」

「あ、一応管理部に申請したら、今は主要任務からも外れてるから、ってOK貰いました

し、ヴィルさんも了承して頂きました！…いえ、でも、先輩の都合が悪かったら、その、大丈夫で…」

思わず上半身をもたげたエリクに、クリスマスはまるで弁解のような言葉を紡ぎ始める。最初こそ声を張っていたものの、その声は徐々に小さく途切れ途切れになり、最後にはまるで蚊の羽音のようになっていった。視線も、所在無げに再び伏せられている。

驚き顔も一瞬、につ、と笑みを刷いたエリクは脚を踏ん張り、ゆつくりと体を立ち上げた。驚いてこちらを見上げるクリスマスをよそに、エリクは砂粒のついた尻を掌で叩き払っている。

「行くか…どうせ暇なんだし、たまには羽根伸ばしに行つたつていいだろうしな」

「…はい！じゃあ早速準備し…あ痛！」

クリスマスの独断には驚いたものの、つまりはこれも後輩の優しい気づかい。書類も公式なものだし、ヴィルさんの了承も取り付けてある。こうなれば、断る方が却ってバチが当たるだろう。何より、そんなクリスマスの気づかいを無下にすることはエリクとしてもしたくはなかった。

嬉しそうな笑顔を浮かべ、思い切り立ち上がった拍子に、クリスマスが『ミラージュⅢ』の主翼へしたたかに頭をぶつける。ごっつ、という鈍い音、衝撃に思わず声を上げるクリスマス。

一瞬間が空いたのちに、若者二人分の笑い声が重なった。

\*\*\*\*\*

青年は、困惑していた。

所は変わり、ウステイオ首都デイレクタスから南東50kmほどに位置するオルヴァ市。エリクとクリスは、モリスツエフ空軍基地から車を借用し、基地から最も近い都市であるそこへと目的地を定めた。特に観光や買物といった目的は定めず、街並みをぶらぶら見歩き気に入ったものがあれば買う、その程度の計画である。

ハンドルを握るエリクの隣で、クリスは打って変わって黙りこくっている。その相貌には不満の色がありありと浮かんでおり、出発前の楽し気な雰囲気は既に薄れつつあるようだった。

その原因は、自ずと明らかである。

「人気の多い所は、警戒しても目が行き届かない。歩き回るにも場所は選ぶべき」

「はいよ……。仰せのままに、『スポーク2』」

後席にちよこんと座る『原因』が、無感情に声を刺す。よほどに体幹を鍛えているのだろう、シートベルトをしていないにも関わらず、カーブの際にもその体はまったくぶれていない。

『スポーク隊』2番機、パウラ・ヘンドリクス。彼女が二人に同行する破目になったのは、出発の最中にひと悶着あつての事である。

出発に際し、エリクらは念のため、レクタ側の前線指揮官であるアルヴィン少佐の元に赴きその旨を伝えた。その際に、万一の安全の事を考えてパウラに同行が命じられたのである。先の出撃でエリクらは『斧持ち』の異名を受け、レクタ軍内のエース部隊と——実態はともかく——認識されることとなった。ラテイオ側としては敵たるレクタの戦力を減らすのは至上命題であり、頽勢である今となつては考えられる手は全て取つて来るだろう。それを踏まえれば、ウステイオ首都に近いとはいえ、暗殺という万一の可能性も無い訳では無い。その危険を踏まえて、護衛にパウラを選んだという訳であつた。

年齢こそ近いとはいえ、性格も感覚も異なるパウラである。エリクもクリスも、その同行は渋つた。それならまだノリが近いフィンセント曹長の方がいくらかマシである。

だが、結局はそんな必死の抗弁も、アルヴィン少佐の『後席がいなければ私も飛べないだろう』の一言で打ち消されてしまった。アルヴィン少佐のF-5F改修型『タイガーⅢ』は複座である以上、確かに道理である。

その結果が、今の状況と言う訳である。後席でパウラが目を光らせていれば、クリスと打ち解けた話をする訳にもいかない。クリスがへそを曲げるのも致し方ないことであつた。

…嗚呼。

声にならないそんな溜息を口の中で呑み込みながら、エリクは適当な駐車場を見繕い車を止めた。商店街にほど近く、付近には飲食店やカフェもあり、歩き回る分には困らない位置である。

「さて、適当にぶらつくか。：静かで、いい街だな」

「本当ですね。ウステイオの都市って初めてですけど、本当に落ち着いてて、歴史もあつて…。いつか、ゆっくり観光もしたいなあ」

「その能天気二人。周囲にはしつかり目を配ること」

「…あいよ」

こうなれば慣れが物を言う。パウラと口を利こうともしないクリスの隣で、エリクは軽くパウラに応じながら、軒を連ねる建物を見上げた。

立ち並ぶのは、石造りや煉瓦造りを主とした建物が大半を占めている。遠目にはいくつか尖塔が立ち、街中にも時折古びた煉瓦造りの教会や旧建築の跡が見られ、そここくに都市の長い歴史を感じさせた。

そもそも、今のウステイオ共和国の起りは古く、6〜7世紀ごろにその元が成立したと言われている。国としては長らくベルカ連邦の中にあつたものの、隣国オーシアとベルカの文化が流入する位置にあつたことから、旧ベルカ諸国の中でも一際異なる文化を醸成していったのだ。殊に現首都ディレクタスは古くから工業都市として栄え、街中

には中世の面影を色濃く残した塔が屹立し、俗に『百塔のディレクタス』と称されるように文化と歴史を湛えた古都として世界的にも有名な観光地となっている。ウステイオという国が持つその空気は、ここオルヴァの地でも感じる事ができた。

不意に、ごう、と遠雷のような音が空から響く。

耳聴く真つ先にその方向を向いたのはパウラ。それにつられたように、エリクとクリスも、その源たる彼方の空を見やった。聳え立つ尖塔の先は、方位としては南。オルヴァに間近い国境を越えた先、サピンの空と窺い知れる。

「……ウステイオの哨戒機、でしょうか？」

「0点」

「んぐ……あなたはこうしてそういつも尖った言葉で……」

「落ちて着けクリス、カリカリするなって。……あのエンジン音はジェット、それも複数だ。距離も相当に遠い。今朝の声明に応えたサピン軍機……だな？」

落ち着けるようにクリスの頭へぼすん、と掌を被せながら、エリクは推理を口にする。無言でこくん、とパウラは首肯し、その読みが正解だと告げていた。

ウステイオは南のサピンと国境を接しており、中でもここオルヴァは国境まで30kmも無い位置にある。航空機にとってみればまさに目と鼻の先であり、国境警備の機体を見るのは本来ならば日常茶飯事なのである。

ただ、今はサピンが武力介入を仄めかした時期であり、それゆえに人々の気配もどこか張り詰めている。それゆえか、音に気付いた市民が空を見上げる表情も、眉を顰めた気を張ったものに感じられた。一つには、その機数が常より多いことも影響しているのかもしれない。機種こそ判別できないが、遠目で見える限りその数は8。国境警備には些か多いと言えるだろう。

「ま、ともかく。今はもろもろの事は忘れて羽根を伸ばそう。どうせ嫌でもいずれは戦場行きだ」

「…気を付けろと言った矢先に。能天気」

「もう…どうしてそう水を差すことしか言えないんですか！ だいたい無理やりついて来たのにそんな…！」

「そーこーまーで。変に目を引いたらマズいだろうが。行こうぜ」

ともあれ、今日は羽根を伸ばしに来たのである。いずれ直面する課題とはいえ、気にしては楽しむものも楽しめまい。空気を变えるべく言った傍から角突き合わせる二人に割って入り、エリクは二人の背をぼんと押した。

傍目には両手に花と見える光景かもしれないが、実際の所仲立ちに入るエリクはそう思う余裕すらない。街並みを見て無邪気にはしやぐクリス、それに水を差すパウラ、そしてぶつかる二人の視線。その度に間に入り間を保つエリクに至っては、ただただ心労

が増すばかりであつた。胃に感じ始めた痛みは気のせいだと思いたい。

流石にディレクタスの近郊で発達した都市である、幸いにして、そぞろ歩きに見えるべき場所には事欠かない。

古びた教会を見上げる。赤レンガ並ぶ倉庫街に感嘆する。ガラスケースの伝統工芸品に目を楽しませる。流石に20代3人の脚力は若く、気の赴くままに所々へと渡り歩いていく。

ふらりと入った小物店では、目にした拍子に気に入った『月』の装飾入りのブレスレットを購入。それを見てか、クリスもおそろいのブレスレットを手に取り、いそいそとレジの方へ向かつていった。パウラはといえば、小鳥と花という存外にかわいらしい意匠を施したペン立てを前に悩んでいる様子。それに気を取られた為か、パウラもこつそり同様のブレスレットを購入カゴに入れていたのを、エリクはすっかり見過ごしていた。

「お、クリス、パウラ。見てみるコレ。ウステイオの名物かね、美味うまそう」  
「クリームロール……本当だ、いい匂ーい」

店を出た矢先、ふわりと香る甘い匂いにふらふらと引き寄せられるエリク。その先には、看板に『クリームロール』と書かれた出店が商店街の中に並んでいた。庇の下を覗き込んでみれば、台の底で炭が焼かれ、その上で鉄製の棒がゆつくりと回っている。棒にはクリーム色の生地が巻き付けられ、こんがりと焦げ目がついているものもあつた。



「いらつしやい。お客さん、観光かい？」

「ま、そんな所かな。これは？」

「おお、これはクリームロールって言つて、ウステイオのスイーツって言つたらまずほコレさ。ドーナツツ生地を炭火で焼いて、こんがり焼けた所でバナライスを入れれば完成。アイスがとろつと融けて最つ高にクリーミーだよ。丁度2個焼き上がるから、彼女さんと一緒におひとついかが？」

「やだもう、彼女さんだなんてー」

「そこの能天気、くねくね目立つ挙動は控えて」

店主と思しき男性が、手早く焼き型から焦げ目のついた生地を外し、包装紙を巻いて行く。冷凍庫の機能があるらしい傍らのボックスにはバナライスとチョコアイスの箱が収まっており、好きな方を選べる仕組みのようだ。見た目としては、コーンの部分をドーナツツ生地で作ったアイスクリームと言う所だろうか。

「それじゃ、ひとまず2個貰おうかな。……」

「私はいい」

丁度2個焼き上がった所ということで、とりあえず今ある2個を注文する。2歩ほど距離を置いて立つパウラを振り返ると、にべもない答えが返つて来た。警戒を務めなければならぬ責任故なのかもしれないが、その答えとは裏腹に、パウラの瞳は屋台の下

から離れていない。

代金を置く傍ら、店主の手で焼き上がったドーナッツ生地の中にバニラアイスが詰められる。上からチョコレートソースをかければ、余熱で溶けたアイスと触れて、それらは白黒の綺麗なマーブル模様を描いていた。最後にアイスの脇にプラスチックのスプーンを挿して完成である。焼きたて熱々のそれを、一つはクリスが、一つはエリクが受け取った。

『おいしー♪』と満面の笑みを湛えるクリスを傍らに、エリクはもう一度パウラの方を振り返る。交わるは、じい、とクリスを凝視するパウラの瞳。はあ、とため息一つ、エリクはパウラの方へと、手にしたクリームロールを差し出した。

「ほれ」

「……いらない」

「いーから。こういう時くらい厚意に甘えろって」

「……………」

「……………」

「いたたく」

「よし」

沈黙を挟むこと数瞬。まっすぐに向けていた目を伏せながら、パウラは差し出したク

ルームロールを手を取った。伏し目がちにアイスを掬うその様だけ見れば、佇まいは確かに少女らしい。

いくら本人がいらなと言い張っても、パウラを放っておいたまま二人だけ味わうのは些か気が引ける。エリクとしては最も後腐れない方法を選んだ積りだが、その背に注がれるクリスのじとつとした視線には、ついで気づくことは無かった。

「…美味しい」

「おし。俺は次のが焼き上がるまで気長に待…うん？」

その時、不意にエリクは左足の付け根に振動を感じた。

緊急連絡用につけていた公用の携帯電話。思いそこに至り、エリクは急いでポケットから携帯電話を取り出す。耳に当たったそこから聞こえたのは、よく聞き知った声だった。

「はい、エリク・ボルス中尉です」

《エリク中尉、お休みの所すみません。ヴィルベルトです》

「ヴィルさん？何か基地に緊急事態でも!？」

《いえいえ、緊急というほどではないのですが…。折が良ければ、基地に戻って来て頂きますか？我々の新たな乗機が、たった今到着しました。戻り次第慣熟訓練の打合せをしたいとのこと》

「……分かりました、すぐに戻ります。すみませんが、基地側への伝達をお願いします」  
《分かりました。それではお待ちしています》

「よし、二人ともすぐに戻…」

自分たちの乗る、新たな機体。どくんと高鳴る高揚を抑え、エリクは電話を切つて二人を振り返つた。

どうやら電話口の内容を聞いていたらしい。クリスは眉尻を下げ、『えー』と言わんばかりに不満そうな表情をしている。意外だったのは、パウラまでもどこか不承不承な気配を見せていることだった。いつもなら真つ先に戻ると言いそうな彼女が、一体どうゆう風の吹き回しなのやら。

「……戻るぞ」

後ろ髪引かれる思いの二人を引きずるように、エリクは先を切つて駐車場へと歩き出す。何のための休暇だったのやら、結局最後まで胃の痛みは付きまತ್ತたままだった。

\*\*\*\*\*

「ハレは…」

基地へと戻り、配備機が収まる格納庫へと直行した3人。シャツターをくぐり、その姿を目にした時、エリクは思わず絶句した。

新配備機とは言ったものの、懐具合の厳しいレクタのお国事情もあり、正直に言って

エリクはそこまで期待していなかった。良くてミラージュF1かクファイルC7の改修型であるクファイルC10、場合によっては旧式のC7型すらありえると覚悟していた程である。

だが、今こうして目の前にある機体は、そのいずれの予想も裏切ったものであった。クファイルC7と比べてより大きい、中翼位置のデルタ翼。コクピット横のエアインテークは方形をしており、『ミラージュIII』の意匠を残す丸い形状だったクファイルとは雰囲気の異なる姿をしている。胴体は機首や尾部へ向け細まるように形成されており、クファイルと比べスマートな印象を与えていた。何より目を引くのは、エアインテーク側面に設けられた大型のカナード翼である。着陸姿勢の今は大きく下へと下げられており、その広大な稼働範囲を物語っていた。

JAS39C『グリペンC』。現代戦闘機に必要な能力をコンパクトに纏めた、優れた汎用性とコストパフォーマンスを持つ第4世代の『スマートファイター』。

予想だになかった高性能機の配備に、エリクは感嘆の吐息を漏らした。

『グリペン』……。凄い、凄いですよ先輩！新型機じゃないですか！

「ああ、戻られましたか皆さん。お寛ぎの所、呼び戻してしまい済みませんでした」

「いいえ。それより、何故6機も？」

機体の様子を見ていたのか、エンジンの影から姿を見せたヴィルさんにパウラが言葉

を向ける。

思わぬ新型機配備の衝撃に気づかなかったが、言われてみれば格納庫に並ぶ機数は確かに6機。そのほとんどは単座のC型だが、最も奥にある機体だけはキャノピーが大きく、複座型のD型だと窺い知れる。

「あ、最も端の2機は、パウラ准尉たち『スポーク隊』の機体だそうです。聞いておられませんでしたか？なんでも、前線部隊の整理と機種改編だそうです」  
「!？」

目を見開き、初めて見る驚いた表情を見せるパウラ。その様子を見る限り、どうやらアルヴィン少佐からも聞いていなかったらしい。乏しい表情ながらも、目一杯に背伸びして端の『グリペンD』を見渡す様から、驚きと喜びを感じているらしいことは窺い知ることができた。

確かにエリクにとっても、この新たな配備機は望外のことであった。この喜びを、せめてロベルト隊長とも一緒に共有出来たらどんなに良かったことだろう。10月25日の日は既に大きく傾き、それでも未だに帰還の報はない。

機体は届いたものの、隊長は不在。それでも、戦場へは赴かねばならない。隊長の帰還まで、自分がこの隊を支えなければならぬという現実が、今更ながらエリクの胸に堪えた。

エリクは、自らの乗機となる機体へと歩を進め、その胴体へ手を当てた。新型機を任された感慨、そして臨時とはいえ隊を率いる責任。それらを背負い、命を預けるその翼は、主の目の前で静かに佇んでいる。

よろしうな、相棒。

エリクは心の中で、灰色の有翼獅子<sup>グリフォン</sup>へと言葉を紡いだ。

## 第13話 Above the clouds

息を吸った拍子に、新車のような新品のシートの匂いが鼻を突く。

酸素マスクを付けているものの、一体どこから入り込んだのだろう。息を吸うのもそこそこに、エリクはその匂いを追い出すように、鼻から息を吐き出した。

乗り物に酔いやすくなるという子供の頃からのジレンマゆえか、塗料と糊と電子部品がないまぜになったようなその匂いは正直好きな匂いではない。もつとも、空戦機動ならばいざ知らず、通常の巡航で酔うなどということはどうもそう無いが。

2010年10月28日、午前11時。ラティオ中郡ベレッツィアより北西約80km、高度3200。秋らしく崇<sup>たか</sup>く抜けた空とは対照的に、眼下には灰色の雲が水平線の彼方までびっしりと連なっている。既にラティオ軍の目と鼻の先にまで潜り込みながら未だに攻撃を受ける気配すら無いのは、ラティオ軍がこちらの正確な位置を掴みきれていないことの証拠だろう。『テュールの剣』による精密射撃を支えていたリーダー網や監視気球は既に無く、この雲の海では直接照準もままならない。敵本拠への攻撃には絶好の条件と言えた。

《ラオディ・ブルより各機、安全装置解除。火器管制を再点検せよ。陸軍の進発が遅れて



いるが、定刻通り攻撃を開始する》

編隊中央の前線航空管制機たるOA-110Aから、作戦士官の命令が伝えられる。粗暴な猪を指すそのTACネームと裏腹に、その声質は神経質と思えるほどに細い。

エリクは操縦桿を握ったまま、大量に備え付けられたボタンの一つを押し込む。計器盤中央の液晶ディスプレイにそれまで映し出されていた表示が入れ替わり、代わって『Fire Control』の表示と、各装備の状況や残弾数が緑色の光で描き出された。8つのハードポイントと機銃は、いずれもコンディショニング——異常無しを示している。

部隊の装備機がJAS39C『グリペンC』となりこれまでと勝手が変わったことは少なくないが、その最たるものの一つが、このような各計器操作の簡便化——いわゆる『HOTAS概念』を導入した設備への変更である。

火器管制、レーダー、多機能センサー。戦闘機は時代を重ねるごとに複雑化の一途を辿り、もはや精密機械の塊と言っていい存在となっていた。多機能化の帰結として、コクピットの計器盤に表示される情報量や計器の数は凄まじいものとなり、パイロットにとって著しい負担となっていたのだ。必要に応じて逐一計器盤を操作しては、その間操縦桿から手を離さなければならず、操縦すらも覚束ないという訳である。

この課題の解決のため考案されたのがHOTAS概念であり、簡単に言えば操縦桿に

幾つもの計器操作ボタンを設け、操縦桿から手を離さずに計器を操作できるようにしたものである。先のような火器管制はもちろん、レーダーレンジ変更や戦闘モード変更など、大抵の操作は操縦桿のボタンで可能となっており、ディスプレイの大きさと相まって利便性の向上は今も実感していた。先代『クファイルC7』でもH O T A S概念は導入されていたが、適用領域は『グリペン』がより大きい。

もう一点特筆すべき点としては、これまで『クファイル』で採用されていたヘッドアップディスプレイに代わり、新たにヘッドマウントディスプレイが採用されている事だろう。機体正面上のディスプレイへ各種情報を投影するH U Dと異なり、H M Dはヘルメットのバイザーに直接情報を投影する形式を取っている。すなわち、これまで正面に限られていた投影視野が、頭が向く限り全ての方向にまで拡大されたのである。レーダー性能の向上と相まって、H M Dの採用により敵機の捕捉範囲が大幅に広まったのは、制空部隊として大きな進歩と言つていい。初めて見た時は、大量の突起が設けられたモーニングスターのような外見と大きさにど肝を抜かれたものだが、いざ使つてみるとその利便性に舌を巻く思いだった。

H M D越しには、前方を飛ぶ機体に友軍機を示す緑色のカーソルと識別番号が重なつているのが見える。

編隊先頭は、例によってウステイオのエース部隊である『ガラム隊』のF-2Aが2

機。編隊左翼には同じくウステイオのF-15E『ストライク・イーグル』4機が連なり、少数ながら対空・対地いずれも対応できる編制を取っていた。この他に、編隊のはるか下方にはA-10A『サンダーボルトII』とF-111A『アードヴァーク』からなる攻撃隊も布陣している。

片や右翼方面はレクタ編隊が連なる訳だが、その先頭はあろうことかエリクの『グリペンC』である。背後は見渡せないが、リーダーに表示されたマークーの様子から、エリクの左右両翼後方にはヴィルさんとクリスの2機が並び、それぞれの後ろにスポーク隊の2機。そのさらに後方に『ミラージュF1C』8機が並んでいるのが判別できる。

スポーク隊を押しつけてまでこの配置となった要因に、エリクらハルヴ隊が『ラグナロク作戦』で挙げた戦果があることは想像に難くない。機体に専用の塗装を施し——多分にロベルト隊長の思い付きではあったものの——、エース部隊として名の知れた『ガラム隊』の突破口をこじ開け、撃墜されながらも大勝利の端緒を開いた。実際にはその技量は他の部隊とさほど変わることは無いにも関わらず、あらゆる偶然と運と状況が合わさった結果、有体に言えばエリク達はエースとして祭り上げられる形となったのだ。

レクタにも、ウステイオと並ぶエースあり。意図的に作り上げられたその偶像是、戦争に消耗し、武力介入を仄めかしたサピンの動向に動揺するレクタの国情と、おそらく無関係ではない。

生き残り、命令を達することとはまた別。エースとして求められるに十分な戦果を上げ、友軍を、そして祖国を導くこと。求められるものに加わった重みに耐えかねるようには、エリクは正面へと目を泳がせた。本来そこにあるべきロベルト隊長の姿は、消息を絶つて1週間を経た今もお掴めていない。

隊長。俺は、どうすれば。

変化に翻弄され揺れる心が、自ずとその眼を彼方へと向かわせる。求めた声は返らず、左翼に染め抜いた三日月は黙して語らない。虚しい静寂の中で、時だけが徒に空を流れて行った。

《ラオディ・ブルより各機へ、攻撃予定ポイントへ到達。攻撃隊ならびにレクタ軍護衛機は降下し、『テュールの剣』への攻撃を開始せよ。ウステイオ戦闘機隊は現高度に留まり、雲上の制空権を確保されたし》

《ガルム1了解。制空戦闘へ移行します》

《本機も雲上にて指揮を継続する。以降、攻撃部隊における指揮権をスポーク1へ移譲》

《スポーク1了解、これより降下する。ハルヴ、クレフト各隊続け》

「こちらハルヴ2、了解」

《クレフト1、同じく。ウステイオのエースにあの『三日月』<sup>ハルヴ</sup>もいるんだ、楽勝だな》

スポーク1——実際の指揮官であるアルヴィン少佐が指示を下し、先頭に立ったスポーク隊の2機が機体を翻して高度を下げてゆく。そう、今回は政治的理由もありレクタ編隊の先頭に立ったものの、自身の範疇はあくまで小隊指揮であり、全体への指示は最高階級のアルヴィン少佐の役割である。アルヴィン少佐が指揮の前面に立ったことで先の困惑も多少は薄れたものの、直後のクレフトーの無邪気な一言に、エリクの胸にずしりと重圧が重なった。エースという立場が周囲へと与え、そして与えられる重み。無邪気に憧れたその存在が、こうしてみるといかに重いものか分かる。

あの『ガラム』も、同じ重圧を抱いているのだろうか。  
降下する『グリペン』の中から、エリクは空を見上げる。

両翼端を青く染めたF-2Aの姿は徐々に雲に遮られ、やがて厚い雲の上に見えなくなっていた。

《全員聞こえるな。こちらスポーク1、『カルクーン』。早速お出しました。方位135、距離4000。機数12。MiG-29Gが8機と…泣けてくるね、MB-339が4機だ》

《甘く見るな、ラティオも必死だ。各機、高機能中距離空対空ミサイル用意。敵機が射程内に入り次第、視程外攻撃で一掃する》

現代の戦闘は情報戦と言われている。ミサイルの技術が進歩しその捕捉範囲が向上

した今となつては。いかに高性能な機体に乗り優れた武装を搭載していても、先に見つかり撃たれたら終わりである。レーダーという電子の眼は、現代戦において戦況すらも左右する極めて重要なものと言えるだろう。

その点、この『グリペンC』のレーダー性能は、先代『クフィール』と比べて隔世の感すらある。優秀なアビオニクスの恩恵により索敵範囲は格段に向上し、瞬時に敵の方位や位置を判別するのはもちろん、機種までも特定できるようになっているのだ。それだけ敵の脅威を判断する余裕も生まれる訳であり、その遅速は生死にも直結する。

雲を抜けて下方域に達し、こちらでもレーダーが敵の姿を捉える。位置としては半壊した『テュールの剣』の前方。機数は確かに12だが、まだその姿は肉眼では判別できない。レーダーによると8機はラティオ仕様のMiG-29Gのようだが、残る4機を指す表示は何と練習機のMB-339。一応短距離AAMを搭載した軽戦闘機として運用も可能な機体ではあるが、いくらなんでも超音速機相手には無謀という他ない。なりふり構わぬその様は、まさにラティオの死力を体現しているかのようだった。

とはいえ、ミサイルを搭載している以上、それらは紛れもなく友軍へ脅威を及ぼす敵である。情けをかける余裕など、エリクには——いや、連合軍にはもはや無い。

操縦桿のボタンを押し、複数の兵装から使用火器を選択する。

XMAA、2発。視界外の距離から、ミサイル自らが目標を見定め追い詰める、必殺

の一撃。

HMD上のシーカーが、未だ目に見えない目標を追い始める。

緑色の枠が追うのは、編隊左のMiG-29G。

目標が臙に黒点となって浮かぶ。

黒点に重なるシーカーが赤へと変わり、電子音がロックオンを告げる。

距離、わずかに縮まり3200。

射程限界。

### 《発射》

アルヴィン少佐の声とともに、ボタンをがちり、と押し込む。

機体がミサイルを放り出す、ごとん、という機械音。一拍遅れた噴射音が後を継ぎ、煙の尾が敵の方向目指して飛んでゆく。その数、XMAAを搭載するグリペンの機数に各機2発を乗じた数——12。

爆炎一つ、二つ、三つ。機影も臙な彼方の空で命中の炎が爆ぜ、やがて地を指す黒煙へと変わってゆく。緊急回避で予先を脱したのだろう、HMDの上には、辛うじて翼を保つ機影がわずかに3つ残っていた。回避行動で算を乱したらしく、既にその機動は編隊行動からも逸脱している。

《クレフト隊、残存目標へセミアクティブ空対空ミサイル発射。曇みかけて速やかに排

除せよ》

《了解。クレフト1、敵機捕捉。距離2500。各機、FOX1》<sup>撃</sup>

スポーク隊を隔てた先を飛ぶクレフト隊の『ミラージュF1』から、1発ずつミサイルが放たれる。母機のリーダーを利用して目標へと誘導するSAAAMは、射程距離こそ自己誘導型のXMAAに劣るものの、その精密さはXMAAに勝る。まして、機動を乱し機数を減らしたこの場合ならば当然のこと。

まるで獲物を狙う蛇のように機動を曲げたミサイルは、生き残った3機の尾部へそれぞれ食らいつき、それらをも空の塵へと変えしめた。

12機、16人。

一瞬にしてそれだけの命が散ったとは思えないほど、空は依然静謐の中にある。これが現代の戦争と言ってしまえばそれまでだが、それは撃墜の実感も戦争の意識も介在しない、まるでゲームのような光景。命だけが浪費されていく、無味無臭の戦場——そう思い至った時、エリクは興ざめたような、一抹の虚無感を抱いていた。

《こちらスポーク1、低空域の敵機を排除》

《ラオデイ・ブル了解。攻撃隊は射程に入り次第攻撃を開始せよ。陸軍部隊へも前進を要請する》

立ち込める雲の下、丸裸となった『テュールの剣』へ攻撃機が殺到し、次いで地を這



う戦車や装甲車も負けじと歩を進め始める。勇壯を誇った『テュールの剣』も、残すレーザ砲塔はあと一つ。半壊し辛うじて形を保つ惨めなその姿、そしてその城壁がまさに食い破られんとする様は、まるで力尽きようとするラテイオの姿を示しているかのようだった。

その時、だった。

《何だ、今空が光つ…》

雲間を裂く、稲妻。

そんな錯覚を覚えた次の瞬間、上空から注いだ一筋の光が遙か前下方のA—10に直撃し、その機体を両断したのだ。光の筋は徐々に位置を変え、地上を走る戦車や歩兵を次々と薙ぎ払い、地面もろとも消し炭へと変えていつている。

長時間照射されているためだろう、その光の軌跡は肉眼でも十分に確かめられた。雲を割いて空から注ぐその光の元を辿れば、『テュールの剣』から空へ向けて光が照射されている様が遠くに見て取れる。つまり直射ではなく、上空の航空機を介したレーザ反射による間照射。かつて一度見たこの戦法は、間違いない。

「パン<sup>三</sup>デイエー<sup>色</sup>ラ・トリコロ<sup>旗</sup>ーリか！」

《オランニエ・ベール2、7がやられた！3は左をやられて摺座している！》

《前より威力が増している…。おそらく無傷だったジェネレータの出力を全て1基に回

しているのだろう。…もはや、『エクスカリバー』そのものだ。』

《やられたな…！ラオディ・ブルより護衛機各機、緊急連絡！ラティオ軍機接近、距離1500!! 奴ら、雲の中を飛んで来ている！》

レーザーでの奇襲に加え、予期せぬ位置から懐に飛び込まれた衝撃に、管制官の声が震えている。その混乱を嘲笑うかのように、雲の中からは既に機影が一つ、二つと、前進していた攻撃隊の真上へと姿を現しつつあった。

——やられた。

もはや戦力で劣った以上、ラティオ軍はあらゆる手を使って挽回を図る筈である。例えば、わざと旧式機を交えた囨を出し、こちらを懐までおびき寄せる。また例えば、レーダーでの探知が困難な厚い雲の中に戦闘機を隠し、懐に入った隙を喰らう。まんまと敵の手に乗ってしまった迂闊さに、エリクは思わず唇を噛んだ。上空から現れた機数は既に12を数え、ウステイオのA-110を襲わんと機首を下けている。

《囨られたか…！各機、XMAA発射！以降小隊編制で近接戦闘に入れ。ラオディ・ブル、低空域へ援軍を求めろ》

《スポーク1へ、ネガティブ。上空域にも敵援軍多数。戦力を裂く余裕なし》  
ちっ。

通信に混じったその音はフィンセント曹長の舌打ちだったのか、それとも知らぬ間に

自分が打っていたのか。HMD上の狙いもそこそこに、エリクはXMAA2発を選択し、ボタンを押した。同時にスロットルを入れ、『グリペン』を増速。敵機と攻撃隊の間へ割って入る針路を取る。

煙の軌跡を描くミサイルは、しかし真下を指す敵針路とほぼ直交するため、命中はおそらく望めない。案の定、ハルヴ隊が放った3機分6発は命中することなく空を割いて行ったものの、照準を合わされた敵機が針路を曲げて回避行動に入るのが見えた。空に一つ上がった爆炎は、スポーク隊のどちらかが1発を当てたのだろう。

それでも弾雨を抜け、2機の敵機が下方の攻撃隊へと襲い掛かってゆく。攻撃を中断し回避行動に入る攻撃機の機動は、武装を満載していることもありやはりと言うべきか遅い。翼を広げて逃げ惑うレクタ軍のF-111A『アードヴァーク』へ1機が早くも追いつき、ミサイル2発でその翼を食いちぎっていった。残る敵機も旋回降下に入っており、既に退路すらも包囲された感にある。

「ヴィルさん！クリス！密集隊形で下の2機を追撃します、追隨を！」  
《了解！》

エースの名を頂きながらエースに至らない葛藤を、今更悩む暇すらない。今はただ、1人の小隊長として、エリクは声を張り上げた。

操縦桿を右前へと倒し、機体が背面を描きながら右下方へと旋回降下へ入る。機首の

カナード翼が電子制御で自在に動くためか、旋回速度も半径も、その切れ味は『クフィール』とは比べものにならない。

眼前には、左右に蛇行して懸命に逃げるA-10A。そしてその背を狙う、ラティオの塗装が施されたMiG-29G。目前の目標に気を取られているのだろうか、その機動は『ファルクラム』にしては些か鈍い。

淡く光るガンレティクルが、その円の中央にMiG-29Gの翼を捉える。エンジンの加速は続けたまま、一撃離脱で切り抜ける戦術である。もはや間近くなった至近距離で、左旋回したA-10に合わせて敵機も機銃掃射しつつ旋回に入る。

円の中央に敵機が入ると、唐突に後方警戒アラームが鳴るのは同時だった。

《先輩、後ろ！》

「応！」

一瞬の機銃掃射ののち、すぐさま操縦桿を左へ押し倒す。直後に機体を掠めたミサイルは、地面へ飲み込まれて土煙を噴き上げた。穴を穿たれた『ファルクラム』の後方を回り見返したその先には、こちらを追うべく機体を翻すSu-27の姿。HMDの表示によれば、輸出仕様のSu-27SK『フランカーB』らしい。手負いの『ファルクラム』を二人に任せ、エリクは機体を横倒しのまま旋回させて、横方向への巴戦に入った。

「……………くそ、腐っても『フランカー』か……！」

軽量な機体と高性能なエンジン、可動範囲の広いカナード翼。格闘戦能力ではデルタ翼機の中でも優れたものを持つ『グリペン』ではあったが、それでもなお、敵の『フランカー』と旋回能力は互角だった。おそらく少しでも旋回半径を緩めれば、あつという間に後ろを取られることになるだろう。低空では重量の軽いこちらが優位の筈だが、それでも互角になる辺り、輸外型でさえ『フランカー』の格闘戦能力は本物ということか。時間をかければ、それだけ攻撃隊が受ける危険は高まる。焦りは高じこそすれ、互いの距離は全く縮むことは無かった。

こんなことで何が小隊長、何がエースだ。期待を表すそれらの言葉を脳裏に浮かべながら、エリクは奥歯を食いしばり、天面に位置したままの敵機へと目をやった。どうすればいい。こんな時、ロベルト隊長ならどうする。

《オランニエ・ベール6より上空の戦闘機！ハルヴ隊つてのはいるか？》

「後にくれ！今取り込み中だ！」

《あー…すまんすまん。たつた今、レクタのパイロットを保護した所だ。あんたらの隊長って言うてるが、違うかね？》

「……!?!」

唐突に向けられた戦車兵の言葉に、思わず苛立った声を返すエリク。そのまま通信を切つてやろうかと思つたその瞬間、続いた声にエリクは思わず操縦桿を持つ手を震わせ

た。

レクタのパイロット。保護。——隊長。場所は隊長が消息を絶った位置からやや遠いが、『テュールの剣』周囲には違いない。

まさか。

心の隙は、機動を鈍らせる。東の間緩んだ旋回の際を突き、エリクと相對していた『フランカー』は射程の一手手前まで、一気にその距離を詰めていた。

「……っ！」

《ハルヴ隊、悪かった。また後で通信させよう。俺たちの上はしつかり……あ、おい、ちよつとあんた!》

《エリク、聞こえるか! 何だオイ、俺のいない間にいい機体乗ってんな!》

「……その声、やつぱり——ロベルト隊長!……って、今それどころじゃ……っ！」

聞き覚えのある声、親しみのある響き。

間違いない、本当にロベルト隊長。予期せぬ再会の歓喜も安堵も、しかし直後に響くロックオンアラートに打ち消された。既に敵機はほぼ後方、短距離AAMの射程に入っ  
てしまっている。

このまま横旋回の機動では、ミサイルの回避ができない。隊長の声を待つことなく、エリクは機体をすぐさま水平に戻し、機首を上げるべく操縦桿を引いた。縦方向へ機動

を変更すれば、少なくとも直後に放たれるであろう一発は回避できる。

だが、エンジン出力が高く上昇力に勝る『フランカー』相手に、縦の巴戦で勝てるだろうか？

脳裏に兆した敗北の予兆。それを破ったのは、またしても隊長の声だった。

《エリク！機動そのままだ！》

「へ…?!しかし、この位置じゃ！」

《全部一人で背負おうとすんな、何のために僚機がいると思ってるんだ。——だろ？二人とも》

《その通り、です！》

《任せて、先輩！》

僚機。仲間の声。

直後に生じた爆音に、エリクははつと息を呑んだ。音の生じた先は、後方。監視ミラーに映っていたのは、炎に巻かれて墜ちていく『フランカー』、そしてその上を過ぎてこちらの横に並ぶ、ヴィルさんとクリスの姿だった。先の『ファルクラム』と同じく、自分に気を取られて動きの鈍った『フランカー』を、後ろから追撃したのだろう。《どうした、動きが硬かったな。らしくないぜエリク》

「…………隊長。…俺は…」

《いいさ、皆まで言うな。『エース』だの『国』だの背負って飛ぶんだ、翼も重くなるさ。そんなもん、今は忘れちまえ。お前は…俺たちは何でもない、ただの一パイロットだ。『エース』なんて呼び名はその翼の塗装と同じ、ただの飾りだつて思つとけ》

「……！」

《ついでのワンポイントアドバイスだ。戦場と敵の様子をよく観察して、弱点を見いだせ。仲間のことを意識しろ。…あ、これじゃツーポイントか、なはは。ま、ともかくさつき的心構えと加えて、以上3点だ》

「…観察すること、仲間を意識すること。…『エース』の名に、振り回されないこと…」  
《そうだ。それは多分、どこの空でも変わることはない。俺も師匠から受け継いだモンだ。…ほら、分かったら行け行け。嬢ちゃんたちが苦戦してるぞ》

「——はい!!」

エースとして、隊長として、国を背負う者として。

そんな自分の想いなんて、隊長はお見通しだったのだろう。隊長が言った言葉を一つ一つ、エリクは心の中で咀嚼していく。

——敵わないな、隊長には。

そんな口内の眩きと同時に、溜息が漏れる。気のせいだろうか、溜息と同時に心が少し軽くなった。そんな気がした。



頭を切り替え、エリクは戦場とリーダーを交互に見やる。心なしか、先程よりも空は広い。

ラテイオ機の反応は、雲の下に見える限りで8機。攻撃隊は3機ほどが欠け、レクタ機も『ミラージュF1』2機が減っている。低空域で密集し攻撃の機会を待つ攻撃隊の上では、スポーク隊とクレスト隊が敵機と格闘戦で切り結んでいる様が見えた。雲が低いせいか、そのほとんどは横方向の巴戦である。敵機の多くは先と同じSu-27SK『フランカーB』で、既にクレフト隊の『ミラージュF1』を圧倒しつつあった。上空からのレーザー照射が鳴りを潜めているのは、上空のウステイオ隊が懸命に踏ん張っているためだろう。

戦場を見、次いで敵を観る。

スポーク隊の2機と格闘戦を行うのは4機。高度としてはそのやや下方で、残る4機が横の旋回で『ミラージュF1』を追っている。既に1機は機銃掃射を受け、煙を吐きつつあった。対スポーク隊と、クレフト隊。それぞれに向かう敵機の間での連携はなきに等しく、それぞれが目標だけをひたすらに追っている。

ならば。

「さっきの隊長の戦術を応用するか。ヴィルさん、クリス、クレフト隊を追う敵を、下から攻撃する。あの様子だと、横方向以外への警戒はザルだ。…二人とも、頼らせてくれ」

《了解です、エリク中尉。こんな年の功でよければいくらでも》

《えへへ…任せて下さい！》

エンジンが唸りを上げ、機体が風を孕んで急上昇する。電子制御の甲斐もあって、最適化された機体の制動は驚くほどに振動が少ない。

高度1200、1400、1600。ぐんぐん数字を跳ね上げる高度計を横目に、HMのシーカーが横への旋回を続ける敵機を追い始める。

目標、クレフト1を追っている『フランカー』2機。撃墜ではなく、攪乱を主とした一撃。

ロックオンの電子音と同時に、三日月を刻んだ有翼獅子<sup>グリペン</sup>は、その爪たる2発のAAMを目標へと解き放った。

予期せぬ方向からの警報に、『フランカー』が統制を乱して回避に入る。攻撃方向を見失い初動が遅れたらしい1機は、その左翼をAAMに貫かれ、その機体を四散五裂させながらベレッツィアの空に吞まれていった。残る1機も機動を乱し、速度を落として旋回に入っている。

操縦桿、手前へ。速度やや減速、カナード自動制御。攻撃モード選択、GUN<sup>機銃</sup>。

敵機後方を抜けると同時に、エリクは背面飛行で敵機の背を取る。横合いの振動の中、薄緑にガンレティクルに捉われるのは、テイルコーンが特徴的な『フランカー』の

尾部。

唸る30mmがその尾翼を噛み砕き、黒煙に包まれた『フランカー』が錐揉みを描いて落ちてゆく。撃墜を確認し機体を翻すと、ヴィルさんもクリスもそれぞれの目標を捉え、撃墜せしめた所だった。その上空では、僚機の撃墜に動揺した隙を突き、スポーク隊の2機が反撃を始めている。敵の速度が落ちた瞬間に格闘戦から加速離脱に切り替え、インメルマン・ターンでその真正面を撃つ近接戦法で、早くも1機を血祭りに上げていた。

《は……ははは……！流石は『三日月』、一発で戦況押し戻しやがった！》  
《ハルヴ隊、よくやった。空中の脅威は半減した、攻撃隊前進せよ》

駆逐されつつある、陸空のラティオの脅威。それらを縫うように、低空域に留まっていた攻撃隊は、再び『テュールの剣』へと鼻先を向けていった。多少の対空火器は残っているとはいえ、残存した攻撃隊はA-10Aが4機とF-111Aが7機。半壊した要塞一つを破壊するには十分すぎる戦力を保っている。地上の戦車や歩兵部隊も、俄然勢いを取り戻して進軍を再開していた。

さて、残るは。

エリクらの今回の任務は、空域の全ての脅威の排除。その残る脅威が居座る先——すなわち雲の上へと目を向けたその時、再び雲を割いて光が地上へと降り注いだ。もつと

もその照射時間は先程より短く、狙いも正確さを欠いたためか、陸空の友軍に目立った被害はない。

それはまるで、ラテイオの断末魔のような咆哮だった。

《…怯むな！俺たちには『ガラム』も『三日月』も付いてる！オランニエ・ボール各車、陸軍魂見せろ!!》

《ラオデイ・ブルよりレクタ各機へ。上空の敵機が多く、レーザー照射を妨害できない。援軍求む》

《スポークー了解。こちらは我々で何とかなる。ハルヴ隊、上空域の援護に回れ》

「了解！ハルヴ隊、上空域へ移行します」

殺到してゆく戦車、歩兵、攻撃機。掃討し尽くされたラテイオ軍機。

全てを確かめたのだろうか、アルヴィン少佐は戦場を俯瞰し、上空への支援を命じた。確かにこの状況では、万一に備えた上空の脅威を排除するのが急務である。先ほど、雲中からの奇襲を受けたとあればなおの事だ。

ヴィルさんとクリスが両翼に集ったのを確認し、エリクは操縦桿を引き上げた。向かう先は、雲の上の戦場。エースが飛び交う、崇く遠い空である。

機体が雲へと飛び込み、束の間視界が薄暗い闇に閉ざされる。レーダーにはノイズが走り、人馬ともに一時的に目が塞がれる恰好となった。

隙間に、光。

そう思えた次の瞬間に、機体は雲を抜けて上空域へと飛び出した。いくらか上昇を続けて背面に旋回して見下ろすと、雲を背景にいくつもの円弧が描かれている。

ウステイオの6機は、全て健在。ラオデイ・ブルのOA-10の姿が見えないのは、雲の中に隠れているためだろう。片や、ラテイオ機は倍を超える13機が見える。そのうち5機は赤、白、緑の3色に染め抜いた曲技飛行隊『パンディエーラ・トリコロリ』のG・91だが、それを差し引いても機数で上回る敵を相手に損失を抑えたウステイオ軍の技量は瞠目に値するだろう。上から見定めた限り、G・91はやや離れた位置にあり、残る8機がウステイオ機を包囲する形である。HMDで判別する限り、こちらも機種はSu-27SKが大半を占めている。ウステイオ側からミサイルの応射が少ないのは、既に残弾を使い果たしているためなのかもしれない。

その時である。

ラテイオ編隊後方——すなわちこちらの斜め下に位置する『三色旗』の5機が、これまでの扇形の陣形を不意に崩したのだ。互いに機体の腹を向け合いながら、千鳥状に二筋の縦方向へと連なるその形は、今までに見たあらゆる陣形とも異なっている。

『三色旗』が連なる事、数秒。その違和感は、脅威となつて現れることになった。

《何だ？ 光が——》

雲を照らす、一瞬の閃光。知覚できたのはそれだけに過ぎない。

ウステイオのパイロットらしいその声はその一瞬の間に、全てを語ることなく雑音に消えた。視界を奔らせると、背にした雲に浮かび上がった染みのような黒煙が一つ、ばらばらになって落ちてゆくのが見える。ウステイオ機の反応は、ガルム隊を含めて5。

まさか。

《何だ!? スパロー3が粉々になった!》

《まさか…… 『テュールの剣』のレーザーを反射させて狙い撃ちにした…!?》

《馬鹿な…… くっ。こちらガルム2。『三色旗』を最優先で狙う。PJ、行くぞ!》

《了解です!》

「くそ、ラティオの奴ら…到底守り切れないと思って、『ガルム』狙いに移ったか! こっちも攻撃に入る!」

馬鹿な。レーザーを反射させた空中目標への狙い撃ちなど、常軌を逸している。思いを至らせ機体を降下させながら、エリクはいや、と頭を振った。そもそもが、航空機の鏡でレーザーを反射させること自体常軌を逸しているのである。もはや陥落は避けられないと悟ったラティオが、せめてもの抵抗に『ガルム』の首を狙うことは大いに考えられた。

敵の真正面からガルムの2機が、上からレクタの4機が襲い掛かる。ガルムのF-2

Aはやはりミサイルを使い果たしたらしく、機銃で敵機へと攻撃を加えているようだった。

流星に名を世に知られた曲技飛行隊というべきか、性能で雲泥の差がある筈のG・91で機銃掃射をひらりと避けてゆく。旋回で鈍った所へミサイルを浴びせかけるも、それすらも『三色旗』は難なく回避し、こちらへ腹を向けて機体を翻した。機体下部の鏡が、太陽の光を反射してエリクの目を射た。

はつと思ひ至り、反射的に操縦桿を押し倒す。直後に傍らを掠めたレーザーの衝撃で、『グリペン』の機体が大きく揺れた。

凄まじい。

奥歯を噛みしめて、エリクは空を舞う5機を見上げる。

このまま持ち堪えても『テュールの剣』陥落は時間の問題だろうが、それまでは絶えずレーザーの危機に晒されることになる。あれほどの正確さを考えれば、本場にガラム隊やこちらに命中させてこないとも限らないだろう。だが、あれほどの機動性と技量を持つ相手に、果たして攻撃が当たるものだろうか。あまつさえ、先程の攻撃でこちらもミサイルを使い果たしてしまったのだ。

落ち着け。あくまで戦術の肝は、さつき隊長が言った通りである。エースの名にこだわるな。敵をよく見ろ。そして、仲間、を――。

仲間。

そうだ。

「ハルヴ2よりスポーク1、上空域に優勢な敵戦力あり！上空域へ来られませんか!」

《…先輩?》

《こちらスポーク1、カルクーンだ。一応こっちはひと段落付きつつあるが…どうした?》

「『三色旗』を落とす策を思いつきました。今落とさないと、レーザーでこちらの被害が広がるばかりです」

《…こちら『アウル』。ハルヴ2、策を言え》

そう、仲間は何もハルヴ隊だけではない。思いがそこへ至った時、エリクの脳裏に閃いた作戦があったのだ。

回避行動を取りつつ告げた作戦に、ほう、と入り込んだ吐息は果たして誰のものだったのだろうか。

《やってみる価値はあるな。残弾に余裕があるスポーク2を向かわせる。そちらは頼んだぞ、ハルヴ2》

「ありがとうございます。——よし、2人とも、もう1回仕掛ける!」

《了解!》



さて、この作戦を成功させるためには、パウラ到着前にもう一工夫する必要がある。反転したガラムの2機が攻撃を加える隙を狙い、エリクは2人に先行して機首を上げた。後方の戦場では、1機を失ったウステイオ軍が劣勢に立ちつつある。

目標、右翼の2機。『ガラム』の掃射を避けた2機が、銀色に光る機体の腹を見せる。距離、700。射程外にも関わらず引き金を引く。

虚しく虚空を裂く弾道。その先で、『三色旗』がこちらに機体の腹を向けた。

真正面に、鏡。

この位置は――。

「散開――」  
ブレイク

後方からレーザーが閃き、それが正面の機体に当たってハルヴ隊の中心を貫く。

回避が一瞬でも遅れていれば、エリクはコクピットを直撃されていただろう。機体が喚く警告に右主翼を見やると、レーザーで黒く焦げた外装を見て取ることができた。

「何て精度だ……！雲へ!!」

左旋回から操縦桿を引き、背面飛行から宙返りに移って急降下する。雲に隠れてしまえば、少なくとも『三色旗』からの狙撃は困難になる筈。おそらく今ので、こちらでもミサイルが尽きたことは看破されただろう。そうになると、今度攻撃に移った時はより近い、必中の位置から狙ってくるに違いない。

3機のグリペンが雲に入り、白い闇の中で急旋回する。

重要なのは、タイミングである。ガルム隊の攻撃で敵編隊が散り、奇襲に向いた雲の近くまで高度を下げたその瞬間。狙うべきは、その一瞬。

「——今だ!!」

鍬の形に並んだ3機が、やや高度を下げた『三色旗』へ狙いを定める。エンジン出力を高め、軽い機体を活かした雲からの一撃離脱で、確実に敵機を屠る戦法である。

だが、それすらも読まれていたのか、上空の2機はこちらの矛先を逸らすように散開して旋回。1機はこちらの正面で腹を晒し、残る1機が急旋回してこちらの死角へ——急上昇するこちらから見ればキャノピーの真上の方向へ、機体を占位させた。

今度は、真正面からの狙撃ではない。正面の機体を經由して、死角の1機がさらにレーザーを反射し、こちらの3機を纏めて焼き払う肚であろう。こちらの残弾と射程距離を計算して占位したのだろう、中継機である正面の1機を先に狙おうにも、『グリペン』の機銃では届かない。その距離、850。

そう、『機銃では』届かない距離。

《スポーク2、FOX2》

その瞬間、正面のG. 91のパイロットは驚愕しただろう。ミサイルを使い果たしたと読んでいた眼前の敵機から唐突にミサイルが放たれ、過たず直進して来たのだから。

そしてその動揺が、彼の回避を一瞬遅らせた。

当然ながら、航空機は背を捉えるより、機体下方の方が投影面積が広い。おまけに速度の遅い練習機とあっては、至近からのミサイルの回避は一層困難となる。奇襲と言っているその攻撃を避ける性能はG・91に無く、一筋のミサイルはその後部へ突き刺さり、爆発。鏡の破片を空に散らし、炎の中で四散した。

《隙ありですよ、三色旗殿!!》

直後、雲から別の機影が走り出て、死角に陣取っていた1機へ強襲を仕掛ける。一撃離脱のセオリーに基づき、その進路は目標へ向けまっすぐ、機銃以外を使い果たして軽くなった機体は速度も速い。

僚機の死に動揺した『三色旗』が、やつとのことので我を取り戻したのか機体を旋回させる。遅きに失したその機動は、『グリペンC』の強襲を避ける鋭さは無く——30mm弾に胴体を引き裂かれ、爆炎の中に身を散らしていった。

エリクの描いた策は、仲間たるスポーク隊の存在と、機種が同じ『グリペン』になったことを利用したものであった。すなわち、牽制の攻撃を仕掛けた後に一旦雲に入り、その際にミサイルを残していたパウラとヴィルさんが入れ替わったのである。つまり、直後に雲から出たのはエリク、クリス、パウラの3人で、油断した正面のG・91の隙をパウラが突いたのだ。最後に攻撃を仕掛けた1機がヴィルさんであることは言うま

でもない。

《『三日月』がやった!》

《隙あり、です!!》

動揺が空全体へ広がり、ラテイオ軍機の統制が目に見えて乱れていく。両翼が青いF—2Aはその隙を真つ先に突き、残る『三色旗』の1機を見事に機銃掃射で仕留めた。残る機体は『三色旗』を殿に残し、東目指して遁走していく。

残弾数、30mmがわずかに20発。追撃は到底叶わない。逃げていくラテイオ残存機を、エリクは見送る他無かった。

「……」

せめてもの挑発の積りだったのだろう、最後尾のG・91がエリクの機体を掠め、パイロットが中指を立てながら傍らを擦過してゆく。タイミングを逃したにも構わず、エリクはHMDを跳ね上げ、そのG・91の背中へ向け親指を下向きに指してやった。

《こちらラオディ・ブル。上空の敵勢力掃討を確認。『テュールの剣』へも制圧部隊が進入を開始している。もはや制圧は時間の問題だ。各員、よくやった》

《やれやれ……先日の作戦から長丁場でした。これで、戦争も終息することでしょう》

雲が薄くなってきたのか、眼下の雲から『テュールの剣』が透けて見え始める。既に残った塔にも炎が回り、外装は崩れ始めているようだった。戦車が上げる砲火もあらか

た収まり、既に戦闘が終盤へ向かっていることを物語っている。

終わった。勝った。これでラティオ中郡の守りはもはや無く、首都はもはや目前である。そうなれば、戦争はじきに終わることだろう。

だが。今はそんな戦局のことより、エースたるパイロットたちの戦場で打ち勝った喜びの方が大きかった。新たな機体と、仲間の存在。今回の勝利は、全てそんなかけがえない存在のお蔭である。

《……悪くない策だった》

「……ありがとよ、パウラ。——ありがとう、皆」

あらゆる万感の想いを籠めて、エリクは通信へ言葉を向ける。

雲の上、遮るものない青い空は、エリクの目の前に広く遠く広がっていた。

## 第14話 深層海流

「クリス」

「お代わりですね。砂糖は？」

「1個で」

窓から朝日が差し込み、ブラインドでも遮りきれない白い光が室内を照らしている。

正面にホワイトボード、壁面には時計と放送機器、そして広くは無いその間取りの中に簡易デスク付きの椅子がいくつか。国こそ違えど、出撃前のパイロット待機室というのはどこの国でもそう変わりはない。

ラティオ軍の高層化学レーザー兵器『テュールの剣』破壊のため、ウステイオ南部のモリスツェフ空軍基地へと赴いてからはや半月以上。当初は余所者の感が強かったこの基地での生活も、今となつてはそんな感慨すら抱けるほどに馴染み始めていた。

名前を呼んだだけで意を察したらしく、クリスは空になったエリクのマグカップを持ってコーヒーメーカーの方へと向かっていく。途中、ヴィルさんが『すみませんクリス伍長、私の分もお願いします』とマグカップを手渡しているのも、エリクは横目に見流した。『ヴィルさん、お砂糖は？』というクリスの問いかけに『そうですね、7つで』

と応じたヴェイルさんの言葉は聞き間違いだと思いたい。

待機室には、他にもロベルト隊長やアルヴィン少佐、パウラなどレクタ空軍の主だった面々が揃っており、食い入るように壁面に備えられたテレビを見つめている。ウスティオのパイロットの数がレクタのそれより少ないのは、おそらく自室や施設内の談話室でテレビを眺めているのだろう。何も基地内のテレビはこの待機室だけにある訳では無い。

「お待たせしました、先輩。どうぞ」

「ああ、悪いな」

コーヒーを淹れて来たクリスが、エリクのデスクへマグカップを置く。その顔がどこか強張っており常の明るさがないのは、今も放映されているテレビの内容によほどの衝撃を受けているためだろう。屋内に集まっている他のパイロットの顔も同様に張り活気のない様相を呈している。

黒い水面から立ち上る、コーヒーの芳しい香り。それを一口啜りながら、エリクもまた、そのテレビ画面へと視線を戻していった。早朝から繰り返し放送されているその番組——ウスティオの臨時ニュースの中で、アナウンサーが絶えず緊迫した声で文字を読み上げている。

心労は感覚を鈍らせる。コーヒーの苦みも微かな甘みも、エリクは束の間忘れてい

た。

《…繰り返しお伝えします。本日…11月2日午前6時、サピン王国はオーシア東方諸国における交戦行為に対し、武力介入する旨を正式に発表。ラテイオ領内に駐留するウステイオ・レクタ連合軍に対し攻撃を開始することを宣言しました。サピンの報道によれば、既に大規模な戦闘機部隊が発進したとの情報がある他、空母『プリンシペニア・アルルニア』を旗艦とする機動部隊も出港したという報道もされています。7時現在ではラテイオ領内の我が軍に被害の情報はありませんが、予断を許さない状況です》

原稿を読み上げるアナウンサーの姿が一瞬ノイズに消え、続いてデルタ翼の戦闘機が滑走路から発進する映像に切り替わる。どうやらサピン側の録画映像を編集してそのまま使っているらしく、画面右下に表示されたサピン国旗が字幕で潰れているのが見て取れた。デルタ翼に機首のカナード、双発のエンジンから察するに、映像に映っているのはサピン空軍の『タイフーン』と見ていいだろう。そのほとんどは録画の資料映像のようだが、一部明らかに画質が違うものも混じっている。

《サピン側の宣戦布告とも取れるこの宣言は、先日の武力介入を仄めかす非公式発表に応じたものとされており、既に賛同を表明しているゲベートの動向も注目されます。また、サピンとラテイオ間における同盟締結の状況は不明のままですが、これまで我が国を仲立ちにオーシアと密接な関係を築いてきたサピンが突如オーシア側を離れたこと



により、国内外に動揺が広がっているようです。これを受け、大統領は6時20分に緊急戦略会議を招集し、現在対応を協議しているものと見られます」

再び画面が切り替わり、広大な甲板を持つ艦船を写した記録映像が流される。右舷側後方寄りに艦橋を備え、艦首側が跳ね上がったスキージャンプ台のような全通甲板を持つたその姿は、一般的な軽空母の姿——おそらくは先ほどの内容にあった『プリンシペ・デ・アルルニア』と窺い知れた。オーシア東方諸国で空母を保有する国は限られており、その姿は偏にサピンの軍事力を物語るものと言えるだろう。

「…もう少しで戦争が終わる所だったのに、どうして…」

クリスが組んだ拳を額に当て、うなだれながら絞り出す。——勝利は、戦争終結は目前だったのに。言葉にこそ出さないものの、それは今この場にいる皆に共通する思いだった。

ラテイオによる宣戦布告から、わずかに1か月余り。たったそれだけの間に、母国レクタが受けた被害は甚大なものだった。初期の防衛戦、その後にくらくラテイオ侵攻。その中であまりにも多くの命が失われ、資源もまた費やされ続け、レクタは確実に疲弊を重ねていた。5日前に行われた第二次ラグナロク作戦による『テュールの剣』破壊は窮乏したレクタにとっての希望と言つてよく、ウステイオとともにラテイオ首都セントラムを陥落させることで戦争を早期に終わらせることも、決して不可能ではない状態に

あつたのだ。

ところが、サピンの参戦はその予断を全て狂わせた。余力のあるサピンに対し、疲労困憊の連合軍は苦戦を強いられることは想像に難くない。一たび戦線を下げることになれば再びセントラムを狙うことは不可能に近く、幕引きの契機を失った戦争は泥沼の一途を辿ることになるだろう。

もし、そうなったとしたら。終わりの見えない泥沼の戦争の中で、レクタは無事であることができるのだろうか。

「サピンにしてみりゃ勢力拡大の絶好の機会だからな。ラティオは降伏寸前、レクタもウステイオも弱ってる。おまけにオーシアもユークもこつちに手出しする余裕は無いに等しい。そのタイミングを躊躇なく狙ってきたんだ、強したたかなもんだ」  
「全くです。かつての大国の意地、未だ衰えず……といった所でしようか」

どつかりと深く椅子に腰かけたロベルト隊長が、テレビを仰ぎ見ながら分析を口にする。約1週間の遭難を余儀なくされながら、その体つきは以前とさほど変わらない小太りのままで、とても生死の境をさ迷ったようには見えない。多少の衰弱はあつたらしいが、その生命力は流石だった。

ともあれ、大尉の分析は状況を考えるに領けるものがある。ここ数日の情勢を踏まえると、サピンの声明の背景には東方諸国の動向だけでなく、オーシアで起こった大きな

出来事もまた影響していることは確實と見ていたためである。

発端はつい昨日、すなわち11月1日。以前から噂されていたユークトバニア本土上陸作戦を、オーシアがついに開始したのである。発動当日のうちにオーシア軍はユーク沿岸部のトーチカ群を制圧して橋頭保の確保に成功し、目下オーシア本国から次々と侵攻部隊が発進しているのだという。

重要なのは、オーシアがユーク攻略に全力を割き始めたことである。ユークトバニアはオーシアと肩を並べる大国であり、オーシアとしては当然戦力の多くを割かねば作戦の成功は覚束ない。当然の帰結としてオーシア本土は手薄になり、まして東方諸国へ手入れを行う余裕など皆無となった。この点は、ラテイオやファトに援助を行っていたユークについても同様である。すなわち、一時的とはいえ、東方諸国は二大勢力が手薄な空白地帯とでもいふべき状態となった。オーシアの動向といい諸国の窮乏といい、オーシアとの関係をかなぐり捨ててでもサピンが動くべき条件は整ったという訳である。

「ま、後はそうだな。今ラテイオが潰れると——戦争が終わると困る奴がサピンを唆したのかも……って所かね？」

「困る奴？」

「いろいろ可能性はあるぜ。ユークの勢力が無くなると困るユークシンパの政治屋、儲

けのツテが減る軍需企業。隣のウステイオに警戒感を抱いてるゲベートの働きかけもあつたかもしれん」

「あー…。ややこしい話ですね。俺にはそんな細かい所は面倒過ぎて分かりません」  
不意に口調を変え、ロベルト大尉が別の可能性を指摘する。

戦争や各国の国力を考えた分析はエリクでもできるが、事が政治や国際情勢の裏話にまで入ると、エリクには理解がとんと追いつかない。元々政治分野には興味が薄いためでもあるのだろう、エリクのそちらに対する理解力や情報量は多いとは言えず、場合によつては時々クリスから教えてもらう程だった。無関心は、かように知識や理解を削ぐものである。

その時、不意にパウラがロベルト大尉の方をちらりと見やるのが目に入った。これまで無関心を装っておきながら、すっかり話は聞いていたのだろうが、その視線はいつになく鋭い。一瞬ではあるが、それはまるで大尉を探るような――。

『ロベルト・ペーテルスには気を付けた方がいい』。エリクの脳裏に、不意にいつぞやのパウラの言葉が想起された。：馬鹿な。あれは何の証拠も無い、ただのパウラの世迷言だ。気にする必要なんて何一つない。

「あるいは…」

別の可能性でも思いついたのか、大尉が尻に言葉を継ぐ。しかしそれは皆まで語ら

ず、唐突に鳴り響いたブザーに掻き消された。

《待機中のパイロットへ、発進準備かかれ。繰り返す、各機発進準備。詳細は追って指示を与える》

「……とうとうか……！」

「やれやれ、しんどいね全く。お呼びだ、行くか」

通信の音が終わるや否や、パイロットたちが次々と腰を上げて各々の機体が収まる格納庫へと駆けてゆく。エリクもロベルト隊長やクリス、ヴィルさんと目を合わせて頷き、自らの機体へ向かうべく踵を返した。

国際情勢、他国の動向。それらを語るテレビへはもはや誰も見向きもせず、ただ眼前に広がる戦いの空へと意識を向けていった。

\*\*\*\*\*

《こちらスポーク1。モリスツエフ司令部、状況知らせ》

東の空にある太陽の光を、三角の主翼が照り返す。

時既に11月、晩秋の寒気は上空では一層強い。キャノピーの凍結を防ぐべく雲を避けながら、アルヴィン少佐の『グリペンD』を先頭にした6機は、一路南東へと翼を進めていた。同時に発進したウスステイオ軍機とは基地上空で早々に分かれ、同方向へ向かう機影は他には見られない。目の前の空はあくまで静謐で遠く、戦争が繰り返される

空とはまるで思えなかった。

《モリスツエフ空軍基地よりスポークー、状況を伝達する。今朝のサピンの声明を受け、我が軍はベレッツィアより撤退し、ラテイオ西郡に防衛線を構築する方針となった。しかし、既にサピン空軍がラテイオ西郡の友軍へ攻撃を開始しており、ラテイオ軍も撤退する友軍へ追撃を仕掛ける可能性が高い。そこでラテイオ中郡駐留部隊から、将官および作戦参謀を先行して空路で脱出させることとなった。諸君は現行針路を維持し、友軍輸送機の護衛に就け》

「やれやれ、お偉いさんだけ一足先にトンズラか」

《スポークー『カルクーン』よりモリスツエフ基地へ。了解だが、サピン軍機の動向は？》  
《サピン軍機に対しては、現在ウステイオ空軍が対応を行っている。諸君は側面を気にすることなく任務を全うせよ》

《…そう願いたいな…》

フィンセント曹長と基地の通信に耳を傾けながら、操縦桿のボタンを操作し、レーダーレンジを広域へと変更する。空中管制機がない今は全方位のカバーこそできないが、『グリペン』のレーダーならば輸送機が来るであろう方向さえ向いていれば、相当に早い段階からその位置を把握できる。ラテイオ軍も『テュールの剣』攻防戦で疲弊している筈だが、送り狼が来ないとも限らない以上、早期にその位置を特定できるように越し

たことはない。

巡航を続けて数十分。速度を速めながら進む6機のレーダーレンジに、不意に機影が二つ映り込んだ。反応は大型、識別は友軍。ベレッツィア方面からゆつくりと直進している辺りからも、護衛目標の輸送機と見ていいだろう。空軍機が常駐している訳ではないため、周囲に護衛機の反応は見られない。相対の状態では接近する速度も相応に早く、その姿が空の彼方に見え始めるのに、そう時間はかからなかった。

《友軍輸送機へ、聞こえるか。こちらレクタ空軍第5航空師団、スポーク隊ならびにハルヴ隊。これより掩護に就く》

《こちらウステイオ空軍、『グレイダック』および『フライトダック』。噂は聞いているよ。レクタのエースパイロット部隊が護衛なんて、心強い限りだな。今日はよろしく頼む》

《了解した。…万一に備え、敵の追撃機を早期に捕捉する必要がある。ハルヴ2、20分現空域に待機せよ。敵機を捕捉した場合は状況に応じ、追って指示する。スポーク2、護衛に就け》

「俺、ですか?…了解、現空域に留まります」

《なつ、何でパウ…スポーク2が先輩の護衛なんですか!?!同じ隊ですし、私が…》

《ハルヴ4、私語で減点30。私情進言でさらに50。スポーク2、護衛に就きます》

《う…》

きよとんと一瞬、指名で命令を受け、エリクはアルヴィン少佐へ応答の旨を返した。なぜ別部隊同士で、という思いも無いではなかったが、実際の所は同時に任務に就くことが多く、配備機も同じ『グリペン』になった辺りから、スポーク・ハルヴという小隊の垣根はほとんどあつて無いようなものとなつてゐる。違和感が無い訳では無いが、見ようによつては柔軟な対応が可能になつたと前向きに捉えてもいいのだろう。

将官を乗せたらしいC-130と入れ違い、ロベルト隊長たちが翼を翻す中で、エリクとパウラの2機だけがぼつんと空域に舞う。輸送機は後方に遠く見えなくなり、眼下に友軍機甲部隊はまだ至つておらず、まさに辺りには誰一人いない。会話をしようにも先のクリス同様にべもない返事が返つて来るに違いなく、リーダーと前方を交互に見やるだけの何とも気まずい時間だけが流れ続けた。

そんな予断があつたためだろう。沈黙を破つた声、突つばねると思つていた相手のものだったことに、エリクは些か驚く破目になつた。

《ハルヴ2》

「っ!?…な、何だよ急に。雑談は減点じゃなかったのか?」

《聞いて》

「…はいはい」

毎度のことながら、強引な所のあるパウラに今更文句を言つた所で始まらない。レ-



ダーレンジ内に敵影が無いことを見定めて、エリクは僅かに機体を減速させてパウラの横に並んだ。パウラはバイザーを上げ、こちらのまつすぐ見つめている。

パウラと二人きりの話題といえ、脳裏に過るのはロベルト大尉に関する話題——有体にいえば、大尉がどこぞのスパイではないかという疑惑である。何ら証拠のない話であり、当然ながらパウラからそんな話があったことを大尉には一切告げていない。エリク本人も信じてはいなかったが、つい先程の待機時にも想起した話題であり、そのタイムリーさに動揺しなかったかといえ、嘘にはなる。

《ロベルト大尉救出の件、不審に思わなかったか?》

「別に。『証拠品』も持ってたんだ、多少衰弱もしてたんだし、嘘だとは思ってないさ」  
パウラが不審を露わにしたのは、ロベルト大尉救出の一件だった。確かに通常で考えれば、積載した食糧のみで、しかも敵地のど真ん中で約1週間も生き延びることは常識に外れている。それにも関わらず、たいした怪我も障害も無く生還したロベルト大尉にエリクも当初は不思議に思ったものだが、その説明を聞いて納得していた所だった。

生還後に大尉が語った所によると、最初の2日は機体に積んでいた非常食で賄い、残りには付近で小屋を営んでいた猟師の家に上がり込んで世話になっていたのだという。人里離れたラテイオの山奥に住み、他国との戦争など生活の外だった猟師にとつては外国のパイロットも単なる珍しい客に過ぎず、豪快で拘泥しない性格の大尉はその猟師と

意気投合した。狩りや罨作りを手伝う悠々自適の生活を送るうち、数日経った頃に『テュールの剣』の方から交戦の音を聞き、戦場へと向かううちにレクタ軍の機甲部隊に発見された……というのが、大尉の口による5日間の次第である。それを証明するかのように、発見時の大尉は獵師から土産にと持たされたという鹿の干し肉をどつきりと携えていた。後に酒のつまみにと貰ったが、若干臭みこそあったものの、案外悪くない味であった。

《能天気。鹿肉、それも保存用の乾燥品なら調達はそんなに難しくもない。衰弱にしたって、健康でも一日飲まず食わずにしてたら多少は衰弱する。第一、敵軍機の墜落を見ていたラティオ軍が搜索をしなかった筈はない。5日間も逃げ延びれたことも怪しい》

「またかよ……。全部お前の推測だろ。俺は信じてない」

《その通り、全部推測でしかない。でも、それだけで疑惑を否定はできない》

半ば聞き流す積りで、エリクは適当に応答を返す。それを気に掛けることもなく、相変わらずロベルト大尉に対する疑惑を口にし続ける様に、エリクは流石にむつとした思いを抱いていた。

ロベルト大尉は直接の上官でもあり、これまで幾度も教えを受けた恩師である。あまつさえ、先日の『パン<sup>三</sup>デーエーラ・トリコロ<sup>旗</sup>ーリ』との対峙の際には、大尉からのアドバイスに着想を受けて撃退に成功したのだ。エリクはロベルト大尉に尊敬の思いを抱

「……無いならもういい。この話はここまでだ」

「いい加減にしてくれ。悪魔の証明で大尉を悪者にされちゃ堪ったもんじゃない。第一、どこのスパイだって言うんだよ。ラテイオか？サピンか？」

《……》

「……無いならもういい。この話はここまでだ」

キャノピー越しの『グリペンC』の中で、パウラが目を伏せるのが見える。その様は答えに窮しているようにも、何かを逡巡しているようにも見えた。

溜息、一つ。最後に言葉を残し、視線を前に戻そうとしたその瞬間。不意に上がったパウラの目線に、エリクは思わず胸をどきりと跳ね上げた。一つにはその瞳に、先の迷った様子でなく、何かを決意したような色が見えた為であった。

《さつき、大尉が言っていたのを覚えてる？サピンに参戦を唆した存在の可能性について》

「……ああ。ユーク派の政治家、どこぞの企業、あとは……何だったか。途中まで言いかけてたよな」

《そう。ユークトバニアの勢力漸減を防ぎたい親ユーク派、利潤を上げる為戦争継続を望む軍需企業、隆盛するウステイオに嫉妬し、レクタとも仲の悪いゲベート。いずれもありうると思う。……だけど、あと一つ可能性がある。ウステイオとレクタに……いえ、周

辺国全てに復讐したいと思う者が》

「……復讐？」

《ベルカ公国》

予想だにしなかった単語がパウラの口から告げられ、エリクの思考が混乱する。サピン、ベルカ、復讐。今まで思考の外にあつたそれらが、点となつて頭の周りをぐるぐると回り、なかなか理解が追いつかない。ようやくのことで呑み込んで、それらがやがて頭の中で線を結ぶのに、しばしの時間を要した。

ベルカ公国——現ベルカ共和国。それは、かつてオーシアと並ぶ大国の一つであつた国の、成れの果てである。

遡る事15年。経済的に困窮し、国土の一部の割譲や独立承認で延命を図つてきたベルカ公国が、自存のために周辺諸国へ戦争を仕掛けたのがその凋落の発端であつた。

優れた技術力を持ち、長い歴史に裏打ちされた伝統と練度を誇るベルカ軍は、その当初こそ諸国を席卷したものの、オーシアの本格参戦に伴い徐々に戦線を縮小。オーシア・ウステイオ・サピンの連合軍に加え、戦争終盤ではレクタを始めとした周辺国からの侵攻も受け、ベルカは無惨な敗戦を喫したのだった。国体は瓦解して共和制となり、資源を失い、領土を半分にされ、軍事力さえ制限された今のベルカにかつての威勢は無く、せいぜい二流国程度の国力に成り下がっているというのがその現状である。その歴

史背景を踏まえれば、ベルカが周辺国に恨みを研いでいるというのは、あながち無い話ではない。

そういえば、ロベルト大尉はレクタの生まれだが、育ちはベルカだと言っていた。それが本当だとしたら、少なくとも育ちの上では、ベルカとは縁があったことになる。

どくん。

心臓が一際大きく打つ。

まさか。

だが、そうだとしたらこれまでパウラが言っていた疑惑は確かに辻褄が合う。もし大尉が当時パイロットとしてベルカにいたのだとしたら、『円卓』を飛ぶ機会はいくらでもあった筈である。それこそ『円卓の鬼神』と同じ空で飛んだ可能性だって、少なくともレクタにいた場合の仮定よりはずっと高い。

動揺が、疑惑が、エリクの意志を鈍らせる。

『…バカバカしい。週刊誌のゴシップ記事か何かかよ』。辛うじて絞り出したその言葉すら、エリク自身にはどこか空虚に感じられた。

《もちろん証拠は無い。だけど、大尉が時々ベルカ…いえ、ノースオーシアのスーデンツールへ電話をしているのは確認している。その時、『大尉』『隊長』と発言していることも》

「何…!?!」

《事実、大尉がベルカの…ベルカ残党の意を受けていると仮定すれば、全部が繋がる。もし大尉がサピンや周辺国内の同志に情報を漏らしているなら、これからの戦いは一層辛くなる。獅子身中の虫を飼って勝てるほど、戦争は甘くない》

「……………黙れ」

《ハルヴ2、知っていることがあれば教えて欲しい。大尉の素性、日常、交友関係。レクタは、この戦争に負ける訳には——》

「黙れ!!」

《ッ……………》

今まで築いてきた思い出、信頼、尊敬。それらが土台から崩れ去りそんな錯覚に囚われ、エリクは思わず叫んでいた。

違う。大尉がスパイなんかである筈はない。大尉がスパイなのだとしたら、何度も自分を助けてくれる筈もないではないか。でも、それならパウラの言う電話の件は何なのか。昔からレクタ軍に籍を置いていたならば、生じるはずのないその発言は。

まるで踏ん張った傍から、地面が崩れていくような感覚。渦巻く胸、早まる呼吸を懸命に堪え、エリクは汗に濡れた顔をパウラの方へと向けた。

「…大尉は俺の恩人なんだ。何度も、大尉に助けて貰った。……それ以上憶測で大尉を

「貶めるなら、いくらお前だつて許さない」

《……分かった。黙る》

言うべきことは言ったのだろう。それ以上はパウラも語らず、機体の足をやや速めてこちらの斜め前に占位した。

不意に、耳元で電子音が響く。音に引かれて目線を下げると、正面に投影された広域レーダーの南東端に4つの反応が示されていた。識別はいずれもラテイオのF-104S『スターファイター』。おそらくこちらの高官の脱出を追撃するための送り狼だろう。追撃のために速度性能に優れた機体を差し向けたようだが、いかんせん輸送機とは距離がありすぎる。今から逃げの一手を打てば、振り切るのは十分に可能な距離だった。

《スポーク2よりスポーク1、方位150より機影4》

《こちらスポーク1『カルクーン』。了解した。こちらはもう十分に離れた、今から追ってきた所で輸送機には追いつけないだろう。2機とも交戦は不許可、すぐに反転し合流せよ》

「……こちらハルヴ2、了解」

《どうした、元気ないなエリク！帰ったら鹿ジャーキー食うか？まだしこたまあるからな、消費してスタミナ付けてくれよ》

ロベルト大尉の明るい声を聴きながら、エリクは操縦桿を倒して『グリペン』を旋回させる。新品のエンジンは軽やかな音を立て、回転数の高まりとともに風を孕む機体は、上々の仕上がりを示していた。

少し前までならば——いや、ほんの数十分前ならば、何の葛藤も蟠りもなく聞いていた大尉の声。荒波のように波立つ今の心を考えると、切ないような、苦しいような名状しがたい感情が胸にこみ上げて来た。

太陽の光は、変わらず三角の主翼を照り返している。

増槽の一つが空になり、電子音が短く鳴った。それはまるで『おなか空いた』と、グリペンが呑気に文句を言ったかのようなだった。

\*\*\*\*\*

深海の底のような、夜の帳。赤色灯が薄暗く陰影を照らしあげ、月の光すら届かない施設の奥に、こつり、こつりと足音が響いている。よく目を睜れば、その方向にはゆつくりと人影が動いているのが見えるだろう。その闇に紛れて蠢く小太りの影は、遠目には深層海流に漂う深海魚のようでもあった。

所は、モリスツエフ空軍基地内、公衆電話が置かれた一角。仕切りがある他は防音壁もない至つて簡便な作りだが、携帯電話やメール全盛のこの時代ではそもそも使う人間も稀なのだろう、人が使用したらしい形跡は殆ど見当たらない。それゆえに人もこの周



辺には寄り付かず、時間帯も相まって周辺は閑散としていた。

人影は小銭を手にも、そのうちのひとつに手をかけた。受話器を取ってダイヤルを回し、通じたらしい相手に気さくな様子で男は話しかけている。

その影が笑った拍子に、赤色灯の照り返しが一瞬影の姿を浮かび上がらせる。小太りな体型、切れ長の目、刈り上げの金髪——それはまさにハルヴ隊隊長、ロベルト・ペーテルスのものではないか。

「やー、昔大尉に学んだ事が生きましたよ。まさか『エクスキャリバー』もどきと本当に対峙することになるなんてねえ。…え、新聞で読みました？やだなーもう、お祝いなら今度の『新作』タダで下さいよ…なんつって、なははは。…ええ、…ええーえー、おかげさまで。そうそう、今は何と俺『グリペン』乗りなんですよ、びつくりでしょー。まさか15年越しに『インディゴ』隊の真似事とはねー…」

指に電話線を絡ませながら、ロベルトは相手と談笑を続ける。その所々にレクタでは馴染みの少ない響きの単語が混ざるのも、聞く者によつては奇異に映るかもしれない。

昔の思い出話か、冗談に一際大きな笑い声をあげた後、一転してロベルトは声を潜め、受話器に手を寄せた。

「やーもう隊長には敵いませんわ…。あ、それと最後に。なんだか最近、ちよいと身边を嗅ぎ回られて気配がするんですわ。…ええ、…いやいや、だからつてすぐどうこうなる

訳じゃないとは思いますがね。なんだかんだでここでの生活は俺も気に入ってるんで、腰を落ち着けていたんですよ。……へへっ、そういう訳で。そうそう、体同様性格も丸く……ってコラ。なはははは。——ええ、そんな訳で電話はこれつきりつてことで、今後は手紙でも連絡取り合ひましょう。……ええ、ええ、すんません。それじやまた」

声を潜め、鋭くなった目。まるで猛禽を思わせるその表情を最後に、ロベルトは受話器を置いた。直後に廊下から響く足音の方を振り返った時には、既に表情は閉じたような目の、いつもの温和なものとなっている。

「……あれ、ロベルト隊長？お友達に電話ですか？」

「おーヴィルさん。どしたんこんな所まで」

「いえ、ここの自販機でないと置いてないものがありました。……ああ、あつたあつた、ありました。寝る前にはやはりこの一本ですよ」

「……………くれぐれも糖尿には気を付けてな」

「ごろん、と自販機から出て来た、ミルクと砂糖マシマシのコーヒーを目にして、ロベルトが呆れ半分にヴィルベルトへと応じる。遠のく足音にヴィルベルトの低い声、交わされる二人分の談笑。ハルヴ隊を担う大の大人二人は、そのまま夜の闇の中へと消えて行った。」

全ての後、柱の影から現れた小柄な影に、ついで気づくことはないまま。

## 第15話 逆風の中で

晴れた空に大音量のサイレンが鳴り響き、それに引きずられるように人々が慌ただしく駆けている。

本能へと刺さる、心を逆撫するような機械音の警報は、人を無意識に焦燥させる。エリクは段ボール箱を運ぶ脚を意味も無く速めながら、滑走路を隔てた向うの格納庫で右往左往する人影を横目に眺めた。

格納庫の中では、ウステイオ軍の機体にミサイルが取り付けられ、コクピットに取りついた整備員がパイロットと何事かを話している様が見える。2枚の垂直羽根を持ち、角ばった胴体と機首に向けて鋭角なシルエツトを持ったその機体は、ウステイオの主力であるF-15『イーグル』シリーズだろう。キャノピーの大きさを見る限りは、おそらく単座型のC型というところか。2機並んだそれらから整備兵がぱつと離れるや、鋼鉄の大鷲は尾部に陽炎を従えて、ゆっくりと格納庫の外へと進み始めて行った。

まるで、腹を減らした猛禽が、巣を離れて餌を狩りに行くかのような。

らしくもなく、些か叙情的な印象を抱きながら、エリクはタキシング・ウェイへ進んでゆくその機影を目で見送る。滑走路には既にF-16C『ファイティング・ファルコ

ン』が3機並んでおり、それらはタキシングを続けるF-15の姿を遮りながら、アスファルトを滑走して空の最中へと飛ばたいていった。

「よい、つしよつと。俺の分の荷物はこれで全部だ。部品類は？」

「あらかた積み終えました。あとは細々した物を積んでいくだけですな」

レクタの識別マークを付けたC-130『ハーキュリーズ』の前に段ボール箱を下ろし、丁度数量の点検をしていた整備兵と声を交わす。既に機体の交換部品の類は積んでしまったのだろう、彼の目の前に積んであるのは、私物や小型の機材類を詰めたらしい小型の箱がほとんどである。目の前に停まつているのが4発のプロペラ輸送機でなければ、その様は市井の引越し業者と何ら変わらない。

それもその筈である。事実、エリク達レクタ空軍の面々は、ここウステイオ空軍モリスツェフ空軍基地から、古巣であるレクタ空軍ヘルメート空軍基地へと引越しの真っ最中なのであった。

ウステイオ空軍が邀撃でてんやわんやの中、何故レクタ軍が本国へ戻ることとなったのか。その背景には、先日のサピンの動きが密接に関係している。

先日——すなわち11月2日に突如として発表された、サピン王国による武力介入宣言。戦争介入を謳いつつラテイオを攻撃対象にしていけない辺り、実質的にはレクタ・ウステイオ両国への宣戦布告と何ら変わらない訳だが、ともかくもサピンはその方針に

従つて当日中からラテイオ領内に駐留するレクタ・ウステイオ連合軍へと攻撃を開始した。『テュールの剣』を巡る戦いで疲弊していた連合軍にこれを防ぎきる力はなく、折角制圧した『テュールの剣』を放棄しながら連合軍は撤退。サピンの側面攻撃に敗走を重ねながら、何とかラテイオ西郡で踏みとどまる形となつていた。すなわち、『テュールの剣』占領によるラテイオ中郡の制圧、および首都攻略による戦争の早期終結は、もはや不可能になつたのである。

そもそも、エリク達レクタ軍がウステイオの基地へと集められたのは、『テュールの剣』攻略を始めとする対ラテイオ戦に向けて戦力を一元管理し集中投入するためであつた。それがサピンの参戦によつて潰えた以上、戦力を一点に集中させる意義は無くなつたと言つていい。あまつさえ、エリク達の本国であるレクタは敵国ラテイオと隣接している上、サピンと協調路線を示しているゲバートとも接している。幸いゲバートは未だ宣戦布告までは至つていないものの、情勢を考えればいつレクタへ侵攻を開始してもおかしくはなかつた。

このままでは、手薄となつている本国レクタが危ない。

逼迫した情勢を受けて、エリク達に本国への帰還命令が出されたのは、つい昨日のことだつた。一応ウステイオ側へは事前に伝えられていたらしいが、昨日に発令し今日にでも帰還しろというのは、日程的にも相当に無理がある。そこを何とか間に合わせるた

め、エリク達は昨日から出撃そちのけで撤収に向けた準備を始め、突貫作業でようやく間に合わせたのだった。そのせいもあってか、今日は朝から体が重い。

「…にしても、整備機材がコンパクトで済む『グリペン』で助かりました。『クファイル』のままだったら倍の輸送機が必要でしたよ」

「まあ、その辺が強みでもあるからな。あ、この辺の箱は俺の私物だから、適当な所に積んどいてくれ」

よつこらせ、と箱を抱え上げた整備兵が、愚痴をこぼすように苦笑いで語る。流石は常に機械相手の整備兵と言う所か、性能面に囚われがちな戦闘機の側面をよく掴んでいるその口ぶりに、エリクは同じく苦笑を以て応じた。別にエリク本人が何をしてもないのだが、真新しい乗機を褒められると何故だか少しくすぐつたい。

二人が語るように、現代の戦闘機では空戦性能に加えて、整備性も重視されるべき要素の一つである。かつての航空機の黎明期やレシプロ機全盛期には機体や部品にもある程度の冗長性があつたが、機体の高性能化・機材の高精度化に伴い、その整備性は複雑化の一途を辿っていた。精密機器の塊とでも評すべき現代の戦闘機はその極致であり、分解整備の手間はおろか、日々の点検や武装類の交換にまで多大な時間と手間を要する状況になっていたのである。こればかりは、高性能化の代償として、現代の第4世代機が抱える共通の問題でもあつた。

そのような状況下で、同じく第4世代機のJAS39『グリペン』シリーズは、他機種と一線を画する特徴を持つていた。端的に言えば整備性が非常に高く、整備に要する時間や人員、点検の機会が少なく済むのである。

そもそも『グリペン』の設計メーカーは、過去にもJ35『ドラケン』やJA37『ビゲン』シリーズといったように、コンパクトに纏まり整備性に優れた機体を作成してきた。これらは旧式機にも関わらず整備性では最新鋭機に先進しており、傭兵の中では今でも好んで使う者がいるのだという。

それらの機種で培われてきた技術は『グリペン』でも健在であり、稼働時間と整備に要する時間を踏まえた運用効率是他機種の実に1.5倍と、際立って優れている。作業効率の良さは作戦行動中にも如実に発揮され、空対空装備の場合では着陸から燃料弾薬の補給までに要する時間はわずかに10分、しかもエンジンを稼働させたままでの補給が可能となっている。

この特性は、同盟国オースシアに拠点を置くグランダーIG社製の機体となつてから、一層の磨きがかかっているということだった。後に整備兵に聞いた所、グランダーIG社製の機体は同一機種でも他社のものと比べて部品数が少なく、整備性が高いともつぱらの評判らしい。これまで『クファイル』の整備で苦慮してきた背景もあるのだろう、レクタの次世代機が『グリペン』に、それもオースシア経由で手に入るグランダー社製のも



のに決まった時、整備員は皆一様に喜んでいたのが脳裏に過った。

「おう、エリク。荷物の整理は済んだか？」

「あ、隊長。ええ、元々間借りでしたし、大したものを持ち込んでいませんでしたから。隊長は？」

「いや、それが色んなもん貰って来たせいか思いの外多くてな。今クリスに押し付け：おほん、手伝って貰ってる所だ」

談笑するエリクの元へ、手をひらひらと振り近づくのはロベルト隊長の姿だった。手には何やら字がびっしりと書かれた紙を携えている辺り、離任報告に司令部にでも行っていたのだろう。そういえば、荷物を整理する間に隊長の姿は見えなかった気がする。荷物の整理をクリスに押し付けたという隠す気のないその様に、エリクも苦笑せざるを得なかった。

空戦技能や指揮能力では非常に優れた力を持つているロベルト隊長の、一大欠点がある——すなわち、片付けができないことである。そもそも整理整頓が苦手なタイプである上に、気に入ったものをどこかから拾っては部屋に置いていくらしく、それはここモリスツエフに来て変わりがない。ヘルメット基地の隊長の居室に至っては、評するならばまさに『魔窟』の一言。一説には、隊長の居室に忘れ物をした暁には、それが見つかるまで2年はかかると言われる程だった。

そんな隊長の荷物整理である。クリスが現在進行形で悪戦苦闘していることは容易に想像がついた。

「んじゃ、俺のは済んだので、クリスの増援にでも行つてきます。まだしばらくかかりそうですし」

「いや、それがそうもいなくなつてな。俺達だけでも荷物より先に帰つて来いとお達しだ、本国からな」

「え？荷物より先に、つて…今すぐつてことですか？」

「そうなるな。スポーク隊に輸送機の護衛は任せて、俺達4機だけでも戻れ、だと」

「…今に始まつたことじゃないですけど、えらくまた急な…」

「まーそう言うな。本国にしてみれば、一分一秒でも早く本土防衛の戦力が欲しいんだろう。なんてつたつて首都『コール』はラティオ国境と近い訳だしな」

兵舎へ足を運びかけた矢先に声が被さり、その内容にエリクは怪訝に口元を曲げる。曰く、撤収命令自体が相当に急だつたにも関わらず、それが上にも急いで『ハルヴ隊』は帰還せよとのこと。わずか4機が、それも急いで戻した所でせいぜい数時間の差でしかないことはレクタの軍部も分かっているのだろうが、それでもなお命令しなければならぬ程に焦っているのだろうか。それとも、結果的にエースとして名を上げた自分たちをいち早く防衛に充てることで、軍全体の士気を高めたいのか。少なくとも、人をまる

で駒のようにぼんぼんと移せると言わんばかりのその命令に、エリクが一切辟易しなかったかと言えば嘘になる。

はあ、とため息一つ。

戦争である。命令が急なのは今に始まったことではなく、当然軍人の自分たちに拒否権も無い。一たび指示が下れば、それに応じて動くしかないのが今の立場であった。

「行くしかないってことですな……。分かりました。ヴィルさんとクリスは俺が呼んできます」

「悪いな、頼む。俺は整備の連中に、『グリペン』の準備を頼みに行ってくる。準備が終わり次第来てくれ」

こくん、と頷き、エリクは踵を返して兵舎の方へと脚を向ける。多分、クリスはまだ隊長の荷物に悪戦苦闘している所だろう。ヴィルさんもしかすると合流しているかもしれない。

アスファルトに落ちる雲の影に、エリクはふと空を見上げた。上空はよほどに強風なのだろう、雲は所々千切れ、飛ぶように彼方へと流れている。それはまるで、風雲急を告げるレクタの有様を思わせた。

雲を裂くように轟音が響き、滑走路から二つの機影が新たに空へと舞い上がる。

青い両翼端と、赤い片羽のF-2A。それらは南の空へ翼を向け、速度を速めていき、

やがて雲の彼方に見えなくなつていった。

\*\*\*\*\*

《ンツン》。やつぱり母国の空はいいねえ。気張らずのびのび飛べるぜ。どーだい諸君、鼻歌の一つでも》

《何言つてるんですか、ロベルト隊長。もうすぐヘルメート基地の管制圏内ですよ》

《ちえー。俺の美声を轟かせるいい機会だったのにな。：にしても、何だ今日の空は。えらく騒がしいじゃねえか》

モリスツエフ基地に名残を惜しむ暇も無く、ウステイオを飛び立つて数十分。まだ制空権を確保しているラテイオ西郡を通過し、エリク達ハルヴ隊は久方ぶりにレクタの空を舞っていた。地上から仰ぎ見た通り上空は強風が吹いているが、『グリペン』の飛行に支障を来す程ではなく、操縦はある程度機体任せでも何とかなる。計器類のチェックもそこそこに、エリクは隊長の言に引かれるように、北から東にかけての空を見やった。

隊長の言う通り、今日の空は機影が多い。相当遠いため黒い点にしか見えないが、目に見えるだけでも真北に4、東北東に6。試しにレーダーレンジを拡大すると、レクタ中東部から東部にかけて、ゲベート国境に友軍機が多数展開している様が見て取れた。機種は電子戦機の他、邀撃機である『クファイル』や主力機『ミラージユF1』が大半を占めている。ゲベートの動きが分からない以上警戒機を配置するのは当然といえそ

うだが、この数は尋常ではない。

《ハルヴーよりヘルメート基地、聞こえるか。大エース様のお帰りだぜい》

《こちらヘルメート基地管制室。ハルヴ隊、噂は聞いていた。帰還を歓迎する。現在当

基地は邀撃機の発進中である。着陸までしばし待機せよ》

《それよ。今日は一体どうしたってんだ、レクタ総出で俺達の出迎えか?》

《いや、残念だが違う。本日に入ってから、ゲベートが国境付近に部隊を展開しており、その警戒だ。現在ウステイオ軍は南部から侵攻して来たサピン軍と交戦中であり、それと呼応した動きとも考えられる》

「ゲベートめ、とうとう本腰入れて来たか……」

《それを受け、現在は当基地からも戦力を東部へ派遣している。着陸はしばらく待て》  
ゲベートが、とうとう動いた。

予想されていたとはいえ、いざ目の前に現れたその現実には、エリクは思わず奥歯を噛んだ。まだ交戦にこそ至っていないが、国境線を挟んで対峙している以上、均衡はいつ破れてもおかしくはない。だが、南にラテイオ、その向うにサピンを抱えながら、さらに北のゲベートまで相手取るとなれば、レクタの戦力は限界を迎えてしまうだろう。

勝ちの見えない戦争を、どう戦い抜けばいいのか。勝つ方策はあるのか、そして仮に勝った所でレクタはどうなるのか。もはや後戻りはできず、かといって先の道はまだ見

えない。まるで闇夜の暗中进行を彷徨うような、捉えどころのない暗澹たる思いが胸に立ち込める思いだった。

飛行すること数十分、やがて眼下にヘルメート基地を望むに至り、上空からも基地の様子が垣間見える。

ハルヴ隊が基地を離れてから部隊は補充されたのだろうか、今はそのほとんどが北と東の警備に出払ったのか、その姿は殆ど見られない。格納庫の脇に辛うじて『ミラージユⅢ』が2機駐機しているのが認められるが、これはおそらく万一のための迎撃機なのだろう。眼下では主力機たる『ミラージユF1』2機が滑走路を走り、地を蹴って舞い上がる所だった。

《サテリトウ3、4へ。離陸後は方位075を取り、サテリトウ1、2へと合流せよ。：待たせた、ハルヴ隊。あと5分で着陸準備が完了する》

《了解。コーヒー温めといってくれ。ヴィルさん、クリス、先に下りな》

《了解しました。ハルヴ3、お先に》

4機編隊を2×2機編隊に分ける行動は、殊ハルヴ隊においては基本戦術と言っている。編隊左翼に位置するヴィルさんの『グリペン』は慣れた機動で翼を翻し、左へと旋回しながら滑走路の方へと高度を下げていった。クリスもその背について、『グリペン』らしい小半径旋回で目指す方向へと向かっている。機体が違うこともあるのだろうか、

その機動は戦争開始の前よりも、幾分鋭くなったような気がした。

管制官から二人に指示が飛び、2機のグリペンが滑走路へと進入してその脚をアスファルトへと着ける。カナード翼を下げて空気抵抗を強め、滑走しながら速度を緩めて駐機位置へと向かっていく2機。その様を見届け、エリクも滑走路の進入方向へと機体を向けようと操縦桿を倒した、まさにその瞬間だった。

《き、緊急警報！緊急警報！西部の幹線道路160号線が国籍不明機に爆撃された！同時にウステイオ北部でも爆撃の情報あり!!》

《な…レクタ西部だと!?!?どういうことだ!》

「そんな馬鹿な…!?!管制室、爆撃の位置は、敵の機種と数は、現在位置は!?!情報知らせ!」  
《ま、待て!現在情報を整理中である!》

管制官の怒鳴り声に、慌てて操縦桿を引いて旋回に入った機体を立て直す。思わぬ方向、思わぬタイミングの攻撃に泡を喰っているのだろう、地上の混乱は通信を介して時折こちらにも伝わってきた。怒声と雑音の奔流に通信回線と鼓膜はパンク寸前、必要な情報を整理しようにも、通信ノイズが集中をかき乱していく。

まるで時間が倍以上にも感じる焦りの中、じりじりとした心地でエリクは時計とレーダーを眺めた所で、ようやく纏まった通信が耳元に響き始める。数十分は経過したと感じていたが、実際には5分程度しか長針は進んでいなかった。

《管制室よりハルヴ1、ハルヴ2。状況を伝える。今から15分ほど前、レクターベルカ間を繋ぐ幹線道路160号線が国籍不明機により爆撃を受け、通行不能となった。それとほぼ同時に、ウステイオとノースオーシア州を繋ぐ幹線道路144号線も爆撃を受け、トンネルが崩壊し通行が遮断されたとのことだ。情報によると、爆撃を行ったのは合わせて10機前後。現在は合流し、160号線第2中継点の北方60km地点を航行中と推定される》

「レクター西部から北方…。やっぱりゲベート機か！」

《空軍基地としてはここが最も近い。直ちに追撃し、必ず全機撃墜せよ！東方で警戒中の他の部隊は間に合わない。ハルヴ隊、君たちしかない。奴らを必ず叩き落とすんだ！》

《やっつけてくれるぜ畜生…。エリク、燃料は？》

「あと増槽2本分…レクター西部までなら十分です」

《よし。管制室へ、俺達が先行して尻尾を捕まえる。ハルヴ3と4は空対空装備を補給して、準備でき次第発進させてくれ。エリク、行くぞ！》

「了解！」

隊長の声に答え、エリクは操縦桿のボタンを操作して表示を巡航モードへと切り替える。燃料計を確かめ、フットペダルとスロットルレバーを押し込んで、2機の『グリペ



ン』はエンジン回転数を高めながら北西の方向へと舵を切った。

流石に超音速機の『グリペン』とはいえ、逃走する敵機を捉えるのには時間を要する。まだ見ぬ敵の方向へと目を奔らせる中、視線は自ずと左斜め前を飛ぶロベルト隊長の機体を追っていた。

思えば、隊長と2人きりで飛ぶのは久しぶりである。戦闘の際には一時的に2機で編制されることこそあったが、それでも基本的にはヴィルさんやクリスが近くにいた。それを考えると、今の状況は希だと言つていい。

——今ここにいるのは、俺と隊長のみ。

それを考えて、真つ先に意識に上がるのは先日のパウラの言葉だった。∴確かに、隊長には謎が多い。考えれば考える程、パウラが言うように隊長がどこぞのスパイではないかという疑いは、いよいよもって信憑性を帯びて来てしまう。だが、いつまでも疑つていてはキリがない。自分自身が納得するためには直接問いたさぬまでも、せめて何かしらカマをかけて確かめておくべきではないだろうか。たった一言でも疑いを拭いられるような確証が持てれば、それだけで俺はかつてと同じく、何ら大尉を信じて飛び続けられる。二人きりで飛ぶ今は、まさにその絶好の機会ではないか。

だがその一方で、核心に触れて今の状態を崩したくない思いもまた存在する。疑いが真だった場合はもちろん、もし無実であれ自分が疑惑を持ったことを大尉が知れば、大

尉だつて口にしないものの氣にするだろう。それが原因で、大尉との間に隙間風が流れるような状況は絶対に避けたかった。ロベルト大尉は紛れもなく自分の恩人であり、何より好きなのだから。

信じたい。しかし、確かめられない。どつちつかずのその思いが、エリクの口を鈍らせた。確かめないことには進展はない。しかし、今の仲を壊したくはない。

だが、軽くカマをかけるくらいなら、少しは。何より今はチャンスなのである。言え、エリク。言え。言え。

ごくり。生睡を飲み込んで、エリクは意を決して口を開いた。

「…あの、大尉」

《ん？どーした、エリク。便所か？》

口を開いた矢先の声は、疑惑など露知らない、冗談めかしたあつけらかなとしたもの。その声音に機先を削がれて、エリクは意味も無く目線を右往左往させた。

…言えない。たとえ疑惑であれ、この人にそれを質すなんてできない。たとえ不安定であれ、いまの関係をやはり壊したくない。

揺れる心が結論を伸ばし、エリクの言葉がそこで詰まる。『なんだ急に、どした？』と怪訝な声を返す大尉に、ようやく向けられた言葉は、情けなくも逃げの一手だった。

「あーその…。そ、そうだ。連中、何でわざわざ道路なんかを爆撃したんですかね？ここ

まで気づかれず近づいたなら、もっと大都市を狙えばいいのに」

《ああ…そのことだが、俺も考えてた。こりや、予想以上にやばいかもしれん》

「…やばい？」

何とか間を繋ぐために紡いだ言葉が、思わぬ反響を以て耳に届いた。先ほどから心の隅で確かに疑問には思っていたことだが、大尉もこうして考えていたとなるとよほどに重要な意味を持つものだったのかもしれない。

脳裏に靄をかけていた疑惑を片隅にしまい込んで、エリクは大尉の言葉に耳を傾けた。

《爆撃されたのは160号と、ウステイオの144号だったな？》

「ええ、確か」

《これは、両方ともノースオーシアのスーデントールに直通した道だ。俺達の『グリペン』もウステイオの『イーグル』や『ファルコン』も、元を正せばスーデントールのグランダ―IIG社製…その部品の殆どは、これらの道や線路を使って陸路で運ばれて来ている。迂回ルートはあるだろうが、『円卓』の山岳地帯を迂回しなけりやならないんだ。整備も時間も相当かかるだろうな》

「…まさか…オーシアからの補給路を断つために!？」

《可能性はある。ウステイオはともかく、レクタはせいぜい『クファイル』の工場と輸入機

の組み立て工場しかない。手っ取り早くレクタを干物にするには一番の手つて訳だ：  
！》

「……そつー！」

大尉の口から語られる推測に、エリクは呻きながら舌を打った。こちらの補給線を断つ遠大な作戦を交えて、レクタを徐々に弱らせる戦略——これが本当だとしたら、南からウステイオへ侵攻したサピン軍や国境に集結したゲベート軍すら囿ではなかったかという疑惑までこみ上げてくる。目下ただでさえ守勢に回っているのに加え、ラテイオの反撃とゲベートの圧力でレクタは青息吐息なのだ。これに加えて補給線まで断たれてしまつては、最早なす術はなくなつてしまう。

酸素マスクの下、エリクは大きく息を吸い、腹の底から思い切り吐き出した。怒りか、絶望か、それとも純粹な闘志か。吐息とともに溢れた思いがどれだったのか、混然となつた塊の正体はエリクにも分からなかつた。今はただひたすらに、胸だけが熱い。

《ま、次善策を考えるのはお偉いさんの役目。俺たちはただ、『あいつら』にツケを払つて貰うだけだ。エリク、リーダー見てみる》

「……そう、ですね。ハルヴ2よりヘルメート管制室、目標を捕捉！サピン国籍のEAV—8B、ハリアーII……いや、『マタドール』10機！進行ベクトル方位025、ゲベート方面へ航行中！あと数分でゲベート領空に到達します！」

《サピン軍機だど!?何故サピンと逆方向へ逃げる…?…まあいい。既にハルヴ3とハルヴ4はそちらへ向かっている。もう時間が無い。ただちに攻撃にかかれ。ただし、ゲバート軍機への攻撃、ならびにゲバート国境を越境しての追撃は禁じる》  
《ハルヴ1了解。落とし前はきつちり付けてやらないとな。…増槽投棄!飛ばすぞ、エリク!》

「了解…:逃がすか、コソ泥どもめ!」

機体が電子音の声を発し、掴んだ敵の位置をディスプレイに映し出す。

まだ肉眼では敵の姿が捉えられないものの、『グリペン』の眼はそれを確かに捉えていた。隊形は先頭に2機、残る8機は編隊左右に梯形で4機ずつ。機種はAV—8B『ハリアーII』のサピン仕様機である『マタドール』と記されている。その背を射程に収めるまで、最大速度であると2分。敵の国境突破まで、ぎりぎりの所で間に合う計算になる。

ハードポイント選択、両翼内側のステーション3。操作選択、投棄。

操縦桿のボタンを押した数瞬間後に、機械音とともに増槽2基が落下して空へと吞まれてゆく。重量と空気抵抗を減らした『グリペン』はその本来の能力を以て一気に加速し、まだ見ぬ敵の姿を指して空を駆けていった。

——いた。彼方の空、徐々に大きくなってゆく黒点。高度はこちらよりやや低く、概ね2300。距離は瞬間に4000、3000、2500と数値を下げてゆく。

今回はやむを得ないことながら、本来空対空装備で携行するはずの高機能中距離空対空ミサイル<sup>A</sup>を装備していないことが悔やまれた。何せ元々がヘルメット基地へ帰るための飛行だったのである。今の装備といえは、機銃の他は翼端のミサイルランチャーに搭載した短距離空対空ミサイル<sup>A</sup>2発しかないのが現状だった。速度差があるとはいえ、AAMでは距離800程度まで近づかなければ命中は覚束ない。距離、2000、1800、1500。眼前の黒点にやがて翼が見て取れるようになり、尾翼、丸みのある胴体、キャノピーと、その姿を徐々に『ハリヤー』のそれへと変えてゆく。

距離の狭まりを確かめたのだろう、眼前の編隊から2機が反転し、こちらへと鼻先を向けた。別の2機も縦方向に旋回し、背面飛行に入りながらこちらを指しつつある。速度差から逃げきれないと判断し、残り6機を逃がすための捨て身の反撃とエリクには映った。

上空の2機を押さえるべく、隊長の『グリペン』が機首を上へと上げる。ならば、俺の相手は正面の2機。敵の全滅を狙うなら、ここで手間取る訳にはいかない。そしていくら遷音速機相手とはいえ、卑怯なコソ泥に手加減する積りも無い。

兵装選択、右翼AAM1基。同時に30mm機銃の安全装置を解除。  
左右にわずかに開いて、正面に2機が迫る。

針路はやや内向き、又交。

両翼から同時に挟み討つ体勢。

奥歯を噛みしめる。

自分の目が、機体の眼が、その機体の真ん中を捉える。

距離、800。

「邪魔だ……どけええええ!!」

ミサイルと機銃が飛び交い、コンマ数秒の間に弾丸の応酬が交わされる。

びしりと機体に衝撃を響かせながら、エリクの『グリペンC』は正面からAAMを受けた『マタドール』の脇を抜け、すれ違いざまに残るもう1機へ機銃を浴びせた。

擦過、轟音。後方からの爆炎の照り返し。

正確に狙いをつけにくい高速戦闘の最中では、少ない命中弾で致命傷を与えられる30mm弾に分がある。後方警戒ミラーの中には、残った方の『マタドール』が左翼を真っ二つに引き裂かれ、炎に巻かれて墜ちていく様が映っていた。上空を見上げれば、ロベルト隊長も2機を血祭りに上げている。

「あと6機!」

《もうゲバート国境まで時間がねえ!俺はこのまま鼻先を……ッ!?何だ!》

「隊長?……なっ!」

電子音——ロックオン警報。

同時に視界が急激に右へと傾き、胃袋を押し付けるGが一瞬にして強まる。上げ角を取るカナード、一瞬地を指す機首、みしみしと軋むキャノピー。一瞬の間に、『グリペン』が意志を持ったかのように旋回し、目まぐるしく景色を入れ替えていく。

反射は、時として人間の意識すらも置いて行く。

自身の機体がロックオンを外して安定を取り戻した時、エリクは初めて、それが咄嗟に取っていた自分自身の回避行動だと気付いた。

だが、馬鹿な。最新鋭機ならいざ知らず、『ハリアー』系統の機体が真後ろの敵をロックオンできる筈はない。『グリペン』のレーダーにも、周囲に他のサピン軍機の反応は無かった筈である。サピンがステルス機を導入したという情報も無い。ならば、一体誰が。

その答えは、直後にエリクの目にも捉えられることとなった。

回避行動で速度を落としたこちらを引き離すように、一目散に逃げ去る6機の『マタドール』。その先、ゲベート領空に浮かぶ無数の影となつて。

「あれは……」

『タイフーン』や『グリペン』に似た、無尾翼デルタとカナード翼の構成。角ばった印象の『タイフーン』と違い、丸みを帯びたフォルム。そして何より特徴的な、機首に設け



られた鉤状の空中給油口。リーダーに捉えられた表示からも、その機種は間違いない。

《ゲベートの『ラファールC』か……!》

「……そ、邪魔する気か!?こちらレクタ空軍ハルヴ隊、ハルヴ2!ゲベート機へ、こちらは国籍不明機の追撃中だ、領空侵犯の意図はない!ロツクオンを止めてくれ!」

《無駄だエリク、奴ら通信を切つてやがる。これ以上追撃して、ゲベートを刺激する訳にもいかんだろうしな。…残念だが、ここまでだ》

「……………」

隊長の声に、無念の響きが滲む。

先程の管制官の指示を想起するまでもなく、まだゲベートとは交戦状態にない以上、こちらからの手出しは厳禁である。加えて、仮に無理やり追撃を行った所で、眼前のゲベート軍機はリーダーで把握できる限り十数機。弾薬すら乏しいこちらに勝つ術は無いだろう。もはや、幕は下りたのだ。

《すみません隊長、エリク中尉、遅れました!》

《XMAAも積んできました!今ならまだ射程内です!》

「……二人とも、やめとけ。俺達だけでドンパチする訳にもいかないだろ」

後方から音速で迫る、ヴィルさんとクリスの『グリペンC』。その姿と声に向けて、エリクは静かに呟いた。既に6機の『マタドール』は国境を通過し、その姿を徐々に雲の

中へと消してゆく。

追撃の意図を挫いたのを確かめたのだろう、展開していたゲベート機は国境の向う側を旋回し、逃げていく『マタドール』の背を追うように翼を翻した。おそらく、見せかけの追撃戦でも行う積りなのだろう。何につけて舐められたものだった。

腕は、確かに上がった。戦争の初期、ラテイオのSu-22にさえ手こずったことを思えば、一瞬の銃撃で『マタドール』を仕留められるほどに技術は上達したのを感じる。幾度となく死線を越えて、その度にパイロットとして強くなってきたのも実感している。

だが、それでも。たとえ自分が仮に世に言われる『エース』だとしても、今回のような戦略という網の中では、きっと小さな——そう、小魚のようなパイロットに過ぎないのだろう。前線の戦場でこうして半数近い敵を落とすとしても、戦略としてレクタは敗北したのだ。主要な補給線を失い、防空能力の脆弱さを露呈したレクタは、これからの戦闘でも窮地に立たされることになる。

《…やれやれ。しんどくなるね、これから》

上空を旋回し、ヘルメートを指しながら隊長が呟く。

右翼に三日月を描いたロベルト隊長のさらに上、遙か高い青空では、相変わらず強風が荒巻き、雲が千切れて飛んでいた。

## 第16話 争覇の地(前) — The round t

a b l e i n 2 0 1 0 —

鑿<sup>のみ</sup>で大地を削り出したような荒々しく不愛想な山肌が、薄雲を透いて遙か眼下を南流していく。

11月とはいえ山の季節は早いのだろう、その肌に緑の類は一切見えず、認められるのはただただ地面の茶と岩石の灰色のみ。一際高い山の頂をわずかに覆い始めた雪の白色だけが、殺風景で死の匂いが漂うその光景の、せめてもの慰みだった。

地は広く、空はそれ以上に広い。空も地も荒涼としたその地を飛ぶのは、普段ならばよほどの物好きか山岳マニア程度だろう。まして戦時下の今となつてはそんな奇特な人間がいるはずもなく、閑散としたその空を駆けるのは、レクタの国旗を主翼に記した戦闘機のみ。祖国の命運を背負う——そう言つても過言ではない戦いに立ち向かう10の翼が、山岳深い空を裂いていった。

円卓。

今、エリク達が飛ぶこの空は、古くからそう俗称されている。

位置としてはウステイオとノースオーストラリア州、ベルカ共和国の国境が重なるスーデン

トール付近を中心とした直径400kmの地域であり、国境線が現在の形に定まった15年前から——いや、何世紀も前から、この地では幾度となく戦いが重ねられ、その度に国境線が引き直されて来た。一見すれば、何の価値も無い荒涼とした山岳地帯に過ぎないこの地が、何度も戦場になったというのは正直な所信じがたい。この点については、出撃前の雑談で、ヴィルさんからいろいろと聞くことができた。

曰く、その原因はいくつかあるが、大きく分けて二つ。

一つには、『円卓』の地は地理的に大同土が街道を介して接しており、主要地域へと迅速に戦力を展開するのに不可欠な場所であるためだという。これは『円卓』というよりはその中に含まれる大都市スーデントールに当て嵌まる要因であり、航空機が発達する前に交わされた戦闘の多くはこれが要因なのだそう。ヴィルさんによると、このような場所は戦略論では衢地くちというらしい。

そしてもう一つの理由は、この地に眠る莫大な地下資源である。工業の発展に不可欠なレアメタル類が潤沢に埋蔵されているこの地は、自国の工業の発展の為に、そして戦略的に優位に立つたためにも、その戦略的価値は極めて大きい。これが判明したのはつい最近の話だが、実際に15年前のベルカ戦争の間接的な原因にもなった。

ともあれ、この地が抱える様々な条件によって、この地が争覇の地へと祭り上げられたのは間違いない。

古くから、数多の血と命を吸って来た『円卓』。

人は言う。この空では、上座も下座も、国籍も階級も無い。ただ確かな技量と、運と、何より生き残るという強い意志を持った者のみが生き残る。だから『円卓』と呼ばれるのだ、と。

かつての『ベルカ戦争』でロベルト隊長が飛び、エース同士が覇を争った、戦士のための空。そこへ向かうという現実は今もって嘘のようであり、エリクの目には、眼前の空は見慣れたレクタやウステイオの空と変わらないようにも見えていた。あるいは、これが自信というものなのか。それとも、単に自分が能天気過ぎるだけなのだろうか。

《こちらウステイオ空軍空中管制機『イーグルアイ』。空域航行中のレクタ空軍機へ、諸君らの来着に心より感謝する。現針路を維持し巡航せよ》

《レクタ空軍第5航空師団『スポーク』よりイーグルアイ、誘導感謝する。空域の情報を知らせ》

一際大きな山脈を眼下に抜けた所で、聞き覚えのある声が通信回線から響いて来る。年を経たらしい落ち着いた風情とやや甲高いその声質は、いつぞやの戦闘でも管制を受けたウステイオの空中管制官らしかった。優れた索敵範囲と通信能力を誇る空中管制機で遠方から指揮を行っているのだろう、その姿は見渡す限り空のどこにも見当たらない。

《状況を伝える。本日1540時、ノースオーシア州スーデントールを輸送機編隊が飛び立ち、ウステイオ方面へと向かった。サピン側はこれを捕捉し、『円卓』上空の進路上に展開。現在ウステイオ空軍機が迎撃に当たっている。貴軍は援軍として加わり、ウステイオ機を支援して貰いたい》

《おーおー、サピン軍も仕事熱心だねえ。戦況は?》

《全くだ。展開中の戦力はウステイオ機12に対しサピン機20だが、『ガラム隊』の奮戦もあり現在サピン機を圧倒しつつある。：とはいえ、今後も第二次、第三次の追撃が懸念される。サピン軍の波状攻撃に備え、警戒を厳にして欲しい。なお、当該空域は通信混線が入りやすいため、指揮に混乱を生じる可能性もある。万一の場合は各小隊長の指揮に従え》

手元のボタンを押し、広域となったレーダーレンジに、遙か彼方の戦況が映し出される。友軍機を示す青色の三角形と、敵機を示す赤のマークが縦横に入り乱れる様は確かに交戦中を示す光景だが、先の情報割には赤色の数が些か少ない。戦況は概観して青色が赤色を包囲しつつあり、既に戦況は迎撃から駆逐へと移行しつつあるのだろう。それを示すように、赤色のマークの一つ×印が重なり、やがてレーダーから消えて行った。

《ガラム1、1キル》

《またガラムがやったぞ！これで5機目だ！》

《イーグルアイよりガラム1、ガラム2。まだ先は長いんだ、喰い過ぎて腹を壊すんじゃないぞ》

「…なんて奴らだ。あんなにも一方的に…」

両軍が入り乱れる空戦域へ到達した頃には、既にその様相は駆逐戦ですらなく、一方的な虐殺と化していた。

逃げ惑うサピンのF/A—18C『ホーネット』。その眼前に機銃を浴びせ、逃げ道を塞ぐ青い翼端のF—2A。そして回避のために急旋回した敵機を、空対空ミサイル<sup>A</sup>で食いちぎっていく赤い片羽。統制を失ったサピン機は単機単位でひたすら逃走し、その背をウステイオ機が猟犬のように追っていく。傍目から戦闘を垣間見ただけでも、両軍の間の技量には明らかな差が見て取れた。

『円卓の鬼神』。脳裏に過るのは、彼らの異名であるその言葉だった。

15年前のベルカ戦争でも、ここ『円卓』では数多の激戦が繰り広げられたという。各国を代表するエースが集い、戦局を左右するほどの大空戦で、常に勝利を収めて名を上げて来たのが、彼ら『ガラム隊』——正確には彼らの先代に当たる二人であった。自由に空を駆ける2機のF—15C『イーグル』が、立ち塞がる全ての敵をなぎ倒し、食いちぎる。神話に謳われる地獄の番犬さながらのその力を前に、味方は勇気づけられ、敵

は戦慄し戦意を失ったという。

今の『ガラム隊』は円卓での空戦の経験はない筈であり、一説にはその腕前は先代に劣ると言われていた。かつてのガラム隊を見たことがあるロベルト大尉も、今の二人は明確に『違う』と言っていたのを覚えている。

だが、今の光景はどうだろう。空戦性能で一步譲る戦闘攻撃機F-2Aでありながら、サピンの戦闘機を一方的に蹂躪し、そのほぼ半数を2機で墜として見せたのだ。これが鬼神でなくて、一体何だろう。

ガラム1が駆る青翼の機体が、最後の機体へ機銃掃射を穿ち、その体を虚空に散らす。見事にコクピットだけを狙い撃ったその様を見て、操縦桿を握るエリクの手がぶるりと震えた。凄まじいその技量に思わず武者震いが出たのか、その機動に寒気すら感じたのか。——あるいは、その得体の知れない程の大きな力に、恐怖に近い戦慄を覚えたのか。まるで、あらゆるものを呑み込み千切り飛ばす、轟々と渦巻く竜巻を前にした人のように。

《スポーク1よりウスステイオ機へ、これより合流する。見事な手腕、堪能させて頂いた》  
《…これは、お恥ずかしい。こちらガラム1。スポーク1、そしてレクタ軍の皆さん、救援ありがとうございます》

《PJ、そんな時はもつと誇っていいもんだ。お前の叔父さんは落っこちそうな程は



しやいでたぞ?》

《イーグルアイより各機、敵第一波の全滅を確認。よくやった。あと5分で輸送機編隊が空域に到達する。油断なく護衛に当たれ》

管制官の言葉を裏付けるように、北西の空には黒い影がいくつも遠望できる。レーダーで確認する限り、その数は実に16機。うち6機は大型のC-5A『ギヤラクシー』、残る10機はC-130H『ハーキュリーズ』であり、レクタ・ウステイオ両国が要する物資量の多さ、ひいては陸路輸送路を失った両国の窮地を如実に物語る姿と言つていいだろう。2国分の物資を賄うにはこれだけでは到底足りないが、今必要なのはいつ得られるか分からない大量の陸路輸送より、すぐに入手できる少量の空路輸送という訳である。

16の機影は徐々に大きくなり、やがてその巨軀で空を圧する程になってゆく。それらと入れ違った所で先頭のスポーク1は機体を旋回させ、輸送機編隊の右翼側へとその位置を向けていった。パウラ、ロベルト隊長に続いて、エリクも操縦桿を倒して機体を旋回させてゆく。

並行して飛ぶと、C-5の巨体はまさに圧巻の一言である。全長は『グリペンC』のざつと5倍、主翼を含めた全幅に至つては7倍……いや、もつとあるだろうか。鉄の鯨のようなその威容を前にすれば、小さな『グリペンC』などはまるでコバンザメである。大

大きく膨らんだその腹には、きつと『グリペン』のパーツも積載されているのだろう。

追い越しざま、こちらを向いたC-5のパイロットが手を振っているのが見える。こちらもそれに応えるべく手を振った瞬間、横殴りの強風に機体が揺れ、危うく操縦桿を握り直す破目になった。

『イーグルアイより各機、サピン軍第二波接近中。方位190、距離5000。ウステイオーオーシア国境線上空を接近中と見られる。機数は12、機種不明』

『何だ、国境上空を堂々と抜かれてんじゃねえか。防空部隊は寝てんのか？』

『ツイストー、私語が過ぎるぞ。現在サピン軍がソーリス・オルトウス方面に進出しており、ウステイオ軍はそちらの迎撃に手一杯である。何としても諸君らのみでサピン軍を迎撃するんだ。輸送機には部品だけでなく補給物資も積んであるんだ。これを落とされたら一週間はビール無しだぞ』

敵機接近の報に、空気が緊張を帯びて張り詰める。敵機の方向はほぼ真南、こちらの進行方向に近いため、相対速度を考えればあつという間に攻撃圏内に入ってしまう。もし敵が長距離ミサイル装備機や高速の迎撃機であった場合、初撃で輸送機を狙われる可能性も無い訳では無い。すなわち、先手を取れるか否かが、輸送機部隊の生死を分けることになる。

同様の結論に達したのだろう。冗談めかしたやりとりも一瞬、こほん、と一息加えた

管制官は、改めてその甲高い声を回線へと吹き込んだ。

《敵の出方がまだ分からないため、半数を護衛に残す。スポーク隊以下、レクタ軍の10機は迎撃に…》

《待った、こちらガルム2。敵の出方が分らん以上、半数も割くのは危険だ。12機程度なら、俺達だけで十分だ》

《無茶を言うな。先の戦闘でミサイルを消費しているんだぞ》

《敵の波状攻撃がいつまで続くか分からないんだろ？戦力を温存しておくに越したことはない。俺達なら大丈夫だ、機銃さえあればどうともなる。だろ？ガルム1》

《はい！我々にお任せを！》

《………スワロー隊、ガルムの支援に就け。ただし両隊とも指示あればすぐに戻るよう。いいな》

《十分！じゃ、行くか。PJ！》

《はい！》

わずか2機で敵編隊殲滅の自信を滲ませるガルム隊に対し、他に反駁の言葉は無かった。事実先ほどの戦闘ですら、彼らは敵機の過半数を叩き落として見せたのだ。ミサイルを消費しているとはいえ、彼らならばやりおかせて見せるのでは。それを周囲に認めさせる点で、彼らは確かにエースパイロットなのであろう。ウステイオの命運をたつた

二人に賭け、絶望的な戦場へと向かった15年前の連合軍も、こんな気持ちだったのかもしれない。

15年前の戦争でも戦況の転機となったここ円卓の空で、連合国を背負った『鬼神』へと想いを馳せる。知らず知らずに、エリクは自身の姿を、かつて空を飛んでいたであろう15年前のパイロット達へと重ねていた。

2機のF-2Aと4機のF-16Cが南の空へと鼻先を向け、やがて見えなくなつてゆく。距離と相対速度を考えれば、敵編隊と戦端を開くのは時間の問題だろう。ミサイルの多くを使い尽くしたガラム隊が主力を張る以上、敵機の撃退にはそれ相応に時間を要する点が、不安と言えば不安ではあつた。

やがて、その不安は的中することになる。ガラム隊が敵と交戦を開始した、わずか数分の時を挟んで。

《イーグルアイより各機、緊急電。敵第三波、方位270より急速接近中。機数16。よほどこちらに補給物資を渡したくないらしい。レクタ各機、迎撃をお願いする》

《古典的な囲戦術という所か。スポーク1、了解した。ハルヴ、サテリトウ各隊続け》

狙いすましたかのような——いや、事実狙つたのである。敵機襲来のタイミングに、エリクは思わず舌打ちを鳴らす。アルヴィン少佐の言う通り、サピン軍は南の囲でこちらの護衛機を引き剥がしたのだろう。機数からも、遮二無二こちらへ接近している様子

から見ても、本命はおそらくこちら。万一を考えると、急いでその矛先を逸らさなければ鈍足の輸送機は一たまりも無い。

増槽を捨てたスポーク1が右へと急速旋回し、次いでパウラが、隊長がそれに倣う。

ハードポイント選択、増槽投棄。燃料、胴体内部タンクへ移行。燃料経路変更の確認を行う暇も惜しく、エリクは操縦桿を右へと倒して、『グリペンC』を迫る敵機の方へと向かわせた。

相対に敵の速度は速いのだろう、既に『グリペン』のレーダーにもその姿が捉えられつつある。黒と緑に彩られたレーダーサイトの中で、敵のうち12機は前方に広く配置され、残る4機がやや遅れている恰好が見て取れた。機種は、まだ判別できない。

《距離が2550を割り次第、高機能中距離空対空ミサイル<sup>A</sup>で先制攻撃を仕掛ける。各機、左右へ広がり射線確保せよ》

《エリク、念のためだ、2セルに分かれるぞ。いつも通りクリスと組め》  
「了解。機位、2セル隊形に移行します」

今回は純然たる空対空ミッションが予想されたため、『グリペン』の兵装はXMAA4基にAAM2基と、対戦闘機戦を意識したものとなっている。隊長の指示に従い、後方にクリスを就けた状態でやや右方向へと間を広げながら、エリクは火器管制モードを選択し、安全装置を解除した。

射程距離が850前後のAAMはいわば近距離専用の切り札だが、XMAAに關しては射程距離2550、おまけに4目標同時追尾能力を有する強力な兵装である。同じ長距離兵装でも、命中まで母機からのレーダー誘導を必要とするセミアクティブ空対空ミサイルと違って母機からの支援を必要としない——俗にいう『撃ちっぱなし能力』を有する点からも、現代の空戦における切り札と言つて差し支えないだろう。敵射程外からの一方的な攻撃がどれだけの脅威を持つかは、説明するまでもない。

敵編隊、真正面ほぼ同高度。後続の4機のみやや上空。相對針路では互いの速度が上乘せされ、リーダーに表示される目標への距離は見る間に数字を割つていく。

距離4000、3800、3600。求める姿が肉眼でも捉えられ始める。西の空の彼方、傾き赤みを帯びた夕日を背に、浮かぶは先鋒と思しき12の黒点。

ヘッドマウントディスプレイ上で、黒点に四角いマーカーが重なる。識別、言うまでも無く赤——サピン機。

距離3500、3400。あと一挙手でこちらの『槍』が届く、間合いのぎりぎり一歩外。

《各機、発射用——》

《……敵機ミサイル発射!!》

「なっ!?…くそっ!」

瞬間、鳴り響いた警報に血が沸騰した。

発射、どこだ。

警報緒元、正面。敵編隊。

ちっ。

舌打ち一つ、操縦桿を右手前へと引き上げる。後方にクリスがいる以上チャフは使えず、今は機動で引き離す他ない。

アラートの間隔が狭まる。

カナードが急角度を取り、それに沿った機体が敵へ腹面を向けながら鋭角を描く。

視界から消える敵機、ミサイル、白煙の軌跡。

息を詰めること、一瞬。

ごう、と風が吹き抜けるのと、警報が消え去り、後方にいくつか爆発の衝撃が奔るのは同時だった。

「こいつら…！ 舐めるな!!」

このまま、いいようにさせて堪るか。エリクは歯を食いしばってGに耐えながら、フットペダルを押し込み、同時に操縦桿を左手前へと引き上げた。

カナードが互い違いの角度を取り、先代『クファイル』では考えられないほどの小半径

で機体が旋回する。空気を捉えた翼は横波に乗るように機体を回転させ、『グリペン』の小柄な体は右上方旋回から強引に正面を向いた背面飛行へと軌跡を戻した。

天地が逆さまとなった背面機動の、真正面。そこには、依然針路を変えず直進する12の機影が映っていた。

距離、1900。兵装、変わらず——XMAA。

「FOX-1!!」

HMDのマーカーがロックオンを示す朱に染まった瞬間、エリクは操縦桿のボタンを押し、XMAAを4発同時に撃ち放った。

白煙、そして銃声。

距離こそややあつたとはいえ、音速機同士の相対戦では、多少の距離など無いに等しい。ミサイルは音速を越えて瞬間に敵機へと殺到し、目標のうち2機を真正面から貫いて、黒煙とともにその肢体を虚空へと散らして行った。身を振って緊急回避に入った1機も、すれ違いざまに打ち込んだ機銃で煙を噴いている。

背面のまま敵編隊を潜り抜け、その後方で左旋回に入るべく、エリクは操縦桿を手前へと引き上げる。回転の連続でくらくらしそうな視界の中、見上げた空ではレクタの『ミラージュF1』が2機、炎の中に沈んでいた。

《チツ、噂に聞いたレクタの『三日月』か！小国と思つてたが、なかなかやる》



《ク・i・サピンの『タイフーン』か。高機能長距離空対空ミサイル装備とは、私としたことが見積もり損ねたな》

磁場を持つ鉱物資源を多く含む関係上、『円卓』では混線が発生しやすい。アルヴィン少佐の声にサピン軍機らしい通信が混じるのを聞き取りながら、エリクは失った高度を補うべく機首を上げた。仰ぎ見る限り、前衛のサピン機は3機減つて9機。一方こちらはサテリトゥ隊の2機を失つたため8機と言う所か。敵機はいずれもこちらと入れ違つた所で旋回し、追撃を仕掛けんと反転したこちらと相對する姿勢を取っている。本命は輸送機の筈だが、まるでこちらをここで足止めするかのよう。

——まさか。

そこまで思い至り、エリクははつと遙か頭上を見上げた。反転したこちらの上空、後衛に控えていた敵の4機は悠々と頭上を抜け、反転した敵編隊の上を通り過ぎていく。デルタ翼に大型のカナードを設けたその姿は、確かにサピンの『タイフーン』。しかし、その機体は赤色に染められ、その主翼を黄色い十字が貫いている。灰色系統の他の機体と違い、夕日を背にしたその姿は、まさにサピンを象徴するような鮮やかな色彩だった。

向かう方向は、当然ながら真東。無防備の輸送機が飛ぶ、本命の方位——。

《各機、そのまま踏ん張つてくれよ。必ず俺達で連中を叩き落として見せる。——エスクードー、交戦——！

「しまった……！隊長！スポークー！敵4機、頭上を抜けます！」

《分かつている……く、まんまと嵌められるとは……！》

《エリク！クリス！お前らだけでもヤツを追え！ありや中々厄介そうだ……！》

「了解！ハルヴ2、追撃に入ります！飛ばすぞクリス、遅れるな！」

《え、あ、ちよつと待って下さい先輩！》

目まぐるしく変わる戦況に、迷いを交える余裕は無い。アルヴィン少佐やパウラが編隊へと突入したのに合わせ、エリクはスロットルを全開にまで押し込んで、『グリペンC』を紅色の4機向けて追隨させ始めた。右後方には、クリスの機体が遅れじと付いて来る。

しかし、速い。

元より、エンジンを一つしか積んでいない『グリペンC』に対し、『タイフーン』は強力なエンジンを2基も搭載しているため、加速力や上昇力では勝負にならない。おまけに先程の機動で高度を失ったため、敵の方が500は上に位置取っていることから、降下して加速を行う手も封じられている。徐々に距離を引き離され、頼みのXMAAも使いつ果たした今となつては、敵を目の前にしていても何一つ手を出すことができない。

くそ。堪えかねた悪態が、口中に跳ね回る。

敵機との距離は既に2000を超え、彼方には輸送機の大きな機影が見え始めてい

た。

《ニコラス少佐、後方に機影2》

《さっきの『三日月』の片割れか。…ほっとけ、俺達の獲物はデカブツだ。各機X L A A 用意。先に護衛機を一掃するぞ》

《敵機4機、友軍を突破。護衛部隊、迎撃に当たれ》

意図的とすら思える敵の混線が、こちらの焦りを助長する。くそ、どうすればいい。このままでは。

4つの機影の向かう先では、護衛に就いていたウステイオのF—15Cが4機と、F—16Dの2機が旋回して、赤色の『タイフーン』と相對する針路を取っている。迎撃のためには最短針路を取らざるを得ない為だろうが、護衛機の彼らは敵が長射程ミサイルを搭載していることを知らない。

「ウステイオの護衛機、正面はダメだ！X L A Aが…!!」

《各機、FOX3!》

エリクの声をかき消すように、敵機から紡がれる宣告の声。

警戒を告げることも叶わず、『タイフーン』から非情にも放たれた4筋ずつの長槍は、尾を曳きながら正面の6機へと殺到していった。

至近かつ相對のミサイル回避が困難なことは、皮肉にも先程エリクが実証している。

ウステイオの6機のうち4機は瞬く間に爆炎の中に散り、辛うじて回避したうちの1機もなす術無く機銃の束に穿たれて、蜂の巣となって爆散していった。4機のタイフーンはひと塊となったまま輸送機編隊へと突っ込み、早くもC—130Hを1機血祭りに上げて飛び去ってゆく。

《せ…先輩！輸送機が…！》

「畜生…！今度はさせるか！高度を取って、奴らが肉薄する瞬間を狙い撃つぞ！」

彼方で反転に入る4機を尻目に、操縦桿を引いて輸送機の上方へと機首を向ける。クリスも同様に、右後方に控えたまま、輸送機編隊の上約700の辺りへと位置取った。先ほどはこちらの位置が低く、急降下での追撃が封じられていた。ならば、敵が攻撃針路に入るタイミングを見計らい、こちらも急降下で一撃離脱を行えばどうか。『グリペン』もデルタ翼機である以上、並みの機体より加速性能は優れている。

来た。

今度は輸送機編隊の左方向から、先程同様4機がひと塊となって突っ込んで来る。その速度は速いが、思った通り、目標へ向けて一直線に突っ込んで来る。

斜め下方、相対距離概ね2500。わずかな加速でミサイルの射程に収められる好機。

「今だ！」

操縦桿を右へ、次いで前へと倒し、機体を斜め下方へと唸喊させる。スロットル開放に加えて降下速度も載り、速度計は見る見る数値を引き上げてゆく。

捉えた。

敵機予測進路上、斜め上方から敵編隊と交わる絶好の位置取り。相対距離は既に2100を切り、1900を割り、1700台へと入ってゆく。

HMD上のミサイルシーカーが敵の姿を追い始め、やがて迫るその機影へと重なる。

『至近かつ相対のミサイル回避は困難』。それを今、お前達にも教えて——。

《見積り損ねたな、『三日月』!》

「……っ!?!」

奔る声。『見られた』感覚。

迂闊な手に自らを呪ったその瞬間は、既に遅かった。

エリクの『グリペン』がAAM射程まで近づくの二拍早く、『タイフーン』は横倒しになり、カナードを僅かに引き上げたのだ。

たとえ変化が僅かでも、高速機動の際には著しい影響を与える。まして、こちらも攻撃針路の立て直しが効かない至近距離では尚更のこと。

エリクが慌てて操縦桿を倒したその時には、既に4機はその下方を斜めに横切り、横合いからC-5の胴体を食いちぎっていった。敵が空域に留まらず、一撃離脱で過ぎ

去ったのは言うまでもない。その戦術は、憎らしいほどに徹底していた。

《また1機やられたぞ！護衛機、何をしている！》

《む、無茶言うな！あんな速いのに追いつけるか！》

《…せ、先輩…！》

「…糞、くそつ！！次だ、今度はヘッドオンで仕掛ける！」

はらわたが煮えくり返る——否、沸騰した血管が体中をのたうち回るような、屈辱と怒りをなймаぜにしたような感覚が肚の中に渦巻く。これまで無い激しい感情の中で、エリクは遮二無二に操縦桿を動かし、紅の4機の姿を追った。

ヘッドオン、側面からの強襲、擦過直後の隙。いずれも高速ですれ違う『タイフーン』の翼を捉えることは叶わず、その度に輸送機が1機、また1機と決り取られるように落とされてゆく。怒りはやがて絶望へと変わり、落ちてゆく輸送機の姿一つ一つが、エリクの胸に敗北感という傷跡を刻んでいった。

やはり、俺はエースでも何でも無かったのか。敵にいいように翻弄され、打つべき手も見いだせないまま全滅まで指を咥えているしかないのか。

——だが、だからといって何ができる。もう切り札のXMAAは無い、隊長達もガラム隊もまだこちらへ駆けつける余裕もない。肝心の『グリペン』も、加速力では『タイフーン』に到底敵わず、たとえ加速が乗ったとしても巧みに針路を避けていく。連中も

それを知っているのだろう、もはやこちらの存在を歯牙にもかけず、縦横無尽に輸送機を貪っていた。目標の輸送機を全滅させるまで、この反復攻撃は続くに違いない。

そう、目標を——。

「……」

瞬間、絶望の闇に一筋の光が閃いた。

そうだ、俺は思い違いをしていた。連中の目的はあくまで輸送機であり、かつ一撃離脱で1機ずつ落としていかなければならない以上、別に追わずとも敵は輸送機へ向かってくるのである。速度で勝る敵に、高速戦闘で向かうことがそもそもの間違いだった。

ロベルト隊長は、敵を観察し弱点を見いだせと言っていた。

連中の戦術は、4機ひと塊となり、加速力を活かした徹底した一撃離脱戦法。裏を返せば、敵を分散させたり、加速を活かせない状況に持ち込めば、その戦術は威力を失うことになる。『グリペン』は軽量小型であり、格闘戦ならば勝機はこちらにあるだろう。——つまり、いかに連携を乱して加速を殺すか、敵の編隊を断ち切るかにかかっている。そのためにはこちらの位置取りのみならず、敵の進入方向の察知が欠かせない。

必要なものは、こちらの位置取りと敵の針路察知。

そしてこちらの手札は、格闘戦に優れる『グリペン』の長所と、クリスの存在。

夕日が地平線に接し、空が徐々に夜色に染まり始める。エリクは夕日の中で翼を翻す

紅の4機を見定め、下腹に込めた力を、蓄えた熱を吐き出した。

「クリス、輸送機の上方1000に占位して、敵機の進入方向を見定めろ。今度は俺一人で攻撃を仕掛ける」

《え……？で、でも、それはさつき失敗して……！》

「いや……高速戦闘で奴らに付き合うのは、もう止めた。俺は、『グリペン』の力と、お前を信じる」

《え……？》

「時間が無い、奴らがまた来るぞ！」

《りよ……了解！》

戸惑った声を返すも一瞬、それを思わせない鋭い機動で、クリスの『グリペンC』が高度を上げてゆく。その下方で、エリクは機体をゆっくりと旋回させ、迫る敵機との距離を見定めた。その速度は巡航速度をやや下回り、先程までの高速戦闘が嘘のように遅い。

連中が見せたカナードを利用した針路変更は、こちらも高速で、かつ一定の距離を隔てて初めて可能な芸当である。音速を越えた状態ではカナード稼働角度を抑えなければ破損を招くため、せいぜい10度にも満たない角度しか進路変更はできないと見ていい。それでも先程のようにこちらの攻撃を回避できたのは、長距離から進路変更を行う



ために針路予測が困難だったため、そしてこちらも高速だったゆえに機位の修正が間に合わなかったためである。

それならば、敵の進路を直前まで僚機が見定め、速度を落とした『グリペン』の格闘戦能力を活かしてその針路に回り込めばどうか。

機体の性能、仲間の存在、そして何より自分自身の技術と誇り。その全てを籠めた策に、エリクは想いを賭けた。

『タイフーン』が旋回し、輸送機編隊の右前方から直進のコースを取る。

方位045、距離2400、まだ遠い。

機体が横倒しになり、向かって左にコクピットの突起が移る。

どくん。鼓動が徐々に早鐘を打つ。

距離、2000。

夕日が赤い光でコクピットを照らす。

西にサピンの国旗のような夕日が沈み始め、東に闇の黒色が滲んでゆく。

彼方の山の端に先端を覗かせるのは、細く鋭い切っ先——三日月。

《敵編隊変針、ベクトル方向270!》

『タイフーン』の軌跡が緩やかに弧を描き、その鼻先が編隊最右翼のC-5を指す。

先ほど手を振りあった、あの機体。

どくん。血が沸騰し、心臓が熱を滾らせる。

距離、1500。

1300。1200。

《変針なし、方位固定、直進……先輩……!!》

縋るようなクリスの声が、エリクの背を、腕を押す。

距離1150。1100。AAM射程内に至る、二拍外。

もはや互いに針路の立て直しは効かない、短刀で刺し違う距離。

瞬間。

「——見切った!!」

操縦桿を握った手が電光のように動き、『グリペン』の機体が右方向へと急旋回する。相対するその眼前、既に距離1000を割ったその先には、4機の『タイフーン』。

奇しくも夕日を背にした赤色の機体と、三日月を背負う『グリペン』。互いの色と意地を賭けた、一瞬の相対。

フレア、チャフ、同時散布。

一拍遅れて放たれた正面のミサイルが、狙いを外れて擦過してゆく。

風圧、そして破裂音。沈黙を保っていた機首の30mmが咆哮を上げる。

目を見開いた敵の隊長機と一瞬視線が交わる。

轟音とともに、すり抜けてゆく衝撃。

息の詰まる数秒を経て、旋回と共に顧みたその先。4機ひと塊となっていた敵機は、鏃を外した輸送機を避けるように、各個バラバラとなつて旋回の弧を描いていた。

「よし……クリス！どれでもいい、敵機に張り付いてかき乱せ！格闘戦に持ち込むんだ！」

《了解です！たあっぷりお返ししてやりますからね!!》

《ち……、何て奴だ。あのバカを思い出すな……！連携を崩された、各機参集!》

《こ、こちらエスクード3！無理です、敵機に張り付かれました!》

徹しきつた戦術は強いが、一度崩されれば脆い——定型の戦術を持たない『ハルヴ隊』において、ロベルト隊長が常々言っている言葉である。今その薫陶は形となつて実証され、敵のうち1機はクリスの『グリペンC』に追いまくられ、左右にデタラメな旋回を重ねていた。その背を狙う1機へ向け機銃掃射を浴びせると、その『タイフーン』もまた急速旋回で身を翻していく。速度は回避行動のためにすっかり失われており、持ち前の加速力を活かすことはもはや叶わないであろう。

《なんとか五分に戻つたようだな……。こちらイーグルアイ。現在しんがり殿を残し、ハルヴ1、2およびスポーク隊、ガルム隊がこちらに戻りつつある。三方向より包囲し、残存する敵部隊を殲滅せよ》

安堵の息を吐き出す管制官の声に、エリクは束の間我に返り、正面のレーダーへと目を落とす。その言葉通り、西には4つ、南には2つのマーカーが示され、その先端は確かにこちらを指していた。

夕日が半ばまで沈み、空が『グリペン』の左翼と同じ色へと染められてゆく。

沈みゆく太陽の残照で、円卓の山肌は、まるで血を吸ったかのように赤く染まっていた。

\*\*\*\*\*

『円卓』交戦域より南南西方向。距離にして60 kmほどを隔てた、ウステイオーオーシア国境線上空。左手に五大湖、彼方に戦空を控えたその空に、西から照らす太陽の残滓が、4つの小さな機影を影絵のように投影している。

《デル・タウロ、状況を》

《こちらら空中管制機デル・タウロ。既に第二次・第三次攻撃隊は戦力の4割を喪失。エスクード隊、アルマドウラ隊を含む、一部の部隊が孤立している》

管制官の言葉を証明するように、血に染まった円卓の空で、彼方に黒煙が遠望できる。先の情報にあつたアルマドウラ隊の残存機だろう、ウステイオの機体に啄まれるように弾痕を刻まれたその姿は、遠目にも満身創痕となつて見えるように見えた。

《了解した。これより空域に進入、友軍機の撤退を支援する。全機、深追いはするな》

尾部に噴射の光を帯び、4つの機影は機速を速めて北へと馳せる。

葉巻型の胴体、胴体と比して小さな切り欠き三角翼、そして切り立った機首。旧態依然としたMiG-21タイプそのものの姿だが、主翼付け根の膨らみと、翼端を切り欠いたような黒い塗装、そして尾翼に記した蝙蝠のエンブレムが、その姿を一際際立ったものへと変えている。

《ニムロッド1、交戦》

MiG-21UPG 『デイビナス』——またの名を近代化改修モデル21-93。

眼前に敵機を控えた黒翼の機影は、まるで獲物を見定めた狩人ニムロッドのように、『円卓』の空へと忍び入った。

## 第17話 争覇の地(後)

— Red and Bla

ck II —

半ばまで沈んだ夕日が、『円卓』の空を暗く紅い残照で覆っている。

空を彩るのは、紅色に染まった雲と、東の空に顔を覗かせる真珠色の三日月。翻って眼下に見えるのは、南を指して飛ぶ輸送機の群れと陰鬱な影を地表へ落とす山脈、そして夕日のような朱に翼を染め抜いたサピンの『タイフーン』が4機。崩された統制を回復すべく旋回を繰り返しているが、そのうちの1機には先程からクリスの『グリペンC』が子犬のように嘯みついて離さず、その連携を大きく乱していた。日中からの激戦で戦力が底をついたのか、周辺には他にサピンの機影は見当たらない。

「クリス、後方に1機！俺が掩護する、そのままそいつを追い回せ！」

《了解です！……こいつ、当たれ！このこのこの！》

『タイフーン』のうちの1機が機首のカナードを傾け、鋭角の急旋回を描きながらクリスの後方をつけ狙う。高性能を追求した分、本来運動性は低い筈のデルタ翼機でありながら、その機動は機体特性を思わせないほどに鋭い。

以前『グリペン』を受領した際に口ベルト隊長が言っていたことには、いわゆる第4

世代に当たるデルタ翼機では設計段階で意図的に安定性を低下させ、その分運動性と機動性の向上を図っているのだという。必然的に操縦難度は上がることになるが、安定性と機動性に寄与する可動式カナード翼の装備、そしてフライ・バイ・ワイヤ式の機体制御を始めとした電子機器の能力向上が、その難度を大幅に緩和した。結果、『グリペン』においてはデルタ翼機でありながら、加速能力と運動性が高いレベルで両立されることとなった、という訳である。この点は、類似の形状を持つ『タイフーン』や、ゲバートで採用されている『ラファール』シリーズでも変わりない。

もつとも、先程までのような高速戦闘では双発の『タイフーン』が勝るものの、近距離でのドッグファイトでは軽量小型な『グリペン』に分がある。敵機の機動を見定めながら、エリクは操縦桿を傾けて機体をロールさせ、横倒しの状態のまま機体を旋回。ヘッドマウントディスプレイ上のガンレテイクルに敵機の予測進路を捉え、その軌跡の上へと30mm弾の爪痕を刻んでいった。

発砲の振動が機首を揺らし、照準が僅かに乱れる。

軌跡上に赤い主翼、収まる事コンマ数秒。曳光弾の光軸を避けるように、『タイフーン』が身を振って右下方へと弧を描いて抜けてゆく。

わずか数秒、まるで馬に乗り馳せ違うような一瞬の攻防。

その主翼、赤地に刻んだ黄色い十字に命中を示す弾痕が爆ぜたのを、エリクは確かに

見届けた。

《くそっ……！しつこい奴め、背中に喰いついて離れない》

《ニコラス少佐、南と西から敵機が接近中！このままでは包囲されます！》

《分かつてる……くそ、こちとら嫁と可愛い子供が待つてんだ。このまま死ぬるかよ！多少の被弾は我慢して、方位270に全速で抜ける！編隊組んで突破するぞ！》

「あいつら……!?……させるか！」

敵の隊長らしい声が、混線を通じてこちらの耳にも届く。少佐という階級の割に、その声音は存外に若い。

全速、再集結、突破。

——まずい。

先の敵機を追う手を緩め、エリクは慌てて機体を左へと旋回させ、敵機の予測針路である方位270——すなわち真西へと鼻先を向ける。HMD上には、先程の敵機と、支援に寄り添うもう1機。そのさらに先には、クリスが追っていた別の1機。フットペダルを踏みこんだエリクは、照準がぶれるのも構わず、それらの鼻先へと機銃弾をばら撒いた。

しかし、その機動は一手遅れを取った。いち早く加速に入った『タイフーン』は、先の命令通り主翼に被弾痕を刻まれるのも構わず、一直線に追撃を突破。見る見る距離を



開き、あつという間に真西に4機が集つたのだ。4機は再びひと塊となり、旋回してこちらへと鼻先を向けつつある。やはり危惧していた通り、隊長達が到着する前に集中攻撃を仕掛けてこちらを突破する積りだろう。油断を突けた先程ならばいざ知らず、こちらの手を見せてしまった今となつては、先の手が奴らに再び通じるかは分からない。

《イーグルアイより各機、方位195よりサピン機接近。機数4》

「くそ、こつちはそれどころじゃ……クリス、高機能空対空ミサイル使えるか!」

《は……はいっ! 待つて下さい、今切り替えを……!》

戦況の変化に必死で追いつこうとしているのだろう、クリスの焦りに満ちた声が鼓膜に響く。やはり慣れない新型機、それもこの切迫した状況下とあつては、普段の訓練通りに体が動かないのは当然といえば当然だろうが、それにしても遅い。クリスが火器管制にもたつく間に、眼前の4機はこちらへ向けて旋回を追い、まさに加速をかけて突撃体制に入った所だった。

4機が加速の飛焰を灯す。

X M A A、E m p t y。

近距離空対空ミサイル、射程外。

くそつ。

H M D上の相對距離が見る見る縮まってゆく。

方位、真正面。こちらに全ての火線が集中する位置取り。次の目標は輸送機ではなくこちらなのだ、今から旋回してももう間に合わない。

焦りを帯びた光景の中、エリクはなす術無くその様を捉えていた。

正面に迫る4つの深紅。やつとのもことで『準備よし!』の声を上げるクリス。

そして——ふと気が付いた。正面の『タイフーン』の後方に、HMD越しでやつと気づくほどの小さな点が接近しているのを。その数、4。速度にしてマツハ3以上。当然、雲でも鳥でもない。

あれは——。

《……エスクード4よりエスクード1!後方、ミサイル接近中!!》

《な……くそ、<sup>ブレイク</sup>散開!散開!》

敵の射程に入る3歩前、飛来したミサイルの矛先を避けるべく、纏まっていた4つの機影がばらりと散る。上下左右の各方向に1機ずつ、それぞれが大きく旋回の弧を描き、その中央に開いた空隙の中を、エリクとクリスは突っ切って行った。その先、真西に浮かんでいるのは、レクタの識別信号を発する4つの機体。

カナード付きデルタ翼という『タイフーン』に似た姿ながら、一回り小さなあの姿は。

《待たせたな、エリク!クリス!》

「……隊長!!……はは……、遅い!もう、本当に遅いですよ!」

《強敵に寡数で当たらせて申し訳なかった、ハルヴ2、ハルヴ4。残る脅威はその4機だけだ。包囲殲滅し、作戦を完遂する》

《こちらガルム1、遅くなりました！これより合流します！》

上方旋回、頂点での右ロール。いわゆるインメルマンターンで4機の後方に就く傍ら、エリクはリーダーを一瞬広域レンジに広げ、互いの位置を俯瞰する。今の位置にはアルヴィン少佐の『グリペンD』を先頭にした6機、その正面下方に散開した『タイフーン』が4機。やや南に離れて輸送機編隊が飛行し、それと入れ違うようにガルム隊のF—2Aが2機、こちらへ向けて飛んでいる。西と南では数機単位で依然戦闘が行われているが、いずれも少数であり、輸送機への脅威にはならないだろう。つまりアルヴィン少佐の言う通り、この『タイフーン』4機さえ落とせば、円卓（こたて）での戦闘はレクタ・ウスティオ連合の勝利に終わる。

《に…ニコラス少佐！完全に包囲されました。西と南へは逃れられません！》

《『三日月』に『円卓の鬼神』か…。泣けるぜ。…全機参集！奴らだって燃料もミサイルも無限じゃない、耐えきるぞ！》

《ほー、一目散に逃げると思ったが、案外冷静じゃねえか。各機、2セルで連携を乱すぞ。

…んなトコでいいですよ、スポークー》

《ああ。ハルヴ1、先行を任せる》

隊長とヴィルさんが2機編隊となり、続いてアルヴィン少佐とパウラの2機が並列となつて続いてゆく。エリクもちらりと後を振り返り、クリスの機位を確かめてから、その機首を『タイフーン』の方へと向けていった。

三国に跨る『円卓』とはいつても、今回の空戦域はその殆どがウステイオ領内であり、敵対するサピン軍としては逃走経路にも気を遣う必要がある。

現空域から見ると南東方向にかけた広範囲はウステイオ領空であり、真東はレクタなのでまず撤退には使えない。西はオーシア領に接するためその進路に制限がかり、真北は中立を保つベルカナなので、国際情勢上そちらへ逃げる訳にもいかないだろう。残るは南西方向に当たるオーシア—ウステイオ国境線上空を経由したサピンへの道だが、そちらではウステイオのスパロー隊が残敵の掃討に当たっている。戦闘機と国境と言う二つの網で、眼前の4機は既に逃げ道を塞がれているのだ。

だがその中で、敵機は一目散に逃げる道を選ばず、旋回してこちらに対抗する気配を見せていた。一つには、このままサピン方向へ逃走を図った所でこちらの8機を突破しなければならず、おまけに後方からXMAAで狙撃される危険を恐れたこともあるのだろう。当然こちらの——と言うより隊長の狙いはそこにあつたのだろうか、敢えてミサイルを消費させる方策を採った敵の隊長機は、ロベルト隊長の言う通り冷静だったと言つていい。

ロベルト隊長とヴィルさんが敵編隊の中央目がけて突っ込み、集いかけたその連携を乱してゆく。スポーク隊、次いでガラム隊。機銃とミサイルが飛び交い、ウステイオとレクタの翼が空を裂くごとに、『タイフーン』の編隊もまた断ち切れ、塊は二つに、そして孤立した『点』へと刻まれてゆく。既にそれらの間は大きく開き、飛行隊としての力を喪失しつつあった。

次は、こちらの番。

ガラム隊に掠められた際に機体の安定を失った1機を見定め、エリクは操縦桿を右奥へと倒す。

まるで猛禽が地上を窺い舞い降りるように、地を指した一瞬の一瞥とともに『グリペンC』の三角翼が斜め右下へと下降してゆく。

東の空の三日月のように、勝利が意識に昇り始めた戦場。その予感を消し去ったのは、甲高い管制官の声だった。

《何だ…？スパロー3、4、リーダーよりロスト。スパロー隊、どうなっている》

《…こ…らスパ…！サピ…の強襲…！数4、黒い翼端…機体！こ…ももう持た》  
 《…！スパロー全機、リーダーよりロスト！各機警戒せよ、方位200よりサピン機4、高速接近中！》

「方位200…さっきの通信にあった4機か！クリス、攻撃中止！その4機に応じよう。」

X M A A、今度はいいな」

《だ、大丈夫です！こんなこともあろうかともう切り替え済みですから！》

「上等だ。…行くぞ！」

《はいっ！》

南南西、機数4。通信に挟まったサピン機接近の報を記憶に蘇らせ、エリクは提げていた機首を引き上げてから、右旋回でその鼻先を来たる敵の方位へと向けた。既に空は夜色がほとんどを占め、彼方の敵影を見定めることも叶わない。しかし、その中でも『グリペン』の電子の眼は、迫る4機の姿を確かに捉えていた。遠方ゆえ機種まではまだ分からないが、反応はやや小さい。隊形はオーソドックスな雁行、先頭の1機はやや突出している。

方位、真正面。距離、2500。目視では未だ発見敵わないが、現代戦では至近と言っている距離。自己誘導機能を持つ、X M A Aの鏃が届く必中の距離。

《…ロツクオン！ハルヴ4、FOX3！》

必中を期したのでろう、こちらの指示を待たずして、クリスが翼下からミサイルを発射する。早々に撃ちきってしまったこちらと違い、いざという時のために4発全てを温存していたのだらう、放たれた煙の筋は4つ。それぞれが別個の目標へ向けて、自身の『眼』で敵を探りながら殺到してゆく。

相対速度、マツハ4以上。近距離、それも暗中かつヘッドオンでの同時攻撃である。それはまさに、致命を外さない一撃。

その筈、だった。

レーダーの中で、敵編隊が一瞬左右外側に向けて開いた。

たつたそれだけの、本来ならば急速旋回や加速を必要とすることを考えれば、回避行動とすら呼べないささやかな動き。それにも関わらず、クリスが放った4発のミサイルは、全て敵機の傍をすり抜けて彼方へと飛び去って行ったのだ。まるで、目標の位置を見失ったかのように。

《えっ!?う、嘘……外れた!?!》

「……来るぞー！迎撃用意ー！」

なぜ必中するはずの1発が、ろくに回避行動を取っていない敵機に。

理由を考える余裕も無く、エリクはレーダーレンジをドッグファイトモードに変更し、闇の中迫る敵機の姿をひたすらに探った。針路はほぼ変わらず正面、ヘッドオンのまま。高度もほぼ同程度に位置している。

距離、2000。HMD越しに緑色のシーカーが敵の姿を追って、やがて闇の中に4つの反応を探り当てる。先の『タイフーン』をコードAからDとし、こちらへの割り当てはEからH。国籍反応はサピン、機種——MiG—21、サブタイプ不明。

汗が滲む。

火器選択、AAM。先のような距離ならともかく、距離1000を割った至近ならば流石に回避はできない筈。

数秒、息が詰まる。

開戦時、ラテイオ軍に基地を空爆された時も夜中だったが、あの時とは緊張は比べものにならない。

距離が1000を割る。

シーカーが目標を捉えて赤く染まる。

高い電子音、一つ。

ロックオン——。

エリクが発射ボタンに力を込めた、その瞬間。正面に朧に見え始めた機影から、まばゆい光球が放たれたのはほぼ同時だった。

「しまっ……！」

フレア・ディスプレイサー。

敵が発する熱を頼りに誘導する赤外線誘導式AAMに対し、その矛先を逸らす防衛装備。思いがそこに至った時には既に遅く、放たれたミサイルは炎に吸い寄せられるようにあらゆる方向へと飛び去っていった。目標へはおろか、後続の機体にすら掠りもしな



かったことは言うまでもない。

その炎すら振り切るように、敵機が真正面から迫る。相對するのは、先頭の機体——おそらく隊長機。舌打ちをする暇すらなく、エリクは咄嗟に操縦桿とフットペダルを操作し、機体を左へ大きく倒す。真正面の敵も同様にロールし、互いのキャノピーを向け合うような横転姿勢で、2機は正面からすれ違った。

コンマ数秒にしかならないであろう一瞬。

見上げるように敵機を睨んだその瞬間、エリクはそのパイロットと、確かに目が合った。

「蝙蝠のエンブレム……！」

《レクタの『三日月』か！》

「……ハルヴ2より各機へ、サピン軍機4、空域に侵入！いずれもMiG-21！気を付けて下さい。どんな手を使ったか分からないが……XMAAが当たらない！」

クリスの位置を確かめ、衝突しないように左横へと大回りに旋回してから、エリクは飛び去ってゆく4機の後へと機首を向ける。だが、既に加速が乗っているらしく、その速度は速い。旋回の間はこちらを引き離れた敵機はそのまま戦域に突入し、『タイプー』の追撃に入るスポーク隊を機銃掃射で撃ち散らしていった。4機はひとまとまりのまま、隊長とヴィルさんの分隊へも牽制を加えている。

《…！黒い翼端の…『M i G』だど!?》

《サピンにM i G—21が…？スポーク2よりスポーク1、射線を外されました。赤色の4機が合流します》

《おいおいおい、旧式でよくまあ…。エリク、クリス、こっちに合流してくれ。『タイフーン』がまた纏まっちゃった》  
くっ。

奥歯を噛みしめてもなお、口端から呻きが漏れる。真正面から接近されたにも関わらず、こちらの手を読みつくされ、みすみす突破を許してしまうとは。それも、『グリペン』より遙か昔に作られた旧式機相手に。

こうなれば、最早意地である。燃料残数が半分を割るのも構わず、エリクは再び空域へと機体突入させ、ロベルト隊長の元へと機体を馳せた。後方には、クリスも遅れじと付いて来る。

方向、こちらの正面やや下方。散らされていた4機の『タイフーン』はダイヤモンド隊形を取り、その周囲に散開したM i G—21が付随している。こちらが迫っていることはとつくに察知しているのだろうが、それでもなおその旋回は緩く、まるでこちらを誘っているようにすら見える。『ガラム隊』は依然攻撃を加えているが、ミサイルを既に使い果たしたゆえか、その矛先は些か鈍いようにも感じられた。

ガルム隊とレクタ軍、そして赤と黒の翼の機体。動と静の膠着の中で、空の三日月は徐々に昇り始めている。

《ニムロッド1よりエスクード1。ニコラス、無事だったか。撤退支援に来た、さつさと逃げよう》

《そうしたいのは山々だけどな、逃げる所をミサイルで狙い撃たれちゃ堪らない。どう見るねカルロス、傭兵の勘的に》

《∴F-2A2機と『グリペン』C型5機、D型1機。交戦した限り、F-2とグリペンの半分に長距離ミサイルは残ってないと見た。『グリペン』のXMAA搭載数は最大4。残りも積極的に撃って来ない所から見ても、多く見積もっても4機合わせて4〜5発程度だろう》

《つまり?》

《適度にちよつかいかけてミサイル浪費させてから逃げる》

《乗った!》

ぞく、り。

不意に、エリクの背筋が凍った。

理由は分からない。先程のように、赤色の4機と相対した時のような『見られた』感覚:いや、それよりもさらに鋭い、殺気のようなものを感じたためだろうか。少なくとも

も、これまで回避一辺倒だった敵が、確かに今こちらへと槍先を向けた。  
静寂、一瞬。

ガルム隊が、敵編隊の斜め上へと回り込み、さらに追撃を加えようと旋回する。それらが射線に達しない一瞬の隙を見計らい、敵編隊は縦旋回の後に加速。インメルマンターンで高度を稼ぎ、こちらへと一直線に突っ込んで来た。4機ひと塊の『タイフーン』を中心に、黒翼のMiG-21が前後斜めにそれぞれ付随するという変わった隊形。その針路は、こちらの中央——アルヴィン少佐とパウラの方向に向いていた。

《敢えてヘッドオンで挑むとは……いいだろう。スポーク2、正面からXMAAを見舞う。もはや『タイフーン』に高機能長距離空対空ミサイルは残っていない。発射後にフレアとチャフでの妨害を併用する》

《スポーク2了解。目標を捕捉》

《……何かやばいな。エリク、敵が突っ切る前に斜めからかかるぞ。スポーク隊の発射と同時だ》

「……了解。……今度は何を企んでる、『蝙蝠』め……！」

ヘッドオンから仕留める姿勢のスポーク隊とは対照的に、ロベルト隊長は左側から斜めに敵編隊を突っ切る積りらしい。必然的に、こちらは対称となる右側から突っ込むことになる。

戦術を考えると、こちらが採るそれは理に叶ったものだろう。最初の交戦と護衛機との戦闘で敵はX L A Aを使い果たした筈だし、スポーク隊は攻撃とチャフ・フレアでの妨害も行う以上、ミサイルの脅威に晒される可能性は低い。万一ミサイルでの攻撃が外れても、ハルヴ隊4機の機銃掃射で連携を乱すことができる。今の条件で取りうる手としては、考えられる限り最適解ではないだろうか。

だが、不審なのは敵が敢えて戦術を変えていないことである。周辺の4機はともかくとして、『タイフーン』は相も変わらない高速・一点集中隊形での一撃離脱。攻撃力が高い反面、咄嗟の回避能力に劣る隊形でもあり、戦闘機によるヘッドオンで崩せることは先ほど証明した通りである。僚機が加わったとはいえ、それを敢えて取る理由は何なのか。

巡らせる思考に結論が得られるまま、互いの距離が詰まってゆく。先頭のスポークIが敵機をX M A Aの射程に収めるまで、あと…2秒。

《FOX3》

《今だ、ハルヴ隊突っ込むぞー!》

少佐とパウラの機体に火が灯り、ミサイルが2本ずつ翼の下から放たれる。

同時に、尾部から放たれる火球と金属片。異なる二種の光を横目に、エリクは操縦桿を傾け、同時にフットペダルを押し込んで、機体を斜めに急旋回させた。狙うは、中央

の『タイフーン』。

だが、フレアの火球はミサイルのみならず、暗夜の場合は人の目をも幻惑する。進路上に放たれたそれに一瞬目を晦まされ、エリクは気づくのに一拍遅れてしまった。

先頭にいた2機のMiG-21が、スポーク隊の発射に合わせて何も無い空間へと機銃を放ち、そのまま『タイフーン』の前で交叉したのを。そして、その機銃の軌跡に、きらきらと反射する金属片が舞っていたのを。

4本の白炎が敵編隊へ殺到し、その全てが爆炎を刻まぬまま、彼方へと飛び去ってゆく。

外れた。

馬鹿な、しかしやはり。

追いつかぬ理解、追いつがる機体。『タイフーン』がスポーク隊と交差するその直前を狙い、エリクは斜めから強襲を仕掛ける。暗黒の中でもHMD上に浮かぶダイヤモンド、狙うはその頂点。5つのマーカーが示す、敵の穂先――。

マーカー、5つ？

思考に挟まった違和感が、エリクの焦点を一段下げる。

いや、正面のマーカーは確かに5つ。うち4つはスポーク隊へと向かうコードAからD。一方、残る一つは猛スピードでこちらへと直進してきている。

機種、MiG-21。コードE——『蝙蝠』の隊長機。

「何っ!？」

ヘッドオン。

そう気づいた時には既に遅く、衝突警報と曳光弾が同時にエリクへと襲い掛かった。振動、警報、モニターを彩るエラーノイズ。着弾の弾痕が機体を穿ち、『黒翼』が轟、という音と共に傍を過って入れ違う。

だが、まだ。

まだ終わっていない。

操縦桿左方、機体左90度ロール。次いで急旋回。自動制御のカナードが上げ角を取り、『グリペン』を三日月のような鋭角で急旋回させる。狙いは、スポーク隊を通過した直後の『タイフーン』。

体が痛み、機体が軋み、Gが下腹を搾り上げる。クリスが追従できないのも構わず、エリクは旋回の先に逃げる敵機を捉え、迷うことなくミサイルを発射した。

——だが、それすらも読まれていたのだろうか。

最後尾の『タイフーン』を狙ったAAMの先で、炎がいくつも爆ぜる。命中の爆炎にしては小さく、急速に輝きを失って落ちてゆくその姿は明らかにフレアのそれだった。おそらく、編隊後方に就いていた別の『黒翼』だろう。AAMが火球に吸い寄せられる

ように落ちて行ったのは言うまでもない。

《痛<sup>い</sup>つて……くそ、こちらスポーク1『カルクーン』、敵弾で小破した。何が盾<sup>エスクード</sup>と狩人<sup>ニムロッド</sup>だよ、役割逆じゃねえか》

《とはいえ、敵の手の内も読めて来たな。『黒翼』は多分チャフ弾装填したガンポッドを提げてるんだろう。攻撃を『赤色』が一点に担って、『黒翼』はその隙を埋めるフォロー役つて所か。機体もどうもb i s型じゃねえ、近代化改修型のUPG型だな》

《こちらガルム1。すみません、敵機に振り切られて射線を外しました。残弾、20mm 50発……少々厳しいです》

ようやく引き離されていたガルム隊が追いつき、8機連なって距離を取った敵機と相対する。

改めて機体を確認すると、見える限り主翼と胴体に被弾痕が3つ、キャノピーの右側にもヒビが入っている。真正面からミサイルを撃たれなかったのがせめてもの救いだった。周辺を見渡すと、クリスは無事だったようだが、スポーク1の『グリペンD』は正面から攻撃をもろに受けたらしく、小破し白煙を噴いている。これほどまでダメージを受けたアルヴィン少佐の機体を、エリクは初めて見た。

今までの戦闘を振り返ると、フィンセント曹長の言う通り、あれはそれぞれの小隊で役割分担を明確に行っているらしい。つまり、機動性と兵装搭載力に長けた『タイフー



ン」が攻撃の主軸を担い、攻撃力が低いものの、小型で小回りが利く『黒翼』が正面や回避後の隙をそれぞれ埋めるという訳である。

かつて相対した『パンディエーラ・トリコロリ』と比べると、あれほど機動は鋭くない。機体性能も技量も、こちらといい勝負という所である。だが今は、長期戦ゆえの弾薬欠乏と疲労が、連合軍の戦力を大きく削いでしまっていた。せめて、最初のサピン軍機との戦闘がなければ。せめて、ガルフ隊の残弾数が万全だったならば。

睨み上げた空の上で、敵機は大きく弧を描き、こちらを見下ろし探っている。まるで、こちらの全てを読み切ると言わんばかりに。

《このまま逃がしては如何でしょう？もう輸送機には追い付けますまい》

《いーやヴィルさん、そうもいかん。連中、こつちのミサイルが本当に尽きたかどうか、最低でもあと一回は探りに来る筈だ。それを何とかしないと、俺達は生還も覚束ん。：スポーツクー、そちらの機体、損傷で戦力を失ったと見ました。ちよつと指揮権拝借しても？》

《…あ、ああ。構わんが、何をする積りだ、大尉？》

《いえね、ちよつと向うの手を逆手に取ってやろうと思ひまして。そんな訳で、ミサイル残ってる人は手一上げて》

「…？隊長？」

《まーまー、ここは任せなエリク。ちよいと血が騒いじまつてね。……『円卓』を飛ぶエースの力つてヤツ、見せてやろうじやないの》

「——え？」

戦況にそぐわない、いつも通りの隊長の声。その最後に混じった、今までに聞いたことのない低く重いドスの効いたような気迫に、エリクは思わず聞き返した。その疑問符に対する返答は無く、隊長は状況を踏まえて、ガラム隊を含めたメンバーそれぞれに指示を与えてゆく。

多分、聞き間違いだったのだろう。

そう結論付けることにして、エリクは聞き取った作戦を胸に、再び上空の敵の姿を見上げた。

\*\*\*\*\*

《∴エスクード2より1。連中、仕掛けてきません。後退しては?》

《いや、まだミサイルがある可能性が否定できん。カルロス、あといつちよ仕掛けるか》  
空を照らす三日月の下、黒翼が蝙蝠のような陰影を、真珠色の月を背景に浮かべている。

見下ろした先には、ウステイオとレクタの識別信号を有する8つの機影。うち2機は、かつての英雄を模した塗装のF-2Aだが、その機動は先代のそれと比べるべくも

ない。残る6機はレクタの『グリペン』だが、これもミサイルをほとんど使い果たしたらしく、満身創痍の様相となっていた。しかしそれにしても、逃げるでもなく立ち向かうでもなく、こちらをただ見上げ続けている。

しばし通信へと向かう口を離し、ニムロッド——カルロス・グローバルは戦況を俯瞰し、敵の状態と意図を探る。死なない、死なせない。その信念の為には、まず戦う敵を探るための洞察力が要る。15年の戦歴で培ったその観察眼は、時として自身をも救う助けとなってきた。

おそらく最初の読み通り、ガルムもどきの2機と最初に接敵したグリペンには長距離ミサイルは残っていない。残りについても、先程4発を浪費させ、AAM使用も誘発させるのに成功した。以上から、残っているもせいぜい長距離ミサイルは1、2発。短距離AAMも片手程しか残っていない。

しかし気になるのは、敵が撤退の様子を見せないことである。手をこまねいているのに過ぎないのか、それとも何か策があるのか。

——そして、敵編隊の中あの『グリペン』。あの機動は、どこかで見たことがある。確か——。

《…おい！カルロス！》

《…ああ、すまん。そうだな…念のため、あと一航過仕掛けて逃げよう。ただし、危なく

なつたらすぐ回避行動に入れよ》

脳裏にもやもよとかかった雲を振り払うように、カルロスはエスクード隊に先行して機首を翻す。ニムロッド2、エスクード隊、ニムロッド3、4。統制立った順序で、機影が順々に月光の下を斜め下方へと馳せてゆく。

正面、8機。やはり逃げない。それどころか、『グリペンC』を先頭に真正面から相對して来る。

何かを隠し持っている。予感めいたものが、カルロスの脳裏に奔った。

正面、針路そのまま。距離2900、2700、2500。XMAAの射程距離に入った筈だが、発射炎はおろか、ロックオン警報すら鳴り響く気配はない。やはり使い果たしたのか、それとも何かあるのか。

依然正面、距離は見る間に縮まってゆく。

左右内側、23mm連装ガンポッド。左右外側、デイスペンサーポッド、いずれも準備よし。レーザー誘導、赤外線誘導、いずれも妨害し得る。

正面の敵はまだ動かない。針路そのまま。

距離1500。1400。1300。

——至近距離からのAAM狙い。

《各機引き上げろ！》

敵に長距離ミサイルの残数なし。

そう結論付けるのと、通信回線に声を吹き込んだのは同時だった。こうなれば、下手にヘッドオンを続けるのは却って危うい。

操縦桿を左へ倒し、エスクード隊の前に割って入るように機体を斜めへ旋回させる。すなわち位置取りとしては、水平へ機首を引き上げた『タイフーン』の下方を斜めに横切る針路。万一のミサイルに備え、カルロスは引き金を引き、チャフ弾を、続いてフレアを放出。束の間、眼下をフレアの火球が赤い波のように照らしあげた。高温で信管が反応したのか、放たれたミサイルが爆発の火球を咲かせている。

夜空の黒と、燃え盛る赤。その光景は、まるで15年前のあの時のようである。

脳裏に過るのは、夜半を越したオステア基地への奇襲作戦。そして、燃え盛るホフニング近郊の避難キャンプと、炎に巻かれて焼け落ちてゆく人の姿。戦場で絶えず付きまとう、血と命の色——。

それは、『円卓』という戦場に宿った魔に魅入られた瞬間だったのか。

カルロスの脳裏に過った光景は、眼下の炎を切り裂く無数の光軸によつて、ずたずたに切り裂かれた。

《——なっ!?!》

警報が鳴り響き、曳光弾の光で視界が幻惑される。

——しまった。

フレアの使用を誘発し、それに紛れた至近からの機銃掃射。すなわち、最初から狙いはエスクード隊ではなく、フレアをばら撒くために必ず敵に最接近する自分。今更ながら思い当った敵の策に、そして主翼に開いたいくつもの弾痕に、カルロスは己の読みの甘さを呪った。

《こ、こちらニムロッド2！レーダーがやられました、機体中破！》

《お…おい、大丈夫かカルロス!?》

《…く…問題無い、先に行け!》

同時に攻撃を受けたらしく、煙を噴いたニムロッド2へカルロスは声を荒げる。後続の3番機と4番機は幸いにも健在で、エスクード隊の背について速度を上げている所だった。針路は連中の虚を突いた北東方面——すなわちベルカーレクタ国境を経たゲベート領内。表立って参戦こそしていないものの、ゲベートがサピンと結んでいることはもはや暗黙の了解である。

《…!》

焰の残滓を纏ったフレアを突つ切り、機影が3つ、こちらの後ろ上方で背面旋回に入る。機種はいずれも『グリペンC』、まともに戦えば勝ち目は無い。

ならば、打つべき手は逃げ。

デルタ翼機ならではの加速を活かし、3機が背面のままこちらへと迫る。

スロットル、回転数抑制。機首上げ、減速。高速で迫る敵機の前で敢えて速度を落とし、カルロスは『ディビナス』の機体を急旋回。敵機に腹を見せる姿勢となりながら、両主翼のポッドからフレアを幕のようにばら撒いた。

先程自分が受けたように、フレアは目くらましに使うこともできる。一瞬の閃光で攻撃位置を見失った敵機を見届け、カルロスは機体を水平へと引き戻した。

その直後であった。すぐ近くで鳴った接近警報に、カルロスは思わず泡を喰ったのは。

《…あれは…さっきの『三日月』か》

「…コードEの『蝙蝠』…」

機位を失った瞬間、咄嗟に機首を上げたのだろう。カルロスの『ディビナス』のすぐ左隣には、機体を右へ倒したままの『グリペンC』が位置していたのだ。その機動からするに、おそらくは最初に接敵した『三日月』と同じ機体に違いない。

黒地の左翼に、染め抜いた4本の三日月。そして視線を逸らさず、こちらを見据えるパイロット。それらを全て見届けて、カルロスは残ったフレアを全て放出してから、フットペダルを踏んで機体を加速させた。『グリペン』ならば追いつくことは可能だろうが、深追いするほど向うも迂闊ではあるまい。

胴体には相当数の被弾があり、冗長性の高いMiG-21系列でなければとつくに飛行能力を失っていただろう。所属する安全保障会社の貧乏さに、今だけは感謝したい思っていた。

\*\*\*\*\*

「……終わった、か」

《サピン編隊、方位045へ遁走していきます。ゲバート領を目指している模様》

《もう追う気力もねえ。今回は痛み分けてことで手を打って貰うとしようや。…燃料残り30%。『グリペン』も腹が減ったとき》

フレアの閃光が残像として残り、ちかちかする視界で、エリクは北東の空を見上げる。企図せずして、並行する形になった最後の一瞬。穴だらけになった『蝙蝠』は、それでもなおフレアでこちらの追撃を遮り、自身も脇目もふらずに逃げ去っていった。まるで、どうなるかと死なない、生き残る。『円卓』の交戦規定通りだと、そう言わんばかりに。

《ともあれ、だ。輸送機の全滅は防げた訳だし、我々みんな五体満足。とりあえずは勝利、つてことでいいんじゃないかね。さ、帰ろうぜ。今日は疲れた》

ロベルト隊長の言葉を聞きながら、エリクは今一度彼方の空へと目を奔らせる。闇一色に沈んだ空は、もはや山脈の輪郭すら朧になり、まして小さな機影など探り当てるこ



ともできない。

「勝利、か。…言われてみれば、そうなのかもしれない。『円卓』の空で、欠けることなく生き残ったのだから。」

故郷の方角、レクタの大地が広がる東へ、エリクは機体の舵を切る。

三日月昇る『円卓』の下で、翼に刻んだ像かたちのように、『グリペン』は丸く弧を描いた。

## 第18話 報復の旗手

淡く朧な色調の空と雲が、朝焼けの朱に染まっている。

高度3000、雲量2。レクタ東部まで出張った高気圧のせいと同高度に雲の数は少なく、わずかに視界を遮る雲も、6つの翼に切り裂かれて瞬く間に後方の彼方へと千切り飛ばされてゆく。乗機『グリペンC』のエンジンは咆哮のような唸りを上げ、雲を、音を、あらゆるものを引き離しながら、遙か東へとひた駆けていた。

現在速度、優に1400。燃料消費も構わずに離陸直後からアフターバーナーを使用しているためでもあるが、速度計が指すその数値は、常の巡航ではけしてあり得ない速度である。その証左であろう、航跡記録の距離が見る見る伸びているのと引き換えに、出撃後20分と経っていないにも関わらず、燃料の残量は既に半分を切りつつあった。今地上からこの『グリペン』を見上げれば、機体尾部には陽炎を纏った噴射炎が、朝空を遠景に輝く様が見て取れるに違いない。

常に無い、超音速の巡航。それは偏にレクタ軍部の、そして編隊を先導するアルヴィン少佐の焦りの様でもあったのだろう。

《各機、速度を維持。間もなくコール防空司令部管制空域へ差し掛かる》

《首都は…コールはどうなっているんでしょう?…まさか、無防備なコールを攻撃するなんて…》

《ま、追い詰められた国つてのはそういうもんだ。民間人への被害とか味方の損害なんてのものにもなりふり構わず、効率的な戦果を求めるようになる。どえらい爆弾を使うなり首都強襲で首脳暗殺を狙うなり、犠牲と比べて成果が多くなるやり方だな》

「……」

心配そうに言葉を詰まらせるクリスに、ロベルト隊長の言葉が重ねられる。口調こそ砕けたいつもの様であるものの、その声音はどこか普段よりも暗い。

隊長の言う通り、劣勢の国に限らず、民間人へ被害が生じるというのは戦争の常である。近代戦の歴史を辿れば、古くは第二次オースリア戦争で劣勢のウエローがベルカの都市へ長距離爆撃を敢行した際に民間人の犠牲が出たと言うし、15年前のベルカ戦争でもウステイオ首都ダイレクタス解放戦の際や、ベルカの産業都市ホフヌングへの戦略爆撃でも多数の死者が出たという。今回の戦争だって、ユークトバニア軍によるセント・ヒューレット港空爆では官民間わず死傷者が出たとも聞いており、直近ではユークトバニアの工科大学がオースリア機によって銃撃されたという噂すらあった。

いずれにせよ戦争である以上、多かれ少なかれ民間人への被害は出る。まして、その国土が戦地となっていれば尚更のこと。国際法で禁止されてはいるものの、悲しいかな

そこは人間の性なのか、状況は半世紀以上前の戦争から何ら変わっていない。それは、知識としてはエリクも十分に知っていた。

だが、それならば。首都コールが狙われているという情報を耳にした時、胸にこみ上げたこの気持ちは何なのだろう。

胸をかき乱し、暗く燃え立たせるこの感情。これまでの戦争でも感じて来た怒りや焦りがあることは勿論だが、民間人への攻撃を敢えてせんとするラテイオに対し、今まで抱いていなかった感情が萌芽し始めるのを自覚せずにはいられなかった。

それは言葉にするならば、なりふり構わないラテイオの姿勢に対する侮蔑感。そして、より単純でどす黒い憎悪とでも言うべきもの。戦意や怒りの中では小さく微かなものではあるが、それらは確かに、心の片隅で小さな塊のように重く澱んでいる。

エリクは前を見据え、肚の中の感情を吐き出すように、大きく吸った息を肚の底から吐き出した。

重たい感情を肚に抱えたままでは、機体まで重くなってしまう。そんな錯覚が、無意識にさせた反応だった。

《こちら第5航空師団第99教導飛行隊『スポーク1』。コール防空司令部、聞こえるか。状況はどうなっている》

《こちらコール防空司令部。スポーク隊へ、急行感謝する。コール上空に侵入したら

テイオ機は攻撃機9、戦闘機5。コール中心部にあるレクタ大統領府を目標として  
と推定され、敵攻撃機は現在市街地を無差別に銃撃しながら侵攻を続けつつある》

「たった14機にいいように……首都防空大隊は?」

《現在は混乱が生じ、状況が錯綜している。首都防空大隊は現在全力で迎撃に当たつて  
いるが、有力な敵護衛機に阻まれ、迎撃体制構築に遅れが生じている状況にある。貴隊  
は速やかに戦域へ急行し、敵攻撃機を優先して叩け》

《やれやれ、なかなかへビーだな。敵機は街の上で墜としてもいいのか?》

《市民の避難が概ね進んでいるコール南部に限り許可する。追加情報だが、現在  
地对空ミサイル連隊が大統領府敷地に展開中である。また、他地区の市民は現在避難中  
である他、複数の報道へりも空域を航行している。可能な限り退避誘導を呼びかける  
が、それらにも注意して欲しい》

《……やれやれ、なかなかへビーだな》

敵機数14、友軍展開中、有力な敵護衛機。隊長のボヤキをよそに必要な情報を頭に  
叩き込みながら、エリクはレーダーレンジを広域索敵モードから戦闘モードへと切り替  
えた。コール上空に民間機も多くいる以上、早めに精密探査を行っておいた方がとっさ  
の変に慌てずに済む。

奔らせた目とレーダー電波が、地平線の彼方にコールの姿を捉え始める。ウステイオ

首都ディレクタス程ではないものの高層の建物を有し、曲がりなりにも一国の首都たる姿を横たえたその街並みからは、既に幾筋もの煙が立ち上っている。

減速、有視界戦闘用意。

先導するアルヴィン少佐の機体が通信で合図したのに合わせ、アフターバーナーを切り、同時に空になった増槽を捨てる。音速でしばらく飛ばしたため、燃料計は既に残量4割以下。敵機数が少ないのは幸いだが、早く埒を開けなければこちらが持たない。

惜しいのは、何より時間。接敵後のロスを少しでも縮めるべく、エリクは一足早く安全装置を解除し、機銃とミサイルを戦闘モードへと切り替えた。今回は緊急出撃のため高機能中距離空対空ミサイル<sup>A</sup>を装備する余裕が無く、短距離空対空ミサイル<sup>A</sup>4発しか携えていないのが不安といえば不安だった。いざとなれば、空対空戦闘には不利な30mm機銃に頼らざるを得なくなる。

《市民のみなさま、避難を急いで下さい！間もなく空軍機が防空に当たるとのことです！慌てずに…ああつ！みなさま、視聴者のみなさま、見えますでしょうか！ラティオの航空機がまた市街地を銃撃しています！》

《こちらコール防空司令部！上空を飛行中のレクタ<sup>R</sup>中央放送<sup>B</sup>の報道へり、速やかに退避しなさい！…おい、聞こえているのか!!》

民間の放送や防空無線が交錯しているためか、コール上空の混線状況は『円卓』や

『テュールの剣』周辺にも増してひどい。アナウンサーの声や怒声が飛び交う中で、エリクはリーダーと目を駆使して、銃撃を加えているという敵機の姿を懸命に探した。上空では首都防空部隊が円弧の軌跡をいくつも刻んでいるが、あの渦の中に攻撃機がいるとは到底思えない。

街中のビルを掠めて飛ぶ、白地に緑線のヘリ——違う。遙か上空を通過する、双発の大型ジェット——違う。いずれも報道局や民間の航空便に過ぎない。どこだ、敵は。どこに。

混乱の巷と化した都市、黒煙と通信に紛れた空。視線を走らせたその瞬間、エリクの目は黒煙を裂いた一筋の閃光を確かに捉えた。カメラのフラッシュとも爆炎とも違う、まばゆく連続するその光は、確かに機関砲の発射炎。じつと目を詰めたその先では、眼下に融け込んだ暗色の機体が確かに空を舞っている。よく見ればばらばらに分散しているが、その数は一つではない。

時代錯誤な直線翼。胴体の両端に備わるエンジンの膨らみ。そして、上半分を濃暗褐色に、下面を淡い水色に染めた塗装パターン。かつて一度見た覚えのある、あの形状は間違いない。

「ハルヴ2、敵機捕捉！機種はS u r 25 『フロググフット』、機数9…いずれも単機編制で分散しています！」

《了解した。スポークより各機、分散し各個撃破する。誤射に気を付けろ》  
「了解！」

各々の目標を見定めたらしく、アルヴィン少佐が、パウラが、ロベルト隊長がそれぞれの方向へと機体を旋回させてゆく。エリクもまた、最初に捉えた『フロググフット』へと目標を定めて、引き絞った矢のようにまっすぐ機体を猛進させた。

高い耐久力と搭載能力を誇るSu—25は、A—10『サンダーボルトII』と並ぶ純然たる対地攻撃機として知られているが、その反面鈍足で機動性に劣るといふ欠点もまた変わらぬ。同じ現代の軍用ジェット機とはいえ、戦闘機と攻撃機ではその運用思想から異なっており、まして超音速で飛行し格闘戦能力に長けた『グリペンC』には抗する術もないだろう。

堅牢さを誇る『フロググフット』とはいえ、全身を装甲で固めている訳ではない。道路へ向けて機銃掃射を続ける敵機の斜め後方から接近し、エリクは右へとロールしながらカナードを動かして、敵機の左真横へと回りこんだ。狙いは、航空機で唯一装甲板が搭載できない箇所——すなわち、コクピット。

右へと傾いたロールの銜並みを眼下に、正面にSu—25が捉えられる。

照準器の中心には、胴体横のラティオ国籍マーク。速度差も相まって、眼前の敵はもはや静止目標とほとんど変わらない。



敵機の機首から、いくつもの機銃弾が迸る。

距離が1000を、800を、600を切る。

電子音、接近警報。

敵のパイロットが、驚いたようにこちらを見やる。

照準器の中心。

パイロットの額。

「いっくらあああ!!」

躊躇なく引かれた引き金が、機体から30mm弾を引き放つ。

機体に響く振動、そして殺到する曳光弾。

照準器の中心へと吸い寄せられたそれは、パイロットの額を首ごと撃ち飛ばし、そのまま『フロググフット』の機首を蜂の巣へと変えて、銃身に残った残響を後方へと振り切っていった。

操縦桿を左へ戻し、右ロールから機体を復帰させる。エリクの『グリペン』は、そのまま目の前への黒煙へと突入し——その瞬間に鳴り響いた衝突警報に、エリクは心臓を跳ね上げた。

「うわっ!!」

咄嗟に操縦桿を左へと倒し、傾いたコクピットを掠めるように褐色の翼が傍を抜け去

る。横倒しの機体からその背を見上げると、ヘッドマウント<sup>H</sup>ディスプレイ<sup>D</sup>のダイヤモン  
ドシーカーがその背を追い、やがてぴたりと枠内に捉えた。間違いない、別のS u—2  
5。おそらくは先ほどの機体に付随し、同時に対地掃射を行っていたのだろう。先ほど  
の1機に気を取られた上、機体が黒煙に紛れて発見が遅れてしまったのだ。

こちらを掠めたその翼は、振り返ることもなく一心に加速し、その鼻先へと歩を進め  
てゆく。向かうその方向は真北——すなわち、レクタ大統領府の方向。

「させるか!!」

大統領府強襲——。その意図を察したエリクは、叫びざまに操縦桿を左手前へと引い  
た。

左旋回、次いで背面急上昇。強烈なGで血液が頭から下り、暗みを帯びた目の前で  
コールの街並みが頭上に映える。背面飛行から懸命に見上げるは、そのさらに前方。斜  
め上後方の無防備な姿を晒す、逃げおおせんとする『フロッグフット』の暗色。

操縦桿を引き、機首がその胴体を指す。急旋回が機体の安定を乱し、余りある速度差  
が精密照準をさらに困難にさせる。元より極至近距離である、精密に狙いをつける余裕  
も、ミサイルを撃つ暇もない。——ままよ。ぶれる照準の最中へ目がけ、口中に吐き捨  
てたエリクは、迷わず機銃の引き金を引き搾った。

30mmの軌跡が濃褐色の敵を追い、弾痕が確かにその背を削る。暗い弾痕が穿たれ、

金属片が飛散する。それでも、流石に頑丈さで知られる『フロッグフット』と言うべきか、そこから炎を吐く気配はない。

1秒にも満たない交叉、そして擦過。敵機が咄嗟に左へ舵を切るのとほぼ同時に、エリクはその後方を斜め下へ抜けた。

「チツ、浅かったか！」

《狙いが甘い》

「……パウラー！」

歯を食いしばり見上げた敵機。不意に声が落ちるとともに、そのコクピットを曳光弾が貫いたのは一瞬だった。

パイロットを直撃したのだろう、徐々に堕ち行く姿をよそに、上空からこちらの真横へと並んだのは緑系統のダズル迷彩が施された『グリペンC』——パウラーの機体。おそらく敵機が抜けるのを捉え、こちらの追撃直後の隙を狙い撃つたのだろう。

言葉は相変わらず辛辣だが、それに見合った腕前を持つ辺りぐうの音も出ない。せめてもの応戦に親指を立ててハンドサインを送ってみるも、返って来たのはぷい、と視線を逸らすそつけない反応だけだった。

《いいぞ……こちら『カルクーン』、敵機6機の撃墜を確認！》

《あ……テレビの前のみなさま、ご覧になりましたでしょうか！今、たった今、空軍の戦

闘機が到着しました。…三日月、翼に三日月の機体です！瞬く間にラティオの機体を撃墜しています！》

《く…こちらオルコ隊、レクタの戦闘機に攻撃を受けている！例の『三日月』だ！メッサ・ルーナ護衛機は何をしている！》

あらゆる声と感情が交錯し、混線が思考と耳をかき乱す。くそ、どれが必要な情報なんだ。どれが味方の声なんだ。最新鋭の機械を駆使した近代戦ながら、わずか数百メートル半径の戦況さえ掴み取れないのは何とも歯がゆい。エリクの口内に、思わず舌打ちが跳ねた。

《『三日月』…！待っている、今行く。チエーリオ中尉、後を頼む》

《了解。命に代えて、背中は防いで見せます。…愛するラティオに栄光を》

《ああ》

《…くっ！こちら首都防空大隊ヴェガー！下層域の『三日月』、聞こえるか！敵機2機がそちらへ抜けた！こちらは残る3機の相手で手いっぱいだ、そちらは頼む！》

「上…！…情報にあつた戦闘機か！」

混乱の戦場と化した、コールの空。降つて来た通信の先を見上げると、相変わらず飛行機雲が渦を巻く上空から、2つの機影が地を指してまっすぐに降下してくる。

その姿に、エリクは思わず目を奪われた。流星のような鮮やかな軌跡もその一因だっ

たが、何より、その機体が纏った色に見覚えがあったのだ。

流線形を主とした、まるで生き物のように流麗としたシルエツト。首を伸ばした鶴のような長い機首と、その機首を飾るカナードの突起。そして、機体上面を赤、白、緑の順で機首から放射状に染め上げた、ラティオの国旗そのもののトリコロールカラー。

あの塗装は、そしてあの機動は、間違いない。

《仲間たちの仇…今日討たせて貰う！『三日月』!!》

《…ラティオの『三色旗（パンディエーラ・トリコロール）』か!》

「あの時の生き残りの2機…!」

螺旋を描いて降下する2機の、殺気と闘気を帯びた声。冷と熱を兼ねたその声音、そして蘇るかつての空戦の記憶に、エリクは武者震いに似た肌の粟立ちを覚えた。『三日月』<sup>ハルツ</sup>を求めるその声は、確かに自分たちハルヴ隊を仇として狙っている。

パンディエーラ・トリコロールとは、ラティオを代表する曲技飛行隊の名である。ラティオ国旗の異名をそのまま冠した彼らは極めて優れた技量を備える曲技飛行隊として名声を欲しいままにし、トリコロールカラーのG・91を駆るその姿は世界に知られていた。この度の戦争では機体下部に鏡を搭載した特殊仕様機で参戦しており、レーザー兵器『テュールの剣』の狙撃を中継することで、連合軍の侵攻を長期に渡って食い止めていたのである。『テュールの剣』を巡る攻防戦の終盤において、エリクらハルヴ隊

と交戦した彼らが、奇策の下に敗れて3機を失ったのも半月と経っていない。彼らの言う『仇』とは、すなわちハルヴ隊に起因する仲間の犠牲と見て間違いなかった。

もつとも、技量で言えば彼らの方がけた外れに勝っており、前回の勝因も戦況を利用した奇策と機体性能の差に他ならない。前回の彼らの機体と言えば非武装のG・91だった訳だが、今回目の前に現れた機体はリーダーでの判別によるとSu-37『フランカーE2』。格闘戦能力はもちろんのこと、速度性能や運動性でも『グリペン』に勝る、有力な機体である。頼みの綱の奇策を取ろうにも、前回と違い今は快晴、しかも低空域であり、利用できる条件も少ない。

唯一、期待できることといえば――。

手札の少ないこちらを見越しているのか、2機の『フランカーE2』は螺旋を描きながらこちらと同高度まで降下し、その下端で大きく左右へと別れた。左右ほとんど対称の大半径旋回から、2機は急激に旋回を縮めてゆく。機首を引き上げ、加速を重ね、左右から向かう方向は――こちら。

「――狙いは俺か!」

瞬く間に距離を詰める敵機に対し、AAMでは射程に入ってからロックオンが間に合わない。舌打ち一つ、エリクは操縦桿を思い切り手前へ引き、数拍置いてそれを右へと倒した。

上昇した機体が右へと傾き、機体側面で敵の攻撃を受けるように、その投影面積を減らす。その間にも敵機を示すマーカーは接近し続け、その距離は瞬く間にAAMの射程を、機銃の有効限界を、命の距離までも切ってゆく。

空を裂く曳光弾、機体の上下を掠める衝撃、そして遠ざかる機影。まるで過ぎ去った嵐を見送る心持ちで、エリクはインメルマンターンの要領で機体を水平へと戻した。

どつと噴き出る汗、矛先に捉われ早まる鼓動。それでもエリクは、先の一航過の攻防に手応えを感じていた。流石に被弾ゼロとはいかないまでも、真正面から強襲を受けたにしては、被弾は最小限に抑えられている。

コンピューターでの制御を受ける現代の戦闘機は、かつてとは比べものにならない程に操縦への負担は減った訳だが、それにしても機種転換には一定の期間を要する。先代の機体と世代差があればあるほどそのギャップは大きく、第3世代機である『クフィール』から今の『グリペン』へ乗り換える際にも、その操縦系統の違いに混乱したものである。それは何も、レクタのみに限った話ではない。性能でも技量でも勝る相手に期待した一縷の望みとは、この一点であった。

その推測を示すかのように、こちらと擦過した2機は振り返らず、次のSu-25を探していたヴィルさんとクリスへと攻撃を仕掛けていく。機銃掃射を軸とした攻撃だが、高速の火線はヴィルさんはおるかクリスの機体にも幾筋当たったばかりで、その多

くは彼方へと逸れていた。

間違いない。彼らは、Su-37という機体に——いや、それどころかおそらく機銃を用いた戦闘に慣れていない。元々その出自ゆえに機銃を用いる機会は無かつたのであろうし、新たな機体に慣れていないこともその要因の一つだろう。まして優れた運動性は、機体の不安定性の裏返しでもある。運動性に優れた格闘戦機である『フランカーE2』であれば、不慣れな状態での機銃掃射は一層困難であることは想像に難くない。

——ならば。操縦技術に勝るものの機体に不慣れな者と、性能で劣るものの機体を知った者。その正と負の差し引きは、五分と見てもいいのではないか。

「隊長！あいつら、もしかして……！」

《ああ。正直ヤバいと思ったが、こりや工夫次第じゃ分かんない。ヴェガ隊、何機か敵攻撃機相手に回して貰っていいかね？こつちもあの2機にや手を焼きそうだ》

《こちらヴェガー、了解した。追撃に1小隊を回す。あいつらには俺達じゃ到底敵わない。頼むぞ！》

《へへ、あいよ。ハルヴ1よりスポーク1、今回は小隊で独自に動きましよう。6機ひと塊だと多分あいつらには読まれます》

《…分かつた。確かな君の戦術眼に賭けよう》

《そりゃ責任重大だ。エリク、まずはヴィルさんとクリスから射線を外す。1セルで奇



襲しようか》

「了解！」

ロベルト隊長も同じ事に気づいたらしく、先と違い声音に明るさが戻っている。スプーク隊の2機がひと塊となって隊長の後ろに就く中、エリクは機体を翻し、ロベルト機の右翼側へと布陣。隊長の加速に合わせて、こちらも機速を速めてゆく。狙うは、回避行動を取るヴィルさんとクリスを執拗に狙う、『三色旗』の2機。

《く……流石は名高い『三色旗』、容易には引き離せませんか……！》

《……つちもダメです！ 旋回しても加速しても、振りきれません！》

空戦そのものに不慣れとはいえ、操縦技術の優位がもたらすアドバンテージは計り知れない。まして近接戦闘で右に出る機体は無い『フランクカー』タイプを相手にして、さしものヴィルさんとクリスの機体にも、少しずつ被弾痕が目立ち始めていた。

だが、人は逃げ惑う獲物にはどうしても引き寄せられるもの。幸か不幸か、『三色旗』は攻撃に気を取られ、こちらに後方を取られてもなお、機動が些か鈍って来たように思われた。距離にして1500、AAMの射程のわずかに外。追撃に夢中になっているだけなのか、それとも敢えてこちらを誘っているのか。

ならば、お望み通り。エリクは手元のボタンで兵装を選択し、主翼下ハードポイントのAAM2基を発射準備に切り替えた。HMDにダイヤモンドシーカーが映り、距離の

狭まりとともに『フランカー』の尾部を追っていく。

距離、1200、1100、1000。

『尻尾』そのもののような、『フランカー』のテイルコーンにシーカーが重なるまで、あと僅か。

《FOX2!》

《<sup>ブレイク</sup>散開》

だが、その読みはやはり甘かった。

AAMの発射と同時に通信に入った敵の声。それに寸分の遅れも無く、2機の『フランカー』は左右に急旋回し、背を追うミサイルを引き離しに入ったのだ。S字蛇行、急上昇。まるで後ろに目が付いているような信じがたい挙動に、並みの誘導性能しか持たないAAMが追隨できる筈も無い。瞬く間に推進力を失い慣性の虜となったミサイルは、『三色旗』の尾部に喰いつくこともままならず、そのまま地へと墮ち行く命運を辿って行った。

とはいえ、奇襲でヴィルさんとクリスへの攻撃を阻み、敵編隊を散開させることには成功した。スポーク隊の2機は片方の機体へ追撃を仕掛け始め、その間にヴィルさんとクリスはロベルト隊長の左翼に集っている。

《よし、こつからが本番だな。隊形は1―3。エリク、先行してフリーの1機のケツ蹴り

上げてくれ。避けた所を俺達が集中砲火で叩く」

「了解です。間違つて俺のケツ蹴らないで下さいよ」

1—3 隊形——すなわち、単機で先行する1機が囿や奇襲を仕掛けて攻撃の起点となり、隙を見せた敵機を残る3機が討つ攻撃型の編成。演習で繰り返し学んだその中身を反芻しながら、エリクは一足先に翼を翻し、こちらに背を向ける『三色旗』の1機へと狙いを定めた。スポーク隊に追われる1機に合流しようと、その『フランカー』は左旋回に入りながら、その鼻先を僚機へ向けている。

ならば、先行役の自分が採るべきは、その鼻先を挫くこと。目標の斜め後方から、エリクはフットペダルを押し込んで、その予測針路上へと『グリペン』をひた走らせた。

双発の『フランカーE2』の方がエンジン出力の点では勝るが、低空での加速力ならばデルタ翼機の『グリペン』の方が初速の伸びはいい。おまけにこちらの方が高度は高く、降下の重力加速度も加算できる勘定である。ダイヤモンドシーカーや各種の数字が並ぶHMDの中で、眼前の1機はゆっくりと、しかし確実にその距離を狭めていった。

緑枠のシーカーがその背を追いかけて、尻尾のように長く伸びた『フランカー』のテイルコーンへと重なる。距離にして850、AAMの有効射程ぎりぎりであり、必中はまだ望めない距離。

だが、今はその機動を阻むのが第一。シーカーがロックオンを示す赤色に染まったの

と同時に、エリクは迷わず搭載火器の発射ボタンを押し込んだ。

一拍。機体下部のごとりという音。

翼下の拘束から解放されたAAMは、尾に火を灯して『フランカーE2』へとその鋸を向けていく。

『三色旗』、フレア、ついでチャフ散布。赤と銀と光がその尾部に閃き、AAMがそこからへと吸い寄せられていく。左旋回を断念した機体は右へと傾き、その速度が僅かに衰えるのが見て取れた。加速が乗った『グリペン』は、その隙を突いて瞬く間に距離を詰めていく。いくら回避技術が優れていても、距離350を割ったこの近距離では外すことはない。

貫つ――。

「――っ!？」

殺気。

他所を向いていたそれが、一瞬にしてこちらへと向かった――そう感じた刹那。エリクは己の不注意を悟り、そして畏れた。『バンディエーラ・トリコロリ』を張るそのパイロットの技量を。類まれな運動性を誇る『フランカーE2』の性能を。そして、報復の意志に燃えた、人の力が成せる業を。

「うわっ!？」

目の前の『フランカー』が、突然大きくなった。

そんな錯覚を覚えるほどに、眼前の敵機は急減速。同時に真上を指すように機首を引き上げ、空中に静止して見せたのだ。衝突を避けるために急旋回したエリクの『グリペン』が、その右脇を抜けて追い越してしまったのは言うまでもない。

『フランカー』の代名詞、コブラ機動。——しまった。後悔を口にする間もなく、後方警戒ミラーの中で『フランカー』はその機首を水平へと戻してゆく。目算での距離は、およそ130。機銃ですら、必中を狙える距離。

《かかったな……！死ぬ、『三日月』!!》

《ヴィジリオ、後ろだ!》

《…!?くそっ!》

生死を分かťつその一瞬、『フランカー』の後方から、幾筋もの火線が襲い掛かった。

ロベルト隊長のグリペンを始めとした3機。至近から一束となつて放たれたそれらは、さながら投げ網を被せるかのよう。コブラ機動で速度を落とした『三色旗』へと、『グリペン』が、機銃が、ミサイルが殺到してゆく。先行の1機が作り出した隙を3機の集中砲火が突く様は、まさに1―3隊形の真骨頂とも言える光景だった。

だが、それを以て必中とするには、『三色旗』の技量はあまりにも隔絶していた。

『フランカーE2』はフレアを散布するや、左へと急旋回。一瞬下げた機首を一気に左

上へと持ち上げ、瞬間のうちにロールを交えながら左上昇旋回へと移ったのだ。言うなれば、それは『G』の字を左右逆にしたような、大回りのバレルロールと言う所だろうか。

推力偏向機構に加え、カナード翼で機動性が増したSu-37の性能を最大限に生かした凄まじい機動。わずかに数発の機銃を除いて、攻撃のほぼ全てが外れてしまったことは言うまでもない。

《ハア、ハア…はは、最高だこの機体は！油断したな、『三日月』め！レクタのミサイルごとく掠りも…》

《——！待て！ヴィジリオ、前から来るぞ！》

《…なっ!?!》

だが、面火力を下げたまで隊を分散させた強みは、これからである。

確かにエリクは囷として最初の隙を作り出し、そこを本命のロベルト隊長達が突いた。その攻撃は無に帰した訳ではあるが、しかし攻撃に晒された『三色旗』は回避に気を取られ、一瞬警戒が疎かになったのだ。これも、言うなれば隊長達が生み出した隙である。

僚機からの通信に、ヴィジリオと呼ばれたパイロットは視線を前へと戻し、そして息を呑んだ。

彼の目には映った筈である。彼の駆る『フランカーE2』の真正面に、捌いた筈の敵機が背面で迫っているのを。そう、オーバーシュートした後も加速を続けていたエリクの『グリペン』が、遙か前方でインメルマンターンを行い、まさに機銃を向け合う距離まで近づいていたのを。

《何だと!?!》

「『隙』ありいっ!!」

数秒に満たない擦過、そして死神の羽音のような掃射音。

『三色旗』と真正面から入れ違った数秒の後、ラティオの色を染め抜いた『フランカーE2』は、ずたずたに引き裂かれた翼とともに地上目がけて墜ちていった。

掌に残った機銃の振動に、その命の感触を徹かに残したまま。

《ヴィジリオオオオ!!…おのれ、よくも…よくも!!》

《こちらオルコ4、ダメだ、高度を保てない!》

《す、凄まじい爆音です!見えますでしょうか、今また1機、…あつ、いえ2機です!ラティオの飛行機がまた撃墜されました!…圧倒的、圧倒的です!見る見る敵の数が減ってきています!》

《く…食らいつかれた!こちらオルコ7!パンディエーラ・トリコロリ、た…助けてくれ!!》

《五月蠅い!!…貴様は、貴様らだけは、この手で…!》

《もはや脅威はこの敵機だけだ。スポーク2、連携で仕留める。フォーメーションI2、陽動に入れ》

《スポーク2了解》

激しい混線に、復讐心の塊となった男の声が入り混じる。もはや仲間の声すら届かず、炎に包まれるSu—25の姿も顧みないまま、三色旗に身を染めたSu—37は一心にこちらを指して呐喊した。

一筋。

その鼻先を遮るようにパウラの『グリペンC』が機銃を掃射し、その間にアルヴィン少佐の『グリペンD』が死角となる斜め下方から徐々に距離を詰めてゆく。おそらく、先程の自分たち同様に、パウラが囷となって本命のアルヴィン少佐が仕留める戦術なのだろう。市街地の混乱と混線、そして敵の逆上を見計らって忍び寄るその様は、まるで獲物を窺う蛇のようにも見えた。

パウラが敵の眼前を横切り、急降下から逆放物線を描いて上昇に入る。執拗に『三色旗』の眼前に入るようなその機動は、敵にしてみれば羽虫に絶えず集られているような不快感を覚えることだろう。そしてそれは取りも直さず、アルヴィン少佐の存在を隠すことにも繋がる。



その機動に耐えかねたのか、『三色旗』がカナードを動かさず、背を見せて上昇するパウラを追尾し始める。明らかに陽動なのだが、それにも気づかない程逆上しているのだから、その機動はシンプルな直線機動。好機と見計らったアルヴィン少佐が、すかさず死角から追撃にかかり、徐々に距離を詰めてゆく。

《おのれ……獲物は『三日月』のみだ、邪魔をするな!!》

パウラ機が上昇から水平飛行に移り、蛇行を重ねて右旋回に入る。『三色旗』はそれを好機と見たのか、速度を落としながらその背を追うべく横旋回に入った。既に、後方のアルヴィン少佐は斜め下方から距離1200程までに接近している。

敵機、発砲。曳光弾がパウラの主翼を捉える。

距離1100、1000。

死角からアルヴィン少佐が肉薄する。

パウラか、少佐か、通信から聞こえる息遣いは荒い。——いや、あるいは自分自身か。火線避けるようにパウラが旋回する。

その背を追って、『フランカー』も回る。

鈍い。遅い。まるで、誘うように。

目算距離、800。『グリペンD』が、『三色旗』の翼を捉える。

今——。

《…言った筈だ。——邪魔をするな!!》

はっ、と息を呑む気配は、果たして誰のものだったのか。

それしか覚えない一瞬の間に、その勝負は決した。

アルヴィン機がAAMで攻撃を仕掛ける、まさにその瞬間。

『三色旗』のSu-37は不意に水平に戻るや、先程僚機が披露したように高度を上げないまま機首を振り上げたのだ。真上を向いた機体は、そのまま上下を反転して背面となり——『真正面』に捉えたアルヴィン少佐の『グリペンD』へミサイルを発射。まるで生き物のように推力偏向ノズルとカナード翼を動かして、そのまま水平位置へと機体を戻したのだった。

不意に真正面から放たれたミサイルに、咄嗟に反応し得たのはアルヴィン少佐の技量あつてのことだっただろう。それでも完全な回避は叶わず、『三色旗』の放ったミサイルは『グリペンD』のエンジンカウル付近に命中。爆炎でその尾部をもぎ取り、黒煙とともに緑色の破片が宙を舞った。

《少佐!!》

《く…：クルビット、とは…：化け物め!》

「…くそ！パウラ、逃げろ！こっちに来い!!」

攻め手を失ったパウラの『グリペン』が、まるで追い立てられた羊のようにこちらへ

と急降下するのが映る。アルヴィン少佐を返り討ちにし、今また逃げるパウラの背目がけて追撃するSu-37は、まさにその異名である『ターミネーター<sup>追跡者</sup>』そのもの。その勢いは、なりふり構わぬ機動は、これまでの敵機とは比べものにならない。

急降下に速度を乗せて、敵の機銃弾は徐々にパウラの機体を、命を、削り取ってゆく。

《く……！》

《嬢ちゃんいいぞ、そのまま来い！ハルヴ各機、残ったミサイル全部使うぞ！エリク！確かミサイルはもう無かつたな、先行して引つ掻き回せ！》

「了解——待つてろ、パウラ！」

ロベルト隊長の指示を受け、エリクは機首をもたげて『グリペン』を上昇させる。その眼の先には、降下するパウラの『グリペンC』、そして肉薄するSu-37。既に被弾が重なり、パウラの機体は黒煙を噴き始めている。

《撃え！！》

こちらの翼を掠めるように、後方からAAMが幾筋も放たれる。

その数、しめて6。ヘッドオンという極めて回避の困難な、それも加速の乗った急降下での位置取り。

照準が『三色旗』を捉える。

回る。敵機が回る。炎を放ち、極めて小さなバレルロールでその矛先を一つ、また一

つと躲してゆく。

すれ違う。パウラ。怪我はないらしい。

正面。

無傷の『三色旗』。

距離300。

馳せ違う短剣での突き合いは、しかし虚しく空を切る。

撃ち放った30mmの弾道は、目にも止まらぬ速度で急旋回した敵を掠めて、彼方の虚空に虚しく散った。

《きやあつ！》

《ぐっ……な、なんと……ハルヴ3、機体小破。……あれでは、とても敵いません》

「つークリス！ヴィルさん！」

急降下しすれ違ったその先で、銃声と通信の声が入り混じる。背面旋回し見下ろしたその先では、敵の射線に捉われたらしいヴィルさんの機体が、片方のカナードを失ってよろめいているのが見えた。クリスの機体も、機首付近に弾痕が刻まれている。

そして。そのさらに後方、高度にしてわずか1000程度の低空で、『三色旗』のSu—37は1機の戦闘機と横旋回の巴戦を繰り返していた。言うまでも無く、相手は残ったロベルト隊長の『グリペンC』。急降下の強襲を躲してその背を取り、そのまま格闘戦

に持ち込んだのだろう。

しかし、Su-37は『フランカー』タイプの流れを汲んだ、最強の格闘戦機として知られた機体である。小型軽量で運動性に優れる『グリペン』とはいえ、Su-37相手では到底格闘戦で叶う訳はない。事実、慌てて降下するエリクの目の前で、ロベルト隊長の『グリペン』は徐々に敵との距離を詰められていた。このままでは、1分と猶予は無いに違いない。

もうミサイルは残っていないが、迷っている暇は無い。残る僅かな燃料も惜しまず、エリクは機体を呐喊させ、狙いもそこそこに機銃弾を敵の鼻先へばら撒いた。

火線が奔り、機体走る。思わぬ妨害で旋回を妨げられた『三色旗』は、旋回の逆方向へと機体を捻って巴の輪から逃れてゆく。死角の奇襲ですら弾一つ受けないその機動は、最早神技の感すらあった。

そして、隊長の支援とはいえ、不用意に接近したことへのツケは早々に現れた。

旋回の輪を抜けたSu-37は、そのまま減速と蛇行を繰り返してこちらの後方で旋回。数少ない高層ビルを避けてエリクが旋回したその瞬間を突いて、ビルの影からエリクの後方へ躍り出たのだ。数十メートルとはいえ後方の高位を維持し、わずか数秒の応酬で逃げ場を完全に塞がれてしまっている。

「しまった……！」

《捉えたぞ：『三日月』。仲間たちの無念、ここで晴らしてくれる：!!》

《おう、悪いなエリク！ナイスフォローだったぜ》

「言ってる場合じゃないでしょ！隊長、どこですか!?!…くっ、振りきれない！」  
背を追う怨念に、冷や汗が全身を濡らす。

上昇の隙は確実に狙い撃たれる。左右へ旋回するにしても、旋回性能は向うの方が上。高度は既に1000を切り、急降下で逃れる手も使えない。加速で逃げるにしても、初速を除けば速度性能は向うが上であり、到底逃げおおせる術は無い。

つまり、チエック・メイト。

心を浸した、死を伴うその実感。そんな折にかけられた隊長の声がいつもの能天気な声音であれば、エリクでなくとも声を荒げたくなくなるだろう。事実、エリクも常になく声を上げ、ひたすらにその姿を探した。まったくもって、この人は未だに良く分からない。なんでこの場で、そんなに能天気な声が出せるのか。

焦燥に幾分の憤懣が入り混じったその内省に、被さった隊長の声は、しかし予想外のものだった。

《落ち着け、エリク。こうなればもうこっちの勝ちだ。針路0に変針しな》

「は!?!勝ちって…一体どうやって！第一、針路0って…!」

《まーまー。エリク、ちよつとばかり復習の時間だ。前に言ったよな、空戦のツーポイン

トアドバイス》

「こんな時に何言って……！敵の弱点を見出すことと、仲間を意識することでしょ!?でも性能も技量も奴が上だし、仲間も隊長以外いないじゃないですか!」

《いやいやいや、弱点つてのは何も機体の特性や腕だけじゃねえ。…あいつは、もうお前と俺の首しか見えちやいねえ。俺達がどこに逃げてても、それを追うことしかできないのさ。言い換えれば、こつちにとつて有利なフィールドを選べる。これが今の奴の弱点だ》

「……弱点は、奴の、心……」

ビルの隙間を抜けて、朝の光がコクピットに差す。その瞬間、その光がまるで自分の心にまで差し込んだかのように、思わずエリクは錯覚した。

言われてみれば、確かにそうである。機体性能も技術も奴が上だし、もはや機体への不慣れさも感じることはできない。だが、ここはレクタの首都上空、すなわち味方のだと真ん中。有利な場所を選ぼうと思えば、いくらでも選べる。そして奴は、何が合ってもそこに飛び込まざるを得ないのだ。

——では、その肝心の『有利な場所』とは。

《そう。そして、仲間つてのは何もハルヴ隊やスポーク隊だけじゃねえ。よく思い返してみな、最初の戦況を。こつちの手札には何がある?》

「こつちの、手札……」

後方に絶えぬ殺氣と怨讐を受けながら、それでもエリクは考える。手札といえば、ハルヴ隊、スポーク隊。首都警備のヴェガ隊は上空と攻撃機掃討に付きつ切りであり、他の空軍は今の所いない。他には空の民間機、報道ヘリ。あとは――。

「……なるほど……それで方位0に！」

《オーケイ?》

「OK!!」

隊長の手で、示された答え。それに向けて、エリクは操縦桿を取り、弾痕目立つ『グリペン』の機体を旋回させた。目指す先は、方位0、すなわち真北。防衛すべき、レクタ大統領府が座する場所。

《血迷ったか? お望みならば、貴様らの大統領の膝元で墜としてくれよう。――貴様らの大統領ごとな》

「……く、まだ……墜ちるか!!」

旋回の拍子に速度が落ち、その隙にSu-37がさらに距離を詰める。もはや燃料も少なく、機体の余力はより少ない。飛来する機銃弾を回避する余裕も無く、エリクは迫る弾雨の中、機体を直進させた。コールの街並みは瞬く間に眼下を抜け、中央エリアへ達し、やがてその中央に聳える大統領府の麓へと近づいてゆく。



「ぐっ!!」

衝撃、そして振動。掠めた至近弾がカナードをもぎ取り、キャノピーにもヒビが入る。爆ぜたガラスの破片はヘルメットのバイザーで弾け、その表面に無数の傷を刻んだ。既に後方、敵機との距離は500もない。

《ついに、捉えた。ヴィジリオ、ドメニコ、ピエトロ、シモーネ…今、仇を取る》

「はあ、はあ…。…『射程』…『内』…!」

怨嗟の声、迫る警報。それらに構わず、大統領府の敷地上で、エリクは求める『それ』を探し、そして見つけた。緑の地面に茶色の軌跡を刻む、あの姿。そして黒色の箱を空へと向けた、あの形状は。

《——貴様の血で!!》

「撃てえええ!!」

《……っ!?!なっ…!!》

怨念と意志、二つの声が空に爆ぜる。

その片方——エリクの背中を捉えた一筋の機銃は、しかし細く潰えて空へと消えた。

それを圧する幾筋もの白煙が、すなわち空を指すミサイルが地上から放たれ、低高度に誘い込まれた格好の獲物目がけて襲い掛かったのだから。

一つ、二つ。後方に爆ぜる衝撃。

機速を速め、旋回して振り返ると、そこには主翼の一部とテイルコーンを失い、炎に包まれるSu-37の機体があった。

ロベルトが教授し、エリクが思い当った『勝機』。それこそが、最初の通信にあった『大統領府に配置中のSAM』だった。高高度や格闘戦中にはそうそう当たるものではないが、追撃のため速度を落とし、かつ低空ならば新鋭機にも命中させられる可能性はある。まして、目の前の敵に気を取られ、地上への警戒が疎かになった機体ならば。

『三色旗』が抱いた心の隙は、そのまま致命の間隙となつて、幾筋もの矢に穿たれたのである。

《……ぐ、あ……！……卑怯者、め……！》

《都市攻撃したお前らには言われたくねえわな。…エリク、止めた。前後から行くぞ》  
「…了解」

煤と破片で汚れた三色旗が、Su-37の翼の上で鮮やかに翻る。もはや尾翼も損傷し、旋回も回避もままならなくなったその機体へと、エリクは照準を向けた。機体後方からは、ロベルト大尉の『グリペン』も迫っている。

痛々しいその姿の中で、敵のパイロットはヘルメットを外し、こちらを睨み上げた。未だに強い意志を宿し、怨念と敵意に彩られた、血走った瞳で。

《呪われろ、三日月…!!》  
メッザ・ルーナ

前と後ろ、2筋の閃光が『三色旗』を切り刻み、そのパイロットすらも朱に染めてゆく。

主翼を断られたその機体は急激に揚力を失い、炎に包まれて墜落。大統領府の庭に当たる芝生の上に数度転がり、やがて爆発とともに炎に包まれた。

千切れ飛んだ、三色の翼。地面に突き立ったそれが、恨みを帯びたような灰色に煤けてしまっているのが、どこか痛ましかった。

《こちらヴェガー。上空の掃討を完了。攻撃機も全機撃墜した》

《凄い…み、皆さまーコール市民の皆さま、ご安心下さいーラテイオの機体は、たった今空軍機によって全機撃墜されました！三色旗のエースを撃墜したのは、あの『三日月』の飛行機です…ほらカメラ！あれあれ！よく撮って!!俺達の英雄だ!》

《つたく、こつちの気も知らねえでよ…。もうこんなハードな空戦は御免だぜ。ハルヴーより防空司令部、もう燃料がねえ。そこら辺のハイウェイに下りてもいいかい?》

《こちら防空司令部。すぐに17号線に燃料車と誘導員を向かわせる。もう少々待機してくれ。…ありがとう。君たちは、首都の守護神だ》

《よせやい照れくさい。…ほらほら、エリク行こうぜ》

「はは…はい。そうですね。皆もきつと待ってます」

飛び交う、数多の声。賞賛、感謝、そして喜び。どこかくすぐつたく、同時にどこか苦いような甘いような複雑な気持ちに囚われて、エリクは逃げるように機体を翻した。隊長ではないが、自分も流石にこつ恥ずかしい。それに何より、また『エース』の名に囚われてしまいそうにも感じてしまったゆえだった。

向かう先には、4つの機影。いずれも満身創痍だが、太陽に照らされたその姿は、何にも増して頼もしい姿に見える。

《隊長！先輩!!…良かった、皆無事で…》

《…まさか、な…。君たちが、よもやここまで成長するとは…》

「はは…やめて下さいよ、機体より先に顔から火が出そうだ」

真ん中を抜けるロベルト大尉、そして自分。それに続くように、4つの機影も旋回し、その両翼の位置に就いた。左翼側はヴィルさんとクリスの定位置、そして右側は自分とアルヴィン少佐、そしてパウラ。2機は本来の位置へ就くべく、ゆつくりとこちらを追いかけてゆく。

峻厳な表情を崩さないアルヴィン少佐、ひらひらと手を振る後席のフィンセント曹長。次々と目で応じたその最後に、エリクは通過してゆくパウラと目が合った。いつもながら、その眼は無遠慮にまっすぐこちらに向いている。

《……。少し、見直した》

「珍しい。雨が降るかな？今日は」

ふい、と顔を背けて飛んでゆく。パウラへ親指を立てて、エリックは空を見上げる。  
雨どころか雲一つないその空は、今日の快晴を予感させた。

## 第19話 仲間、7騎

「レクタは、今まさに存亡の危機に瀕しています」

かつり、かつり。

規則正しく脈を刻む時計の秒針を、初手から切り込む声音が切り裂く。口火に衝撃的な単語を使つて揺さぶりをかけるのは、いわば交渉事における常套手段。自ずと、それに対する反応から、相手の真贋も見いだせるというものである。

向かう相手は、3人の男。中央、人のよさそうな小太りの男はその言葉に顔を顰め、右側の痩せた制服男は困つたように頭に手をやり、視線を落として合わせようとしない。左側の髭の中年に至つては、そもそも少数の会議に出た経験も少ないのか、落ち着かず目を泳がせる始末である。今やレクタの国防を担う重要拠点の一つとなつたヘルメー卜空軍基地の司令連としては、些か物足りないと言わざるを得ないだろう。

ふう。

口内に吐き出したため息を呑み込んで、少女——パウラ・ヘンドリクスは、しばし横目で周囲を探る。部屋は窓一つなく、殺風景な白い壁紙で囲まれた、せいぜい10人程度しか収まらない極めて小さなもの。ヘルメー卜基地司令棟の奥に設けられたその隔

離空間は、機密や重要案件に係る会議のみに用いられるもので、一般の兵士がおいそれと入れるものではない。当然他の要員が触れる機会も限られており、外界を隔てた見えざる箱庭と評するに相応しいものだった。

木製のテーブルを隔て、こちら側も頭数は3つ。一番右に座るこちらから見て、すぐ隣はスポーク隊長を担うアルヴィン少佐、そのさらに向うはフィンセントとなる。先ほど口火を開いたのは、言うまでも無くアルヴィン少佐だった。

基地司令側とスポーク隊、3対3の秘密の会合。その議題が何であるかは、両者の間に置かれた、上半身写真入りの4つの報告書で自ずと察せられる。

「超兵器を擁したラテイオとの攻防、突如参戦したサピンへの応戦、さらに旗色を左右させるゲベートへの対応。連鎖する戦いの中で、レクタは確実に疲弊を重ね、防衛力を落としていきます。ウステイオもサピン参戦以降防戦を余儀なくされ、今も戦線で一進一退を繰り返している状況です」

「…まあ、そうだな」

「このような戦況下で、優秀なパイロットの存在は何よりも貴重です。我々教導隊としても、それは十分承知の上。周辺基地の部隊を含めいくつものパイロットを見てきました。…その中でも、彼らは特筆に値します」

そこで少佐は言葉を区切り、代わってフィンセントが幾重にも重なった報告書を基地

司令の方へ押し出す。この基地へ来て以降、幾度となく共にミツシヨンに赴くようになった、あの4人——それぞれに対する所感と評価を纏めた、人事部報告の為の書類の写しである。作成は主にアルヴィン少佐が行ったが、内部の記載にはパウラも一枚噛んでおり、その内容は隅まで熟知していた。

そのうち一枚を手を取った司令は、その記述を舐め回すように読み進め、目を左右させている。その脳内では、おそらく思考を巡らせているに違いない。彼らに対する評価と、その先に少佐が何を考えているのかを。

「…ハルヴ隊、か。いやはや、彼らも有名になったものだな。先日のコール防空戦からこのかた、一躍時の人だ」

「まったくです。一時は基地にまでテレビ局や新聞記者が押し寄せて、大変な騒ぎでしたからな」

苦笑いする基地司令に、制服姿の副官が強張った笑顔で応じる。固まった空気を取り持つように笑いの一つでも加えようと思っただろうが、表情一つ崩さないアルヴィン少佐の前に、その笑いも徐々に消え行つて霧散した。ぼつが悪そうに副官が目伏せたのは言うまでもない。

とはいえ彼らの言う通り、ハルヴ隊の名がこの数日で一気に世間へも知れ渡つたのは事実である。



開戦の奇襲を生き延びた幸運な小隊、『テュールの剣』攻略の突破口を開いた特攻部隊。そんな他愛もない評判が、一躍レクタを背負うエース部隊へと変貌したのは、先日の首都防衛戦に端を発する。

卑劣にも無抵抗の都市を無差別攻撃したラティオ。そしてそれを救うべく颯爽と現れ、名の知れたラティオのエースもろとも敵機を瞬く間に撃墜した三日月の小隊。あつらえたようなそのストーリーに加え、上空で一部始終を実況したテレビ局の報道ヘリがいたものだから堪らない。

レクタは敗けない。エースパイロットの活躍とともに、依然レクタは健在なり。そんなメッセージと共に生中継で放映された彼らの活躍は、厭戦気分と劣勢で鬱屈していたレクタの空気を一挙に吹き飛ばした。意図せずして反撃の旗手となり、負けざるレクタの恰好の象徴となった彼らに、翌日から取材が殺到したのは当然の帰結と言うべきだろう。

もつともパウラに言わせれば、今回のコール上空における活躍は、かねてよりその片鱗を見せて来たハルヴ隊の成長を表す一端に過ぎない。

そもそもロベルト・ペーテルスの技量こそ際立っていたものの、開戦当初の彼らは、確かに一般部隊の域を出るもので無かった。それが開戦後の劣勢を生き延び、数多の戦闘を経るにつれて着実に技量を高めていき、結果として戦闘そのものを左右する存在たる

に至った。『テュールの剣』制圧における突破力、円卓上空の戦闘における空戦技術、そして『三色旗（パンディエーラ・トリコロリー）』との戦いで見せた咄嗟の機転。それらを思い返す度に、パウラは彼らの日進月歩の進歩に思わず舌を巻く思いを抱いていた。この点口調こそ辛辣ながら、その実パウラこそが、彼らの成長を間近で評価してきたと言つていい。

エリク・ボルスト。

中でも、彼の成長は目覚ましかつた。当初は技術にも指揮にも不足の目立つ一般的な士官だった彼が、今や小隊を支える2番機としての地位も確立している。殊に空戦時の戦術的な発想や着眼点は目を瞠るものがあり、時としてその着想は、絶望的な危機さえも突破してきた。天性のものが開花した、というだけではない。おそらく彼を助け支える仲間の存在、そして何より隊長たるロベルトの薫陶と指導があつてこそ、今のあの姿があるのだろう。それを考えれば、エース部隊として周囲から祭り上げられたハルヴ隊同様、エリクは周囲の助けあつて形作られたエースパイロットと言つていい。

だが、それを思うと同時に、心に渦巻くこの複雑な気持ちは何なのだろう。エリク個人へ向かう、何やら熱を帯びたような、それでいて大樹に添うような不思議な思い。そして同時に、彼らの公としての立場であるハルヴ隊に対する思いとこれからの処遇。さまざまな理性と感情が織り交ざったモザイク模様の心の内は、当の本人のパウラでさえ

一刀両断に説明はつかなかった。

「ともあれ、彼らだけではレクタの空全ては護れません。彼らがその力を余すところなく發揮するには、相応しい環境が必要です。戦力の分散は各個撃破の結果を招く——それは、数多の過去の戦いが証明しています」

「それは分かっている。しかし、同盟の盟主であるオーシアは破竹の快進撃と言うではないか。オーシアがユークトバニアを圧倒すれば、ユーク同盟側のラテイオはもはや手も足も出まい。サピンとゲベートにしたところで、オーシアの戦力に余裕ができれば、敢えてオーシアと事を構えようとはしないだろう。徒に現状を変えずとも、しばらく耐えれば戦局は再びこちらに傾いて来る」

「聞けば、オーシア軍はユークトバニアの虎の子である潜水空母の2番艦をも撃沈したという話。この調子ならば、オーシアの勝利も時間の問題では？」

「推測と仮定に基づく結論は無意味です。ユークトバニアは広く、首都シーニグラードに至るにはジラーチ砂漠の航空基地やクルイーク要塞といった要衝も控えています。長期戦の可能性も否めない以上、レクタはレクタで対策を講じる必要があります」

意見を真正面から否定され、司令と副官が同様に苦虫を噛み潰す。もつとも、これはアルヴィン少佐の発言が正論だろう。事実に基づいておりこそすれ、二人の観測は樂觀的に過ぎる。

目下、確かに同盟国オーシアのユークトバニア本土侵攻は破竹の快進撃である。

11月1日にユークトバニア東端のバストーク半島へ上陸したオーシア軍は、航空部隊と連携した電撃作戦でユーク東部の防衛線を次々と突破。長距離ミサイルでオーシア軍の足止めを行っていた戦闘潜水空母『リムフアクシ』もユーク北方アネア大陸のラズグリーズ海峡に沈み、積極攻勢に入ったオーシア軍はユーク中部に迫る勢いを見せていた。

聞けば、件の『リムフアクシ』を撃沈したのは、かつて同型艦『シンフアクシ』を撃沈したのと同じ、オーシア西端サンド島の航空部隊だという。犬のエンブレムを施した4機のF-14D『スーパートムキャット』の雄姿は、母国オーシアのみならず同盟国のメディアでも連日取り上げられ、オーシアを牽引するエース部隊の名を欲しのままにしていた。

だが、たかだか一つの兵器だけで戦況は動かないのもまた事実である。少佐の言う通りユークトバニアは世界一の領土面積を誇る大国であり、首都シーニグラードに至るまでには森林や砂漠など、多様な環境が待ち構えている。いくら軍事的な強国であるオーシアとはいえ、同じ強国のユークトバニア本土内での交戦は、予想以上にその物資も人員も消耗させる。いくらエースパイロット部隊であるサンド島部隊といえども、その大きな流れには抗えないに違いない。たとえその活躍が、母国を潰し合いへと進ませるこ

とを知っていたとしても。

彼らもまた、周囲に祭り上げられ、戦いに向かう母国の象徴となった者たちなのだろうか。そして、その素顔は、思いはどのようなものなのだろうか。パウラの心の中で、その姿は一瞬ハルヴ隊と重なり、消えた。

「…アルヴィン少佐、回りくどい話は止めて頂きたい。先に結論を伺おうではないか」  
「かねてより幕僚本部より打診があった、新防衛体系の件です。新設される航空部隊の要員に、我々教導隊としてはハルヴ隊の4名を推薦したく考えています。つきましては、その了解を頂きたい」

「……各地より優れたパイロットを選抜し、一拠点に戦力を集中する…例のエースパイロット部隊構想か。歴史上にも例がない訳では無い。その方針には大いに賛同するが…我が基地として不安なのは、その後だ。優秀な戦力を引き抜かれた後、我が基地に限らず戦力的な空隙ができはしないかね？」

話としては先刻承知だったのだろう、基地司令は賛同の意を示しつつ、今度は露骨に顔を顰めて見せた。言葉とは裏腹に、その態度は明らかに納得していない様子である。

新防衛体系——すなわち、レクタ全土からエースパイロットを選抜し、機材人員を集中的に投入して、一大精鋭部隊を創設する計画である。戦力を集中的に投入して効果的な戦果を上げるという着想は何もレクタ独自のものではなく、半世紀前の第二次オーシ

ア戦争の際には複数の国が実際にそのような部隊を整備し、大きな戦果を上げた。いち早くジェット戦闘機を導入しエースパイロットに優先配備したベルカや、集中配備した最新鋭機とレーダーや偵察機の組み合わせで有機的な迎撃戦闘を行ったノースポイントのような事例は、その先蹤を成すものと言えるだろう。

当然ながら戦力集中の代償として、他の地域の防衛力は低下することにもなる。それを踏まえれば、基地司令の心配も領ける事ではあつた。

「ご心配の事、お察しします。その点も考慮し、幕僚本部は一時的に教導隊の任を解除、戦闘部隊として全て当該部隊へ編入することを決定しました。そのため、各航空基地からの戦力抽出は必要最低限に留めることになります。また、戦力抽出を行った各基地に対しても、担当空域の戦況を考慮し相応の補充部隊を回すこととしています。どうかご安心下さい」

「むう……」

「既に他の基地司令からは了解を頂いております。どうかご勘案頂きますよう」

言葉こそ丁寧だが、その実アルヴィン少佐の発言は、『つべこべ言わず幕僚本部の言う事を聞け』と言うに等しい。その口ぶりに加え、ゆるゆると袋の口を絞っていくような論理の進め方に、基地司令の眉間の皺は見る見る深くなつてゆく。

もつとも、今回の協議にしても、実際は形式的なそのの枠を出るものではない。既に

機材調達を含めて部隊創設へと事態は動いている段階であり、今更地方基地司令の一中佐の意向で方針が左右されることなどありはしないのである。それを知ってか知らずか、未だに渋面を見せる基地司令は滑稽という他ない。

事実、創設部隊の配備機となるF-35『ライトニングII』——その空軍型である所のA型の調達に向けたオースシアとの交渉は、既に大詰めを迎えつつある。次期主力機『グリペン』の調達直後で戦費捻出に窮乏するレクタの国情もあり、機数はさほど確保はできないだろうが、それでも周辺諸国に先んじて第5世代機を装備できることのメリツトは極めて大きい。おそらく、今頃同盟国ウステイオにおいても同様の交渉が進んでいる所だろう。折も良くオースシア国内ではF-35シリーズの量産が進んでいる所であり、時期としても背景としても、今がまさに絶好のタイミングと言う訳である。

「……………分かった、少佐。我がヘルメート空軍基地としても、レクタの危機は認識している。…ハルヴ隊の戦力抽出の件、了解しよう」

「ご配慮、痛み入ります。早速幕僚本部へ打診致しますので、数日の内には正式な辞令が届くでしょう。ハルヴ隊の各員には、私共から口頭で伝達します」

「ああ…頼む、少佐。…全く、戦時特例の昇任に、今度は部隊の配置換えか。彼らも慌ただしいことだな」

最後の言葉は、基地司令の精一杯の嫌味だったのだろう。辞令に次ぐ辞令続きで、彼

らの事務仕事は煩雑を重ねたに違いない。

そんなささやかな抗弁すら意に介さず、少佐は言葉を継いだ。その渦中である、祭り上げられた『エースパイロット』の面々へと、その思いを絡めて。

「…時に、ハルヴ隊は今どこに？」

\*\*\*\*\*

「……転属？新設されるエースパイロット部隊に。……俺達が？」

まったくもって想像しなかった言葉が、頭の上を通り過ぎていく。

あまりにも突然のその内容に、口はぼかんと開くも言葉は何一つ出ず。格納庫の喧騒も鼻を突く油の匂いも今や意識の外に消え、エリクは唐突にそう告げた相手——アルヴィン少佐の顔を見上げた。格納庫の外、庇を背にしたその姿は降り注ぐ光の逆光が激しく、その表情を窺い知ることはできない。

「そうだ、エリク大尉。この度新設されるエースパイロット部隊に、君たちを推薦させて貰った。正式な辞令は数日後になるかと思うが、ほぼ確定と思ってくれていい」

「流石だぜお前ら！人選に関しちや、誰一人異論は出なかつたよ。…そうそう、部隊再編で、今度は俺達も戦闘部隊…つまり、お前らと同じ部隊になる。そんな訳で、これからよろしくな！」

「……………」



事態を呑み込めないこちらを顧みず、淡々と続けるアルヴェイン少佐。そして喧騒を押しつけるような大声を出して喜色を浮かべるフィンセント曹長と、鉄面皮を崩さないパウラ。矢継ぎ早に降りかかるいくつもの情報に、エリクの脳裏はぐるぐる渦を巻いた。

落ち着け、整理しよう。

口内にそんな呟き一つ。エリクはぶるんぶるんと頭を振るい、しばしこの数日を内省した。

先日のコール防空戦の後、しばらくメディアからの取材責めに遭ったのが以降数日。意図せずして名が売れると同時に、軍部から戦時特例の昇任が言い渡されたのはつい一昨日のことだった。これを受けて自分は晴れて大尉となり、ロベルト隊長は少佐、ヴェルさんは准尉、クリスは軍曹と、それぞれ一段階級が昇ったことになる。この関係で隊長は慌ただしく佐官任官研修に赴いており今は不在で、短縮された日程下でもあと2日は帰って来る見込みはないとのこと。そして隊長不在では仕方がないと、傷ついた乗機『グリペンC』の整備の手伝いに勤しんでいたのが、つい今の今という状況であった。

そう。つまりは整備が終わり隊長さえ戻ってくれば、この基地から出撃する気満々だったのである。そんな中で、まさか部隊ごと転属という事態になろうとは、完全に想像の外にあつたと言っている。

そもそもからして、エースパイロット部隊なる仰々しい煽り文句がエリクにとって

重々しい。

精銳を集めたエースパイロット部隊を創設するというが、ロベルト隊長ならともかく、俺がそれに相応しい存在だろうか。確かにこれまで生き延び戦果を挙げては来たものの、それはロベルト隊長あつての話、それも大抵は機体も仲間もボロボロとなつた未での戦果である。第一、エースパイロット部隊と名を高々と上げた部隊に入つた所で、またいらぬプレッシャーを抱え込むだけではないのか。

正面から『エース』と称され嬉しくないといえば嘘になるが、事態に直面したエリクの正直な思いは、以上を簡潔に纏めれば『面倒くさい』——その一言だった。ついでに言えば、ウステイオのモリスツエフ基地から戻つたばかりだというのに、また引越しの荷造りをせねばならないという点で言つても面倒くさい。

「エース、パイロット、部隊……私たちが、エースパイロットだなんて……」

「なんと……我々がそのような部隊に招聘されるとは。隊長もこの場にいたら、さぞ驚かれたでしょうね」

「ね！ね！そうですよ！凄いいことですよ！隊長が戻つて来たらお祝いしないとい！」

そんなこちらのものぐさな内省もどこ吹く風、クリスは無邪気に喜んで満面の笑みを浮かべている。肩書が軍曹に変わったものの、これだけ落ち着きなく階級が似合わない軍曹も珍しいだろう。尉官の最上級たる大尉となつた自分も、見た目からどう見ても尉

官と言う風ではないヴィルさんを見ても、どこかちぐはぐな感じは否めなかった。

ともあれ、ようやく事態は呑み込んだ。どちらにせよ軍の辞令であれば、一兵士である自分ごときが異議を唱えた所で変わる訳もないだろう。もうこうなれば、『そういうこと』だと肚をくくるしかあるまい。…それに、二人は特に異存も無い様子。それならば、自分としても否やは無かった。

「とりあえず、了解しました。…で、転属はいつ?」

「明後日だ。戦況は今日明日を知れず、とにかく急ぐ。エリク大尉、ヴィルベルト准尉、クリステイナ軍曹。急いで引き継ぎ書の作成と荷物の取りまとめを行ってくれ」

「……………え」

「……………し、少佐。今…なんて?」

「引き継ぎ書の作成と荷物の取りまとめを…」

「違います、その前ですその前!」

「…? 明後日には転属、のくだりか?」

「……………あ……………さ、って…」

間、二拍。

これまでも無茶な命令や指示は数多くあったが、今度こそ文字通り、ハルヴ隊の3人は絶句した。

幸い隊長不在につき出撃の割り当ては無いものの、それを差し引いても煩雑な事務や荷造りは2日で足りるか怪しい所である。何よりモリスツエフ引き払いの時と違い、今回はゴミ部屋の主たるロベルト隊長の荷物まで整理しなければならぬ以上、間に合うかどうかは極めて微妙——いや、もうこの際明言してしまえば無理と言わざるを得ない。基地職員から『魔窟』とも称される隊長の居室から必要なものだけ選別しようとするれば、2日どころか1週間仕事になること請け合いだらう。

「無理は承知だが、レクタの情勢も厳しく、融通が利きにくい状況なのだ。悪いが、2日でなんとか準備を整えてくれ。予定では明後日の夜半より準備を始め、翌3時ごろに出発、夜陰に乗じて移動する。ロベルト少佐には、こちらから伝達しておく」

「は……あ……了解、です」

「……………あ……無理そうだったら声かけてくれな。片付けくらいなら手エ貸せるから」  
「伝達は以上だ。3人とも、遅れず準備をしておくよう」

エリクとクリス、若人二人はこれから訪れるであろう苦難——魔窟探索に思いを馳せ、肩を落としてがつくりと項垂れる。引継ぎの苦労やエースという呼び名以上に、今一番辛い事といえば片付け作業に他ならない。それを思うと、今から既に疲労を覚えそうだった。

用事を全て言い終えたらしく、アルヴィン少佐は一瞥をくれたのち、司令棟の方へと

踵を返していく、フィンセント曹長も心配そうにこちらを伺いながらその後が続いて行つた。残るのは、溜息を吐き出すエリクとクリス、全てを察して肩をぼんと叩くヴェルさん。…そして、その様を見下ろす、パウラ一人。

「…何だよ」

「……」

何か文句の一つでも言うかと思つたが、その唇は結ばれたまま。僅かに口を開けたかと思えば、それも言葉にならず閉じていく。一体何の積りなのか、首をひねつたエリクは理解に窮した。今に始まつた事ではないのだが、その仕草は今まで見たことがない。まさか罵倒の言葉が今日に限つて思いつかない訳でもあるまいに。

「…用が無いなら放つておいてくれよ。俺達急に忙しく…」

「…私は、反対した」

「へ？」

「件の精鋭部隊に、ハルヴ隊全員を推薦することに。ロベルト少佐だけで十分だと。…貴方たちに、エースパイロットの名は背負えない」

「な…！そ、そんな事言う為だけにわざわざ残つたんですか!?!…！最低！最低よ、あなたは！」

「…パウラ」

ようやく口を開くパウラ、そしてそれに噛みつくクリス。いつもの光景だが、今回はクリスの反応が当然だろう。わざわざ一人残って、罵倒にも近い言葉を浴びせたのだから。案外口を開かなかつたのも、先の読みが当たっていたのかもしれない。

クリスの頭にぽふん、と掌を被せながら、エリクはパウラに目を向けた。パウラの真意は分からないが——あるいはただ単に釘を刺しただけかもしれないが——、それに対するエリクの答えを、真正面から伝えるために。

「俺にとつて、エースパイロットっていう肩書なんて、正直重荷でしかない。いろんな期待だけじゃなく国さえも背負って、翼を重たくしたまま飛ばなけりやならないしな。できることならここにずっといたいくらいだ」

「……」

「けど、そうなるって皆とは離れ離れになっちゃう。それだけは、俺は嫌なんだ。……だから、俺は行く。エースになりたいからでも、エースになつたからでもない。ロベルト隊長やクリス、ヴィルさん……アルヴィン少佐に、フィンセント曹長。……それに、お前も。皆が行くから、俺も行く」

交わつた視線が不意に揺れ、パウラの唇が僅かに開く。それは何かを紡ぎかけ、言葉を探しあぐねたかのように惑い……それきり、ぷい、と視線は外された。ヴィルさんともクリスとも視線を合わせず、パウラはそのまま踵を返し、アルヴィン少佐らが向かつた

方向へ踵を返している。

「……………言いたい事は言った」

「…ならいい。今度は一緒の部隊だ、またよろしく頼むな」

「つて、私は言いたい事言ってます！ほんとにまたパウラ准尉と同じ部隊なんですか!? もう…」

「部下の教育はしつかりしておくこと」

「あ、あなたに言われたくないですよ！この不愛想！ドS！貧乳！無表情！あとえつと…貧乳！」

結局、その後もこちらに視線を合わせることに無のまま、パウラは背を向け離れて行つた。

パウラの言葉に真つ向から向かう形になった訳だが、機嫌を損ねてしまっただろう。…それでも、エリクは思いの丈を、彼なりの言葉で伝えた積りだった。正直な所ではエースの名も重荷に過ぎず、正直面倒でもあるが、それでも行く理由とは…単純に、皆と離れたくないから、というものに過ぎない。そりやいずれは異動もあるだろうし、間違えれば死ぬことだってあるかもしれない。それでも、その時までには一緒にいたい。我ながら単純なものだが、それが偽らざる本心だった。

エリクに首根っこを掴まれたクリスは、依然パウラの背中へ思いつく限りの悪口を飛

ばしている。その内容が中学生レベルなのが、何とも悲しい限りではあるが。

栗色の髪を揺らして吠えかけるその様は、まるで茶色い子犬のようにも見えた。

\*\*\*\*\*

それから2日後、夕刻。朱に染まる滑走路の傍ら、着陸した輸送機の脇に、いくつかの人影を認められる。

小太りの身体を揺らして何事か喚きたてるのは、佐官研修より帰ったばかりのロベルト。そしてそれに応じるのはエリクとフィンセント、ヴィルベルトと言う面々である。

「…ハア!? 転属!? しかもこの深夜に!? …き、聞いてねえぞ俺ア!!」

「どうも情報がどっかで行き違ったみてえだな…。まあ聞いてたら聞いてたで、部屋の荷物整理に向うからいろいろ口出してたろうし、スムーズに収まった分却ってよかったじゃねえか」

「全くです…:はあ。とつても言われる通り選別してたらキリがないですから、適当に俺達で整理整頓しておきましたから。感謝して下さいいよ?」

荷物類を積み込む列を背景に、男達のやりとりは続く。どうも転属の話は初耳だったようで、ロベルト隊長にしてみれば驚きも無理ないことだろう。首都コールが復旧の真っただ中であり混乱の坩堝にある以上、情報の錯綜も致し方ない世情と言ってしまうばそうだった。



幸い：と言うべきか、隊長の不在をいいことに荷物類はことごとく仕事人クリスの手によつてぎつくりと整理。見た感じ必要そうなもの以外は全部処分という、大錠どころか死神の鎌で断ち切るような大胆な処断で、その整理を終えることに成功したのだった。こう言うのと酷だが、隊長の指示の下やつていければ、今頃半分も終わつていなかつたに違いない。

呐喊で行つた『グリペン』の整備も何とか終わり、今や出発の時を待つばかり。整備班の腕前に加え、『グリペン』の整備性の高さの賜物だろう。予定通りいけば日が変わる前に輸送機は出発し、深夜になつてからエリク達も各々の搭乗機で移動することになる。

「いやいやいや冗談だろー！こちとら整理しておくもんとか先立つモンとかあるんだよ！知り合いに挨拶だつてしときたいし：！そうだ、今からでも司令にかけあつて、挨拶回りと引き継ぎ書作りに2日ほど貰つてくる！持ち物の整理もしたいしな！」

「今更無茶ですよ、ロベルト隊長。今度の休暇に來ればいいではありませんか」

「第一、整理する荷物ももう積み込んでますよ。あ、引き継ぎ書は可能な限り俺が作つておいたので、後でチェックお願いします」

「積み込んだ、つて：おいちよつと待て。積荷に俺のお気に入りのビンテージソファあつたか!?あと『ROLLING THUNDER』のポスターとピンバッジコレク

シヨンと秘蔵のエロDVDは!？」

シヨックで顔を覆うも一瞬、がば、と顔を跳ね上げた隊長は、縋るように3人を見やる。心持ち声が潤んでいるのは、多分気のせいではないだろう。

3人、顔を見合わせることに一瞬。同時に息を付き、口を開いたのはエリックだった。

「綿のはみ出たソファと、セロハンテープの補修だらけのポスターと、飲料のおまけのバツジと、ベッドの下のアレでしたら……」

親指を立て、エリックはくい、と後方を指す。

ロベルト隊長の、縋るような目の先。そこには埃まみれのクリスの背中と、手を擦らせながら周りに集う複数の人影。そしてその中央で炎を上げる、積み上がった雑多な品々の姿があった。どうやら基地の不用品の処分にかこつけて引き取り手が無かったものを全部放り込んだらしく、よくよく見ると火の脇の方にはアルミホイルに包まれたジャガイモらしきものも転がっている。多分、じゃがバターとして夕食のおかずのおまけに供されるものであろう。

色々といまぜになつた感情を吐き出すように、隊長は太陽に吠えた。

吠えた。

そう、その気迫に炎が押され、陽炎さながら揺らぐほどに。あるいは『D・V・D イイイイ!!』という男の魂の叫びが、風をも揺らすほどに。

笑い声、燃え立つ炎の熱。

肌でそれらを感じながら、エリクは東の空を振り返る。

既に夜色が迫る東の山の端。そこには『グリペン』の翼に刻んだものと同じ、真珠色の月が顔を出し始めていた。

## 第20話 ‘灰色’の亡霊

星明り僅かな暗い空の下で、西に傾いた月が朧に雲を照らし上げる。

事前の予報より早く気圧配置が変わったのだろう、眼下の山脈は既に雲を纏い、その頂すらも靄に覆われて判然としない。現高度にして3000と少し、既にこの高度にすら雲が立ち込め始め、視界は時を追うごとに悪くなっている。東の空が微かに白み始め、日の出が近いと窺い知れるのが、今は幾分でも救いだった。ただでさえ視界の悪い夜の雲間飛行と比べれば、いくらかでも太陽が出ていてくれた方がありがたい。

《スポーク1、『カルクーン』より各機、飛行行程は順調に消化中。ラテイオ軍機の接近はなし。気楽に行こうぜ》

先頭を飛ぶスポーク1——アルヴィン少佐機の後席から、フィンセント曹長が通信を飛ばす。

暗いコクピットの中、蛍光に彩られたレーダーサイトに浮かぶのは、わずかに機影が6つ。先の曹長の言葉を裏付けるように、乗機『グリペンC』の索敵が及ぶ範囲内には、ラテイオやサピンといった敵国の機影は一切見えない。

暗闇の中に浮かぶちかちかとした幾つもの蛍光は、見えやすいものの大層目に悪い。

液晶板の光点を確かめるのもそこそこに、エリクはレーザーから顔を上げ、暗黒に目を慣らすようにしばし周囲を見回した。

目の前には、赤と緑の翼端灯が一つずつ、さらに遙か隔てて先に二つ。振り返れば、左側にも2機分の翼端灯が連なっており、先のレーザー上の配置そのままに機体が並んでいるのが窺い知れる。航跡記録を信じるなら、現在位置はラティオ西郡、ウステイオとの国境を形成する山脈の端に至る直前の辺りと言う所だろう。言つてしまえば敵国の領土上空ではあるが、戦争序盤の余勢を借り、ラティオ西郡は未だにレクタとウステイオの勢力圏内にある。航行予定を俯瞰すれば、エリク達はレクタ中郡ヘルメート基地を離陸したのち真つすぐ西へと向かいラティオ中郡に出た後、針路を変えて北上。ウステイオ国境沿いに飛行してレクタ西郡に入り、目指す新設基地へと向かうことになる。

数日前に降つて湧いた、新設されるエースパイロット部隊への異動。すなわち本来であれば国内の基地に移動するだけの事なのだが、わざわざこのような面倒なルートを取るのも不可解といえそうである。機密保持にしても、仮にも敵国上空を経由するリスクはある訳であり、万全が確保されているという訳ではない。先日の首都コール襲撃を顧みれば、レクタ国内でもはや安全ではないためとも言えるだろうが、それでもラティオに加えサピンの動向にまで気を配らなければならぬ今の状況は飛ぶ方にとつてみれば面倒でもある。

まったく、何を考えているのやら。

口中に呟き一つ、エリクは不満を嘔み潰す。こればかりは、命令だからと割り切るほか無かった。

さて、飛行行程の半分ほどを消化し、編隊はじきにウステイオ国境付近に達する頃合である。巡航速度を維持していたため増槽の残量はまだ十分、武装も万が一のための空対空ミサイル<sup>A</sup>2基<sup>M</sup>のみのため、軽い機体は大層調子がいい。先日の『パンディエーラ・トリコロリー』との空戦で受けた損傷も突貫で修理され、今の所重大な異変は見られなかった。この調子なら、幾分余裕を持つて新たな赴任先には到着できるに違いない。整備が容易い『グリペン』の特性と整備士たちの奮闘に、今は感謝の思いだった。

「……ん？」

その時だった。

立ち込めた雲が先行するスポーク隊の姿を遮った一瞬、ロベルト大尉：もとい少佐の『グリペンC』が不意に機体をバンクさせたのだ。針路はそのまま、機体だけを左右に揺らすその操作は、多くの場合は有視界で何らかの注意を促したり、あるいは通信封鎖下で意志疎通を図るものである。だが、たかだか眼前の雲に対してバンクで注意を促す必要は無く、念のため目を走らせたレーダー上にも特に警戒を要するものは認められない。何より、先程のフィンセント曹長の通信もあつた通り、今は通信封鎖下ではない。

つまり、全体への通信を介さずして、何か伝えたいことがある。

頭の上に疑問符一つ、エリクは通信回線の周波数ダイアルを回し、小隊内用の周波数へと合わせた。これまでも何度か使ってきたものだが、大抵は哨戒時の暇な時に雑談に用いる程度であり、戦況が逼迫した最近ではめっきり使わなくなっていたものである。周波数が異なる回線なので、周囲はおろかスポーク隊に聞かれる心配も無い。

戦争が始まる前、平時はこの回線で愚痴を言い合ったり冗談を飛ばしたり、緊張感を持ちつつも適度に楽しく飛んでいたものである。出発前に散々愚痴と文句を言っていた隊長のこと、大方この場でも溜まりかねて何かしら吐き出す積りなのだろう。長らく根を張った基地から、上の声一つで植え替えられるのだ、自分より遥かに長く基地に在籍した隊長がそう思っても不思議はない。

ざ、ざ、と雑音が混じる通信回線から、隊長の声が零れ始める。

だが、その内容は、楽観に満ちたエリクの想像を遥かに超えたものだった。

《エリク、ヴィルさん、クリス。聞こえるか》

「こちらハルヴ2、感度良好。久々ですねこの回線。どうしました?」

《ハルヴ3、同じく。確かに、珍しいですね、隊長》

《えっと…確かこれ、で。…あつ、はい!ハルヴ4聞こえます!》

《よしよし。…んじや、単刀直入に言うぞ。——俺あこれからレクタを脱走してサピン

に亡命する。付いて来ないか?》

「……………え?」

脱走、亡命、サピン。予想だにできなかった言葉の羅列に、そしてその中身に、エリクの頭は硬直した。

『ロベルト・ペーテルスには気を付けた方がいい』。

『もし大尉がサピンや周辺国内の同志に情報を漏らしているなら、これからの戦いは一層辛くなる。獅子身中の虫を飼って勝てるほど、戦争は甘くない』。

脳裏に、パウラの声が蘇る。頭が巡り始め、先の言葉と現実とを結びつける。

ロベルト少佐の来歴への疑問、裏での言動、そして情勢と現実の裏付け。それらを基に推測を重ね、パウラは少佐を『周辺諸国に復讐を誓うベルカ残党の一味』と断じ、常々エリクにそれを告げて来た。少佐に恩義を抱くエリクにとっては信じるに値しない諷言の類に他ならなかったが、パウラが様々な証拠を以て告げるにつけ、その奥底で疑念が生じなかつたかと言えば嘘にはなる。だがその度に、エリクは半ば縋るように少佐を信じ、その疑惑を心の奥深くに埋めて否定して来たのだ。

——だが、それを。

必死に埋めて来た疑惑を、裏切りを裏付けるようなその言葉を、あろうことかロベルト隊長自身の口から聞くことになる。信頼をあつけらかんと裏切る言葉を、ここで



聞くことになるとは。

足元が崩れるような錯覚に囚われ、言葉にできない黒い感情が心の中でのたうち回る。

ロベルト隊長機まで、距離400。無意識のうちに指を動かしていたのだろう、機銃の安全装置は既に解除されている。至近と言っているこの距離である、隊長が本気で脱走を企てれば、その瞬間に機銃で撃ち抜ける自信はあった。

今まで築いてきた信頼が、今も消えかねているその感情が、指を止めなければ。

《え……な、……何、言ってるんですか、隊長。や、やだなあ、やめて下さいよ……こんな時に冗談なんて》

《悪いなクリス、俺も尻に火が着いちまつてるんでね、大マジなんだよ。時間も無い。……だからよ、その銃下ろしてくれるか、エリク》

「……裏切っていた、って事ですか。レクタも、俺達の事も。ベルカ残党として、諸国に復讐するために」

《……………》

「答えて下さい、隊長!!」

信じたい。

最後の一抹の思いを込めて、エリクは叫んだ。疑惑と信頼の、責務と感情のせめぎあ

いの中で、疑惑へと傾きそうな心を信頼へと傾けたいがために。たとえズボラでも適当でも、人として好きなロベルト隊長の背中を、この手で撃ちたくないがために。

照準を合わせ、引き金にかけた指とは裏腹に、エリクは信ずるための言葉の腕を、懸命に隊長へと伸ばした。

《パウラの嬢ちゃんが吹き込んだらしいな。…真実と理由。それを話したら、見逃してくれるかね?》

「…内容次第です」

《…ははっ、しつかり者に成長してくれたモンだ。時間が無いってのによ。…いいだろ。長いんで適当に端折るから、よーく聞けよ》

隊長の苦笑いが、嬉しくもどこか寂しそうに響く。続く口調は普段通りの軽いものだが、その響きは低く重く、普段の明るい様子は感じ取るべくもない。先日の『円卓』における空戦の時と同じ、どっしりと構えた凄みのあるその声は、まさに本気のものだと知れる。

ごく、り。

重い吐息を呑み込み、エリクはその時を待った。

ロベルト隊長の口が、そして真相の扉が開かれるのを。

《まず先に断っておく。俺はベルカ残党の復讐者じゃあない。確かにベルカ出身で、い

くつもの嘘を重ねて今に至るが、お前たちを裏切ろうと思ったことも無い。あくまで俺自身に危険が迫ったから、それに備えての亡命だつてことは信じてくれ」

「……………」

《…最初に白状しよう。俺は元レクタ軍でも、ロベルト・ペーテルスつて名前でもない。ベルカ戦争で戦死した、風貌の似た独身の軍人の戸籍を、後で入手したものだ》

《な…!?…なんですつて!?隊長が…偽名!?》

《順を追つて説明するぞ。15年前——ベルカ戦争の時、俺はベルカ空軍のとある航空部隊に所属してた。…もつともその部隊は『円卓』で例の『鬼神』相手に全滅して、俺と隊長以外は全員死んじまったがな。お蔭で今もスーデントール住まいの隊長とは愚痴言い合う仲よ。しがないバーガー店の雇われ店長でな、俺一人しか部隊で生き残つてないんで、他に愚痴のやり場がないんだとさ》

のつけからの嘘の告白、そしてその出自の暴露。息を呑み衝撃を受けたエリクだったが、その中で一つ二つ、繋がった事もあった。

以前パウラが言っていた、『隊長が時折電話しているスーデントールの人間』とは、おそらくこの元隊長のことだったのだ。また、ロベルト隊長が先代『円卓の鬼神』ことガラム隊を知っているらしい点に対しても、実際にベルカ空軍として矛を交えていたとしたら納得がいく。先日の『円卓』制空戦での言葉の端々も、時折見せる空戦指揮の冴え

も、高い練度知られた元ベルカ公国空軍出身と考えれば領けるものだった。

《と、話が逸れちまったな。…ともあれ、ベルカは敗けて軍は縮小し、俺は軍を辞める羽目になった。その時、隊長の誘いに乗って仕事務めでもしてればこうはならなかったんだろうが…たぶん、空で飛ぶことを無意識に求めてたんだろうな。隊長からの誘いを断つて、俺は東部小国解放義勇兵として諸国を転々とした後、アヴァロンダムでの空戦で行方不明扱いになってしまったレクタ軍人の戸籍を入手した。それでもって、表向き軍に復帰した体ていにしてまんまとすり替わったって訳さ》

「なんだって、わざわざそんな事を…」

《さっきも言ったろ？空で飛ぶことを無意識に求めたって。…空に魅せられた飛行機乗りってのはな、どうしようもなく空を求め続けるのさ。軍縮が進むベルカじゃ今更再雇用は望めない、かといって傭兵で稼ぐには元手が無い。そんな時に、またパイロットとして飛べるチャンスを手に入れたんだ。危ない橋とは分かったが、そうせずにはいられなかったのさ》

疑惑が、まるで陽に照らされた氷のように徐々に融けてゆく。

つまり、隊長が出自を偽り、別人になりすましてレクタ空軍に入ったのも、その動機は『空で飛びたかったから』という純粹なものに過ぎなかったのだ。傍から見れば子供っぽい、単純に過ぎると謗りも受けそうだが、飛行機乗りにとっては、それは至上命

題と言つていい渴望とさえ評せるものである。もし自分が同じ立場だったら、果たしてどうしていたか。それを考えれば、隊長の行為は少なくとも自分にとって、何ら指弾するような点は無かった。

だが、残るは氷の中心。根本たる疑念である。

「…しかし、納得できません。それなら何で、今更脱走するなんて言うんですか？」

《それよ。エリクお前、さつき言つてたよな。ベルカ残党による復讐がなんたらつて。それもアレか、嬢ちゃんの話か？》

「……はい。ベルカ残党としてサピンやラテイオと通じた隊長が、情報を漏らしたり戦争を煽っている、と」

《そうか……。…おそらくはな、それも真実だ》

「…どういふ事です？」

《素性を偽つてレクタに入ったのは、実は俺だけじゃなかったつて事さ。俺とは別口でレクタに入り込んだベルカ残党が、裏で戦争継続を煽っている。そう考えりゃ、いろいろと納得できるだろ？》

一度融けた氷が、別の所で再び固まり始める。それも鋭く硬い、別の何かとなつて。愚にも付かないそんな印象を抱きながら、エリクは改めてこの戦争を顧みた。

言われてみれば、この戦争では不可解なことがいくつか起きている。例えばサピンに

よる幹線道路空爆の際に、主要な道路のみをサピンが知り得た理由は何だったのか。また、『三色旗』がレクタの防衛網を縫うように進み、首都コールへ到達できたのは何故だったのか。そしてそもそも戦争の発端となった、ラテイオ軍機に対する出自不明のミサイルは、一体誰が放ったのか。その全てが、まるでレクタを——周辺諸国を戦争に引きずり込み、それを長引かせんとする意志があるようではないか。

戦争の発端となった、ウステイオ・ラテイオとの国境上空。あの戦場にいた者といえ

ば。

「…誰なんです、そのベルカ残党って」

《俺も首根っこは掴んじやいない…が、その尻尾は捕まえてある。元々ベルカにいた時に、戦術くらいは知ってたからな。隊長にも当時の顔写真を頼んでな、この間の研修の時に近くに寄ったんで、それを貰って確証が取れた。——俺が脱走を急いだのは、それだ。今日このまま赴任先に着けば、俺は確実に殺される。よく見知った連中にな》

隊長の言葉が進むにつれ、エリクの中でもその『答え』が形作られていき、同時に身を震わせる戦慄へと変わってゆく。

特異な戦術を持ち、発端の戦場にいた、身近な人物——否、部隊といえば。

「まさか…!!」

《ほう、よく調べ上げたものだ…ハルヴー》

電子音。接近警報。

唐突に鳴り響いたその出所を確かめる暇も無く、エリクは咄嗟に操縦桿を右へと引いた。

方位、真正面。こちらの編隊を切り裂くように、デルタ翼の機体が2機、機銃を放ちながら中央を突っ切ってゆく。

エリクは、その疑惑が確信へと変わり、衝撃すら忘れて息を呑んだ。

真正面から襲い掛かり、こちらの後方へと抜けた、大型のカナード翼を持ったデルタ翼の機影は。緑を主体に、不規則なツートンカラーに染まったダズル迷彩は。——そしてレーダー上の識別信号と、何よりその声は。

《ち、一手遅れたな。…ベルカ残党は、やつぱりアンタか。アルヴィン少佐…いや、スポーク隊の諸君》

スポーク隊の『グリペン』。

その確信を待つまでもなく、隊長によって突き付けられた言葉に、エリクは胸を押し潰される感覚に苛まれた。いくつもの戦場を越え、信頼を覚えた無二の仲間。そう信じた相手が、実はレクタを裏切り戦争を扇動する裏切り者だったのだ。

反射的に増槽を捨て、エリクは右に引いていた操縦桿を、そのまま手前へと向ける。右旋回の弧を描いた翼は、明るくなり始めた東の空の光を受け、微かに灰色に浮かび始

めていた。

《な……いきなり何を！ハルヴ3よりスポーク隊、こちらは味方です！》

《嘘……、嘘ですよね……!?そうでしょ、アルヴィン少佐！》

「……どうして……！アルヴィン少佐、フィンセント曹長……パウラ!!」

《……》

《真相を知られた以上、3人には死んで貰わなければならない。だが、君だけは別だ、ロベルト少佐。練度を重んじるベルカ空軍の中でも名を馳せ、エースパイロット部隊の一員を務めた君の技量は、我らにも必要なものだ》

《……へっ、なかなかどうして。そっちこそ、よく調べ上げたモンじゃないですか。うまいこと隠しおさせた積りでしたが》

《我々の戦術で君が感づいたように、君の戦術もまた当時のままだ。各国の同志には、君の顔を知っていた者もいる。……共に来い、ロベルト大尉。——いや、敢えてこう呼ぼう。『グリユーン2』——ファビアン・ロスト。ベルカに仇なす者たちへの復讐の為、君の力が必要だ》

ファビアン・ロスト——それが、ロベルト隊長の本名。門外漢には窺い知れない情報や名が飛び交う中で、それだけがエリクの心に音を残してゆく。元より、予期せぬ事態の急転に混乱する頭では、それ以外の情報など枝葉に過ぎなかった。



無感情に『殺す』と言つて見せたアルヴィン少佐。そして明確な殺意を以て、こちらの周囲を大回りに旋回する緑の『グリペン』。それが冗談でも、まして単なる恫喝でもないことは主翼に穿たれた一穴の弾痕が無言のうちに物語っている。アルヴィン少佐は、  
…そして、パウラは。確かにこちらを殺す積りなのだ。

なぜ、パウラが『ベルカ残党』という真相に迫る言葉を仄めかしてまで、度々ロベルト隊長への疑念を煽つたのか。そして、謀殺の絶好の機会であるこの移動に、最後まで反対していたのは何故なのか。もはやそんな疑惑を顧みる余裕も無く、エリクは絶望の目を緑のダズル迷彩に彩られた『グリペンC』へと向け続けた。裏切りと偽りの色に染まった、憤ろしいほどに鮮やかなその主翼へと。

今までかけられた言葉も、信頼も、そして思いも。その全てが偽りだったというのか。  
《そんな事言つて、後で囲い込んで俺も殺す肚でしょう？真相を知つた者つていう不確定要素を生かしておくほど、あんたたちは甘くはない筈だ》

《そんなことは断じてない。オーシアもユークトバニアも、全てを滅ぼす為の力は既に我らの手中にある。残るは、君のような空を制する力だけなのだ。誓おう。君の安全は、私が保障する》

《誇りを無くして、なりふり構わない復讐者に落ちぶれた男の誓いなんてのアね、ちり紙ほどの信用も無いんですよ。それにたとえ俺がついて行つた所で、こいつらは生かし

ちやおかないんでしょ？第一、復讐とか恨みとか、そんな重つ苦しいモノ載せて飛んだ所で、楽しくもなんともない。そんなものは、俺の求める空じゃあないんですよ」

《…ほう》

《そんな訳で、ロベルト・ペーテルスとしてお答えしますよ、アルヴィン少佐。『クソ喰らえ』ってね》

ぎ、り。

通信の中に漏れる、誰かが歯を食いしばる音。それきり声は途切れ、数分にも思われる重々しいほどの沈黙が辺りを包んだ。実際には30秒にも満たない時間だったのだろうが、まるでその重さに時までも引き延ばされたかのように、それはじりじりするほどに長い。

徐々に明るみを帯びる空、曇天から夜色が引き始め灰色に染まってゆく天地。

持ち前の砕け切った口調で啖呵を切った隊長の——ファビアン・ロストという聞き慣れない名ではなく、ロベルト・ペーテルスという男の機体が、その灰色を切るように翼を翻している。明るみの下、その翼やエンジンカウルに、既にいくつも弾痕が刻まれているのに、エリクは初めて気が付いた。

《…それが、答えか。なるほど、15年を経ても素性の悪さは変えられないと見える。ならず者小隊、愚連隊…『グリーン隊』の評判そのままだな》

深く震えた響き、そして絞り出すような声音。怒りを噛みしめたようなその言葉に、冷静沈着な常のアルヴィン少佐の面影はもはや無かった。憤怒とともに吐き捨てられた捨て台詞を、ロベルト隊長は軽く笑い声を上げながら受け流している。

先の隊長の言葉でもあったが、おそらくロベルト隊長にとつては、周辺諸国への復讐などどうでもよい事なのだろう。敗戦は、敗戦。それはそれとして、今更復讐を語り、当時関わりの無かった人々にまで意趣返しを図った所で何の意味も無い。そう割り切つて、自分自身は『空を飛び続けたい』という思いの——信念のために、今ここにあるのに違いない。敢えて『誇り』という言葉を使ったその背景には、空を飛ぶこと、そしてあくまで『敵』を落とす為に戦うことという、空軍パイロットとしての矜持が垣間見える。それを意識したからこそ、諸国を無差別に戦争へと引きずり込むアルヴィン少佐に『誇り』は無いと論破したのだ。

怒りに声を震わせるアルヴィン少佐と、何々と笑い飛ばしてみせたロベルト隊長。かつて同じベルカ空軍に属していたという二人ながら、その生き様は、信念は、鏡のように対照的に見えた。

《そりやどうも、所詮俺は外れ者ですよ。それに、『灰色』のやり口は昔から知ってる積もりです。策謀も、自国民への被害もやむを得ないという自領内への核攻撃も淡々とこなし、ラルド派の急先鋒……タカ派で知られる第3航空師団のやり口はね》

《……!》

《知らない、なんて言わせませんよ。アンタもその一員だった筈だ。第3航空師団第8飛行隊——『グラオガイスト隊』隊長、カスパル・ゲスナー少佐殿》

殺気、一瞬。

隊長が言葉を区切るのと、スポーク隊の2機が翼を翻すのは同時だった。パウラの『グリペンC』はこちらの斜め上方から突貫し、アルヴィン少佐の『グリペンD』は下降。下端で旋回し、斜め下から遅れて襲い掛かりつつある。

すなわち、パウラがこちらを崩し、その隙を少佐が討つ手。

《エリック、下!1—3!》

「了解!」

必要最低限の、短い通信。その中に全てを察し、エリックは編隊を離れて背面から下降。隊長を先頭とした3機は上昇し、パウラと正面から相対する姿勢に入った。これならば正面火力でパウラを圧倒でき、こちらは少佐の追撃を防ぐこともできる。

正面、少佐の『グリペンD』。距離1100。

針路、相対。切り上げるように急角度を取って上昇する機動。

武装選択、30mm機銃。この針路ではAAMを放つてもフレアで回避される。

距離、800。

ミサイル警報。

正面、1発。放ったフレアに遮られ、それはこちらの鼻先を逸れてゆく。

距離500、400。照準器の中心。アルヴィン少佐の顔。

——仲間と信じた人の顔。

「——ちっ！」

無意識の舌打ちに籠もった感情は、果たして何だったのか。

気づけば、エリクは無意識に照準をずらしながら機銃を発射。放たれた一筋の光軸

は、『グリペンD』の右カナード翼を粉々に切り裂き、緑色の破片を灰色の空に散らした。

銃声、上空からも4筋。見上げた先ではパウラ機から破片が飛び、ロベルト隊長達の

機体が真正面から馳せ違っていくのが目に入った。エリクは機首を上げ、その隣へと機

位を向けてゆく。

《ぐっ！》

《…で、どうします、これから？御三方で俺達を抹殺でもしますか？》

《………》

高度を失ったアルヴィン少佐機にパウラの『グリペンC』が並び、揃った2機がこちらを見上げる。先ほどの交戦の結果だろう、パウラの機体にもいくつか弾痕が刻まれているのが、エリクの目には見て取れた。

手ごたえは、確かにあった。スポーク隊が赴任して来た頃は演習で軽くあしらわれてきたのだが、幾多もの空戦を経て、様々な戦場やパイロットとの戦いを経験してから、自分自身も腕前は着実に上がって来たと感じる。何より、今は機数で言えば4対2、おまけに機種も同じときている。戦力で勝っている今の状況なら、教導隊として高い技量を誇るスポーク隊相手にも五分以上の勝負ができる自信はあった。ロベルト隊長も先の一航過でそれを感じたのだろう、その言葉には自信が見え隠れしている。

沈黙漂う灰色の空、静まり返る空気。

それを破ったのは、低く、それでいて笑みと憎悪を噛み殺したような、くつくつくと  
いう喉の響きだった。

《いや……今の君たちには、もはや我々2機では歯が立つまい。たとえ力が拮抗していても、数という要素がそれを崩すだろう。かつてベルカ公国が、数多の国々に囲まれ蹂躪されたようにな》

「……………何を……」

《そう、我々2機だけならばだ》

《……まさか……！》

《………た、隊長！……あ、あれ……！方位090、機影多数！》

勝ち誇ったアルヴィン少佐の声に、動揺したクリスの声が重なる。

ぞくりとした胸騒ぎを呑み込み、振り向くは方位090、すなわち真東。目が奔り、眩しさに目を聳めたその瞬間、エリクは遅ればせながらにその意味を理解した。

山の輪郭を照らし、白く昇る朝日。それを背に、いくつもの機影が浮かんでいたのだ。機数にして約20、リーダー上の識別信号はレクタ国籍。しかし、この空域を20機もの機体が作戦行動するという情報は何一つ聞いていない。その全ての飛行ベクトルがこちらを向いていることから、その意味は自ずと明らかだった。

《夜明けだ》

「……………！嘘、だろ……！」

《ベルカが再び昇り、仇なす国々が余さず沈む、ベルカ再生の夜明けだ。レクタ、サピン、ラティオ……この白日の下、各国は戦争を続け、戦火の下に亡滅してゆく。諸君の死は、その先駆けの焰だ》

迫る。

東から、無数の機影が徐々に迫る。まるでアルヴィン少佐の声を受け、宣告を告げるかのように。

《朝日が来り、夜は去る。戦場を覆す月も、栄光を忘れた梟も、これからの世界にはもはや不要だ。不相応な輝きの月など、朝日を妨げるものに他ならない。この輝かしき陽光の下——沈め、『三日月』》

裁きを告げる暗い声。主を護らんと警報を鳴らし続ける機体。それに次ぐ言葉を、誰一人として紡ぐことはできなかつた。

昇る太陽の輝きに空は染まり、急速に衰えた夜の黒を追い散らすように、空を覆う灰色が鈍く映える。放射熱に冷めた眼下の山肌は霧を帯び、ラティオはおろか、遙か先のレクタの大地すらも覆い隠すように広がり始めていた。

頭上を押さえる無数の翼。降り注ぐ警報の雨。

翻った西の空では、月が霧の中へと吞まれて、地平の先へと沈んでいった。



## 第21話 月が沈む刻

薄雲の灰色を背景に、機銃弾がまるで雨のように降り注ぐ。

斜め上方、計8機。——識別照合、レクタ国籍。

ヘッドマウントディスプレイ<sup>D</sup>上に映えたその表記に、エリクは思わず唇を噛んだ。目を配り、操縦桿を握る手に力を入れ、乗機『グリペンC』を左方向へ旋回させる。横合いのGと回転する視界に頭を攪拌されるその最中でも、胸をかき乱す焦燥と困惑、そして怒りは心を苛んで離さない。

がん、がん。

操縦桿越しに振動が伝わり、機体が数発被弾したことを無言の内に伝えて来る。直上から網の目のように機銃掃射をかけてくる攻撃法といい、炸薬でもって金属の板を強引に破碎する今の被弾音といい、奴らは明らかに実弾装備、それも確実にこちらを殺しに来ている。回避行動に入ったこちらの背を追うでもなく、一航過で下方へと抜けて行ったその戦術にしても、まずは確実にこちらを消耗させんとする『敵』の意図が見て取れるようだった。一撃離脱でじわじわとこちらを啄み、消耗させた所で機数に物を言わせるといなのが、この場合は最も確実な——そう、対象である俺達を間違いなく殺すのに

は確かに確実な方法に違いないだろう。

なぜだ。どうして。そこまでして、俺達を殺したいのか。それほどまでにレクタを憎み、俺達を憎み、奴らの言う理想のベルカのための生贄にしたいのか。

苦悶の問いかけとともに、エリクの目はその相手——アルヴィン少佐とパウラの『グリペン』を追った。先ほどの敵機の攻撃に紛れて、2機はこちらとほぼ同高度を保ったまま、旋回してこちらの背に就かんとしている。まるで、隙を見せたこちらの背を確実に撃ち落とすと言わんばかりに。

ぎ、と食いしぼる歯、そしてかっど激する胸。

仲間として信じていた今までの姿は、全て嘘だったというのか。

「……そつ!!」

《こちらハルヴ3、上より第二波来ます!》

胸に収め兼ねた感情の奔流も、迫る殺気に応えるヴィルさんの声で掻き消される。

見上げた先には、先程同様に残りの8機。しかし今度は4機ずつ左右に分かれ、それぞれ降下しつつ外側へ広がるように機首を向けているのが認められる。横方向への一回で回避した先程の機動を見越し、今度はこちらの回避先を狙い撃つ積りなのだろう。

《今度は止まるな、加速して向うの射線を抜ける。その後は下にダイブ。雲海に逃げ込むぞ》

定型が無いのが定型。そんな言葉を思わせるロベルト隊長の指揮の下、エリクはちらりと下方を見やる。夜間に気温が下がった所に日の出が重なったためだろう、眼下の山間部には濃い雲がびっしりと立ち込め、立ち並ぶ山肌すらほとんど見えない程になっていた。雲は、言うなれば濃密な水蒸気の幕。視認はもとより、レーダーや赤外線誘導式空対空ミサイル<sup>A</sup>の誘導すら制限を受けることになる。隊長の言う通り雲の中へ逃げ込みさえできれば、圧倒的に戦力で劣るこの状態でも逃げおおせることは不可能ではなかった。

機体が軽い『グリペンC』は、デルタ翼機の中で比べれば初速と運動性が他機種と比べて勝る優位がある。

踏み込んだ脚に素早く機体は応え、4機はひと塊となつて敵編隊の下方をすり抜けた。慌てた頭上の8機が降下の最中で旋回し機銃を放つも、加速したこちらの背を捉えきれなかったの言うまでもない。

射線を描き損ねた8機を後方へ悠々といなしながら、隊長は機体を右へとロールさせ、そのまま右下方降下へと入って行く。エリクも同じ機動でそれに続き、その背をヴィルさんとクリスが追っていた。後方のスポーク隊はまだこちらを射程に捉えておらず、先の被弾もあつてか加速の伸びはこちらより遅い。

引き離せる。

エリクの脳裏にその言葉が浮かんだとすれば、それはあまりにも甘い観測だっただろう。

そう、かつて高い技量を以て知られたベルカ軍の技術と、『敵』の性能に対して。

《——後方、8!》

《ち…第一波の奴らか!》

機体が後方警戒の電子音を発するのと、最後尾のクリスが悲鳴のような声を上げるのは同時だった。咄嗟に戦闘モードとしたレーダーを見やると、こちらの4機編隊の後方には2つの機影が映り込んでいる。

——いや、よく見るとさらにその前にも、ごく小さいながら反応が6つ。二つの鏃のような隊形を取り、後続の2機を引き離しながらみるみるこちらへ迫ってきている。

《エリク、敵、何だったか分かるか? 確かデルタ翼つぼかったよな》

「く…! 今は真後ろなんで、ここからじゃ機種までは何とも。ただ…:はい、確かデルタ翼機だったよな」

本来であればHMD上に敵の機種や距離といった情報は表示される訳だが、『グリペン』はキャノピーの形状上真後ろの方向に死角があり、振り返ってみた所で敵の姿を捉えることすら叶わない。レーダー表示を確かめた所で、後方の2機はレクタの『グリペンC』との表示があるものの、先行する6機は反応自体が小さく、その様を探ることす

らでできなかった。

だが。隊長の言葉に先程の第一波を思い返せば、頭上を見上げた一瞬に、確かに敵の姿は見た。お互いに高速だったのでその詳細な形状まで見て取ることはできなかったが、網膜に焼き付いたそのシルエツトは、確か三角形の翼を持った無尾翼デルタの機体ではなかったか。

つまり。

《よし…ならこつちにも手がある。ハルヴ全機、合図したら一齐に急制動で減速しろ。一旦こちらをオーバ<sup>追</sup>ーシ<sup>越</sup>ュートさせちまえば、あとは『グリペン』の運動性で十分撒ける》

「なるほど…確かにー」

もとより『グリペン』は先のように初速こそ優れるものの、その後の加速の伸びは他のデルタ翼機と比べてどうしても劣るといふ欠点がある。この点は、以前『円卓』で『赤色』のタイフーンと交戦した際のことを見ても明らかであった。軽量単発の『グリペン』では、どうしても双発大型の他のデルタ翼機と比べて出力で劣ってしまうのだ。

つまり、勝負を仕掛けるならば向うの得意である加速性ではなく、対デルタ翼機では優位を取れる運動性。隊長の言う通り一度後方さえ取ることができれば、敵の攻撃を避けながら離脱を図れる筈だった。

後方、微かな反応の6機が迫る。

レーダー上の距離、概ね1200。こちらも相当加速が乗っている筈だが、その数値は見る見るうちに減っていく。

1000。900。その時が近づく。

850。

一拍。

今。

《制動っ！》

「お、おっ!!」

フットペダル、急減速。

めいっばい跳ね上げたカナードの抵抗を受け、『グリペン』の速度がぐくと落ちる。前方へ弾き飛ばされそうな衝撃と胃の悪心を吐で堪えながら、エリクは操縦桿を左手手前へ引き、機体の進行方向を保つたまま左上方へ旋回——空戦機動に言うバレルロールで回避行動に入った。急減速でちんたら飛んでいては、追いついた敵機に後ろから衝突される恐れがある。

隊長はこちらの前方で左へ、ヴィルさんとクリスは右へ。左右それぞれへ広がったハルヴ隊の中央を、6つの機影が突っ切ってゆく。こちらの急制動に対応しきれず、こち

らの狙い通りにオーバーシユートをしたらしい。

引つかかった。

そう脳裏に抱いた数秒後、エリクは予想だにできなかった展開に、思わず驚愕した。

一つには、その機体の見慣れない形状ゆえだろう。

機体は、灰色一色。水平尾翼どころか垂直尾翼すら持たない全翼機のような無尾翼デルタ翼機であり、主翼には角ばった前縁<sup>L</sup>付け根<sup>E</sup>延長部<sup>X</sup>が設けられている。背後から見る限りエンジンは双発、機体中央からエンジンカウルに至る流麗なラインはSu-27『フランカー』シリーズを連想させるが、流線形を基調としたシルエツトはより洗練されているようにも見えた。HMD上の表示は『Unknow<sup>談</sup>な<sup>当</sup>し』。これまで見たどの機体とも、その姿は一線を画している。

だが、エリクの驚愕の最大の要因は、その後だった。こちらを追い越したその瞬間、その機体に異変が生じたのだ。

異変は、まず主翼から現れた。大型の三角だった主翼の後方部——すなわちエンジン部のすぐ外側に当たる部分が三角形に反り立ち、斜め外側に開く垂直尾翼を形成したのだ。同時に、残る主翼部も中ほどから折れ、ブーメランのように前進角を描いた特異な形状へと変化している。主翼前縁のLEX部もわずかながらせり上がり、大型のカナード翼を形成していた。その姿は先程までとは全く異なり、Su-47『ペールクト』に

代表されるような前進翼機。それも曲線を主としたS u—47と異なり、方形を主として角ばった独特の前進翼を形作っている。

F—14『トムキャット』シリーズやM i G—23『フロッガー』系列機のように、速度帯によつて主翼の角度を変える可変翼機というものがあるが、これほどの変化は可変翼機の次元をも超えている。

一瞬にして無尾翼デルタ機からカナード付き前進翼機へと姿を変えて見せたその様は、もはや『変形』と称するべきものだった。

《な…!?形が、変わった…!?》

《つ…いやべえ…全機、格闘戦に持ち込まれるな！ダイブで逃げるぞ!!》

まずい。前進翼機といえば、安定性を代償に運動性に優れた、真正正銘の格闘戦機である。いくら『グリペン』が運動性に優れるとはいえ、それはデルタ翼機の中で比べればの話。純然たる格闘戦機に真っ向から対抗できるほどの運動性は持ち合わせていない。

口中の呟きを一息に呑み込んで、エリクは丁度バレルロールの頂点に達した機体を急降下させた。横を見やれば、クリスも同様に急降下に入っている。既にバレルロールの下端に達していたロベルト隊長とヴィルさんは機体反転に一拍を挟む必要があり、一時的にこちらが先行した格好だった。



そして、偶然とも言うべきその一瞬の差が、全てを分けた。

前進翼へと変形した6機は減速するとともに、信じられないほどの小さな半径で旋回。S字機動と減速を駆使し、降下に入った隊長とヴィルさんの機体をあつという間にその照準内に捉えたのだ。

ミサイル、そして機銃の網の目。

減速して速度を失い、急降下で軌道も制限された『グリペン』に回避の術は無い。機体を捻り辛うじてミサイルを回避したロベルト隊長の傍らで、ヴィルさんの『グリペン』に2発のミサイルが命中。爆炎の中に、機体の尾翼や補助翼が飛び散った。

「ヴィルさん!!」

《く……ご心配なく、体は無事です！伊達に今まで生き残っちゃいませんからね！……ともあれ、脱出します！》

機体のキャノピーが飛び、座席が中空へと弾き出される。燃えたつ機体から尾を曳いて離れたそれは、数秒遅れて落下。ヴィルさんは開いた落下傘にぶら下がり、灰色の空を背景にふわりと宙に舞った。

一安心する間も無く、エリクは降下する機体から空を見上げる。確か、あの6機の後ろに2機の『グリペン』が続いていた筈である。あの2機にこちらの機動の隙を突かれては元も子もない。

——いた。奔らせた目の先、先程までこちらがいたのとはほぼ同高度に2機は留まっていた。こちらを見失った訳ではあるまいに、急降下してこちらを追撃するような素振りはない。その鼻先は、ただ真つすぐである。そう、先程隊長とヴィルさんが攻撃を受けた、今もヴィルさんが落下傘で漂うその先——。

『ベルカ再生の夜明けだ。——諸君の死は、その先駆けの焔だ』。  
不意に脳裏に蘇ったアルヴィン少佐の声に、背筋がぞくりと冷える。

『グリペン』の進路は変わらず、直進。落下傘と同高度、そのベクトルは自由落下の進路とまさに交叉している。

まさか。

止めろ。

「……っ!!止めろおお!!」

灰色に、閃光二筋。

全てを察した瞬間、エリクは叫び、そして見てしまった。

一筋が落下傘を貫き、その白色をずたずたに引き裂くのを。そして、残る一筋が落下傘に下がる人影に群がり、その姿を微塵に打ち砕いてゆくのを。曇った夜明けの空に、血と肉片の色を刻んでゆくのを——。

《そん、な……ヴィルさあああんっ!!》

《…やりやがった…いっつら、もう正気じゃねえ…!!》

「悪魔め…!!」

絶望、衝撃、そして怒り。

噛み殺した感情が、それでも昂りを抑えかねて喉奥から迸る。言葉を震わせる隊長の  
声も、涙色混じるクリスの声音も、通信回線を揺らすその全てが、抑えかねた感情に満  
ちていた。

そして、感情は人を強くするが、時として脆くもする。昂る怒りは、知っていた筈の  
その言葉を、エリクの脳裏から消し去ってしまった。

そう、その急降下の先、軌道上に無数の銃痕が放たれるまで。

「…!? くっ!」

《…チツ、先回りされたか!》

火線を避けるように、咄嗟に操縦桿を引き上げる。迫るそれらは水平となったこちら  
のわずか数m先を擦過し、その源なる機体ごと轟音と共に後方へ馳せ違ってしまった。

回り込まれた。おそらく、先程いなした第二波の8機。敵の追撃とヴィルさんに気を  
取られ、周辺の警戒に意識が回らなかつた事が、敵の搦め手を招いてしまったのだ。

上空から、スポーク隊の『グリペン』がこちらを見下ろす。同高度、周囲には旋回す  
る『グリペンC』1機と変形機3機による小隊が、合わせて4つ。うち2編隊はこちら

の斜め下方を抑え、水平方向はおろか上下すらも完全に包囲されている。

《完全に加速を殺されたな…。敵は18機、こっちは3機きりか》

《た、隊長…》

「…くそっ！あいつら…!!」

直上に位置した2機の『グリペン』が、こちらを指して降下を始める。完全に包囲され抵抗の術を失ったのを見定めたのだろう、2機で先行し、残る全機で集中攻撃を行う積りと見て取れた。被弾が重なってこちらは消耗しており、ミサイルもわずかに2基のみ。おまけに、敵には謎の変形機もいる。どう考えても勝ち目は無かった。

仲間と信じていた相手に裏切られ、ヴィルさんという大切な仲間を殺され、自分たちまでこんな所でむざむざと殺されるのか。ベルカの再興という意味の分からない野望が、俺達と何の関わりがある。——俺達が、一体何をした。

《…二人とも、南へ飛べ。サピン勢力圏内なら追手はかからん》

「…え？」

《隊長？…隊長は!?!》

《あいつらの一番の狙いは俺だ。俺まで一緒にいて行ったら、お前らまで危険になるだろ》

「そ…そんな！だ、大丈夫ですよ！俺達だって腕は上がって来てますし、何より隊長は元

ベルカのエースなんでしょ!?力を合わせればきつと……!」

《はは……嬉しいけどな、買いかぶってくれるな、俺は所詮ベルカ戦争の敗者だよ。……ただ、空の先輩として、最期に1個だけ言わせてくれ。今日の事は、運が悪かったと思って金輪際忘れる。運よく生き残っても、また空に上がっても、戦争にもベルカにも関わるな。……怒りとか憎悪でな、空を飛ばんじやいけねえ。あいつらみたいになつて欲しくはないんだ》

「……隊長……」

いつも空いているのか閉じているのか分からない細かい目で、冗談とともに笑っていたロベルト隊長。楽の感情と共に記憶に宿るその相貌が、その声は、今は憐れみを帯びている。その感情の向かう先が隊長自身の運命へなのか、自分やクリスへの心配なのか、それとも妄執に囚われたアルヴィン少佐へ向かったものなのか。

全ての答えは霧の中、エリクは訥々と語る隊長の言葉に、温かな労わりと悲しみを感じていた。

ロベルト隊長は、やっぱり俺にとって、唯一無二の隊長に他ならない。

《スポーク隊が攻撃する直前に、一齐に南の4機を突っ切る。その後は脇目も振らず一目散に逃げろ。俺のことはいい、二人とも生き残る事を最優先に考えるんだ。いいな》

「——はっ」

《はいっ!!》

《いい返事だ。…15年前に出会ってりや、グリユーン隊に招きたかつたくらいだ。一緒に飛ぶには最高のパートナーだったぜ、お前らはよ》

それきり、言葉は不要だった。隊長の息遣いは、かつてベルカに名を馳せたという『グリユーン隊』から続くその戦術の骨法は、これまでの戦いで自分も十分に知っている。迫るは2機、直上。次いで周囲の16機も4機ずつに纏まり、同時に旋回してこちらに鼻先を向けている。まるで機械のようなその統制は、興覚めな程に寒々しい。

上の2機はまだ遠い。周囲の機体の包围も、もう少し狭まらなければ突破は難しい。予想は、南の編隊が距離1200まで迫った時。真上の2機がこちらを射程に収め、包围網が攻撃を仕掛ける一拍前。

距離1500。

1400。真上の2機が機銃を放つ。

被弾音、1。2。まだ致命傷ではない。

1300。あと一步。隊長の機体が左へ僅かに傾く。

機体が警報を告げる。敵の接近と、隊長との離別の刻を。

距離、1200。

《今だ！行けえええ!!》

隊長の声。それを合図にぐん、と視界が転がり、回る視界の正面に4つの機影が捉えられる。

先頭に『グリペンC』、後続に灰色の変形機。

HMDのシーカーが敵を追う。

銃火が遠景の白と灰色を裂く。

正面、ミサイル4発。フレア散布。

ミサイル、発射。

——瞬間、爆ぜる焔は四連。閃光と破片の雨に、エリクは思わず目を瞑った。

何かが割れ、ひしやげる音がする。隊長の声が何かを言っている。

抜けた。爆炎の先の空。ひび割れたキャノピーが、灰色の空をパズルのように切り分けている。どうやら近接信管を敏感に設定していたらしく、ミサイルの破片に正面から突っ込んだ形になったらしい。破片もいくつかコクピット内を跳ね回ったらしく、肩と脚に痛みが走る。ざっと機体の様子に目を走らせると、主翼部は大小の傷を負い、内部構造もダメージを受けたのか機体から薄く煙を曳き始めていた。HMDはケーブルから端子が破損でもしたのか、先程の一瞬で表示が全て消えてしまっている。

クリスは、と振り返れば、こちらの右後方。自分の機体が盾となつて破片を防いだのか、比較的びんびんとした姿で付き従っている。

バイザーを上げ、ひたすらに向く先は隊長の最期の指示である南の方向。後方警戒ミラーの中、反転する三日月の『グリペン』の姿は、最早追うことはしなかった。

《グラオモント1、被弾!》

《ち…。スポーク1よりスポーク2、グラオドラツヘ1から3の指揮権を与える。逃走した2機を追撃せよ。その他はグリユーン2を包囲し撃墜する》

《…了解》

生じた無数の爆炎で混乱を来したのも一瞬、すぐさま追撃の体勢を整えたアルヴィン少佐は流石だった。その命令を受けたらしく、降下していた緑色の『グリペンC』が機首を引き上げ、その矛先をこちらへと向ける。コールサインを確認するまでもなく、塗装と機動の切れは、間違いなくパウラの機体。混乱で機動を鈍らせていた変形機のうち3機も、その後方へ従いこちらの背へと追い縋ってきている。

よりによって。

親しみか、憎しみか。今や複雑な感情なしで思い描けないその名を口内に嘯み潰し、エリクはひたすらにフットペダルを押し込んだ。

ぐんぐんと一の位を巻き上げ、数値を刻む速度計と回転数。その伸びは、しかし常と比べてやや遅い。やはり、先のダメージが響いているのだろうか。



速度が乗らないこちらを見かねたのか、クリスの機体が右側真横へと機位を向ける。ちらりと見やつたレーダー上では、既に敵との距離は約2000。おそらく変形機はデルタ型に戻つて追撃しているのだろう、このままでは二人とも共倒れになる。

《先輩！大丈夫ですか!?!》

「俺はいい、お前だけでも先に行け!…すぐに追いつける!」

《で、でも…!》

「隊長の命令を忘れたのか!——行け!!」

《……!!》

ぐつと声を呑み込んだ気配が、通信を介してエリクの耳にも届く。

沈黙、間数秒。

自分の意図を察してくれたのか、クリスの『グリペン』は徐々に速度を速め、エリクとの距離を開け始めた。最期の最後で駄々をこねてくれたが、ようやく聞き入れてくれたらしい。

さて、残るは後方の4機である。加速性能はご覧の通り雲泥の差であり、レーダー上では先行した3機が瞬く間に距離を詰めているのが目に見えて判別できた。向うは変形機構まで備えた双発デルタ機、対してこちらは単発の上損傷している。前進翼形態での運動性でも『グリペン』とは比較にならない以上、勝敗はもはや火を見るより明らか

だった。

だが、かといってみすみす討たれるつもりは毛頭ない。せめて1機だけでも落としてやらなければ、ヴィルさんを喪い隊長を残したこの怒りと無念は、到底収まらない。何より、少しでも時間を稼げればクリスが逃げるのにも役立つ筈である。

後方を振り返り、タイミングを見計らう。

狙うは、敵が加速に任せてこちらを射程に収める2歩手前。先ほどロベルト隊長がやったように、オーバーシユートを誘発して至近距離の格闘戦へと持ち込めば、1機くらはい何とかなるかもしれない。何より、今度は変形機構という敵の手札が分かっているのだ。不意を突かれた先ほどとは違う。

後方、3機。遅れてパウラの『グリペン』。

彼方の遠景、隊長が飛んでいるであろう空は、既に雲に隠れて見えない。

——墜としてやる。

寄って来い。

あと500。

300。

『灰色』が、機械のような冷たい翼が、徐々に迫って来る。

あと、一步。

——接近警報。

「っ!？」

不意に鳴り響いた電子音に、エリクは思わず心臓を跳ね上げた。

後方ではない。

上。いない。

前。

——まさか。

思い至り、ぎよつとして振り向いた真正面。そこにはこちらの真正面から迫る機影が一つ、わずかに機首を上げて向かう姿があった。

敵味方識別装置の反応は友軍。もとより、前方から出現しうる機影といえば他に無い。

クリスの『グリペンC』。

《墜、ち、ろおおお!!》

「あ、のバカ…ツ！」

咄嗟に操縦桿を傾け、その傍をクリスの機体が轟音とともにすれ違う。

衝撃波でびし、とキャノピーのひび割れが深まるのを尻目に、クリスはそのまま敵編隊へ向けミサイル2発を同時に発射。機銃掃射で牽制を仕掛けた後、一気に背面の体勢

で急上昇旋回に入った。旋回した機体から後方を見やれば、ミサイルは直撃こそしなかったものの、3機は大きく編隊を乱している。

「馬鹿野郎！何で戻って……！」

《私だって、隊長の命令は覚えています。『二人で』生き残るんです！それに……私は、先輩を置いて行けません！》

「つ……止めろ、もういい！『灰色』が追って来るぞ!!」

その姿を見、その声と意志を聞いて、エリクは思わず声を荒げた。

もういい。その言葉に万感を籠めて、叫んだ。この機体では、いずれにせよ俺は生き残れない。だが、隊長と自分さえ囿になれば、損傷が少ないクリスはまだ逃げ延びられる。ラティオ西郡のサピン勢力圏内まではもう一息、眼前に立ち込める雲に紛れ込めば、もう逃げおおせられるのだ。

それなのに。

こちらよりもクリスを脅威と判断したのだろう、変形機は1機がクリス機の後について上昇し、2機は翼を折りながら横方向への旋回に入った。上へ向かった1機は機体の腹を下にした逆宙返りの機動だが、その凄まじいGにもかかわらず、旋回半径は驚くほど小さく、おまけに速度も鈍っていない。本当に、人間が乗っているのか。

クリスも追跡する1機の姿を認めたらしい。宙返りの頂点から降下に入り、加速をつ

けて振り切る挙動を見せた。その鼻先には、ひと塊の雲。斜め上からは迫る1機、さらに横旋回の2機は大きく横へと回って別の雲へと入って行く。

互いの機位を見、雲の状況を見て、エリクはクリスの戦法と敵の出方を同時に理解した。間違いない、『円卓』で『黒翼』相手に行った、フレアを目くらましに接近する戦法を応用し、クリスは雲を利用する積りだ。

それは、今はまずい。

《目に見えない雲の中なら、こっちの動きは気づかれませんよね…っ！》

「クリス、止めろ！そのまま雲に逃げ込め!!横からも来るぞ!!」

おそらく目の前——正しくは真後ろの敵の挙動に気を取られ、クリスは他の2機の機動に気づいていない。こちらの声も、おそらくその意識までは届いていないに違いない。違った。

すぐ後ろにパウラがいるのも構わず、エリクは操縦桿を引き上げ、『グリペン』の機体を上昇加速に入らせる。鼻先は、クリスが狙っているであろう雲の出口。しかし、損傷した機体の加速は遅く、クリスが雲へ入るまでには間に合わない。

目の前で、クリスが上から雲へと入る。その後を追ってデルタ型の1機が入り、束の間2機は視界からもレーダーからも消え去った。

おそらくクリスの狙っている戦法は、雲の中で急減速してオーバーシュートを誘発

し、雲の中で密かに敵の後方を占位。雲という不可視の幕の中で優位を確保し、雲から出ると同時に攻撃する積りなのだ。

だが、フレアを利用して『黒翼』に仕掛けたあの時とは、今は状況が違う。性能も数も敵の方が勝り、クリスは1機きりなのだ。何より、こちらが『変形』という手の内を知っているように、パウラもまたあの時の戦術を見ている。

もしパウラが、あの時の戦術を想起して対策をしているとすれば。

間に合え。

間に合え。

必死の意志も、焦りも、しかし機体の加速に結びつかない。

くそ、ポンコツめ。何でこの機体には『クファイル』の『コンバット・プラス』が無い。早くしないと。急がないと。クリスが――。

雲から1機が抜ける。

灰色の無尾翼デルタ。敵の変形機。

間、1秒余り。続く機体は、左翼に三日月。クリスの『グリペン』。

クリスは気づいていない。機体側面から1機、死角となる腹側から1機、前進翼の2機が旋回し近づいているのに。クリスが雲から出るのを見越し、大きく旋回していた2機が伏兵として迫っていたことに。

クリスがミサイルレンジまで距離を詰める。

2機が、機首をクリスへ向ける。

遠い。届かない。

止めろ。

止めてくれ。

止めて——。

「クリイイス!!」

思わず操縦桿から手を離し、伸ばした手。その先で、2方向から奔る光軸が三日月へと殺到してゆく。

刻まれる黒い弾痕は、主翼、次いでコクピット。手が届くわずかに外の距離で、クリスの機体は瞬く間に蜂の巣と化した。

《か…はっ…》

「——こいつら…っ…こいつらあああ!!」

息よりもか細い、クリスの声。霧に消えそうな命の音を耳にして、エリクはもはや我を忘れた。

正面、炎に包まれるクリスの機体。その先、腹側から射撃を浴びせた変形機。

ヘッドオン。敵の火線の正面だろうと、最早構わなかった。

殺す。殺してやる。

歯を食いしばり、痛いほどに操縦桿を握り、エリクはその先を睨みつけた。

狙うべきタイミングは一瞬。クリス機の黒煙に敵機が紛れ、一瞬であれ幻惑される瞬間。この『グリペン』の加速が乗りきる、その一瞬。

正面、距離400。

機体が、ロックオンを告げる。

照準器が、キャノピーの中心へ十字の刻印を刻む。

瞬間。

「ぐっ!!」

割れるキャノピー。炸裂する焰。閃光と爆音の奔流の中、エリクは真正面から頭に受けた衝撃に、体を座席へ打ち付けられた。

振り返った先、焰一つ。灰色の機体は、右翼を中ほどから斬り飛ばされて墜ちてゆく。

目の前の計器類が、赤い。目に血が入ったのか、それにしては視界も狭く感じる。衝撃で視覚がダメージを受けたのか、もはやエリクにそれを理解する術も、その暇も無かった。

黒煙を噴き始めた機体を下降させ、エリクは墜ちてゆくクリスの機体を懸命に追った。そのキャノピーは、まだ吹き飛んでいない。



「クリス……クリス、聞こえるか！ 脱出しろ！」

《せん、ばい……》

「しっかりとしろ、まだ間に合う！ 早く！」

開きっぱなしの回線から聞こえるのは、警報音と燃え盛り爆ぜる機械の悲鳴、そしてか細いクリスの声。

額や脚が朱に濡れ、口から血が零れてもなお、エリクは懸命に叫んだ。

早く。急げ。お前まで死んだら、俺達は。——俺は。

《わたし、し……幸せでした。みんなと……せんばいと、飛べ、て……》

「……………っ!!」

爆発、一つ。

ぶつり、という残酷な音とともに声は途切れ、距離を隔てた眼下で、クリスの『グリペンC』はばらばらに爆散した。嘘のように鮮やかな赤と黒の焔で、辺りを覆う霧を照らし上げながら。

慟哭。突き上げる感情は、まさにその形となって溢れ出た。

エリクは、吠えた。吠えるようにして泣いた。喉から血が滲もうと、自らの機体が炎に包まれ始めようと、構わずに哭いた。

ロックオン警報。

冷たい電子音は、残酷な現実となつて耳に届く。ノイズ混じりのレーダーを見る間でもなく、その源は簡単に察せられた。

後方、3機。——パウラ。

「……これが、お前らの望んだ事か。今まで重ねて来た言葉は、全部嘘だったのか」

《……》

「答えろ!!」

《……もう、会うことは無い。共に、空に上がることも》

「——パウラツ!!」

《——さようなら》

嗤えそうなほどの、あつけない断絶。

その言葉は一筋の光軸に変わり、後方からエリクの『グリペン』に降り注いだ。満身創痕の『グリペン』になす術は無く、主翼からエンジンへと至る弾痕が、爆発の焔を空へと刻んでゆく。

後方には焔。横には機体を覆う黒煙。空には灰色の雲。そして、目の前は山肌と、白い霧。

鈍いモノトーンと鮮やかな赤色に包まれて、沈む三日月は、霧の中へと呑み込まれてゆく。

「パウラアアアアッ!!」

無念、怒り、悲哀。負の感情の渦の中で、霧上に消えてゆくその姿へと、エリクは渦中の名を叫ぶ。

まるで霧に遮られたかのように、何一つとして、そこへ帰って来る声は無かった。

## 第22話 終わりと始まり

黒煙と炎に包まれた『グリペンC』が、その翼に刻み付けた三日月を焦がしながら、厚い雲海の底へと沈んでゆく。

西の空に既に月は無く、自らの背の方からは曙光を纏った朝日。夜半から夜明けに渡って人知れず交わされた航空戦は、皮肉な程に彼我の状況を示したその光景を以て終わりを告げた。

「……………はあつ……………」

先程言葉を紡いだきり、噤んでいた口。胸を苛む重石を吐き出すように、少女——パウラ・ヘンドリクスは思い切り息を吐き出した。

見慣れた筈の『敵機』撃墜の瞬間。それなのに、この言いようのないほど重く苦しい感覚は何だ。

胸の中で、得体の知れない真つ黒な蔭が、内奥を傷付けながらのたうち回る。肺腑が見えない掌でもって握り潰される。息を吐き出しても、奥歯を食いしばっても、心を責めるその感覚は一向に消えることは無い。

操縦桿を持つ手が震え、額に一筋汗が滲む。初陣ならばいざ知らず、レクタで飛ぶよ

うになってこのかた、これほどまでの動揺は初めてのことだった。

だが、何故だ。

『仲間』としていたハルヴ隊を裏切り始末したことが原因では、おそらくない。そもそもレクタへ入ることになった時点で、祖国ベルカの為に全てを犠牲にすることは織り込み済みだったのだ。アルヴィン少佐の薫陶の下、ベルカ再興の為にあらゆる手を尽くす。そのためには、どれだけレクタ人が死のうが、どれだけ醜い行為をしようが、全て正義の為に止むを得ない。そう信じ、これまで彼らの隣でも飛んでいたのだ。

まさか、今更私が、良心の呵責を感じているのだろうか。

答えの出ない、自らへの問い。全てに蓋をし、パウラは後方に就き従う灰色の2機へ向けて通信回線を開いた。

「……。スポーク2よりグラオドラツヘーおよび2へ。本隊へ戻る。本機に追従せよ」

《コード入力をお願いします》

「……………。指揮コードT-001」

《了解しました。貴機に対する追従飛行に入ります》

アルヴィン少佐の下へ戻るべく操縦桿を握り直した矢先、四角四面に返されて来た機械音声に、パウラは思わず舌を打ちたい思いに駆られた。

改めて規定された命令コードを以て言い直すと、旋回したこちらに合わせて2機は弧

を描いて旋回に入る。咄嗟に融通が利かない割に、殊飛行機動に関しては、その鋭さは人間の操縦では及ぶべくもない。

——せめて、『あれら』のように機械のような心になれたら、これほど得体の知れない苦しみを味わわずに済むのだろうか。

道具を見るような冷徹な目に一抹の羨望を交えた心持ちで、パウラは後方の2機へと目を遣った。

垂直尾翼を斜めに立たせ、角ばった前進翼と大型のカナード翼を持った大型の機体。直線を主とした主翼形状はF-115『イーグル』系列の武骨さを、機首から尾部へと至る流線形のシルエットはSu-27『フランクカー』系列の流麗さを思わせるが、その独特の形状と機能は、既存のあらゆる機体の範疇に収まりきるものではない。

X-02——通称『ワイバーン』。未だエックスナンバーを離れないその名が、表舞台に立つことのないこの機体の全てを物語っていた。

この機体の出自を辿れば、海の向うはユージア大陸西岸、かつての軍事大国エルジア共和国に由来する。

7年前——すなわち2003年。エルジアによる中立国サンサルバシオンへの侵攻を発端として『大陸戦争』が勃発し、ユージア大陸は戦火に見舞われた。序盤から優位を保ったエルジアは、占領した巨大地対空レールガン『ストーンヘンジ』と併せて防空

体制を万全のものとすべく、陸空連携した防空網構築を構想。その空の要に当たる次期主力機として設計されたのが、エルジアの技術力の粋を結集させたこの機体だったのだ。

ところが、エルジア国内での保守派・技術革新派による派閥間の反目、そしてそれに起因する予算確保の課題から、開発は予定より大幅に遅延。主力艦隊『エイギル艦隊』の壊滅を契機とした周辺諸国の反撃によってエルジアは次第に劣勢となり、X-02開発は再開されるも、その頽勢の進行はあまりにも急だった。結果、X-02は試作機の完成と同時に終戦を迎え、ついに大陸戦争で日の目を見ることは叶わなかったのである。終戦後、エルジア残党に当たる『自由エルジア』が本機を不完全ながらも無人機として完成し、ユージア諸国に対する反乱作戦へ投入したとも言われるが、その真偽はついで不明のままだった。

だが、その出自を見るまでも無く、X-02の卓越した性能は注目を集めた。軍事大国エルジアらしい洗練された設計思想、状況の変化へ柔軟に対応できる変形機能、そして機体形状からは想像もできない高いステルス性能。

一説には最強と謳われるF-22『ラプター』すら凌ぐとも言われるその能力に、真つ先に飛びついたのはユークトバニアだった。大陸戦争終結後、エルジアからの亡命者を積極的に受け入れ、オーシアに先んじて図面や機材を入手することに成功したのであ

る。

ここに、ベルカの幸運が重なった。

一つには、ベルカ公国残党組織『灰色の男達』の息がかかった『ノースオーシア・グランドーI. G. 社』へ、ユークトバニアが秘密裏に本機の生産を依頼してきた事。そしてもう一つは、大陸戦争終結後に『自由エルジア』のメンバーが、無人機として実戦投入したX-02の予備コクピットユニットを手土産にベルカへと亡命していた事である。つまり、ベルカ公国残党は、期せずして『X-02の凶面』と『無人機の中核部分』を手中に収めることになったのである。

15年前の『ベルカ戦争』の復讐のため、当時敵対した連合国の衰退と転覆を図るべく諸国へ潜入したベルカ残党にとって、『無人戦闘機』という存在は必要不可欠だった。ただでさえ少ない頭数を各国に分散している状態で、満足に『作戦行動』を行うためには、戦力の確保がどうしても必要なためである。——戦力は欲しい、しかし人間は少ない。この二律背反の中で、操縦に人を必要としない無人機はうつつけの存在だったのだ。

このようなベルカ残党の事情に、かねてより培われて来たベルカ伝統の生産技術が後押しをかけた。部品数を減らし生産効率を上げ、俗に『2機の予算で3機はいける』とまで言わしめる生産能力をフルに活用して、ノースオーシア・グランドーI. G. 社は



秘密裏に無人機仕様のX—02量産に取りかかったのである。もとより各国の兵器生産を一手に引き受けるグラランダ―社である、効率化により浮いた予算は莫大な額に上る。その潤沢な資金が、余さずX—02の量産につき込まれたことは言うまでもない。

かくして量産された無人戦闘機X—02は、各国のベルカ残党の下に秘密裏のうちに、あるいは試作機の実戦テストとして大つぴらに配備されることとなった。レクタへの配備は早い部類だったが、その他の周辺諸国へも順次配備が進む予定となっている。『灰色の男達』が望む、『管理された戦争による、ベルカ以外への戦火の拡大と荒廃』のためには、敵味方となる両軍のベルカ同志の手にX—02がいた方が都合がいい。

数奇な運命の下に母国を離れ、戦火を煽る厄災の飛竜となったX—02。悲嘆すべきその末路にも、機械の心臓は何も感じていないに違いなかった。

「スポーク2よりスポーク1、間もなく合流します」

《こちらスポーク1、了解した。こちらもしきに片が付く。ただちに合流せよ》  
雲を抜け、朝日が昇るその先に、いくつもの機影が入り乱れている。

球状に展開する灰色の機影に囚われているのは、ロベルト・ペーテルス——『グリユーン2』『ファビアン・ロスト』が駆る『グリペンC』。既に数多の弾痕を穿たれた機体は黒煙と炎を噴き、その命運をまさに潰えさせようとしている。一方、周辺に展開しているのは隊長の『グリペンD』とグラオモント隊の『グリペンC』が4機、そしてX—02が

8機。機数から見るに、この劣勢の中でありながらX―02を1機撃墜したのだろう。15年前の戦争で、激戦区である『円卓』を護ったエース部隊としての手腕は流石という所だった。

風前の灯と化した、元エースの駆る機体。ちらりと視界に映ったその姿に憐憫の情一つ、パウラはアルヴィン少佐——カスパルの傍らへと機体を寄せた。攻撃の主をX―02に任せたのだろう、機体への損傷はハルヴ隊との交戦から目立って増えてはいない。《スポーク2、首尾はどうだ》

「エリク・ボルストならびにクリステイナ・ファン・レイデン、いずれも撃墜。脱出は認められませんでした」

《……………!!》

ぜえぜえという荒い息の音に、絶望の吐息が混じったのは、おそらくロベルトのものだったのだろう。啄むように迫るX―02を紙一重で回避していた機動も、それきり精彩を欠き、回避行動すら取らないようになった。

そもそもロベルトが孤軍で持ち堪えたのは、エリクとクリスを逃がす為だったのだ。護るべき彼らが死んでしまった以上、その奮闘は無に帰したということになる。座して死を待つその姿は、最早哀れですらあった。

《…はは……そうかい。あいつらも、逝っちまったかい。……俺の戦いは、全部、無駄だつ

たのかね……》

《残念だったな、『グリユーン2』。部下を失った苦衷、同情はするが……我らの素性を護るため、何よりベルカ再興の正義の為だ。君には、消えてもらうしかない》

回線越しに滲む、無念の響き。

それすらも磨り潰すかのように、カスパル少佐の『グリペンD』が増速し、旋回してロベルト機の正面へと位置取つてゆく。真正面のヘッドオンで確実にコクピットを潰し、完全に息の根を止める意図と見て取れた。

《——可哀想だねえ》

《何?》

《『正義』として定めた肥大化した妄執で、連鎖する戦いを繰り返して……あんた自身、それに縛られてもう止まれなくなっている。死んでいったあいつらも、これから巻き込まれる奴らも、そしてあんたらも。……みんな、可哀想だ》

《…………世迷言は、それで終わりだな?》

針路は、真正面。

常になく冷たい言葉が、感情を押し殺したような意志がロベルトを指し、それでも三日月の『グリペンC』はたじろぐ気配も無い。悲劇と惨禍の渦に呑み込まれた自身を救う唯一の道は、自分の真正面にしかない。裏切りと死を経てそう悟ったかのように、機

体の針路は揺るがない。

カスパル少佐の機体から放たれるは、空対空ミサイル<sup>A</sup>一筋。それはまるでスローモーションのように、パウラの目の前でゆっくりと飛来し、ロベルト機の正面へと突き進んでゆく。

《また、飛びてえなあ…。広い、あの空を》

最期のそれは、果てない想いか、静かな慟哭か。

真正面からコクピットへと突き刺さったミサイルは、一瞬の後に爆発。その声の残響すら爆音の下に切り裂いて、『グリペン』の小柄な機体を粉々に砕き尽くした。

爆発の衝撃で脱落した主翼は、そこに記された『三日月』ごと真つ二つとなり、煙に巻かれて墜ちていく。まるで彼らの末路を描き、同時に滅びてゆくであろうレクタの命運をも暗示するかのような光景に、パウラは今一度、その主の顔を思い浮かべていた。

《……今更、戻れるものかよ》

《え？何か言いましたか、スポークー》

《いや。スポークーより各機、目的達成を確認した。針路変更、スヴォレフホイゼン基地へ向かう》

「了解」

先頭は、カスパル少佐の『グリペンD』。北へ向け変針していくその機体へ付き従うよ

うに、パウラも操縦桿を倒し、乗機『グリペンC』を旋回させた。ハルヴ隊との戦闘で幾分傷ついたものの、通常の機動を行う程度ならば支障はない。

向かう先であるスヴォレフホイゼンは、レクタ西郡寄りに位置する山間の空軍基地である。頽勢のレクタを救うべく、エースパイロットを招集した精鋭部隊の拠点として新設された小規模基地が、その表向きの肩書だった。

ベルカ残党である我々がそこへ向かう点からして、その『裏』の顔は、自ずと明らかであろう。レクタに潜入したベルカ残党、そして『レクタを強国とするため』という名目に賛同したレクタ人のシンパで構成された、戦争を管理し戦火を広げるための飛竜ワイルドの巣。それが、スヴォレフホイゼンの基地が担う真の役割であった。

当然ながら、レクタの上層部は一部を除き、その本来の姿を知る者はいない。だからこそ精鋭部隊『ハルヴ隊』の招聘が可能となり、今こうして謀殺の機会を得ることができたのだ。全ては、綿密な策謀と嘘の上に成り立った既定路線である。

『……これが、お前らの望んだ事か。今まで重ねて来た言葉は、全部嘘だったのか』  
「……………」

不意に、脳裏に蘇ったエリクの言葉。今一度ずきりと傷んだ胸が、パウラを内省へと引きずり込んでゆく。

嘘。

そう言つてしまえば、エリクに対し——レクタに対し言つてきた言葉は、確かに嘘で塗り固めたものでしかない。私たちは、全ての真実を嘘で塗り固めて、今に至るまで生きて来た。

例えばアルヴィン少佐の素性が、かつてベルカ公国空軍に所属していた『グラオガイスト1』ことカスパル・ゲスナー少佐であることもそうであるし、その後席を守るフィッセンント・デ・フロートの素性が当時の少佐の部下である『グラオガイスト3』——オットー・ポルツマンであることもその一つである。同志が次々と命を落としていく中で、二人はベルカ戦争の後も生き延び、水面下で復讐の刃を研ぎ澄ましてきたのだ。

それは、自分自身の出自もまた例外ではない。そもそも名や年齢からして、私もまた素性を偽ってきたのだ。

私の本名は、パウラ・ニーダーハウゼン。その素性は、かつて少佐の部下だった『グラオガイスト2』テオ・ニーダーハウゼンの娘であり、年齢も20ではなく16歳である。当然ながら、少佐や父がベルカ空軍として活動していた頃は、まだ物心がつく前だった。

以降は少佐から聞いた話ではあるが——。

ベルカ戦争終結後も、少佐ら『グラオガイスト隊』は『国境なき世界』を名乗る反連合組織の一員として抗戦を継続。その本隊がベルカ内陸のアヴァロンダムに籠もるの

と同時期に、今のノースオーストラリア州は五大湖沿岸に位置するフィルルターゲン基地にて空域防衛に従事していた。しかし、数で圧倒的に勝る連合軍の攻勢に、基地は陥落。父テオは、その際に『翼端を黒く染めたMiG-27M』と『盾のエンブレムを施したF-5E』によって撃墜されたのだという。

残存機を纏めて撤退した少佐は、その後も抗戦を継続するも、徐々に仲間を失ってゆく。父テオの復讐のため少佐に合流したという母も、フィンセント——オットーを除く隊のメンバーもその最中に落命し、窮地に陥った二人は私を連れ、ノースオーストラリア・グランドーI・G社の元に逃れた。雌伏の時を過ごす中で、元々の繋がりもあつたことから私はカスパル少佐によつて扶育され、パイロットとして鍛えられたという訳である。

以上を踏まえれば、『全部が嘘』とエリクに断じられても、自分には抗弁する術は無かつた。本当に、悲しいほどに全ては嘘で塗り潰されている。

だが。

確かに、私は嘘をついた。エリクにも…そして、カスパル少佐にも。

エリクは、確かに撃墜した。しかし、その脱出の有無までは、本当は確認していない。『確殺』という命令までは全うできなかった——否、しなかつたのだ。

自分でも、何故かは分からない。しかしエリクの後ろに就いたあの時、私は無意識に

その照準をずらしてしまっていたのである。被弾し機動が鈍った機体相手に、狙おうと思えばいくらでもコクピットを貫けた。それにも関わらず、放った機銃弾はエンジンから主翼に至り、コクピットを直接撃つことは無かったのだ。機体は炎を纏ってこそのいたものの、高度は十分にあつた筈である。雲へ飲み込まれた先に山肌さえなければ、脱出は可能な筈だつた。

思い返せば、事はそれだけではない。エースパイロット部隊への招集をヘルメート基地の首脳らと協議した時、私は謀殺の策を知っていたにも関わらず、ハルヴ隊の派遣に反対の言葉を述べてしまったのだ。後にカスパル少佐に叱られたにも関わらず、あまつさえ少佐には内緒で、自分が反対したことをエリクやクリスにも話してしまっていた。思い返せば滑稽だが、まるで自分は殺したくなかつたと暗に弁明するかのようになぜ、『エリクだけ』殺せなかつたのか。

エリクに複雑な感情を抱いていなかつたかと言えば、それは嘘になる。だからといって、それだけが原因ではないのではないか。事実それを言うなら、しばしば口論し、一回だけとはいえ共に外出したクリスに対しても、幾分の親しみのような感情は無い訳では無い。

そもそもいつの頃から、自分がエリクを意識し始めたのかは分からない。未熟な点ばかり目立った彼に、教導隊の立場から容赦なく言葉を突き刺し、その度に言葉をぶつけ



て反目したのは一度や二度ではないのだ。傍目に見れば目の敵にしていると思われるこそすれ、それを意識しているという判断するのはあまりにも滑稽すぎるだろう。

だが——そうだ、いつの頃からか、エリクは私の言葉を軽く受け流し、やんわりと受け止めるような対応をするようになっていた。それはあまりにも言葉をぶつけ合った果てでの諦めに似た適応反応か、あるいは場数を踏んでパイロットとして成長したことによる余裕なのかもしれない。いずれにせよエリクは、少なくとも最初の頃と比べて、余裕を持つて私に接するようになったのだ。

少し暖かいような、苛つくような、不思議な感覚。それは、父親代わりのカスパル少佐とも、同志であるオットーとも違う感覚だった。二人は——特にカスパル少佐は父親代わりとはいえず、指導でも日常でも、むしろ上司であり同志であるという意識が強い。少佐の前ではぴり、と糸が張り詰めたような感覚が多く、その峻厳さの中ではとても父親と共にいるような包まれる感覚があるとは言い難い。……いや、そもそも物心つく前に父親は他界している以上、私は父親というものを知らないのだ。受け入れ、抱擁するよいうな温かさを、父親らしさだと漠然と思っているのに過ぎない。

飛躍した思考がそこに至り、パウラは愕然とした思いに囚われた。

峻厳たる上司であり同志でもある、父親代わりのカスパル少佐。そして、いつしか腕前で自分をも凌駕し始め、同時に余裕と包容力を持ち始めたエリク。その二人の間で、

揺れる言葉は一つしかない。

まさか、私は。

彼に——エリクに、未だ知らぬ父性というものを見出していたのではないか。

「……馬鹿な」

そうだ、馬鹿な。こんな馬鹿な話は無い。

忘れよう。もう、何もかも忘れよう。そもそも、エリクが脱出したかどうか定かではない。全ては終わり、過去となったのだ。彼らは、ベルカの正義の為に死んでいった。

一層激しくなった胸を刺す痛みを、パウラは息を詰めて堪えていた。

\*\*\*\*\*

暗闇に、三日月が浮かんでいる。

真珠色で夜空を照らす、俺達の象徴。『ハルヴ』の名の由来。その下に、ロベルト隊長が、ヴィルさんが、クリスがいる。

月は昇り、天頂に達し、そして見る見る傾いていく。

昇るものは、いつかは沈む。仕方がないものなのかもな。

胸に一抹の寂しさが宿ったその時、エリクは3人が、沈む月の方へと歩き始めていることに気が付いた。

おい、俺を置いてどこに行くんだよ。

口にしようとするも、声は出ない。踏み出す脚は一步も前へ出て行かない。3人は、見る見る離れていく。

待て、待って。くそ、何で脚が。

一向に動かない脚に苛立ち、足元を見たエリクは、思わずぎよつと心臓を跳ね上げた。地面から湧き出る灰色の腕が、無数に脚に絡みついている。無限の闇を思わせる足元からそれはいくつも伸びて、腕を、体を、頭までも絡めとつていく。

月が沈んでいく。視界が赤く染まっていく。3人が、地平の彼方へと去つていく。待って、待ってくれ。俺を置いて行かないでくれ。

俺を、一人にしないで――。

\*\*\*\*\*

「……………」

最初に感じたのは、まばゆい光。

体を苛む鈍い痛みと、上に被さるシーツの感触を感じながら、エリクはゆっくりと目を開いた。

白く汚れの無い天井。消毒液の匂い。右側に立つ点滴用スタンド。そして、その先から聞こえる男の声。悪夢の残滓から覚め、未だぼんやりとした頭を整理するように、エリクはその方向へ頭を傾けていく。

声の方向では、男がベッドに横たわり、椅子の背もたれを間に挟んで別の男が何やら会話をしているのが見える。座っている男の方は作業用の濃緑のツナギを着ているが、胸や肩の辺りに何らかのエンブレムが見て取れた。包帯を巻かれているせいか、視界が狭く細部までよく見えない。

「早いところ復帰してくれよ。頭数一つの減は、ウチにとつちや大打撃なんだからな」

「これくらい掠り傷ですよ。っていうかむしろ同じ目に遭った隊長がピンピンしてるのがおかしいんですから」

「昔から重ねた悪運の量が違う、量が。お前も場数踏めばじき…ん？」

「どうしました？」

「悪い、ちよつと離れるな。ドクター、例のレクターのパイロット、目が覚めたみたいですよ」

顔を傾けた矢先、椅子に座っていた方の男と目が合った。奥の方に別の人間がいたのか、そちらへ声をかけた後、男は席を立ててこちらへと歩んで来る。この設備、そしてドクターという呼び方から、ここはどこぞの医療室なのだろう。よく見れば壁面には薬品棚が並び、奥の方では白衣が見え隠れしている。

様子を呑み込めないこちらを尻目に、男は脚の方からこちらを見下ろしている。年のころは30から40という所か、黒髪の色肌で、顔にはいくつも古傷が見える。

「あんたも悪運が強いみたいだな。墜落した友軍パイロットの捜索隊に偶然発見されるなんて、なかなか無い確率だぞ」

「誰だ、あんた。…いや、その前にここはどこなんだ。ラティオ領内の根拠地か…?」

「…まあ、今は安静にしている。すぐにドクターが来る」

記憶が、ぼんやりと呼び起こされていく。

新たな基地へ向かうために飛び立って、その途中でスポーク隊と空戦になって、隊長の命令で南へ針路を取って。

スポーク隊。謎の変形機。南という針路。クリスの最期。——パウラ。

フラッシュバックする光景とともに、目の前の男のツナギに刻まれたエンブレムが目に入る。黄色と青で彩られた、盾を象った国旗。そして、ラティオ西郡から南という方向。

まさか。ここは。

「…サピン領内…!?!」

「……。おーい、ドクター。まだかー?」

思わず口にした推測に対し、肯定も否定もしない男の反応がそれを的中と告げる。

エリクは愕然とした。元々ロベルト隊長が亡命先にと志していた先ではあるが、それは堂々と申し入れての話である。撃墜され、機体から放り出されて、命からがら回収さ

れたというならば、これは亡命ではなく単なる捕虜ではないか。

目の前が真つ暗になり、体が脱力する。白衣の男が傍らの診断票を取り、自分の手を取つて何事かを記録していても、それすら意識に上ることは無かつた。

「……………これからどうなるんだ、俺は」

「まずは体の完治が第一だ。その後は事情聴取、後は…捕虜收容所だな。…慰めにはならんかもしれないが、サピンの飯は一級品だ。收容所のも旨いぞ」

「……………」

一抹の望みを賭けた言葉も、にべも無く潰される。

やはり、処遇は完全に捕虜のそれである。完治までの猶予はあるとはいえ、捕虜收容所に收容されてしまえば、終戦までは捕虜のままに違いない。それではレクタに戻ることも、ロベルト隊長達の仇を討つことも叶わないではないか。…いや、そもそも『戦争の継続による諸国の荒廃』を標榜するベルカ残党のような奴らが存在する以上、この戦争自体がそう易々と終わるとは思えない。7年前の大陸戦争を顧みるまでもなく、数年に及ぶ可能性すらあるのだ。

馬鹿な。こんな馬鹿なことがあるか。

相変わらず視界を塞ぎ続ける頭の包帯を、苛立ち紛れに掴むエリク。それを見て取つた白衣は、外見から想像もつかない力で、その腕を無理やりに引き剥がした。…いや、そ

もそも自分の力が回復しきっていないのかもしれない。力任せに振りほどくことも叶わず、エリクは白衣の男の手で、再びベッドに押し戻される羽目になった。

「やめたまえ。…申しにくいだが、君の左目は破片で完全に潰されている。もうしばらく、包帯を外させる訳にはいかんだ」

「な…!?…:…俺の、左目が…!?…:…馬鹿な！これだぞ！俺のこの左目だぞ!!」

「……」

言葉無く、首を振る白衣の男。エリクは今度こそ本当に、絶望の淵に叩き落とされた。仲間を殺されたのみならず、片目まで奴らに奪われたというのか。国へと帰る術を無くし、全てを奪われたまま、朽ち果てていくしかないというのか。

検査を終えたのか、白衣がツナギの男へ何がしか言葉をかけ、場を離れていく。頭を抱えたエリクにとってはもはやそれすらもどうでもよく、依然として見下ろす男の存在が煩わしいばかりだった。

転落と評することすら生温い絶望。どうして。俺が、何をしたというのか。

絶望は憎悪へと変わり、やがて暗い熱を胸に帯びさせる。その全ての元凶である、『奴ら』へと向けて。

「……………」

「とりあえず、安静にしている。傷の方はやがて塞がる」

「……………」

「…悪かった、邪魔したな」

「……………許さん…。絶対に、許さない…。『グラオガイスト』…!!」

澱んだ憎悪が意図せぬままに口へと昇り、記憶に残ったその言葉を紡ぎ出す。

アルヴィン…いや、確かカスパルと言ったか。ロベルト隊長曰く、奴がベルカ公国軍  
当時に名乗っていたという部隊名。混乱の中での会話だったが、その語は間違いなく耳  
に残っている。

どうする。すぐに脱走するか、それとも完治を待つて航空機を奪い、レクタへ帰つて  
洗いざらいぶちまけてしまうか。

復讐の為に戦つてくれるなど、忘れてくれと隊長は言った。しかし、今のエリクに、到底それは肯じられる事では無かった。大切な仲間を奪い、左目を奪い、故郷を奪つたス  
ポーク隊。忘れることなど、到底できはしない。強い絆で結ばれた肉親同然の仲間の命  
を無惨にも奪つた奴らを、許すことなどできない。一人残された自分にできることは、  
復讐の二文字以外には無かった。

暗い情動が、怒りに沈むエリクを燃やす。

意識を巡らすその中で、先の言葉にツナギの男がぎよつとした顔を振り向かせるの  
に、エリクは全く気付かなかつた。



「待て。今、何て言った」

「……五月蠅い。今は一人にしてくれ。何も話したくは……」

「今、確かに『グラオガイスト』と言ったな？」

「……？」

踵を返した男が、しゃ、とベッド間の仕切りを閉じてこちらに顔を近づける。

一体どういう風の吹き回しなのか、エリクには煩わしいばかりだった。いやに喰いついて来るが、『グラオガイスト』の部隊名が一体何だというのか。

「ああ、言ったさ。それがどうした。昔そう名乗ってた奴に裏切られて、仲間も全部失つて、俺までこの有様だ。奴だけは、この手で殺さないと気が済まない。そのためには、何としてもレクタに戻らないといけないんだ。……もういいだろ、出て行けよ」

「……元ベルカ公国空軍の『グラオガイスト』か？」

「……？ああ、だから何だよ。カスバル何とかだそうだ」

「……！……『グラオガイスト』、カスバル・ネーヴェル・ゲスナー……！」

苛ついた気分そのままにカスバルの名を出した瞬間、男の表情が明らかに変わった。いや、それだけではない。まるで自ら確かめるような口調で男はその名を、自分が姓を言っていないにも関わらず言い当てたのだ。あまつさえ、TACネームと思しき、エリクさえも初めて聞く単語まで付随させて。

何なのだ、こいつは。サピンの人間が、何故カスパルを知っている？

「詳しく話を聞かせてくれないか。一体、何があつた。奴らは何をしようとしている」

男は背を伺いながら、声を詰めて言葉を重ねた。残つた片目でもようやく焦点が合  
い、男の胸に黒を基調としたエンブレムや、LとSを二つずつ重ねたような紋章らしき  
意匠も刻まれているのが見える。褐色の肌に刻まれた古傷はぴくりと蠢き、男が緊張を  
抱いているのが見て取れた。

「あんた、一体……」

「カルロス・グロバル少尉相当官。民間軍事会社から派遣された、サピンに雇われてい  
る傭兵だ」

男の名が、低い響きを帯びて脳裏に奔る。

『カルロス』……どこかで聞いたような気がするが、思い出せない。記憶を辿るように泳  
がせた目は、その男顔から片口、胸元へと至り……やがて、ツナギの胸に施されたエンブ  
レムを捉えた。

盾型の枠を背に、翼を広げたような幅広の黒い鋭角。それが、月夜に羽ばたく蝙蝠の  
意匠であることに、エリクは今更ながら気が付いた。

## 設定資料集（後編）

・こちらでは、小説本編に関わりのある登場人物や部隊設定を補足的に記載させていただきます。また、ストーリー進行の点で独自解釈部分が多くなりますので、参考までにゲーム原作のうち関わりが深い出来事と、小説本編の出来事をまとめた年表も併せて記載します。

いずれも適宜更新を行って参りますので、本編をお読みになる際の参考にしてやって下さいませ。

・なお、本資料集は前編（〜21話）のネタバレを含みます。未読の方はご注意下さい。

## 【登場人物】

## 《サピン王国空軍》

○エリック・ボルスト（25）

・元レクタ共和国空軍第2航空師団第8戦闘飛行隊、通称『ハルヴ隊』の2番機を務めていた空軍中尉。レクタ北部の出身で、空軍士官学校卒業後からパイロットとして従事していた。当初は実戦経験に乏しい青年士官だったものの、ラテイオとの戦争、敵

エース部隊との死闘、そして対ラティオ戦の天王山である『テュールの剣』攻防戦を経て、レクタを代表するエースパイロット部隊の一翼へと成長する。

・2010年11月18日、新任地であるスヴィレフホイゼン空軍基地への移動中に、突如スポーク隊の裏切りに遭う。多勢に無勢の中でハルヴ隊の僚機は全員戦死し、辛くも戦線を離脱したエリクも負傷。ラティオ領サピン軍勢力圏内で不時着した所をサピン軍に救出され、とある前線基地に収容される。

・誠実ながら快活な性格だが、細かい点を気にしないややズボラな部分もある。外見は色白の肌に赤みがかかった金髪のショートブロック。スポーク隊の裏切りに遭った際の負傷で、左目を失った。

○カルロス・グロバール(36)

・サピン王国空軍第7航空師団第31戦闘飛行隊『ニムロッド隊』隊長。第7航空師団はサピン空軍内では傭兵で構成される部隊であり、彼の本属はレオナルド&ルーカス安全保障会社の少尉相当官である。

・15年前のベルカ戦争では同じく傭兵として参戦し、数多のエースを見、その信念に触れる。多くの激戦と離別の中で『死なない、死なせない』ことを己の信念として定め、ベルカ戦争やその後の『国境なき世界』との戦闘を生き抜いた。その後は自由エルジア等戦地を転々とするも、数年前に再びサピンへと戻る。ウステイオ・レクタとの開

戦後はエリク達ハルヴ隊と『円卓』で矛を交えた。

・乗機は翼端を黒く染めたMiG-21UPG (MiG-21-93) 『ディビナス』。ミサイルを搭載せず、代わりにチャフ弾を装填した23mm2連装ガンポッドとフレアデイスペンサーポッドを装備している。基本的には友軍との連携を主とし、敵の妨害や僚機の支援を行うことが多い。

・外見は、黒い短髪に褐色肌。ベルカ戦争以来の戦歴を宿すように、軀には至る所に古傷が刻まれている。

・彼が率いる『ニムロッド隊』の構成は以下の通り。

ニムロッド2：オズワルド・ベイカー曹長（31）

ニムロッド3：フラヴィ・ゴール曹長（25）

ニムロッド4：ブラッド・バンフィールド軍曹（27）

ニムロッド5（予備搭乗員）：アレックス・ウルフ伍長（18）

《レクタ共和国空軍ハルヴ隊》

○ロベルト・ペーテルス（44）

『ハルヴ隊』隊長機を務める空軍大尉。レクタ生まれベルカ育ちという変わった経歴を持ち、長いパイロット歴の経験を活かして臨機応変の指揮を行う。戦場を見据える観察眼と動体視力に長けており、状況に応じて編隊を4機編制、2機×2編制、単機編制

(散開)などに組み分けるといふ定型を持たない戦術が得意。

・15年前の『ベルカ戦争』の際には戦闘機パイロットとして参戦していたらしく、時折自慢げに話題に上らせる。本人曰く、激戦が繰り広げられた『円卓』での空戦も経験があるとのこと。

・臨機応変を体現しているのか、物事に拘泥しない性格で、適当な部分も目立つ。人当りは軽く、常に笑っているような細かい目と刈り上げにした金髪が特徴。小太りの体格も相まって、外見的にはその辺にいる一般人のおじさんといった雰囲気醸し出している。

・後に、上記の経歴は偽りであったことが判明する。その正体は、15年前のベルカ戦争でベルカ空軍エースパイロット部隊の一つとして名を馳せた『グリーン隊』の2番機、グリーン2ことフアビアン・ロスト。ベルカ残党との繋がりは無く、戦争の後も空を飛びたい一心で、身分を偽ってレクタ軍に入隊した。

アルヴィンの正体と目的に勘付きサピンへの亡命を企図するも一步遅く、それを察知したスポーク隊の裏切りに遭い、アルヴィンの手によって戦死。

○ヴィルベルト・ブロック(45)

『ハルヴ隊』3番機で、階級は曹長。生粋のレクタ育ちで、輸送機パイロットを経て戦闘機部隊へと転向した経歴を持つ。堅実な飛び方が特徴で、ロベルトとエレメントを

組む際には僚機としてその背をサポートする。

・15年前の『ベルカ戦争』時には既に従軍していたが、レクタ共和国の参戦は戦争の終盤であり、かつ当時は輸送機のパイロットでもあったので、直接戦場には立っていない。

・色黒の肌に黒いパンチパーマ、厚い唇にいかつい体格とかなり強面な外見だが、丁寧な物腰と思いやり深い性格で隊を支える縁の下の力持ち。隊の最長老ということもあり、小隊メンバーからは『ヴイルさん』と慕われている。ちなみに、外見に似合わずかなりの甘党。

・スポーク隊の裏切りに遭った際には、被弾した機体から脱出した所を狙い撃たれ、戦死した。

○クリステイナ・ファン・レイデン（20）

・小隊唯一の女性パイロットで、『ハルヴ隊』4番機に当たる伍長。パイロットとなつてから日が浅く、技量も心許ないものの、いざという時の度胸は人一倍。2番機のエリックとエレメントを組むことが多く、散開して自由戦闘となった際にも無意識に誰かの後方に就く傾向がある。

・外見は色白の肌に、栗色のボブヘア。明るく真面目な性格だが、軍人となつて日が浅いこともあり甘さや緩さも目立つ。ややおつちよこちよい。エリックを先輩として慕

うと同時に、好意も覚えている模様。

・後のスポーク隊の裏切りに遭った際には、ベルカ残党の無人機X-02『ワイバーン』に立ち向かうも敵わず、エリクの目の前で包囲され撃墜、戦死した。

《レクタ共和国空軍スポーク隊》

○アルヴィン・ヴィレムセン（48）

・レクタ共和国空軍第5航空師団第99教導飛行隊、通称『スポーク隊』を率いる空軍少佐。演習などで仮想敵役を務める、所謂アグレッサ―部隊に所属し、年齢に似合わない鋭い機動を以て演習相手を翻弄する。その優れた技量と指導力で、パイロット達の技量向上に貢献してきた。基本的に通信ではコールサイン『スポークー』を用いるが、後席のフィンセントと区別を図る際にはTACネームの『アウル（フクロウの意）』を用いることもある。

・搭乗機は、レクタ仕様に変更された『グリペンD』。アグレッサ―部隊らしく、緑系のダズル迷彩という目立つ塗装パターンを施されている。

・黒髪のオールバックに鋭い目、笑みを見せない口元と、ヴィルベルトとはまた別方向で強面な外見。性格も見た目に違わず峻厳だが、身内に対しては時折思いやる素振りを見せることもある。

・後に、レクタ衰亡を企図し暗躍するベルカ残党であったことが判明する。その素性



は、15年前のベルカ戦争で第3航空師団の一翼を担っていた、『グラオガイスト隊』隊長のカスパル・ゲスナー。同じくベルカ空軍に所属していたロベルトによつて正体が看破されることを恐れ、ハルヴ隊が孤立する状況を作り出し彼らを謀殺する。

○フィンセント・デ・フロート（38）

『スポーク隊』に所属する曹長。かつてはパイロットをしていたが、『ベルカ戦争』において負傷し左目の視力を失ったため、現在はアルヴィン機の後席で補助を行っている。堅実な観察眼を持ち、時として前線航空支援として管制官役を務めることもある。ちなみに、同じ機体に搭乗しているため通信では彼も『スポーク1』を名乗るが、アルヴィンとの区別のためTACネームの『カルクーン（七面鳥の意）』を用いることも多い。

- ・上述の理由で、左目に眼帯を付けているのが特徴。髪にはこだわりがあるらしく、茶髪の髪をソフトモヒカンに整え、折を見ては櫛で整えている。敵役を担う部隊の立場上他の部隊とは仲が悪化しがちな部分を緩和すべく、緩い物腰で立ちまわる場面が多い。
- ・その正体は、15年前のベルカ戦争でカスパル（アルヴィン）の僚機として活躍していた『グラオガイスト3』ことオットー・ボルツマン。ベルカ空軍、『国境なき世界』へと転戦する中で多くの仲間を失うも、隊長のカスパルと共に生き残り、レクタ内部で暗躍する。

○パウラ・ヘンドリクス（20）

『スポーク隊』2番機を務める空軍准尉。アルヴィンと彼女の父親はかつての戦友であり、父が戦死した後はアルヴィンに扶養されて育ってきた履歴を持つ。そのため、アルヴィンに対する信頼は篤い。耐G性が高く、特に近距離の格闘戦を得意とする。搭乗機はアルヴィン機同様に緑系統のダズル迷彩を施されたレクタ仕様の『グリペンC』。

・白い肌に、色素が薄く銀色に近い金髪。髪型にこだわりは無いようで、癖つ毛のショートを適当に整えている。体は歳不相応にいろいろと小さく、耐G性の高さもここに起因していると思われる。峻厳な扶養者（アルヴィン）に影響されたのか演習の相手役に対する対応は厳しく、時に辛辣。口数はやや少なく表情にも乏しいため、一見何を考えているか分からないことも多い。多くの戦場を共にする中で、エリクから父性にも似た複雑な思いを感じるようになる。また、クリスとは犬猿の仲。

・後に、アルヴィン同様ベルカ残党の流れを引く反乱勢力であることが判明する。その正体は、かつて『グラオガイスト2』としてカスパルの僚機を務めていたテオ・ニーダーハウゼンの娘、パウラ・ニーダーハウゼン。年齢も16歳だが、軍入隊の資格の関係から20歳と偽っている。ハルヴ隊謀殺の際はエリクを最後まで追い込むも、殺害することができなかった。

《ウステイオ共和国空軍ガルド隊》

○パスカル・ジェイク・ベケット（21）

・15年前の『ベルカ戦争』で名を馳せた伝説の傭兵部隊『ガラム隊』の名を継ぐ空軍大尉。愛称はPJ。その甘いマスクと卓越した技量からかの『サイファー』の再来とも呼ばれ、『ガラム隊』なきウステイオを牽引する象徴として『ガラム』を名乗るに至った。ちなみに、叔父はかつて先代の『ガラム隊』と飛んでいたらしい。

・乗機は両翼端を青く染めた灰色地のF-2A。先代を思わせる鋭い機動で、『テュールの剣』攻防戦を含む多くの戦闘で活躍している。

○レイモンド・レッドラップ（40）

・『ガラム2』のコールサインを持つウステイオ空軍中尉。15年前のベルカ戦争から参戦していた経験を持つベテランであり、かつてパスカルの叔父とも同僚だった。その縁と長い経歴を買われ、パスカルの補佐に抜擢される。

・乗機は片翼端を赤く染めたF-2A。かつての『ピクシー』を思わせる安定した飛び方で1番機のパスカルをサポートする。なお、『ベルカ戦争』時には『クロウ2』を名乗っていた。

《ルーメン・メデイエイション・エージエンシー》

○サヤカ・タカシナ（年齢不詳）

・調達代行業者ルーメン・メデイエイション・エージエンシー（L. M. A.）に所属する20代後半と思しき女性。につこりと微笑を崩さない表情にきっちり纏った黒い

スーツと、傍目には何を考えているか分からない、得体の知れない人物と思われることが多い。主に武器弾薬類の調達仲介のため、ヴェスパール空軍基地に出入りしている。

【歴史】

注) ○はゲーム本編での出来事、☆は本作品での出来事を示す。

○(1985年以前)：ディトリッヒ・ケラーマン率いるベルカ空軍ズィルバー隊、マインツ山脈においてレクタ解放戦線の戦闘機隊と交戦、制空権を奪取。解放前線が居を構えるコールへの侵攻を確実なものとする。

○1988年2月8日：ゲベートがベルカから独立。

○1988年5月12日：ウステイオがベルカから独立。

○1991年8月：ファトがベルカから独立。

○1991年8月29日：ベルカ連邦の経済悪化に伴い、五大湖と北方諸島をベルカからオーシアへ割譲。

○1991年8月～12月：レクタがゲベートから独立。

○1991年8月～12月：ラテイオがウステイオ東部を併合。

○1995年3月25日：ベルカ戦争開戦。モードル制圧戦でベルカ空軍とファト空軍が交戦、ファトのF-14D部隊、インデイゴ隊により壊滅。

○1995年4月3日：オーシア軍、反攻を開始。以降、周辺国が次々と参戦する。

○1995年5月28日：ベルカークウステイオ国境付近の空域『円卓』にて大規模な制空戦が発生。激戦の末、オーシアを始めとする連合国が制空権を確保する。

○1995年6月5日～6日：バルトライヒの決戦。ベルカ軍による核の使用により戦況は混乱し、凄惨な消耗戦となる。ベルカ軍、バルトライヒ山脈の北方へ撤退。

○1995年6月20日：ベルカ戦争終結。

☆2010年8月30日：レクタ共和国ヘルメート空軍基地に教導隊『スポーク隊』が赴任し、演習を開始する。

☆2010年9月21日：レクタ・ウステイオ・ラテイオ国境付近にて、国境で対峙していたウステイオ・ラテイオ軍機による領空侵犯未遂事件が発生。ラテイオ軍機撃墜から戦闘に突入し、レクタ空軍『ハルヴ隊』とラテイオ航空部隊が交戦。ラテイオ航空部隊を退ける。

○2010年9月23日：オーシア領西端のサンド島へ国籍不明機接近。編隊長バーレット他1名を残し、出撃部隊が全滅。

☆2010年9月27日：ラテイオ共和国、ウステイオ共和国ならびにレクタ共和国へ宣戦布告。ラテイオ軍は開戦と同時にヘルメート空軍基地へ空襲を行い、その戦力を半減させる。同日午後、ラテイオ軍は機甲部隊を進発させ、レクタ各地へ進軍を開始。ハルヴ隊、レクタ中部へ進軍したラテイオ部隊を辛くも退ける。

○2010年9月27日：ユークトバニア、オーシアへ宣戦布告。同日中にオーシアのセント・ヒューレット港へ空襲が行われる。

☆2010年9月30日：レクタならびにウステイオ、対ラテイオ攻勢作戦である戦域攻勢計画8601を発令。これに伴い、レクタ軍はラテイオ北西部へ侵攻。謎のレーザー兵器による攻撃を受け損害を受けるも、ラテイオ領内に橋頭堡を築くことに成功する。

○2010年9月30日：オーシア領内イーグリーン海峡にてユークトバニア軍の奇襲。同時に展開していたユークトバニア軍戦闘潜水空母シンファクシにより、オーシア軍航空母艦バルチャー、バザード撃沈。

○2010年10月4日：ユークトバニア軍によるサンド島上陸作戦。同島航空部隊の活躍により上陸は阻止され、シンファクシが撃沈される。

☆2010年10月21日：ウステイオ・レクタ連合軍、『ラグナロク』作戦を発動。ウステイオ軍エース部隊『ガラム隊』とエリクラ『ハルヴ隊』の活躍により、ラテイオ軍が擁する多塔式高層化学レーザー兵器『テュールの剣』の破壊に成功。10月28日には残存部隊を撃退し、その占領に成功する。

○2010年10月22日：和平交渉のため中立国ノースポイントへ向かうオーシア大統領ハーリングの搭乗機が墜落。8492飛行隊によって救援（拉致）される。

○2010年11月1日：オーシア、ユークトバニアへ上陸作戦開始。

☆2010年11月2日：サピン王国、レクタ・ウステイオとラテイオ間の戦争に対し武力介入を表明。同日中にレクタ・ウステイオ軍と交戦を開始する。

☆2010年11月5日：サピン軍空母艦載機、ウステイオ・レクタ領内を空爆。ノースオースリア州スーデントールからの補給路が寸断される。

☆2010年11月7日：ウステイオ・レクタ連合軍、『円卓』を強行突破し空中輸送を敢行。サピン航空部隊の妨害に遭うも、辛くもこれを退ける。

☆2010年11月12日：ラテイオ軍、レクタ首都コールへ攻撃機による無差別攻撃を実施。都市南部へ損害を与えるが、攻撃部隊は全滅する。

○2010年11月14日：ユークトバニア軍戦闘潜水空母リムファクシ撃沈。

☆2010年11月18日：ハルヴ隊、新任地であるスヴォレフホイゼン空軍基地への異動中に、密かにベルカ残党として活動していたスポーク隊の裏切りに遭う。夜明け前から早朝にかけての戦闘で、ロベルト・ペーテルス、ヴィルベルト・ブロック、クリステイナ・ファン・レイデン戦死。エリク・ボルストは不時着し、同日中にサピン軍によつて発見、救出される。

○2010年12月6日：サンド島の航空部隊を主軸としたオーシア軍、ユークトバニア軍クルイーク要塞を攻略。

☆2010年12月6日：サピン領内ピレニア山脈にてサピン軍とウステイオ・レクタ連合軍が交戦。サピン軍のレーザー兵器『カリヴルヌス』が被害を受け使用不能となる。アルヴィン・ヴィレムセンおよびヴィンセント・デ・フロート戦死。

○2010年12月7日：スパイ嫌疑を受けたサンド島中隊、同島を脱走。同日中にオースリア空軍機によって撃墜される。

○2010年12月9日：『ラーズグリーズ』を名乗る謎の航空部隊により、ベルカ領内に幽閉されていたハーリング大統領救出。ユークトバニア戦線は泥沼化し、オースリア軍はユークトバニア首都攻略に失敗。

☆2010年12月10日：ファト連邦、ユークトバニア陣営に加わり隣国ウエルバキアへ侵攻を開始。オースリア東方諸国の前線は泥沼化の一途を辿る。

☆2010年12月12日：エリク・ボルスト、L. M. A. のサヤカ・タカシナと共に謀しヴェスパルテ空軍基地を脱走。以降、L. M. A. 所属となる。

○2010年12月19日：オースリア軍、大気機動宇宙機『アークバード』によるユークトバニアの都市攻撃を企図。ラーズグリーズ航空部隊によりアークバードは撃墜され、計画は頓挫する。

☆2010年12月19日：ベルカ残党によりグラティサント要塞跡地に幽閉されていたガラム隊の両名が救出される。



○2010年12月22日：ハリリング大統領、秘密裏にオーシア首都オーレットへ帰還。22日夜半から23日払暁にかけてユークトバニア元首ニカノール首相の救出作戦が実施される。

☆2010年12月27日：エリク、サヤカおよびガルム隊、ウステイオのヴァレー空軍基地を訪れる。

○2010年12月29日：セレス海海戦発生。ラーズグリーズを有する小規模機動部隊により、交戦したユークトバニア、オーシア両艦隊が全滅する。

○2010年12月30日：スーデントール制空戦が発生。同時にベルカ残党によるオーシア・ユークトバニア扇動の陰謀が明らかとなり、戦争は集結へと向かってゆく。翌日、ベルカ残党の計略により地球へ向け落下する戦略衛星軌道砲『SOLG』をラーズグリーズ航空部隊が迎撃、これを破壊する。

## 第23話 報復の短剣（ダガー）

重々しい沈黙が、二人の男の間に漂う。

聞こえるものといえば、仕切り代わりに広げた薄幕の向うで歩くドクターの足音、刻々と秒を刻む時計、そして全てを吐き出し、幾分荒くなつた青年の呼吸ばかり。エリクと名乗つたそのレクタ軍人は拳を震わせ、残つた右目を自らの身体へ伏せている。

息を吸い、止めること数秒。椅子の背もたれに体を預けた男——カルロスは頭を整理するように、大きく息を吐いた。濁りきつた脳内の空気を入れ替えなければ、予想外の渦に巻かれた思考を整理することも叶わない。

手を組み、口元を隠すように顎を乗せ、カルロスは目線を床一点へと落とす。15年前に端を発する、『灰色の亡霊』の遠大な復讐劇。青年の口から紡がれたその策謀へ、しばし思いを巡らせるように。

「…まさか、な…。もう15年も経つというのに、ベルカ公国の亡霊がこんな形で生きていたとは」

驚き、そして言い知れない恐れ。おおよそ同じ人とは思えない『亡霊』の執念に、反射的に抱いた感情はその二つだった。

エリクが語った顛末によると、カスパルらベルカ残党は身分を偽りレクタに潜入。その内部で諸国間の戦争を誘発し、かつ継続させるべく活動しているのだという。それに勘付いたエリクの上官はその掌中から脱しようと亡命を画策するも、その最中に察知され、こうして謀殺の憂き目にあつた。言うなればエリクは、それらに巻き込まれた不運な人間の一人だったのだろう。

そしてここからは想像だが、おそらくベルカの残党はレクタのみに潜伏している訳ではあるまい。戦争の継続を目的としている以上、明確な勝敗が生じない戦局を作り出す為には、敵味方双方にシンパを潜り込ませることは必要不可欠となるからだ。シーソーは、片方のみに人が乗っては成立しない。

レクタとともに足並みを並べ戦争へ向かうウステイオ、劣勢にも関わらず徹底抗戦を続けたラテイオ、敢えてレクタとの緊張関係を崩さないゲベート。サピンにしても、あと一步でラテイオとレクタの戦争が終わるタイミングで武力介入を開始した辺り、ベルカ残党の意志が働いていないとは言いつれない。そもそも大本の戦鬪の引き金がオーシアとユークトバニアの手で引かれ、今なお先の見えない泥沼の戦いを繰り広げていることを顧みれば、この二大国にだってベルカ残党が潜入していると疑えば疑えるのだ。なにせ、オーシアはベルカにとつて最大の戦力を以て対峙した敵国であり、ユークトバニアもそのかつての同盟国である。ベルカにとつては、両者とも恨み重なる相手である

に違いない。

それにしても、驚くべきはその計画の遠大さである。周辺諸国に潜り込み、戦争を誘発させて共倒れを狙うなど、かつてこれまで大規模に計画しえた者たちがいただろうか。そして何より、15年の年月を経てなお、諸国を滅ぼしてなお余りある怨嗟を抱き続けた者がいただろうか。妄執と断じるにはあまりにも一徹で鋭い恨みを心に研ぎながら、人は生き続けることができるものなのか。

ふと寒気を感じ、カルロスの上着の襟元を掻き寄せる。心に生じた空寒さが、体にもで伝播したのかもしれない。

「…それで、あんたは一体何者なんだ。アルヴィン…いや、カスパルを知ってるのか？」  
「面識はない。…が、会ったことはある」

「はっ。」

「空で、な。…15年前のベルカ戦争の時、俺はサピン空軍の傭兵として、奴と戦ったことがある」

「…15年前に、奴と…!？」

「当時は黒地に灰色帯の機体を駆り、『グラオガイスト隊』と名乗っていた。ステルス機で気づかない間に接近し、至近距離からの銃撃で落とす戦術を使う強敵だった。ホフヌング近郊で会敵したんだが、俺が所属していた小隊も押されに押されてな。最後の一瞬

で何とか逆転勝ちしたものの、一步間違えていたら俺達が死んでいただろう。本名を知ったのは、後のことだった」

燃え盛る避難民のキャンプ。飛び散る鉄塊と肉片。闇に溶け込む灰色の帯。そして、炎に包まれ消えていく友軍機。脳裏に蘇る赤と黒、血と死の記憶を飲み下しながら、カールロスは邂逅の様をかいつまんで口にした。その名の通り姿見せぬ亡霊のような戦術も、薄皮一枚を残しての辛勝も、いずれも嘘では無い。

確かに嘘では無い、が。

その後の出来事を——連合諸国：否、世界に対し叛旗を翻したクーデター軍『国境なき世界』との戦闘の顛末を、カールロスは咄嗟に隠した。事実としては、上述の戦闘の後、カスパルは『国境なき世界』の一員として戦争の最終局面に参戦し、自分達と交戦。激しい空戦の末に僚機一機を失い、その後行方を晦ませるといふ結末を迎えている。

もつとも、咄嗟にそれを隠した理由はといえば特に深いものがある訳ではない。確かにカスパルの深い怨讐を語る一事でありこそすれ、『国境なき世界』との戦闘は諸国間で未だ公然の秘密として扱われており、当然ながら参戦各国においても公式に語られていないのである。カスパルの顛末を説明すれば当然その『秘密』にも言及せねばならないため、その面倒を避けただけに過ぎなかった。

「そうか…。なら、あんたも復讐の対象の一人かもな」

「奴が今更たつた一人に固執するとも思えないがな。…ともあれ、貴重な話を聞いた。ありがとう」

「ちよつと待て。…この話、どうする積もりなんだ?」

「あいにく俺は一傭兵だ。こんなことを上申した所で、与太話として握り潰されるのがオチだろう。…幸い、正規軍のそこそこの地位に旧友の伝つて手がある。そいつに接触して、折を見て上奏して貰う他無いだろうな」

「奴と…ベルカ残党と戦うのか!?!」

「サピンに実害があればだ。いずれにせよ、この話が事実なら多かれ少なかれ、サピンに影響が出る可能性は否定できない。当面は内部調査に時間が割かれることになるだろう」

「……………」

サピンが、ベルカ残党と対抗するかもしれない。

そんな希望を抱いたらしいエリクの顔が、こちらの言葉の前にみるみる明るみを失い、夏を過ぎた向日葵のように項垂れていく。機体も帰る場所も、全てを失ったエリクにとつて、ここサピンは言うなれば最後の希望。その絶るべき糸の前で無下に遮られれば、エリクならずとも当然の反応だろう。

だが、相貌を陰らせる青年の様に思わず憐憫の情を抱く半面、カルロスはその点を譲

る積りは無かった。そもそも、傭兵とはいえ、自分は今やサピン軍の一員である。たとえベルカの残党が周辺諸国全てを敵視しているといえども、サピンを第一と考えなければいけないというのが、偽ることの無い今の立場だ。こう言うと酷なようだが、現状敵国であるレクタヤウスティオの混乱は、サピンにとつては利益とも言えるのである。

それきり、ぷつりと途切れる言葉。真相に触れる会話の句点を察し、カルロスはベツドの脇から腰を上げた。今の所サピン国内で表立った動きは無いにせよ、真実ならば事態は深刻である。急ぐのは、他国にも派遣されているレオナルド&ルーカス安全保障の同僚を通じた情報共有、日頃取引している中古機械取扱業者への内々の問い合わせ、そしてサピン正規軍にいるニコラスとの接触。前線の人間とはいえ、正規軍の少佐に当たるニコラスの弁があれば、幾分でもこの話が上層部に届く可能性は上がるだろう。

遠大な陰謀の前に、頭脳は巡り、思考は回る。確証を得るには、『国境なき世界』との関わりは。そして他に繋げておくべき相手は。

黒く回る渦のようなその思惟をせき止めたのは、項垂れた顔を再び上げた青年の声だった。

「待て。…あんた、傭兵って言ったよな。それなら、俺を雇う気はないか？」

「何？」

「奴らへの復讐のためには、力が…機体がある。そのために、金も場所もある。俺も戦闘

機乗りの端くれだ、あんたらの力にはなれる」

「聞いたことが無いな。復讐の為とはいえ、敵軍の傭兵に志願か？」

「向こうのベッドの男……あんたの同僚だろ？ 一人欠けてるなら、その穴を埋める人間は必要じゃないのか？」

「……」

思わず、カルロスは息を呑んだ。

突拍子も無い傭兵志願の言葉もその一つ。希望を見出す相貌に、復讐を誓う暗い気配が垣間見えたこともまたその一つ。だが、その最大の要因は、わずかな会話の断片から、向こうのベッドで寝ている男を自分の同僚と察して見せたことだろう。

確かに、向こうの男は読み通りニムロッド隊の2番機——オズワルド・ベイカー曹長相当官である。数日前の『円卓』における空戦で、ウステイオ・レクタ連合軍の輸送機への襲撃作戦に参加した折、護衛に就いていたレクタ戦闘機の攻撃で負傷したのである。忘れるべくもない、中小国レクタの中ではエース部隊として名が知られる、『三月』の塗装を施した部隊だった。

若い見た目の割に、目端はよく利くらしい。

予想外の動揺を胸の皮一つ下に押し隠して、振り返ったカルロスは青年へと言葉を重ねた。



「俺は一兵士で、雇用者じゃあない。俺の一存では決めかねる。それに、『確かめる』ためには何かと時間も必要だ。…いずれにせよ、その体を治すまでは動くにも動けんだろう。今は、身体を休めている」

「…今の俺には、機体カがいる。奴を殺す為なら、悪魔に魂を売り渡したっていい。…期待してるよ」

「……」

目端は、確かに利く。

しかし、危うい。

暗い光を宿した一つの瞳にぞくりとするものを感じ、カルロスは心にそう呟いた。求めるものこそ違えど、その姿は一つ事を求め、徹し、それ故に死んでいった多くのエース達とよく似ている。

15年前のベルカ軍エース『ヴァイス1』、YaK-141『フリースタイル』を駆っていた名も知らぬベルカ残党のパイロット、そしてかつての同僚フィオン。彼らは皆徹し切った故に鋭く、強く、それだけに脆さも併せ持っていた。復讐だけを生きる糧に、その他に残った全てを捨て去ろうとしているエリクの姿は、今は亡き彼らの姿ととてもよく似ている。

暗い響きに答えられぬまま、カルロスは背中越しに手を振るう。

思わず吐き出した溜め息は、全容明らかでないベルカ残党の陰謀という重圧のためか、それともエリクの末路に抱いた一抹の危惧ゆえか。

自らの中に答えを得られないまま、カルロスは扉を開き、寒々とした基地の廊下を渡っていった。

\*\*\*\*\*

ジェットエンジンが回転数を上げ、耳をつんざく轟音が狭い敷地に響き渡る。

遠景には、山頂に雪を被りはじめた山々の稜線。晴れ渡った空は常以上に遠く、開けた光景と相まって、基地の規模以上に広大な印象を与えた。立ち上る白い息も、エンジンから撒き散らされる騒音も、この空や山肌に吸い込まれて消えていくことだろう。

格納庫から這い出て、滑走路に立ち並ぶ機体は合わせて12機。

翼端を黒く染めたMiG-21UPG『デイビナス』を先頭に、サピンの国籍マークを記されたSu-25『フロッグフット』や、見た事のないカナード付きデルタ翼の機体などが機首を揃えて控えている様が認められる。多くは爆装こそしているもの、一貫性の無い雑多な機種構成は、まさに外れ者の傭兵部隊という印象を際立たせていた。

先頭の1機が、タキシングから離陸に入る。一足早く冬が至った山間に、三角翼は風をみるみる孕んで、遠景の白雪を背にふわりと宙へ舞い上がっていった。

主翼下にガンポッドとフレアデイスペンサーポッドを装備したあの機体は、カルロス

の駆る『ディビナス』だろう。以前『円卓』で交戦した『蝙蝠のエンブレム』の部隊——その一番機がカルロスだと知ったのは、つい数日前のことだった。戦場で交戦した間柄とはいえ、特に問われなかったこともあり、自分の素性はまだ知らせてはいない。

サピン王国北東部、第二ヴェスパールテ空軍基地。

ノースオーシア州やウステイオ、ラテイオ西郡にほど近い山岳地帯の隠れ里——。決して広いとは言えない山間のその基地こそが、サピン軍に救出されたエリクが運び込まれた地であつた。元々付近には初代ヴェスパールテ基地があつたというが、15年前の戦争以来放棄され荒廃し、ここは数年前に新たに設けられた基地なのだと言う。傭兵パイロットのみを有する、サピンの中でも特異な基地ということだった。

この基地に收容されて数日の間、脱走の二字が頭を過らなかつたと言えば嘘になる。だが、病室から出られるようになり、基地の周辺を見渡せるようになって、その字もあつたという間に霧散してしまつた。

峻厳な山間地。岩肌と雪に覆われた、荒れ果てた大地。陸路での脱走などまず不可能であり、航空機を奪おうにも一通りの警戒はなされている以上難しい。雪を警戒して機体が露天駐機されていないこともあり、機体の奪取は困難と断じる他無かつた。軍事基地にしては捕虜への監視が緩いように感じていたが、それも納得という所か。

12の機影が飛び立ち、静寂が戻つた滑走路。飛び去つた影を見えなくなつた後も追

い続けながら、エリクは見えぬ『これから』に、しばし思いを馳せた。

『傭兵として雇わないか』。ダメ元でカルロスに頼んだ件は、以降数日を経ても音沙汰ないままである。半ば請われ、半ば希望に縋るようにカスパル達の陰謀を暴露した訳だが、『情報』という交換条件が果たして奴らにどれほど有効かどうか。何せ、相手は金の為ならば裏切りも躊躇わない傭兵なのである。

こちらの希望が通ればよし、通らなければ一か八かの脱走も考えなければならぬ。自由の身でなければ復讐も覚束ない以上、こればかりは譲れない一点だった。捕虜として生きながらえ、戦争が終わるのを待つなどという不確定な未来を当てにすることはできない。

必要なのは、自由と、力。報復を可能とし、奴を殺せるだけの力。それを得るためならば、どんな汚い事に手を染めようとも、悪魔に魂を売り渡しても構わない。力の対価が魂や心だというのなら、いくらでも売り払ってやる。

天を睨み、握りしめた拳。その拍子に、右手の指に固い感触が触れた。

右手首に巻いた、月の装飾入りのブレスレット。まだ皆が仲間として健在だったころ、休暇の折にクリスとともに買った思い出の品。転落の中で久しく忘れていた思い出が、反射した月色の光とともにエリクの脳裏に蘇った。クリスも、皆も、俺の背を押してくれているのかもしれない。

今や苦みの入り混じった、甘く楽しかった思い出。

そんな追憶の去来に終止符を打ったのは、唐突に鳴り響いたけたたましいサイレン音だった。

《空襲警報！空襲警報！方位005より機影6接近中！距離4000、直進！迎撃要員はただちに搭乗せよ！繰り返す！方位005より…》

「空襲!?方位005…ウステイオ軍か!」

「もう目と鼻の先じゃねえか、ボロレーダーめ!」

「マズい時に来やがって…!回せ—!」

静寂がにわかにさざめき立ち、混乱の入り混じった熱狂が基地を包む。

開く格納庫のシャッター、何事かを叫ぶ基地要員。兵士が受け持ちの対空砲へ走り、待機要員と思しきパイロットがエンジン点火を指すように腕を回しながら、基地施設から走りだしてくる。サイレンと管制官の声は割れた音を響かせ続けており、人の精神をかき乱して止まない。

しかし、近い。

山陰に沿って接近したのか、敵の位置は予想以上に近い。既に北の彼方には浮かぶ黒い機影が6つ、肉眼で見えるほどにまで近付いて来ている。

格納庫から迎撃機が2機、のそりと歩き出て来る。全てのパイロットが格納庫の詰め

所にいる訳では無かったのか、残る2人のパイロットがコンクリートの上を格納庫へと走っていく。

遅い。接近する敵の速度を省みると、人の走る速度も、ようやくタキシングに入った迎撃機の速度も、まるで地上を這い回るように遅い。馬鹿が、何で近い所に待機していなかった。

迫る。空から敵機が迫る。

迎撃機が滑走路を走る。

パイロットが格納庫まであと一步の所へ走り寄る。

火線、二筋。地上の対空砲。

全てを睥睨しながら、敵機は悠々と降下してくる。

速い。

遅い。

間に、合わない。

轟音、一拍遅れて銃声。

咄嗟に身体を地面に投げ出し、エリクは両手で頭を覆う。

頭上を掠めるエンジン音。それらが過ぎ去り頭を上げた先には、銃弾で粉々となった肉塊が二つと、爆発の炎に包まれる機体が2機、赤と黒に濡れて転がっていた。

「……!!」

目の前に広がる血と鉄の海に、かつての記憶が蘇る。

忘れもしない、ラティオとの戦争が始まった最初の日。真夜中の空襲、無残に人の形を失いバタバタと倒れていく兵士達、離陸することすら叶わず落ちていく機体の姿。国と立場の違いも忘れ、かつてその時の無念と怒りが、今再び心に宿る。

レクタにとつて、ウステイオは同盟国。

そんな最低限の理性すら忘れ、エリクはかっとな激した。

「…回せ！回せー!!」

人の痕を越え、血の足跡を踏み、エリクは格納庫へと走り込む。

機体は、と中を探るまでもなく、エンジンを回している機体は2機しかいない。デルタ翼と高い尾翼に、細く詰まった機首。第4世代機以降主流となるカナード付きデルタ翼機と異なり、機動性と揚力を補う機首のカナードは装備していないように見える。元乗機『クファイル』をより簡素にしたようなその姿は『ミラーージュⅢ』に似ているが、機首はより細く、些か頼り無さげにも見えた。

間近で搭乗員の死を目の当たりにしたためだろう、頭を隠す者、司令塔へ連絡を取る者、奥へ走り込む者など、格納庫の中は混乱の極致にある。エリクは人をかき分けながら迷うことなく稼働状態の1機に駆け寄り、たん、と地を蹴って機体へと脚をかけた。

「おい！こいつ使えるか!？」

「な…お、おい、誰だお前は!？」

「そんな場合か！いいから早くストップパーを外せ!」

「…！インターセプトだ、チェーン引け！早く!」

「班長!？」

「どうせ他に上がれる人間はいないんだ。いいから、急げ！また反転してくるぞ!…お  
いお前、『ダガー』…もとい『ミラージュ5』の経験はあるか!？」

「いや、ない。系列機なら、『クファイルC7』は愛機だった」

「十分だ。運動性も出力も『クファイル』には劣るが、軽い分加速性はいい。ただしレ  
ーダーは無いから、周りをよく見ろ」

レーダー無し、軽量、加速性はミラージュ譲り。パイロットの傍らから拾い上げてい  
た血濡れのヘルメットを被り、計器類に目を走らせながら、エリクは整備班長らしい男  
の言葉を詰め込むように反芻していく。燃料計、回転計、いずれもよし。細い機首ゆえ  
か『クファイル』より視界は広い印象だが、計器類の配置や機体の高さは『クファイル』や  
邀撃待機で使ったことのある『ミラージュIII』と瓜二つだった。旧式とはいえ癖を熟知  
したミラージュシリーズならば、ある程度の機体性能を覆せる自信はある。

残る問題は、滑走路の無事。そして、反転してくるであろう敵の第二波攻撃。



「敵は!？」

「5機が反転して来ている!……くそ、今出たら狙い撃たれるぞ!」

「了解……! 奴らが行ったらすぐに上がる! 合図頼むぞ!」

叫ぶように言い放ち、エリクはキャノピーを閉じて迫る敵に備えた。

レーダーも無く外の音も聞こえないため確かめようがないものの、頭を庇いながら壁や柱の陰に隠れる整備員の様が、その到来が近い事を告げている。

避けようの無い運だけが生死を左右する、一瞬の間。その瞬間、エリクは祈った。

かつての開戦のあの日は神へ。そして今は——仲間に裏切られ、救いという神に見捨てられた今は、悪魔へ。復讐を司る魔へと、エリクは祈った。

跳弾。

火花、注ぐ陽光、そして血飛沫。がん、がん、と機体にもいくつか衝撃が走るが、幸いに致命傷には至っていない。ひとしきりの弾雨は過ぎ、敵の航過を無言の内に物語る。

助かった。

安堵の息一つ、キャノピーから見降ろす先に、うずくまる影が見える。

先ほど機体に取りついていていた整備班長。右肩から先を吹き飛ばされながら、それでも残った左腕で外を指し、懸命に何かを叫んでいる。

『行け』。

口の動きが、そして心が伝えたのは、短くも決死の意思が籠ったその言葉。エリクは深く頷き、ブレーキを解除して操縦桿を押し込んだ。

機体が、ゆっくりと歩み出す。

影から陽の下へ出、タキシングウェイから伸びる滑走路へと舵を切る。路は一つ。滑走路上で燃え盛る2機の残骸の間。まっすぐ伸びた白い破線の真上。

エンジンの回転数が上がる。

振り返った先で、反転した敵機のうち2機がこちらを指す様が映る。

止まるか。止まってたまるか。

右目を真正面に戻し、エリクはフットペダルを目いっぱい踏み込んだ。

「申告省略、迎撃機離陸する！滑走路上への対空砲火を止めてくれ！」

《な…!?!ちよつと待て、お前は誰だ!?!官と姓名を…》

「…上がるぞー！」

加速。機体を揺らす振動、徐々に後ろへ流れていく光景。

踏み込む深さとともに、機体に速度が乗り、翼が風を孕み始める。

後方、2機。近い。目算にしておおよそ800、ぎりぎりの距離。こちらの離陸直後

を狙い撃つ算段と窺い知れる。

——それなら。

ふわり、と機体を包む浮遊感。接近し、後方より迫る光軸。

それらを感じると同時に、エリクはフットペダルを踏み込んだまま操縦桿を左手前へ引き上げて、上昇する機体を強引に左捻り。機体が失速注意のアラートを鳴らすのも構わず、機銃弾の隙間を抜けるように『ミラージュ5』を捻り上げ、機体を強引に離陸させた。視界のすぐ前には、油断と速度差でオーバーシユートをしてしまったウステイオのF-16Cが2機。残った右目と照準器、それを結んだ、光で描かれた十字の中心――。

「まず、1機――」

『ミラージュ』シリーズに搭載された30mm機関砲は、命中さえすれば並みの戦闘機などひとたまりもない。いかに優秀な第4世代機として知られるF-16Cといえども、低空にして低速という致命的な条件下に置かれた状態ではその性能を発揮することは叶わず――灰色の胴体に30mm弾を穿たれ、爆散。暴力的に広がる爆炎を抜けながら、エリクは眼前のもう1機へと狙いを定めた。そちらは横旋回に入り始め、低空域でも分のある格闘戦に持ち込もうとしている。他の4機のうち1機は上空に回避し、3機は施設攻撃後の反転中であるため、こちらを射界に捉えるにはまだ及んでいない。

――ならば。

エリクは操縦桿を右へ倒し、右旋回に入るF-16の鼻先へ機銃弾を発射。回避の為敵機が左へと舵を切るのを見越して、その頭上へと『ミラージュ5』を加速させた。そう、あたかも機体ごとぶつけるように、胴体で覆いかぶさるように肉薄しながら。

振り向くパイロットの顔が凍りつく。

ダメ押しに、機銃弾数発。敵機の翼を機銃が掠め、すぐ下に迫った地面へ着弾の火花を爆ぜさせる。

高度にしてわずか300。こちらを機銃弾で狙う距離にまで降下し、かつ低速のまま旋回したことも相まって、F-16の高度は先ほどよりさらに低い。逃げ場のないこの状態で頭上を抑えられ、衝突警報を鳴らすほどに急接近で脅かされれば、その結末は一つしかない。

視界の端で急旋回し、下方に消える機体。次いで響くは衝撃、振動。

機体の下から硬盤を削るような轟音を感じ、エリクは操縦桿を引き上げる。

左旋回から見降ろしたその先では、退路を塞がれた『ファイティング・ファルコン』が、褐色の地面にめり込むように主翼をへし折り、地上に横たわる様が見て取れた。

低空下での威嚇と機動制限を織り交ぜた無力化戦術の一種——マニユールバキル。弾丸を使わずに敵を無力化する術として話聞いたことはあったが、実際の空戦で使用するのは初めてだった。離陸直後を狙う為敵機が低速で降下しているという好条件が揃

わなければ、おそらくこう易々と成功はしなかつただろう。

見上げた空では4機が集い、明らかに惑った挙動でこちらを見降ろしている。

見定められた限り、残る敵の編成はF-16『ファイティング・ファルコン』タイプとF-4『ファントム』タイプがそれぞれ2機ずつ。本来のこちらの戦力と基地の規模、敵編成を見る限り、この基地の戦力を探りあわよくば漸減しようという意図を持った、強行偵察という所だろうか。敵の油断もあり2機は何とか落したが、残る4機に一斉にかかられば、流石に『ミラージュ5』では心もとない。

互いに出方を探る、沈黙数秒。

まるで数分にも感じたその時間の後、敵編隊は翼を翻し、元来た北の方向へと機首を向けて行った。偵察と一定の戦果を上げた以上、長居は無用ということなのだろう。懸命な敵の判断に、エリクはようやく安堵の息を漏らした。

《ニムロッド1よりヴェスパ―テ管制室。要請により急遽引き返して来た。無事か?》

《あ…ああ、こちらヴェスパ―テ管制室。迎撃隊の活躍により、敵部隊は撤退した。…が…迎撃待機のパイロットは全員戦死したと連絡が入っている。——管制室よりその『ミラージュ5』!誰だ、お前は!》

「俺?…ああ、世話になってたレクタの捕虜だよ。機体、勝手に使って悪かったな」

《な、何い!?!レクタの捕虜!?!》

《…お前…エリク!?…何なんだ、お前は、一体…》

緊急電を受けて戻ってきたのだろう、MiG-21UPG『デイベナス』が2機、基地全体を俯瞰するようにゆっくりと旋回しているのが目に入る。それはまるで滑走路で燃えるサピン軍機も、撃墜されたウステイオ機も、そして唯一空を舞うこちらも見定めて、たった今起きた状況を探るような挙動だった。先のコールサインが聞き間違いでなければ、相手は黒い翼端で揃えたニムロッド隊の1番機、すなわちカルロスに違いない。

基地管制室へ向けた通信を切り、エリクはカルロスだけに向けて回線を開いた。そう、まるで隠していた悪戯を告白する子供のように。

「よく知ってるだろ? 円卓でも手合わせした仲じゃないか。俺は、エリク・ボルスト元レクタ空軍大尉。…『三日月(メツザ・ルーナ)』部隊こと、ハルヴ隊の2番機だ」

《…!!お前、が…!?!あの、レクタの『三日月』!?!》

「黙ってたのは悪かったよ、聞かれなかったしな。…で。俺を雇うかどうかっていう前の話、どうなった?」

おそらく聞き覚えているであろう『三日月』の名を出した瞬間、ヘルメットのバイザー越しに、旋回するカルロスと確かに目が合った。機体も、場所も、立場すらあの時とは異なるものの、互いの飛び方とその様は、『円卓』の空で邂逅したあの時そのままである。

確かに、通じた。その感覚一つを胸に、エリクは一足早く視線を外し、『ミラーージュ5』の翼を翻した。翼の下では、燃え盛る残骸に向け消防隊が集い始めている。

《……………考えておく》

「期待してるよ」

エンジン音に入り混じった、男の声。

一抹の暗さが滲んだ笑みを口端に佩きながら、エリクは大きく機体を旋回させ、滑走路の侵入位置へと機体の鼻先を向けていった。

## 第24話 過去の残影

「結論を聞かせて欲しいな。例の件、どうなった」

「……………」

傾いた太陽が差し込む暗い空間。機体の残骸やジャンクパーツが山のように積まれ、さながら機械仕立ての剣山の様相を呈する倉庫の中に、静かに音が響いている。一つは、先ほど発したエリクの残響。そしてもう一つはそのガラクタの山を前にうづくまつた人影が、部品を物色するように拾っては放り投げる音。がちやん、と離れた所で音がするたび、それは山肌を崩して、がらがらと小さく連鎖崩落を引き起こしている。

ヴェスパ―テ空軍基地の主要格納庫の端に連なる、第4格納庫。それが、ここの正式な呼び名である。

尤も、他3つの格納庫で十分な広さが確保されていることもあり、実質的にこの倉庫は『格納庫』たる体を成しているとは到底言い難い。墜落機と思しき前半分しか残っていないMiG-19『ファーマー』に、翼が殆どもぎ取れた『ミラージュIII』。床に転がる電子基板に無数のビス、果ては葉莖に血の付いたゴーグル。かつて上司だったロベルト隊長の居室もゴミ屋敷同然だったが、今のこの様を顧みれば隊長の居室など可愛いも



のだっただろう。そう思わせる程に、今の眼前の状況は無秩序なこと甚だしい。

暗がりの中、よくよく目を凝らせば奥の方に五体満足な機体もいくつか見られるが、今の所エリクはさして興味を示さなかった。先にカルロスから聞いた所によると、パイロットが死亡し乗り手を失った機体がここに突っ込まれるのだという。多くは旧式機であるのは勿論、新米の整備兵が整備の実習代わりに多々弄り回しているため、飛ぶことすら保障できない。『目的』を達するために、『兵器を積載し飛べる事』が最低条件である以上、それらの機体は今のエリクにとって無用の長物だった。

奥へ向けていた目をうすぐまる背中——作業着を着たカルロスの背へ戻し、待つこと数秒。放り投げられた防弾板ががらん、と地に跳ねた瞬間、不意に聞こえたふう、という音は溜息だったのだろうか。片膝を付いたまま振り返ったカルロスの顔は、埃と油で汚れていた。

「少し待て。今取り込み中だ」

「待てない。俺には時間が無いんだ。決まっている所まででいい、聞かせろ」

「時間なら腐るほどあるだろう。お前はまだ若いんだ」

「俺の年齢の問題じゃない、戦争の話だ。：俺は、必ず奴らに復讐する。その為には、奴らが戦場に出る今を狙うしかないんだ。戦争が終わっちゃ、そのチャンスも無くなることになる」

「……」

「俺は、すぐに戦場に戻りたい。…戻らなきゃ、ならない」

開いた扉の外で、斜陽が徐々に赤みを帯びてゆく。

傾く陽射しに目が眩んだのか、逸るようになくしたてるこちらの言葉を不快に思ったのか、一瞬陰るカルロスの顔。その様にも構わず、エリクは一息にその偽らざる思いを言い募った。

燃え落ちていくクリスの機体。隊長の最期の言葉。皆の、笑顔。言葉の最後に過った光景に、拳を震えるほどに握りしめる。太陽のわずかばかりの暖かさも、冬の寒気と復讐の一心で冷えた拳を暖めることは叶わない。

迷うように泳ぐカルロスの瞳。しばしそれが床に流れ、瞼で遮られる。

断ち切るように再び開かれた鳶色は、まっすぐにこちらを向いていた。

「結論から言う。捕虜移送の件は無しだ。傭兵への志願は好きにしろ」

「そうか…！ありがとう。悪いな、手間取らせて」

「何、捕虜収容の申告は未提出だったからな。俺より基地の事務方に礼でも言つてやれ」

「ああ。…あんたの所は雇う気は無いのか？」

「あいにくレオナルド&ルーカス安全保障の経営は火の車だ。新しく人間を雇う余裕は無い。よその民間軍事会社を見つけたら、個人経営するなり、自分で当てを探してく

れ」

また、空に上がれる。戦う為の——奴を殺す為の力を持つことができる。傭兵としての道が拓けたことを実感し、エリクの頬にば、と笑みが刷かれた。

方針さえ固まれば、あとは自分の手で準備ができる。半ばカルロスの会社を当てにしていなくてもなかったが、にべもなく断られれば、個人で傭兵稼業を考える他ないだろう。今から民間軍事会社を見つけて手続きを行うには、いかんせん時間が惜しい。

それにしても、案の定と言うべきかカルロスの会社は相当厳しいらしい。そもそも今どき第3世代機を使うなど、緊急で戦力を整備したい中小国か相当に貧乏な所くらいである。オーシアを始めとした大国でもF-5E『タイガーII』やF-4E『ファントムII』といった第3世代機を保有してはいるものの、それらは往々にして近代化改修を施されており、多くは第一線から既に退いている。

そんな世界の情勢を顧みれば、原型機の就役から優に半世紀は経過しているMiG-21を未だに騙し騙し使わざるを得ない辺りに、その事情は滲み出ていた。

…もつとも、この点に関してはエリクも人の事は言えない。本来の搭乗員である傭兵が死亡したことで、先日の迎撃戦で使った『ダガーA』を当面使用できるようになったのだが、この機体も元を正せば『ミラージュ5』——すなわち、MiG-21『フィッシュベッド』と同じ第3世代機なのである。

その素性を辿れば、些か複雑である。

素体である『ミラージュ5』の出自は、オーシア東方諸国の一つゲベートに由来する。80年台後半のベルカ連邦崩壊に伴い独立したゲベートでは、経済力やパイロットの練度も考慮し、生産が容易で導入実績も多い第3世代機の量産で戦力を補う方策を推進した。当時はレクタもゲベートの一部であり、当然レクタ領内でも多くの『ミラージュIII』や『ミラージュ5』が量産されることとなったのである。

ところが、独立直後の経済状態悪化に伴い、独立3年にしてゲベートはその国土を維持できなくなっていく。国内における民族対立の状況も鑑みて、ゲベートはその南部をレクタ共和国として分離独立させるに至った。当然ながら、上記の経緯も相まって、レクタとゲベートの間柄はお世辞にも良いとは言いがままである。

レクタに最初の国難が降りかかったのは、独立直後のこの時だった。レクタは確かにゲベートの兵器生産を担う地域の一つであったのだが、基幹部品であるエンジンやレーダーの生産基盤は全てゲベート側が保有していたのである。機体は作られども飛ばせず、レクタにはエンジンやレーダーの無い機体が溢れた。この際に、オーシアから高性能のエンジンを輸入し、『ミラージュIII』をベースとして『クファイル』が作られたのはかつて述べた通りである。

一方でエンジンの無い『ミラージュ5』に関しては、いささか薄ら暗い延命措置が取

られた。すなわち新規生産された全ての『ミラージュⅢ』を『クファイル』仕様とし、その分余剰となるエンジン『ミラージュ5』へ流用。事はそれにとどまらず、産業スパイを活用してゲバートから『ミラージュ』用エンジンの情報を盗み、オーシアが独自に入手した情報と併せて解析、レクタ国内で独自生産を行うに至ったのである。すなわち、ゲバートや開発メーカーの同意を得ないままの違法コピーであった。生産されたエンジン『ミラージュ5』を名乗れないそれらの機体は、『ネシエル』と名付けられレクタで運用されることとなった。

エリクが使用することになった『ダガーA』は、それと同一の機体である。旧式化に伴いレクタから中小国へ売却された際、『ネシエル』は『ダガー』と名を変えて取引されたのだ。その『ダガー』を入手した傭兵がサピンで戦死し、こうしてレクタ人たるエリクの手に渡ったというのは、数奇な運命としか言いようがない。

ともあれ機体を手にしたはいいもの、元が『ミラージュ5』ということもありレーダーを持たない戦闘攻撃機、それもMiG-21と同様の第3世代機であり、カルロスのMiG-21UPGと違い満足な近代化改修も受けてはいない。こればかりは、少なくとも金が溜まるまでは腕でカバーする他無かった。

「まあ、いいさ。どうせ頼れるのは自分だけだ。個人経営で頑張るよ」  
「エリク」

「…？何だ」

「空に戻る積りなら、忠告させて貰う。…『復讐』を、一旦忘れる。今のお前はそれに囚われ過ぎてている」

「何…!？」

復讐を、忘れる。

不意にかけられたカルロスの言葉に、エリクは思わず激した。

馬鹿な。復讐を忘れるのは、今生きる意義を失う事と同義である。大切な仲間を無惨に殺した奴らに報復し、この手で殺す。その為に生き永らえ、かつての同盟国ウステイオの機体さえ撃墜したのだ。それを今更忘れろとは何だ。そんな、馬鹿なことがあるか。

工具をしまい、立ち上がるカルロス。陰影の暗色混じるその姿に、エリクは憤激のままに詰め寄った。

「ふざけるな！何も知らない癖に、知った風な口を利くな！」

「誇り、意地、純粹な闘争心。15年前のベルカ戦争で俺が見て来たエース達は、曲がることのない思いを胸に、凄まじい強さを持っていた。…だが彼らはその『思い』のせいで他の可能性や退路を自ら断ち切り、結果、死んでいった。今のお前には、彼らと同じものを感じる。…むざむざ破滅に向かっていく姿を、俺は見たいらねん」

「強さと引き換えに死んでいった、か。ああ上等だよ！奴らに復讐するだけの力と強さを手に入れられるなら、最後に死のうが構うもんか！俺の生きる目的はその一点だけだ！！」

「復讐を否定はしない。だが、せめて一步退くんだ。今のままでは、目的を達する前に前は死んでしまう。復讐に専一になり犬死になることは、お前の仲間だつて望んじやない筈だ」

「……お前に……お前に何が分かる!!復讐を想い続けて何が悪い!——金の為なら平然と裏切る傭兵様だ、裏切れることは想像できても、信じてた仲間に裏切られる痛みは分からないだろうけどな!!」

「……!!」  
さ、と朱を帯びるカルロスの相貌。その脚が一步近づくや、喉下のあたりにがんと鈍い痛みが走るのは同時だった。

持ち上げられる視線、視界いっぱい広がる奥歯を噛みしめたカルロスの表情。カルロスは右手でこちらの襟首を掴み上げ、鳶色の目を見開いて睨みつけている。

怒りの表情。

それが何だ。怒りなら、絶望なら、俺の方が何倍も上だ。胸にぶちまけ、血が上った頭の働きそのままに、エリクもカルロスの襟首を掴み上げる。

所詮、傭兵には分からない思いに違いない。仲間の大切さも、それを失った復讐の重みも。

今更、曲げてたまるか。——曲げられるか。

言葉無く、ただ目と目が、男と男の思いがぶつかる数秒の鏖闘り。

それを終わらせたのは、場違いなほどに間の抜けたような、軽い女の声だった。

「あら、あらあらあら。カルロス様、こちらでしたか。：あらあら、お仲がよろしいよう  
で」

「……………あんたか。いつも大変な時を狙って来るな」

弱まる力、離れる腕。

脚が地面を踏みしめる感覚を再び抱く中、カルロスはこちらから体を逸らし、その女の方に向き直っている。斜光を背にしているためよくは分からないが、黒髪を後ろで纏め、黒いスーツをきつちりと纏った姿はキャリアウーマン風。しかし糸のように細い目と、笑っているのか分からないような、常時ふわりと上がった口端が、何を考えているのか分からない気味悪さをも醸し出している。年のころは20代半ばから後半という所だろうか。

その声音か、雰囲気か。予期せぬ闖入者に、カルロスに向けた怒りはやり場を失い、急速に萎えていくのを感じていた。



「要件は」

「注文の品、お届けしました。『ニムロッド隊』のハンガーに置かせて頂いております」  
「ああ、感謝する。最近は消耗が激しい。23mmとフレアのカートリッジをまた注文したい。…あと、個人分でレサスの新聞雑誌も頼む。注文書は今日中に送る」

「かしこまりました、毎度御鼻頂にありがとうございます。ご注文を頂き次第、すぐにも手配いたしますので。…時に、そちらは？」

女が、首を傾げてひよこ、とカルロス越しにこちらを見やる。相変わらず目は開いているのか分からないまま、それでもまつすぐにこちらを見ているらしい。

「ごほん、咳払い一つ。乱れた襟首を整えて、エリックは女の方へ数歩踏み出した。

「エリック・ボルス。この基地でしばらく世話になることになった傭兵だ。よろしく頼むよ」

「あらあら、それはそれは。申し遅れました、わたくし調達代行業ルーメン・メデイエイション・エージェンシーに所属しております、サヤカ・タカシナと申します。どうかお見知りおき下さいませ」

にこー、という擬音そのままに表情の変わらない微笑を貼りつけながら、女——サヤカは名刺を手渡す。

受け取ったそれには、名前の横に彼女と思しきデフォルメした黒スーツのキャラク

ター。そして名前の下の謳い文句には『スプーンから最新鋭機まで 調達ご依頼はL.M. A. におまかせ!』と堂々と記されている。

正直に言つて、胡散臭い。

こちらの困惑を察した：訳ではないのだろうが、サヤカはぺこりと一礼し、『それではこれにて』と一言残して、扉をくぐつて出て行つた。去り際に、外からひらひらと手を振つてから。：なんとも、アクが強いというか、何と言うべきか。エリクは、わずか数秒の邂逅にして、どつと疲れたような思いを感じていた。

「……何なんだ、アレ」

「この基地に出入りしている仲介業者だ。注文一つで中古の機体や弾薬機材、大抵のもののは調達して来てくれる。装備の整わない中小国や民間軍事会社には助かる存在という所だな。この基地以外に、周辺国にも出入りしているらしいが」

「ふーん：平たく言えば『死の商人』か」

「そんな所だ」

まじまじと名刺を眺め、カルロスの説明を聞きながら、エリクはサヤカの仕事をそう解釈した。

つまりは、戦火を交える両国に武器を売りさばく武器商人——俗にいう『死の商人』がその実態。戦争が熱すれば熱するほど儲けも上がる以上、どちらかといえば戦火を煽り

たい側に当たるのだろう。目的こそ違えど、その過程はカスパルラベルカ残党と一致していることになる。

——まさか、な。

脳裏に兆したその疑念を、エリクは頭を振って打ち消した。第一、カスパルが自分の生存を確信として知っている筈はない。用心に越したことは無いが、疑心暗鬼は程々にすべきだろう。

「…念のため忠告しておくが」

「今度は何だよ」

「美人だからって手は出そうとするなよ」

「は？ いやちよつと待て誤解…」

「以前あいつに惚れて、強引に迫った奴がいた。はぐらかされ躲され続け、今日こそ無理やりでも顔かせて見せる、と意気込んで行つてな。…そいつは翌朝、ケツにスパナ突っ込まれた状態で気絶してるのを発見された。以来開眼したヤツは傭兵を辞め、今やグラ・ルギドのニューハーフバーのエースだ」

「……………」

「まあ、役に立つ業者ではある。用事がある時だけ声かけて、それ以外では放っておけばいいや」

疑念を振り払うこちらの仕草を誤解しての忠告だったのだろうが、カルロスの言葉にエリクは思わず尻を押さえた。そもそも思いを向けようなどは露思っていないかったが、それを聞いてしまえば、絶対に妙な気は起こすまい。脳裏にあの細長い目を思い出し、エリクは心にそう誓った。

とはいえカルロスの言う通り、軍としての正式な補給体系外にある傭兵にとつて、必要なものを随時調達してくれる業者は重要には違いないだろう。この基地で見た機体にした所で、カルロスのMiG-21を始めとしたMiG系列や『ミラージュ5』、先日出撃しているのを見たカナード付きデルタ翼機——J-10という機体らしいが——と、武装も部品もてんでバラバラの構成なのである。到底通常の補給では賄えない以上、オーダーメイドの補給体制は軽視できないものであろう。

おおかた必要な部品を揃え終えたのだろう、カルロスは工具箱と革袋を持ち、立ち上がる。鉄屑の山から匂っているのか、それともカルロスの作業着のものか。空気が動いた瞬間、機械油の匂いがつんとエリクの鼻を打った。

「次の出撃は明朝だ、お前にも出て貰うから今日は早く休んでおけ。…忘れるな、一步一步引いて考えろ。でないと命を落とすぞ」

「んな、アンタまだ言うか！ だいたい…！」

「今日はここまでだ、俺は明日の作戦のミーティングに行かなきゃならない。また後で

な

再燃した怒りも、逃げの一手を打つカルロスにあつさりと巻かれる。

復讐を忘れる、せめて一步退いて見る。

——うるさい。何も知らない傭兵が、何だ。

耳の奥に残った言葉に呟いて、腹立ち紛れに足元に転がったガラクタを蹴り飛ばす。

倉庫の暗闇の中、遙か奥の深淵で、それは壊れた音を立てて転がった。

\*\*\*\*\*

「二ムロッド隊、パイロットは全員参集しろ。明日の作戦のミーティングを行う」

すっかり日が落ちて後、肌がひりつくような寒さに覆われたヴェスパ―テ空軍基地。

金属の喧騒が満ちる格納庫にカルロスの声が響き渡ったのは、既に時計が夜8時を回るような頃合いだった。

召集の声に、汚れたツナギのまま顔を上げ、駆け足で駆けつける姿は3つ。早朝待機の当番であったこともあり、一人は大きなあくびを隠そうともしていない。

無理もない。本来予定されていた作戦が突如変更され、そのために部隊長ミーティングが今の今まで長引いてしまったのだ。1時間以上も長引いた彼らの待機時間を顧みれば、眠気もいささか仕方のないことだろう。せめてもう1時間作戦変更の通達が早ければ、こうも混乱を来すことは無かったのだが。

口中に愚痴一つ、カルロスは書類の束を小脇にしながら、格納庫脇のパイロット詰所へと脚を向けていく。眠たい目をこする三人に先んじて扉を開いた先からは、暖房の暖かい空気、コーヒーの香り、そして乱雑に並んだパイプ椅子に、誰かの飲みかけと思しきマグカップが一つ。準正規兵といういささか緩い立ち位置のためか、はたまた備兵という自由さゆえか、生活面におけるラフさはこの際指摘した所で仕方があるまい。

詰所内を物色し、いくらか椅子が整っている辺りを見つけ、カルロスは一足先に座を占める。続いていた二人は対面の位置に腰を下ろし、残る一人は気を利かせたのか、保温してあるコーヒーをカップに注ぎ、人数分を揃えてからカルロスの隣に座を占めた。「隊長、どうぞ。ブラッド軍曹とフラヴィ曹長はブラックで？」

「ん」

「ありがとーアレックス君。気の利く後輩を持って僕は嬉しいよ、うんうん」

「あたしのは砂糖ちようだい。…たく、こんな時間にまでミーティングなんて、もう時間外勤務ですよ。さっさと終わらせましょう隊長」

三者三様の反応を見流しながら、カルロスはカップを傾ける。

やや酸味が強く苦みがマイルドな味わいは、よく飲むオーシア産のものとはまた違う種類の豆らしい。保温が長引いて水分が飛び、いささか濃く仕上がっているのが、今は却ってありがたかった。早朝勤務にエリクとの口論、喧々囂々の会議と続いて疲れた頭

には、とろりと濃いのだ越しと鼻孔に突き抜ける香りがいつそ心地よい。

隊長、か。

思えば、15年前のベルカ戦争でここヴェスパーテに赴いた時には、自分がそう呼ばれることになるとは全く想像していなかった。あの時はアンドリユー隊長も、多くの仲間もいた。ずっとその編成のまま戦い続けていくものだと、安直に信じ切っていたのである。それを思うと、部隊編成こそ昔のままだが、人の顔ぶれは大きく変わっていた。

例えば、目の前に座る女性——『ニムロッド3』フラヴィ・ゴール曹長は、7年前に端を発した『大陸戦争』にエルジア空軍として参加した経歴を持つ、生粋の戦闘機パイロット出身者である。エルジア空軍縮小の際に軍を辞めた所を社がスカウトし、慢性的に不足しているパイロットを補うために雇用されたのだった。黒い肌、癖の強い黒髪を幾つも三つ編みのように編み込んだブレイズヘアに整えた髪型、そして戦場慣れしたその佇まいは、おのずと空で生きて来た者の自信を醸し出している。『ニムロッド2』オズワルド曹長が療養中の今、戦力として最も頼りになるのが彼女だった。

その隣でにこにこ微笑みながら、ゆっくりとカップを傾けているのは『ニムロッド4』に当たるブラッド・バンフィールド軍曹。就職前には空戦経験は無く、いささか天然のきらいもあるものの、視野が広く物事に拘泥しない柔軟さから、ニムロッド隊4番機として並んでいる青年だった。攻撃、支援と臨機応変な対応が求められるニムロッド

隊の戦術においては、カルロスを除く小隊員の中で最も適した性質を持っていると言っているのだから。拘りが無すぎることか、衣類の襟はよれ、金髪の髪もぼさぼさになっているのが玉に瑕ではあるが。

一方カルロスの隣に座る青年——アレックス・ウルフ伍長は、まだ少年の面影を残すほどに、他の面々と比べて一回り若い。元々は小隊の構成員に不測の事態が生じた際に駆り出される予備パイロットであり、今はオズワルドに代わり小隊4番機である『ニムロッド5』として、小隊の端に翼を連ねていた。オズワルドと代わるまで空戦の経験は一切無かったものの、ここ数日の戦闘では未熟ながら物怖じしない機動と肝の太さを発揮し、少しずつ腕を上げていく所だった。『ニムロッド5』はベルカ戦争初頭でカルロス本人が名乗っていたコールサインでもあり、その点思い入れも無いという訳ではない。未だ発展途上だが、これから伸びる余地はふんだんに持っているパイロットだろう。

概して見れば、ニムロッド隊に限らず、傭兵は年齢層が若返っている印象がある。世界中で戦争が起こっている以上、フラヴィヤやエリクのような若くて経験豊富な人材はこれからも輩出されてくるに違いない。世界が、あるいは人類が変わらない限り、この傾向はこれからも続くのと同じだろう。世界各地で戦争が続く、傭兵の需要が高まるからこそ若い人材も流入してくる。その傾向の加速を見れば、少なくとも人類はこの15年で何も変わってはいなかった。



『オーシアもサピンも、どこも変わらない。結局は、醜いパイの奪い合い。…やはりこれが、世界の現実か』

15年前の記憶が、不意に脳裏を過る。

『ウィザード』…ジョシユア大尉。後に『国境なき世界』を創設し、世界の変革を試みた男。かつてオーシア国防軍に所属していた頃に出会ったジョシユア大尉は、世界の現実を嘆き、哀しそうにそう呟いていた。

大尉の諦念にも似た嘆きは、15年の時を経た今でもなお、世界を刺すに余りある。

牢という思索の中で、大尉は今、どんな気持ちで世界を見ているのだろう。

「…いや隊長。おいしそうにコーヒー味わってないで、早く進めて下さいよ」

「……ああ、すまない。ちよつと日中疲れたもんでな」

——人は、変わらぬ。おそらく、ヒトが『人』である限り。

固い意志を持つゆえに、ぶつからざるを得なかった数多の面影。コーヒーの苦みごとそれらを飲み干して、カルロスは携えていた書類をテーブルの上に置いた。ヴェスパ―テ周辺から、作戦区域となるサピン北東部の地図。予想される敵の位置および針路。そして、友軍の展開図と周辺地形。21世紀にもなつて今更紙媒体での伝達とは恐れ入るが、哀しいかなハイテク化の波は、このサピンの山奥までは届いていない。

「まず、状況を整理する。我が軍の参戦により一時ウステイオおよびレクタの前線は縮

小したもの、先日『円卓』経由の輸送ルートを潰し損ねたことで、両国はオーシアから直通の補給線を確認。戦力を徐々に回復し、我が国とラテイオに対し攻勢を見せつつある。一方のラテイオはユークトバニアからの補給が覚つかず、劣勢にあるのが現状だ」

「オーシアの方が圧倒的に近いし、今オーシアはユーク本土でイケイケですもんね」

「ウステイオやレクタにF-35が配備され始めたという噂は？」

「事実らしい。昨日友軍がラテイオ西郡上空で、黒地に灰帯のF-35Aと交戦したという情報が入っている。また、ウステイオ南部には陸上部隊が集結し、アルロン地方へ侵攻する勢いを見せている。いずれにせよ一旦敵の攻勢を止めなければ、なし崩しに押しされかねん」

「いつそがしくなりますね……。もうココ体が欲しいや」

どこかズレたブラッドの発言に苦笑しながら、カルロスはその情報の中で、一つ確信を持っていた。

エリクの話によると、レクタはエースパイロットを前線基地に招集し、最新鋭機を配備する構想を計画していたのだという。財政的に最新鋭機の導入は限定的にならざるを得ないレクタとしてはやむを得ない判断だったのだろうが、その点を加味すれば、F-35『ライトニングII』を受領している部隊はまだ相当限られると考えていい。まし

て、エリクの言とラテイオ西郡という位置、そしてその塗装パターンを考慮すれば、そのF-35の素性も自ずと明らかになってくる。

忘れる筈も無い、黒地に灰色帯の塗装パターン。

ラテイオ上空に現れたというその機体は、間違いなくあの『グラオガイスト』——カスパルの部隊に違いなかった。すなわち『管理された戦争』を形作るべく、ベルカ残党の意志を体現して自ら前線へと出て来たという訳である。

そして——フラヴィー達には隠したが、実は未確認情報として、その続きがある。接敵した友軍の報告によると、『左翼に三日月』の塗装パターンを施された機体が複数、『グラオガイスト』に付随していたというのである。もしそれが本当ならば、カスパルはエリック達が築いた名声までも余さず利用する積りなのだろう。その酷薄なまでの周到さは、驚くばかりだった。

もつとも、レクタの戦力増強は確かに脅威だが、今は前面の敵はウステイオである。対ウステイオの拮抗状態を崩すためにもその攻勢の打破は最重要の課題だった。

「そこで本題だ。本日夜半より、友軍の機甲部隊はアルロン地方南部まで撤退を行ってゐる。我々は明朝より出撃し、その撤退を支援。敵の機甲部隊や航空機の侵攻も考えられるため、状況に応じてそれらの掃討に当たる」

「撤退？アルロン地方を死守するんじゃない？なんだい、ぶつかる前から逃げ腰とは、サ

ピンも腰が引けたねえ」

「…妙ですね。要害に籠もって攻勢を防ぐというのも手だとは思いますが、アルロン地方は広大な平原です。仮に敵機甲部隊の侵入を許した場合、瞬く間に展開されてしまうのでは…?」

どつかりと椅子に腰を沈め笑い飛ばすフラヴィに、抱いた疑問を確かめるようなアレックスの言葉が重なる。事実、この命令に、カルロスもアレックスと同様の疑問を抱いていた。

アレックスの言う通り、サピン北部に広がるアルロン地方は広大な穀倉地帯であり、当然ながら平野がその多くを占める。なだらかな地形や整備された幹線道路を有することから地上部隊の展開も容易という長所を持つが、裏を返せば、一旦敵の展開を許せば取り返しのつかない事態に陥るとも言い変えられるのだ。事実、15年前のベルカ戦争では開戦初頭にアルロン地方を占領され、あの『ガラム隊』の活躍によつて解放されるまで、サピン軍は山脈以南に逼塞するという憂き目に遭った。

サピン軍上層部は、その苦い記憶を十分に覚えていた筈である。それならば、敢えてかつての失敗と同じ轍を踏むのは何故なのか。

「危惧はもつともだが、理由は分からん。元々はフラヴィの言う通り、アルロン地方で徹底抗戦という話だったんだが。…もう一点、今回の対ウステイオ戦では『秘密兵器』と

やらを実戦投入するそうだが」

「『秘密兵器』？なんですよそれ」

「機密らしく、詳細は開示されなかった。『カリヴルヌス』がそのコードネームらしいが、情報が無く何とも言えん」

「なんともねえ。腰の引けた命令に、得体の知れない秘密兵器とは」

「まあそう言うなフラヴィ。その分報酬の上乗せは確約されている。以上だが、質問はあるか？」

得体の知れない秘密兵器——フラヴィの表現は、まさに同感だった。

名前以外一切知らされない『秘密兵器』、そして腑に落ちない作戦内容。全容はさっぱり見えてこないが、かつての『エクスキャリバー』よろしく、その『カリヴルヌス』とやらでウステイオ軍を一掃しようとも考えているのだろうか。

ともあれ、傭兵である以上提示された作戦には従う義務がある。撤退する友軍の支援と、追撃にかかる敵の排除。二本立ての命令を余さず伝え、カルロスは質問を促すように3人を見渡した。アレックスは顎に手を遣り考え込んだまま、フラヴィは頬杖をついて薄ら笑いを浮かべている。ブラッドは首をかくんと落とすし、今にも眠ってしまいそうだった。

「よし、無ければいいまでいい…」

「あ、隊長」

席を立ちかけた刹那、思いついたように上がった声。

離れた目を再び向けられ、頭を落とした瞬間に目を覚ましたのだろう、ブラッドが眠気眼のまま手を挙げている。一応話は聞いていたらしい。

「あのレクタの捕虜……エリクでしたっけ。あいつへの伝達は？」

「……あ、ああ。考えたが、今は格納庫に籠もりきりなんだそうさ。一応出撃予定時刻は伝えてある。内容はまた明日にでも伝えるさ。ああ見えて経験はそこそこある風だったからな」

「そりゃいいや。あたし達の留守中に大活躍だったというが、お手並み拝見と行こうじゃないか」

ははは、と笑い飛ばすフラヴィの声が、狭い詰所に響く。それに続くはけっけつという、息が切れたようなブラッドの笑い声。横目で探れば、アレックスも興味を覚えた様子で目を輝かせていた。言葉に出さないまでも、その腕前を確かめたいという思いは皆共通らしい。

実の所、エリクがああ『ハルヴ』の1機とは、皆にはまだ言っていない。直接矛を交え、オズワルドという負傷者も出した手前、のつびきならない状態にならないとも限らない為だ。詳細が分からない、『三日月の塗装』のレクタ機の事も考慮に入れなければな

らない。あまつさえ今のエリクは、仲間を失うという痛みを引きずっているせいか、他人と心を交わすことをどこか拒んでいる節もある。エリクと皆がある程度慣れるまで、真相は隠しておいた方が賢明だった。

夕方に別れて後、エリクはどうやら宛がわれた格納庫に籠もり、新たに乗機とした『ダガーA』と共にいるのだという。司令部でのミーティングの後に声をかけようかとも思ったが、『今忙しいから明日聞く』と整備兵越しに伝えられ、結局作戦内容も伝えないまま今に至ったという訳である。

慣れない機体の点検とは思うが、わざわざ人を払ってまで一体何をしているのか。一つ事に熱を入れ込んだ男の情熱など、傍からは凶る由も無かった。

純粹に目的へ向け進むあまり、エリクは意識していないのかもしれない。

仲間を失った悲しみを背負い、純粹に復讐を誓うがゆえに、その行動は——信念は、当の仇であるカスパルに近づいていることに。報復の連鎖の中で、自らもまた、一方の鎖となつてしまっていることに。

いや、まさかあるいは——。

ふと頭に兆したその思いを、カルロスは咄嗟に打ち消した。いくら純一に思い悩んだ所で、人は『そこ』まで達観できる筈はない。

ミーティングも散じ、とうとう眠気で突つ伏したブラッドを叩き起こした後、カルロ

スは一人格納庫から外へ出た。空には月や星が煌めき、人工の光に遮られない冬空の下を、数多の輝きが照らしている。

天に向けた目を地に奔らせ、目が追う先は唯一光が漏れる格納庫。エリクがまだ何か作業をしているのだろう、漏れる光の中から、時折スプレーを噴くような音が聞こえてくる。

一本当に、よく似ている。数多のエースにも、そしてどこかカスパルにも。

眩き一つ、踵を返した後、カルロスは今一度空を見上げる。

琥珀色に浮かぶ月に、まっすぐなエリクの眼差しが重なって、暗い夜空を照らしていた。



## 第25話 攻防、171号線

凍てつくような白い太陽が、空を冷たく照らしている。

雲量0、快晴。遮るもの一つない広大な大地は、早朝の太陽が照らし上げる空の白色と、地面を覆う褐色、そして眼下に広がる農地を割いて北へと伸びる、幹線道路171号線の藍色しか見て取ることができない。数か月前ならば小麦の黄金色の波がさざなんでいたであろう農地も、とうの昔に春まき小麦の収穫を終えた今となっては、わずかに残った麦わらにしか豊穡の気配を宿していなかった。もう数週間もすれば、この光景すらも雪が真つ白に覆ってしまうのだろう。

懐かしい。

戦場へ向かうにしては些か場違いなそんな感慨を抱きながら、愛機MiG-21UP G『『アイビナス』のコクピットから、男——カルロスは眼下の光景を見下ろしていた。15年前は黄金色の麦穂の波、そして今は鈍色の大地。色彩と季節の違いこそあれど、その地が持つ豊沃な地力と戦略的な意味は、15年経った今でも何一つ変わってはいない。

アルロン地方——サピン王国の北西部に位置する一大農業地帯。肥沃な土壌に加え、

農耕に適した高低差の少ない平原という立地、テムズ川・アーレ川水系から与えられる水利、そして首都グラン・ルギドや隣国まで繋がる幹線道路を有することから、この一帯は古くから穀倉地帯として栄えて来た。その事情は21世紀となった今の世でも変わることはなく、ここアルロン地方は今なおサピン王国の食糧需要を担う一大生産地として君臨している。

しかしそれゆえに、この地は古くから争奪の対象となつて来た。アルロンという大農耕地帯の奪取はグラン・ルギドの喉首を掴むことにも直結する上、幹線道路を有した平原という立地上大軍を展開しやすく、幹線道路を通じて速やかにサピン内陸や隣国にまで戦力を展開できるためというのが、その主な理由である。古くは中世のベルカ王朝との戦争、20世紀初頭のオーシア戦争など、その例を挙げれば枚挙に暇がない。

その最も直近たる例が、15年前のベルカ戦争であった。

戦争初頭、破竹の勢いで快進撃を続けるベルカ軍の前に、周辺諸国は瞬く間に国土を蹂躪、敗勢に次ぐ敗勢を余儀なくされた。サピンにおいてもそれは例外でなく、ウスティオの孤立とサピン領内への橋頭確保の点からベルカ軍にアルロン地方を占領され、以後オーシアを主軸とした反攻作戦が開始されるまでその奪還が叶わなかったのだ。カルロスもその際のアルロン地方奪還作戦において、サピンの傭兵として参戦したことがある。

以上を踏まえれば、今ウステイオがアルロン奪取に乗り出したことも頷ける。

一度国境さえ越えてしまえば、アルロン地方は広大な平地である。陸戦戦力を展開するに極めて易く、迎撃する側にしてみればその駆逐には相当の時間と労力を要することになるだろう。幹線道路を通じればウステイオ本国からの補給も容易な上、速やかにサピン首都グラン・ルギドへ兵力を送ることもでき、絶えず脅威を与え続けることが可能となる。国力で劣るウステイオにしてみれば、労少なく利が大きい制圧目標に違いないのだ。

だからこそ、これまでサピンもアルロン地方の守りを固め、今まで制圧を許さなかったのだが——なぜここにきて戦力を引き上げ、わざわざ国内へウステイオ軍を引き寄せ、悪手を取ったのか。いくら考えようとも、その答えは容易には浮かんで来ない。……まさか事前情報に聞いた秘密兵器『カリヴルヌス』とやらに、サピンがそこまで頼り切っている訳でもあるまいに。

疑念一つ飲み込んで、益体も無い思考を脳裏の外へ放り出してから、カルロスは眼下を走る大地へと視線を戻した。いかに強力な兵器があったとして、今回の作戦にそれが組み込まれていない以上、『無いものはない』のだ。自分の手札を正確に把握しなければ、戦術を立てられるものではない。

「二ムロッドーより空中管制機『デル・タウロ』。飛行行程を順調に消化中。敵の状況知

らせ」

《こちらデル・タウロ。現在、ウステイオ軍はアーレ橋の北40km地点を、幹線道路171号線に沿い南下中である。戦車を主軸とした陸戦戦力約30、随伴歩兵多数。上空に護衛機の姿も確認されている。友軍はアーレ橋南岸で迎撃態勢を構築中だが、撤退中の第11戦車大隊が北岸に取り残され追撃を受けつつある。各機速やかに急行し、第11戦車大隊を支援しつつ敵陸戦部隊を掃討せよ》

敵の位置、数、そして友軍の状況。全てを脳裏に叩き込み、カルロスは戦況を俯瞰した。

今回の作戦では、比較的近いヴェスパーテ基地の戦力が第一波となり、順次他の基地の部隊が波状攻撃を仕掛けることになっている。戦力の整った敵へ最初に攻撃を仕掛けることを考慮してだろう、ヴェスパーテからは動員機数13機という、ほとんど全力と言つていい戦力抽出を行つていた。

先頭を飛ぶのは、カルロスを長とした『ニムロッド隊』のMiG-21UPGが4機。右後方には制空を担う『グレイヴ隊』のJ-10A『ファイヤーバード』が4機、やや高度を高めにとって続いている。一方左後方に布陣するのは、Su-25『フロッグフット』4機で構成された『ブリザード隊』。対地攻撃を専門とする『フロッグフット』を駆ることからも分かる通り地上掃討を専門とした隊であり、今回の作戦における主軸

となる。戦術としては上空の護衛機をグレイヴ隊が抑え、その隙にブリザード隊が地上を掃討。ニムロッド隊は空陸の状況に合わせて、臨機応変に対応するという形である。

そして——。4機編制3小隊の計12機を数えた所で、唯一その枠に収まらない『員数外』の1機の姿は、カルロスから見て左前下方にあつた。一足先に敵へ襲い掛からんとばかりに、その位置は各小隊から見てもやや前進傾向にある。

まったく、あのバカは。

その姿を見て、カルロスは呆れ交じりの溜息を禁じ得なかつた。

眼下の『員数外』——それは言うまでも無く、エリクが駆る『ダガーA』の事である。灰色に彩られたサピン制式カラーの塗装パターンだが、その左翼の2/3ほどから先は黒く塗られ、その上に幅広の三日月が黄色くでかど描かれている。当然エリクが借りる前の『ダガーA』の塗装ではなく、出撃前に格納庫に閉じこもっていたエリクが自らの手で塗り上げたに違いない。こちらが僚機にまでその素性を隠しているにも関わらず、当のエリク本人が『ハルヴ隊』を連想させる塗装を持ち出してくるとは流石に想像していなかった。強いて言えば元の塗装は細い三日月が4つ重なった意匠であつたのに対し今回のものは幅広の三日月が一つだけ、月の上には小さく五芒星の星が記されている点も異なっているが、まさかこれだけで言い逃れしようという訳でも無いだろう。

人の気も知らず——いや、知ってなお意図的に無視しているのかもしれないが——、自由な奴め。強さといい、目的の為に手段を択ばない一途さといい、周りを意に介しない自由さといい、奴に本当によく似ている。

思いの締め溜息一つ、今度こそカルロスは余計な思考を追い出した。既に眼下には迎撃態勢を取る友軍が見え始め、地平線の先にはちらちらと影も認められるようになっていく。おそらく、撤退しつつある取り残された友軍の先鋒に違いない。

「ニムロッド1より各機、護衛目標を視認。予定通り地上、空中の脅威それぞれに対応する。対空砲火に注意しろ」

《了解。『ベイル』よりニムロッド1、先行する》

《な…あいつ、話聞けつてのに！何が了解だよ！》

通信を送った矢先、眼下の『ダガーA』が放たれた矢のように地平線へ向け速度を速めてゆく。自らの腕の過信か、それとも仮初めの仲間の手は借りないという意固地なまでの意思表示か。ニムロッド3——フラヴィの文句を横耳に挟みながら、カルロスは人知れず頭を抱えた。

\*\*\*\*\*

灰色の三角翼が、見る見る風を孕んで脚を速めていく。

空戦性能が劣る戦闘攻撃機である所の『ミラージュ5』が元とはいえ、流星は傑作戦

闘機『ミラーージュⅢ』の一族というべきか。踏み込んだフットペダルの重さをそのまま宿すように、『ダガーA』は速度を上げ、橋の南岸に屯する友軍も、後方を飛ぶカルロス達すらも振り切るように北へとひた駆けていく。前の搭乗員が丁寧に管理をしていたのだろう、旧式機ながら加速の伸びや機体のレスポンスは思った以上に良好だった。

《二ムロッドよりベイル、無茶をするな、火線が集中するぞ!》

《やー、流星は若いねえ》

《言ってる場合かいブラッド!おい、聞こえてんのかあんた!》

背から降るいくつもの声を視界の外にしながら、正面に目を向けて目標を探る。上空から見た限りでは、171号線をひたすらに南下する一団、そしてそれを追ういくつもの砂煙が立ち上っているのが見えた。事前情報と照らし合わせれば、前者が撤退するサピンの戦車大隊、後ろを追っているのがウステイオの侵攻部隊という所だろう。

『ベイル』、か。

自分自身馴染まないそのTACネームを口中に呟きながら、エリクはちらりと機体の左翼へと目を向ける。左目を失った今となっては左翼を見るのも一苦労だが、その視界の端には確かに、夜空を示す黒地を背にした、昇る三日月を象った塗装が見て取れた。

それは言うまでも無く、レクタの頃から使い続けて来た『ハルヴ隊』の塗装パターンである。唯一生き残った『三日月』として奴らへの復讐を果たすために飛ぶ空は、この

姿でなければならなかった。

もつとも、厳密に言えばその意匠は前のものと微妙に異なる。一つには三日月の形、もう一つには付随した五芒星の星がその最たる点だろう。

三日月の形に関しては、『ハルヴ隊』の頃は細身の三日月が少しずつ下方へずれながら、4つ連なる意匠だった。遠目に見れば、黒地を背にした一つの大きな三日月にも、ラティオからの呼び名となった湾曲型のチョップナイフ『メツザ・ルーナ』にも見えるという訳である。

それを再現するに当たり、エリクはそのデザインを『一つの大きな三日月』へと改めた。元々は4人揃った小隊として連なる三日月を象るデザインだった訳だが、今や生き残ったハルヴ隊は自分一人。その現実を前にした痛みを新たなものとするため、エリクは敢えてこのデザインを選んだのである。遠目の姿はより斧の刃に近くなり、その様にちなんでTACネームもレクタの言葉で『斧』を示す『ベイル』を選んだのであった。

もう一点、デザインに加わった変更点である所の『三日月の上に浮かぶ五芒星』は、単純にエリクの思い付きである。一見すれば月と星という調和した、見ようによつては些かメルヘンな印象すら与える姿だが、そのデザインにはエリクにとつて誓いともゲン担ぎとも言うべき思いが込められていた。

五芒星——すなわち頂点を5つ持つ星のデザインは、見様を変えれば5つの『V』の



字を合わせた像かたちとも言える。その様に、エリクは5つの『V』に始まる思いを託したのだ。

すなわち、一つはロベルト隊長たち3人の魂を示す『Victim（犠牲）』。二つ目には犠牲への追悼を込めた『Vengeance（復讐）』。三つ目には復讐を成し遂げる意志である所の『Verdict（審判）』。そして四つ目には、それらを心に刻み付けた証である『Vow（誓い）』。そのいずれにも、全てを捨ててもひたむきに復讐を成し遂げんとするエリクの激しい思いが——かつての幸福と仲間たちへの思いの裏返しが刻み付けられていた。

：ちなみに五つ目の『V』については、乗機となった『ダガーA』の前身である『ミラージュ5』の『5』を『V』に見立てたものである。報復への思いに機体への信頼というゲンを担ぎ、『ハルヴ』のエンブレムに加えたというのがその偽らざる所だった。

朝日に映える月と星。網膜に焼き付いたその姿を残し、視線を前に戻して、力を籠めるように奥歯を噛む。

すなわち、全ては隊長やクリス、ヴィルさんへの弔いの——『ハルヴ』への思いのため。大切な仲間を奪った奴らへの報復の為の姿である。

カルロス達には悪いが、俺にとって『仲間』は、ハルヴ隊において他にはいない。——他には、いなかった。

詰めた息、視線が向かう先。既に撤退する友軍は眼下を過ぎ、田園を横切る戦車の群れが、エリクの目の前に捉えられつつあった。

「目標を射界に収めた。攻撃にかかると」

《ち……戻れ！護衛機8、上空から被ってくるぞ！》

カルロスの声が、右目で照準を見定めるエリクの鼓膜を五月蠅く突き立てる。言われずとも、エリクは高度2500辺りに布陣する8つの機影を見て取っていた。対空用のレーダーを搭載していない『ダガーA』ではサブタイプまで判別はできないが、遠目に見えたシルエットからは、おそらくウステイオの主力機F-16シリーズと察せられる。

上空に翻る、8つの翼。それらを意にも介さず、エリクは操縦桿を押し、機体を地表近くまで降下させた。

兵装選択、対地攻撃用の無誘導爆弾<sup>B</sup>。両翼3発ずつの計6発。残るハードポイントの1つには増槽、2つには赤外線誘導式短距離空対空ミサイル<sup>A</sup>を装備しているため、要である対地兵装はこれきり搭載していない。

では、手持ちのこれらで最大限の威力を発揮させるには。

高度1200、1000、800。高度計が見る見る数値を下げる中、エリクは全ての武装を抱えたまま、無造作に敵の真正面へと突入していった。

《つ……あのバカ、増槽つけっぱなしですよ隊長！》

《く……グレイヴ各機、制空戦闘開始。ブリザード隊は対地攻撃を開始しろ！ニムロツド各機は『ベイル』のフォロー、その後制空にかかる！》

高度700、直上にF-16の影。先行する2機がこちらへ機銃掃射を浴びせかける。直交するベクトルでは、そうそう当たるものじゃない。

正面、戦車2、対空車輛3、装甲車1。随伴歩兵多数。

歩兵が車両の後ろへ隠れる。

移動式対空砲<sup>A</sup><sub>M</sub>が連装砲から銃弾を雨のように放ち始める。

1発、2発、3発。

真正面からの攻撃では、こちらの回避も制限される。主翼や胴体に被弾痕が穿たれ、キャノピーの右側にヒビが入った。

だがもう少し。

あと100m。

戦車が散る。

胴体下部に衝撃が走る。

——今。

「この辺、かつ！」

照準が集団の中心を捉えた瞬間、エリクは兵装発射ボタンを押下。胴体下の増槽を、次いで全てのUGBを投下し、速度を速めて上空を擦過した。

銃弾の雨で増槽が穿たれ、落着のショックで燃料がまき散らされる。

わずか数秒を置いて地に刺さったUGBは、爆発と同時に火炎と高熱をまき散らし、航空燃料へと引火。爆風は高熱を呼び、高熱は衝撃波を産んで——その上空を『ダガーA』が駆けた一拍後、凄まじい爆発音とともに一帯は炎に包まれた。後方警戒ミラーの中で、装甲車は横転し、へし折れた対空砲の砲身が地に散乱して、真っ黒に焦げた死体との見分けすらつかなくなっている。

航空燃料を散布し、爆発で以て引火させる——すなわち比類ない対地攻撃力を発揮する燃料<sup>F</sup>気化爆弾<sup>A</sup>と同様の原理。通常の兵器で応用するのは極めてハイリスクだが、その分一撃で計5両撃破と見返りは極めて大きい。兵器を買い、新たな機体入手するには、とにかく今は戦果が——金がある。そのためには、今は危険を冒してでも戦果を挙げておきたかった。

《…!? あいつ…い…なんだい、レクタの『三日月』のパクリ野郎かと思つてたら…やるじゃないか!》

《お前ら、あの新入りに全部持つていかれるんじゃないやねえぞ! ブリザード各機、攻撃に入る! 攻撃機魂見せてやれ!》

通信を聞き流しながら、操縦桿を左へ倒して旋回。兵装を30mm機関砲に変更し、旋回の先を走る敵の姿を照準の中心へと収めた。対地ロケットランチャー装備車輛、奥には装甲車。いずれも射線を避けるべく田園に入り、砂煙と麦わらを巻き上げながら旋回を重ねている。

元より、航空機と車輛ではその速度に雲泥の差がある。加えて30mm機関砲弾がもたらず爆発の有効射程と威力を鑑みれば、この低空で『ダガーA』から逃れる術は無い。有効射程、コンマ数秒。

その間に引かれた引き金は曳光弾へと変わり、その2両へ突き刺さる。まるでボール紙のように貫かれたそれらは炎に包まれ、一拍後には爆散。鉄塊と肉片をまき散らし、命の残滓のような熾火を残して消え失せた。

まずは一航過、7両。旋回を終え振り返った先では、後から突入したブリザード隊の『フロッグフット』がそれぞれの目標を銃撃し始め、それを狙うウステイオのF-16とグレイヴ隊の『ファイヤーバード』、ニムロッド隊の『ディビナス』が一進一退の攻防を続けている。流星にウステイオ軍とサピンの傭兵と言うべきか、互いに損傷を負いつつも、未だに落伍機は出ていない。

《ニムロッド1よりグレイヴ3、後方に2機。加速降下で振り切れ。グレイヴ2フォロー。ニムロッド5はこちらがフォローに回る》

前線指揮を執っているらしいカルロスの声が通信に響き、それを写すようにJ—10Aが1機、翼を翻し回避行動に移る。その背を追う2機のF—16は別のJ—10Aに妨げられ、左右それぞれへ旋回し仕切り直しを図るようだった。目を転じれば、F—16に喰いつかれ被弾する『デビナス』の後方に別の『デビナス』が回り込み、フレアを散布して追撃を引き剥がす様も見て取れる。通信を顧みれば回り込んだ方がカルロスの機体なのだろう。前線指揮の様と言い定型を持たない戦術といい、その手法はどこかロベルト隊長にも似ていた。…もつとも、操縦技術は隊長の方が格段に上だったが。

空は概ね互角、地上は対空砲と地対空ミサイル<sup>S</sup><sub>A</sub><sup>M</sup>で傷付きながらも、ブリザード隊が徐々に戦力を削りつつある。こうなれば空は連中に任せて、対地攻撃で戦果を稼ごうか。

天を見、地を見て判断を下し、次なる獲物へ向け舵を切ったその瞬間。唐突に入った通信が、その手を一瞬押し止めた。

《デル・タウロより各機へ、アーレ橋の北西60km地点にウステイオの輸送機編隊を確認した。西回りに大きく迂回し、接近しつつアーレ川沿岸へ接近中。地上部隊を支援する空挺部隊の可能性が高い、警戒せよ》

《ありやりや、そう来たか。横腹を突かれれば、いくら戦車大隊でもマズそうですね》

《く……こちらニムロッド1、悪いがこちらはウステイオ機の相手で手いっぱいだ。なんとか増援を充てて…》

「待った。ニムロッド1、俺が行く。爆弾捨てて身軽になった『ダガー』なら確実に追いつける」

《エリク!?!》

敵増援、複数の輸送機。

情報の内容を反芻し、予測が脳裏にぴんと来るのを感じて、エリクは答えを待たずして機体を旋回。敵の予測針路である西の方向目指して速度を上げて馳せていった。先の被弾で幾分軋むが、古い機体ゆえか冗長性は現代の最新鋭機より高く、多少の損傷なら問題なく動いてくれる。ひび割れた右キャノピーの外で褐色の地面が歪み、細い機首が見えぬ敵の方を指し示した。

以前にも、こんな状況は覚えがある。対ラテイオ戦の初頭、レクタ領内へ橋頭保を築くべく進軍するラテイオ機甲部隊を迎撃した時の事だ。確かあの時は、膠着する戦況打破のためにラテイオ軍は絡め手から空挺戦車を投入し、こちらの横腹を突こうとしたのだった。それを顧みれば戦況は幾分違うが、側面攻撃のために高速の空挺機を差し向けた可能性は高い。

敵は、空挺部隊。

脳裏に描いたその結論が正解だとすれば、搭載重量は相当に多い筈である。軽量高速な『ミラーージュ』なら、到達前にその背を抑えることは不可能ではない。

咄嗟の判断に後から追いついた説明を加えて、エリクの『ダガーA』は他の通信をも振り切りながら、ひたすらに空を馳せた。

《エリク待て！F—16が2機そっちへ向かった！増援もじき到着する、戻れ！》

「拒否する。増援が間に合わないかもしれないだろう？それに……」  
戦果を得ることができる。

言葉の尻を呑み込んで、エリクはちらりと右を振り返った。戦火が奔る戦場を遠景に朧にしか見えないが、確かに小さな点が二つ、こちらを指して迫っている。

上等。心に浮かぶはそんな言葉。

エンジン出力も機体性能もF—16には到底敵わないが、先行した分こちらには距離と初速のアドバンテージがある。余計な機動をせず専一に加速し続ければ、奴らに追いつかれる前に輸送機への到達は可能だろう。輸送機へ攻撃を仕掛け混戦にしまえば、追撃を避ける手はどうとでも取れる。

——見えた。正面、機影6。いずれも大型。直線翼、尻の上がった尾部シルエツト、主翼下の4つのレシプロエンジン。オーシア派諸国で導入されている汎用輸送機、C—130の系列と見て間違いない。



兵装選択、AAM2基。目標、先頭のC-130。距離が近づくほどにその巨体の威容は増し、まるで壁のように目の前に立ちはだかる。まして、敵編隊の真横から強襲する今の位置取りならば尚更のこと。速度差と相まって、輸送機6機分の壁は瞬く間に一挙手の距離まで迫って来た。

後方、大丈夫。まだ遠い。

正面、照準よし。

機体がロックオンを告げる。

右目がコクピットを見定める。

指が、致命の刻を撃つ。

——発射。

主翼下に生じた噴射の衝撃を意識する間もなく、エリクは急速に接近する6機の側面へ機銃掃射を仕掛けながら、輸送機の間をすり抜ける。

音速。

衝撃波。

衝突一步手前の至近距離。

ひび割れたキャノピー一杯になったC-130の前を強引に突破し、その後方に一際爆炎が爆ぜる。右旋回から振り返ると、AAMを2発同時に喰らった先頭のC-130

が胴体を両断し、細かな破片に別れて地へと墜ちていく様が見えた。割れた胴体から転げ落ちるのは、砲塔を持った鈍色の塊。車種こそラテイオのものと異なるが、間違いなくオーシア製の空挺戦車の姿だった。

ここまでは、読み通りである。迂回して来た伏兵はウステイオの空挺部隊であり、軽量の機体を活かして追撃を受ける前に輸送機1機を撃墜せしめた。

——だが。エリクはその時まで、唯一の誤算に気づかなかつた。墜落してゆくC—130を見定め、視線をさらにその向うへ向けた時。そこに引き離れた筈のF—16が2機、予想を上回る速度で肉薄して来ていることに。

「何っ!?!」

速い。

そう言葉が浮かんだのは、機体がロックオンアラートを鳴らすのにわずかに遅れた頃だった。右旋回を2/3ほど終えた所でロックオンアラートは耳障りなミサイルアラートへと変わり、機体はその鎌に捉えられたことを叫び続けている。

まずい。このまま旋回を続けられ、ヘッドオンの状態でミサイルに相對することになる。

思惟に先立ち働く反射で、エリクは右へ傾いたまま咄嗟に機体を右ロール。同時に操縦桿を斜め手前へと引き、機体を急速下降に入らせた。急降下の速度上乘せと急上昇で

慣性に乗ったミサイルを振り切り、追撃をやり過ごす肚だ。

だが、カナード翼を持ち一定の運動性を持つていた『クファイルC7』や『グリペンC』ならいざ知らず、果たしてこの機体でそこまで機敏な動きが可能だろうか。

遙か先に大地が広がる。

ミサイル、計4基、後方。エンジンの放射熱を正確に追尾して来ている。

速度が上がる。

高度が下がる。

まだ、まだだ。十分に速度を上げてから引き上げなければミサイルは振り切れない。

高度、1500。操縦桿引き上げ。

——遅い。加速が枷となり、機首は容易に上がらない。

機体が軋みと警戒音の悲鳴を上げる。

ミサイルアラートが迫る。

死が迫る。

上がれ。

上がれ。

上がれ——。

瞬間、白くなる視界。身を包むふわりとした浮遊感。気づけば視界一杯に空が広が

り、機体は水平から上昇に戻っている。

ミサイルアラート、なし。どうやら危うい所で機体が引きあがり、ミサイルを振り切ったらしい。これまでの機体と同じ要領で操縦していたためか、相当に危うい所だった。

見上げれば、輸送機は5機、頭上遙か。ウステイオのF-16はこちらを追撃するためか、斜めを指しこちらへ降下を始めている。その速度は、心なしかやはり従来機より少し速い。おそらくあれは、レクタにいたところに耳にしたF-16Cの改良型たるF-16C Block 60——正式採用名F-16Eだったのだろう。推力や電子機器を強化したF-16シリーズの最新鋭型で、空力性能を維持したまま燃料増加が可能なコンフォーマルタンクを搭載可能と聞いたことがある。思い返せば、先程一瞬相對した時、正面のシルエットが微妙に大きい気もした。

ともあれ、こうなるといよいよもって対戦闘機戦は不利である。せめてあと輸送機を2機は落したいが、あの護衛2機を前にして果たしてどれだけできるか。

見上げた目を、左翼へと走らせる。いくつかの弾痕が穿たれた中で、目に映えるのはたった一つの三日月、そしてそれを導くような星。『V』の思いを宿した、今の自分の象徴。

「……ま、やるしかないよな」

ふ、と口元に笑みを刷き、エリクはフットペダルを踏んで機体に再び加速をかけた。引いた操縦桿の角度そのままに機首は仰角を描き、その鼻先にF-16Eを、そしてC-130を見定める。

護衛を処理しないままの対輸送機戦は確かに危険である。だが今は、たとえリスクを冒してでも金を得る必要がある。どんな汚い金でもいい。それが報復の力になるなら、喜んで危険を踏もう。

破滅的な希望を胸に、まっすぐな瞳は敵を射る。

距離、概ね1400。来るなら来い。撃つなら、この心の臓目がけて撃つて来い——。射るがごとく向けた視線、右目の正面を馳せる2機。

その2機の機首が不意に翻り、エリクの正面に機体の下部を晒したのはその時だった。どういう訳か、F-16Eは機首を引き上げ水平に戻らんとしている。

「…!?!」

《つたく、なんでアタシがレクタ野郎の尻ぬぐいなさ！まだ首はあるかい、三日月モドキ！》

「あんたは…!」

女の声と同時に頭上をミサイルが過ぎ、バレルロールを以てF-16がそれらを回避する。どうやら、F-16は接近する『デイビナス』を察知し、そちらへの対応を優先

したらしい。

あの女はニムロッド隊の2番機の：確かフラヴィイと言っただろうか。出撃前のブリーフィングで軽く話したきりだが、気の強そうな黒人の女だったと覚えている。その口ぶりから察するにカルロスに命令されて来たのだろうが、何にせよ今は好機だった。F-16は回避行動で機動を乱し、こちらの先を遮るものは無い。

上昇する機体、照準の中心にはC-130の大きな下腹。鯨と見まがう巨大な凶体と相まって、到底外しようのない距離。

引き金が30mm弾を吐き出し、照準器の中心目がけて殺到する。元より、まともな対空装備を持たない輸送機では高威力の30mm機関砲に耐えられる筈もない。

まるで食い散らかすかのように、コクピット下を穿ち抜いてゆく曳光弾。

C-130の脇を抜け、宙返りに入った『頭上』で、そのC-130は健全な姿を保ったまま、命を消すようにゆっくりと高度を落としていった。

「いい所に来てくれた。この調子であと4機行くぞ」

《馬鹿言うんじゃないよ、こちとら今ので弾切れだ。とつとと逃げるんだよ!》

「機銃が残ってれば十分だ、護衛機2機ならなんとかなる」

《よく周りを見てみなよ、三日月モドキ。レーダー無いからって、ルーキーでもあるまいし》

「……何？」

機首を下げ追撃に入りかけたエリクの手を、辛辣なフラヴィの言葉が押し止める。周り——。そうか。

意識の外に置いていた要素に遅ればせながら気づき、エリクは改めて上空から周囲を見渡した。

北からは、増援のウステイオ機と思しき機影が複数。片や、南からは第二波に当たるサピンの戦闘機がいくつも空に浮かんでいる。それらを見定めたらしく、眼下のC—130とF—16Eは針路を逸らし、増援のウステイオ機と合流する構えを見せていた。

目の前の戦果に集中するあまり、失念していた。あくまでこの作戦では、自分たちは波状攻撃の第一波に過ぎなかったのだ。互いの増援が来るであろうことは元々織り込み済みであり、第一波で敵を駆逐しきれるとはそもそも不可能だったと言っている。

『逃げるよ』。短く通信に乗った声に従い、エリクは無言で操縦桿を傾けて、先行する『ディビナス』に機体を追従させた。既に北の空ではウステイオ機が増槽を捨て、サピンの第二波に備える体勢を取っている。

『復讐だなんだと拘るのはいいがね、程々にしときな。』徹しきっては身を亡ぼす。ウチの隊長の信条さ。…でないといあんた、死ぬよ』

「……………」

教え諭すような声に、エリクは反射的に眉を蹙めた。

徹しきらなければ、復讐は成し遂げられない。戦果を挙げ、金を稼がなければ、そのための力を得ることも覚束ない。無言だけを答えに返し、エリクは黒翼の機体の背を静かに追っていた。

171号線の沿線で、砲煙がいくつか上がり始める。

豊穡の地を血と鉄で濡らす戦いが、地上でも繰り広げられているに違いなかった。



## 第26話 白い闇の中で

白雪に覆われた連峰が、寄せる漣のように重なって、遙か眼下を流れてゆく。

高度4500、雲量5。同じ山間でもヴェスパ―テとは隔たった山脈ゆえか、それともベルカやウステイオを経て吹き付ける北風のせいか、積雪はサピンの他の地とは比べものにならないほど多い。

頭上を無感情に覆う雲、僅かなその隙間からは冷たい程に青い空。暖房をしつかり効かさなければ指先まで凍ってしまいそうな錯覚に囚われて、エリクは無為に掌を擦り合わせた。手袋を嵌めている以上暖まる訳では無いのだが、幾分でも気は紛れる。

時に、2010年12月2日。

凍空を切り裂く短剣ダガーを駆り、エリクはアルロン地方東部、峻厳な山岳地帯の空に在った。

《空中管制機『デル・タウロ』より各機へ。ウステイオ編隊は現在ボルネー山脈上空を通過、方位185へ引き続き航行中。機数34、大型機12を含む》

《なんだよ、こっちは無理して戦力集めたつてのに、敵の護衛の方が数多いじゃねえか》

《『エスクードー』、士気を下げるような私語は謹んで下さい》

『デル・タウロ』のコールサインを持つ管制官と思しき女の声が、狎なれた様子の男の声に被せられる。遙か後方に位置するE-3C『セントリー』から戦況を俯瞰しているようだが、多数の敵味方が接近しつつある様を見て取っている為か、それとも経験に乏しいのか、その声には緊張した張りが滲んでいた。

片や、冗談交じりの余裕を飛ばす声の主は編隊の先頭。赤地に黄色の十字を染め抜く、独特の塗装パターンで彩られた『タイフーン』が4機、雁行隊形を取ってサピン編隊の先陣を率いているのが見て取れる。コールサインから判断するに、先の声の主は、おそらくその部隊の隊長機なのだろう。

あいつが、そうか。

安心したような、その一方で距離を取りたいような複雑な思いを胸中に、エリクはその機体の背を見やる。

機種、塗装、そして尾翼のエンブレム。そのいずれもが『あの時』そのままの、見覚えのある姿だった。やはり見間違いではなく、俺はあの機体を——パイロットを知っている。

『あの時』——。それは、約1か月前の事。エリクがまだレクタ空軍に属し、ハルヴ隊の一員として対サピン前線に在った時の事である。ノースオーシア州からレクタ本国へと至る空路輸送の途上、激戦区として名高い『円卓』の空で、強襲を仕掛けて来た部

隊の一つがああ『エスクード』を名乗る部隊だった。徹底した一撃離脱戦術で決り取るようにこちらの輸送機を撃墜してゆくその様は、今だ記憶に新しい。あの時はクリスの支援や隊長の指揮もありカルロスともども退けることに成功したが、一歩間違っていたら退いていたのはこちらだっただろう。独特の小隊運用、鮮血を浴びたような赤い『タイフーン』の姿は、エリクの脳裏に鮮烈に焼き付いている。

何はともあれ、今回はその『タイフーン』は味方なのである。こちらの素性も露見していない以上、心強い味方がいる、程度に思っておけばいいだろう。

複雑な思いに蓋をして、エリクは『ダガーA』の小さなキャノピーからしばし周囲を見渡す。ぼつぼつと浮かぶ機影が時折波にさらわれたように見えなくなるのは、先程より雲が低くなってきたためだろう。まだ濃霧が立ち込める程ではないため目視は容易だが、レーダーを持たず目視捕捉しか行えない『ミラーージュ5』の系統機はこのように時には大層不便だった。

作戦参加は、空中管制機を含めて18機。ヴェスパーテの戦力に加え、近傍の基地からの戦力も抽出した対空迎撃編制となっている。

編隊の先頭は、先述の通りエスクード隊の『タイフーン』4機。その右翼側にはサピン空軍の制式塗装である灰色に彩られた『タイフーン』4機が連なっている。一方の左翼側には、カルロス率いるニムロッド隊のMiG-21UPG『ディビナス』が4機、こ

れに付随するのがエリクが駆る『ダガーA』。その後方には同じヴェスパルテ基地に所属する傭兵小隊グレイヴ隊のJ-10A『ファイヤーバード』4機という編制だった。余談ながら今回は対空迎撃戦ということもあり、Su-25『フロッグフット』を駆るブリザード隊はヴェスパルテ基地にて待機という措置が取られている。

戦闘攻撃機という機体特性で言えば、『ダガーA』を駆るエリクも本来ならばヴェスパルテ基地居残り組である。

だが、今はいち早く金を稼ぎ、復讐の為の新たな機体を手に入れなければならない立場。そのためには機体性能の不利も知った事ではなく、今回も無理やり志願して随伴して来たのであった。5つあるハードポイントのうち1つには増槽を、残る4つには赤外線誘導式空対空ミサイル<sup>A</sup>を搭載し、今回は可能な限り制空仕様として仕上げてある。

レーダーを持たないという致命的な弱点こそあるものの、この機体は大本を辿れば傑作軽戦闘機『ミラージュIII』の末裔なのである。真向では歯が立たなくても、雲と加速性能を活かした一撃離脱ならばウステイオ軍の主力であるF-16のような第4世代機でも喰える自信はあった。

氷柱のように冷たく、それでいて一心に鋭い報復への思い。僚機という頼るべき縁を失ったエリクに、今や恃むべきものは自らの力の他無く、腕と機体を信じるように操縦桿を強く握り込んだ。

《なあーに、機数では劣つても、こつちはベルカ戦争経験済みのベテラン揃い。何とかなるつて、『デル・タウロ』さん》

《結構ですが、軽率な過信は程々に願います。本作戦が失敗すれば、ウステイオ軍は余勢を駆つてアルロン地方へなだれ込みかねません》

《それはまあそうだが…『グレイヴー』より『デル・タウロ』。後ろのあのデカブツはいつまで付いて来るんだ？気が散つて敵わん》

《機密につきお答えできません》

「……機密、ねえ…」

相変わらず軽い『エスクードー』と冷徹ささえ垣間見える管制官の会話に、ふと混じり込む異物——『デカブツ』の語。その言葉に应じるように、編成を確かめるべく後方へ流していた目を、エリクはそのさらに後方——空中管制機が遠目に小さく見える空域の、さらに上方へと向けた。出撃後しばらく距離2000ほど後方を飛んでいたが、数十分前に上昇を開始してからは相当距離が離れてしまっている。事前に一切聞かされていない存在に傭兵連は一樣に首を傾げていたが、一切触れない正規軍の面々を前に、今の今まで聞く機会を逸していたのだ。

デカブツと称される渾名に違わず、その図体はすさまじく大きい。

上昇前にちらりと見た限りでは、その構成は非常に珍しい双胴型。大型爆撃機を2機

平行に繋がったような形で、胴体の間は増設スペースで埋められており、遠目にはさながら2つの首をもたげた竜のようにも見える。強い後退角を設けた主翼にはエンジンが4つ、尾部にさらに2つ。5枚にもなる垂直尾翼も相まって、そのシルエツトは極めて特異な空気を醸し出していた。サイズとしては主力爆撃機B—52『ストラトスフォープレス』を2機繋げた程度の全幅だろうが、それぞれの機首下部は大きく膨らみ、正面から見ると8の字のような構造になっているためか、B—52を2機並べるよりさらにずんぐりとした印象を受ける。

何より特徴的なのは、2つ繋がった胴体の下部に、見慣れない機械をぶら下げている事だろう。大型の半球状ドームに、正面に設けられた門のような開口部——イメージとしては開口部を機体正面に向けた『Ω』の字に近いが、一体何の意味がある機械なのか、エリクには全く想像がつかなかった。新種のレーダードームに見えなくもないが、空中管制を担うE—3が随伴する中で同行するのは不自然である。先ほどのにべもない管制官の言い口といい、尋常の物ではない。

事前情報の無い大型機、軍事機密の一点張り、そして制空戦に不要な筈の大型機が前線に出るといふ不自然な展開状況。謎を積み重ね、その結果至る結論の枝はそう多くはない。エリクの脳裏にその推測が生まれたのは、いわば当然の帰結であった。

すなわち——もしかすると、あれこそが噂の『カリヴルヌス』なのではないか。

ずんぐりとした鈍くさそうな凶体、双頭をもたげる竜のようなシルエット。『エクスキャリバー』の別名たる宝剣の名とその姿がどうしても重ならず、エリクは彼方を飛ぶその姿を再び一瞥する。

双胴の巨体はその謎すらも意に介さず、まるで霧の海に紛れる怪物のように、天覆う雲の彼方へ消えていった。

『デル・タウロ』より各機、方位355より機影多数。距離4000、間もなく長距離ミサイル射程内に入ります』

『よし、来たな。『エスクード1』よりエスクード隊ならびにカスコ隊。高機能長距離空対空ミサイルで先制攻撃を仕掛ける。その後は肉薄して一撃離脱だ。カルロス、いつも通りフォロー頼むぜ』

『ニコラス、今回は敵も大軍だ。程々にな。『ニムロッド1』よりニムロッド、グレイヴ各機。エスクード隊に続いて制空戦に入る。乱戦中は僚機の援護を優先しろ。『ベイル』、いいな』

『了解。せいぜい死なないように頑張ってみるさ』  
敵。

鼓膜に響く通信に、エリクは大型機を脳裏から放り出して、目と意識を正面へ向けた。敵影捕捉能力で圧倒的に劣る『ダガーA』では、今まで以上に自身の『眼』が生死を分

けることになる。

——見えた。

雲量、さらに増えて7。押さえつけるように空を覆う曇天の下に、黒い点がぼつぼつと浮かんでいるのが見える。機数は確かに約30、機種は流星にまだ特定できない。

『タイフーン』8機が左右に大きく開く。

カルロスの『デイビナス』が、次いで黒い翼端の3機が増槽を捨てる。

増槽投棄。兵装選択、両翼外側ハードポイントAAM。火器管制、安全装置解除。オールグリーン。

当然ながら、赤外線誘導式のミサイルはまだ射程外である。現代の空戦において、開幕の一撃は長槍たる長距離ミサイルと相場は決まっている。

『短剣』<sup>ダガー</sup>たるAAMの出番は、この機体の出番は、命を削り合う接戦となったその時。時の到来を見定めるべく、エリクは単眸を敵へ向けて奔らせた。

《エスクード、カスコ各機。X<sub>F</sub>L<sub>O</sub>A<sub>X</sub>A<sub>3</sub>発射》

《ウステイオ軍機、ミサイル発射》

三角翼の下にいくつも噴射炎が爆ぜ、電子制御の長槍が凍空を裂いて馳せ違う。入れ違いに殺到するは、敵からのミサイル複数。おそらく同様のX<sub>L</sub>A<sub>A</sub>。

ミサイルアラートが鳴り響く。『タイフーン』がバレルロールに入りながら正面へと



吶喊してゆく。

左、カルロス機上昇。チャフ弾散布、次いで背面飛行。ニムロツドの3機がそれに倣って一列に上昇してゆく。

ミサイル、2連。

操縦桿を引き、同時にエンジンを吹かして、機体を急上昇させる。

迫る。

アラートが近づく。

今背面に入ったら当たる。

頭上、雲。絶好の位置。

雲の下で背面飛行に入ったカルロス達と異なり、エリクの『ダガー』は雲の中へと入ってゆく。

白い闇、打ち付ける水滴。ばちばちとキャノピーを打つ水音に紛れるように、ミサイルアラートはびたりと止まり、機体は慣性の虜になったミサイルを振り切っていった。

《カスコ3撃墜!》

《くそ、近接信管にやられた!カスコ1被弾!》

《デル・タウロより各機へ、敵機2機の撃墜を確認。各機、敵戦闘機を優先して攻撃して下さい》

《…!? いいのか!? 本命は爆撃機だろ!?》

《グレイヴー、指示に従って下さい》

《エスクード隊、突っ込むぞ! ケツは蝙蝠連中に任せな!》

《ニムロッド各機散開。撃墜より攪乱を優先するぞ》

敵2機撃墜、こちらは1機喪失。視界の利かない雲の中で聴覚を研ぎ澄まし、エリクは通信から戦況を判断する。撃墜数はこちらが上だが、元々の機数を考えると今だウスティオ有利という所だろう。聞き探った限りではエスクード隊の『タイフーン』が例の一撃離脱戦法で呐喊し、他の各隊も本隊を崩しにかかっているようである。混戦ならば、機体性能に劣る『ダガーA』でも隙を突きやすくなる。すなわち、好機と言っていない。

「この辺、かつ!」

操縦桿を倒して機体を右ロールされ、すぐさま手前へ引いて背面飛行に入る。

目の前で薄まる雲のベール、露わになる視界。

遮るものが無くなった眼下では、まさに乱戦といった様相が繰り広げられていた。中央をウスティオのB-52が12機航行し、その周囲を敵味方が入り乱れて円弧を描いている。4機ひと塊となって離脱し、反転して再び襲い掛からんとする紅の『タイフーン』、その側面を固める数機のMiG-21UPG。敵はF-15『イーグル』タイプを

主軸にF-16を加えた編成で構成されているようだが、そのいずれとも異なる機影もぼつぼつ垣間見える。雲が低く上空を押さえられているためか、いずれも横方向への機動が中心の、立体というよりは面で動くように両軍が展開しているように見受けられた。

それなら。

今や唯一頼りとなる自らの目でもって、エリクは目標を見定める。マークを受けず敵編隊直上に位置するという絶好の位置取り、爆撃機を狙うには最良の位置だが、今回は目標から外されているためそちらは狙えない。加速性能に優れるものの、運動性や打撃力で圧倒的に劣るこの機体で狙うべきは、隙を見せている敵戦闘機。特に、眼前の目標を追うあまり、上空や後方への警戒が疎かとなっている単機ならば言うことは無い。

——いた。

眼前、降下するこちらから見て左。孤立したJ-10Aを追い、旋回行動に入っているF-15Cが1機。追われるJ-10Aは既に攻撃を受けているのだろう、煙を噴き、懸命に旋回で射線を外すことに必死になっている。

狙い目だった。瀕死で逃げ惑う獲物を前にすれば、意識は自ずとそちらに向いてしまう。他のグレイヴ隊機もフォローに回れないあの様子では、あのF-15は追撃に一心になっっているに違いない。エリクは操縦桿をわずかに引き、その2機の予測進路上へ

『ダガーA』の機首を向けた。

J-110Aが身を振じらせる。

左旋回は、しかし遅い。そもそも手負いのJ-110とF-115では格闘戦能力では話にならない。

ミサイル射程内。しかし、『イーグル』は撃たない。弾薬を節約する積りか、執拗に距離を詰め、機銃での攻撃を狙っているように見える。つまり、後ろは見えていない。敵機の斜め後ろから急降下し距離を詰める。

J-110、右旋回へ移行。

F-115が背を追う。

曳光弾が軌跡を刻み、J-110の翼を抉っていく。

一つ、二つ、灰色の翼に刻まれる、致命の弾痕。

照準の中で2機が舞う。

炸薬仕立ての矢を打つ射手に、背から『短剣』<sup>ダガー</sup>が忍び寄る。  
距離、800。

射程内。

「貫った！」

AAが火を宿し、2枚尾翼の尾羽を指して飛翔する。

間髪入れず、狙うは銃撃。咄嗟に旋回するF-15の背で、エリクは肉薄し、射程の一拍外から30mm機銃を浴びせかけた。

鋭角を描く旋回でAAMを避ける『イーグル』。尾部を僅かに外した弾頭は、しかしその熱を感知し、至近から爆発の衝撃を浴びせかける。傷つき揺らぐ機体、懸命に身を振る大きな翼。フレアをまき散らし逃げを打つその背へ、曳光弾の筋が殺到する。

擦過。しかし、浅い。

敵機の右後方を抜け、エリクは右へと旋回しながら目標を見上げる。至近距離のフレアに目を晦まされ狙いを外されたらしく、F-15は煙を噴きながら、それでも飛行を継続して旋回離脱に入っていった。しかし、推進器に損傷を受けたのか、その速度は『イーグル』に似つかわしくない程に鈍い。

まだ、追いつける。

即断し、見上げた目そのままに『ダガーA』が機首を上げる。

追撃に向け切っ先を指し立てる『短剣』。その矛先へ、頭上から曳光弾が降り注いだのはその時だった。

「うおっ!?!…くそっ、新手か!」

咄嗟に左旋回した鼻先を、轟、という音と共に機影が擦過してゆく。機体を傾けその先を見やると、ウステイオ軍のF-16——胴体上部の膨らみを見る限り、先日と同様

のE型か——が、速度を保ったまま機首を引き上げる様が目に入った。加速の際を制せられ、その間に被弾したF—15はこちらを振り切つて逃れてゆく。

「厄介な……。まずはあつちか！」

手負いを追うにも、あのF—16に背を追われたままではこちらが危うい。狙いを切り替えたエリクは、傾けた機体そのまま斜め下方へと旋回降下。急降下から引き上げに入るF—16の背目がけて、AAMを2発発射した。

煙の軌跡を残して、左右に別れたミサイルがF—16Eの背を追う。

敵機を選んだのは、旋回ではなく加速。十分に速度が乗った所で急上昇に入り、上昇の最中で機体をロールし捻り上げ、その側面をミサイルに晒す機動を取った。

一瞬、ミサイルの目が欺瞞され、投影面積が減ったその瞬間、敵機はフレアを散布。この機を置いて他にないという絶好のタイミングでミサイルを引き離し、ロールを終えたF—16は旋回の上端で背面に入つて、こちらの同高度正面に位置した。フレアに引き寄せられたミサイルが近接信管を作動させたのは、F—16がその戦闘機動——やや変則のインメルマンターンを終えた頃のことである。

正面、肉薄。

鮮やかな回避行動を見せた敵機に見とれる間もなく、正面に位置したF—16Eからミサイルが放たれる。

この機体では、下手にバレルロールをしては却って機動を鈍らせる。針路は、わずかに斜め上。

すなわち機体下方でミサイルをいなし、返す刀で機銃を穿つ。

迫るミサイルは正面から軌跡を描き、上昇に伴い視界から一瞬消える。

二筋、爆発。破片が機体を撃ち、振動が機体を苛む。だが、致命ではない。

同時に放つた機銃弾が、目標を捉えたのはコンマ数秒。

びしり、と視界の端に一瞬火花が爆ぜ、エリクの『ダガーA』とウステイオのF—1

6Eは正面から馳せ違った。

「やるな……並みのパイロットじゃない」

操縦桿を握る手が軋み、噛みしめる奥歯。同時にエリクの口元に浮かぶのは、従前のような快活な笑みだった。直上からの奇襲、変則インメルマンターンでの回避、回避と攻撃を一体化させた背面からの肉薄攻撃。報復という悲壮な決意を胸にしてからこのかた、これほど楽しい戦いがあっただろうか。

左旋回、やや上昇。翻れば、敵も横方向への旋回に入り、横倒しとなった巴戦の様相を呈している。どうやらあの敵も、こちらを目標と見定めたらしい。

《グレイヴ4被弾。戦域から離脱する》

《エスクード1、1キル！いいぞ！》

《ニコラス、気を付けろ。敵にも動きの良い機体がいる》

《デル・タウロより各機、空域へ少数機の接近を確認。カリヴルヌス発動まであと少しです、持ち堪えて下さい》

通信に入る雑音を意識の外にしながら、エリクは旋回を続ける敵の姿を追う。

雲量、さらに増えて9。徐々に視界が悪くなり、雲を纏う山肌が見え隠れする中で、F—16Eは確実にこちらの尻を捉えつつある。元より旧式のデルタ翼機で、F—16相手に格闘戦で敵う筈もない。

さて、どうする。

上空の雲に逃げる？高度を少々失った今となつては、おそらく逃げ込む前に追いつかれる。

では、側方の山に立ち込める雲の中はどうか。チャンスはあるが、山肌に衝突するリスクも相応にある。いや、運動性に劣るこちらの方がむしろその危険は高い。

加速で逃げる？最も目としては強いが、先日の戦闘の通り、F—16Eの加速性能は高い。振り切れるかどうかは五分だろう。

それなら。エリクは警報を聞き流しながら、周囲に目を走らせた。上空には格闘戦を行うF—15と『タイフーン』。遙か前には悠々と飛ぶB—52。燃えて墜ちてゆく灰色の機体。同空域にばかりと浮かぶ羊雲。



——雲。

「…狙うか！一か八かだ！」

前方、やや上方に浮かぶ中型の雲を捉え、エリクは旋回を止めて機体を水平へと戻した。格闘戦の勝敗を見極め、後方の敵機は速度を速めて接近して来る。

背中に迫る。

雲が近づく。

後方、1500。前、だいたい500。

背後から、ミサイルの射程の捉えられる二拍ほど外で、エリクは一気に減速を仕掛け、そのまま雲へと突入した。さほど大きくないこの雲に入っただけで——すなわち敵から姿を晦ませられるのは、持つて3秒。その間に、敵の意表を突いて一気に勝負を決めなければならぬ。

こちらの行動に対し、敵が採りうる行動は二つ。その二択のどちらを選んだかで、勝敗は分かたれる。

雲の手前から急減速したエリクは、意を決して操縦桿を倒し、そのまま手前へと引いて背面降下。雲の下端へ向けて急降下し、明るさが増した所で操縦桿を思い切り引き上げた。

機体が水平となり雲から抜け出る。視界が、明るさで一瞬幻惑される。どこだ、敵は。

どちらを採った。

雲の下端から抜け、見上げたその先。そこには、先程のF-16Eが雲を迂回し、速度を落として右旋回に入っている様が目に入った。位置としてはこちらの斜め上方700ほど、こちらに機体下部を見せた状態となっている。すなわち、敵に取ってこちらは死角。

操縦桿を引く。機首、仰角。フットペダル押下、増速。

翼が風を孕む。敵の翼が近づく。

兵装選択、残ったAAM-1基。

目標たるこちらが雲を突き抜けて来ないことに、敵の翼がかすかに揺らぐ。

惜しい。だが、もう遅い。

距離、500。

「貫った!!」

宣告の言葉がボタンを押し、ミサイルが、次いで機銃が照準の中心へ向けて放たれる。全てを察し、右へと機体を翻す敵機。しかし、あまりにも至近に過ぎたその距離は、そのパイロットの腕でさえ埋めることは叶わず。AAMはその右翼を粉々に打ち砕き、続いて殺到した30mm弾が胴体を捉えて、貫いた灰色を炎へ変えた。

こちらが雲へ突入した時、敵が採りうる手は二つだった。すなわち、一つは雲の中で

のオーバーシユートを警戒し、減速しつつ雲を迂回して雲から出たこちらを狙い撃つ手。そしてもう一つはオーバーシユートのリスクを敢えて踏み、雲へと突入して至近から銃撃を浴びせる手である。今回敵は前者を選び、迂回した所で隙を撃たれる形となったのだ。もし後者を取られていれば、減速し至近距離を捉えられたこちらに回避の術はなく、雲の中で蜂の巣になり落とされていただろう。

汗、一筋。

四散して落ち行くF-16Eへ、エリクは旋回し一瞥を送る。

名も知らぬ強敵を退けた、身を浸す感慨。それを打ち消したのは、予想だにしない女の声だった。

《あらあらあら、素晴らしい腕前でしたわエリク様。御見それいたしました》

「……、この声……!?!」

血なまぐさい空戦にそぐわない和やかなほどの声音。なぜかぞっとしたものを感じながら、エリクは反射的に周囲を見回した。

煙を噴く戦闘機、フレアを撒く黒い翼端の機体。見上げ、視界を飛ばし、そしてそれが最後に至った先——すなわちこちらの眼下。声の主は、血で血を洗う激戦の下を、悠々と飛んでいた。空戦中であることも忘れ、エリクは思わずそちらへと機体を向けてゆく。

間違いない、ポピュラーな輸送機であるC-130。ただし国籍マークは記さず、代わりに主翼や胴体にL・M・A. というエンブレムが施されている。

サヤカ・タカシナ。ルーメン・メイエイション・エージエンシー社員を名乗り、傭兵に武器を売り歩く死の商人。基地で出会いこそすれ、まさかこんな空戦の最中に出会うとは想像の外と言っている。それも、非武装の輸送機で戦場を横断するとは。

「な……何やってんだアンター……ここを何処だと思ってるんだよ、戦闘中だぞー！」

《嫌ですわ、わたくし達は困っている方々を援けるのが社命、ご用命とあらばどんな時でもどこへでも、でございますから。丁度ゲバートやレクタで業務を行った帰路で、こちらに至ったという訳でございます》

おっとりのんびりとした女の声に、エリクは思わず頭を抱えそうになった。

戦場を堂々と横断する所もそうだが、今やサピンに取って敵国であるレクタへ行き、あろうことか商売をして来たと臆面も無く言い放つアクの強さもその原因だろう。胡散臭さもアクの強さも、ここまで来れば立派である。

「……と、ともかくだ。あんたら早く雲に紛れて逃げろ。この空域はまだ……」

《エリク、ぼんやりするな！直上から2機！気を付けろ、速いぞ！》

「!?ち……とにかく伝えたからな！攻撃は引き付けてやるからさっさと空域を離脱しろよー！」

《あらあら、紳士でございますねエリク様。わたくし照れてしまいます》

確実に照れなど一切感じていないサヤカの口調を速やかに脳裏から追い出し、エリクは翻した機体から上を見上げる。機数は2、確かに直上。逃げの一手を打つてもいいが、せめて数十秒は稼がないとサヤカのC-130が追いつかれてしまう。

直上、ミサイルアラート。機体を水平に戻し、機体を加速させる。ミサイルとこちらのベクトルがほぼ直交するこの位置取りでは、そうそう当たるものではない。

遙か後方を擦過するミサイル、それを見定めて引き上げる操縦桿。インメルマンターンの要領で高度を稼ぎ水平に戻ったエリクは、同じくこちらと同高度で旋回に入った敵機の姿を具に捉えた。

——瞬間、驚愕した。

スマートな形状のF-16タイプとも、角ばった武骨なスタイルのF-15タイプとも、それは異なっている。

流麗で滑らかな機体形状、F-15と比べ短く太い機首、そして歪んだ菱形のような主翼。斜め外側に開いた尾翼といい、ずんぐりとした胴体といい、その姿は噂に聞くF-35A『ライトニングII』と見て間違いない。

だが、エリクが驚愕したのは、その機種ゆえだけではない。一度見た者を忘れさせぬ、その塗装だった。

2機は、いずれも灰色地。一方の1機は両翼端と両尾翼端を斜めに青く染め、残る1機は右翼を中ほどから赤く染め抜いている。レクタ空軍の頃から見知ったその姿は、間違える筈もない。

「…『ガルム隊』のF—35…!…こんな時に!」

円卓の鬼神。魔王。地獄の番犬——。

悪鬼とも英雄とも謳われる、15年前のベルカ戦争の大エースが施していた塗装パターン。その姿を受け継いだ二人と、エリクはかつて見えたことがあった。かつての先代『ガルム隊』を知るカルロスやロベルト隊長曰く『腕前は先代の方が上』とのことだが、今の二代目でさえ、自分を遥かに上回る鮮やかな技量を持っていたことは鮮明に記憶に残っている。

あろうことか、その二人とこのタイミングで見えることになろうとは。しかも、向うは最新鋭機、こちらは型落ちの第3世代機である。勝ち目は到底無い。

「時間を稼いで雲に逃げるしかないか…!」

予期せぬ邂逅に臍を噛みながら、エリクは操縦桿を握る手を強め、ガルム隊の出方を見定める。こちらの正面で2機は旋回し、左右両翼からそれぞれ襲い掛かるべく位置取りを始めていた。向かって右はガルム1、左はガルム2。こちらの左右斜め上から、加速とともに撃ち下せる位置。

上昇では、まず逃れられない。ヘッドオンでも、向うの方が機銃の性能も射撃術も上である。到底凌ぎきれない。

ならば。リスクを覚悟で、加速を以て突っ切る他ない。

歯を食いしばる。フットペダルを押し込む。

加速。ぐん、とGが強まり、回転数が圧となって体を座席に押し付ける。

斜め上、2機。

機首をやや内側に、まるで鋏で押し切るように距離を、退路を詰めてくる。

行けるか。完全に退路が閉じるまでに抜けられるか。

ミサイルアラートが鳴る。

曳光弾がギロチンの刃のごとく迫る。

炸裂音が機体を苛む。

爆発。近接信管。

『ダガー』の翼がその焰を振り切っていく。

ごう、と頭上を過ぎる衝撃音。主翼と胴体に弾痕を幾つか刻まれながら、エリクの『ダガーA』はなおもエンジンを吹かし、鬼神の両刃から翼を躲し得た。さしもの『ガラム』も機体にまだ慣れていないのか、幸いにして被弾はそこまで多くはない。後方警戒ミラーの中で、2機はすぐさま旋回し、こちらへと追撃を仕掛けつつある。

《デル・タウロより各機へ、カリヴルヌス発動カウントダウン開始。速やかに戦線より離脱を開始して下さい》

《アークトウルスよりカリヴルヌス、所定位置に就いた。収束レベル2に設定、減衰距離4000》

《カリヴルヌス了解。3秒間の照射のち一次冷却に入る。照射位置リンク完了》

《こちらニムロッド1、僚機の撤退を支援した後こちらも撤退する。『ベイル』、大丈夫か》

「なんとかして見せる……あとは祈つといてくれ！」

カリヴルヌス、起動開始。

目前の窮状からはつと我に返り、エリクは一瞬空を見上げる。未だに乱戦模様は継続しているものの、生き残った『タイフーン』部隊から順に、サピンの航空部隊は順次撤退を開始している様が見て取れた。見上げた限り爆撃機はいずれも健在、護衛の戦闘機も半数以上が生き残っている。

ともあれ、今はこちらである。背後を追うガルム隊は猛追中、高度差が開いた今となつてはカルロス達の援護も期待できない。アフターバーナーを使用せずとも超音速飛行が可能なスーパークルーズ能力をフルに活かし、2機のF-35は瞬く間に距離を詰めて来る。



目算距離、1500、1300、1000。

距離が瞬く間に狭まり、灰色の機体が視界一杯に大きく映える。ミサイルを使い果たしたのか発射の気配こそないものの、もとより殆ど丸腰のこちらに對抗の術が無い以上、致命的な状況には変わりはない。旧式機1機を落とすのに訳はないと、一步、また一步と距離は狭まっていく。

加速はこれ以上効かない。ならば、せめて。

押し込むフットペダルは、減速側。

瞬間、がくん、と機体が揺れ、エリクの『ダガーA』は急減速に揺れた。加速する敵機との速度差で攻撃を受ける時間を極力減らすための苦肉の策だが、加速性能に優れるデルタ翼が災いし、急減速といえども『ダガー』の速度は急には下がらない。

敵が、一気に肉薄する。

二筋の光軸が殺到する。

くそつたれ。こんな、こんな所で——死んで、たまるか。

操縦桿を傾ける。出鱈目にロールを加え、落ちた速度で懸命に身を振る。

被弾音。

衝撃波。

そして、過ぎゆく轟音。

いつの間にか閉じていた目を恐る恐る開くと、2機のF-35は速度差そのままに頭上を通過し、遙か先で旋回に入る所だった。

「……？」

おかしい。

こちらの出鱈目な回避機動が功を奏したのかもしれないが、あの『ガルム隊』がそれだけで攪乱されるだろうか。ミサイルが切れても正確な機銃射撃で敵機を撃墜していた、あの二人が。機体に慣れていないという要素だけでは無い。——明らかに、射撃精度が違う。

まさか。

《エリク、早く退け！もう照射まで時間が無い!!》

「俺だつて退きたいのは山々なんだけど、な……！」

カルロスの必死な声も、目前の戦況に打ち消される。

仮にその『仮説』が真だとしても、この状況ではこちらが圧倒的に不利である。このまま回避しおおせられるものではない。

旋回を終えた2機が、再び正面からこちらを捉える。

今度こそ、本当に避けきれるだろうか。高度を失い、逃げ場のないこの状況で。

正面。距離、2000。

来る。

その瞬間は、しかし宣告の声とともに消え失せ、ついぞ来ることは無かった。

《カリヴルヌス、照射》

間、2拍。

思わず空を見上げたその瞬間、エリクは絶句した。

雲を切り裂き、天から降り注ぐ無数の光。

鮮やかな黄色の光軸がいくつも、まるで光の雨のように一帯へと降り注いだのだ。濡れ紙のように雲は破れて蒸発し、光の雨に触れたB—52が瞬く間に四分五裂して、爆発とともに空に消えていく。直撃を受け翼を千切られるF—15、片翼を失って姿勢を崩し、僚機に衝突するB—52。阿鼻叫喚の巷と化した上空では、人々の悲鳴すらも蒸発し、光軸に貫かれて消えていく。

時間にして、わずか数秒。

20機以上が残っていた筈のウステイオ編隊は、無数の雨に貫かれ、文字通り壊滅していた。B—52は全て爆炎に消え、僅かに生き残った戦闘機が狼狽したように旋回している。先程まで何人もが飛んでいたとは到底信じられない、死の空。焼け焦げて流星のように墜ちてゆく残骸の他に、その命の残滓を物語るものは残っていない。

『ガラム』の2機もそれを見、不利を察したのだろう、機首を挙げて鼻先を北へと向け

ていった。それに呼応したように、残存機も身を翻して北へと向かっていく。

一瞬にして、雲が消えた空。その遙か上空には、先程の双胴機が、辛うじて見えるほどの高高度に浮かんでいるのが見える。こうなれば、もう疑いようは無い。——やはり、あれこそが秘密兵器だったのだ。

「あれが……。…あんな、ものが……」

《あらあら、これは貴重なものを拝見できました。…さて、エリク様、ご無事で何よりですわ。さ、一緒に引き上げましょう》

とうに逃げたはずの聲が、呆気にと取られたエリクの鼓膜をのんびり揺らす。

『ダガー』が向けていた鼻先、今だ残る雲の塊から姿を見せたのは、言うまでも無くサヤカのC—130。逃げたと見せかけ、すっかり先の兵器を見ていたらしい。もはや通信を送るのも面倒になり、エリクは無言のままC—130の隣に随伴した。

カリヴルヌスの威力。謎多い双胴機。

予想外の連続に沸騰する頭を懸命に鎮め、ともかくも思考を落ち着かせる。

あの威力には驚いたが、その素性はあくまでサピンの秘密兵器である。あの双胴機もおそらくその本体か何かであり、頼りになる味方程度に思っていればいい。

静けさを取り戻した脳裏に、澱として残るのはあのガルム隊である。塗装パターンは確かにガルム隊だったが、射撃技術を見る限り、その技量は明らかに前に出会った時と

比べて劣っていた。

エリクの脳裏に浮かんだ仮説は、そこである。

かつて、自分たちハルヴ隊は、戦争のコントロールを目指すベルカ残党——カスパルによつて謀殺された。意図せずして戦場をひっくり返すエースは、戦争のコントロールに有害なため……というのがその趣旨という訳である。翻つて、ガルム隊はウステイオを代表するエース部隊。言うなれば、ハルヴ隊の立ち位置と非常に似ていた。

つまり。

本来のガルム隊は、ハルヴ隊同様にベルカ残党によつて謀殺され——少なくとも空に上がれない状態となつて、代わりに何者かがすり替わっているのではないか。おそらくは、ベルカ残党の意を受けた者が。

「……サヤカ」

《はい？何でございましょう、エリク様。ご用命ですか？》

「……あんたらは、サピン以外にもウステイオやレクタにも立ち寄るんだよな。武器弾薬や機体以外のもの……例えば『情報』なんかも仕入れられるのか？」

《はい、お安い御用でございますよ。ご予算次第で、気になるあの子の下着の色から核弾頭発射コードまで……》

「それなら、一つ頼みたい」

《はい？》

半ば冗談めかしたサヤカの言葉を遮り、エリクは依頼を口にする。

これが、どこまで意味を持つかは分からない。新たな機体や兵器を買わねばならない今、無駄に資金を費やせないのは分かっている。それを意識しながらも、エリクはそれを提案せずにはいられなかった。一つには、ベルカ残党の手がどこまで伸びているのかを予備知識として知るため。そしてもう一つは、自らの読みの真贋を知りたいがため。我ながら気紛れが過ぎるが、再び相まみえる可能性もある以上、確かめておいて損はない筈だった。

「現『ガラム隊』の素性。所属基地。ここ数か月の動向。不審な人物との接触の形跡。その他分かる限りの情報を集めてくれ」

ヴェスパートを指す二つの機影が、応える言葉とともに白い闇へと吞まれてゆく。

この思い付きが、何をもたらすのか。この時のエリクには、未だ知る由も無かった。

## 第27話 Breaker

へそを曲げたレクタの空が、灰色の空から絶え間なく雷光の筋を閃かせている。

格納庫の屋根を叩く雨音はばちばちと爆ぜ、さながら機銃掃射と聞きまごう程に凄まじい。12月も上旬に入ったこの時期で季節外れの雷雨など、一体誰が予想しえただろう。熱帯のスコールよろしく数m先すら陰るこの状況では離陸もままならず、お陰で午後の前線空爆任務は全て流れてしまった。いずれにせよこの天候では、前線でも両軍ともに休戦状態だろう。いつ終わりを告げるかも知れない膠着を破るためとはいえ、天候と運だけを頼りに遮二無二動こうとする軍などいない。

レクタ空軍スヴォレフホイゼン基地の一角、暖房の効いた、格納庫脇のパイロット詰所。重雷の音色とコーヒーの香りに包まれながら、少女——パウラ・ヘンドリクスはマグカップに手を重ね、手のひらからじんわりと伝わる熱を感じていた。

「やれやれ、今日ばかりは救いの雨だぜ。こういう時は小規模の基地ってのはいいね。基地設備の不備により離陸できません、って言い訳にも使える」

「……あまり居心地はよくない」

「そうか？余計な目が無い分、俺はヘルメートより気楽だがね。レクタの金をせびって

機体も最新鋭、おまけにお連れはエルジアの自信作ときた。言う事なしだぜ」  
「……………」

詰所に屯するのは、パウラの他は同じくベルカ残党の素性を持つフィンセントのみであり、それゆえに話す内容にも気兼ねが無い。思わぬ臨時休暇に存分に羽根を伸ばすフィンセントを横目に、パウラはいささか冷めたような心持で、詰所のガラス越しに格納庫を見やった。

実質的にレクタ内のベルカ残党を結集する意味合いが強いこの基地は、機密保持や運営面から、比較的小規模な拠点として運用されている。パイロット、上層部および各班長は全てベルカの意を汲む者で構成されており、員数外となる武装の供給も民間の調達代行業者を介して行っていることから、体制としては盤石のものとと言えるだろう。流石に末端のスタッフはレクタの人間がほとんどだが、彼らはこの基地を純粋に『各地から精鋭を集めたエースパイロット基地』と信じ切っている。基地内には各所に監視設備も整えており、自分たちの企図が外部に漏れる懸念はまず皆無といって良かった。その点から言えば、正体の露見に神経をすり減らさねばならなかった以前と比べて気が楽というのは、確かに間違っていない。

もつとも、小規模とは言ったものの、機体の特性上あくまで維持管理のスタッフが少なく済むだけであり、配備機数としては並みの基地に劣らない。



飛行隊の数は、実に5つ。レクタの目を欺くべく『ハルヴ隊』と同じ塗装を施した『グリペンC』4機で構成された『グラオモント隊』と、ノースオーシア・グランダーI・G.社を通じて入手したX-02『ワイバーン』10機がその主力であり、グラオモント隊は構成各機が複数機の無人『ワイバーン』を制御する形になる。『ワイバーン』の機数はやや半端ではあるが、これは本来の配備数12機のうち、ハルヴ隊の謀殺の際に2機を失ったことから、今は定数減の状態となつてゐる為であつた。予備パーツの使用とグランダー社からの空輸を図つてはいるものの、今の所補充の目途は立っていない。

そして、これらを統括するのがアルヴィン少佐率いる『スポーク隊』という訳である。受領したF-35A『ライトニングII』も、スポーク隊本来の塗装である緑系統のダズル迷彩から、黒地に主翼の灰帯というかつての『グラオガイスト隊』を思わせる塗装パターンに改められており、ベルカの意を継ぐ者としての装いをより強く醸し出している。また、複座型が存在しない『ライトニングII』の事情に鑑みて、フィンセントが新たに3番機のパイロットを務めているのも変化の一つである。

総配備機数、17機。最新鋭機を以て構成され、ベルカの報復の意を体现する『灰色』の牙城。諸国を包む炎の中で、この基地から飛び立っていく『飛竜』は、これからも諸国を亡滅させるまでその炎を煽り立てていくのだろう。

レクタが、サピンが、ラテイオが——周辺諸国が余さず荒廃し、絶えない戦火に沈ん

だ時。そこに、本当にベルカの栄光はあるのだろうか。少佐が人生全てを投げうってまで希求する、ベルカの栄光とは、一体何なのだろうか。当時は幼く、ベルカにいた頃の記憶すら曖昧なパウラにとって、その希望は五色の雲のように輝かしく、それでいて今一つ現実のものとして感じるができない。

胸の皮一枚下にその思いを封じ込み、パウラはフィンセントの言葉もほどほどに、天を揺らす雷の音に耳を澄ませた。

ごろん、ごろ、ごごご。不規則な重低音を下地に突発する落雷は、さながら火薬の爆発音。小さい頃から聞き慣れた、命が焔に爆ぜる音。空が紡ぐ不規則なその散文に、こつ、こつと硬い拍子が混じったのは、その時のことだった。

「ま、なんにせよ今の所順調なんだ。今日くらいゆっくり…」

「悪いが、そももいかなくなった」

「…し、少佐!? どうしたんです、びしょ濡れじゃないですか!」

頬杖をついたフィンセントの目が見開かれ、ぎよつとした顔で後ろを振り向く。パウラも下げていた目線を上げると、制服も髪も滝をくぐったように濡らしたアルヴィン少佐の姿があった。毛先から雫を滴らせ、携えていた書類ケースをテーブルに置く傍らで、フィンセントは慌てた様子でタオルを少佐の頭に被せている。その様がどこかやんちゃな子供を心配する母親のようにも見えて、無表情の下にもパウラはちよつぴり可笑

しかった。

どうやら雨の下を司令部棟から走ってきたらしく、改めて見ると少佐の服の前面や足下は濡れて色が変わってしまったている。上着を脱いでコートを羽織り、フィンセントがいそいそと温かいコーヒーを淹れる中、パウラはテーブルに横たわる書類ケースへと目を奔らせる。相当な厚みのあるそれは何らかの報告書であることが窺い知れ、写真らしきものも透明なケース越しに捉えられた。濡れるのも構わず雨下を駆けた少佐の様も踏まえれば、よほど重大な事態が生じたのだろう。

ミルク入りのコーヒーを傾け、呼吸一つ。パウラは、髪を拭い終えたアルヴィン少佐が口を開くのを待った。

「まったく、無茶しないで下さい。隊長もいい加減年なんですから。…あ、それで何でしたっけ」

「前線の事態が動いた。我々も計画の修正を迫られることになる。…オットー、パウラ、これを見ろ」

コーヒーのマグカップには手を付けないまま、少佐は書類ケースを開け、何枚かの写真を取り出した。航空機搭載のカメラから画像を抽出したものなのだろう、荒く不鮮明な写真は、一目見ただけでは容易に何が映っているのか伺い知れない。フィンセントが首を傾げながら写真を凝視する傍ら、パウラは一足先に分厚い書類の束に手を出し、文

字の羅列を頭へと読み込んでいった。

驚きはしなかった。そう言えば嘘になるだろう。写真から何かを捉えたらしいフィンセントも目を見開き、こちらと目を合わせる。

こくり、首肯一つ。二人同時に向き直った先では、水分の残る顎を手のひらで拭うアルヴィン少佐の顔があつた。

「サピンのレーザー兵器だ。先日、サピン本土侵攻のため出撃したウステイオの戦爆連合が、これらによつて壊滅的な打撃を受けたという。その写真は、残存機の機載カメラの映像と後日の偵察写真、そして同志の諜報記録だ」

「サピンの、つて……少佐、これは……」

「……」

耐えかねたフィンセントが、まるでこみ上げる感情を抑え込むように言葉を吞む。それほどまでに、写真に映し出されていた『それら』はベルカの人間にとつて——就中かつてのベルカ軍を知る者にとつて衝撃的だった。

映し出されていたのは、2つ。

1つは、平行に配置された二つの胴体を持つ巨大な双胴機。強い後退角を持った主翼、正面から見れば8の字を描くようにくびれを持った独特の胴体形状、そして計5枚にもなる垂直尾翼。尾翼やエンジンの数こそ異なり、胴体下に見慣れない構造物を吊り

下げているものの、その特異な胴体形状は見間違えう筈も無い。

公国軍時代、ベルカ空軍爆撃隊の中心を担った主力大型爆撃機、Bm—335『リン  
ドヴルム』。おそらくは、それを素として改造された機体だろう。

方や、もう一方はパウラに取っては見慣れないものである。

山の中腹に穿たれたトンネルから半身を覗かせているのは、遠目に見れば黒一色の継ぎ目のない列車。よくよく見れば車体の後方からは無数のコードや別の小型車両が付随し、平坦な車体上面には砲身のようなものが見て取れる。砲身の長さこそ短いものの、その形状は半世紀以上前の戦争で投入された線路移動式大口徑榴弾砲——いわゆる列車砲とよく似ていた。

時代錯誤な。詳細を知らないパウラにとつて、『列車砲』に抱いた感傷はその程度に過ぎない。それだけに、直後に響いたフィンセントの怒鳴り声に、パウラはらしくなく心臓を跳ね上げた。

「馬鹿な！何がサピンの新兵器……こりゃ『リンドヴルム』に、『エクスキャリバー』のレーザー列車砲じゃないですか!!」

「その通りだ。サピンは、あろうことかベルカから奪った技術を用い、諸国に覇を唱えようとしている。レーザー技術はユークトバニアが独占したものと思っていたが……無節操なことだ。いや、厚顔無恥と言うべきかな」

押し殺したような少佐の静かな口調が、却つてその怒りを物語る。フィンセントに至つては拳でテーブルを殴りつけ、堪えかねた感情を吐き出していた。

過去を知る者と知らない者の差なのか、それとも単純に感動しにくい性質たちなのか。静動対照に怒りを露わにする二人を前に、パウラはどこか取り残された所在なさを感じながら、もう一口コーヒーを啜つた。

——接收機を利用した双胴機、そしてベルカの技術の結晶であるレーザー列車砲。それらをサピンが入手した経緯は、当然ながら3人は知る由も無い。

そもそもサピンの事情として、サピンは国内に大型爆撃機製造工場を持っていない。保有する主力爆撃機B-52『ストラトスフォートレス』は全てオーシアを経由して入手したものであり、言い換えれば爆撃機の保有については常にオーシアの目が光つていた訳である。東方諸国の盟主を目指すサピンにとつてオーシアに掣肘されない大型爆撃機の保有はいわば悲願であり、その抜け道としてベルカ軍規模縮小により居場所を無くした『リンドヴルム』はうつつつけの機体だった。

このような事情の下、ベルカ敗戦とベルカ軍縮小に伴い除籍された『リンドヴルム』に、独自戦力の保有を志向するサピンが一も二も無く飛びついたのは言うまでもない。大国オーシアとユークトバニアの目を警戒し機数こそわずかだったものの、サピンは『リンドヴルム』の接收に成功し、ひそかに戦力を蓄えることとなった。

この状況に拍車をかけたのが、ベルカ戦争中のとある亡命劇である。

時はベルカ戦争末期、オースリアを中核とした連合軍が雪崩を打ってベルカ国内へ侵攻し、国土防衛の要である『円卓』も『エクスキャリバー』も失陥した頃のこと。敗色濃厚となったベルカから脱出すべく、ある技術者がサピンへ亡命を打診したのである。

同盟関係により『連合国』としてベルカに対峙している以上、本来であれば亡命の打診は連合国間で協議し、身柄の受け入れ先を決定するのが筋である。ところが、直接打診を受けたサピンは、独断でその受け入れを決定し、実行に向けて暗躍を始めた。

連合国に亀裂を入れかねない、隠密裏の決断。サピンをその綱渡りに導いたのは、その技術者が手土産として提示したものに他ならなかった。——それは、ベルカが心血を注いで作り上げた、本土防衛の要。超高層化学レーザー兵器『エクスキャリバー』の護衛に配備されていた、レーザー列車砲の設計図、そしてその基幹部分だったのである。レーザー出力こそ『エクスキャリバー』に大きく劣るものの、その分列車砲自体は比較的小型で要する電力も少なく済むことから、ベルカの後裔を狙うサピンは大いに食指を動かした。

亡命は、ベルカ最大の工業都市『ホフヌング』に対する連合軍の空爆に乗じて行われた。

当時、ベルカ軍は連合軍によるホフヌング侵攻を察知。少数の護衛部隊を随伴させ、

ホフヌング市民および技術者を事前に近郊の避難キャンプへ退避させていた。これを利用して、サピン軍はホフヌング攻撃の側面支援と称して傭兵部隊を派遣し、防空陣地と偽って彼らにキャンプを空爆させたのである。この混乱に乗じ、あらかじめ避難キャンプに退避していた件の亡命者は、手土産の設計図等とともにキャンプを脱出。ベルカ軍の追手を振り切り、まんまと待機していたサピン陸上部隊に保護されたという訳であった。

この亡命劇が演じられたその当日、ホフヌング避難民キャンプの上空を防衛していたのが当のアルヴィン——カスパル率いる航空部隊であり、眼下でそのような『裏切り』が進行していたとは、今に至るまで知る由も無い事だった。

「諜報の結果、レーザー列車砲はコードネーム『カリヴルヌス』、双胴機は『アークトゥルス』と判明した。『アークトゥルス』に懸架されている構造体は、レーザー収束器兼偏向器だと思われる。先の戦闘の解析によると、『カリヴルヌス』から照射されたレーザーを『アークトゥルス』が中継。レーザーを収束したのち、対象の位置へ向け照射する運用を取っているらしい。」

「そんな呑気に分析してる場合ですか……くそ、レーザー列車砲に『リンドヴルム』……!! サピンの奴らめ、ふざけやがって!」

「それで、少佐。先ほどの話だと、それらに対して何か下命があったのですか?」



『エクスキヤリバー』同様、宝剣の名を冠するレーザー兵器『カリヴルヌス』。そして、空を彩る恒星の名を宿す巨大双胴機『アークトウルス』。それらの名と姿、役割を脳裏に咀嚼しながら、パウラは激高するフィンセントを横目に、アルヴィンへと言葉を向けた。先ほど入室してきた時の少佐の言、そしてその口から唐突に語られたレーザー兵器の詳細を顧みれば、それらに向けた緊急の下命があつたことは容易に想像できる。

天井を叩く雨音が微かに和らぐ。フィンセントの鞆ふいしのような深呼吸が、その調べをかき乱してゆく。

コーヒーカップを傾け、ごくろりと鳴るアルヴィン少佐の喉。一拍置いて口を開く少佐の目には、もはや怒りも動揺も無く、常の冷静さが戻っていた。

「察しの通りだ。大打撃を被つたウステイオの現状、ならびに戦局を揺るがしかねない超兵器の存在を鑑みて、レクタ上層部はウステイオと合同の『カリヴルヌス』攻略作戦を発令した。表向き『エースパイロット部隊』となる我々も、その攻撃部隊として参加することになる」

「…ほおお。レクタに丸投げして来るかと思えば、こりやいい。死力を振り絞つたウステイオがさらに打撃を受ければ、ウステイオは早くも死に体だ」

「ウステイオの没落は歓迎すべきだが、超兵器の存在は看過すべきではない。『カリヴルヌス』の存在を許せば、東方諸国の戦争はサピン一強を保ち終結してしまうだろう。」

我々の目的の為に、『カリヴルヌス』『アークトゥルス』の少なくとも一方は、是が非でも破壊しなければならぬ」

「確かに。高高度と山岳地帯、高度も特徴も違う2つの目標とは、骨が折れそうですが：我々が狙うべきは列車砲の方つて所ですかね。『テュールの剣』のやり方を応用しますか？」

「その通りだ、流石にいい読みだな。：二人とも、これを見る。まだ試案段階だが、司令部から提示された作戦内容だ」

卓上のコーヒーカップを避け、アルヴィン少佐が広げたのは所々濡れた地図。標高差や地形が詳細に描かれており、一目で起伏の激しい峻厳な山岳地帯の様が見て取れた。地名や地形から察するに、サピン北東部に位置するピレニア山脈周辺、それも標高の高い山が連なる山脈北部と見て取れた。地理的には、ピレニア山脈は徐々に標高を下げてつウステイオへ連なり、再び隆起してヴァレーをはじめとする山岳地帯へと続いて行くことになる。

フィンセントとパウラが地図へぎつと目を通したのを確かめて、アルヴィン少佐は胸ポケットからボールペンを取り出した。かちり、と頭を押し、落としたペン先は山脈東側に位置する溪谷の入口である。

「前提条件として、今回は爆撃機の投入は行われぬ。先の戦闘を鑑みて、大型で鈍重な

爆撃機では危険が大きいと判断された為だ。また、今回はあくまでレクタ軍としての参戦となるので、『ワイバーン』も投入できない」

「そうなるよ、主軸は戦闘機」

「そうだ。幸い『カリヴルヌス』の位置、『アークトウルス』の航行ルートともに、オシアの偵察衛星から情報は掴めている。この情報をもとに、ウスティオ・レクタ両軍は戦闘機を出撃させ、全力で『アークトウルス』を叩く」

「…素振りを見せる、ですな？」

「その通りだ。鈍重な大型機とはいえ、『アークトウルス』自体の防衛火器に加え、サピオンも全力で護衛戦闘機を上げて来る筈だ。自然と、互いの目は空中へ向くことになる。

——そこでだ」

そこまでを語って、少佐は落としていたペン先をゆつくりと動かし始めた。滲んだ始点から、黒い線は峡谷を通り、深い地形に沿って南へぐるりと回り込んで、やがてその南端から北へ大きく舵を切る。峡谷が徐々に細く閉じ、急速に狭まって消滅したその先には、山脈の中間に記された大きな丸印——すなわち、『カリヴルヌス』が潜伏していると思しき地点が位置していた。

ペン先が止まり、ほう、と漏れた息。それは果たしてフィンセントのものだったのか、それとも無意識に生じた自分のものだったのだろうか。

「我々はF-35のステルス性能を活かし、この峡谷内を巡航。『カリヴルヌス』潜伏地点へ接近した時点で急上昇し、目標へ奇襲を仕掛ける」

「防衛火器は？」

「平地の少ない峻厳な山脈地帯だ、自走式地对空ミサイルの類はまず無い。せいぜい固定式の対空砲程度と見ていいだろう。むしろ、厄介なのは列車砲が潜伏しているであろうトンネルそのものだ。最低でも3か所の開口部が確認されており、トンネル内へ逃げられれば破壊は困難になる。その場合は、トンネル入り口を破壊し『カリヴルヌス』を一時的に封じる他無いだろう。一時的な時間稼ぎではあるが、レーザーさえ封じられれば大型爆撃機の投入も可能となる」

「確かに！我々には今や『アークバード』もいる。どう転んでもこれなら確実だ！」

「一応はそうなるが、あまり期待はするな。『アークバード』は対ユークトバニアが主で、こちらに裂く余力は今の所無い。あくまで、我々の力で目標を達成する」

少佐の口から語られた作戦は、先のフィンセントの読み通り、確かに『テュールの剣』攻略作戦を応用したものだった。すなわち、上空で大規模な団部隊が航空戦を展開。その間に本命の攻撃隊が絡め手から接近し目標を叩くという戦術である。もつとも今回は峡谷という視覚的な隠れ蓑があることに加え、F-35Aのステルス性能を活かせばレーダーで捕捉される可能性も低い。その点では、『テュールの剣』の際より難度は下が

ると言つていいだろう。トンネル開口部の破壊も、F-35の搭載量ならばけして不可能ではない。

もつとも少佐の言う通り、万一の切り札としての『アークバード』投入は些か難しいと思わざるを得なかった。オーシアが誇る大気機動宇宙機『アークバード』は現在、オーシアに潜伏したベルカ同志の手に掌握された状態にあり、ユークトバニアの都市へ直接攻撃を行うための準備段階に入っている。ベルカの技術を受け継いだレーザー兵器に加え、防御火器や無人攻撃機、果ては核兵器さえも搭載した『アークバード』はまさに空中要塞の様相を呈しており、投入さえされれば一都市の壊滅程度訳はないに違いない。裏を返せば、都市攻撃という本命の作戦が迫っている中で、わざわざ離れた対サピオンへ『アークバード』を投入する可能性は低いといえるだろう。『アークバード』はその構造から、進路変更の為に高度を下げなければならぬ。その致命的な隙を狙われるリスクがゼロでない以上、切り札は温存しておくに越したことは無い。

オーシアは大国ゆえに軍組織も非常に大きく、このようにベルカ残党の同志が潜入できる隙も多い。ユークトバニアとの戦争誘発、そしてそれに伴うオーシア・ユークトバニア両国の弱体化へ向けて同国の同志が果たした役割は大きく、両大国の国力は確かに漸減しつつあった。情勢を顧みれば11月14日にはユークトバニアが誇る最新鋭潜水艦『リムファクシ』が沈み、同25日にはユークトバニア中部のジラーチ砂漠をオー

シア軍が突破。現在は首都シーニグラードを護る最終拠点であるクルイーク要塞にオーシア軍が迫る段階であった。このまま順調に推移すれば、12月中にはユークトバニアは降伏することになるであろう。

だが、それではユークトバニアの亡滅は達成できても、オーシアの衰亡には至らない。そのため、今はオーシア内の同志が全力で工作に当たり、前線のオーシア軍の攪乱に努めている筈であった。中でも、先月29日にオーシアのノヴェンバー市で行われた平和式典では、同志がひそかにユークトバニア軍を手引きして都市を強襲。その中で、リムフアクシ撃沈やジラーチ砂漠突破に大きな貢献を果たしたエースパイロット部隊、『ウオードツグ隊』の1人を戦死させることに成功していた。残る構成員についても、近々同志の手で『処理』される手筈になっており、当面の間戦争は継続することになるだろう。

そう、人の怨恨が戦争の炎となり、地を焼き尽くすまで。

「作戦を確実なものとするため、拠点攻撃は我々およびごく少数の支援機で行う。ハルヴ隊に偽装したグラオモント隊は、サピン軍の目を引くためにも対『アークトウルス』へ向ける。未だ『三日月』に対するレクタ軍の声望やサピンの警戒は強い。目を引く役には適任だ」

「へへ、そりやそうだ。あいつらの抜け殻、今は存分に使わせてもらいましょう」

「……………」

とくん。

胸を刺す痛みが、疼きとなって胸を突く。

胸の裏に残る、炎に包まれて霧に消えて行く『グリペンC』の背中。そして、自分の名を呼ぶ、怒りに満ちた叫び。いくつ夜を超えても、それは目から、耳から、けして離れることは無かった。

裏切ることの喪失感。記憶を断つことの痛み。罪悪感と総括すべきそれらを、自分だけして忘れることはできない。

少佐は、フィンセントは、何も感じないのだろうか。かつてのベルカを知る記憶が、同志として飛んだ時間の長さが、二人を強くしているのだろうか。

「…お、すげえな、こんな雨の中着陸とは。少佐、補給機が来たみたいですよ」  
「件の民間業者か。オーシアの人間の割に、時間に正確だな。律儀な事だ」

二人の声に引かれるように、パウラは窓の外へと目を向ける。雨に煙る滑走路、視界の悪い曇天下で、翼端灯を閃かせたC-130『ハーキュリーズ』は主脚を出し、ふわりと地に降り立つ所だった。機体側面に『L. M. A.』と記された表記を見るに、かねてから依頼していた民間の調達代行業者だろう。正規ルートで補給を受けられない『ワイバーン』の部品供給には欠かせない存在であった。

すっかり冷めてしまったコーヒーを、一口呷る。

ミルクを入れていたにも関わらず、その苦みは胸いっぱい広がって、澱のように沈んでいった。

\*\*\*\*\*

「どうすればいい」

「何をだ」

相変わらず、ヒ首のように短い言葉。幾分苛立ちを以て言葉を返しかけた男——カルロスは、その声の主を振りむき、絶句した。

こけた頬、目の下の隈。食事は摂っている筈だが、没入した復讐の念は相当のエネルギーを要するのか、それとも研ぎ澄ました思念が相貌にも現れたのか。その青年——エリクの顔は、日に日にやつれ、哀れにすら思える様となっていた。白みを帯びた顔色、その中で煌々と報復への光を宿す右目は、悲壮や不気味という表現すら、もはや超えてしまっているようにも見える。

まるで、死を決したような表情。おそらく、先の『情報』が、エリクを追い込んだ結果に違いないだろう。

「……『ステルス』。どう、破ればいい。どうやって、奴らを墜とせばいい」

「お前……。……逃げる。機会を改め、別の機体を買って再戦を期す。それが確実だ」



やはり、か。

心中にその苦衷を察しつつ、エリクの焦燥に向け、カルロスは敢えて突き放す言葉を返した。

『情報』——それは、『カリヴルヌス』に対し大打撃を被ったウステイオ軍が、レクタと共同して『カリヴルヌス』攻略に進むという諜報だった。その情報共有に際し、カルロスはかねて得ていた『レクタに存在する黒地に灰色帯のF-35A』の事をエリクに話したのだった。すなわち、エリクが仇と狙うグラオガイスト隊が、最新鋭ステルス戦闘機F-35A『ライトニングII』を得た、という現実に直面したのである。

折しもエリクは先日との戦闘で、ウステイオの『ライトニングII』と交戦し、まったく歯が立たなかったことを実感している。片や、ステルス性能やスーパークルーズ能力を有する第5世代機。片や、中古型落ちの『ミラージュ5』をベースとした第3世代機『ダガーA』。性能の格差は比較することすらおこがましい程であり、単純に機体性能を比べれば、勝機は万に一つも無かった。

「それができれば苦労はしない!!…奴らが姿を現す絶好の機会だ。これを逃せば、そのチャンスはぐんと減る。——俺は、ここで奴を殺したい」

「無謀だ。『ミラージュ5』では勝ち目は無い」

「例の赤い『タイフーン』の隊長に聞いた。あんた、旧式の『フロツガー』と『タイガー

Ⅱ』でステルス機を撃墜したんだろ?…教えてくれ、どんな手を使ったんだ」  
「……ニコラスめ、あのバカ……」

唐突にエリクが質問して来た理由を察し、カルロスはがっくりと頭を抱えた。大方先日の空戦で同行した後、サピン正規軍の『エスクード隊』を率いるニコラスに聞いたのだろう。未だに情報が秘匿されている『国境なき世界』との戦闘に関する以上、本来口外は控えなければならぬ内容のだが、ニコラスは武勇伝の積りで口を滑らせたに違いない。

エリクが言う所は、概ね事実である。『国境なき世界』との交戦の最終局面において、カルロスは当時の隊長から受け継いだ戦闘攻撃機 MiG-27M 『フロツガーJ』を以て、当時F-15SE 『サイレントイーグル』を駆っていたグラオガイスト隊と対峙。F-15E 『タイガーⅡ』に乗るニコラスと連携して、そのうちの1機を撃墜することに成功したのだった。『サイレントイーグル』は優れた空戦能力を持つ『イーグル』にステルス能力を付与した発展機、片や『タイガーⅡ』は一世代前の軽戦闘機であり、『フロツガーJ』に至っては戦闘機ですらない。性能格差や立場で言えば、今のエリクに近いと言えなくもなかった。

だが、その前提は大きく異なる。当時の空戦ではグラオガイストの1機だけが孤立した状況での空戦であり、こちらは2機で応戦できたという要素が一つ。さらにステルス

打破のため、カルロスは爆風に紛れて敵機にチャフを付着させ、その反応を感知したニコラスが電波誘導式のセミアクティブ空対空ミサイルを撃ちこむ形で攻略した。すなわち、装備可能な武装が『ダガーA』と異なるという点がもう一つである。以上の条件を踏まえれば、やはり攻略の手は無いとしか言いようがない。

「チャフ。S.A.A.M。地上付近での爆発。敵単機が孤立するという都合のいい状況。そして僚機。…お前の『ダガーA』では、まず無理だ」

「……………何かある。何かある筈だ！…必ず…!!」

瞳の光に焦燥と失望が入り交じり、言葉とともに視線が地に落ちる。

絶望の淵で、それでも勝機を求めてもがくエリクの姿。どこか重なったかつての自分の姿に、カルロスは軽いため息をついた。

その面影を抱いたまま思いを口にしてしまったのは、単なる気紛れだけではおそらく説明がつかなかっただろう。そう意識する間もなく、カルロスは口を開いていた。

「しいて言えば、だが。俺がさつき言った要素に…戦術に囚われるな。そもそも敵も自機も違う以上、戦術は変わってくる。いや、変えなければならぬ」

「…戦術を、変える…」

「重視すべきは、どう姿を捉え、どう攻撃を当てるかだ。考えろ。お前と、『ダガーA』の強みは何だ。何に優れ、何が積めて、何が足りない。——考えろ。お前の手札は、何だ」

「……!!」

息を呑んだエリクの目に、光が戻っていく。

一つ、二つ、折られるエリクの指。じわりと佇む時間、指が4つを数えた時、再び上がったエリクの顔は、凄惨な相貌の中にも希望が微かに滲んでいた。

「ありがとう、やっぱり年寄りの話は聞くもんだな」

「おい待て、誰が年寄りだ」

遅れた陳情の声すら振り切って、エリクはこちらを顧みずに踵を返していく。

…訂正しよう。あの自由度、そして回りを見ず直進する性情。やはりあいつは自分では無くフィオンと同類だ。今度は先より大きめのため息一つ、カルロスは中断していた機体の点検へ向かうべく、格納庫の方へと歩を進めていった。

曇りがちの空、北東の空は暗く曇り、荒天の去来を告げている。

連鎖する報復の意思。それらが集うピレニアの地も、今は豪雨の下に煙っているに違いない。

## 第28話 聖剣の立つ地（前） — 尖鋭なる短剣 —

巨大な影が頭上を覆い、荒々しい山肌へと陰影を落としている。

平行に並んだ2つの胴体、両翼に4つと尾部に2つを備えたエンジン、そして機体各所から空を睨む機銃。ベルカ公国の忘れ形見たる大型爆撃機『リンドヴルム』の血を引く機体らしく、その威容は原型機完成から半世紀を経た今となっても些かも劣らず空を圧している。

さながら、神話の世界から飛び出してきたかのような、巨大な双頭竜——。いつそ禍々しさすら覚えさせるその巨体の下方で、エリクは乗機『ダガーA』から、しばし周囲を見渡した。

大型双胴機にして、サピンのレーザー兵器『カリヴルヌス』中継機たる役割を帯びた『アークトウルス』。それを中心に、周囲を多数の戦闘機が遊弋する様は、もはや航空編隊と言うよりも空に浮かぶ砦と評する方がいつそ近い。

事前情報通りであれば、こちらの展開機数はこれまでも増して多い。戦闘機隊の総指揮は、これまでの空戦で顔なじみにもなった『エスクード隊』に属する深紅の『タイフーン』4機。これにF/A—18C/D『ホーネット』の3小隊12機が『アークトウ

ルス』の左右および後方を護るといのが、サピン正規軍の編成である。これに、サピン傭兵航空隊である『ニムロッド隊』のMiG-21UPG『デビナス』4機と『グレイブ隊』のJ-10A『ファイヤーバード』4機、それにエリクの『ダガーA』が続く。合計25機という圧巻の護衛体制に加え、今回は後方に空中管制機『デル・タウロ』が、低空域にはハリアーIIのサピン仕様であるEAV-8B『マタドールII』からなる編隊がそれぞれ配置されており、まさに鉄壁の防御陣といべき様相を呈していた。

もつとも、第4世代機や同時代相応のアップグレードを施した機体、空中管制機といった現代戦に相応しい編成の中で、唯一エリクの乗機『ダガーA』だけは旧式機の域を出していない。アップグレードを経てもその性能は原型機『ミラージュ5』同様に第3世代機級がせいぜいいい所であり、おまけに対空能力に至っては、そもそもが戦闘攻撃機ということもあり不足と言わざるを得ないだろう。対空レーダーを装備せず、せいぜい赤外線誘導式短距離空対空ミサイル<sup>A</sup>での自己防衛が関の山という辺りからも、その苦衷は垣間見える。本来であれば前回の迎撃戦同様、基地で留守番しているべき機体なのだ。何せ、先の迎撃戦ではウステイオの一般的な配備機であるF-16シリーズにすら苦戦したほどであったのだから。

それでもなお、エリクが性能差を押しつけてまで出撃してきたのには理由があった。

兵器や機体を購入するため、資金が必要というのは当然一つ。しかしそれ以上に、エ

リックには実際に出撃して、何としても確かめなければならぬ事があったのである。

ステルス。現代の航空戦において、勝利をもたらす重要な要素の一つ。旧式の『ダガーA』で、それをいかにして破るか——。一見無茶としか思えないこの命題に対する『答え合わせ』を試すというのが、今回エリックが無理を押し出撃してきた理由だった。そもそもその発端は、カルロスからもたらされた裏切り者『グラオガイスト隊』に関する情報だった。

あの宿敵たる奴らが、最新鋭ステルス戦闘機であるF-35A『ライトニングII』を駆っている。

その情報を得た時から、エリックはひたすら打ち勝つ方法を考え続けた。手っ取り早いのは金を稼ぎ新たな機体を購入することだが、そのためには資金が到底足りない。しかし技量はともかくとして性能差はいかんともしがたく、ましてステルス能力を持つ『ライトニングII』と対空レーダーすら持たない『ダガーA』では話にもならない。

考え、迷い、狂騒するまで考え続けること数日。対ステルス機の経験があるカルロスの意見やサヤカから提示された対応兵装性能諸元を加味して、考え抜いた末の対『グラオガイスト』装備こそが、今『ダガーA』に備わっている姿であった。

もつとも、その装備もほとんどは元々と変わっていない。5か所のハードポイントのうち胴体下のものには増槽を下げ、主翼内側には自衛用の赤外線誘導式短距離AAMを

各1基搭載している点も従来のみである。

唯一変わっているのは、主翼外側のハードポイントに無誘導ロケットランチャーを装備していることだった。それも、通常の『ミラーージュ』に対応した先端が円錐形に近い形状のものではなく、大きな円筒状のランチャーの中にロケット弾が複数装填されている別規格のものであり、外見上の違和感を醸し出している。互換性の点で些か無理をしたものの、ミラーージュ5譲りの搭載能力をフルに活かした結果であった。

ステルス機には、当然誘導兵器が通用しない。にもかかわらず、かつてステルス機と対峙したカルロスは、旧式機でそれを仕留めて見せた。つまりは対ステルスにおいても空戦の本質は変わらず、いかに攻撃が当たる環境を作り、どの兵装を選択するか、という訳である。そのために機体性能を今一度見つめなおし、戦術を練り直して、通常のロケット弾とは違う信管と弾頭も調達した。

『ダガーA』の強み、適切な兵装の選択、そして自らの技量。全てを活かし練り上げた戦術は、こうして用意できた。あとは、実戦でその有効性を試すのみである。その点で、多くの戦力が集うこの戦闘は絶好の機会だった。

《空中管制機『デル・タウロ』より『カリヴルヌス』および『アークトウルス』へ。方位010よりウステイオ機接近中。機数約30、距離9500》

《こちら『カリヴルヌス』管制室、敵編隊へ向け先制照射を開始する。『アークトウルス』、



位置座標リンクを開始せよ。上空の戦闘機隊は射線上から回避されたし》

《ニムロッド隊、回避する。エリク、ニムロッド4に続け》

「言われなくても分かっている。レーザーに巻き込まれるのは御免だ」

敵襲。しかし予想しえた事態であることに加えの友軍の規模もあり、心は落ち着いて  
いる。

回転する『アークトウルス』下部の収束器、右へと翼を翻すカルロスの『ディビナス』。  
黒翼の機体に従って旋回する中、護衛を下げて照射体制に入った双胴の巨体を横目に、  
エリクの心に疑念が兆したのはその時だった。

妙だ。

ウステイオ軍は先日の戦闘の中で『カリヴルヌス』相手に痛手を負っており、その脅  
威はつぶさに感じていた筈だ。しかし無防備に接敵する今の飛び方は、まるで狙って  
く  
れと言わんばかりではないか。

疑念をよそに、通信に発射シークエンスのカウントダウンが刻まれる。山肌の横穴が  
かすかに光を帯び、屹立する砲身がまっすぐにこちらを指す。

閃光、5秒。放たれた光軸は『アークトウルス』の収束器に集い、圧縮された5秒分  
のレーザーが前方へと飛来してゆく。開口部の動きに沿って、それはわずかに右から左  
へと、薙ぎ払うように動いて、彼方の空に爆炎を刻んでいった。

だが。

《…なんだ？爆発が妙に少なくないか…？》

『アークトゥルス』より『デル・タウロ』、どうなっている。こちらからは着弾が明確に判別できない》

《…これは…。ウステイオ編隊健在。残存機、高度を上げつつ引き続き接近しています。同時に、リーダー上に微弱なノイズを確認。同行する電子戦機により、敵編隊の位置および数が欺瞞されていたと考えられます。：リーダー上の反応、依然30。高度4000》

《何だ?!…ちっ、急ぎ第二射を行う！各部準備！》

《こ、こちら『アークトゥルス』！ダメです、敵編隊、こちらより高高度に占位！照射できません！》

《やるな…！こちらエスクードー、ウステイオ連中はこちらで引き受ける！今のうちに『アークトゥルス』は高度を上げろ！》

《…：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：！『アークトゥルス』はサピン防衛の要だ、戦闘機は死んでも『アークトゥルス』を護り抜け!!》

満を持したレーザー照射を最小限に抑えられ、動揺がサピン軍に走る。二度目の実戦投入で早くも弱点を見破られたことに対する焦りは、そのまま『カリヴルヌス』指揮官

の怒声となつて耳障りに通信を苛んだ。怒鳴り声に混じるノイズ、そして通信に混じる各所の雑多な声。対応に右往左往する地上を尻目に、いち早く反応した深紅の『タイフーン』は、例によつて4機ひと塊となつて迫る敵に対し北上していく。

ジェネレーターの出力量不足を、中継機の収束器で圧縮することで補う『カリヴルヌス』の機構。ラテイオが運用していた『テュールの剣』を上回る性能を誇りながら、唯一抱える最大の弱点がこれであつた。すなわち、収束器を『アークトウルス』の下部に備える関係上、『アークトウルス』と同高度以上の目標に対して照射が不可能となるのである。高度を上げて対応するにも、重い自重とエンジン出力の関係から上昇力は鈍重の一言であり、ラテイオの『パンディエーラ・トリコロリ』のような素早い対応が可能とは言い難い。

ウステイオ軍は先日の戦闘でその特性を見切り、『アークトウルス』の高度と位置を見破るため敢えて身を晒して接近し、初撃をこちらに撃たせたのだ。初撃の被害を抑えるべく、電子戦機で位置を欺瞞したのもその一環だろう。

「連中も馬鹿じゃないつて事か。どうするカルロス、あいつらに加勢するか？」

《そうですね隊長！いくらエスクード隊でも、30機からが相手では……！》

《現位置を維持、待機だ》

《し、しかし……！》

《落ち着け。敵のジャミングが数を誤魔化している以上、機数はせいぜい1／3程度と見ていい。あの敵編隊の目的がこちらに手を出させるための罠である以上、初手から数を割くとは考えられん。——それに、あのバカなら大丈夫だ》

《はあ…》

「そんなところだろうな。必ず、どこかに本命がいる筈だ。迂闊に動くところができる」  
《エリク、あんたよくそんな根拠なく断言を…》

ニムロッド4——アレックスを制するカルロスの言葉に、フォローするようにエリクも同意を示す。カルロスの言う通り、あの第一波はあくまで『アークトウルス』の高度を確かめ、隙を作るための罠と言うべきだろう。あくまで攪乱が第一目的である以上、実際の攻撃を担う本命は必ずどこかにいる筈である。

こちらに不快感を露にするニムロッド2——フラヴィの言う通り、別に根拠がある訳ではない。ジャミング下の30機が実際は本物で、こちらに殺到してくる可能性だつてゼロではないのだ。それでも、エリクは必ず搦め手からも敵が迫ってくると読んだ。こればかりは理屈ではなく、ラテイオやサピン、ウステイオと戦ってきた自分自身の勘という他無かった。

そして、それが証明されるのに、そう時間はかからなかった。

《こちらエスクード1、敵編隊のレイヴン<sup>E F I I I A</sup>を撃墜した！デル・タウロ、どうだ。ノイズは

晴れたか!?

《こちらデル・タウロ、ジャミングの解除を確認。…方位340、ならびに050より接近中の第二波を捕捉。機数、いずれも約12》

「……！方位050、…か！」

《ちつ、正規軍の半分は340の新手に回れ！カルロス！北東の編隊は頼めるか!?

《任せろ、早く戻れよ。ニムロッド、グレイブ各隊変針せよ。…エリク、お前は残れ》

「なんだ、心配してくれてるのか？……大丈夫だ。俺も、今はサピンの傭兵だ」

《………。……各機、行くぞ！》

じわり、と肚に重なる重みは、おそらく旋回のGだけではないのだろう。

カルロスの言葉に心の底を見透かされる苦みを感じながら、エリクは操縦桿を傾け、機体を北東の方角へと向けていった。

北東——すなわち、先の2編隊と異なる侵入方向。そして、サピンという国から見た各国の位置関係。それらを顧みれば、その侵入方向が意味することは自ずと察せられる。サピンはその国土の東側全域をラティオと接しているが、そのラティオ北部は現在、レクタの勢力圏内なのだ。ウステイオ機が迂回してきた可能性も無くはないが、自身の勘はそれを否と告げている。つまり、帰結する答えは一つしかない。

敵は、母国レクタの機体。

それが、エリクの勘が導いた結論だった。

《初手で数を減らす。各機、高機能中距離空対空ミサイル用意。射程に捉え次第発射しろ》

《グレイブルー了解。各機ターゲット捕捉、目標指定よし》

《——全機斉射！》

「……」

眼前で雁行状に広がる8機のうち、カルロスの『デイベナス』を除く7機の翼に一斉に噴射炎が煌めく。一拍後、白い噴煙とともにそれらは飛翔し、まだ姿すら朧な彼方の獲物目掛けてその鋸を向かわせていった。

願わくば、この一撃で全滅してくれ。

罰当たりなその願いを喉と心に呑み込んで、エリクは感覚を研ぎ澄ました。耳を通信に、目を正面の空に。やがて来るであろう、レクタ機の息遣いを読み取るかのように。光。

蒼穹を背にした彼方の爆炎は、3つ、4つ、複数。

同時に警報。今更確かめるまでもない、入れ違いの敵からの長距離ミサイル。

前方8機の挙動を待つまでもなく、操縦桿を引く。同時に増槽を投棄、燃料経路を機内タンクへと切り替える。

加速、3秒。次いで右ロール、ひねり上げからの背面水平飛行。

『ミラーージュ』のような運動性が低い機体では、やや大袈裟に機動するくらいが回避運動には丁度よい。飛来するミサイルに対し斜め上方へと占位したエリクの眼下では、カールスらの編隊が左右に分かれてそれぞれの方向へと回避行動を取っている。

ミサイルが迫る。いくつかが近接信管を作動させて炸裂する。しかし先制を受けて混乱したのか、その設定は些か甘い。正面から飛来したミサイルの多くはその矛先を外され、炸裂したものもさしたる損害を与えないまま、初戦の矢戦は幕を下ろした。

正面には、すでにいくつもの機影。矢の打ち合いから、交戦は槍での突き合いへ。すなわち有視界距離での格闘戦へと移行することになる。

《敵機残数8、距離2000》

《各隊自由戦闘に入れ。周辺への警戒も怠るな》

《サピン編隊、脱落なし！接近してきます！》

《怯むな！敵は旧式ばかり、こちらも8機。望む所だ！》

『カリヴルヌス』のレーザー照射が何らかの影響を及ぼしたのだろう、『テュールの剣』の時と同様に、ノイズを増した通信から時折敵の声が混線して来る。聞きなれたレクタの響きに懐かしさと一抹の苦みを覚えながら、エリクは唯一頼りとなる右目で、接敵する両軍の様子を俯瞰した。

上空から見下ろす状況としては、カルロス率いるニムロッド隊は右側から、グレイブ隊は左側から敵編隊側面へ迂回にかかっている。一方のレクタ編隊はニムロッド隊に2機、グレイブ隊に4機が分かれ、それぞれに対応しつつある所だった。灰色の塗装に上翼配置の後退翼、そして胴体側面の丸いエアインテークは、デルタ翼が多い『ミラージユ』シリーズの中で通常翼を持つ異端児——レクタの主力量産機の一つ、『ミラージユF1』だろう。グレイブ隊へ4機を割いたのは、性能面でニムロッド隊のMiG-21に勝るグレイブ隊のJ-10Aを警戒してのことに違いない。そしてあろうことか、残る2機は機首を上げ、明らかにこちらへと向かって来ている。

《あの1機、前線管制機か？先んじて潰すぞ！》

「『ミラージユ5』がそんな真似するかよ！……くそっ！」

思わず悪態が口から洩れる。確かにMiG-31『フォックスハウンド』等の戦闘機が航空管制機の代わりに前線管制を行う例はあるが、レーダーを持たない『ミラージユ5』——『ダガーA』ができるはずが無いではないか。

敵機はこちらの斜め下方。水平方向に直進するこちらにミサイルは撃てないだろうが、機銃で狙い打たれば厄介なことになる。

フットペダル、踏下。デルタ翼が速度を孕み、下方から撃ちあげる射線を辛うじて振り切つてゆく。



こちらの尾部を掠めて急上昇する2機に対し、こちらはロール、次いで背面降下。機体の速度に降下の重力加速度を加算しながら、『ダガーA』は空戦機動に言うスプリットSの軌跡を描いて下方へのUターン反転に入ってしまった。後方上空では2機の『ミラージユF1』が宙返りに入り、下降の加速を加えてこちらへの追撃に入っている。

『ハルヴ隊』の猿真似塗装の癖に、不愉快な奴め…!!』  
「…ちっっ！」

鼓膜に響く、信頼に裏打ちされた憎悪。当の本人たるエリクに抗弁の余地も意思も無いまま、エリクは操縦桿を思いきり引き、乗機を急上昇。今度は先ほどとは逆の反転上昇——インメルマンターンで以て急速反転を行い、引き離れた『ミラージユF1』に対して相対した。流星に旋回性能で『ダガーA』の分は悪く、1800ほど引き離していた筈の距離も、相対する今となっては1000に近い。敵は2機、背面飛行で反転したこちらのやや下方真正面。極近接戦闘というべきこの距離では、もはやレーダーの有無は何ら影響を及ぼさない。

だが、撃てるのか。  
撃つていいのか。

正面に2機が迫る。照準器がそのキャノピーを捉える。  
その中にいるレクタの人間の姿を。

主翼に刻まれたレクタの国籍マークを。

そしてその背にある、遠く離れたレクタの地を。『ダガーA』は確実に捉えている。しかし、最後に守るべきその一線を。割り切るべきではない母国を。撃つていいのか。

《ちよこまか逃げやがって…。ここまでだ、偽『三日月』！》

『ミラージュF1』が正面に迫る。

脳裏が記憶を呼び起こす。

敵襲の中の発進劇。

『テュールの剣』を巡る攻防。

『パンディエーラ・トリコロリ』の雄姿と最期。

隊長の、クリスの、ヴィルさんの声。

斃り殺しにされたクリスとヴィルさんの最期の姿。

「う、あ…」

その先にある、あの男の顔。

全てを捨てても、悪魔に魂を売ってでも報復を果たすべき、あの男の顔。

「あ……」

全てを。

そう、同胞も、国も、全てを捨ててでも——。

「あ、あ、……あああああああ!!!!」

指に込めた力は、全てを断ち切る報復の決意。体に伝わる30mm機関砲の振動は、割り切れなかった全てを断ち切る宣告の音。

正面から飛来したAAMをすり抜けて、『ダガーA』から放たれた曳光弾は正面の1機へと殺到し、そのコクピットをパイロットごと粉々に打ち砕いた。

《…!?馬鹿な!?旧式の『ミラージュ』ってときに…!》

擦過と同時に操縦桿を右へと倒し、横の巴戦に入る愚を犯さず左旋回に入った敵機と相対する姿勢に入る。格闘戦では、『ミラージュF1』と比べ旋回半径が大きいデルタ翼機の『ダガーA』に勝ち目は無い。

相対する数拍前、機体を水平に戻し機首を上げる。

旋回半径の小さい敵機が、いち早くこちらへ鼻先を向ける。

機銃、ミサイル。こちらの右斜め下方からの撃ち上げ。ほぼ直交するベクトルでは当たること叶わず、再びこちらの後方を敵機が掠めて上昇に入る。

敵機の色度が落ちる。

『ダガーA』が宙返りとともに速度を落とす、失速から強引に機体を下降させる。

落ちてゆくその鼻先には、翼をいっぱいに広げた『ミラージュF1』の姿。そして、目

を見開いているであろう敵パイロットの顔。

《何だ、あの機動は!?!…まるで、本物の…『三日月』…》

30mmの弾頭は、並みの機体の装甲を容易に砕いて余りある。右主翼を貫かれた敵機はそのまま翼をもぎ取られ、炎に包まれながら木の葉のように落ちていった。遙か下方、雲に吞まれて爆ぜた炎を、エリクの目に焼き付けながら。

心臓が早鐘を打つ。胸が詰まる。息が乱れ、汗が滲む。

そうだ。全てを捨て、隊長たちのために復讐を果たすと決めたのだ。今更、——敵国に所属し、同盟国ウステイオの機体を落としておきながら、今更何だ。今更母国を捨てることに、レクタの機体を落とすことに、何を迷うことがある。

撃墜してしまった今、迷ってどうなる。

もう、迷わない。迷えない。——止まることは、できない。

「……………今更。……………止まれるかよ」

噛み締めた奥歯が軋む。最後の綱をも断ち切った心が、純粹な憎悪だけを燃え立たせる。

落ちた機速を補い、機体を水平に保って戦場を見上げる。既に敵のうち2機は落ち、残る4機もグレイブ隊に包囲され逃げ場を失っているようだった。

《『デル・タウロ』よりエスクード1、方位0より敵増援接近。おそらくそちらの方位が

敵の本命です、引き続き迎撃戦を継続してください」

《自称歴戦の撃墜王は辛いねえ…。エスクードー了解。ちよつと手が足りん、『マタドール』の増援が欲しいな》

《了解しました。『デル・タウロ』より低空域警戒中のトルペード、バーラ各隊へ。エスクード隊の支援に回って下さい。方位320、060よりも新たな増援を確認。前者は機数8、後者は4です。各隊警戒してください》

《こつちにも増援？なんとまあ、レクタも剛毅つすねえ》

《向こうにとつても正念場ということだろう。新手はこつちで相手をする。ニムロッド隊参集せよ》

北東より、新たに機影4。状況を踏まえるまでもなく、レクタの機体であることはもはや疑いようがない。操縦桿を斜め手前に引き、ニムロッド隊の4機の後方に就くべく機体を上昇させる中で、エリクは横目に急速接近するその機影を捉えていた。

——驚愕した。いや、それは驚愕でもあり、憎悪でもあり、ある意味で歓喜でもあつたと言えるだろう。

単発のエンジン。デルタ翼の小柄な機体に不釣り合いな大型のカナード。そして、左翼を染める黒地に連なる4つの三日月。ロベルト隊長の手で考案され、『三日月』と名を冠し、4人の絆を象徴する慣れ親しんだ塗装パターン。右翼のレクタの国籍マークと相

まって、見慣れたその姿は間違えようもない。

『ハルヴ隊』の『グリペンC』。

「……!! あれは!!」

《助かった、『三日月』が増援に来たぞ! 全員踏ん張れ!》

《レクタの『三日月』……ちつ。エリク、お前は『アークトゥルス』の護衛に戻れ!》

カルロスの通信が切れるが早いのか、『グリペンC』から幾筋ものミサイルが放たれる。狙いは、全て正面から相対したニムロッド隊の『デイビナス』。搭載能力とレーダー性能を活かしたXMAAによる先制射に対し、4機の『デイビナス』は左右2機ずつに分かれて交差し、広範囲にフレアをまき散らしている。先頭のカルロス機からいくつも光が閃いているのは、念入りにチャフ弾を装填したガンポッドを放っているためだろう。

ミサイルと突撃する敵編隊を斜めにいなし、ニムロッド隊が左右上方へ急速旋回へと入ってゆく。その背を狙うべく旋回する『グリペン』に向け、エリクは『ダガーA』を一気に加速させた。

《……!? エリク、戻れ! 命令だ!》

「はは、はははは! 馬鹿言うなよ。ハルヴ隊俺たちに偽装している以上、こいつらは確実にベルカ残党の片割れ、つまり俺の仇だ。アルヴァイン本人じゃないが、復讐を逃せるかよ!」

《エリク!!》

《くそっ！とうとう壊れたか、あいつ…！》

「それにな…その塗装は、姿は、俺たちだけのものだ。俺が最後の『三日月』である以上…あいつらの存在を、許すわけにはいかないんだよ!!」

狂っている。そうカルロス達に思われても無理もないだろう。だが、心を殺して生き延び続け、報復の機会を待っていた自分にとって、期せずしてベルカ残党と会敵できたのは幸運という他無かった。アルヴィン本人でないのは残念だが、これが笑わずにいられようか。憎悪と、全てを捨てた不退転の憤怒でもって、噛み砕かずにいられようか――。

眼前を上昇する三日月の塗装。その進路方向へ狙いをつけ、エリクは機関砲の引き金を引いた。30mmの特性を生かした曲射による遠距離射撃で、まずは牽制を意図したものである。致命弾は狙えないだろうが、こちらへ意識を向けさせることくらいはできるだろう。

弧を描く曳光弾が、『グリペン』の翼を掠める。先頭の1機がわずかに機首を傾けたのは、明らかに振り返ってこちらを確かめる挙動だった。

《旧式の『ミラーージュ』？何の真似だ》

《牽制の積りか、煩わしい。ハルヴ2、速やかに叩き落してやれ。カスパル少佐曰く、あのMiG-21は訳ありだ。残りの全機は『黒翼』に当たり、念入りに殺す。いいな》

通信が切れると同時に、敵編隊のうち1機がカナードを傾けて、宙返りからこちらに相対する。流石にカナード翼を持つ上に軽量小型な『グリペンC』というべきか、旋回性能は非常に高い。距離にしてわずか900、あと一步でAAMの射程に入ることになる。わずか2発しか積めないこちらと違い、『グリペンC』ならば最低でもおそらく4発程度。おまけにレクタタ仕様機ならば機銃も30mm機関砲に換装されている筈であり、正面火力でもこちらに勝ち目はない。

「あいにく、そこまで馬鹿じゃないんでね！」

操縦桿を手元へ引き、同時にフットペダルを踏みこむ。正面から撃ち合う愚を犯さず、敵の進路に対してベクトルを直交させ、その射線を外す肚だった。あとは『グリペン』の突っ込み速度に、『ダガーA』の初速が勝るかどうかの勝負になる。

加速と上昇で急激にGが増加する。

警報。ミサイルと接近の両方。

上天の太陽が目射る。

下から迫るミサイルが死を告げる。

デルタ翼が風を受ける。

ミサイルが尾部を辛うじて抜ける。

衝撃。主翼に弾痕。そして轟、と響く衝撃音。



息を吐きだして見上げた先で、『グリペン』はこちらの後方を擦過し、早くも急上昇から縦旋回に入る所だった。ミサイルが外れると見るや間髪入れず機銃掃射に切り替えた辺り、偽物とはいえ先ほどの『ミラーージュF1』より技量は上らしい。

まずい。頭上を抑えられれば、確実に狙い撃ちになる。

操縦桿を引き、ほぼ真上を指すエリクの『ダガーA』。その背を、早くもインメルマンターンで機体を水平に戻した『グリペン』が狙い打つべく迫ってくる。さながら直上するエリクに対し、螺旋状の機動で追隨する『グリペン』という所か。

放たれた銃撃は短く、しかし先ほどより至近弾も多い。エンジン出力差も機体性能もいかんともしたがたく、このままでは確実に削りきられて撃墜される羽目になる。

——ならば。ここは対グラオガイストの戦術を試す他ない。ただし装備したロケットランチャーを用いるのではなく、『いかに攻撃が当たる環境を作るか』——その考え方の実践として。

利用するのは、互いの機位と晴れた空——太陽の存在。そして乗ずるべきは、こちらを旧式機と見くびり、じわじわ鬨り殺す戦術を取っている敵の油断。

「こんなところで、負ける訳にはいかないんだよ……！」

狙うは、敵機が再びインメルマンターンに入り上昇する、真上を向く一瞬。敵機の方  
向へ機体をロールさせたエリクは、敵機の位置を、そして直上の太陽の位置を確かめ、操

縦桿を引いて背面飛行に入った。

上昇する敵に対し、こちらは南に傾く太陽を背にした位置。バイザー越しでなお莫大な光量に、一瞬とはいえ目が幻惑される瞬間。

兵装選択、虎の子のAAM1基。狙うは、上昇する『グリペン』の鼻先。

迷いが介在する余地もない、明確な憎悪と決意の引き金。押したボタンの力そのままに、AAMは敵機の鼻先へと直進し、その頭上で近接信管を作動させた。

《っ!?!至近弾…!?!くそ、油断を…どこだ、敵は!》

背部からの炸裂と異なり、相對するベクトルで破片の衝撃をもろに受ける正面からの炸裂は、そのまま致命に繋がりを。キャノピーがひび割れ、至る所に穴が穿たれた『グリペン』はよろめきながら、明らかにこちらを見失った挙動を示していた。おそらく破片で機首のレーダーも損傷したのだろう。

そうでなければ、この位置を——擦過とともに大きく上へと回り込み、直上から迫るこちらの位置に気づかない筈はないのだから。

視界いっぱいには、『グリペン』の姿が迫る。

隊長の思いを宿した三日月の塗装が、報復を果たすべきベルカの意味が照準器に捉えられる。

見上げる、敵のパイロット。その目は、おそらくこちらの塗装を捉えただろう。仲間

を宿す左翼の月と、報復を誓う右翼の星を。

《な………まさか、こいつは……!!》

「墜ちろ、ベルカの亡霊め!!」

コクピットを貫く曳光弾の筋。一瞬ガラスの格子を朱に染めたのち、『グリペン』は爆炎に包まれて四散した。その左翼に帯びた三日月までも、粉々に砕きながら。

《ハルヴ2!?!》

《ば……馬鹿な!?! 『三日月』が1機やられたぞ!》

《あいつ……やるじゃないさ。ニムロッド2よりエリク! いつまで油売ってるんだい、とつと降りて来な!》

「うるさいな、そつちこそ『三日月』はまだ残ってるんだろ。そいつらは全員落とさない気が済まな……」

眼下の戦場で、動揺したレクタ機の挙動が乱れる。囲まれた『ミラージュF1』が炎に包まれるのを見送ったその矢先、不意に通信に雑音が混じった。やや距離があるためか、声を張るフラヴィと比べてその声は聴きとりづらい。

機体を下降させながら、エリクはそちらへと耳を澄ませた。その行く末を左右する、運命の通信とは知らぬまま。

《第11監視所より『カリヴルヌス』、峡谷内B—11地点を国籍不明機が通過。友軍の

増援か?」

《何:?!?こちら『カリヴルヌス』管制室、増援の情報は聞いていないぞ!機種と進路はどうなっている!?!》

《機種3、機種はF-35と推定。主翼に灰色の帯の塗装あり。南東側の峡谷から北上しつつあり》

「:!!」

ぞくり。

一つ一つ入ってくる情報に、頭が沸き、肌が粟立つ。

レクタ勢力圏方向からの侵入。F-35『ライトニングII』という機種。『テュールの剣』攻略作戦を彷彿とさせる隠密行動。そして何より、主翼に灰色の帯という塗装。パターン。

もはや、逡巡はない。交戦するカルロス達の脇を抜け、エリクは『カリヴルヌス』東側の峡谷へ向けて、減速することなく機体を降下させて行った。

《:?!?おい、エリク!どこへ行く、戻れ!!》

「見つけた:!!とうとう見つけたぞ、アルヴィン・ヴィレムセン!!——殺してやる、必ず、この手で:!!」

迷いなき報復の意思を宿す機体が、主を体現するかのようになんぞに一直線に降下してゆく。

復讐を誓う右翼の星が、太陽の照り返しで一際強く煌めいた。

## 第29話 聖劍の立つ地（後） — 報復の末路 —

上天の青空に無数の幾何学模様が描かれ、時折爆散の炎が彩を加えていく。

前を見れば、両側に聳えるは頂点すら定かでない断崖絶壁。時に広く、時に張り出し、その無機質な質感とは裏腹に起伏に富んだ山肌は、峡谷を渡る者を威圧せずにはいられない。左右の視界を切り取られ、頭上だけが青くぼつかりと空いたその様は、まるで川の中から地上を見上げる鮎にでもなったかのような気分だった。

サピン王国北東部、ピレニア山脈。その東側に空いた峡谷開口部が蛇行しつつ西進し、大きくぐるりと南へ回り込んでから、山脈の中央部へと北上する、その最中の地点。

この狭い峡谷を、3機の戦闘機が地を這うように飛んでいるなど、気づく者はそうはいないに違いない。攻撃の主力を担っているウスステイオやレクタの正規軍侵入ルートとは丁度真逆に位置するため、実質的にも心理的にも人の目が向かいにくいというのが一つ。峡谷という地形の関係上、こちらの位置は張り出した岸壁が覆い隠し、人目に触れにくくなっているというのも一つ。そして極め付きには、電子の目すらも欺くステルス能力の存在が、この機体の捕捉を一層困難にさせている。現にレクタ―サピン国境を越境して以降も、小規模な観測所一か所を通過した他は何一つ遮られることなく、

機体——F—35A『ライトニングII』は『聖剣』の喉元近くへと着実に近づきつつあった。

《順調だ。サピンの連中、こっちのルートには警戒すらしちやいませんぞ》

《傍受される危険がある。不要不急の通信は慎め、スポーク3》

前と後ろ、連なる2人の会話を傍らに、スポーク2——パウラ・ニーダーハウゼンは改めて戦況を俯瞰する。

『聖剣』——すなわちサピン軍擁するレーザー列車砲『カリヴルヌス』。山肌を穿った要害堅固な拠点に身を潜める超兵器は、今だ隆盛を誇るサピンを弱体化させる上で、排除が不可欠な存在であった。幸い、両大国オーシアとユークトバニアは同志の手によって大きく弱体化しつつあり、現在ユークトバニア本土で血みどろの決戦を続けている状況である。開戦から2か月半を経て、ウステイオ、レクタ、ラテイオといった諸国は大きく国力を失っている今、ベルカ残党同志にとつて残るべき障害はサピンの存在のみと言つていいだろう。サピンと歩調を合わせるゲベートや親ユークトバニア路線を取るファト連邦の存在もあるが、サピンと比べれば国力の上で物の数ではない。

つまるところ、ここで『カリヴルヌス』の排除に成功するかどうか、自分たちベルカ残党による目的——戦争の長期継続による周辺諸国の荒廃——が達成できるかどうかの分水嶺という訳であった。

その真の目的を秘めつつ、同盟国のウステイオ軍も巻き込んで、作戦は大規模なものとなった。

電子戦機を交えた第一波および第二波は、高高度域でレーザーを中継する大型機『アークトゥルス』を執拗に攻撃。攻撃目標が『アークトゥルス』だとサピン側に誤認させ、意識を上空に向けさせた隙を突いて、ごく少数のステルス機が拠点攻撃を行うという戦術が取られることとなったのだ。それを受けて、今回は空対空装備も必要最低限に留め、近距離用空対空ミサイルが2基のみ。それ以外は『ライトニングII』の搭載量ギリギリまで空対地装備を詰め込んだ、拠点攻撃特化装備が施されている。わずか3機とはいえ、最大搭載量8tを超える『ライトニングII』の能力ならば、山岳拠点の開口部全てを破壊することなど容易と行っていいだろう。

こうしてウステイオ軍を囿として使っているのも、ウステイオ軍内に潜入した同志の活動の賜物だが、実際には『アークトゥルス』が攻撃目標だと信じ込まされているウステイオ兵も少なくないのだろう。敵を欺くにはまず味方からの、諺にもあるが、実際にウステイオやレクタの兵が何人死んだ所で関知する必要もない。そこまで非情になりきらねば、敵国内に巢食って裏切るといふ真似はできるものではないのだ。

同じベルカ残党ではあるものの、おそらく自分ではそこまで徹しきることはできなかっただろう。



ウステイオやレクタの兵の命など、今更知ったことではない。そう思う気持ちはあれど、その一方である面影が脳裏に滲んで離れないのも事実なのだ。

絶望的なあの戦況の中でも、闊達な明るさを放っていた4人の飛行隊。…そして、その、2番機。

…本当に、殺さなければならなかったのだろうか。

残影と今更の後悔は、今だ心に沁みついて離れない。

電子音。

警報。

はつと我に返り、パウラは内奥へ向けていた意識を呼び戻す。

敵、ではない。

自身のヘルメットに表示されたヘッドマウントディスプレイによると、『正面衝突注意』の文字。気づけば、距離200ほどのところに岩が大きく突き出ているのが見取れる。

フットペダル踏下、操縦桿わずかに左へ。

灰帯を染め抜いた黒い機体は、風に乗って滑らかに空を滑り、岩の傍らを過ぎていく。どうやら内省の隙に、機体の進路が僅かに右にずれてしまっていたらしい。

巡航速度維持、目標まで10分程度。空では相変わらず敵味方が飛行機雲の渦を描

き、時折『カリヴルヌス』が直接照準でレーザー砲を放っている。光軸が閃くその位置は時を追うごとに近くなっており、その本拠がもはやすぐそばであることを告げていた。

《ハル……、散開……！後方、『黒……』……》

《……メで……！食い………て離れな……》

《ニム……ド2、FOX……！逃……さな……よ！》

やや距離が遠いためか雑音が多いものの、上空から降ってくる通信は彼我が入り乱れ乱麻の様相を呈している。おそらく、連続したレーザー照射が空気中の分子に影響を及ぼしたゆえの混線なのだろう。確かかってラテイオのレーザー兵器『テュールの剣』攻略作戦の際にも、同様の現象が発生していた。すなわち裏を返せば、この劣悪な通信状況は敵にとつても同じ。隠密行動を行う上では、こちらにとつてプラスとなりうる。

《……ら……』……ヌス……！上空……敵機……まだ掃………ん……か……！……》

《見………ぞ、………隊………逃………か………し………か………！……》

意味を成しえない雑多な混線を脳裏から追い出し、今度こそ眼前に集中する。

距離にしてあとわずか、ここまで来れば流星に監視の目もあるだろうが、頼みの綱である護衛戦闘機は高度数千は上空、もはや間に合うこと叶わない。事実、飛び交う無線はいずれも雑音の彼方。相当の距離があることを物語っている。

《……ルス……を隠し……、俺……見え……。そ……呪わ……た灰色……が、『亡霊』のエ……レムが……限り……!》

いや。

雑多な無線の中で、一つだけ明瞭さを増すものがある。

高度を下けているのか、急速に近づいているのか。雑音が減ってゆくその様子からは、猛迫する『何か』の存在を確かに伺うことができる。

警報。

しかし、先ほどとは違い前方ではない。眼前に障害はなく、側方の岩壁にもそれらしい脅威はない。

HMD表示は、後方。こちらの背後、斜め上。

《隊長……、ヴィ……さんの、クリスの無念……今、俺……晴らして……る》

怨念と決意の籠った男の声。

聞き知った、脳裏に浮かぶ記憶。

馬鹿な。この声は、まさか。

《その首で償え。……『グラオガイスト』!!》

「……エリク……!?!」

予期せぬ再会に、胸に渦巻くは苦い歓喜と疼痛。

思わず斜め後方を振り返ると、岩肌に切り取られた空の上に、無数の光弾が迫つて来た。

さながら、月夜から流れ落ちる流星のように。

\*\*\*\*\*

僥倖。

それ以外に、表現すべき言葉は無かった。

レクタの偽『ハルヴ隊』一機を返り討ちにし、レクタの攻勢に一瞬生じた隙。

残る『ハルヴ』もニムロッド隊に気を取られ、それに応じたサピン軍と混戦模様となつた空。

レーザー砲の乱射が空気中の電位を不安定にすることで誘発された混線。

混線が、『グラオガイスト』の手がかりとなる通信を拾うという偶然。

そして、通信を頼りに急降下したその先、『カリヴルヌス』に至る渓谷で捉えた3つの機影。

頬が自然と笑みを履く。

噛み締めた奥歯がぎりりと鳴り、暗い歓喜と高揚が心を満たす。

なんという、偶然。まるで神が——否、悪魔が導いたようではないか。

空から注ぐ混線も考慮の外に、気づけばエリクは誰言うでもなく、言葉を紡いでいた。

呪詛とも決意ともつかぬ、憤怒を纏ったその言葉を。

「ステルスで姿を隠しても、俺には見える。その呪われた灰色帯が、『亡霊』のエンブレムがある限り……！」

怨念を宿す右の瞳は、確かに渓谷内の3機を捉える。

時折岩肌に隠れて確かめ難いものの、やや外側に開いた垂直尾翼にずんぐりとした機首、菱形に近い前傾した主翼後縁は、間違いなくF-35『ライトニングII』シリーズの姿である。塗装は黒地、主翼を貫く灰色の帯。エンブレムはまだ焦点の外だが、カルロスから聞いた情報と併せれば、その塗装は間違いない。

あの忌まわしい『スポーク隊』。

隊長達を亡き者にした、15年前の古ぼけた妄執を宿した『灰色の亡霊グラオガイスト』。

「隊長の、ヴィルさんの、クリスの無念を……今、俺が晴らしてやる」

急降下の重力加速度にエンジンの出力、高速航行に適した『デルタダガーA』のデルタ翼が相まって、高度計はみるみる内に下がってゆく。まるで獲物を狙う猛禽が空高くから舞い降りるように、あるいは死神が地へと堕ちるように。矢のように洗練された『ダガーA』のシルエットは、目指す敵の首元目掛けて凄まじい勢いで駆け降りる。

兵装選択、主翼外側ハードポイント。無誘導Rロケットランチャー、連装19発2基の過半を使用。

照準の中で、谷間に隠れる3つの機影は急速に近づいてゆく。  
あと2000。

1800。

1500。

左右に狭まる溪谷。背後頭上を押さええるという絶好の状況。

目が奔る。コンソールに入力をする指に力が入る。

あの時から、俺はこの瞬間を待っていた。

一つずつ心を殺して、報復のためだけに研ぎ澄まして、祖国の機体さえ撃ち落として。ただただ復讐のために一心に、この時だけを待っていた。

卑劣に命を奪われた皆の無念を。残された者の怒りを。

「その首で償え。…『グラオガイスト』!!」

相対距離、1200。

目がそれを捉えた瞬間、エリクは引き金を引いた。

空気が爆ぜる音がコクピットを満たし、両翼からいくつもの白煙が溪谷内へ向けて放たれてゆく。回避を見越して照準をわずかに左へずらしたものの、それらは連なる編隊の先頭目掛け、速度を上げて猛進していった。

こちらに気づいたのだろう、一瞬の虚を置いて、3機は回避のために上昇する。ステ

ルス機能を持つF-35ならば、たとえ急上昇で高度を失っても誘導式ミサイルの直撃はないと踏んだのだろう。ましてこちらの装備がRCLだと見切ったとすれば、無誘導のまま当てずっぽうに放たれるロケット砲など物の数ではないと判断したとしてもおかしくはなかった。事実、本来空対地装備であるRCLで対空攻撃を行ったところで、直撃しなければさしたる損害は生じえないのだ。目標となる敵機の手遅れが遅かったジェット黎明期ならばまだしも、無誘導のロケット砲は空対空装備としての役割を終えている。それが、一般的な常識である。

——そう。一般的に用いられる、普通の弾頭と着発式信管ならば、だ。

《…何っ!》

炸裂。何もない中空で突如生じた衝撃は、通信に混じった男の声をかき消した。

上昇を始めた3機のF-35。その背に500まで迫った所で、放たれたRCLが一齐に炸裂したのだ。当然、通常の炸薬では損傷を与えられる距離ではなく、平時ならば自爆か誤作動を疑う所だろう。

誰かが息を呑む。

F-35が急上昇から旋回へと移行する。

『正体』を察したらしいその行動は、しかし既に遅きに失していた。回避に入るべくこちらに背を向け、投影面積を増大した『ライトニングII』の機体。その回避の軌跡上に、

無数の矢が——比喻ではなく、正真正銘の金属製の『矢』が、雨のように降り注いだのである。

ロケット砲に内蔵された、拡散する無数の矢弾——いわゆる『フレシエット』弾頭。それこそが、対ステルスのためにエリクが考え抜き用意した装備だった。

構造は至つて単純であり、一般的にイメージされる散弾のように、ロケット弾の弾頭に無数の子弾が充填されたものである。目標の手前で炸裂した母弾から子弾が放たれることで広範囲に被害を及ぼすものであり、専ら散兵や軽車両といった地上目標へ用いられることは多い武装である点も、一般的な散弾と変わりはない。

異なるのは、フレシエットダーの名に由来する子弾の形状である。すなわち子弾が球体である散弾と異なり、フレシエット弾の子弾は矢のように鋭利な形状となっているのだ。この形状と母弾炸裂時の衝撃でいて子弾は目標を貫通し、あるいは突き刺さつて対象へダメージを与えるという訳である。

炸裂し広範囲に効力範囲を及ぼすこの弾頭に、エリクは発射前に起爆時間を設定できるセレクトダブル時限信管を組み合わせ、即席の空対空ロケットとして運用することとした。すなわち頭を悩ませていた『いかに誘導兵器を当てるか』から『必中を期すのではなく広範囲攻撃で命中率を上げる』、有体に言えば『数撃ちや当たる』戦法に発想をシフトしたのである。この発想に、カルロスがかつて用いた対ステルス戦術——敵機にチャ



フを纏わりつかせる——が構想を後押しした。チャフに代わる金属片となるフレシエツト弾頭ならば、広範囲攻撃にステルス破りを両立できることとなる。電波誘導式ミサイルを持たない『ダガーA』にはレーダーで捕捉が可能となることの意味はさほどないものの、『カリヴルヌス』側からレーダー捕捉が可能となる点のメリットは計り知れない。

ステルスを破る乾坤の一撃は、無数の矢弾となつて殺到する。

左旋回に入つた2番機の手前で爆散したそれらは、『ライトニングII』の主翼や胴体のことごとく貫通。瞬く間に灰色の帯を蜂の巣にし、その戦闘能力を瞬く間に奪い去つていった。背後から散弾を受ける形になつた先頭の1機も同様で、主翼の後ろ端やエンジンカウルは穴を穿たれ半壊し、尾翼も片方の後端はちぎれかかっている。貫通しなかつた矢弾も機体表面に槍衾のごとく突き刺さっており、そのステルス能力を著しく損なわせた。

必勝を期した、対ステルスの秘策にふさわしい効果。

唯一の誤算は、より至近で炸裂させ高威力を期すあまり、時限信管の起爆設定を遅めにしてしまったことだろう。事実、同じ軌跡上に入つた先頭の2機の中破には成功したものの、右旋回で回避した3番機は損傷を受けることなく回避しおおせていった。

「1機外したか！」

《…やっぱ聞き間違いじゃねえ。その声、それにその塗装…まさか、エリクか!? パウラに撃墜された筈じゃ…!》

「地を這って、ウステイオやレクタの血を啜って今まで生きながらえて来た。ロベルト隊長たちの無念を晴らして、あんたたちに復讐するためにな!!」

《化けて出てきたとでも言いてえのか…! 狂ってやがる》

《……………》

《ち…。よもや『亡霊』が、死に損ないの幽鬼に邪魔されるとはな。パウラ、お前はただちに帰投しろ》

《…! 少佐、まだ私は…!》

《その損傷では無理だ。我らの戦いはまだ続く。…自愛しろ、パウラ》

《……………了解》

憎悪の籠った言葉の応酬の合間に、再び『カリヴルヌス』のレーザーが天を焦がす。

轟音の最中、沈黙を破ったパウラのはパウラの言葉。その意思に従うように、黒煙を吐いて傷ついたF-35は、翼を翻して東へと機首を向けていく。

逃がすか。たとえパウラといえども、ベルカ残党を名乗る限り、その灰帯を身に着ける限りは報復の相手に他ならない。

右目でその背を睨み、操縦桿を傾け背後を狙う。フレッシュット弾頭が突き刺さった工

ンジンカウルは損傷して噴射炎が露わとなっており、『ダガーA』が装備する赤外線誘導式AAMでも捉えることは可能な筈だった。

兵装切り替え、単距離AAM。

その背を捉えかけたミサイルシーカーは、しかし直後に眼前を横切る黒い影に阻まれた。衝突警報とともに接近し急速に離れるその機体は、損傷のない灰帯。すなわち回避に成功したフィンセントのF-35に違いない。

「ち……邪魔を！」

《ハン、レクタの英雄様は、逃げる損傷機の背中を狙い打つのか？》

「黙れ!! 薄汚い裏切り者のあんたらに言われる筋合いは無い！」

《オットー、『カリヴルヌス』攻撃は私一人で行う。エリック・ボルストは任せる。ここで確実に、念入りに始末しろ》

《了解！ここまで来たんだ、今更邪魔はさせねえ。ここで死んで貰うぜ、エリック》

「…邪魔するなら、あんたも殺すまでだ。フィンセント・デ・フロート!!」

翼を翻し、『カリヴルヌス』が鎮座する北へと機首を向けるアルヴェイン。片や、パウラのF-35は既に辛うじて姿が見えるほどにまで遠ざかってしまっている。逃げる2機に対しフィンセントの『ライトニングII』はこちらの進路を妨げるように旋回し、あくまでこちらと相対する意思を明確に表していた。

ちつ。思わず口角から洩れる舌打ちを空に消し、エリクは操縦桿を右手前へ引いて急速右旋回へと入った。狙うは、フィンセント機の進路上。誘導性に頼らない、フレシエツト弾による広範囲飽和攻撃。

『ダガーA』が大きく横旋回する『ライトニングII』の後方に就き、こちらの鼻先と『ライトニングII』の予測進路が交わる。

距離、1100。射程圏内。致命は期せないが、広範囲から確実に損傷を与える距離。目と照準が合わさる。機械のように連動した指が引き金を引く。

放たれたロケット弾は、残量のほとんどを消費する10発あまり。誘導性が無いゆえにそれらは放射状に広がり、一定の距離を進んだのちに炸裂してゆく。

しかし、今度は読みが甘かった。

フィンセント機は炸裂の距離を図るや、右横転旋回から一度機体を左へ捻って反転急降下。拡散する矢弾の散布範囲から強引に逃れ、そのダメージを最小限に防いだのだ。両側を岩壁に覆われ低空でもあった先ほどとは異なり、一定の高度があり逃げ場の多い今は、たとえ散弾といえどもF-35相手に必中は狙えない。

低空へ逃れ加速するフィンセントを追うべく、エリクは操縦桿を左手前へ引き、反転降下へ入る。

加速に長じる軽戦闘攻撃機『ダガーA』でありながら、しかし敵は自重も重なり降下

が速い。彼我の距離は見る間に離れていき、あつという間にAAMの射程を振り切つていった。

殊近距离の格闘戦となつてしまえば、互いの性能差が顕著に表れて来る。F-35『ライトニングII』は第5世代機の中では比較的格闘戦が苦手ではあるが、それでも第3世代の『ダガーA』と比べればその性能は圧倒的と言つていい。事実、加速を重ねたフィンセント機は機首を引き上げ、山頂を掠めて急上昇。対地兵装を満載しているとは思えない軽快な軌道で反転し、理想的なインメルマンターの軌跡を描いてこちらへ肉薄してきたのだ。

過去に実証した通り、『ダガーA』の30mm機関砲は弾丸重量とサイズの関係で、正面からの打ち合いには向いていない。曲射で射程を伸ばすにも、ミサイルを撃たれかねない今は危険が増すばかりである。

咄嗟に判断し、エリクは操縦桿に力を込めて右旋回。目が健在で視野の広い右側へと機体を捻り、敵に対し横向きに腹を晒した。

ミサイルアラートとともに、鳴り響くのは接近警報。次いで機関砲が唸る轟音と、それらが金属を拉ぐ音。

近距离では、25mm機関砲の比類ない精度が威力を発揮する。危うくミサイルが空を切つた一方で、放たれた一筋の光軸は『ダガーA』の右翼を正確に貫き、刻まれた星の

塗装へいくつもの穴を穿っていった。

しかし、幸いにしてまだ損傷は浅い。右旋回から急降下へと入り、今度は追われる立場となりながら速度を稼いでいく。後方上空、警戒ミラーに映るは太陽の光と、その中で旋回し急降下に入る『ライトニングⅡ』の姿。

《こ、こちら『カリヴルヌス』！敵機1、迎撃エリア内に侵入！護衛機は何をしている！》

《こちらデル・タウロ。敵第4波の襲来で、迎撃機を割くことは困難です》

《くそ……『マタドール』部隊を早く呼び戻せ！》

《第3トンネル開口部より緊急連絡！敵機の対地ミサイルによりトンネルが崩壊、『カリヴルヌス』用線路が通行不能です！》

通信回線がにわかに騒がしくなり、戦況の切迫を距離を隔ててなお物語る。おそらくはアルヴィンが『カリヴルヌス』の拠点に到達したのだろうが、今は『カリヴルヌス』の危機より眼前のフィンセントだった。サピンの決戦兵器がどうなろうと、元より知ったことではない。

後方、距離おおむね1200。

瞬く間に距離を詰めた『ライトニングⅡ』が、煽るように背を捉えこちらを追い詰めつつある。山肌を掠め、狹隘な谷間を抜けて攪乱するも、その距離は容易に離れない。下方に逃れるという手も塞がれた以上、致命的な状態に至るのは時間の問題だった。

忌々しくもさすがはベルカ残党ということだろう、頭上をしつかり押さえたまま、性能で劣り機位も拙いこちらはどんどんと追い詰められてゆく。

右旋回。湾曲する稜線に沿って間髪入れず左。視界の利きにくい左へと舵を切り、地形追従レーダーに目を走らせた時、エリクは思わず絶句した。

両側に稜線が迫る谷間。その先に、一際高い山が聳えていたのだ。標高にして4000m級に至るだろうか、それはさながら袋小路のように進路を遮ってしまっている。左右、上、いずれへ避けるにも上昇せねばならず、その隙に落ちる速度をフィンセントが逃す筈はない。

《行き止まりだな。どうするエリク、上も右も左も、逃げ場なんてもう無いぜ》

「く……」

胸を絶望感が浸し、広がる苦みが体を犯してゆく。

どうする。どう逃ればいい。

《所詮、お前の復讐心はそこまでつてことだ。容易に行き止まりに嵌って終わる。俺たちの、15年越しの報復に比べれば、ちっぽけで惨めなモンだ》

「なんだと……!!」

絶望に灯る炎。

報復を誓った、熱く暗い焰。フィンセントの言葉に、隊長たちへ向けられた侮辱に、胸

の内奥のそれは再び滾り燃え盛る。

ちっぽけで、惨め。その言葉を、侮辱を、許容する訳にはいかない。ここで諦める訳にはいかない。

「今、何て言った……！隊長やヴィルさん、クリスへの思いがちっぽけだと言ったな！」

《あちっぽけだ、取るに足らん！3人の戦友が何だ！こちとら戦友二人どころか、家族同胞を街ごと燃やされてんだよ!!あいつらの吊いのための復讐だ、お前にも誰にも、邪魔はさせねえ!》

「……………」

目前に絶壁が迫る。

後背にフィンセントが迫る。

もはや、迷うまでもない。道は一つ、天へと至る山の向こう、それ以外に無い。

「——知ったことかああああ!!」  
咆哮。

同時に、左手を添えて思いきり操縦桿を引き上げ、エリクは機首を強引に上へと持ち上げた。

落ちる速度、距離を詰める『ライトニングⅡ』。そして正面、太陽煌めく照準器の中に映るは、雪に覆われた山頂。横方向へ機体がぶれるのも構わず、エリクは残ったAAM



を選択し、その頂上目掛けて撃ち放った。

白い肌に爆ぜる爆炎。そして直後に生じるは、雪と岩の崩落によるモノクロ色の雪崩。崩落は瞬く間に広範囲へと広がって、さながら白い波濤のように眼前を覆ってゆく。

迫る雪の白波、閉ざされる視界。薄くも広いその最中へ向け、エリクは残る武装であるRCLを選択し、残弾全てを解き放った。

炸裂、6連。ぽっかりと空いたわずかな隙間。白い膜に穿たれた空色の穴へ向け、エリクは迷わず直進してゆく。

視界が白く覆われ、機体が雪に吞まれたかに見えたその一瞬。空隙が雪崩に再び閉ざされる一拍前に、彼が駆る『ダガーA』は雪崩を抜けて宙へと舞った。

《な、ん、だと…!!これしき、……これしきでエエ!!》

後方警戒ミラーの中で、フィンセントの『ライトニングII』が断末魔の咆哮を上げる。頭上を覆う雪崩の中、狂ったように25mm機関砲を撃ち放つ『ライトニングII』。炸裂で生じた小さな穴は、しかし10m超となるF-35の全幅を満たすほどには至らない。ミサイルを使い果たしたのだろう、多彩な武装を抱えている筈の機体下部の弾倉庫が開く気配も見て取ることはできなかった。

《…嘘だ。こんな、こんな道半ばで、こんな——!!》

機銃で穿たれた小孔が、連鎖する崩落の中に閉じてゆく。

灰帯を染めた黒塗りの機体は、閉じ行く白い波に呑み込まれ——その姿を、空から完全に消し去った。

「ハア、ハア……思い、知れ……」

息があがり、動悸が胸を揺さぶる。

待ちわびた筈の瞬間、それに反して苦い胸の味。その理由を確かめる暇もなく、エリクは周囲を見回した。当然ながら既にパウラの姿は無く、上空に描かれる空戦の様も落ち着いたように見受けられる。

ならば、残るは。

《くそ、くそっ！対空砲急げ！敵はステルス機だ、？地対空ミサイル《SAM》は使い物にならない！》

《第2、第4トンネル完全に崩落しました！残る第1トンネルも損傷大！このままでは……！》

《く、『カリヴルヌス』はトンネル内に退避しろ！ダメージコントロール要員以外は地下避難経路より退避！》

焦燥に満ちた通信が、エリクの鼓膜を揺らす。

本来の護衛目標である『カリヴルヌス』の危機。そこまで到達した敵機が他にいない

ことを合わせれば、先の通信が物語る結論は一つである。

あの男は、アルヴィンは『カリヴルヌス』の下に今もいる。

方角を確かめ、翼を翻してわずかに数分。指した空の先には、地より上がるいくつもの黒煙。

エリクが聖剣の下へ到達するのと、1機のF-35がトンネル目掛けミサイルを放ち、土煙とともに崩落せしめるのは同時だった。

《だ…第1トンネル崩壊！すべての開口部を閉ざされました！》

《こちら『カリヴルヌス』格納庫、トンネル崩壊の衝撃で落盤が発生！『カリヴルヌス』車体に損傷！》

立ち上る対空砲火の中を、アルヴィンの『ライトニングII』が合間を縫うように飛んで行く。流石に単機での攻撃だったためだろう、その機体にはフレシエツト弾頭以外にもいくつもの弾痕が穿たれ、損傷を先にも増して広げていた。

上空を顧みれば、三々五々と高度を下げて来るサピン軍機の姿が認められる。『カリヴルヌス』封印を見届け、ウステイオ・レクタ連合軍が撤退に入ったのだろう。いくらアルヴィンとはいえ、ここから生還することは不可能に違いない。

もはや、顧みるものは無い。エリクは操縦桿を押し、高度を下げながらアルヴィン機へ向け機首を向けた。

《その様子では、オットーを屠ったか。…だが一歩遅れたな、エリク・ボルス。我々の計画通り、『カリヴルヌス』は沈黙した》

「関係ない。俺の狙いは、最初からあんだだ」

《私は、止まる訳にはいかない。パウラのためにも、散っていった同胞のためにも、そして…。…皆のためにも、生きて還らなければならないのだ》

「虫のいいことを…。もう、あんたは終わりだ。せめて俺が引導を渡して、隊長たちへの償いをさせてやる」

《押し通らせてもらおう。君の背の先にある、ベルカに向けて》

こちらへ向けて機首を翻す、灰色帯の『ライトニングⅡ』。ぼろぼろとなった機体ながら、真正面から向かってくるその様からは、言葉に違わない『押し通る』という気迫が滲み出ている。

もう、AAMもRCLも残っていない。

残る唯一の武装である30mm機関砲を備え、エリクは真正面からアルヴァインへと向かっていった。高度はこちらがやや高く、それだけに速度も乗ってゆく。

ベクトル直交、進路は過たず真正面。照準器の中で、F-35の姿は徐々に大きく、相対速度を乗せて急速に近づいてゆく。この瞬間を、この手で報復を成し遂げる時を、どれだけ待ちわびたことか。

敵機、発砲。

F—35の機首の横がちかちかと爆ぜ、曳光弾が『ダガーA』を襲う。

25mm特有の正確な弾道にパイロットの技量が重なれば、機関砲ですら致命となりうる。25mmの弾丸は機首を集中的に打ち据えて、弾丸がキャノピーを割り、飛び散った破片が皮膚を割いてゆく。

びちり。

右の二の腕。出血がガラスに飛び散り、高揚した脳裏にも痛みを刻む。

引き金は、今だ指の中。30mm機関砲では、近づかない限り必中は狙えない。

500。

400。

フレームで跳ね返った弾丸の破片が正面コンソールを直撃し、速度計を抉り飛ばす。じわりとパイロットスーツに血が滲むのも感じるが、破片が刺さったのか、それとも皮膚を割いただけなのか、もはや正面しか見えないエリクには関知する合間もない。

引き金を引き絞る。隻眼が、正面の敵を見据える。

円形の中に捉える、男の相貌。

唯一無二の仇であり、生きながらえた目的の顔。

距離、300。

「墜ちろおおお!!」

コンマ、数秒。

引き付けた機銃掃射は、徒弾一つなくF-35へ殺到。その機首を、側面インタークを、翼を打ち砕いて、灰帯のF-35は炎に包まれた。体を染め抜く塗装さながらの黒と、報復の意思を体現する赤に身を焦がしながら。

「はあつ、はあつ、…はあつ！終わり、だ…『グラオガイスト』!!」

《終わり…。…そうか、終わりか。これで、ようやく解放されるのだな。裏切り者の誹りからも、非道に手を染める罪からも、虚しい報復の連鎖からも。…ようやく、終わるのだな》

耳を揺さぶるは、フィンセントとは対照的な、静かな独白。その言葉には怨念も呪詛もなく、ただ平穩の響きだけがある。自らの死を『解放』と評し、従容と運命を受け入れながら。

「…報復の、連鎖…」

《…還ろう、ベルカへ。…還ろう、去りし日の、ホフヌングへ——》

寂しく謳うようなアルヴィンの声が、機体を包む閃光の中に消えてゆく。

今わの際の、その瞬間。『ライトニングII』の機首は、確かにベルカの方を向いていた。

「……ロベルト隊長。ヴィルさん。クリス。…やったぞ、俺は。見てて、くれたか。——

見せて、くれた、よな……？」

重みの増した体が、急速に意識を手放してゆく。閉じそうな瞼の奥には、確かに健在だったあのころの、皆の姿があった。

ぶつり。

体のどこかで、そんな音がした。

どこかの筋か血管が切れたのか、意識が薄れたゆえの幻聴か、それとももつと何か、大切な何か<sup>が</sup>断ち切れた音だったのか。

確かめる手段を失ったまま、エリクの意識は闇の中へと吞まれていった。

## 第30話 ウツセミ

西の空が、まるで血を吸ったように赤く染まっている。

滑走路のくすんだ鈍色に映えるのは、同じように西の空を見上げるいくつかの人の影、地に墨色を落とすレクタの国旗、そしてアスファルトの外れで横転し大破した『グリペンC』の翼。月を象る塗装を施したそれは、しかし今や黒焦げに辛うじて判別できるに過ぎず、元の黒地に黄金色という色彩はもはや見る影もない。言うまでも無く、パイロットは即死だった。

朱を纏う風が冷たさを増す中、少女——パウラ・ニーダーハウゼンは、無為にも似た切なさを紛らわせるように彼方へと目を向ける。

不安と焦りを覚え、西の空を見上げる人の影の先。格納庫からちらりと覗く外側に開いた尾翼の機体は、間違いなく自分のF-35A『ライトニングII』のものだった。本来ステルス機らしい平滑な表面を持つ機体ではあるが、今は無数の矢弾がささくれのごとく突き立った見るも無残な姿となり果てている。至近距離で高速のフレシエツト弾を浴びたのだ、当たり所が悪ければ基地に帰れず墜ちていたと考えれば、あの程度で済んだのはまだ幸運だったと言っていいだろう。自分が今こうして生きていられるのも、



被弾直後にこちらの損傷を見て取り、すぐさま後退するよう指示を下したカスパル少佐のお蔭だった。

——胸が、ずきりと痛む。

そう。私は、カスパル少佐とオットーを敵の只中に置いて逃げてきてしまった。それも、私たちに怨恨を抱いているであろうエリクの眼前に置いたまま。

仲間を失い報復に燃えるエリクと、故郷ベルカのため身命を賭して『カリヴルヌス』を狙うカスパル少佐。私が撤退したのち、そこに死闘の戦端が開かれたであろうことは想像に難くない。そしてその結末は、両者いずれかの死。敵意と恨みが折り重なり、もはや後には引けない二人の間に、それ以外に結末があるとは到底思えなかった。

では、その死神の魔手から逃れ得たのは——。

「おい、西に機影が見えるぞー」

「……」

脳裏に過ぎる最悪の予断。それを振り払うように、空を見守る兵の一人が声を上げた。反射的に西の空を仰ぎ見れば、朱に染まった空を背景に、確かに黒い点が一つ、徐々に大きくなってゆく。

カスパル少佐。オットー。

口中に名前を噛み締めながら、パウラは知らず、一步、一步と足を踏み出していた。

「救護班急げ！負傷しているかもしれない！」

「機種は？誰が還つて来たんだ!？」

「ちよつと待て、まだ遠すぎてわからん！」

兵たちの顔に歓喜が浮かび、我先にとパウラを追い越して滑走路へと向かっていく。帰還機が途絶えたこの基地にあつて、それは彼らにとつて待ちわびた光景に違いない。

掌を翳し、さらに一步。

目を凝らしたパウラは、しかしすぐさま失望に沈むこととなつた。

夕焼けを背にした機影は、ゆっくりとそのフォルムを明瞭にしてゆく。

機首の大きなカナード翼、垂直に立つ一枚の尾翼、そしてデルタ翼と、小柄な機体。パウラが待ちわびたものとは裏腹に、間違いなくその姿はレクタ軍正式採用機『グリペンC』。すなわちカスパル少佐でもオットーでもなく、グラオモント隊の誰かに違いなかった。

「グラオモント4：：サイツ中佐だ！帰還機はエドワルド・サイツ中佐の『グリペンC』！」  
整備兵の一人が双眼鏡を手にし、機番を確認して声を張る。

歓声、称賛、それを背にふわりと滑走路へと降り立つ『グリペン』。耳を聳するエンジンの轟音と肚に堪えるブレーキ音に顔をしかめつつ、兵たちの顔には生気が戻り、喜びが満ちている。ただ一人、帰還の歓声の中で目元を曇らせる少女を除いて。

違う。少佐でも、オットーでも無かった。

一人醒めた心のまま、パウラはそれでも縋るように、人々が群れる『グリペン』の下へと足を踏み出していった。

「よかった……！おかえりなさい中佐！待ってましたよ！」

「他のメンバーはどうになりました!?サピンのレーザー兵器は!?」

「……………」

キャノピーを開け、ヘルメットを外すエドワルド中佐。パウラの目に入ったのは、錆びたように固く風を受ける褪せた赤髪と、悲憤を噛み締める横一文字の唇だった。中佐の視線の先には、先に帰還し大破した、無残に転がる『グリペンC』の翼がある。

一抹の希望と胸を苛む不安を呑み込みながら、一步、一步と機体へ近づくパウラ。

群れる人の中で、視線を落とした際にこちらを見つけたらしい。機体から地に降りたエドワルド中佐は、開口一番にこちらへ目をやった。

「パウラ准尉、生還していたか」

「……………中佐。…カスパル少佐とオットーは」

「……………。二人は戦死した。オットーは峡谷内の戦闘で雪崩に巻き込まれ、同志カスパルは中破した所をヘッドオンで墜とされた。殺ったのはサピンの『ミラージュ5』だ」

「っ……………!!」

カスパー少佐が。  
死んだ。

体が、平衡を失う。

血液がさつと頭から引き、目の前が真っ暗になる。

脚から力が抜け、体が重力の重みに崩れ落ちそうになる。

もう、少佐がいない。小さなころからずっと傍にいた、寄り添う樹のようなあの人が。いつも標を導き、私の道をも示してくれた少佐が。

そんなことが、あつていいのか。

胸の疼痛すらも消え、ただただ虚無だけがパウラの心に満ちていく。

その瞬間、パウラは己の肢体も、脳裏の意識すらもつかの間見失った。

「……………そう、…ですか」

「そんな…！カスパー少佐が！」

「グラオモント1と2も乱戦の中で撃墜された。『グラオヴエスペ』戦術を徹底できなかった私の過ちだ。…グラオモント3は無事か？」

「…亡くなられました。着陸時に機体が横転し、直後の爆発で…」

答えるごとに声小さくなり、最後には涙声になる兵の声が入る。それすらも煩わしくなり、パウラは外界を遮断するように目を瞑った。

本当ならば、耳も塞いで座り込んでしまいたかった。心の中にぼつかりと生じた空虚はあまりにも大きく、言葉も意思も反響せぬまま呑み込んでいく。自分でもどうすればよいのか分からず、意思はそのまま停滞し、音と化した声だけが右から左へ流れていった。

「そうか……。…だが。我々は止まる訳にはいかない。——聞け！同志カスパルは確かに散つたが、その死を賭した鉄槌で以て、目標『カリヴルヌス』の沈黙に成功した！もはやレーザーの脅威は無く、サピンの防衛能力は半減したのだ！カスパル少佐の死を無駄にしないためにも、今は戦い続けるのだ！『我ら』の勝利の日まで！」

声を張り上げるエドワルド中佐、そして歓声を以て応じる兵たち。我も我もと加わる声すらもパウラの心に響くことは無く、全てが心の虚無へと沈んでいく。何を考え、何を支えに生きるのか。そんな自らの心の在りかさえ、今のパウラには分からなかった。

今まで、戦う目的を与えてくれたカスパル少佐。あの人が、もういないのだから。

「パウラ准尉。長く苦楽を共にしたカスパル少佐の死、察するに余りある。…だが、少佐の遺志はこう言っている筈だ。『戦え』『報復を果たせ』と」

「……………」

——本当に、そうか？

脳裏にちらりと挟まった疑問も、泡沫のごとく闇の中へと消えてゆく。

そうかもしれないし、そうでないのかもしれない。目的のために全てを切り捨てる峻厳な顔と、時折見せる優しい顔。そのどちらが本当の少佐だったのか、それともどちらとも本場で、あるいはどちらとも嘘だったのか。

わからない。わからないわからない。

今まで、一心に少佐を信じて戦ってきた。少佐の言うことが絶対に正しいと信じて戦ってきた。その少佐がいない今、何を信じて戦えばいいというのか。

「我らは止まらない。宿願を果たすその日まで戦い続ける。生き残った我らで、その気概を見せてやろうではないか。君にとつては大恩あるカスパル少佐の敵討ちでもある。今後一層、『祖国』のため、共に励もう」

「……………は、…いい」

「重畳だ。期待している。…ホラルド、すぐにグランダー社へコンタクトを取れ。ヴィリツツ、システム班総出で例のシステム構築を急がせろ。残存した全ての『ワイバーン』へ10日以内にセットアップを完了してくれ」

立ち尽くす身体、立ち竦む思考。

意思を示し、それぞれの役割に向けて散ってゆく人々の中で、パウラは一人、夕闇に影を落として佇んでいた。

自らの意思でなく、周囲の意思で戦う自分。空虚な自分を抱え、意思なく生きる自ら

を、静寂の中少女は顧みる。

嗚呼、まるでウツセミのよう。

還らぬ者はついで走路を踏むことなく、少女の眩きは風に吞まれて消えていった。

\*\*\*\*\*

「次の出撃は30分繰り上げだ。敵の勢いが増している」

『『カリヴルヌス』を失った代償は大きかったですね…。一応、隊長の機体以外は爆装に転換している所です」

「終戦まであと一歩だった筈が…忙しくなってきたねえ、まったく。コーヒー飲む暇もありません」

火薬と焦熱の名残が、言葉の最中に鼻を打つ。

先日の『『カリヴルヌス』』攻防戦から数日後、サピン空軍第二ヴェスパ―テ空軍基地は以前にも増した喧騒に包まれていた。

格納庫内を慌ただしく行き来する整備兵の姿。ノイズ交じりの声をまき散らす備え付けの拡声器。そして、ふわりと着陸しては休む間もなく装備を付け替えるSu―25『フロッグフット』の姿。

横殴りに吹き抜ける着陸の余波に顔をしかめながら、男――カルロス・グロバールは部下の言葉に頷いた。戦況とミーティング内容を纏めたバインダーを手に語る一人――

「アレックスは、なおも言葉を続けてゆく。

「ラテイオ北部ツイラス平原の前線は、レクタ陸軍が増強されたことで後退しつつあります。当のラテイオ軍は戦力回復がおぼつかず、自衛で精一杯とのこと。我々の反復攻撃で少しでも敵の足を止めないと、展開中のわが軍にも損害が生じかねないとのことです」

「つて言つても、限度がありますよねえ。戦闘機隊じゃそれこそ足止めが限度でしようし」

「だからこそその反復攻撃だろう。∴社にも以前のようにMiG-27Mがあれば、少しは楽ができたかもしれんが」

アレックスの言葉に、例によつて気の抜けたような声で続けるブラッド。とはいえ埒の明かない現状を憂うのは同感であり、カルロスも首肯しつつ言葉を返した。

アレックスの言う通り、現状はサピンにとつて明るいとは言い難い状況になりつつあった。

先日の戦闘でサピンのレーザー兵器『カリヴルヌス』は稼働不能に陥っており、サピンの国土防衛に大きな穴を生じさせていた。『カリヴルヌス』の脅威が無くなった隙を突き、睨み合いが続くラテイオ北部でレクタ軍が攻勢を仕掛けてきたのである。じわじわと、しかし確実に勢力圏を広げるレクタ陸軍部隊に対し、サピン前線は数日前から



徐々に後退を始めていた。噂では、レクタが対ゲバート警戒に割いていた北部方面軍をラテイオ北部前線に投入したとも言われているが、いずれにせよこの先に待っているのは先の見えない長期戦。血濡れのシーソーゲーム以外にその先があるとは思えなかった。

『カリヴルヌス』を守り切れれば終戦まではあと一步。もはや切り札を失ったサピンにとつて、そんな早期決着の目は完全に画餅に帰したと言えるだろう。

「……つたく、こんなクソ忙しい時に。我らが『三日月』サマは何やってんだか！」  
一同の足が宛がわれた格納庫へと近づいた所で、憤懣を込めたフラヴィの声が炸裂する。その声音には明らかに幾分の苛立ちも混じっており、聞えよがしに『そちら』の方へと向いていた。

その方向——すなわち格納庫の脇に当たる、不要な箱や資材が乱雑に積まれた廃棄物の一時置き場。大規模な戦闘を経て乱雑の極地と化したその空間に、固いコンクリートに寝そべり、古タイヤに頭を預けて空を仰ぐ青年の姿があった。

着崩したサピン軍服、胸元や頭を覆う白い包帯、そして包帯から覗く金髪と瞳。まさしく『三日月』——エリク・ボルストその人であるのだが、今は外観からの判別は些か困難となっていた。

重傷者よろしく、頭や胸元まで包帯でぐるぐる巻きとなっていることもその要因の一

つとして間違いいではない。先日のパレニア山脈上空における戦闘で、宿敵『グラオガイスト隊』と雌雄を決したのち、エリクは途切れ途切れの意識で以て奇跡的に基地へと帰還。着陸すらままならない中破した『ダガーA』で胴体着陸を敢行し、満身創痍ながらも生還を成し遂げたのであった。腕や胸部への負傷に加え『ダガーA』も完全に大破する結果となったが、大規模な空戦で負傷しながらも生還できたことは奇跡としか評せないだろう。

だが、今のエリクの姿がかつてと似ても似つかないのは、その包帯姿によるだけではなかった。

その目に、光が無いのだ。

失明した、という意味ではない。しかし、かつて抱いていたのであろう青年士官らしい希望に満ちた光も、復讐に煌々と燃える決意と憎悪の光すらも、その目にもはや宿つてはいなかった。宿すもののない瞳は深淵を臨むかのように黒く深く、虚無を湛えたガラス玉としか見えない。

『オイ、聞いてんのかいエリク！』

棘を持って飛ぶフラヴィの大声にすら、その瞳は空を見上げたまま揺らぐことは無かった。

「つたく、たかだか敵のエース落としたくらいで燃え尽きるとはね。見上げた腕前の奴

かと思つてたら、期待外れもいい所じゃないか」

「そう言つてやるな、フラヴィ。信念の在りようを伝えきれなかつた俺の落ち度でもある。…あいつは、純粹過ぎたんだろう」

信念。戦いの空に身を投げ続けるために必要な、自らを支える柱。

今のエリクの有様を改めて目にして、カルロスは嘆息とともに、自らの指導者としての非力を痛感した。

『仲間を死なせず、自らも死なずに戦い抜く』、『勢力もイデオロギーも越えて、ただただ好きな空を目指し飛び続ける』、『目にしたこともない、強いパイロットと戦うために空にあり続ける』。自分も、そしてかつて見えて来たエース達も、その信念は漠然としつつも遠大な、容易には達成しえない目標を据えていた。遠い高みに目標を据えることで、男たちはそこへ近づくための信念を軸に戦い、生きることができたのだ。

しかしエリクは、その信念に当たる位置に、カスパルへの復讐という『目的』を据えてしまった。

その目的を軸にしている間、確かにエリクは一徹にその目的へと進み続け、必要なもの以外は全て捨て去ってきた。結果、その力量も比類ない高みにまで達しえたことは否定できない。

しかしそれが達成でき、信念たる位置を消失してしまつた以上、エリクに残つたもの

は何一つ無くなった。信念を失った今となつては自ら戦うための目的も消え失せ、母国を追われた身では国や人々を護るという受動的な目的さえ抱きようもない。生きながらえた意味すら失つた以上、自らのために金を稼ぐという最低限の目的すらも抱けないに違いなかった。

信念とは、『何のために戦い』、『どのように生きるのか』。その命題に対する答えである。

かつてジョシユア大尉——ウイザード1はそう言い、自分の中にその炎を灯してくれた。それに対し、自分はエリクに対し、何ら与えることはできなかった。ジョシユア大尉に及ばない、自分の力量不足の結果でもあるかと思うと、今のエリクの姿を見るのも心苦しい。

だが、まだ間に合うのなら。まだ、光を宿すことができるのなら——。

「…隊長？」

ざ、と靴を鳴らし、カルロスは不意に立ち止まる。怪訝なブラッドの声を背に、カルロスは踵を返してエリクへ数歩、近寄つた。こちらを見上げるエリクは、しかしその目に自分の姿が映っているのかどうかも怪しい。遠い焦点の瞳は、果たして像を結んで——今という現実を見えているのだろうか。

胸にこみあげるものを押し殺して、カルロスは口を開いた。光を取り戻すために、敢

えて厳しい言葉で以て。

「エリク。今のままでは、お前はあのカスパルと同じだ。かつての友軍に牙を剥き、あらゆるものを捨て去って復讐の鬼になり、今一人潰れようとしている。根本の目的は違ひこそすれ、それは奴と何ら変わりがない」

「……………」

「お前は、このまま潰えていい人間じゃない。自分自身を見つめ直すんだ。…何のために戦い、どのように生きるのか。それは確実にお前の中に…これまでの生きざまの中にある。復讐だけではない、もつと大きな信念が、確かにあるはずだ」

「……………」

伝えるべき言葉の整理がつかず、半ば心に渦巻く単語の羅列となった言葉。それでも、エリクの瞳を見据えた言葉に全てを籠め、カルロスはそこで口を閉じた。

一瞬、虚無に閃いた光。

しかしそれは、瞳に一瞬陽光が反射したゆえの錯覚に過ぎなかつたのか。

瞬間の期待も得るものはなく、瞳は元の虚無へと戻って、全てを呑み込む黒へと帰していった。

「……………」

「…隊長。そろそろ出撃の刻限です」

「……………分かった。…悪かった、邪魔したな」

言いようのない、痛み。

抜け殻となった今のエリクには、もはや言葉は届かないのか。  
踵を返すカルロスの胸を、絶望に似た痛覚が苛んだ。

「…ウツセミ、か」

「え？何ですか隊長？」

「いや、不意に思い出した言葉だ。東洋では、セミの抜け殻を『空蟬』と呼ぶらしい。現世や生者といった意味もあるようだが」

「…ウツセミねえ。…ハッ、今のあいつには洒落過ぎてる言葉ですよ」

悪態を突くフラヴィの目に一瞬宿る、寂しそうな色。同じエースでありエリクの技量にも一目置いていた辺り、今のエリクの姿が悲しいのはフラヴィも同じなのだろう。

姿を保ったまま、空虚となったセミの抜け殻。確かに今のエリクの姿には、悲しすぎるほどに洒落が効いている。

「…行くぞ。時間が押してきている」

だが、いくら悲しもうと、辛くとも、現実には待つてはくれない。今も前線ではレクタの機甲部隊が進軍を続け、友軍は頹勢を迫られているのだ。

足早に向かう格納庫の中に待つのは、戦場と言う名の現実。カルロスはヘルメットを

受け取り、ガンポッドとフレアデイスペンサーを搭載した自らの乗機『デイビナス』へと、その身を乗り出した。

ヘルメット装着、ヘッドアップ<sup>H</sup>デイスプレイ<sup>U</sup>オン。計器類チェック、火器管制異常なし。通信回線にも異常は認められず。あとは車輪止めを外し、タキシングへ入るのみである。

「二ムロッド隊より管制室、出撃準備よし」

《管制室より二ムロッド1、もう少々待て。現在民間の輸送機1機が着陸準備に入っている》

《民間機?》

《ルーメン・メデイエイショナル・エージェンシーのC-130だ。丁度いい、サヤカ・タカシナを名乗る人物から通信も受けている。カルロス少尉へ仲介する》

…あの女か。

毎度予想外のタイミングで登場するサヤカだが、出撃直前の今に、それもこちらへ通信を送ってくるとは一体何を考えているのか。頻繁に補給物資を運んでくるお得意様である以上、基地側も強くは言えないのであるが、それにしても。

頭を抱えたくなる気持ちを抑え、カルロスは通信回線へと耳を傾けた。

《あー、あー。ごきげんよう、カルロス様。毎度おなじみルーメン・メデイエイション・

エージェンシーのサヤカ・タカシナでございます」

「こちらカルロスだ。悪いが今出撃準備で手一杯だ。要件なら後にしてくれ」

《あら、あら、あら。それは大変失礼いたしました。それでは、取り急ぎ一件だけ。先日手配させて頂きました『例の機体』、組みあがっておりますでしょうか?》

相変わらず人を食った声音に辟易しながら、カルロスはちらりと格納庫の端へと目をやる。

サヤカの言う『例の機体』——先日の大規模作戦の最中に、前触れなく送られてきた機体の部品。作戦終了後に整備班が合間を縫って組み上げたのが、まさに格納庫端に駐機するその機体であった。今はシートを被せられており、はみ出たデルタ翼以外にその姿を傍目にうかがい知ることにはできない。

「…ウチの格納庫の端に駐機してある。言っておくが、乗る人間はいないぞ」

《あら?カルロス様やエリク様は…》

「ウチの社に余計な金が無いことくらい知っているだろう。エリクはこの前の作戦で潰れている。…精神的にな。とても飛べる状態じゃない」

《あら、あら。そういうことでしたか。それではご心配なく。わたくしがエリク様を奮させてみせますわ?》

…は??



思わずそう返しかけ、カルロスは慌てて口を噤んだ。確かに純粋なデルタ翼の『あの機体』はエリクに合っているだろうが、それにしても本人が復活しなければ無用の長物である。着目点は分かるが、信念を問いかけても暖簾に腕押しだった今のエリクを、サヤカならば発奮させることができるというのか。

「…無茶はしてくれるなよ。あいつは今相当に参っているんだ。おそらくあんたの予想以上にな」

《ご心配なく、わたくしエリク様のためにお土産も持ってきてきますので。…それにわたくしこう見えても、幸運の女神さんですから？》

「……………好きにしろ、もう」

——胡散臭い。

結局いつも通りの感想へと着地して、カルロスは先とは別の意味でため息をついた。ここで無理をされてエリクが再起不能になってしまつては元も子もないが、かといって出撃間近の今となつては自由に行動するサヤカを止めることも叶わない。

そもそも、なぜあも自信満々のだろうか。まるで自身の『お土産』でエリクが発奮すると、信じて疑わないように。

頭痛がしそうな頭を抱えながら、カルロスは大きく息を吸い、目の前の光景へと目を向けた。

無機質な計器類の向こうで、戦場と言う名の現実には、格納庫のシャッターの形で大きく口を広げている。

遠くをC—130の巨体が横切り、続いて砂ぼこりが流れてゆく。

ジェットエンジンの噴射に押され、滞留したものが舞い上がったのに違いなかった。

\*\*\*\*\*

蒼い。

空が高い。

それ以上の言葉を結ぶ気になれず、青年——エリックは瞳を遠くへ向けた。

空へ向かって手を伸ばす。包帯が目立つ指の間を、雲が千切れて流れてゆく。

からっぽとなった心には、風も、空も、雲も、何の感慨をも抱かしめない。

耳に響く高周波の轟音は、よく聞き慣れたM i G—21 U P Gのエンジン音。車輪止

めを外したのだろう、音の位置はわずかながら徐々に前進し、出撃の時間が近いことを物

語っている。

頭上の空。高く遠い空。

あそこを飛んでいたロベルト隊長も、ヴィルさんも、クリスも、カスパルも、フィンセントも、パウラももういない。同胞を殺し、自ら捨てたレクタに還ることもない。あとはきつと、あの雲のように消えていくのに違いはない。

掌の雲を掴み損ねて、伸ばした手が地へ落ちる。

腕を追って落ちる視線。

その先に、遠くに駐機した輸送機と、そこからこちらへまっすぐ歩いてくるスーツ姿の女性が目に入った。

ウツセミ。信念。頭の片隅に残った残滓が、ほんのわずかに渦を描き始める。

それは、見覚えのある人の姿だった。

## 第31話 The moon rises again

「久方ぶりです。ご機嫌麗しゆうでございます、エリク様」

古タイヤに頭を預けて寝ころんだ体に、人を食つたように丁寧な言葉が落ちて来る。

びつちりと着込んだ黒スーツ、艶のある黒い髪、そして笑みに弧を描きつつも真意の読み取れない黒い瞳。見事に黒一色の出で立ちとなったその女——サヤカ・タカシナに  
応じる気にもならず、エリクはわずかに一瞥した瞳を再び空へと向けた。

これまで機体や武装の調達で世話にはなってきたが、今や乗るべき機体もなければ、飛ぶべき意味もない。今のエリクにとつて、サヤカはもはや関わる意義の無い存在になつたといつていいだろう。虚無に吞まれたからつぽの存在には、ただ話をするのも煩わしい。

「よい、しょ。お隣失礼いたしますね。∴あらあらまあまあ、包帯をこんなに巻いて。負傷男子というのもこれまたニツチながら乙なものですね」

こちらの返答を待つことなく、サヤカが無遠慮に左隣へと腰を下ろす。おそらく上着の裾から覗いた脇腹の包帯を指先ででもなぞっているのだろう、左脇腹の辺りに軽い感触があつたが、エリクはそれを払うでもなく成すがままに放つておいた。もはや生きる

意義も失った所で、人の繋がりなど何の意味もないのだから。

何を言うでもなく、サヤカはひとしきり指先で脇腹をつついてくる。その感触は徐々に上り、腹の上の方へ。

ぴきり。

その指先がまだ癒えない傷を突いたのだろう、引きつるような痛みが腹部に走り、エリクは微かに顔を顰めた。

「つ……」

「あらあら、申し訳ございません。つつい包帯と筋肉にわたくしの好奇心が刺激されてしましまして」

「……何しに来た。今あんたと話すことは何も無い。…俺のことは放っておいてくれ」

久々に発した声は、我ながら哀れなほどに小さく、喉が詰まったように淀んでいる。

痰でも詰まっていたのだろうか、ごほん、と咳を二、三度鳴らし、エリクは目を閉じてその意思を言外にサヤカへと伝えた。こちらに話す気はない、もう関わってくれない、と。

互いに言葉無いまま、間に漂う数瞬。

不意に聞こえたふつつ、という息遣いは、サヤカがほほ笑んだ気配だったのだろうか。「いえいえ。わたくしも一度承ったご依頼は責任を持って達成するのがモットーでし

て。そういう訳でして、まずは以前のご依頼のお返事に伺った次第でございます」

「……依頼？」

「はい。現ウステイオ空軍が誇る精鋭飛行部隊『ガルム隊』。その素性と現在の動向についてでございます」

「……っ！」

息を呑む。

目を見開く。

——そうだ。先月末、山岳地帯上空での攻防戦の折。戦場に乱入したサヤカを護衛した際、直前に交戦した『ガルム隊』に違和感を感じて、思い付くままにサヤカに依頼していたのだった。

かつてレクタ空軍に所属していた頃、同盟国ウステイオの『ガルム隊』とは度々共同戦線を張る機会があった。圧倒的な技量、比類ないチームワーク、そして味方を奮い立たせる名声。15年前のベルカ戦争で名を馳せた伝説の傭兵——彼らに恥じない力量を以て、『ガルム』の二人は戦線をひっくり返し、小国ウステイオを勝利に導いていたのは今も記憶に焼き付いている。

ところが、エリクがカスパルらの謀略で国を追われ、サピンに属した後。件の山岳地帯で敵として見えることとなった『ガルム隊』は、どこか違ったのだ。機体はかつての

F-2AからF-35A『ライトニングII』へと変わっていたが、それだけではない。塗装。パターンもエンブレムもガルム隊そのままだが、技量も目に見えぬプレッシャーも、到底かつての様とは似ても似つかなかったのである。慣れない機体で本来の技量を発揮できなかつたのか、それとも人事異動でかつてとはメンバーが異なっていたのか。いずれにせよ、過去のガルム隊とは別物だったと言っている。

何かが違う。

当時は、その直感に従うままに、サヤカに依頼した——いわば思い付きに過ぎなかつたのだ。それゆえに、今の今まで依頼したエリク本人も失念していた。

見開いた目の先。横目にこちらを見下ろすサヤカの顔は、逆光の中にも微かに微笑んでいる。

「まずガルム隊の所属ですが、11月に入ってから配置転換があったらしく、ウステイオ中西部に位置するヴァロハス空軍基地へと変わっています。隣国オースシアとの国境近くですね。なんでも、『エースパイロット部隊』編成のため精鋭が召集されたとか、でございます。現在の乗機F-35Aへも、その際に機種転換したのでしょうか」

どくん。

鼓動が、わずかに譜を進める。胸に淀んだ得体の知れない情念が、徐々に渦巻き流れを形作っていく。

11月に入ってからからの配置転換。エースパイロット部隊編成の名のもとに行われた一般部隊との切り離し。そして最新鋭機F-35Aへの機種転換。

記憶が推測を呼び、推測が疑念を炙り出す。まるで、自分たちハルヴ隊に起こった事とうり二つではないか。加えて、ウステイオもまたかつてのベルカ戦争に参戦し、勝利した連合国の一翼である。それらから、導き出される答えは。

呑み込んだ唾が、ごくりと喉を鳴らす。

胸に渦巻く情念に目を細めながら、エリクは絞るように紡いだ。

「…続けてくれ」

「かしこまりました。続いて現ガルム隊の素性ですが、かつてのお二人…パスカル・ジェイク・ベケット氏とレイモンド・レッドラップ氏とは別人のようです。それも、公式にはそれを隠したまま。つまり…ああ、なんとということでしょう。ガルム隊は名前だけそのままに、別人がなりすましているという訳でございますね。素性は定かではありませんが、当該基地にはノースオースリア・グランダーI・G・社の重役が足繁く通っているようで、元ベルカ軍の関係者である可能性が高いようです」

「…!!」

反射的にがば、と跳ね起きた瞬間、下がった血が一瞬視界を暗くする。

眩む頭、その中に見える微かな光。胸の渦は激しく波打ち、鼓動が一層早まってゆく。



あの時抱いた違和感は、やはり気のせいではなかったのだ。ベルカ残党——カスペルの同志たちはウステイオにも潜入し、自分たちハルヴ隊と同じようにガラム隊の名だけを利用してしようとしているに違いない。つまり、カスペル達は潰えたものの、ベルカ残党の怨念と策謀だけは今なお生き続けているということになる。

「本来のガラム隊の二人はどうなった。殺されたのか？」

「いいえ。どうやら配置転換と同時に身柄を拘束され、別の場所で監禁されています。我々の得た情報では、監禁場所はオーシア連邦ノースオーシア州のグラティサント要塞跡地：かつて『エリア・ウォール』と呼称された一角のようですね。秘匿された対空火器や垂直離着陸機発進基地も地下に整備され、さながら音に聞くエルジアの『タンゴ線』のようだとか」

無意識に掌が握りしめられ、包帯がぎり、と鳴る。

本来のガラム隊は、生きている。複数の防衛陣、遠く離れた幽閉場所と困難は多いが、それでも今だ生きているベルカの謀略を挫くための重要な要素に変わりはない。もし彼らを解放でき、ベルカ残党の策謀を公にできればどうなる。

——いや。いや、いや。

胸に波打つ感情を、引き足の理性が押さえつける。

なぜ俺がそこまでする必要がある。もう飛ぶ意義もなく、戻る所もなく、共に飛ぶ仲

間もないというのに。

第一自ら飛ぶための翼も無い。唯一ベルカ残党の謀略を知るカルロスは、サピンに雇用された現状を意識して対ベルカに向かう気すらない。取れる手は今の俺にはもはや無いのだ。

もう、いいではないか。復讐に燃え、燃え尽きて朽ちる。それで終わりで何が悪い。何せ、できることなど一つもないのだから。

燃え立ちかけた瞳が、翳り瞼に伏せられていく。

掌をわずかに緩め、エリクは今だ渦巻く胸裏と裏腹に、興味をなくしたかのようにサヤカへ一瞥を返した。

「…そうか。ありがとう、わざわざ悪かったな」

「いえいえ、お安い御用でございます。…そうそう、関連するお話になりますので、もう一つ」

「何だ、藪から棒に」

「実はガラム隊と同じように、つい最近までベルカ残党の手で監禁されていた方がいらつしやるのですわ。それが何と、現オーシア大統領、ピンセント・ハーリング氏なのでございます」

「…なんだって!？」

衝撃——そう評するしかない、頭を鉄槌で叩かれるような意識を一新する言葉。

閉じかけた目を再び見開き、エリクはサヤカの方を振り向いた。軋む包帯も悲鳴を上げる脇腹も、もはや意識の外にある。

「馬鹿な！だって、今オーシアはユークトバニアと戦争中だろう！その最中に何で……！」  
「はい。ですので、今は副大統領が裁可を行っているようですね。少々複雑ですので、順を追ってご説明いたします」

サヤカはゆっくりと口を開き、この戦争の始まりから諄々と説き始めてゆく。その一言一言が、戦闘一辺倒だったエリクにとつては衝撃だった。

そもそも、このオーシアとユークトバニアの戦争の発端は判然としない。これまでの融和路線から一変しユークが領空侵犯や挑発を繰り返したこと、それに対しオーシアの前線部隊も力で以て対抗したこと。そのどちらが直接の発端かは定かでないが、始まりすら曖昧なままに戦争は始まり、戦火はオーシアを犯した。

ところがその戦火も、ユークトバニアの超兵器である潜水空母『シンファクシ』の撃沈と上陸作戦の失敗に伴って一旦は収まることになる。オーシアのハーリング大統領は膠着したそのタイムミングを好機と見て、ユークトバニアに対し停戦を結ぶべく首都オーレッドを発った。

——そこで、ハーリング大統領の足跡は途絶えることになる。

サヤカ曰く、停戦協定の地である中立国ノースポイントへと向かう飛行中、ハリリング大統領はオーシア内のベルカ残党に拉致され、ベルカ共和国領内のシュティールア城に幽閉されたのだという。この事実は公には伏せられ、副大統領以下閣僚は大統領の不在をひた隠しにしたまま対ユーク戦争を拡大していった。元々副大統領や軍人上がりの一部の閣僚は戦争継続を望む主戦派だったと言われており、この幽閉劇にも副大統領が一枚噛んだ形跡もあるらしい。オーシアがユークトバニア本土上陸作戦を行い、なし崩し的に同盟国のウステイオやレクタに最新鋭機F-35の輸出を決めたのも、慎重派であるハリリング大統領の不在がその根源にあったのだろう。

いずれにせよ、オーシアが主戦論に傾くことは戦争の継続を意味し、それはベルカ残党の望む結果をもたらすことと同義と言つていい。そして現状はオーシア内の主戦派とベルカ残党が結んでいる状態であり、まさに彼らの望み通りに事が進んでいるという訳である。

戦争の影で動く、人や国の無数の駆け引き。そして全てを滅ぼさんばかりの、執拗なまでのベルカ残党の怨念。名状しがたい重みが胸に蟠り、エリクは吐き出すようにため息を吐いた。

「オーシア首脳部とベルカ残党の結託……最悪の状況だな。相手が残党組織どころか国そのものな以上、完全に詰んでる。それに気づいている人間も、他にいない」

「左様でございますね。事の真相を知る方は、まだまだ少ない現状です」

「…それじゃあこの戦争はどうなる。ベルカ残党の怨念にいいように踊らされて、オースリア諸国は滅亡するののか」

「いいえ。真相を知る方々は少ないですが、『ゼロ』ではありません。真実を知り、意思と翼を持つ方々が、北辺の海にいらっしやいます」

「…何？」

「——『ラーズグリーズ』」

聞きなれない単語を以て、サヤカは一旦口を閉じる。

ラーズグリーズ、ラーズグリーズ。そういえば、昔読み聞かされた童話でそんな名前が出て来た気がする。確か、災厄をもたらす悪魔だったか妖精だったかの名前ではなかったか。なんにせよ、今まで並んできた現実的な言葉とは一線を画する響きと違っていい。何らかのコードネームなのか、それとも。

こちらの怪訝な顔を見て取ったのか、サヤカは再び微笑みながら言葉を繋いでいった。

『彼ら』はそう名乗っています。…そう、エリク様同様にベルカ残党の策謀に囚われ、無実の罪で国を追われ…それでも戦争を終わらせるといふ意思を持って飛び続ける人たち。かつて『サンド島部隊』と呼ばれた方々ですわ」

「——サンド島部隊だって!？」

「あらあら、ご存知でおいででしたか」

「昔新聞で読んだ程度だけだな。…だが、彼らまでベルカ残党の魔手にかかっていたとは知らなかった」

「左様でありましょう。彼らの逃避行も『ラーズグリーズ』の結成も、まだ数日も経っておりませんから」

言葉が記憶を手繰り寄せ、記憶から一枚の画像を想起させる。

いつだったか、レクタにいた頃に読んだ『サンド島部隊』の記事。わずか4機の部隊でユークトバニアが誇る大型潜水空母『シンファクシ』を撃沈し、オーシア西端のサンド島を守り抜いた英雄として、同盟国オーシアの勝利を湛える文章とともに写真が載っていたのを覚えている。大柄な男と、その男に首を腕巻かれたたらを踏む小柄な青年、そして華奢な黒髪の女性と、同僚の腕に被り顔が隠れてしまっている男。噂では対ユークでも常に前線にあり、味方を鼓舞してきたと聞いている。

いわば、オーシアを牽引するエースの筆頭。ガラム隊やハルヴ隊の例を顧みれば、彼らもまたベルカ残党に狙われたとしても不思議は無かった。

一拍置いて、サヤカの説明は続く。

ベルカ残党の策謀に陥りサンド島を追われた彼らは、いち早くベルカ残党の動きを察

知したオーシアの部隊に救われ窮地を脱したのだという。曰く、現在の拠点はオーシアの北東の端に位置するカーウィン島。オーシアが保有する航空母艦の一つ『ケストレル』に拠り、オーシア軍とは独立して対ベルカ残党の作戦を進めているということらしい。

彼らが行った最初の作戦は、件のシユティーア城に囚われているハーリング大統領の救出だった。ベルカ残党による相当の抵抗があつたものの、サンド島部隊の彼らは無事作戦を成功させ、大統領を救出。現在はハーリング大統領も空母『ケストレル』に座乗し、ベルカ残党の策謀を挫く——すなわち戦争を終わらせるために機を窺っているという事だった。

ハーリング大統領救出を機に、サンド島部隊は大統領直属の飛行隊『ラーズグリーズ』に改称されたという。以上は、全て3日前から昨日の間に起こった出来事だった。

眩暈がしそうだった。

あまりにも急な展開、あまりにも膨大な情報。これほどまでに事態が急転していたとは、サピンの片隅に閉じこもっていたエリクには知る由も無かつたのである。

「…あんたは、いや、あんたたちは一体何なんだ。ただの民間調達業者の域を明らかに超えている。…なんでそんな重大な情報を、こうも素早く知っている?」

「あらあらあら、お褒めのお言葉光栄ですわ。…そうですね、我々はただの調達代行業で

すが、軍需品も扱う特性上、『正規ルートでは兵器を購入できない方々』に需要がござい  
ます。おまけに、紛争が盛んな地域ならばまだしも、安定したオーストラリア国内では類する  
業者は多くありません。そんな中で、正規の軍務から外され独自に行動している『ケス  
トレル』の方々とは、少し以前から関わらせて頂いていたのですよ。そういう訳で、情  
報もぴちぴちの鮮度で仕入れられる訳でございます」

「…危ない橋を渡るな。相手は編成外とはいえ正規軍、おまけにベルカ残党も敵に回す。  
第一、戦争が続いた方があんたたちにはメリットがあるんじゃないか？」

「おっしゃる通り。しかし、お互いが滅びてしまつては儲けを得ることはできません。  
今のベルカ残党のやり方ではどの国も疲弊して戦争どころではなくなつてしまいます  
から、兵器も売れなくなつてしまいます。わたくし達ゴハンが食べられなくなつてしま  
いますわ」

「あー…」

「という訳でして。今回の戦争はこのあたりでいい感じに余力を残したまま終わつて頂  
く方が、わたくし達にはありがたいのです。今回『ケストレル』の方々にバックアップ  
をさせて頂いているのも、それがわたくしどもにとって一番の利益だからですわ」

戦争商人らしく臆面も無く言い放つサヤカに、今度は別の意味で眩暈を覚えそうに  
なつた。確かに相手があり、かつ戦争状態にあることで初めて成立する商売とはいえ、



これではベルカ残党とどちらがマシか分かったものではない。唯一の救いは、『ラーズグリーズ』とサヤカ達の当面の目的が『ベルカ残党の策謀を打ち破る』ことで一致している点だろう。多少の齟齬はあるとはいえ、現時点ではお互いに不足を補える存在であると言っている。

ともあれ、ベルカ残党の企みを知り、それを破るべく活動する人々が海の向こうにいる。

その事実に、エリクはいくらかの安堵と、なぜか名状しがたい疼きを覚えた。

俺はカスパル達に裏切られ、仲間を殺され、国を追われ、全てを奪われた。その報復として全てを捨て、全てを犠牲にして復讐を果たし——そして今、何一つない空っぽの状態になった。

片や、彼らはどうか。同じようにベルカ残党に国を追われ、居場所を失い、絶望の淵に沈んだ。それにも関わらず彼らはわずかな希望を頼りに、『ベルカ残党を挫き戦争を終わらせる』という明確な意思を持って、今もなお飛んでいる。そこに復讐の念が全くないとも思えないが、一体何が違うというのか。

不意に、カルロスの言葉が蘇る。

『復讐だけではない、もっと大きな信念が、確かにあるはずだ』。

信念。戦うための力。戦いに臨み自らを支えるための力。

それが、『ラーズグリーズ』と俺の違いだというのか。では、俺の信念とは何か。

復讐は、俺の信念たりえなかった。戦いの原動力となったが、その炎は報復の達成とともに消えてしまった。

『今のままでは、お前はあのカスパルと同じだ』。

——違う。その宣告への叫びは、しかし喉に張り付いて離れない。

実際は、どうだ。カスパルは15年前の戦争に敗れ、レクタに潜入してからは策謀と裏切りの限りを尽くして：奴の言を借りるなら『裏切り者の誹り』も『非道に手を染める罪』も承知で、全てを投げうって復讐に邁進し、そして散っていった。

対して俺は裏切りに全てを奪われ、サピンで再起してからはかつての同胞も、倫理も、心さえも捨てて——そう、全てを投げうって一心に復讐を果たした。

——愕然した。

同じだ。同じではないか。

一心で一徹な復讐心も、そのために自ら全てを捨てるその様も。俺と奴は、何一つ変わりないではないか。

結局は俺も、復讐の連鎖に絡み取られた鎖の一つだった。連なる報復は、そのままべルカ残党の論理でもある。報復の連鎖を肯定し、それに自ら連なった時点で、俺は既に

ベルカの——カスパルの論理の前に敗北していたのではないか。たとえ戦闘でカスパルに勝利したところで、報復の連鎖を是とした以上、結局は今のベルカのやり口に返す言葉を持ってなくなる。

そんな思惑に乗ってたまるか。一緒になつてたまるか。

——負けて、たまるか。

拳を握る。

熱が鼓動を鳴らし、肚の淀みを激しくかき回してゆく。

胸にふつつつと滾る、この感情は何だろうか。それを突き動かす、言い知れない熱は何だろうか。

信念。

戦いを支える芯。これが、カルロスの言う所の信念なのか。

「さて」

不意に落ちた女の声に、エリクははっと我に返る。

いつの間に立ち上がったのだろうか、サヤカは既に尻を払い、影にこちらを見下ろしていた。その目はいつもと違い、どこか満足そうに微笑んでいるようにも見える。

「それでは、ご報告は以上になります。お役に立てたのなら幸いですわ」

「ああ、ありがとう。…本当に助かった」

にこり。

一步踏み出すサヤカの後で、エリクは再び思考を巡らせる。

戦いへの意思はともかく、現実面ではどうか。仮に『ラーズグリーズ』と連携するにも連絡を取る手段はなく、そもそも乗るべき機体が無い。第一現在はサピンと契約した傭兵である以上、独自に行動などできる筈もない。

うう、む。

信念ではどうにもならない現実の問題に、呻きにも似た声が漏れる。

思考が袋小路に陥りかけたその時、『あ、そうそう』という不意の声に、エリクは目をしばたかせることになった。気づいて仰げば、サヤカはまだ一步目の位置で、こちらを振り返っている。

「忘れておりました。ここからはご依頼と関係の無い、わたくしの……いえ、わたくしどもからのご相談です」

「なんだよ、今度は」

「ここだけのお話。エリク様、わたくしどもに雇われる気はありませんか？」

「何？」

藪から棒に、何を。本当に前段と全く脈絡のない話に、思わず怪訝な表情が顔に浮かぶ。

につこりと小首をかしげたサヤカの様は、既にいつもどおり真意の分からない姿へと戻っていた。

「いえ、わたくしどもは現在調達仲介業のみですが、仕事柄危険な空域を飛ぶことも多く、おまけにもものよつては機材も余剰が出て無駄になってしまふことがございます。そこで、現在独自に護衛部隊を持つと検討中なのでございます。ゆくゆくは規模も増やし、安全保障部門へも業務拡大したいなど検討している次第でございまして」

「それで、実戦経験のあるパイロットを引き抜こうつて寸法か？」

「もちろん、ただ引く抜くだけではございません。必要な武装、燃料、弾薬は社から供給、昇給制度もございます。ご搭乗の機体も、今なら標準価格の1/3でご提供。実は既に格納庫にて組み立て済みです」

「……」

呆気にとられるも一瞬、腰を下ろしたままエリクはしばし考えこんだ。

サピン所属という檻から解かれれば、対ベルカ残党の活動の幅は大幅に広がる上、ラズグリーズとの連携も視野に入れられる。一番の懸念だった機体についても、既に用意されているとしたら大変都合がいい。所属の問題さえどうにかなれば、確かに悪い話ではなかった。

話の表面をなぞれば、確かにそうではあるのだが。その決断を鈍らせる要素が一点だ

け、エリクの心に引っかかった。

「あ、もちろん所属移動の件はお任せ下さい。軍と基地担当者の方にはわたくしどもの方でアレをアレでアレしていい感じに……」

「代償は何だ？」

「え？」

「話がうますぎる。格安の機体、装備弾薬の供給、待遇。新規部門のためにパイロットが欲しいのは分かるが、それにしても極端過ぎる。……俺が払う代償は何だ。どんな契約を結ばせようとしている？」

一際眼を厳しく細め、エリクはサヤカを凝視する。

そう、気になったのは、言うまでも無く話が出来過ぎていることであつた。いくら人材確保が急務といえども、これでは赤字が出るのは目に見えている。よもや足が出た分は腎臓で払って頂きます、の部類ではないと信じたいたい所だが。……想像したサヤカの脳内イメージがしつくりと来すぎて、我ながら寒気がしそうだった。

「ええと、そうでございますね。細目を噛み砕きますと……一つ、給料の6割を生活関係費と維持費として社が徴収、ただし割合は10年かけ漸減とする。一つ、他企業への転職または負傷等による中途退職の際には違約金を徴収する。一つ、通常業務ならびに戦闘行動中は指揮権管轄者……平たく申し上げますとわたくしの指示にいかなる場合でも従

う。一つ……」

「もういいもういい。つまり要約すると、最低10年間の奴隷契約……そういうことだな？」

にっこり。

無言でほほ笑むサヤカの様子に、エリクは今度こそ本当に寒気を覚えた。堂々とブラツク企業真つ青の契約条件を提示する辺り、紛争激戦地の傭兵コーディネーターより数倍タチが悪い。

「いかがですか？」

静かに微笑んで、サヤカは引き起こすように右手を伸ばす。

沈黙、数秒。

契約内容自体はどう見ても人間の所業ではないが、考えればこれは千載一遇のチャンスではないのか。戦いへ向かうべき意思と信念を抱える今、何より必要なのは『国』を離れた立場と機体である。奴隷契約であろうと、この契約はそれらを両手にできる少ない機会なのだ。

迷いはない。月が再び昇るため、鎖は甘んじて受け入れよう。

目を開く。

脚に力を入れる。

エリクは差し伸べられた手を掴み、サヤカに向けて立ち上がった。

「よろしく頼む、サヤカ」

「うふふ、歓迎いたしますわエリク様。これで晴れて…あら？」

互いに目と目が交わった矢先、激しく金属の扉を開ける音が響く。どうやらすぐ隣の格納庫がその音の源らしく、続いて慌ただしく駆ける足音がエリクの耳に入ってきた。

右へ左へとさまよう音が、徐々に近づいてくる。格納庫の壁を回りこちらに走り寄ってきたのは、司令部付きの通信兵の一人だった。

「エリク、ここにいたのか！ 待機任務なら詰所にいろ！」

「どうした、何かあったのか？」

「緊急出撃だ！ 出撃した二ムロッド隊がウステイオ軍の待ち伏せに遭って包囲されている！ 場所は近いが敵の数も多く、苦戦中らしい！」

「なんだって…！ 今出られる機体は？」

「予備機の『アルバトロス』だけだ。他は全て出払ってるか修理中で使えん！」

予想外の出撃命令に、思わず唇を噛む。

こちらの行動を読んで待ち伏せした以上、敵は相当の数だろう。出撃しようにも、直線翼機の『アルバトロス』ではむぎむぎ食われに行くようなものだった。

『とにかく早く！』。焦りが通信兵の声を荒げさせ、決断を促す。舌打ちを打ちつつも



応じかけたその刹那、間に入って押しとどめたのは他でもないサヤカの姿だった。

「お待ちください。エリク様、折角です。わたくしどもが用意した機体を使つて下さいませ。先ほど申し上げた通り、組み立ても試運転も既に終わっております」

「無理言うな、慣れない機体でいきなり実戦は……」

「大丈夫。大丈夫です。エリク様のためだけに、わたくしがお用意した機体ですから。きつと、すぐに使いこなしていただけます」

「……『アルバトロス』よりはマシか。すぐに出る！ 発進準備、管制塔にも伝えてくれ！」  
引つかかるのは、サヤカの妙な自信。意図するところが分からぬまま、走り出す通信兵と別れたエリクはサヤカとともに格納庫へと駆けだした。

意外にも、サヤカの脚は早い。こちらが航空装備を固めに足を止める間、殺到する整備兵に先んじてシートに覆われた機体に到着。エリクが遅ればせながら機体にたどり着いた所で、得意げに微笑みながら、サヤカはばさりと保護シートを外した。

「……!!これは……この機体は！」

「ふふ、気に入って頂けましたか、エリク様？」

喧騒に包まれる格納庫をよそに、エリクはその機体の前に立ち尽くす。

脳裏に蘇るかつての日々、共にあつた仲間、それを支えた翼。そしてそれらを礎に、今心に宿る信念。

心に溢れる熱い感情が、意思を、体を突き動かす。

一步踏み出し、触れる機体。どくん、とエンジンが拍動し、新たな相棒が唸りを上げた。

\*\*\*\*\*

《直上に2機！》

《高度は下げるな、対空砲の餌食になるぞ！》

抜かった。

降り注ぐ機銃の雨をかいぐりながら、男——カルロス・グローバルは自らの油断に臍を噛んだ。レクタとウステイオの前線が想像以上の速度で進行し、予測会敵地点より大幅にせり出していたこと。そしてサピンの援軍が侵入するであろう地点をあらかじめ予測し、奇襲能力に長ける垂直離着陸機を配備していたこと。二つの予想外に退路を塞がれた時には、既にニムロッド隊の4機は3倍の機体と地上兵器によって包囲されていたのだ。流石に今まで生き残って来たウステイオ軍である、その追撃は執拗にしている確で、撤退の隙を容易には与えてくれない。

操縦桿を引き、4機ひと塊となつて高度を上げる。地上から上がる地対空<sup>S</sup>ミサイル<sup>A</sup>を辛うじて回避し、正面を狙う『ハリアーII』4機と対峙する。

狙うは正面突破のヘッドオン。そう見せかけながら、射程に入る直前で左右に散開。

矛先を逸らし、そのまま離脱を図る。

ミサイルアラート。右上空。

舌打ちとともに操縦桿を押し倒し、カルロスは迫るミサイルを右に受け流した。やはり多勢に無勢はいかんともしがたく、いなした隙を別の敵機が埋めて来る。予測しがたい『ハリアーII』の軌道がカルロス得意の読みを一層困難にさせ、戦況は明らかにこちらに不利となっていた。

《ニムロッド4、後ろ！》

背後を取られたアレックスを支援すべく、ブラッドの『デイベナス』が弧を描いて機銃を放つ。その側面を護るべく、フラヴィが相手取るのは3機。そのうちの1機が飛び出て、ブラッドの背後を狙うのをカルロスは見逃さなかった。

《させるか！》

主翼下から放たれるは、23mm2連装4連。連なる光軸は敵機の進路を塞ぎ、『ハリアーII』は攻撃を諦め回避へ舵を切っていく。

しかし、このままではいざれじり貧。打開のため巡らせた思惟はそのまま一瞬の隙となり、脇をすり抜けた1機がブラッド機目掛けて加速してゆく。当のブラッドはアレックスの支援に機を取られ、背に迫る敵機に気づいていない。

《ち……ブラッド、後方上空だ！ダイブしろ！》

《な…!? そんな急に言われてもお!?》

旋回で速度が落ちたブラッド機に対し、敵機はまっすぐ直進してゆく。こちらも加速しようにも、背を追う一機が行く手を阻んでくる。

間に、合わない。

《ブラッド!!》

「——させるかあああ!!」

爆ぜる、声。否、気迫。

反射的に空を見上げたその瞬間、ブラッドの背を追っていた『ハリアーII』は曳光弾に貫かれて爆散。その爆炎を割くように、小柄な機影が行く手を遮り急降下していった。

機体全長の半分ほどを占めるデルタ翼。後退角の強い垂直尾翼に単発のエンジン。そして主翼より高い位置に設けられたカナード翼と、『ミラーージュIII』よろしく太い機首。いささか旧式の機体だが、隣国でいまだ現役のその姿は前線でも見覚えがある。

あの姿は。そして何よりあの声は。

《『クファイルC10』…! エリクか!?!》

「おうー」

機首引き上げ、捻りながらの急速上昇。軽量の機体とエンジン出力に物を言わせた機

動で、急上昇した『クフィールC10』は目の前の『ハリアーII』を機銃掃射で食いちぎってゆく。その様は、クフィールの名の由来である若獅子そのものの姿だった。あるいは、かつてレクタにいた頃のエリクそのものと言うべきか。

《あいつ……ははっ、あいつ!》

戦場に乱入した三角翼が、瞬間に戦況をひっくり返してゆく。

ベルカの思惑を止め、戦争を終わらせて、報復の連鎖を断ち切る。

しかしそれは義憤でなく、カスパルと同じにならない、報復の連鎖を是としないという意地ゆえに。

信念を載せた新たな翼が、刃のごとく空を舞う。

30mmの二筋の牙は、早くも次の目標を噛み千切り、空に爆炎を刻んでいった。

## 第32話 巢立ちの刻

「無理だ」

「……だよな。期待してなかったけど」

柔らかに陽光を落とす太陽に、2人分の男の影が薄ぼんやりとアスファルトの地面に縫い付けられている。

12月の山間には珍しく、晴天が続いたとある日の午後。エリクとカルロス、2人の男の姿は、ヴェスパ―テ空軍基地の機能を司るコンクリートの箱——司令部棟の傍らにあった。正面を向くエリクと、それに斜めに構えて受け流す姿勢のカルロス。エリクがいささか諦念と失望を覚えるほどに、カルロスの口調はそつけない。

ルーメン・メデイエイショナル・エーージェンシー——通称L・M・Aの黒スーツ女ことサヤカ・タカシナが『とある目的』で司令部棟を訪れる間、折よく捕まえたカルロスに話を持ち掛けた末の第一声が、このカルロスの反応であった。内容は言うまでも無く、昨日サヤカから打診された一件。すなわち、サピンの傭兵を辞め、新たに護衛部隊のパイロットとしてL・M・Aに移籍したい、という旨である。

いうまでも無く、これはただの転職ではない。カスパルと同じにならないために、奴

の思想に打ち勝つために、ベルカ残党の計画を阻止し、報復の連鎖を断ち切る。そのためにはサピンのために動かざるを得ない傭兵の立場から離れ、民間企業の下という一種自由な立場である必要がある。そのような必要に迫られての結論であった。ことエリクに関しては新たな乗機『クファイルC10』を安価でサヤカに用意して貰った事情もあり、いずれにせよ傘下に入ることは避けられなかったと言っている。

それでも、エリクが決断を下しカルロスに切り出す覚悟を決めたのは、その理由以外にもう一つ。すなわち、独自にベルカ残党と戦う部隊である『ラーズグリーズ』の存在と活動をサヤカから聞いていたことが大きいだろう。エリクと同じようにベルカ残党の策謀で母国オーストリアを追われながら、人の縁と運に拾われ、報復の念に囚われることなくベルカ残党に対抗している。その姿と立場は、今のエリクが求めるものと完全に一致しているものだったのだ。

それだけに、カルロスのにべもない返答は、エリクを失望させるに十分だった。

「俺に社外の人間に対する人事権は無いが、おそらく基地の重役も同じ事を言うだろう。お前とサピンの契約は満了しておらず、当然ながら違約金が必要になる。傭兵は金に汚くすぐ裏切ると世間には思われているかもしれないが、傭兵稼業は基本的に信頼第一だ。契約を蔑ろにする傭兵は、いくら腕が立とうと雇われることは無い」

「…まあ、だろうな。傭兵だからフラフラできる、とは思っちゃいけないさ」

「ならいい。おまけに、今戦争は膠着状態……いや、『カリヴルヌス』の沈黙と昨今の情勢を考えれば、サピンが不利ですらある。お前が復活したのは幸いだ。すぐにでも通常任務に戻って貰わんと、この基地は持たん。この前までの無気力だった状態でも、新聞やニュースで情勢くらいは把握しているだろう」

こんこんと諭すようなカルロスの言葉にじりじりとした苛立ちを覚えつつも、正論たるその内容には首肯せざるを得なかった。契約の途中破棄を言い出す以上、非があるのはどう見てもこちら側なのだ。

何より、サピンが一人でも多く戦力を欲しているのは、ここ数日で起こった大きな変化が原因であった。

海の間こうではユークトバニアとオーシアの前線が膠着しており、オーシア東方諸国でも親オーシアのレクタとウステイオ、親ユークのラテイオ、仲介する第三勢力のサピンがそれぞれ拮抗する現状。それを読み、東方諸国の北に位置するファト連邦が親ユーク勢力として参戦、親オーシアの立場にありつつも中立を守っていた隣国ウエルバキアに対し侵攻を開始したのだ。公式にはウエルバキア領内に駐屯するオーシア軍が誤爆を行ったことに対する報復として喧伝していることだが、地理的に考えても誰の目にも不自然であることは言うまでもない。

ここで一旦、脳裏に地図を俯瞰して整理してみると、各国入り乱れた勢力図がよく分



かる。

オースシア東方諸国の一つであるラティオは、その長靴型の国土をやや前傾にして諸国の南に位置している。この『長靴』の西側——すなわちつま先から脛にかけてはサピンが接しており、ふくらはぎに当たる北東にはウエルバキア、長靴の履き口である国土北端の北にレクタ、西にウステイオが隣接する形である。レクタの北にはゲベート、ウエルバキアの北にはファトがそれぞれ連なり、ファトとウエルバキアのさらに東に接する形でノルドランドが横たわっている。言うまでも無くノルドランドの向こうには海が広がっており、その先にはエルジアが位置することになる。

すなわち、今回のファトの参戦は、これまで東方諸国の中央以南西に留まっていた戦火が北東へと広がったことを意味している。本来であればファトとウエルバキアの戦端には、サピンと共同歩調を取る隣国ゲベートが介入すべき筈であるのだが、現在の所ゲベートは静観を決め込んで動く気配もない。対レクタでの動きの鈍さといい、ゲベートが漁夫の利を狙っていることはもはや明白であった。この調子では、サピンとの協調もいつ崩れるか分かったものではない。

「けど、よく考えてみる。サピンが大変なのは分かってるが、その大本はカスパー達ベルカ残党の仕業だろ？サピンを護らなきゃならない気持ちは分かるが、今は元を断つのが先決なんじゃないか？」

「だとしても、今の俺はサピンの指示に従って動く以外には無い。サピン軍部が『ベルカ残党を討て』と命令を下すならよし、そうでなければひたすらサピンの防衛を続けるだけだ」

「分かったよ……じゃあせめて、俺が動くことくらい同意してくれたっていいだろう？ あんたが動く訳じゃなし」

「……まずは司令部の決定を待て。さつきも言った通り、俺が同意した所で物事が動く訳じゃない。そして俺の立場としては、サピン防衛を考慮して反対を表明することしかない」

「……」

留まるところを知らない戦火、そして隣国に対する疑心暗鬼。引き金が出所不明の攻撃である点といい、今回もベルカ残党の策謀が疑われる節がある。カルロスもそれは十分に理解しているのだろうが、傭兵としての在り方を第一に説くカルロスに、対ベルカのために率先して動こうという気配は全く感じられなかった。

胸に、むくむくと苛立ちがこみ上げる。

カルロス本人もかつてベルカ残党と戦い、おそらく自分以上にその手強さと厄介さを知っているだろうに、なぜ道理を盾に動こうとしない。確かに道理は重要だが、かといってそれで自らを縛り続けなければ動くこともできなくなってしまうだろうに。

目の前に重大な問題があるというのに、何故動かない。何故、俺が行くのを認めてくれない。

そうでなければ、俺が折角見つけた戦う目的が、信念が、果たせないというのに——。「いい加減現実を見ろよ！あんたが能書き垂れて動かない間にも、ベルカ残党の連中は暗躍してるんだぞ!?あんただって危険性は分かってるだろうに！」

「現実を見ていないのはお前だ。傭兵としての契約がどれだけ重いか、甘く見て貰っちゃ困る。サピンは目の前の戦争が何より最重要だ。『ラーズグリーズ』とかいう対ベルカ残党を標榜する連中がいるのなら、ベルカ残党はそいつらに任せておけばいい。そいつらが担う以上、お前や俺がわざわざ関わる必要もないだろう」

「……復讐を果たして潰れた俺を、あいつは再起させてくれた。それだけじゃなく、俺はカスパルとの闘いを経て、あいつの情報聞いて、新しい目的を……あんたの言う信念を見つけたんだ。ここで安穩としてちや、絶対に叶わない信念を」

「……信念、だど？」

ぶつけた生身の感情にすら眉一つ動かさなかつたカルロスの顔が、『信念』の語にわずかに動く。

意思を見定めるような凝視。

避けることなく交わす視線。

もう逸らすことも、復讐に燃える意思で拒絶することも無い。自らの胸の中にある『それ』は、カルロスの瞳に確かに応えている。

カルロスが、何か言おうと口を開いたその瞬間。紡がれかけた言葉は、ばたあんと、と勢いよく開いた扉の音で呑み込まれた。

「もう、もう、もう！頭のお固い殿方ばかり！」

「サヤカ！交渉は終わったのか。：首尾はどうだった？」

「あら、エリク様。それにカルロス様もご一緒でしたか。わたくし殿方から出待ちされるなんて久しぶりで、照れてしまいます」

「：いいから早く言え」

司令部棟の扉を蹴破る勢いで出て来たのは、案の定サヤカだった。常通り隙の無い黒スーツ姿ながら、普段と異なるやや粗い口調とふくれ面は、交渉が下首尾に終わったことを物語っていた。

「どうもこうもございません。ヴェスパ―テ幹部の方は皆さま頭がお固いのでしょうか、わたくしのお願いはにべもなく却下されてしまいましたわ。もう、あのピザデブファッティ―司令殿やバーコードヘッド参謀殿のお顔を思い出すだけでわたくし思わず激おこでございます」

「まあ、そうだろう。幹部連も昨今の国際情勢は正しく把握している。東方諸国筆頭の

地位すら揺らぎかけている今、余計に戦力を手放すことはできないだろうからな」

おっとりと、しかし頭から湯気でも出しそうな勢いで、サヤカは結果を口にする。

カルロスの読み通り、案の定と言うべきか移籍は認められなかったらしい。サヤカにしてみればたかがパイロット一人、それも今に至るまでこの基地と繋がって来た縁も最大限に活かして説得すれば何とかなると踏んでいたのだろうが、予想以上の抵抗によってその目は潰されてしまったのである。普段より些か荒い、砕けつつも容赦ない言葉選びが、彼女の苛立ちを如実に物語っていた。

「ともかく、話は終わりだな。俺は行かせてもらう。ブラッドに押し付けた事務作業が大量に残ってるんでな」

「あ、待つて、待つて下さいカルロス様……もう！ 甲斐性なし！ 痕 顔！」

スカーフエイズ

「まあ落ち着けサヤカ。何か別の手を考えないと、『ラーズグリーズ』と連携するどころじゃなくなる。なんにせよ、一旦戻ろう」

「うーん、うーん、…むー。少しお時間をくださいませ…」

要件は済んだとばかりに踵を返し、カルロスはこちらに背を向けて去ってゆく。

片や、残された二人が足を向けるは、ひとまず司令塔向かいの格納庫。歩いてゆく最中でも、サヤカは顎に手を添えたままああでもない、こうでもないと独り言を垂れ流している。

いつもは飄々と底が知れない雰囲気の子ヤカが珍しく焦り没頭する様は、傍目に見るエリクにとつては可笑しくてならなかった。同時にどこか安心したのは、やっと彼女の人間らしい部分を見ることができたためでもあるのだろう。これから下に就くことになるのだ、こうした人間らしさや弱さも見ておかないと、いざという時に信頼できない。

…格納庫の庇をくぐって後、思索に没入していてなお、散乱している工具や行き交う人々に全くぶつかからない辺り、やはり得体の知れなさは残ったままだが。

「うーん。それなら…いや…でも…うーん…それだと…」

「おい、控室は左手奥だぞ」

「むー、うー、むむむ」

物思いに夢中になった子ヤカはそのまま壁にぶつかり、額を壁に合わせたまま停止する。立ったまま前傾して、全体重で額で壁に寄り掛かる特異な光景だが、これは子ヤカなりの『考え中』を示す姿勢なのだろうか。歩行から壁にぶつかり停止したその様は、まるで方向ボタンが故障したゲームの操作キャラクターが、壁に向かって延々と歩きモーションを取るのにも似ていた。

「待てよ…それなら、…いや、でも予算が…」

「…そこがいいならそこでいいが。コーヒーでも持つて来ようか？」

「そこを……うん、それで……ホットにミルクでお願いします……だとしても……それなら……」  
「……了解」

考え事をしていても一応周囲は把握できていたらしく、返答が混じった眩きが帰ってくる。……人間味を感じた気がしたが、何だか再びサヤカのことがよく分からなくなつた。

文字通り壁に向かうサヤカを残し、エリクは左側の搭乗員詰所へと向かう。整備中らしく、格納庫に溢れるのは機械油の匂いと電動音、時折金属が床に触れる音。それらを背に歩を進めた所で、入り込んだ斜陽に影を落とす機体が目に留まり、エリクはしばし歩を止めた。

機体尾部に覗く単発ジェットエンジン、低翼位置のデルタ翼。目をより前方へとやれば、『ミラージュ』系列を彷彿とさせる半円型のエアインテークと、その上部に設けられたカナード翼が見て取れる。

サヤカによつてもたらされた、エリクの新たな乗機『クフィルC10』。凶らずもそれは、エリクがレクタ空軍時代に初めて駆り、『ハルヴ隊』として名を馳せるきっかけとなつたかつての乗機『クフィルC7』の近代化改修機に当たるものだった。

外観上は、先代の『C7』とほとんど違いは無い。ハードポイントの数、位置、短時間間の出力強化機構『コンバット・プラス』を搭載したエンジン、いずれもC7型と共通

のものである。唯一異なるのは、機首の形状だろう。細くスマートに先端へ絞られてゆくC2型やC7型と比べ、このC10型の機首は一回り太い。これは機首のレーダーが換装されているためであり、従来運用できなかった高機能中距離空対空ミサイルの使用を可能たらしめているのである。何の因果か、このレーダーはかつてカスパルらスポーク隊が運用していたF-5E/Fの改修型『タイガーⅢ』と同じものだというのが些か皮肉でもあった。

この他にもコクピットの計器類が、従来の計器盤が並ぶアナログ方式から液晶に集約表示される『グラスコクピット』へと換装されており、操作性が大きく向上している。C7型からの変更点としては、以上2点が大きな部分と言えるだろう。

エリクにとってには性能云々よりも、かつて愛用していた『クファイルC7』から二点しか変わっていないというのが非常に大きなメリットだった。

レクタ空軍に所属してから『クファイルC7』はずっとエリクの乗機であり、数年に渡るその搭乗歴は過去の『グリペンC』や『ダガーA』よりも遥かに長い。それだけに『クファイル』系列はエリクにとって最も慣れ親しんだ機体であり、まさに手足のように扱える機種なのだ。正規軍と異なり最新鋭機を得られるチャンスは極めて低い今となっては、サヤカが選んだ『クファイルC10』という選択肢は最適解と言ってよい機体だった。

主翼を見上げれば、右翼にはサピンの国籍マーク。報復を果たした今となっては、復



響を誓った星の塗装は、もはやそこには無い。片や左翼には、黒地に黄色の三日月が『一つ』。かつて4つ重なっていた三日月は今や一つとなり、幅広な月はまるで鎖すら断ち切る斧メツザルナにも見える意匠となっている。

これまでの軌跡を振り返り、独りとなった自身を受け入れ、そしてなお先へと向かう信念を——報復の連鎖を断ち切る意思を刻んだ三日月。まさに自らの分身となった機体を、エリクは眩しそうに見上げた。

——間にして、数十秒。機体を見上げる脳裏にサヤカが去来し、我に返ったエリクは慌てて搭乗員詰所へと足早に向かった。いけない、サヤカのことを忘れて自分まで物思いに耽る所だった。

…もつとも、サヤカが待ちくたびれるかも、という心配は杞憂に過ぎたかもしれない。コーヒーを注いだ紙コップをトレーに載せて戻って来た先では、サヤカは先ほどから一寸たりとも変わらない姿のまま、壁に向かって呟き続けていた。

「…おい、大丈夫か？ 一旦休憩してから作戦を練ろう」

「でも…それなら…。…そうか、待てよ、なら…」

「……まあ、好きなタイミングで飲んでくれればいいさ。ミルクは持つてきたから好きな量を…」

呆れ半分、可笑しさ半分。苦笑いを浮かべたエリクは、サヤカ用に持つてきた紙コッ

プへと目を落とす。

それが、エリクにとって致命的な隙となった。

エリクは気づかなかつた。

その一瞬、サヤカの眩きが止まるのを。

その糸のように細い目が大きく開かれるのを。

そして瞬間を経た後、俯いていたサヤカの背と腕が、まるでバネのごとく弾かれるのを。

「――閃きましたわ!!」

「へ?――おわちやちやちや!熱うっ!」

弾かれたように大きく広がる腕、反る背中。その腕の軌跡上にエリクの体とトレーがあつたのが、全ての不運だった。サヤカの腕はトレーを弾き、その上にあつた淹れたたての熱いコーヒーが衝撃で飛んで、まるで連鎖反応のようにエリクの顔面にぶちまけられる結果となつたのである。

悶絶し転がるエリク、からんからんと音を立てるトレー。それらも意に介さず、サヤカは祈るように手を合わせ、喜びに堪えぬように天を仰いでいる。

「お前な、何を急に……!」

言い終わる前に、エリクとサヤカの目が合った。

にっこりとほほ笑むも一瞬、サヤカはその場で一回転、二回転。三回転とともにしゃがんでこちらの手を取り、ぶつかりそうなほどに顔を近づけて来た。その目は、まるで子供のようにきらきらと輝いている。

「エリク様、わたくしいいことを思いつきました。正攻法で移籍を考えるのがそもそもの間違いだったのです」

「は……？」

「思いついたのです。あと腐れなく、穏便にエリク様を移籍させる方法を」

ぎゅつと握るサヤカの手に力が籠る。静かに、しかし確信をもつて話すその様は、相当の自信があるのだろう。

エリクは、あまりいい予感はしなかった。

\*\*\*\*\*

灰色の雲を割く朧な朝日が、格子で補強された窓越しに唸の薄絹を透過する。

支給品の安毛布に身を包んだまま、カルロスは起き抜けの朧な意識を耳へと向けた。

壁を伝って届く、ひゅんひゅんという耳障りな高音は、遠くで稼働する航空機のエンジンのものだろう。いくつものエンジンが重奏を演じる重い音は、やがて徐々に遠のいて、意識の彼方へと消えてゆく。大型機——おそらくは輸送機が離陸したのだろう。今この基地に存在する大型機といえばL・M・AのC—130を於いて他に無く、発注

品調達のために早々に上がったのに違いない。

まどろみの中、数分の間を経て再び聞こえるエンジン音は先と比べて些か小さく、それでいて音は高い。こちらは待機中のグレイヴ隊の機体だろう。しばらく動いたその音は、一際音階を上げてから離れ始め、同じく雲の先へと消えていった。

「むう……」

寝返りを打ち、壁掛け時計を確かめる。

午前7時に少し届かない、冬の夜明け直後。まだまだ待機当番の交代には時間があ  
る。事実、相部屋となつているオズワルドとブラッドは、未だに布団を被つて眠りこ  
けていた。ベッドの下段にいるはずのアレックスの気配がないのは、早起きして日課の  
ジョギングでもしているのだろう。余談ながら、基地側の配慮で女性のフラヴィは別の  
部屋である。

サピンが緊張状態に入つて久しく、殊ベルカ残党の暗躍があつてからは気が休まる暇  
もない。脛に掌を押し当てて目脂を拭つてから、カルロスはぼんやりと上半身を起こし  
た。長らく傭兵稼業で鍛えた体だが、ここ最近では疲労の回復が遅くなつた気がする。空  
戦技能は経験でもつて日々磨かれる一方で、体の方は20代の頃ほど無理も効かなく  
なつてきた。

年かな。

口元に浮かぶのは、30代半ばらしからぬそんな自嘲の眩き。自らを省みると、やはり20代のフラヴィヤやブラッドが羨ましい。まして18歳、身体的全盛期であろうアレックスに至っては眩しいほどである。

不意に、廊下の方からぱたと音が聞こえてくる。ゴム底で固いタイルを足早に叩くその音は、誰かが廊下を走っているのだろう。音はやがて荒い息遣いを伴って近づき、部屋の前で停止。それは間髪入れずドアを勢いよく開ける音へと変わり、首にタオルを巻いたアレックスの姿をドアの先に顕した。

「隊長！ブラッド軍曹！」

「ふがつ!?——奇襲!?!敵襲!?!」

「落ちてアアレックス。どうした、何かあったのか」

「先ほど、エリク・ボルストが『クファイルC10』で緊急離陸していきました。なんでもL・M・A. が機密を持ち出した証拠を掴んだから、すぐに追撃するんだとか…。隊長は、何かあの人に指示されましたか？」

「……な……!?!」

頭を覆っていた眠気が、かけら一つ残さず吹き飛ぶ。

エリク。L・M・A. ……サヤカ。許可を得ない緊急離陸。そもそも現在奴は当直ではなく、仮に追撃を行うならば待機中のグレイヴ隊が担う筈である。もとより、サヤカ

が機密を持ち出したというのも怪しい。いくら奴がやり手といえども、基地のセキュリティは外部からおいそれとアクセスできるものではないのだ。

傭兵からの移籍を図っていた二人組。人目を憚るような早朝の離陸。そして虚偽の追撃理由。要素が全て絡まり合い、一つの答えを描き出す。

すなわち、その結論は――。

冷や汗一筋、カルロスはアレックスに答えるべく口を開く。

その言葉を瞬時に呑み込ませたのは、追い打ちをかけるような内線電話のけたたましいコール音だった。

「アレックス、少し待て。……こちら第4集合居室、カルロス・グロバール。どうした」

《カルロス少尉！ただちにニムロッド隊を以てエリク・ボルストを追撃しろ！奴は無許可で離陸し北進、こちらの通信にも一切答ええない。脱走を図っていると思われる！》

「グレイヴ隊は？」

《パイロット2名は詰所で念入りに縛られた上簧巻きにされて発見された。命に別状はないが、解除に手間がかかりそうだ。急ぎお前たちで追撃しろ！》

「了解。ただちに上がる。ブラッド、アレックス、緊急出撃だ。オズワルド、フラヴィーを呼んでくれ」

受話器を置き、ベッドの上段から飛び降りながらカルロスは指示を下す。ブラッドと

オズワルドは泡を食って布団から這い出す一方で、アレックスは早くもフライトジャケットに足を通していた。

案の定だった。エリクの奴は移籍に埒が明かないことを察して、手っ取り早く脱走を選んだのだ。それもおそらくは、サヤカと共謀の上で。追撃するにしても早すぎる離陸の間隔が、それを如実に物語っている。

あの、バカが。

舌打ち一つ、カルロスは再び受話器を取った。コールする先は、ニムロッド隊が機体を置く格納庫である。

「カルロスだ。緊急出撃の命令が下った。すぐに『ディビナス』のエンジンに火を入れておいてくれ」

《了解しました！兵装は如何しますか？XMAA、セミアクティブ空対空ミサイル、いずれも準備できます！》

SAAAMを。そう言いかけて、カルロスの唇はふと止まった。

『あんただって危険性は分かっているだろうに！』

『復讐を果たして潰れた俺を、あいつは再起させてくれた』

『新しい目的を…あんたの言う信念を見つけたんだ』

脳裏に蘇る、エリクの言葉。抜け殻にしか過ぎなかつたエリクが、ようやく見出した

信念。それはカルロス自身も戦いの中でかつて見出した、空で生きるのに不可欠なたった一つの芯でもある。ここにおいては叶わないであろう、その信念を。信念のありかを見つけたあいつの可能性を。

俺が、サピンが、ここで奪っていいものだろうか？

「……」

《少尉？》

「いや、何でもない。今回は追撃戦、機体は軽い方がいい。短距離空対空<sup>A</sup>ミサイル<sup>M</sup>以外は追加兵装も増槽も不要だ」

《は？…はっ、ではそのように》

「すぐに向かう。…行くぞ。あのバカに傭兵の流儀を叩きこんでやる」

口早に通話を切り、慌てるブラッドを急かすようにカルロスはフライトジャケットを着込む。冷や汗が滲んだシャツにごわごわとしたジャケットの感触は、少々気持ちが悪い。

怪訝そうにこちらを見やるアレックスと、カルロスは目を合わさなかった。

\*\*\*\*\*

「まったく、とんだ無茶を…」

《あらあら何をおっしゃいますエリク様。よく言うではありませんか。絡みに絡んで解



けなくなった糸玉はいっそハサミで切ってしまいましょって》

「いや初めて聞いたけどな」

サピン領内ヴェスパルテ空軍基地より北方、ラティオ領内ウステイオ勢力圏の国境近く。

眼下が平原へと移り、頭上を薄曇りが包んだ灰色の空に、L・M・A.のエンブレムを施したC-130『ハーキュリーズ』と、それから数百mを隔てて連なる『クファイルC10』の姿が浮かんでいる。

新しい機体ながら見慣れたコクピットの中で、エリクは怪訝に顔を顰めた。いざ意を決して亡命したのはいいものの、その計画の詳細は立案者たるサヤカから『お楽しみは後にとっておきましょう』の一言で一切聞いていないのである。詳細を聞いて計画を練り上げる時間が無かったのは確かなのだが、それにしても不可解な点が多い。

第一、オーシア領内の本拠地ルーメンを目指すのならサピンからは北西の方角である。それを最短距離を取らず、ひたすら真北を目指すというのがそもそも腑に落ちなかった。

「なあ、いい加減教えてくれ。これからどうする気なんだ？」

《あらあら、焦ってはいけませんよエリク様。焦らしプレイはお嫌いですか?》

「お前な！」

《ふふ…。でしたら、後ろの方々をしばし凌げたら、ということではいかがでしょう。いずれにせよ、『仕掛け』まで場所も時間もまだかかります》

「何？——っ!!」

サヤカの不敵な言葉は、句点を踏む前に警戒警報によつて阻まれる。

対空レーダーによる捕捉。位置は後方。何より、ここまで早く追跡してくるとすれば、相手は自ずと決まってくる。

右旋回。方向舵が傾き、機首のカナードが空を切る。振り返った先の機影は4、いずれも小型。国籍信号はサピン。遠目ながら、そのいずれもが葉巻型の胴体と切り欠きデルタ翼を持つている。

その姿は、間違いなく。

《そこで引き返せ、エリク。今引き返せば脱走の罪は不問にする》

「二ムロツド隊…！流石に早いな！」

カルロスの声が、射るようにエリクを打つ。早晚追いつかれることは覚悟していたが、まさかこれほど早いとは思わなかった。流石に有事即応の傭兵部隊という所だろうが、2機ずつの変則雁行に分かれた4機は、明らかにこちらに対する攻撃態勢を取っている。

《エリク！あんたどういう積もりだい。やっと復活したと思つたら、とつと尻まくつ

て逃げる気かい!? あんたそれでも男か!」

《回答しろ、エリク・ボルスト。回答が無い場合、逃亡と見なし撃墜する》

「……」

《答えろ。引き返すか。…それとも貫くか》

激しさの中に親しみが籠ったフラヴィの声が、短い中に万感を込めたカルロスの言葉が耳朶を打つ。

レクタから追われ、復讐を遂げ、そして今。サピンで彼らと過ごした日々は、短くも得難いものだった。ロベルト隊長たちとはまた違った意味で、それは実りがあるものだったと言えるだろう。この日々で、俺は様々なものを得たのだから。

日々が脳裏に去来する。夕焼けと灰と戦火の色が、出会った人々の相貌ごと記憶を染め上げる。

口元に浮かぶのは笑み。不敵でも微笑でもなく、過ぎた休日を振り返った子供が『楽しかった』と言うような快活な笑み。

エリクは迫る4機を見上げ、言葉を放った。まるで月の黄金色のような、手切れの言葉。

「あんたの胸に聞いてみる。あんたが俺だったら、引き返したか?」

《……》

「あんたが言ったことだ。信念は、戦い、生きる意味だって。——だから、俺は行く。あいつを超え、復讐の連鎖を超えて、俺自身を肯定するために」

《——ニムロッド各機、攻撃を開始せよ》

2機二組となった『デイビナス』が、上空から機銃掃射を振り下ろす。

旋回を終え、相對するこちらは直進。左右から挟み込む掃射に真正面から突っ込むよりは、加速して下方を抜けた方がリスクは低く済む。

「行かせて貰うぜ！」

機銃の網を抜け、上空に4機をいなし、すれ違った直後に操縦桿を引いて急上昇。ちらりとキャノピー越しに振り返れば、ニムロッド隊のうち2機はこちら同様に急上昇からインメルマンターンに入り、残る2機は眼下を過ぎてこちらの死角に入るべく弧を描いて反転している。このまま相對すれば正面から2機の掃射で蜂の巣、回避のため下降すれば死角の2機が狙い打つという寸法だろう。無防備な上昇での回避は被弾率を上げるだけであることは言うまでもない。

射程内まであとわずか。

エリクは手中に陥るのにも構わず操縦桿を横に倒して『クフィル』をロールさせ、正面の『デイビナス』に捉えられる直前に背面急降下。ヘッドオンによる第一波を強引に抜け、高度を利用して鼻先から抜け出した。

迫るは第二波、旋回上昇しこちらの背を狙う2機。操縦桿を引き水平を取り戻し始める機体の後ろで、2機の『デイビナス』は左右に広がってこちらとの距離を詰めてきている。S A A M装備ならばとづくに射程内に入っていた距離だが、今回は装備していないらしいことが救いだっただ。

今度は背面降下で抜けるには、ロールを挟むほどの余裕はない。上空では1機が高度を保ったまま反転し、もう1機は分かれてこちらを指し急降下している。

彼我の位置を見て取り、エリクは失速降下で抜けるという奇策を捨てた。

当初の予定では背中に2機を引き付けた所で急減速・上昇して失速し低高度へ逃れる積りだったのだが、その手を取れば上空から降りてきている1機が失速中を狙い打ってくるだろう。向こうもそれを読んで、敢えて2―2隊形を崩したに違いないのだ。

「そう来るならー」

読み合いで奇策を封じられたなら、もう一つの手を使うまで。

肚から声を張ると同時に、エリクはグラスコクピットのコントロールパネルを操作。初めてにも関わらず慣れた手つきで、モード操作選択画面へと移行した。

指定、エンジン出力。

モード、通常より変更。

選択は、かつて『クファイルC7』で慣れ親しんだ切り札——推力強化機構『コンパッ

ト・プラス』。

高まる加速に体が押し付けられる。後方の2機はおろか、上空を取る1機すらもその機影を徐々に引き離していく。もとより、下方から旋回上昇する2機や下降を始めた1機と異なり、こちらは急降下を終え加速が乗り切った状態だったのだ。加速性能に優れるデルタ翼の特性と併せれば、いくら軽量なMiG-21系列といえども追撃は不可能に違いなかった。

読み合いを制し、危うい包围をなんとか凌ぎ切った。

その瞬間、冷や汗を拭うべく片手を離れたのは、ひとえに油断と言う他無かっただろう。

読み合いのさらに一つ先を読んでいた上空の1機を、エリクは見落としていたのだから。

『敵』の中で、目を離すな！』

「つ……カルロス！」

上空から迫る1筋の掃射。あたかも光の筋となった23mmの光軸を、エリクは咄嗟に操縦桿を倒し辛うじて回避した。

コンマ数秒遅れていれば機首を千切り取っていた——そう遅ればせに実感させる、狙いすました奇襲。こちらが加速性能を活かして振り切ることを読み、わざと降下のタイ

ミングをずらしたに違いない。ご丁寧に当てやすい主翼よりも機首を狙い、旋回を誘発して速度を落とさせたのもその一環だったのだろう。事実カルロスの機体は急降下で下方へ抜け、代わりに3機が再び後方から加速してきている。

「ちっ、さすがに一筋縄じゃ……！」

《エリク様、聞こえますか？こちらの『準備』が整いました。こちらへ向けて直進してきて下さいませ。……ええ、なるべく急いで、一目散に》

「言われなくても全速で向かうさ！1対4は流石にしんどいからな！」

《ニムロッド2、逃がすな！加速すればまだ追いつける！》

《応！》

唐突なサヤカの通信に応えるように、エリクは燃料も構わずフルスロットルで『クフィル』を駆る。迫る『ディピナス』も加速を重ね、それはさながら最終コーナーを抜けたサーキットのような様相を呈していた。装備分の重量が軽いためか、その距離は徐々に縮まってきつつある。その末路は、自ずと明らかだっただろう。

——そう。この戦場に存在するのが、エリクとニムロッド隊だけだったならば。

爆発。黒煙。

唐突に、彼方の地平線にそれは爆ぜた。低くなった山岳の端や丘陵で阻まれながら、それらは絶え間なく天地を彩り、時折赤い爆炎が上がっている。

空には、幾何学模様を描くいくつもの軌跡。片やF—16『ファイティングファルコン』を中心に構成され、白、黒、赤の三角模様を記された一群。片やF—104『スターファイター』やMiG—29『ファルクラム』で構成され、赤、白、緑の旗で翼を彩る一群。省みることもなく、それらは空に地に舞い、戦火を散らしている。

「これは…!?!」

《た、隊長!まさか、これ…!》

《二ムロッド各機、引け!……ウステイオ軍とラテイオ軍、か…!》

息を呑む気配が伝わり、後方の機影が惑ったように旋回する。

ウステイオとラテイオの戦闘。どうやら、いつの間にかラテイオ領内へと侵入していたらしい。サピンに移つてからは意識の外だったが、そもそもはレクタ・ウステイオとラテイオの戦争は今も継続中なのである。サピンにしてみればウステイオとは交戦中であり、対ラテイオでは主だった交戦こそしていないもの、かといつて同盟を結んでいる訳でもない。サピンに属する二ムロッド隊が、両軍を刺激する可能性の高い戦場を躊躇するのは当然といえれば当然だった。

《エリク様、追撃が緩みました。この隙に戦場を突っ切つて下さいませ。大丈夫、両軍とも乱入者どころではありませんから》

「作戦、つて…まさか、これか!」



《はい。実は先日かの『ケストレル』に赴いた際、ぼつちやり系ナイスマイドルな殿方にお話をお伺いしたのが着想の由来でございます。なんでも、『今回の脱走劇は昔と比べれば楽だったよ、何せ『彼ら』がいたからね。15年前は身一つで逃げたから大変だったものさ。円卓での乱戦に紛れ込まなければ、私も生きてはいなかっただろうね』と。すなわち木を隠すなら森の中、身を隠すには大乱戦の中、という訳でございます》

「……まさかとは思いますが、この戦闘は……」

《はいいえ、わたくしは少し『手助け』させて頂いただけですわ。丁度ファト連邦の参戦でウステイオ軍が戦線縮小を行うとお聞きしましたので、それとなくわが社のエージェントがラテイオ側にお話しただけでございます。『昨日からウステイオの航行制限が厳しくて商売あがったりですよ。車両も山ほどウステイオ方面に向かっているし、何でしょうね?』……という次第です》

「……………」

いつそこまで来ると得体が知れないどころの話ではない。もはや絶句する他無く、エリクはやけくそ気味にフットペダルを踏みこんだ。

呼応するエンジン、高まる鼓動。元来の加速性能に『コンバット・プラス』による強化が加わった機体は速い。銃弾のいくつかが機体を掠め、戦闘機がこちらを探るべく旋回するさまも見えるが、それらも本来の敵機に追われ踵を巡らしてゆく。時折こちらを

狙って爆炎が爆せるが、致命傷を与えるには至らなかつた。

もう少しで、戦域を抜けられる。

『コンバット・プラス』の稼働限界を見て取り操作盤に手を伸ばしかけたその瞬間、機体の通信回線は声を拾った。外の戦火にも掻き消えず、確かな響きを持ったその声を。

《いずれにせよ、もう追いつけん。——行け。信念を忘れるな》

——コンバット・プラス解除。

伸ばした手はそのまま操作盤を辿り、サピン周波数宛ての通信回線を切った。きつと、もう返答はいらないであろうから。

戦域を抜けるその瞬間、エリクは操縦桿を左へ倒し、機体を一回転ロールさせた。

翼端が描く、螺旋のような軌跡。

それを後方に振り切つて、エリクの『クファイルC10』は彼方へとその航跡を引いていった。

## 第33話 The shine in the dark

北海の冷たい空気を纏った風が、轟々と渦巻きながら機体を絶えず揺さぶり続ける。バイザー越しに見図る限り、雲量はおおむね9。頭上を覆う曇天は、わずかに差し込む日の光すらも厚いベールで覆い隠してしまっている。

片や眼下に目を向ければ、入り組んだ入江を持つ岩色の岸と、その足元を扶るように洗う激しい波。岩に打ち付け、弾けた傍から飛散していくその様を見る辺り、上空を吹き荒らす強風は海上でも変わらないらしい。12月も半ばを越したにしては珍しい、大荒れの天気と言つて良かった。

「つたく、転職後の初仕事が、大時化しげの海の上とは。幸先悪しげいつたらないぜ」

《まあまあ、そう仰つてはいけませんよ、エリク二等特技官。禍福は糾える縄の如しと申します。何事もどう転ぶか分かりませんわ》

思わず通信に漏らしたばやきに、返されるは女の声。飄々と人を食つたような物腰で、さながら掌で人を弄ぶかのようなその口ぶりは、言うまでも無くルーメン・メデイエイション・エージェンシー(L. M. A.)のサヤカ・タカシナのものだった。何か特

別な発声法でも体得しているのだろうか、キャノピー越しに耳を苛む暴風の中でも、その声は残念なほど明瞭に耳へと届いてくる。

とはいえ、彼女の言う通りだろう。これまでの経験を振り返るまでもなく、確かに何が自らの幸運に作用するかは分からない。サピンを離れ新たな門出を迎えた自身の運命と天候を結び付けること自体、もとよりナンセンスだと言えるだろう。

——さて。先日サピンからの脱走劇以降、ここまでの足取りを補足しておく必要がある。

自らの望む信念のため、サヤカの提案に従いサピンを脱走したのが4日前。ウステイ才軍とラテイ才軍の交戦に紛れてラテイ才領空を脱した後、エリクはL・M・A・Aが本拠を構えるオーシア領ルーメンへと降り立ち、正式にL・M・A・A社員となる手続きを受けた。この際に肩書も改められ、中尉相当官となる二等特技官を名乗ることとなったのである。

後に聞いた所によると、この『特技官』というのは社内でも護衛部門の航空機パイロットに宛がわれる職位らしいのだが、何せ立ち上げ間もないセクションということで、現状エリク以外には存在しないとのことだった。当然たった一人で活動する訳にもいかず、実際の護衛部門は輸送部門に付随する形で、整備設備などは共用となっている。立場も契約書に記された通り、サヤカの直属という形であった。

L. M. A. の本拠に降り立ってまず驚いたのは、社の規模の割には広い敷地だったことだろう。業務内容上、輸送機を運用する滑走路や整備・搬入スペースが必要となるのは当然だが、それを差し引いてもその規模は地方の空軍基地と比べても何ら遜色ない。

立地はルーメン市の郊外、丘一つを隔てた先であり、周囲にはルーメン市から延びる幹線道路の他には低木林が広がるのみ。オースシアにしては閑散とした環境だが、その由来を聞けば、15年前の戦争末期、ルーメン市が空爆を受けた後に急遽設けられた野戦飛行場を、閉鎖と同時に社が買い上げたのだという。迎撃目的の野戦飛行場ならば、速やかな迎撃のため滑走路となるスペースも1本や2本では済まない筈である。それを考えれば、これだけの広さも道理であった。

唯一補助滑走路というべき施設が無く、離陸機が重なった際には渋滞のごとく列が連なってしまう辺りが玉に瑕だが、それ以外はエリクの目から見てもまずまず満足できる拠点だと言えるだろう。

《それに、今回は悪天候の方が都合がよろしいというものでございます。こんなお天気では、どこのパイロットでも飛びたくはないでしょうから》

「その悪天候の下で飛んでる俺の前で言うか、ソレ」

《まあまあ、私どもの場合はお仕事ですから。…ほら、噂をすれば見えて参りました。目

標——『ケストレル』ですわ』

サヤカの言葉を耳に、眼下に連なる沿岸を目で探るエリク。その中の一つ、一層深く抉られた入江に、明らかに自然物ではない違和感が現れたのはその時だった。

中央には、暗灰色に白いラインが目立つ、平らな甲板の艦影。端にちよこんと艦橋が乗り、縦横に様々な線が描かれている様は、さながら航空基地の一角を切り取ってそのまま海に浮かべたかのような風情である。何より特筆すべきはその巨大さだろう。周囲にぼつぼつと見える護衛艦艇らしき姿より、それはゆうに二回りは大きいように見えた。

オーシア国防海軍第3艦隊所属、ヒューバート級航空母艦7番艦『ケストレル』。

入り江に姿を潜ませているその艦は、世界一の軍隊として押しも押されぬオーシア海軍において、その中核を担う原子力空母の一つであった。

本来であれば機動艦隊の中核として活躍し、今なお激戦が繰り広げられるユークトバニア前線に在るべき『ケストレル』。それが、まるで忘れ去られたようにオーシア北方の島影に佇んでいるのは、開戦以来この艦が辿ってきた激しい戦歴に由来している。

以下は新聞報道とサヤカの話を纏めた結果だが、『ケストレル』が最初に戦火に晒されたのは開戦当日、セント・ヒューレット軍港においてであった。『ケストレル』の本拠であったセント・ヒューレット軍港は戦線布告と同時に行われたユークトバニア軍による

奇襲攻撃に晒され、その機能を喪失。『ケストレル』はその空爆の間を縫い、港湾封鎖を企図したユークトバニア艦隊をも突破して、辛くも脱出に成功したのである。その数日後、姉妹艦『バルチャー』『バザード』と合流した直後にユークトバニアの誇る戦闘潜水空母『シンファクシ』による攻撃を受けるも、姉妹艦がともに沈没する中、幸いにも無傷のまま切り抜けることに成功した。

セント・ヒューレット軍港といい『シンファクシ』による攻撃といい、沈んでもおかしくなかった攻撃の下で『ケストレル』は常に無傷で生還している。歴史を紐解けば、正式配備前の1995年にも『ケストレル』は初陣を経験しており、その際には敵国ベルカ空軍の波状攻撃に晒されながらも、これまた無傷で戦域を潜り抜けることに成功している。度重なる激戦を無傷で切り抜けたことから、『ケストレル』は今に至るまで幸運艦の呼び名を冠されるようになっていった。

ところが、先のサヤカではないが、俗に『禍福は糾える縄の如し』という。

『シンファクシ』の散弾ミサイルによる攻撃、そしてその後の戦闘により、『ケストレル』の搭載機とパイロットは部隊維持すらままならないほどに消耗が進んでいった。損耗したのならば補充すればいい、というのが普通の発想ではあるが、機体はともかく、艦載機パイロットはそう簡単に育成できるものではない。あまつさえ『バルチャー』『バザード』の艦載機パイロットまで一度に失ったオーシア海軍にとって艦載機パイロット

は貴重な存在であり、壊滅した『ケストレル』航空隊を再興するほどの余力は残っていない。なかつたのである。

結果、『ケストレル』は艦載戦闘機をほとんど持たない空母と化し、激化する戦場から置き去りにされた。言うなれば、幸運艦として生き残ったがゆえに、空母としての機能を喪失したという訳である。今は生き残った姉妹艦『バーベツト』をはじめとした残存空母群が、対ユーク前線で奮闘している筈であつた。

そうして一度は歴史の表舞台を離れた『ケストレル』が、今こうして歴史の裏で活躍している。それを想い、自らの運命を省みると、エリクはどこか皮肉めいた複雑な感情を抱かすにはいられなかつた。

オーシアやユークトバニア、そしておそらくベルカ残党からも忘れられた船が、ベルカの策謀に気づいた『ラーズグリーズ』やハーリング大統領の拠点となり、単艦反撃を試みようとしている。その様はまるで、一度死んだ後に争いを納める英雄として蘇る、『ラーズグリーズ』そのままではないか。

「童話に出て来る悪魔、ね……。皮肉が効きすぎてて、胸焼けしそうだ」

数奇な運命を今なお辿り続ける『ケストレル』。複雑な思いの宿つた瞳でその艦を見下ろすエリクの傍らを、一つの機影がすり抜けて降下していった。L・M・Aのエンブレムが施された小柄な双発の機影は、識別を確認するまでもなく、サヤカが乗るC―



「A 『トレーダー』と見分けられる。

『ごきげんよう、『ケストレル』のみなさま。L. M. A. のサヤカ・タカシナでございます。定例の補給の品をお届けに上がりました』

『ああ、サヤカ女史か。待つていたよ、いつも世話になるね。着艦準備は既に整っている。すぐに下りてくれたまえ』

『かしこまりました、ピーター様。：そうそう、今回は先般のご依頼のため、護衛機を連れて参りました。以後、こちらもよろしくお願いいたします』

『ほう、その戦闘機だね。ありがたい。『クファイル』など、飛んでいる実機を見るのは何年ぶりかな』

サヤカの通信に答え、『ケストレル』から聞こえてきたのはピーターと名乗る男の声だった。丸みのある落ち着いた口ぶりど老練な印象から察するに、50代後半から60代という所だろうか。通信兵という風情でもなく、おおかた艦の参謀役か副艦長辺りなのだろう。

いずれにせよ、これは仕事始めの顔見せでもある。『ケストレル』の艦尾へ向け高度を下げていく『トレーダー』を眼下に、エリクは通信のスイッチを入れた。

「L. M. A. 護衛部門のエリク・ボルスト二等特技官、TACネーム『ハルヴ』です。この度、貴艦の護衛を務めることとなりました。よろしく願います」

《ご丁寧にありがとう。私はピーター・N・ビーグルという。肩書は……ふむ、そうだな。本艦航空部隊の参謀、ということにしておいてくれたまえ。一から説明するには少々複雑だね》

「Yes」

《まあ、それは後にしよう。まずは、本艦の現在の状況を説明したい。今回のミッションとも密接に関係するのでね》

落ち着いた口調、しかし裏腹にところどころに見える剽軽な印象と、それに紛れるように忍ばされた得体のしれない雰囲気。ピーターという男にどこかロベルト隊長の面影を重ねて、エリクは微かに胸の痛みを感じた。声音もまるつきり違うというのに、一体どういう気の迷いなのだろう。

『お願ひします』。予断を吹っ切るようにそう答え、エリクは雑音が混じる通信回線に耳を澄ませた。

男——ピーターが語ったのは、今日に至るまでの『ラーズグリーズ』の足取りと、ベルカ残党の動向だった。

彼らの前身が、かのオーシアのエース部隊である『サンド島中隊』であることは、以前サヤカが語った通りである。ベルカ残党の策謀で国を追われ、こうして『ケストレル』に拠るようになって数日。彼らはベルカ残党の策謀を暴き戦争を終わらせるべく、わず

か4機の戦闘機で孤軍奮闘していた。

その初手は、去る12月9日。旧ベルカ領内シュティールア城に拉致されていたオーシアの元首、ハーリング大統領を救出したことに始まる。戦争を終えるための重要なピースを得た彼らは、その後も各地を転戦。ベルカ北西部に居を置くベルカ残党の拠点へ強行偵察を敢行し、その後の反復攻撃で秘匿されていた旧大戦時の核兵器を封印することに成功していたのである。強行偵察の際にはオーシア・ユークトバニア両軍に潜伏するベルカ残党の姿も捉えられており、ベルカ残党の策謀を暴く上で貴重な証拠も入手できたのだった。

だが、それら核兵器の一部は、既にベルカ国外へと搬出されていた。

その片割れ——すなわちユークトバニアへ渡った核兵器を封印、もしくは破壊するたため、現在ラーズグリーズ隊はユークトバニア内陸北部、核兵器が搬入されたパイヴリエーニヤ渓谷へ飛んでいるという。事前情報ではユークトバニア内のレジスタンスによる協力も得られるということらしいが、いずれにせよ敵中へ長駆せざるを得ない以上、困難な任務であることに変わりないだろう。

その困難さゆえに、ラーズグリーズは保有する4機の戦闘機全てを本任務に投入した。言い換えれば、彼らが核兵器の解体に赴く間、この『ケストレル』は丸裸になるという訳である。

そこで、日頃出入りし任務の情報を入手したL・M・Aが、ラースグリーズが帰還するまでの間『ケストレル』の護衛を請け負った——以上が、今回エリクが護衛任務に駆り出された理由であつた。当然ながらL・M・Aも民間企業である以上、この護衛任務も有料のオプションという扱いである。思うにサヤカのことである、法外とはいかないまでも、『ケストレル』の足元を見て結構な値を吹っ掛けたのではないだろうか。

ともあれ、である。とにかくラースグリーズの帰還まで『ケストレル』を護衛すればよい訳だが、ピーター参謀の話を聞く限りではそれも一筋縄ではいきそうにない。

《主要任務から外れていることもあり、『ケストレル』の所在を認知しているオーシアの人間もそう多くはないだろう。……ただし、裏でベルカ残党と繋がっていたハミルトンの例もある。油断はできないだろうね。最悪の場合、オーシア正規軍に偽装して接近し、攻撃してくる恐れもある。民間機やユーク軍機への偽装ももちろんだ》

「厄介だな……。民間機なら追い払いますが、オーシア軍機を名乗っていた場合はどうします?」

《機密任務中につき進路変更願う、で押し通すしかないだろうね。幸いこの周辺は沿岸警備隊の哨戒ルートからも外れている。そのような事態にならないとは思ふが……。ともかく頼んだよ、『ハルヴ』》

「そう願いたいですが……。了解」

やれやれ。口中に眩き一つ、エリクは通信を切つて周囲を見渡した。雲は一層分厚く、空は先にも増して暗くなり、見通しの悪さは刻一刻と募っている。相手側から『ケストレル』が視認され難いのは大きなメリツトだが、この暗さでは海上付近など到底監視しきれない。もし悪天候に紛れて低空侵入などされようものなら、一手の遅れが一瞬で致命傷になりかねないだろう。

悪天候による視界不良、こちらは単機、おまけに敵はどの国籍を装っているかすら分からない。困難が積み重なった任務を前に、今度は口についてやれやれ、の言葉が漏れてしまった。

気を取り直し、巡らすは視界。

荒れる水面には船の姿もなく、雲の下の同高度域にも他に飛行する物体は見当たらない。『クファイルC10』のレーダーも機影を捉えることはなく、未だ静寂を保っていた。分厚い雲の上は流石に索敵が行き届かないが、裏を返せば上空からも『ケストレル』の位置を見定めることは困難な以上、そちらからの接近の可能性は低いといつていいだろう。

神経をすり減らしそうな、曇天下の艦隊直掩。些か疲労を覚え始めたエリクの耳に、不意に雑音が混じったのはその時だった。

『ハルヴ』、追加情報が2点ある。まず一つだが、ユーク国内の作戦が成功した。レジス

タンスの手で核兵器は解体され、迎撃に上がったベルカ残党も『ラーズグリーズ』が返り討ちにしたとのことだ。現在、彼らは帰途に就いている。もちろん4機とも無事だよ」

「……本当か!?…凄いい、なんて奴らだ。敵のど真ん中に侵入して、それも全員生還するなんて……」

跳ねる胸、次いで満ちる驚嘆と歓喜。

告げられたピーター参謀の言葉は、それほどに信じがたくも希望に満ちたものだった。現在本土でオーシア軍と交戦中のユークトバニアにおいて、その内陸に侵入することさえ本来ならば困難なことに違いない。それを成しえたばかりか、核兵器の無力化まで見事にやってのけ、あまつさえ敵航空部隊の撃退まで達成するとは、完全に常識の外と言つていいだろう。あるいはそれも、『ラーズグリーズの悪魔』と称される彼らの能力を示すものなのだろうか。

ともかくも、これは朗報である。オーシアとユークの戦争を煽るのに核兵器の使用はこの上ない手段であり、ベルカ残党は必ずその手を狙ってくる。その手札の一つを抹消しえたというのは、こちらにとって大きな一步と言えるだろう。何せ、いつ、どこを核攻撃してくるか分からない敵に応ずるのは極めて困難なのだから。

《それともう一つだが、現在低気圧が急速に発達し、北海上空を東進しつつある。まもな

くこの上空も、激しい雷雨に見舞われるだろう。十分に気を付けてくれたまえ」

「了解。風に巻かれないよう十分に……うおっ!」

《うん?大丈夫かね、『ハルヴ』》

「……くつ、ええ……なんとか。大時化どころか、まるで台風じゃないか」

続く悲報がもたらされるその最中、ごう、と吹き抜けた強風が『クファイル』の機体を激しく叩く。ジェットエンジンの馬力を以てなお機体を翻弄する凄まじい風に、エリクはほとほと辟易する思いだった。そもそもが軽量・簡易構造が売りの軽戦闘攻撃機『ミラージュ5』を原型に持つ『クファイル』である。無尾翼デルタという翼面積の大きさと相まって、風に対する安定性は決して高いとは言えないのだ。迂闊に旋回して風に対し翼を向ければ、木の葉のように吹き飛ばされること請け合いだらう。

脳裏に過ぎる嫌な予感。

それはまもなく、ばち、とキャノピーを叩く水滴によつてもたらされた。

「ちっ、降つて来たか」

ばち、ばちばちばちばち。

ガラスを打つ水音は瞬間に花火のような轟音となり、水の嵐とでも言うべき豪雨が機体を打ち付け始める。ワイパーをもつてしてなお除ききれない水量は、さながら空から降り注ぐ瀑布そのものだった。

同時に、視界を一瞬圧する閃光。がらがらと雲間を奔る炸裂音は、雷となって周囲を切り裂いた。よもや戦闘機が落雷で墜落することはないだろうが、雨と合わさって視界が効きづらいことこの上ない。眼下にいるはずの『ケストレル』の姿など、雨に煙った今となってはほとんど見て取ることができなかった。雷が大気中の電位を乱しているのか、レーダーにもノイズが走り安定しない。

「ダメだ、何にも見えやしない。『ハルヴ』より『ケストレル』。そちらのレーダーはどうなってる、周囲に反応は認められるか？」

《…ちら『…ス…レル』。落雷…レー…精度…低下し…る。…し待…》

「何だつて？こちら『ハルヴ』、雷で通信がうまく聞き取れない。悪いがもう一度頼む」  
ただでさえ悪い通信状態に、雷鳴と雨音が絶え間なく聴覚をかき乱す。無意識にヘルメットの外から耳を押さえながら、エリクはなおも雑音交じりの通信に声を送り続けた。

《本艦……ーダー機能…障害……じ……るため、『アン……メダ』が……索敵を…続…いる。現在、……、空中とともに反応……や、……こ…は…》

「…あーくそ、これじゃ埒が明かない。こちら『ハルヴ』、有視界での警戒を継続する。変化があれば通信を…」

《……空……反……、……095……接近……、ジャ……グ…



！『ハ……ヴ』、……え……か『……………』！……………6機、東……………！』  
 「……………!？」

通信を諦め目を空に向かわせた矢先、違和感が脳裏に差し入る<sup>はい</sup>。

一際激しくなるノイズ。意味をなさない雑音の奔流。落雷の影響でノイズが入るのは当然であるが、それにしても先ほどより明らかに明瞭さは落ちている。

何かを叫んだらしい声、方向を示したような単語。そして突然のノイズ増加。まさか。

違和感は直感と呼び、直感<sup>は</sup>は確信をもたらず。

はつと悟ったエリクは、荒れ狂う嵐の下、必死に目を奔らせた。

「……あれか……」

闇に包まれたように暗い海上。その上に稲妻が迸ると同時に、雷光に不自然な影が浮かび上がった。

数は4：5、いや6。いずれも大型機、3機ずつで作られた鍬を模した隊形で、西を指して海面すれすれを飛んでいる。このままの進路では、『ケストレル』と接触する可能性も否定できない。おそらくは、あれらの機体がジャミングで通信を妨害しているのだろう。とすれば『ケストレル』攻撃を目論むオーシア内のベルカ残党か、それともファクトに駐留するユークトバニア軍やサピン軍か。

「どつちにせよ、お引き取り願おうか!」

操縦桿を斜め奥へと押し、傾けた機体を弧を描くように下降させる。横殴りの風に進路が乱されながらも、狙うは正面からの擦過。オーシア軍機の可能性も以上、まずはその正体を探るのが最優先だった。

敵編隊、斜め下前方。距離1600。常ならば機種の特定が可能な距離だが、視界が効かない今となつては形状の把握すら判然としない。正体を雨のベールに隠したまま、敵は距離1200を、1000を割っていく。

絶好の機位、しかしまだ撃てない。

エリクは敵編隊の寸前で機体を右ロールさせ、そのまま敵編隊の側面をすれ違った。

「Su-24……か!」  
フェンサー

敵編隊を後方に見送り、振り返りながらエリクは自らに叫んだ。敵もこちらに気づいたらしく、3機ずつひと塊のまま左右へと散開している。先ほどまでデルタ翼を思わせていた主翼形状は崩れ、今は大きく翼を広げたように後退翼へとその姿が変わっているが辛うじて判別できた。

大型の機影と可変翼らしい機構から判断するに、おそらく最も近いのはユークトバニア軍が正式採用しているSu-24『フェンサー』シリーズ。だとすれば同盟国であるファト連邦の機体が、ファトに駐留しているユークの機体ということになるだろう。

ただし厄介なことに、『フエンサー』の形状はオーシアが採用しているF—111『アードヴァーク』とも酷似している。オーシア北方の辺境に大型戦闘爆撃機であるF—111が配備されているとは考えづらいが、それでも万が一ということもあつた。

操縦桿を引き、加速をつけて上方へ旋回。インメルマンターの要領で方向を180度転換し、二手に分かれた敵編隊の片割れを追尾に入る。

翼を畳みデルタ翼形態に移行する敵機。こちらを振り切るつもりだろうが、機体重量と加速力を踏まえれば、鈍足な戦闘爆撃機よりも『クファイルC10』に分がある。引き離された距離は見る間に縮まり、相対距離は目測で1200を、1000を見る間に割つていった。

鈍足機相手にはミサイルを当てるのに申し分のない距離。しかしエリクはそのまま加速を続け、逃げる敵のうち1機に側面から追いついた。

正面を指す敵機、その左斜め上、接触しかねないすれすれの位置に陣取るエリクの『クファイル』。機体を傾け敵の姿を視界いっぱい広げながら、エリクは何もない正面へと機銃を放つた。

発砲の閃光と曳光弾の光が、断続的に敵の機影を浮かび上がらせる。

並列複座のコクピットからこちらを見上げるパイロット。

淡い水色とグレーで塗装された機体。

そして主翼に彩られた、赤と黄に塗り分けられた五角形の盾の意匠。

——ユークトバニアの国籍マーク。

「よし。警告不要、撃墜する！」

減速、同時に操縦桿を引きわずかに上昇。いわゆるハイGヨーヨーの軌道で機体速度を殺し、エリクは敵機の後方へと機位を向けてゆく。当の『フェンサー』も加速で振り切るのは諦めたようで、主翼を最大位置まで広げて回避行動に入る素振りを見せていた。

距離700、上昇を止め、間髪入れず操縦桿を押し倒す。

敵機、左旋回。しかし動きは重く、かつ機影も大きい。主翼を展開したことで、その投影面積は著しく拡大している。

覗き込んだ照準には大柄な胴体。外す筈のない距離。

引き金とともに唸りを上げた機関砲は、30mm弾の牙でもって、その巨軀を瞬く間に食いちぎっていった。

『ハルヴ』、1キル！『ケストレル』、聞こえるか！敵はユーク軍機！引き続き迎撃する！

《……………『……………レ……………』……………ラー……………ーズ……………帰……………る。敵……………に……………、同……………に注意……………》

「まだダメか……。とにかく、『ケストレル』の脅威を1機でも減らさないと！」

四散五裂し墜ちてゆく『フエンサー』。残る5機はばらばらに散開し、あるいは雷雨に紛れて旋回し、あるいは海面近くに退いて、こちらの矛先を躲す手に出ている。ふと目を西に向ければ、雲が切れ晴天が覗いているのも認められる。通過しつつある低気圧の端なのだろうが、それはすなわち、この雷雨のベールが間もなく晴れることを意味していた。そしてそれは取りも直さず、『ケストレル』の位置がその瞬間に露見することと同意である。

つまり低気圧が通過する前に、残る5機を撃墜しなくてはならない。

「くそ……少々ハードだな」

愚痴のような呟き一つ、エリクは次の目標を見定め、『クファイルC10』を旋回させる。狙いは、北を指しこちらに背を向ける『フエンサー』。こちらにも主翼を開いているため、加速はこちらと比べ物にならないほど鈍い。

増速。機体正面、距離500。

激しい雨でミサイルの赤外線誘導が役に立たない以上、今は機銃に頼る他ない。もどかしさを舌打ちとともに吐き捨てながら引いた引き金は、二筋の曳光弾と化して敵機の背へと吸い込まれていった。

これで、あと4機。まだ4機。西の空に、晴れ間は一步一步と迫ってくる。

2機目の墜落を見定める間すら惜しく、次の目標へと目を奔らせるエリク。いくら性能で勝つていようと、1対4では到底低気圧の通過に間に合わない。

焦りは注意力を疎かにし、眼前以外への警戒を妨げる。

3機目の頭上を捉えかけた刹那、頭上から突如落ちて来た接近警報に、エリクの心臓は跳ね上がった。

「うおっ!?!」

強風にも勝る轟、という圧力が、『クファイル』のすぐ傍を擦過して下方へと抜けていく。雲の上からの急降下。すなわち敵の新手。予期せぬ闖入者に唇を噛み締め、エリクは操縦桿を倒して降下するその背を追った。既に敵機は眼下で機首を持ち上げ、急降下から水平へと機位を戻している。鋭角を描いていた主翼は可変翼機らしく左右へと広がり、早くもこちらを迎え撃つ態勢を示していた。

「よりによってこのタイミングで……邪魔だ!」

敵機のベクトルを読み、進行方向に放った機銃。

しかしそれを見越していたのか、敵機はひらりと身を躲し射線を回避。降下するこちらに対して右斜め上へと機首を上げ、背を狙うべく巴戦へと移行した。大柄な機体にも関わらず、その機動は先の2機とは比べ物にならない程鋭い。

「ちっ!」

軽量小型の『クファイル』とはいえ、格闘戦は得意とする所ではない。敵がこちらの右側方から回り込むのを見計らい、エリクはフットペダルを踏んで一気に加速。敵が背を捉える前に有効射程外へ逃れる一手を打った。デルタ翼機の『クファイル』にとっては、加速を活かした一撃離脱戦法こそがその本領というものである。

振り返る。

こちらの後方、目測にして距離約2700。

逃げるこちらを加速して追ってくるかと思つたが、敵機は進路そのままに、機首を上げて上昇。こちらに対し上方の優位を得るべく、その位置を変え始めている所だった。エリクはインメルマンターンで正面上方の優位を得た後、一撃離脱で斜め下方へ撃ち抜ける積りだったのだが、当てが外れたと言つていい。おそらく敵のパイロットはこちらの手を読み、咄嗟に高度を稼ぐ手に出たのだろう。

その気なら、こちらにはさらに一手上を行くまで。

エリクは操縦桿を思いきり引き、機体を急上昇。旋回の頂点で機体の水平を戻し、正面から迫る敵機とほぼ同高度に機体を占位させた。

「よーし、そのまま直進して来い……」

正面の距離を見定め、直後の機動に備えるようにエリクは操縦桿に添えた手をわずかに引く。

エリクが狙ったのは、かつて『テュールの剣』攻防戦で試みた山なり弾道による長距離射撃だった。すなわち弾丸が重く長距離では正確性に劣る30mm機関砲の特性を逆手に取り、機首を上げて機関砲を発射。自重で山なり弾道を描く30mm弾で以て間接狙撃を行うという戦法である。

雨に煙る敵の位置を見定める。

正面僅かに下方、進路変わらず。

相對距離、1800。1600。狙い打つのに絶好の距離。

——今だ。

エリクは操縦桿を引き、機首が上を向くと同時に発砲。機首下部の30mm機関砲は唸りを上げ、放たれた曳光弾は弧を描いて敵の上方から降り注いだ。

——だが、それすらも読まれていたというのか。

こちらが引き金を引いたその瞬間、敵機は機首を下げ急降下。重力加速度で瞬時に速度を上げ、『クフィル』の射線からいち早くすり抜けたのだ。それだけに留まらず、加速した敵機は速度を活かし急上昇。瞬く間にこちらの真下に陣取り、死角から機銃掃射を浴びせかけた。

「何っ!?!…馬鹿な…!」

悪態を紡ぐ間もなく、操縦桿を横に倒し、間髪入れずフットペダルを踏みこむ。



右ロール、次いで増速。真下から迫る敵に対し横を向けて投影面積を減らし、かつ加速で射線を躲すことで、辛うじて敵の射撃を回避する。こちらと十字に直交した敵機は直上で旋回し、背面のままこちらを見下ろしていた。

機敏な機動、一瞬の判断力、そして正確な射撃。先ほどまでの鈍重な『フェンサー』とも、ユークの一般的なパイロットとも、その敵機は一線を画している。一体、こいつは何なのか。

西に、晴天が迫っている。

足元から、雨のベールが晴れていく。

もはや、猶予は1分たりとも無い。

——ならば。避けようのない至近距離からの射撃で勝負を決するより他にない。

エンジンを吹かし、機首を直上へ向ける。

軽量な機体、余りある出力。真上を向いてなお、『クフィールC10』の推進力は衰えない。

こちらを見定めたのだろう、敵もまた背面飛行から急降下に入り、垂直にこちらとヘッドオンとなる構えを見せた。

正面真上、距離1000。

800。

700。

照準の中で敵機が広がる。

頭上で、雲が晴れる。

差し込む日光。映える黒。

正面、あと一步。有効射程——。

《待つて『ブレイズ』！それは味方よ！》

《『ハルヴ』、待ちたまえ！撃つな！》

「っ!?…くっ!」

味方。

撃つな。

それらが脳裏に意味を結ぶより前に、エリクは咄嗟に操縦桿を倒し機体をロール。正面の敵機も同様にロールし、2機は垂直に正面から馳せ違った。操縦桿を引いて機体を立て直す傍らで、こちらをすり抜けた『黒い機影』は主翼を広げて水平飛行に入っている。

《こちら『ソーズマン』、敵の電子戦機を撃墜。通信は回復したようだな》

「…これは…一体…?」

新たに耳に届く、聞き覚えのない男の声。

身を削る相对から我に返り、エリクは改めて下方に抜けた機体を見やった。

——つつきり増援のS U—24かと思っていたが、機体の形状はまるつきり異なっている。太い機首、より流麗なシルエットを醸し出す可変翼。そして何より、『フェンサー』とは異なる2枚の垂直尾翼。その姿は、オーシア海軍の主力機であるF—14『トムキャット』シリーズと断じて間違いなかった。機体の塗装は黒一色、尾翼端のみ赤く塗られており、よく見れば下方を同様の機体が3機、残存した『フェンサー』を駆逐すべく飛んでいる。

まさか。彼らは。

《危うい所だったが、通信の回復が間に合つて助かつたな。改めて、生還を祝福するよ、ラーズグリーズ隊の諸君。『ハルヴ』も直掩任務の全う、感謝する。ありがとう》

「『ラーズグリーズ』…。じゃあ、あれが…！」

《まったく無茶するんですから…。さ、着艦して一息つきましよう、隊長》

眼下の『トムキャット』が、その声に呼応するように翼を翻し、高度を下げてゆく。

あれが、ベルカ残党に孤軍立ち向かう『ラーズグリーズ』。その隊長機だったのか。思い返しても、その凄まじい技量と判断力は、長駆ユークトバニアから帰還した直後とは到底思えない。

『シンファクシ』『リムファクシ』の撃沈、そして名だたる戦歴。あれこそが、まさに

エースの姿ということなのだろう。

「…『ブレイズ』、か」

雲が晴れ、降り注ぐ陽光に、たゆたう水面がきらきらと光っている。

嵐が去り、見通しの澄んだキャノピーの向こうには、威容を保つ『ケストレル』の巨体と、その尾部からアプローチに入る『トムキャット』の姿。

陸上機である『クファイルC10』には着艦用装備が備わっていないのが、今はすこぶる残念だった。

## 第34話 ‘ガラム’救出作戦（前） —鎖を断ち切る者—

つんと鼻を突く航空塗料の臭いが、空気を溶かすように屋内に満ちる。

言葉で表現するならば、それは完熟したメロンを三日三晩箱に閉じ込め、それを開け放った瞬間と言うべきか。濃縮された甘い臭いは、脳天をくらくらさせるほどに強く鼻孔へ突き刺さる。迂闊に深く息を吸ったその瞬間、エリクは反射的に2、3度咳き込む羽目になった。

2010年12月17日。所はオーシア連邦東端に当たるノースオーシア州、その一都市ルーメンに居を構えるルーメン・メデイエイション・エージェンシー（L・M・A.）の航空拠点格納庫。まだ真新しい、L・M・A.のロゴが入った作業着に身を包みながら、エリク・ボルストは自らの機体を前に佇んでいた。

「よう、どうした新入りさんよ。自分の機体がそんなに心配かね？」

「ん…ああいや、手持ち無沙汰半分、かな。自分の機体はどうなるのかは確かに気になるけどね」

「ははは、念入りなこった。別に色を変えるだけだ、中身に違いはないだろうに」

「まあ、そうだが。くれぐれも左翼の『三日月』は消さないでくれよ」

作業に余裕が出たのか、不意に話を振った整備員の男に、エリクも苦笑交じりに応じる。L・M・Aに所属を移してから顔なじみとなった男だが、航空機の整備を職としてから長いのだろう、50前半と思しき風貌と節くれだった太い指、そして無駄のない手際の良さが、その職歴を仄かに物語っている。もしかするとエリク同様、別の前職からスカウトされて来たのかもしれない。

男の話に応じるように、見上げた自身の愛機『クフィールC10』。見慣れた筈のその姿は、しかし昨日までとは見違えるように異なり始めていた。

エリクの『クフィール』は、レクタ空軍時代の塗装を踏襲し、基本色として配した灰色と左翼の黄色い三日月を塗装パターンとしていた。ところが眼前のその姿はといえば、基本色は闇を染め抜いたような黒一色。垂直尾翼の端を赤く染めて識別色とし、あたかもふた昔前の夜間戦闘機のような装いへと変わりつつあったのだ。基本色が黒系統となったこともあり、左翼を彩る黄色の三日月は、前にも増して月夜の印象を彷彿とさせるようになっていた。

黒地と、翼端に配した赤色。

言うまでも無く、これは今の共闘相手である『ラーズグリーズ隊』の塗装パターンそのものである。三日月の塗装パターンと尾翼の『ハルヴ』のエンブレムこそ趣を異にしているが、それらを除けば今の姿が『ラーズグリーズ』への偽装を目的としたものであ

ることは誰の目にも明らかであった。これまで慣れ親しんだ姿から変わりつつあることに、エリクも抵抗がない訳ではない。

こうした塗装パターンの変更を提案したのは、エリクでなくL・M・Aのサヤカである。彼女曰く、今後は一層ラーズグリーズとの連携が増えてゆく。ベルカ残党の目を欺き攪乱するためにも、ラーズグリーズへの偽装はやっておいて損はない、との言い分であった。抵抗を抱きつつも道理も感じたエリクは、『三日月の塗装とハルヴ隊のエンブレムを残す』という条件で、塗装色の変更に同意し、今の姿に至るといふ訳である。

『ラーズグリーズ』という存在が、ベルカ残党にとつて脅威の象徴へとなりつつある以上、この偽装は簡単ながらこ効果的とエリクも認めざるを得ない。そしてその効果は、間もなく実施される次の作戦でも遺憾なく発揮される筈であった。

《エリク特技官、エリク特技官。第2会議室までお越しください》

「ん？おい、呼んでるぞ。お前さんだろ？」

「やっとか…悪いけどちよつと外す。ああ、尾翼のエンブレムも…」  
「残しとくんだろ？分かってるよ」

壁に備え付けられたスピーカーから、事務員らしい女の声が流れる。古ぼけた見た目にも関わらず存外に音質はクリアで、点検整備は欠かしていないらしい。

片手を上げて返答一つ、了承の意を示した整備員を背に、エリクは扉へと足を踏み出

す。

扉を出るとともに濁りのない新鮮な空気が肺に殺到し、エリクは再びむせ返りそうになった。

\*\*\*\*\*

「遅くなりました。エリク・ボルスト二等特技官、入り……って何だ、お前だけか」

「あらあらあら、つれないですわエリク様。上司のわたくしをもっと敬愛しつつ拝跪して頂いてもよろしいのですよ？ こう、跪いて私の手の甲にキスとか」

管理棟2階に設けられた、第二会議室と記された一室。新参者ゆえに一言断ってから入室したものの、中にはサヤカ一人しか人の姿は無く、エリクは露骨に口調を砕けさせた。

少人数用の会議室らしく、テーブルは部屋中央に置かれた長机二つのみ。片方に座るサヤカの前にはパソコンとプロジェクターが置かれ、既に正面のスクリーンへ画像が投影されている状態だった。部屋自体も照明が落とされ薄暗いものの、モニターの逆光でサヤカの相貌は仄かに察することができる。

「アホな事言つてないで本題だ本題。……例の作戦か？」

サヤカの冗談を頭上に躲し、彼女の向かいの席に腰を下ろす。ぎし、とパイプ椅子が軋む音、パソコンのファンが唸る音は、狭い部屋ゆえか明瞭に響いていた。



口にするは、期待を込めた読み。無言のままパソコンの反射光の中で口端を上げたサヤカの様は、それが的中だと告げている。

「ご明察でございませう。先ほどまで『ケストレル』と暗号回線を使い協議を実施。行動計画の策定と、『ラーズグリーズ隊』の協力を取り付けましたので、情報共有致します」  
「ウステイオの『ガラム隊』の救出……か。これでやっと、俺たちも攻勢に転じられる」  
拳を握り、快心の声を漏らすエリク。久方ぶりの晴れた心地に、エリクの口元は思わず綻んだ。

そもそもエリクが再び立ち上がったのも、ベルカ残党を破る手立てに希望を見出したのも、元はといえばサヤカがもたらした『ガラム隊』に関する情報に由来する。本来のガラム隊の二人はベルカ残党によって拘束され、今は別人がなり替わっているという事実。それはひとえにベルカ残党があつた二人を脅威と見なしていることの裏返しであり、二人を救出できればベルカ残党に対抗しうる強力な戦力になる筈であつた。

むしろ、それは希望的観測であるには違ひなく、救出後はもちろんのこと実際の救出ですら困難を極めるに違ひない。それを物語るように、サヤカの顔はわずかに曇つた。「ただ、状況の変化により一筋縄ではいかない情勢となつて参りました。有体に申し上げますと、時間的余裕がほばないのでございませう」

「……どういう事だ？」

「順を追ってご説明いたします。スクリーンの方も併せてご覧くださいませ」

そこで言葉を切ると同時に、サヤカの手元でカタカタとキーボードを打つ音が響き始める。

かたん、と連符がピリオドを打つのと、正面スクリーンに地図が投影されるのは同時だった。位置にしてここルーメンから東、サピンとノースオーシア州の国境付近。かつてベルカ公国軍の要衝グラティサント要塞が設けられていた、イヴレア山頂付近と伺い知れる。

サヤカの説明によると、オーシア内のベルカ残党一派は東方諸国の監視という名目でグラティサント要塞の機能を一部修復。防空設備を施しながら、実質的にベルカ残党の策謀に気づいた者たちを拘束する収容所として機能させているというのである。ガラム隊もウステイオのエースパイロット部隊設立という偽情報で所属基地から切り離されたのち、ここグラティサントに収容された——というのが、エリクがこれまで知る情報であった。

「ところが、最近のラーズグリーズの活動に警戒感を抱いたのでしよう。本要塞の収容者を、近々内陸へ移送することになったらしいのです」

「なんだって?!……万一、そうなるとすると」

「お察しの通りでございます。ただでさえ広大なオーシア領内となれば、移送先を探る

のは至難の業。まして内陸ならば、いかにラーズグリーズ隊といえども容易には立ち入れません」

「移送予定日時は？」

「明後日……すなわち12月19日、正午過ぎ。要塞の立地を考えると、回転翼機または垂直離着陸機での移送となるでしょう」

ち、と舌打ち一つ、エリクは反射的に壁掛け時計へと目を遣った。今日は12月17日。今は午後3時に差し掛かりつつある所なので、移送開始まであと48時間を切っている。

「……まずいな。鈍足なヘリで移動するのが分かってるなら、移送途中を囲んで強引に拿捕する手も取るには取れるが」

「ですが、リスクは極めて高いと言えます。移送中のヘリの中ではこちらには手出しできません。最悪、拿捕が避けられないと判断すれば、ヘリの中で『ガラム』のお二人を殺害することも考えられるでしょう。これまでのベルカ残党の致しようを見ていると、あながち無いとは言い切れませんわ」

「確かに……。だが、たとえラーズグリーズ隊を入れてもこっちはたった5機、しかも戦闘機ばかりだ。要塞の制圧なんてできる筈もない」

どすん、と椅子に深く腰を落とし、エリクは両腕を組んで天を仰ぐ。焦燥とともに鼻

から吐き出した息は強く、しかし胸の重石を溶かしきるには至らなかつた。

移送途中を奪取することができない以上、残るはグラティサントへ直接攻撃を行い制圧する他にない。しかし、戦闘機で陸上施設の制圧など当然不可能であり、少なくとも空挺部隊の協力は不可欠だろう。オーシアはおろかその他の軍からの直接支援も受けられない今、それを実現するのは不可能と言つてよかつた。

歯を食いしばり、憤懣と困惑入り混じつた右目で虚空を睨み続けるエリク。その様を眺めて却つて満足したのでらう、ふふ、とほほ笑んだサヤカは、指先で机をとんと叩いて、自らへと注意を向けさせた。

「そこで、今回の作戦と相成ります。エリク様はご存知ないかもしれませんが、我々には『ラーズグリーズ隊』以外にも心強い味方がいるのでございます」

「…味方？」

『『シーゴブリン』。空母『ケストレル』に所属する、海兵航空隊でございます。以前のハーリング大統領救出作戦でも活躍した、降下戦闘のエキスパートですわ』

「…海兵隊…そうか！あの規模の空母なら、ヘリも問題なく運用できる」

「おっしゃる通りでございます。今回はラーズグリーズ隊が実施した大統領救出作戦をベースに、地理と彼我の戦力を勘案して構築しております。こちらをご覧ください」

海兵隊、ヘリ部隊の存在。

予想だにしなかった方向から光を当てられ、エリクの胸は俄かに晴れた。確かに考えてみれば、サピンなどが所有する軽空母ならばいざ知らず、オースリアの正規空母ともなれば固定翼機以外も搭載しているのが普通である。対潜、哨戒、人命救助。多様な任務を成し遂げるのに、小回りが利き小柄な回転翼機の方が都合がいい状況というのは多いのだ。戦闘機部隊であるラーズグリーズ隊の活躍ばかりに意識が向き、補助戦力であるところの海兵航空隊の存在を失念してしまっていた。

絶望に差した光が、エリクの相貌から強張りを取り払う。

プロジェクターのファンが唸る中、エリクは残った右目でスクリーンへと目を向け、食い入るようにその表面をなぞり始めた。

まず表示されるのは、戦闘域となるグラティサント要塞の拡大図。地形はもちろんのこと、点在する施設の位置や詳細、判明している限りの防空設備が記されており、一目でその脅威と弱点が把握できる作りとなっていた。

そもそもグラティサント要塞は15年前のベルカ戦争に際し、ベルカ軍によって整備された前歴を持つている。ベルカ国境を以南の敵国から防衛するという役割を与えられたグラティサント要塞ではあったが、攻勢に転じつつあった連合軍の前にさしもの要塞もその戦力を失い、1995年5月17日の総攻撃により陥落。以降は両軍から顧みられることもないまま終戦を迎え、戦後も復興されることなく朽ち果てていった。元来

の存在意義がベルカ南部国境の防衛であり、その国境も同地域のオーシア割譲によって消滅したとあつては、グラティサントの持つ戦略的価値もまた消滅したに等しいためである。

これにオーシア内のベルカ残党が目を付け、実質的な収容所として復興させたのは前述の通りである。

もつともサヤカの説明によると、往時のグラティサント要塞と今の姿は大きく異なるという。

かつてグラティサントは5つのエリアに分かれ、それぞれの役割を分割し対応していた。すなわち敵国に最も近い南東エリアには強力なトーチカや防壁を備えた『エリア・ゲート』を配し、北東および南西には高所の利を生かし全周囲へ対空火器を巡らせた防空設備『エリア・タワー』ならびに『エリア・キャッスル』を設けて対空防備を万全とした。中央には司令塔となる『エリア・ウォール』を擁し、最後方たる北西にはVTOL機発着基地となる『エリア・ガーデン』を備え、全方位に対し空を睨む布陣としている。これが、往時のグラティサントの全貌であつた。

これに対し、現在表示されているグラティサントの様は、いかにも往時ほどの威容を誇つてはいない。

本来『門番』の役割を担っていた『エリア・ゲート』および防空の最前線である『エ

リア・キャツスル』は、小規模の観測所が設けられた他には対空火器一つなく、打ち捨てられたも同然の状態となっている。一方、中央に位置する『エリア・ウォール』は目標とする收容施設を擁している他、地上には対空火器が複数存在。北西の『エリア・ガーデン』も設備を増強され、V T O L基地としての機能を取り戻しているとのことだった。厄介なのは、北東の『エリア・タワー』も防空設備の機能が回復していることに加え、新たにV T O L機発着機能が追加されているという点だった。おまけに新設されたこちらは飛行場型の『エリア・ガーデン』と異なり、深く穿った縦穴の側面に格納庫を設けた円柱状の発着設備を有しているという。

対空兵器を減らした一方で航空戦力の増強を行っているとすれば、こちらの数も加味すれば侮れないと言っている。

「それにしても、よくここまで情報を掴めたもんだ」

「ベルカ残党の殿方も、公に計上できないような物資調達は我々に委託せざるを得ませんからね。現場のエージェントがある程度の情報を得て参りますし、発注される物資からある程度配備戦力も推測できるというものですわ」

「対空火器は？」

「対空砲が8ないし12、地対空<sup>S</sup>ミサイル<sup>A</sup>が2ないし4基。いずれも地表固定式ですわ」  
「航空戦力は？」

「回転翼機が2ないし4、STOL機が8機前後と推定されます。調達エンジンの種類から、STOL機はYaK-38の系統機と想定されますが、断定はできません」

打てば響くとはまさにこのことだろう。矢継ぎ早の質問に臆することなく、素早く正確に回答を返したサヤカの手腕に、エリクは思わず舌を巻いた。いくらベルカ残党との接触が密だからといって、ここまで各種兵器の配置や種類まで特定できるものではない。方々に派遣されているであろうL・M・A.のエージェント、そしてサヤカの手腕と奮闘の賜物だろう。何よりガラム隊の奪還は、再起を促した当初からサヤカが上げて来た提案でもある。その実現のために費やした努力は、並々ならないものに違いなかった。

「…凄いな。先進国の諜報員が務まるぞ」

「あらあらあら、お褒めの言葉光荣ですわ。折角でしたらほら、手の甲とか脚にキスして労って頂いてもよろしいのですよ？狭い密室、男女一对、薄暗い中の爛れた昼下がり…」  
「で、肝心の作戦はどうなってる？さっきの話だと、厄介なのはSTOL基地と分散したSAMだが」

くねりくねりと妙な挙動を見せるサヤカをよそに、目を再び地図へ向けたエリクが口を開く。

ざっと見る限り、STOL基地が北東と北西の二か所にある以上、当然配備機も分散



していると見て然るべきだろう。収容施設が置かれる中央の『エリア・ウォール』には対空火器を示す光点が集中しており、こちらも海兵隊のヘリがおいそれと近づけるようには到底思えない。

先のサヤカの説明を踏まえると、航空戦力は最大で14、地上の対空火器は最大で20。兵力の不利を考えると、相当の力技か、作戦による一工夫が必要などころだった。「ええ、それはもちろん抜きかりなく。簡単に申し上げれば、エリク様には困りなすます」

「困？」

「はい。作戦を立案するに当たり、最大の問題は『エリア・タワー』に新設された円柱式STOL機基地でございます。発着難易度こそ高いものの爆撃での襲撃は極めて困難、かといってこれを無視すればSTOL機の挟撃に遭うこととなります。そこで、エリク様の出番となる訳でございます」

解説の傍ら、サヤカが手元のキーボードを叩いてパソコンを操作する。

一拍遅れて、地図の上に現れるのは機体を示す複数の鏝。北東、北西にそれぞれ現れた鏝は、線の軌跡を残しながらのおおの方向へと動いていった。すなわち、これがエリクとラーズグリーズ、それぞれの取るべき軌跡という訳である。

サヤカによる作戦説明をまとめると以下の通りである。

すなわち、エリックはラーズグリーズ隊に先行して単機で空域に侵入し、北東の『エリア・タワー』を襲撃。強行偵察に偽装してすぐさま離脱し、同エリアの円柱式STOL基地から敵機を誘き出すのである。その後は適当な所まで引き付けた段階で、ラーズグリーズ隊が敵編隊を奇襲し殲滅。厄介な円柱型STOL基地を叩くことなく、その戦力を無力化するというのが、この作戦初手の主眼だった。敵機の殲滅を確認した時点でエリックは『エリア・タワー』の残存部隊を、ラーズグリーズ隊は『エリア・ガーデン』のSTOL基地を攻撃し、最後に『エリア・ウォール』で合流して対空火器を沈黙させるという手筈である。

以上の動き、そしてラーズグリーズ隊の協力があることを踏まえれば、敵戦力の殲滅はまず可能と見ていいだろう。問題はその後、ガラム隊の救出であった。

敵戦力を殲滅した時点で『シーゴブリン』より海兵隊が降下し『エリア・ウォール』の制圧を行う訳だが、前段である敵戦力の殲滅に手間取れば、どさくさの中でガラム隊の二人が殺されてしまう可能性も十分に考えられる。また、ベルカ残党の勢力圏と言つていいノースオーストラ州での作戦と考えると、敵の増援の可能性も無い訳では無かった。籠る敵、そして迫る敵。いずれを見るにせよ、いかに素早く敵戦力を殲滅できるかが鍵だと言えるだろう。

「これなら、初手さえしくじらなければいけるだろう。『ガラム』の二人が無事に救出で

できれば、こつちとしても心強い」

「わたくしは直に拝見したことはございませんが、お強い方々と仄聞してございます。それこそ、15年前の『鬼神』そのものだとか」

微笑を湛えた頬、応じるサヤカの言葉に、エリクの脳裏は記憶を蘇らせる。

・ GALM、——すなわち地獄の猟犬。その名を冠する彼らと出会ったのは、まだレクタ空軍に所属し、対ラティオ前線が一進一退を繰り返している頃のことだった。

片や両翼端を蒼く染め、片や片翼を赤く塗り欠いた2機のF—2A。機体性能を限界まで引き出し、戦闘攻撃機であることをまったく感じさせないすさまじいその技量は、今なおこの目に鮮明に焼き付いている。ラティオ西郡迎撃戦といい円卓での攻防といい、自分たちハルヴ隊が窮地となった戦場でも、彼らは勝利を導く力となってくれたのだ。

——記憶は希望と、同時に苦みをも去来させる。

思えば、あの時共に飛んでいた仲間も、もうほとんどいなくなってしまった。隊長も、ヴィルさんも、クリスも皆死んでしまい、敵となったアルヴィンやフィンセントもまたこの手で殺め、もうこの世にいない。かつてガラム隊と共に飛んだ空を知っているのは、もはや消息不明のパウラ以外にはいないのだ。

あいつは、果たして今も生きているのだろうか。

どこに居て、何を想っているのだろうか。——今も、空に在るのだろうか。

記憶のままにそこまで思いを巡らせたその時、エリクはふと、パウラに対し不思議と何ら負の感情を持っていない自分に気が付いた。

一時はアルヴィンもろとも殺してしまいたいほどに憎悪していた筈のパウラに、今更にいつたいどういう気の巡りなのだろうか。裏切りの首魁であるアルヴィンを殺した今、復讐心は満たされたということなのか。それとも元々憎悪はアルヴィンのみに向かい、パウラやフィンセントはその残照を被っていただけだったのだろうか。——あるいは、新たな信念を抱いた今、かつての報復も裏切りも過去のものとして呑み込んでしまった結果なのだろうか。

——分からない。本当に、一体どういう気の巡りなのか。

自分自身で己の心に説明がつけられず、エリクはしばし頭がこんがらがる思いに巻かれた。

「…エリク様？ どうされました？ 目が泳いでおいですが」  
「あ…いや。……………」

不意にある思いが過ぎった瞬間、サヤカの声でエリクは我に返った。どうやら少しの間ぼうつとしていたらしく、正面のスクリーンでは動き終えた鏝のアニメーションが幾度目かの再生を繰り返している。

過ぎった、その思い。

益体のない、今更何の意味も持たないであろうその思い付き。

理性は、もう捨て置けと断じている。

感情は、あくまで追えと叫んでいる。

渦巻く脳裏、正面には怪訝なサヤカの顔。

逡巡、数秒。迷い、振り返り、自らの内奥を省みて、エリクは口を開いた。

「…一つ、いいか？」

「キスでございますか？」

「いやそうじゃなく。ある人物の消息を探して欲しいんだが」

「…？とおっしゃいますと？」

「レクタ空軍准尉、パウラ・ヘンドリクス。…あー…もしかしたら偽名を名乗っているか

もしれないが」

「ふむ、ふむ。外見の特徴などをお伺いしても？」

「えーと、そうだな。髪は色素が薄くてほぼ銀色、短髪。背はちっこくて俺の胸の高さくらいか。他には…ぶつきらぼう、目つきが悪い、口も悪い、あと胸は無い」

意を決し、口に出すはパウラの消息捜査の依頼。

指折り特徴を語り上げ、エリクはまっすぐサヤカを向いた。片やサヤカはといえば、

メモ帳を開いてしきりに何かを書き込んで、ふむ、ふむ、と頷いている。ガラム隊の消息まで探り当てたサヤカならば、パウラの消息もおそらく突き止められるに違いない。なるほど。

そう言つて、サヤカは手帳を閉じ、無言のまま左の手の甲をこちらへ伸ばした。手の甲を見る。

意を図りかね、サヤカへ視線を戻す。

正面、サヤカ。小首を傾げて微笑数舜。促すように左手をもう一押し。

——ああ。

やつこのことで察し、同時に薄くため息をついて、エリクはサヤカの左手を手を取つた。

頭を垂れ、手の甲へ落とす口づけ一つ。——曰く、手の甲のキスは敬愛の証。

頭を上げたその先には、にっこりと笑みを深く湛えたサヤカの顔があった。

「ふふ、うふふ。わたくし頑張つちやいます。あ、手数料で給与の一割を引かせて頂きますのでご了承下さいませ」

「わかつたわかつた。もう今更何割でも変わらんから。：頼んだぞ」

「承りました。『ケストレル』<sup>太</sup>に乗つた気分でお待ち下さいませ」

本当に、一体何なのか。

自らの心とサヤカノ精神構造には、結局説明が見つからないまま。パイプ椅子の軋みを部屋に響かせながら、エリクは腰を上げて、再び自らの愛機の下へと向かった。

\*\*\*\*\*

《各部最終点検完了、オールグリーン》

「推進周りの立ち上がりも良好だ。許可が出次第タキシングに入る」

日は巡り、12月19日、午前9時。出撃の時を迎えたエリクの姿は、愛機『クフィールC10』の中に認めることができる。

先日の時点では塗装の途中だった機体も、今は文字通り見違えるような姿となっていた。機体の下部まで黒一色に染まり、尾翼端に赤を、左翼に黄色い三日月を配したその姿は、さながら5機目の『ラーズグリーズ』と言っている。細部は確かに異なれど、遠目にはラーズグリーズ隊への偽装を果たすには十分な外見だった。

格納庫を歩み出し、キャノピーに注ぎ込む陽光。柔らかな冬の太陽は、穏やかな明かりを以て今日の前途を祝福してくれている。

誘導員が、両手に携えた誘導棒で『タキシングOK』の意図を伝える。

旋回、巡る視界。

機体はゆっくりと弧を描き、やがて滑走路の端へとその位置を移し始める。

腕時計を眺め、エリクは出撃時刻の到来を計った。秒針は周り、1分を切り、やがて

10秒を刻み始める。

5。

4。

ブレーキ解除。

エンジン出力、微増。

発進、今。

計器類へと注いだ目を正面に向け、意識を全身へと巡らせる。

フットペダルに力を入れようとした、その刹那。誘導員は慌てたように両手を交差させ、首を大きく横に振った。

『離陸中断』。次いで遅ればせに管理棟から照明弾が上がり、サヤカが慌てた様子で走り寄ってくる。

まさか。緊急事態。しかし、一体何が起こったというのか。

「何だ!? 作戦変更か!?!」

ヘッドセットに声を向ける傍ら、機体の傍ではサヤカが口に両手を翳し、何かを叫んでいる様が見て取れる。当然キャノピー越しである上エンジンの轟音下でもあるため、サヤカの声は聴きとれる筈もない。

首を振り、次いで自らの耳をとんとんと差してその意を伝えるエリク。辛うじて伝





憤懣をぶちまけるように、拳がキャノピーを打つ。諦めが理性を覆い、絶望に心を染めてゆく。

——だが、それでいいのか。ベルカ残党に先手を打たれた。それだけでガルムの二人を、希望を諦めてもいいのか。

理性は諦念を囁く。

情動は熱を語る。行け、と。作戦による一工夫が潰えた今、残るは今まで培った技量で——力技で当たり、希望を掴めと。

サヤカへと戻した目。そしてその傍らに見えた、主翼を彩る三日月。メッサ・ルーナ

深呼吸、一つ。紡いだ声は、自分でも驚くほどに落ち着いていた。

「サヤカ。『ケストレル』へ返信頼む。『救出作戦を継続する。』『シーゴブリン』発進は定刻通り』。以上だ」

《…！エリク様！無茶です、勝機はございません！》

「整備班へ、済まないが兵装変更を頼む。増槽もいい、可能な限り武装を積む」  
《エリク様！！》

「…サヤカ。俺はもう、あいつに負ける訳にはいかない。できることを全てやって、全力を賭けて、あいつの全てに打ち勝ちたいんだ。座して諦める訳にはいかない。——行かせてくれ、サヤカ」

《……………》

キヤノピーの先で、笑みが消え、目を開いたサヤカの顔。わずかに唇を開き呆然と立ち尽くすその様は、初めて見る『不安』を表情に宿した姿だった。

あのサヤカでも、あんな顔をするところがあるとは。普段を知っているだけにエリクはその様が可笑しく、同時に心に滲む不安や恐れがわずかに薄らぐのを感じた。

——あいつもまた、人間だ。普段は飄々として得体が知れなくとも、時に不安も覚えれば、思いをねだろうともする。

ばあか。

マイクを切り、口の動きで伝えるはその言葉。読み取つたらしいサヤカの顔が、わずかにふつとほほ笑んだ気がした。

《エリク特技官、兵装換装完了！準備よし！》

「了解。全員すぐに退避しろ！間もなく上がるぞ！」

手に手に工具を持ち、整備員が機体の下から這い出しては駆け足で離れてゆく。周囲を見渡した誘導員は、改めて誘導棒を手に機体と滑走路を指した。

発進、よし。

「『ハルヴ』、離陸する！」

踏んだフットペダルが推力を増し、体をシートへ押し付けてゆく。

空は快晴、成層圏まで見渡せるほどに空は高く蒼い。  
視界の端に揺れる、サヤカの黒髪。

風になびいたそれは、瞬く間に後方へと離れていった。

## 第35話 ‘ガラム’ 救出作戦（後） —三日月（メツザ・ルーナ）Ⅱ—

「こちら『ハルヴ』。サヤカ、聞こえるか。状況に変化があれば教えてくれ」

抜けるような蒼天が頭上を覆い、通信に向けたその声すらも虚空へと呑み込んでゆく。

眼下は、徐々に険しさを増す峻厳な岩山と、その肌を覆う雪の幕。生命の息吹一つない殺風景な景色、そして僚機すらいらない孤独な空は、嫌が応にも心細さを倍加させる。空そのものは仲間と飛んだこれまでと変わらないというのに、空がこんなにも広く冷たく感じるのとは初めてのことだった。

凍天の虚空に、『三日月』一つ。仲間がいないというのは、こんなにも心細い。不意に生じたその思いは、今自らの双肩に重くのしかかった責任と、けして無関係ではないだろう。

成功の目の薄い、賭けにも近い作戦。失敗すれば、自分のもとより切り札となりうる『ガラム』の二人の命も、救援に駆け付ける『シーゴブリン』の命も消えてしまう——自分の働き一つが、十数人の命を左右するというのだから。

コクピット内の気温が下がる。体の震えは武者震いだと信じていた。

未だ返事の返ってこない通信に、エリクは再び口を開いた。怯みを拭い勇気を振り絞るためにも、今は人の熱を、息遣いを感じたかった。

「おい、聞こえるかサヤカ。応答せよ」

《失礼しました、情報集約に手間取り対応が遅くなりました。はい、こちらサヤカちゃん  
がルーメンよりお送りしております。いかがなさいましたか？》

「いつも通りの調子に戻ったみたいだな。その方がお前らしくて心強い。…情報をくれ。こっちの敵の状況と、『ラーズグリーズ』の現状を頼む」

臆面もなく人を食った相変わらずの言葉運びに、エリクの口角から思わずふつと笑みが零れる。

先ほどの出撃強行の際には不安げな様子を見せていたサヤカだが、幾分時間を置いて肝を据えたらしい。その声音には落ち着きを取り戻し、いつもの不敵さすら垣間見えるようになっていた。

ぐつと籠る、サヤカの息。その意味を、エリクはついで察さぬまま。

《…はい、まずグラティサントのベルカ残党ですが、現状動きは見られません。前回のブリーフィング以降も増援は確認されておらず、おそらく戦力は前回提示した通りかと思われまます。海兵隊『シーゴブリン』は先行して空母『ケストレル』を発艦し、あと1時

間半ほどで到着の予定です」

「了解。『ラーズグリーズ』は？」

《『アークバード』迎撃のため、こちらも『ケストレル』を発艦した模様です。『アークバード』の 대기圏接触時刻から推測すると、接敵予定位置はセレス海上空…交戦時間と往復の距離を考えると、やはりこちらの状況には間に合わないでしょう》

サヤカの言葉に応じるように脳内で地図を描き、ラーズグリーズ隊の進路を推定する。母艦『ケストレル』から見て、グラティサント要塞は南東。一方、『アークバード』が高度を下げるという迎撃ポイントはオーシア連邦西方のセレス海であり、方向としては真逆である。詳細な交戦エリアまでは定かでないものの、セレス海からグラティサントまで行こうとすればゆうに2時間はかかるだろう。ガラムの二人の移送予定が正午であることを踏まえると、到底間に合いはしない。

すなわち、戦力として数えられるのは、やはり自身ただ一人。操縦桿に力を籠め、湛えた思いは半ば無意識に言葉を強めた。

「……だろうな。今更一人なんて覚悟の上だ。『俺が』何とかするしかない」

《…エリク様》

「ん？」

《戦場を隔てても、我々には『ラーズグリーズ』や『シーゴブリン』がいます。後ろには

わたくしも。それだけは、どうかお忘れなく」

仲間。隔てても互いを支える、見えざる繋がり。

感傷や善悪よりも商魂を第一とするサヤカの口から出た意外な一言に、それも常とはまた違う優しみの籠った口調に、エリクは一瞬呆気にとられた。

だが、確かにサヤカの言う通りかもしれない。「アークバード」の撃墜はオーシア—ユークトバニア間の戦争を治める上で不可欠であり、それはラーズグリーズ隊でなければ成し遂げられない。こちらの作戦にしても、サヤカや『シーゴブリン』の支援なくてはけして成功しないだろう。

それに。

エリクは視線を翻し、愛機『クファイルC10』の左翼を省みる。かつて灰色だった主翼を彩るのは、黒地に赤い翼端というラーズグリーズ隊を模した塗装パターン。そしてその上でも存在を示す、黄金色の三日月。一時は復讐に塗れながら、今こうして往時の輝きを取り戻した、ハルヴ隊の——仲間たちの象徴。

そう。一人ではない。

背を支える者がいる。経験として、自信として、自らの中に生きる仲間がいる。

「…そろそろ敵の警戒エリアだ。通信を切る」

《了解しました、エリク様。ご武運をお祈り申し上げます》



「——ありがとう、サヤカ」

ぶつり。

応じるサヤカの声を聞く前に、エリクは通信回線を閉じた。今はなぜか、その反応を聞くのが照れ臭かったのだ。

大きく息を吸う。

止めること、数秒。吐き出し、気を落ち着け、真正面を見やる。

震えは、和らいだ。覚悟は決めた。後は、己の成すべきことをやるだけである。

「……さて」

応じる者ない益体もない眩きは、しかしけして明るくはない。元々がラーズグリーンズ隊ありきで構築した作戦である。それを一人でやるとなれば、それなりの作戦も必要だった。

もう一度息を吸い、エリクは脳内でブリーフィング内容を反芻する。

目標はグラティサント要塞跡地の中心部、エリア・ウォール。ガラム隊を収容している施設はここに設けられており、『シーゴブリン』の降下を妨害する対空兵器をあらかじめ殲滅しておかなければならない。

加えて、防衛施設として付随するのがエリア・ガーデンならびにエリア・タワー。前者はSTOL機用の滑走路を、後者は円柱状に山頂を穿った独自のVTOL機発進基地

を有しており、そのいずれもが鈍足なヘリにとつては脅威となる。すなわち、エリクは2つのV／STOL機基地と中央の対空兵器、その全てを殲滅する必要があるのである。少数で何倍もの敵を相手取るという点では、さながらかつての『テュールの剣』攻防戦を彷彿とさせる状況だった。

敵は多数、それに対しこちらはわずか1機。それを考慮し、今回は制限重量ぎりぎりにまで武装を搭載してきている。

『クファイルC10』のハードポイントは9か所。うち外翼の4か所には無誘導爆弾を1か所につき3基ずつ、計12発分搭載している。またその内側2か所には長距離対地ミサイルをこちらにも1か所に3基ずつ、計6基。残る3か所には自衛用にIR誘導式対空ミサイル2基と増槽1つを提げる形であり、概して見れば対地攻撃に特化した兵装構成といえた。これでもかと爆弾やミサイルを積み込んだその様は、元々が戦闘攻撃機上りの『クファイル』らしい姿と言えるだろう。

こちらの手札は、これで全て。おそらく昔だったら、従前の計画通りエリア・タワーへと突っ込んでいた所だろう。

だが、長くロベルト隊長の指揮の下戦い、サピンでカルロスの戦術にも触れて、エリクは不利を覆す戦略の重要性というものを徐々に身に着けるようになっていた。いかに敵を見、いかに不利を補って、勝利をもぎ取ってくるか。ただでさえ数で劣る今、戦

略の巧拙は生死にも直結する。

『戦場と敵の様子をよく観察して、弱点を見出せ』。脳裏に蘇るのは、ロベルト隊長の言葉。

「分かっていますよ、隊長……!」

考え、考え抜き、取る進路は直進。すなわちルーメンから向かう場合の最短経路となる、グラティサント要塞に北西から侵入するルートである。防衛施設であるエリア・ガーデンの真正面に当たる訳だが、ここを第一目標に選んだのには理由があった。

選定の理由は至極単純、話に聞くエリア・ガーデンが攻撃に易い条件にあつたためである。事前情報からするに、エリア・ガーデンは短い滑走路と地上施設を有する、一般的な航空基地としての枠に収まる姿だった。

これに対し北東方向のエリア・タワーは地下に円柱状発進基地を有するという特殊なタイプであり、地上へ向け爆撃を行った所でさしたる効果は上げられないと推定されるためである。発進部として地表に設けられた開口部へピンポイントに爆撃できれば一網打尽も可能だろうが、ジェット戦闘機での急降下爆撃など元よりナンセンスであるし、水平爆撃を確実に決められる自信も無い。

それならば、滑走路を破壊することで無力化がしやすいエリア・ガーデンを先行して叩く方が確実というものであろう。いずれにせよ遅かれ早かれ察知はされるのだ、一方

の数を減らしてから、逐次エリア・タワーの迎撃機と戦う方が危険性は低い。高度を下げる。

両側に稜線が迫り、岩肌が主翼を掠める。矢のように飛んで行く外の景色は、その分だけ『クフィル』が速度を孕んでいることを物語っていた。

眼前、進路を塞ぐ岩の壁。フットペダルを踏んだまま、エリクは躊躇わず操縦桿を引き、機首を上げて山脈の稜線に出た。『シーゴブリン』との連携といいガラム隊の移送時刻といい、今はひたすら時間との勝負。迂回しベルカのレーダー網をくぐることも不可能ではなかったが、今はただその分の時間が惜しかった。

「…見つかつたか！」

鼓膜を低く揺さぶる、ヴーという電子音。レーダー波被照射中を示すその警告音は、さながらベルカ残党の視線のごとく機体に纏わりついてくる。

もはや、猶予はない。爆弾を大量に積み込み重くなった機体に鞭打つように、エリクは更に『クフィル』を増速させた。纏わりつく音を振り払うように、槍で隙を穿つように、黒地の三日月は一直線に目標へと飛翔してゆく。

地平線の先。ぽつぽつと見える方形の人工物は、目指すSTOL基地の施設に違いがない。そしてそのわずかに上空、一つ二つと見える小さな影は、早くも離陸した迎撃機と見て間違いなかった。

「流石にそこまで油断しちやくないか……！」

右目が敵の姿を、亡くした左目に代わり『クファイル』のレーダーが機種を捉える。まだ距離が遠く立体感が掴みにくい、ヘッドアップディスプレイ上の表示はいずれもY a K—38『フォージャー』。かつてラテイオ前線でも見たものと同機種と見て間違いなかった。距離にして概ね3000、数秒もあれば敵基地の上空には到達できる。

前の乗機であった『ダガーA』とは異なり、『クファイルC10』は操縦桿とスロットルレバー上のボタンで兵装変更が可能でH O T A S 概念が導入されている。エリクは操縦桿を握ったまま人差し指と中指で手早くボタンを操作し、使用兵装の変更を指示した。

兵装、両主翼外部ハードポイントのU G B、2基6発。

ピピツ、という電子音とともに兵装変更が承認され、正面のH U D に投下ポイントを示す緑色の円が映し出される。速度の上昇とともにその円もまた生き物のように位置を変え、爆炎が禍を及ぼす領域を絶えずエリクに教え続ける。

距離、2500、2000。

正面の敵機がこちらへ鼻先を向け、迎撃の姿勢を示す。地表からは、早くも3機目がまさに舞い上がりつつある。

Y a K—38はセミアクティブ空対空ミサイルや高機動ミサイルを積めたか、どう

だったか。記憶に定かではないが、時間と状況を考えるとこのまま突っ切る他に無い。時間が経てば経つだけ、迎撃機が増えてこちらは不利になるのだ。

1600、1200。その後方の滑走路まではさらにプラス300。

左右両翼、別れた2機が挟撃の隊形に入る。

過去にも見た戦術。こちらの鼻先で火戦を交差させ、攻撃を阻むとともに確殺する積りに違いない。

迫る。

まるで鉄のように、左右斜めから2機が迫る。

距離1000。900。

今。

機を計ったエリクは、心中で呟いた瞬間に操縦桿を引き、同時に増槽を捨てた。

機体下方に爆ぜる爆炎。殺到する曳光弾とミサイルアラート。

敵弾で爆発した増槽が、AAMを引き付ける。焔の残滓を振り払うように、『クフィール』は機首を上げて上昇する。

がちり、と鳴る兵装ボタン。

機体から放たれ重力と慣性の虜となったUGBは、放物線を描いてYaK-38の頭上をすり抜け——滑走路上に足跡を刻み、離陸中の1機もろとも爆炎へと包んでいっ

た。

「……ちっ！まだ残ったか！」

機体を右へ傾け、エリクは通過ざまに燃え盛る滑走路を見下ろす。

UGB6発を集中的に投下した威力はすさまじく、直撃を受けた1機は跡形もなく破砕。離陸中の1機も半身を焼かれ、もはや戦闘機としての体を成さなくなっていた。滑走路も半壊し、もはや着陸に用いることは不可能だろう。

だが、それでも単機の火力では難があつたのか、焼け残つた領域には無傷の回転翼機が2機残り、そちらへ乗員が走り寄り寄る様が見て取れた。機種は定かではないが、ヘリでも種類によつてはAAMを搭載できる。以前ヘリとの交戦で辛酸を舐めた記憶を思い出し、エリクは操縦桿を引いてすぐさま反転に入った。

だが、重い。UGB6つと増槽を捨てたとはいえ、普段の対空装備より遥かに重量を増した『クファイル』は想像以上に機動が鈍い。

基地上空、正面には反転したYak-38が2機。眼下に燃え盛る基地を控える以上、互いに赤外線誘導式のAAMは使えない。おまけに、今度は向こうの高度の方がやや高く、こちらは打ち下ろされる位置にある。

ち。

舌打ち一つ、彼我の状況を見やって、エリクは被弾覚悟で基地へと向けて加速した。

位置取りで不利を被った以上、先に地上を叩いて切り抜ける他ない。

正面斜め上、2機が迫る。

眼前、投影されたガンレテイクル上には、離陸準備を始める2機のヘリ。そして取りつく基地スタツフと、焦燥に目を見張ったパイロット。

曳光弾が降り注ぐ。

火花が散り、金属が爆ぜる音が響く。

照準からヘリのブレードがはみ出る。

——有効射程距離。

引き金に力を入めたのは、わずかにコンマ数秒。

『クファイル』は30mm機関砲の唸りを以てヘリの胴体を粉碎し、そのまま上空を抜けて東へと舵を切つていった。

「まず一方……くそ、追ってくるか！そりやそうだよな！」

エリア・ガーデンの殲滅。作戦の第一段階を喜ぶ間もなく、エリクは右後方を振り返り思わず喚いた。続く目標である東側のエリア・タワーを目指すこちらに対し、残存した2機のYaK-38が後方にびったりと張り付いて来ているのだ。本来の『クファイル』の性能であれば振り切るのも容易いが、今は過剰なまでの装備重量が足を引っ張り、その距離を容易に離してはくれない。迎え撃ちたいのは山々だが、そうこうしているう



ちにエリア・タワーからも迎撃機が上がってくる事態は避けたかった。

重量が足を引つ張り、かといってこれ以上武装は捨てられない。だとすれば、取れる手はただ一つ。

「今回は出し惜しみしてられないか……見てろ！」

吐き捨てるように口にしつつ、エリクはスロットルレバーのボタンを操作し、正面脇の多目的デイスプレイを操作した。項目は、エンジンモード表示。COMBAT<sup>戦機動</sup>より、CM・PLUSへ移行——。

瞬間、速度計の針が弾かれたように振れ、ぐんと増したGに体が押し付けられる。

数分限りの推力強化機構、コンバット・プラス。制圧すべきエリア二つを残したこの段階で、早くも『クファイル』の奥の手を使うのは賭けではあった。吉か、それとも凶か。脳裏に過ぎる予断をも振り切るように、『クファイル』は速度を得て背後の2機を徐々に引き離し始めていった。

《速い……!?!》

「……!?混線か！邪魔くさい！」

唐突に耳に入る聞きなれない声に、エリクは驚き半分に口走る。『円卓』でならばいざ知らず、グラティサント周辺でも混線が生じるとはこれまで聞いていなかった。

エリクは知らないことではあったが、この現象はベルカ戦争当時から指摘されてい

た。

そもそも『円卓』は混線が多いことで知られているが、それは『円卓』周辺地域の鉱物が発する磁場の影響とされている。そしてグラティサントを擁するイヴレア山系は『円卓』から離れておりこそすれ、その実、『円卓』からウステイオ―旧ベルカ国境を形作る山脈に連なっているのである。すなわち保有する鉱物の組成も若干ながら類似しており、ここグラティサントにおいても混線を誘発する原因となっていたという訳である。ベルカ戦争では多くの時期を通して混線が多かったという報告もあるが、これは戦場が自ずと同一鉱物を含むベルカ国境に集中していたことも無関係ではない。

もつとも、混線に苛まれる当人たちにとっては知る由も、まして知った所でどうしようもない事ではあるが。

《コントロールよりエリア・タワー！所属不明機1が侵入！ただちに迎撃に当たれ！》

《現在離陸中だ！…くそ、誰だ円柱型基地を提案したバカは！同時に離陸できんだろーうが！》

《敵の情報は!?!》

《交戦したパイロットより報告。…それが…あの『ラーズグリーズの悪魔』だとの未確認情報が…》

《な…!?!馬鹿な…馬鹿な！連中がこんなところにいる筈が…!》

一氣に増えた混線が、通信回線をパンクさせる。延々と敵の通信を聞かせられるのは邪魔そのものでしかないが、それでも今回こちらは通信封鎖を行っている身である。元より手の内を見透かされる恐れもなく、むしろ敵の混乱を確認できると思えば、あながち捨てられたものでもなかった。敵の通信を聞く限りでは、『ラーズグリーズ』に偽装したこの塗装も一定の効果はあったらしい。複雑な気分ではあったが、今は僥倖だと思っておいた方がいいだろう。

眼下で地形は窪み、あるいはせり上がり、さながら蟠る竜の背のように複雑な隆起を形作っている。HUDに投影されるのは、その隆起の山頂——すなわち竜の頭に当たる位置に聳える高樓の群れ。こちらとほぼ同高度に頭をもたげるそれらは、字義通りの威容を誇示するエリア・タワーの姿であった。

目指すV T O L基地は——あった。半ば廃墟と化し荒廃した塔の根本、元々は広場であつたのだろうその空間に、不自然に大きな穴が穿たれているのがそれだろう。発着場である以上、穴は戦闘機の全長以上に大きい筈だが、上から見下ろしたその様は実際以上に小さく見える。往年のエースならいざ知らず、対地攻撃専門でもないエリクがピンポイントに爆撃するのは不可能と言っている。

「厄介なものを作りやがって。一体どうやって無力化すれば……うおっ!」

敵を探る一瞬の隙。それを突くように接近警報が鳴り響くや、間髪入れず曳光弾が雨

のように降り注いだ。

——離陸済みの迎撃機。しまった、そう口にする余裕すらなく、エリクは操縦桿を反射的に押し倒し、素早く機体をロールさせて投影面積を減らしにかかる。

主翼と、胴体後部に数発。轟、と直後にすり抜けていった機影は2つだったが、機種を確かめることは叶わない。追撃して来る機体も併せて1対4となった以上、もはや攻撃方法を迷う余裕すら失われたと言つてよかつた。

「……くそ……こうなりやダメ元だ！一発でも当たつてくれよ！」

敵機2機、こちらの左後方で旋回。続く2機の『フォージャー』とも合流。今度は4機で連携し、確実にこちらを狙つてくるに違いない。

やるしかない。

エリクは右傾した機体を水平に戻し、操縦桿を前へと倒して緩降下。HUDに映した目標の位置へ向け、機体の鼻先を向けていった。

兵装選択、残った全てのUGB、計6発。

高樓から対空砲火が身を掠める。

背後にはやや距離を置き、敵機4機が隙を伺う。

コンバット・プラスによる高推力の代償に、安定を欠いた照準が揺らぐ。

頼む。当たれ。

一瞬目を閉じ、神でも悪魔でもない何かに念じた指。力の籠った指先がボタンを押すと、重量物を放った反動で機体が大きく浮かび上がった。

弧を描き地へと吸い込まれる爆弾。息を呑み見守る敵兵。

それらを省みる暇もなく、エリクはそのままエリア・タワー上空を通過。背後に着弾の爆炎を感じながら、間髪入れずインメルマンターンを行い、爆炎に紛れるように反転した。爆弾を捨て幾分軽くなった機体、そして推力を担保するコンバット・プラスがあれば、機動力に物を言わせた急速反転も不可能ではない。

視界は黒煙と土煙に吞まれて殆ど効かない。自身の右目は何も捉えられない。

——しかし、左目に代わる『クファイル』の電子の目は、真正面から迫る4機の姿を過たず捉えた。黒煙の幕の向こうでこちらが反転したとも知らず、追撃のため直進する敵の姿を。

失ったUGBに代え、選択するのは言うまでもなくAAM2発。戦闘機にとって最も躲し難い、高速でのヘッドオン——。

「隙あり!!」

異なる目標を指した二筋の炎が、翼下から放たれ黒煙に消える。

黒煙に突入する。視界が、耳が、完全に塞がれたのはわずかな間。

衝撃波。傍らに感じたそれらは、確かに二つ。

黒い膜を突き抜け、エリクは機体を上昇させ右へと旋回させる。

同じように黒煙を抜けた敵機は、2つ。地上には爆撃の跡に加え、新たに二つの鉄の塊が炎に巻かれて転がっていた。

「2機撃墜……くそ、やっぱり穴は外したか」

濛々と立ち上る爆炎の傍ら、地に空いた開口部へと、エリクは目を移す。やはり無誘導のUGBでは直撃を狙えなかったが、それでも1発は至近弾となったのだろう、外縁の一部が崩落しているのが見て取れた。肉薄した際の対空砲火で少なからず被弾したものの、強行しただけの効果はあったと言っていないだろう。

《くそ！開口部の外縁が一部崩落！瓦礫を除去しないと後続機が離陸できません！》

《上がった所で地上は視界不良だ！どっちみち離陸できねえよ！》

《内部作業班は瓦礫の除去を急げ！地上班は消火を優先！迎撃機は何をしている！》

「連中の通信を信じてみるか。あとは……くっ！」

ともかく、これでエリア・タワーのVTOL基地は一時使用不能。そう判断し意識を逸らした矢先、耳を揺らすミサイルアラートがエリクの意識を引き戻す。

位置は——『上』。正確には横倒しのまま旋回している『クファイル』に対し、真横から直交する進路。ミサイルは既に放たれ、予想進路上へ敵は機首を向けている。

操縦桿、左、そのままロールしつつ手前へ。

コンバット・プラスにより増したGが肺腑を握りしめ、かふ、という声とともに空気が吐き出される。身軽となった『クフィル』は左ロールから体を捻るように下方へ降下し、機銃の射線を回避するとともにAAMの追撃を振り切つて逃れた。水平に保つた機体から見上げれば、攻撃してきた1機は早くも機体を捻り、こちらの進路を制するべく旋回に入っている。

速い。

——いや、よく見れば、その機体は『フォージャー』ではない。生き残つた2機のうち1機は確かに『フォージャー』に違いなく、そちらは鈍重な機体を懸命に動かし、距離2000は隔てた辺りでようやく攻撃態勢を整えた所である。

それに対し、眼前に舞う1機は、姿からして違つていた。

丸みを帯びたYaK-38とは異なる、箱型を思わせる武骨なシルエットとコンパクトな機首。コクピット真横まで張り出したエアインテークに、上翼位置に設けられた切り欠きデルタ翼。そして何より特徴的な、二股に分かれた尾翼構造。その姿は、以前カロスから聞いた特徴と酷似している。確か、名前は…。

「YaK-141…『フリースタイル』とか言つたか。よりによつて…」

今日何度目かになる舌打ちを叩き、エリクは恨めしそうに旋回する機影を凝視する。かつてカロスが話していた限りだと、YaK-141はベルカ海軍に一部配備され

ていた機体なのだという。YaK-38同様の垂直離着陸機でありながら、その空戦能力は純粋な制空戦闘機であるMiG-29『ファルクラム』に匹敵し、当時のカルロスも苦戦したということだった。もしその言う所が正しいとすれば、重いLAGMを6発も積み、かつAAMを使い果たした『クファイル』には厳しい相手だろう。唯一の勝ち目は、コンバット・プラスによる推力強化を活かし、短時間で決着を付ける他ない。

《迎撃部隊へ！ここまでコケにされたんだ。絶対に逃がすな！確実に叩き落せ！》  
《分かっている！ベルカの栄光、汚させはしない！！連携で行くぞー！》

通信の声が熱を帯び、殺気となつてこちらを打つ。エリクもまた応えるように空を見上げ、互いの距離を見計らつた。

『フリースタイル』が先に動く。翼を翻し、斜め上から急降下。こちらの進路を塞ぎ、頭上から強襲する姿勢。

進路そのまま、真正面。加速を続け、前方頭上から降り注ぐ機銃を回避する。操縦桿を引き、機首を引き起こして反転。逆さまになつた天地の中、『フリースタイル』は右旋回から急上昇し、斜め上へと上昇する変則的なバレルロールを駆使しながら、向かつて右側から迫りつつある。

旋回直上で右ロール、斜め前から交差する敵機との擦過は一瞬。互いに機銃を放つ余裕もなく、衝撃波だけが機体を揺さぶる。右下方旋回で機体を捻る中、後方警戒ミラー



の中で、敵は早くも旋回を終え、こちらの背を捉えていた。

やはり旋回性能が物をいう格闘戦では、『クファイル』ではYaK-141には敵わない。

「ち……機体性能だけじゃないな。腕もいい」

右下方旋回で切り抜けたまま、エリクは敢えて縦旋回する愚を犯さず、そのまま低空を加速する軌道を選んだ。高度を失った今、たとえ縦方向の格闘戦を挑んでも勝敗は明らかである。——それならば、何も相手の土俵に立つことはない。一度距離を離し、『クファイル』が得意とする一撃離脱で戦端を開けばいいだけのことである。かつてカルロスも言っていたではないか。『手札を数え、強みを活かせ』と。

《くそ、『ラーズグリーズ』め！脚の速い……！》

《少佐！エリア・ウォールより緊急入電！『ラーズグリーズ』4機がオーシア北部を西へ向かいつつあるとのこと！目的は同志の『アークバード』迎撃と思われまます！》

《何!?!…ならば、こいつは……!?!》

《偽装の別動隊の可能性があります。『ラーズグリーズ』ではありません!》

「……あつちも向かったか！頼むぜ『ラーズグリーズ』。そのためにこっちは一人で骨折ってんだ！」

不意に耳に入った敵の通信は、朗報と言つていいそれ。どうやら『アークバード』へ

向け彼らも発進し、交戦地点へと向かいつつあるらしい。

彼らならば、おそらくやってのける。不思議にも、エリクは何ら疑うことなくそう感じた。不慮の接触で交戦となった彼らの隊長——『ブレイズ』の技量を目の当たりにしたためか、それとも彼らの絆を感じたゆえか。理由は我ながら定かではないが、いずれにせよその感傷の行く先は一つである。

彼らは、役割を果たしている。なら、俺も果たそう。今すべきことを、目の前の敵を落とし、『ガラム』を救うことを。

距離を離れた『クファイル』が、斜め上方旋回で反転する。流石にコンバット・プラスの推力強化によるところは大きく、距離はゆうに2000を隔て、敵の機動が具に捉えられるようになっていた。いかに運動性が高くとも、軌道を読みつつ高速で距離を詰めれば、勝機を窺うことは十分可能な筈だった。

敵機、旋回を終えこちらへ相対。高度はややこちらが上、ヘッドオンで戦況を五分に戻す姿勢と読める。

操縦桿は左、のち手前。左斜め上昇で矛先をいなすように見せかける。右下、敵機は呼应し、さらに機首を上げて上昇に入りつつある所だった。すなわち、速度が落ち、機動が単純化する瞬間。

「そっだ!!」

瞬間、エリクは操縦桿を前に押し倒し、同時にフットペダルを踏みこんで加速。背面飛行のまま硬度を急速に下げ、下端で機体を捻り上げて無防備な敵機の腹を眼前に収めた。距離にして900、あと一步で機銃の射程に捉えられる好機。

慌てて『フリースタイル』が機首を下げ、背面飛行からロールに入る。しかし、急降下で速度を得たこちらに対し、その動きは明らかに鈍い。ガンレティクルの中で敵は徐々にその姿を広げ、有効射程へと距離を狭めていく。

あと200。

100。

80。

——接近警報。

「…何っ!？」

瞬間、唐突に割って入った火線によって、エリクの視界は幻惑された。ぶれる照準、咄嗟に取った回避行動。『クファイル』は射撃位置から外れ、その眼前を別の機影が横切っていく。

——敵の僚機の『フォージャー』。

「…いつ…！邪魔だ!!」

いくら重量が重くとも、『フォージャー』と『クファイル』では機動性に雲泥の差がある。

エリクは『フリースタイル』の下方を抜けるやすぐさま機体を左に旋回。背を見せて逃げる『フォージャー』の姿を照準に捉え、躊躇わず引き金を引いた。

殺到する、30mmの曳光弾。黒煙で煤が付着したキャノピーの外で、『フォージャー』は小さな翼を虚空に散らし、きりもみを描いて墜ちてゆく。

その姿が岩肌に呑み込まれ果てるのと、エリクが自らの失態を気づくのはほぼ同時だった。

警告の電子音、点滅する多目的ディスプレイ。投影された表示曰く、『コンバット・プラス：作動限界』の文字。

「……まず……」

和らぐG、ぐんと落ちた速度。みなまで見定める余裕も無く、エリクはフットペダルを全力で踏んだまま、機首を南西方向——すなわちエリア・ウォールの方向へと向けた。『クファイル』が備えるコンバット・プラス機構は、エンジンの推力を強化する反面燃料消費も増やし、かつ短時間しか機能が持たない。燃料の問題はこの際置いておくにしても、重いLAGMを積んだままこれ以上の推力上乘せに頼れないのは致命的である。現にこちらの後方、急に逃げの一手を打ったこちらを追い立てるように、『フリースタイル』は徐々に距離を詰めて来ていた。

このまま落とされる訳にはいかない。かといって、エリア・ウォールの対空兵器を排

除しなければならぬ以上、LAGMを捨てる訳にもいかない。——ならば、できることはただ一つ。

追撃による被弾を覚悟のうえでひたすらエリア・ウォールに向かい、いち早くLAGMを撃つて身軽になる他にない。

それまで果たして、この機体が持つかどうか。

《なるほど…。確かにこれは『ラーズグリーズ』ではない。本物ならばこれほど無様に逃げ回る筈はない》

「ち…好き勝手言いやがって」

《その左翼の塗装も、似たものを新聞で見た覚えがあるが…何と言ったか。いずれにせよ、往年のベルカ空軍と比べれば有象無象でしかない。…沈め、偽物》

まるで宣告のような言葉、そしてそれに重なった銃声。運動性の差はいかんともし難く、背後から殺到する銃撃は正確に『クフィル』の機体を穿つてゆく。加速を重ねてもなお『フリースタイル』は追いつがり、ヨーイングでの回避運動もほとんど意味を成してはくれない。キャノピーにはヒビが入り、機体後部から破片が散り、至近弾が機体内部に破片を散らす。逃げ惑うしかないその様は、まさにかつての『テュールの剣』における戦闘とうり二つであった。

だが、まだ落ちる訳にはいかない。ひたすら囷として逃げれば良かったあの時と違

い、今は成すべき役目がある。あの時とは違い、今の俺には多くの戦場で見て学んだ技術が、そして信念がある。

まだ、落ちる訳には、いかない。

目を走らせるは、彼方に見え始めたエリア・ウォール。HUD上の距離。そして眼下の地形と、左側を流れる岩の稜線。

エリクは操縦桿を左へ倒し、迫る岩肌へと機体を向けた。

一瞬、火線が離れる。後方の敵が息を呑む。

衝突する直前、操縦桿を倒し右ロール。横向きのまま機首を引き上げながら引き金を引き、放射状に機関砲を撃ち放つ。岩肌に吸い込まれたそれらは、崩落しないまでも土煙を巻き上げ、わずかながら視界を幻惑した。

《…小賢しい真似を！》

『『ここ』の使い方だよ！』

指先で頭をとんとんと叩きつつ、エリクは土煙を突っ切ってゆく。後方では『フリースタイル』が、咄嗟にホバリングを駆使して土煙を避け、素早く進路を変更する様も見て取ることができた。

煙幕という、彼らにとっては小賢しい真似といつていい戦法。しかし今は、窮地のエリクにとって及ぼした効果は絶大であった。

後方に若干ながら敵は引き離され、正面にはエリア・ウォールが聳える。距離にして、2400。長大な射程を誇るLAGMが威力を發揮するには、十分に過ぎる距離。エリクは手早く兵装を変更し、ミサイルシーカーが目標を見定めるのに合わせて、続けざまにボタンを押した。撃ち放つは左右両翼から2発ずつ、計4発。

「行けえええ!!」

煙の尾は遺跡の中ほどに吸い込まれ、やがて炸裂の焰を上げる。重量が重い分炸薬量を増したLAGMの威力は伊達ではなく、目標となった？地対空ミサイル《SAM》は隣接する？対空砲《AA》ごと、その基部からもぎ取られ谷底へと落下していった。

《敵機、エリア・ウォールに到達……くそ、何をしている！対空砲火急げ！》

《こちら『シーゴブリン』。盛大にやってみただな。『ハルヴ』、状況は？》

「あと5分待つてくれ！残りのAAと迎撃機をすぐに殺る！」

《『ハルヴ』……レクタの『三日月』………舐めるなああ!!》

対空砲火を越え、エリア・ウォール上空を通過し反転。定刻通りに近づきつつある『シーゴブリン』へ通信を返し、エリクは機体を翻した。残る目標は、地表にAA3基。そして、斜め上空を迂回しこちらへ殺到する『フリースタイル』。

フットペダルを踏む。操縦桿を引く。

——軽い。対地兵装を捨て、身軽になった『クファイル』は本来の力を取り戻しつつあ

る。

打ち下ろされる射線に対し、ロールして投影面積を減らした『クファイル』は、曳光弾がその身を捉える前に射線を振り切つて『フリースタイル』の下を抜けていった。向かう先は、言うまでもなく残存したA Aが天を指すエリア・ウォール。

《な……先ほどより、速度も機動も……》

振り切るは『フリースタイル』、そしてその主の声。

機体の目が目標を捉えるや、放たれた2基のL A G MはA Aを直撃。うち1発は隣接する1基ごと爆炎の渦に呑み込んで、崩落する石壁とともにエリア・ウォールは防空拠点たる機能を失った。

残るは、呆然と空に舞うY a K—141が1機。『自由』の名を冠しながら、妄執と言う鎖に縛られた灰色の翼、ただ一つのみ。

《馬鹿な……。…我々は15年待つたのだ。——待つたというのに。それを、こんな、……こんな……！》

エリア・ウォールを過ぎるこちらに対し、後方から迫る声、そして敵機。もはや得意の格闘戦をかなぐり捨て、『フリースタイル』は猛進し、機銃掃射を以て突貫してくる。

操縦桿を引き、空気を孕んだ機体は軽い。機銃以外を捨て身軽となった『クファイル』は、まるで跳ねるように射線を躲し、槍の穂先のような『フリースタイル』の突進を右



下へといなした。操縦桿を引き、右下へ旋回して、照準に捉えられたのはYaK—14 Iのкокピット。ホバリング機構を活かして『フリースタイル』は空中に静止したまま回転し、パイロットは真つ向からこちらを見上げている。

「復讐の気持ちも、俺には分かる。：けどな、その激情も無意味さも、教えてくれたのはあんたたちだ。——復讐に吞まれた者として、俺はあんたらを止める。鎖を断ち切り、復讐を止めて、『あいつ』に勝ってみせる——！」

《……—！》

宣言は敵へ、そしておそらく自らへ。

機関砲の唸りは光軸となつて灰色の翼を穿ち、その心臓部たるエンジンを破砕して、『フリースタイル』の姿を黒煙に吞み込んでいった。

《……三日月、か……》  
メツザ・ルーナ

機体が爆炎に消える直前、耳に届いたのは謳うような男の声。灰色の残滓すら黒煙と土煙に霞み、陽光は変わらず地を照らしている。15年前の傷跡が深い遺跡の石壁も、満身創痍となった『クファイル』をも、全てを平等に。

《『シーゴブリン』より『ハルヴ』、敵脅威の殲滅を確認した。これより制圧戦に入る！各員降下用意！》

《見てたぜ、なかなかやるなアンタ！サシならウチのスノー大尉といい勝負だぜ、サシな

らな》

「はは、そりやどーも。早くしてくれ、俺ももう持たないからな」

エリア・ウオール上空に留まるヘリから、兵士が綱を伝って降下してゆく。これからまだしばらくは、遺跡内部での制圧戦が続くのだろう。戦場の主役は、彼らへと移ったのだ。

薄く陰り始めた彼方の黒煙、被弾により傷だらけとなった『クフィールC10』。かつての『テュールの剣』を巡る戦闘と類似しながら、愛機を全うしえた結末に、エリクは天を仰いで微笑んだ。

主翼、胴体、果ては機首。至る所に傷跡を受けながら、左翼の『三日月』だけは、黄金色に変わらぬ光を放っていた。

## 第36話 Return of the Demon

鈍色の薄雲が太陽を覆い、周囲に聳える連峰を陰鬱なモノクロに染めている。

気温、わずかに4℃。靴裏のアスファルトから体まで冷気が昇ってきたかのような寒さだが、これでも12月下旬にしては暖かい方なのだという。レクタの平地に育ち、真冬でさえ積雪はごくまれにしか見たことのないエリクには、到底信じがたい話だった。フライトジャケットの上にコートを羽織り、さらにマフラーまで巻いているにも関わらず、衣服の隙間から忍び込む冷気によって早くも体は音を上げ始めている。

ああ、ヴィルさんの淹れてくれたココアが飲みたい。今日ばかりはミルク多めに、ストープの効いた部屋で温まっていたい。

不意に去来した叶わぬ願いを胸に押し込め、エリクは襟をかき合わせながら、冷たい空気を吸い込んで大きく吐き出す。立ち上る白い吐息は凍空に昇り、やがて鈍色の空に消えていった。

時に、2010年12月27日。ウスティオ共和国東部の山岳地帯に位置する、ヴァレー空軍基地。対ラティオの最前線たるこの地に、エリクの姿はあった。

「レイモンド！ 何だよ久しぶりだな、10年ぶりくらいか？ クロウ隊の頃以来じゃない

か！」

「おう！あんたも生きてたか。：おおダニエル、元気そうじゃないか！フェンリル隊は健在か？」

声へと視界を巡らせれば、集った人々の姿。大きく見渡せば、それは2人の人物を中心に、それぞれ二つの輪を描いているようにも見える。

一方の人の群れの中心にいるのは、ガルム隊の2番機であるレイモンド・レッドラップ。かつて『クロウ2』を名乗っていた頃にこの基地に所属していた彼には知己も多いのだろう、人だかりの中でも親しげに言葉を交わしている。

「へー、あんたが今の『ガルム1』ね。エースパイロット部隊に異動になったって噂で聞いたけど。：えっ？あのPJの甥っ子!?マジかよ！」

「もしかして趣味ポロ？」

「基地に彼女いるとか？」

「この戦争が終わったらプロポーズ予定？」

「あの…ええと、皆さまのことは叔父パトリックからかねがね…」

片や、ガルム1ことパスカル・ジエイク・ベケットは、怒涛の質問攻めに遭いしどろもどろ。少しずつあとずさりしながらも、変わらぬ実直な態度でそれぞれの質問に答えていた。

レイモンド中尉に聞いた所、パスカル自身はこの地は初めてだというが、その叔父に当たたる人物が15年前の戦争の際に所属していたのがこの基地なのだという。当時パスカルの叔父はムードメーカーとして親しまれていたらしく、現在でも当時の旧知が未だに多く残っていたのだろう。到着早々にパスカルがどやどやと囲まれる羽目になったのも、いわばその叔父の面影が成したものに違いなかった。

多くの人々に囲まれる二人、時折上がる笑い声。

その向こうに覗く影——ルーメン・メデイエイション・エージェンシー（L. M. A.）のサヤカにちらりと目くばせし、エリクは密かに身を翻して人いきれからそつと離れた。意を察し、同じように輪を外れたサヤカと身を寄せたのは、駐機したL. M. A.の輸送機——C—1A『トレーダー』の陰。

「掴みは上々、という所でしょうか。ガラムーの再来として有名なパスカル様に、かねてからお知り合いも多いレイモンド様。信頼を勝ち取るには十分でございましょう」

「だが、肝心なのはこれから話だろう。連中をさっさと説得して味方に引き入れないと、こつちが袋の鼠になる。俺も、今はほとんど戦力にならないしな」

「またまた、ご謙遜を」

雑談もいいが、のんびりしている暇は無い。

そう暗に伝えたかったエリクだったが、くすくすと微笑み冗談を返すサヤカは、さし

て不安を抱いているようには見えなかった。

エリクも、自身が——正確には乗機が普段通りの状態ならば、サヤカと同じく楽観していた所だろう。今回のエリクの危惧の源は、まさにその点。すなわちC—1Aの傍らに駐機する、今回の乗機にあった。

L. M. A. の所属コードを記した他は、灰色一色の無個性な塗装パターン。『ミラージュⅢ』よろしく半円のエアインテークと、寸胴な胴体の割に小さな主翼。そして小鳥の嘴を思わせる小ぶりの機首と、帽子の鰐を下げたようにやや前傾したキャノピー。

YaK—38M『フォージャー』。ここヴァレー空軍基地へ赴くに当たり、エリクが搭乗してきたのは、本来の乗機『クフィルC10』ではなく、この機体であった。

原因は、言うまでもなく先日のがルム隊救出作戦である。作戦上の齟齬で単機ベルカ残党の拠点を襲撃する羽目になったエリクは、無事作戦を成功させた代償に、機体に予想以上の損傷を被る結果となってしまうのだ。大きな怪我を負わなかった事が奇跡的なほどに『クフィル』が受けたダメージは大きく、しばらくの間作戦行動はままならない状態となっていた。

しかし、当面対ベルカ残党戦は続く以上、戦力の空白を開ける訳にはいかない。

その点を考慮したL. M. A. が用意した機体こそが、このYaK—38Mであつ

た。出自はといえば何とてはない、先のグラティサント要塞跡地強襲に際し、中央部『エリア・ウォール』に駐機されていた1機を海兵隊『シーゴブリン』が奪取したものである。

幸い、L・M・Aは傭兵やラティオ向けに同機の部品調達を請け負うことも多く、それ相応に余剰も蓄えている。若干の消費さえ惜しまなければ、飛行可能な状態に回復させることは決して不可能ではなかった。

だが、限られた時間で慣熟すべくエリクは飛行演習を繰り返したものの、乗れば乗るほどにエリクは不足を感じずにはいられなかった。一言で言えば、機体が『重い』のだ。原因は、垂直離着陸機黎明期に開発されたがゆえの、『フォージャー』特有の構造にある。

と言うのも、外見や機能が似たAV-8『ハリアー』シリーズは同一のエンジンが離着陸と飛行時の推進力を賄うのだが、『フォージャー』の場合は垂直離着陸に用いるエンジンと飛行に用いるエンジンがそれぞれ別々なのである。言い換えればメイン出力を担うエンジンの他に『垂直離着陸にしか使わない余分なエンジン』も抱えているということであり、これが原因となって機体重量の増加、ひいては運動性や搭載能力の低下をもたらしているのであった。

結果、最高速度は遷音速がせいぜい、旋回性能も良いとは言い難く、制空戦闘は極め

て困難。高速戦闘を得意とするエリクにとつて最重要項目である加速性能に至つては、その自重と非力なエンジンの影響で悲惨の一言に尽きる。肝心の兵装も、火器管制システム<sup>F</sup>を持たないため短距離用の赤外線誘導式空対空<sup>A</sup>ミサイル<sup>M</sup>しか運用できず、高速・軽快なデルタ翼機に慣れたエリクにとつては極めて扱いの難しい機体であつた。『クファイル』が修復されるまでの間に合わせの機体とはいえ、これではエリクならずとも不安を覚えるのは道理であろう。

「ともかく。急ぐ必要があることには変わりない。例の作戦のためにここで素早く味方をかき集める必要がある。ここでしくじれば、全部なし崩しだ。…そうだろ？」

「はい。そのために、私たちは彼らをここまで送り届けたのですから。あの円卓の鬼神の再来、PJ：パスカル様にこの地で旗を振って頂き、本物の『鬼神』になつて頂くために」

「なら、そろそろ切り上げさせた方が良くないか？このままじゃ埒が…」

「大丈夫、大丈夫でございます。…ほら、噂をすれば。パスカル様が始められるみたいですよ？」

サヤカの言葉に応えるように、機を見計らつたレイモンドが大きく手を打ち鳴らし、一同の注目を集める。翼の陰から身を屈めてそちらを見ると、どこから持ち出したのだろうか、空きコンテナを台代わりに、一段高い所から周囲の傭兵を見下ろすパス



カルの姿が目に入った。緊張した面持ちだが、その目の奥は落ち着いている。

来歴、エースとしての立場、そして己に集う信望。そのすべてを呑み込んで、成すべきことを宿した瞳が、そこにはあった。

「皆さん、しばし聞いて下さい。お伝えしたいことがあります。この戦争の真実。そして、愛する祖国や、周辺諸国の未来について。：私は——」

さながら演台に立つ俳優のように、静まった舞台を前にしたパスカルが口を開き始める。作戦の第一段階は、彼の口によって今口火を切られたのだ。

エリクはその声に耳を傾けながら、目を閉じてしばし脳裏に反芻した。

オーシアとユークトバニアの致命的な対立。それのみならず、周辺諸国で煽られた戦火。それらを鎮め、ベルカの策謀を打ち砕くための作戦。その全貌を——。

\*\*\*\*\*

「という訳です。パスカル様には、アイドルになって頂きます」

「…は？」

突拍子もないサヤカの言葉に、3人の男が素つ頓狂な声を上げる。

時をしばし遡り、2日前に当たる12月25日。世間がクリスマスで賑わうこの日、L・M・A・社屋の小会議室にはサヤカとエリク、そして無事救出されL・M・A・に保護されていたパスカルとレイモンドが集っていた。

ベルカ残党の策謀を阻止するべく、今後はどう動いていくべきか。その協議の真つ先に飛び出たのが、先のサヤカの言であった。

「……あの、すみません。理解が追いつかないのですが……」

「……なあ三日月の。このねーちゃん意味が分からないんだが」

「じき慣れますよ、だいたいいつもこんな感じですから」

きよとん、と困惑気味に目を丸くする。パスカル、不審者を見る目を隠そうともしないレイモンド。そして諦め……もとい悟つたように目を細めるエリク。三者三様の反応ながら、それらからは共通して目の前の女を理解できないという思いが滲み出ている。

にっこり。

まずは掴みはばつちり、そう言わんばかりに笑んだサヤカは、一同を巡り回してから口を開いた。

「失礼いたしました。アイドルと言うのは、その本来の意味である『偶像』になって頂くという意味。言い換えれば、手っ取り早く反ベルカの戦力をかき集めるべく、パスカル様には名実ともに『ガラム』になって頂きます」

「……どういう意味ですか？」

「順を追ってご説明いたしましょう。まずは、この数日、水面下で起こっている出来事から」

くすくす。目を細め、口元を隠すように微笑むサヤカの様には、エリクは思わず蠱惑的な印象を受けた。知る者が知らざる者に知を与える優越感、それだけでなく、男の命運を掌にして楽しむような微笑み。年齢差による余裕もあるのだろうか、殊年少であるパスカルとの会話の際には、そのような印象が時折透けて見えて来る。

口を開いたサヤカは、まず今に至る背景——12月19日のガラム隊救出以降の経緯から説明を始めた。

最も大きな動きは、空母『ケストレル』に拠っていたオーシアのハーリング大統領が、満を持して海兵隊とともに首都オーレッドへ帰還したことである。目的は、言うまでもなく終戦に向けた大統領としての権限の回復。すなわち主戦派の副大統領や議員、ベル力残党の意を受けた関係者を拘束し、行政府としての足場を固めることであった。ハーリング大統領の首都帰還は12月22日の夜陰に乗じて行われ、25日現在では若干の混乱を来たしつつも、概ね主導権の奪還は成されつつある現状にあるという。

もう一つの動きとして言及されたのは、ユークトバニアの元首であるニカノール首相の救出に成功したことである。オーシア同様、ユークトバニアでも穏健派のニカノール首相が監禁され権限を奪われていたのだが、これを察知したユーク穏健派将校はレジスタンスや協力者と連携して解放を画策。ラーズグリーズ隊にも協力を仰ぎ、12月23日の払暁にはニカノール首相の救出に成功したという。

現在ニカノール首相は空母『ケストレル』にあり、ハーリング大統領の足場固めが終わり次第首都オーレッドに向かう予定となっている。オーシア首都のオーレッドで両首脳が会談するとともにベルカ残党の策謀を暴露し、一気に終戦まで持ち込もうというのが、『ケストレル』に拠る一同が描いた絵図であった。

当然、東方諸国で起こっている三つ巴の代理戦争も抑えなければ、本来の意味での終戦とはなりえない。それに向けても事態は既に動いており、ユークトバニアは前述の穩健派将校らの手でいち早く首都を制圧。同時に東方諸国の同盟国であるラテイオおよびファトへと連絡将校を派遣し、水面下で停戦に向けた合意形成を行っているという。またサピンに対してはL・M・Aからサピン傭兵のカルロスへ、カルロスから正規軍のニコラスへ、ニコラスから軍上層部へと徐々に情報が伝達され、事態を静観しているとのことだった。ベルカ残党の動きが鈍いのが些か不安ではあるが、ともかくも事態は収束へ向けて急速に動いていると言つていい。

「ところが、オーシア同盟のウステイオとレクタに対する働きかけは、現状あまり進んでおりません」

論調をそう一変させながら、サヤカは続ける。

理由は単純、ハーリング派がオーレッドの制圧に手間取つたため、同盟国に働きかけを行う時間的余裕が無かつたのである。25日時点ではコンタクトを取り始めている

ようだが、現場の部隊まで終戦の意思が下りるのは当分先になると判断せざるを得ない。一方の勢力でのみ終戦に向けた意思形成ができていないというのは、一歩間違えれば全てが台無しになる危険すらも孕んでいる以上、呑気に待つのは得策ではないと判断された。

「そこで、『ケストレル』のピーター様の案を元に、この作戦が考案されました。カギは15年前の英雄、ガルム1こと『サイファー』の伝説。そしてパスカル様の存在です」  
「私の…？一体どういうことですか？」

「エリク様。『サイファー』…ガルム1はご存知ですね？」

「？…ああ、まあ人並みには。15年前の戦争で敗色濃厚だったウステイオを立て直し、ベルカを押し返して勝利に貢献した伝説の傭兵、だろ？なんで今更…」

話の矛先が向きどきりとした様子のパスカルをよそに、サヤカは唐突にエリクへと話を振る。

『サイファー』という名では今いちピンと来ないが、ガルム隊としてならばエリクも一般常識やロベルト隊長からの話の中で聞き知っていた。もつとも当時のガルム隊はいずれも消息知れずであり、今のガルム隊が当時の人間と違うことは周知の筈である。感慨としては何を今更、というのが正直な所であった。

「そう、言わずと知れた対ベルカ戦争を勝利に導いた伝説の傭兵。それが『ガルム1』で

あることは、レクタ人であるエリク様もご存知です。まして、ウステイオの人々にとつては近い記憶であり、その印象はより鮮烈なはず。それならば」

そこで言葉を一旦切り、サヤカは一同を見渡した。

不信心も消え、食い入るようにサヤカを見つめるレイモンド。熱を帯び、頬を紅潮させるパスカル。エリクもまたサヤカの狙いに思い至り、掌に汗が滲むのを禁じえなかつた。

サヤカの、ピーター参謀の狙いは、つまり。

「——それならば、パスカル様がヴァレー空軍基地に降り立ち、直接ウステイオ軍の前でベルカ残党の策謀を暴いて、対ベルカ残党戦の協力と諸国との停戦を呼びかければ。それは人々に15年前の伝説を想起させ、意思を一つにする強力な力となりうるのではないでしょうか」

「……つまり、私が名実ともに『ガルム』になる、というのは……」

「そう。パスカル様は『ガルム1』の名そのままに、ウステイオを支えるエースパイロットと言う存在から、伝説を再現し、人々の力を結集させるための『象徴』になって頂きます」

『いかがですか?』

そう続けたサヤカに、パスカルは息を呑んで俯いた。

——あまりにも、酷だ。

エリクはそう不安を覚えざるを得ない。自身にも覚えのあることだが、名声を背負うエースという立場は、ただでさえ重圧がかかるものである。その戦果が大きくなるほど、その信望が大きく膨らむほどに、その重みは加速度的に増えてゆく。レクタという小国の一エースでさえそうだったのだ。あまつさえ伝説の名を継ぎ、精強を以て知られるウステイオを牽引するパスカルが、さらに『象徴』という重圧を背負ってしまったえば、そのまま潰れてしまうのではないだろうか。ようやく20を越したばかりのパスカルには、あまりにも残酷な役割である。

「サヤカ、いくらなんでもそれは…」

「いえ。やらせてください、サヤカさん」

「…パスカル大尉!？」

抗弁しかけたその矢先、続いたのは芯のあるまっすぐな声。

顔を上げ、サヤカを見据えるパスカルの目は痛々しいほどに真摯さを宿し、迷いの陰すら纏ってはいない。

『ガルムー』を名乗って戦ってきた以上、これは私にしかできない役割です。私にはその責任がある。…叔父は先代『ガルムー』を敬愛し、最期には身を挺して彼を護り、散つていったと言います。その『ガルムー』という存在に私かなれるのです。…光栄なこと

だと思えます」

「PJ……。つたく、馬鹿だお前は。そんな馬鹿正直な所まで叔父さんに似やがってよ。

——馬鹿だぜ、本当……」

言葉とは裏腹に鼻をすすり、涙を拭うレイモンド。パスカルの言葉に先代や叔父の面影を見たのだろうか、そのまま言葉を詰まらせ、しばらく声にはならなかった。15年前のガルトム隊を知り、そして今も僚機の血縁を知る数少ない存在のレイモンドには、思う所もきつと大きいのだろう。覚悟を決めたパスカル、面影に胸を詰まらせるレイモンドを前にすれば、エリクにはもう語る言葉は無かった。

「では、決まりですね」

「ぐす……。あ、ちよつと待ったねーちゃん。何でヴァレー空軍基地なんだ？俺たちの元の所属はモリスツエフ空軍基地だ。知り合いが多いし、そっちの方が糾合するのも簡単だろ？」

言葉の合間に勢いよく鼻をかみながら、レイモンドが疑問を口にする。言われてみれば、確かに二人はヴァレーと縁は無い。地理的にベルカに近いのは確かにヴァレーだが、その他にも理由があるのだろうか。

「いい質問です。理由は大きく分けて3点でございます」

「3つ？」



「はい。一つには、モリスツエフと異なり、ヴァレーは傭兵を中心とした空軍基地でございます。指揮系統に絡まれる正規軍と違い、傭兵でしたらある程度の裁量で独自行動が可能ですから、いち早く戦力を集めるには妥当な拠点だと判断されたためでございませぬ。二点目には、ヴァレーは先代『ガルム隊』の本拠地であり、その伝説の始まりの地でもあります。ここでパスカル様が旗を掲げるとは、折しもガルムの伝説をなぞる結果にもなり、皆さまの思い立ちもきつと違つてくることになりますゆえ」

「なるほど…。最後の一つは？」

「はい。それは、ガルム隊の伝説を飾るとある機体が、ヴァレー空軍基地に眠っているためでございます。先代が去つてからも、丹念に整備と維持が続けられ、ガルムの再来を待つ機体。パスカル様には、ガルムを『ガルム』たらしめる、その錦の御旗を振つて頂く必要があります」

サヤカによつて説かれる、ヴァレーに眠るといふ機体の来歴。さながら王者を選定する剣のような、伝説の中の逸話にも似たものだが、それでもエリクは名状しがたい胸の高鳴りを覚えた。まるでそれは、パスカルの——ガルムのためにしつらえられた舞台のようではないか。

汗が滲み、喉が渇く。

暖房の効き過ぎだろうか。ふと、エリクはそう思った。

\*\*\*\*\*

日を跨ぎ、12月28日朝。

前日から一転し、快晴の清々しい天候となったが、そこで傭兵たちと話し合うパスカルやレイモンドの顔は明るくない。真冬にも関わらず汗を流し、焦りが滲むその相貌は、計画が予定通りに動いていないことを如実に物語っていた。

率直に言つて、状況は思わしくない。

ベルカ残党の策謀を暴露し協力を募つたのだが、協力を申し出たパイロットはヴァレー基地の1/3にも満たないのである。

それとなくエリクも聞きまわつてみたものの、理由は様々だった。

曰く、そもそもベルカ残党とかいう陰謀論が信じられない。曰く、仮に本当だった所で、何で契約外の仕事までやる義理がある。曰く、先代のガラムはあんな奴らよりもつと凄かった。俺は連中を認めていない、等々。俄かには信じられないという理由こそ多いものの、その原因が様々なのが厄介だった。

結果、全体に対する演説では効果は薄いことを二人も実感。昨日夕刻以降は個別への説得に切り替え、今日も朝から話し合いを続けているという状態であった。

アスファルトを踏み、滑走路の端を歩いて、エリクは駐機したC-1Aへと向かう。積み荷を降ろしがらんだうとなつた機体。そのコクピットへ続く扉を開くと、通信機

を前に、レシーバーに耳を傾けるサヤカの姿があった。思わしくない状況であるにも関わらず、不思議にもサヤカの顔には焦りは見られない。

「どうだ？」

「変わりなし、でございませぬ。うんともすんとも、お返事はございませぬ」

今は、ただ時間がない。

ガラム隊二人の説得がなかなか進まない状況を見て取り、サヤカは今朝から、通信機を介した周辺基地への呼びかけも始めていた。エリクは止めたのだが、サヤカは『大丈夫です』と言い張り強行してしまったのだ。表には表れないながらも、サヤカも内実焦っていたのだろうか。

結果はこの通りである。何の説明も根回しも無しにベルカの陰謀を説いた所で、風説として処理されるのがオチだった。

何よりエリクが危惧したのは、この通信を受けたベルカ残党が、こちらを襲撃に現れることだった。味方が集まっていない以上、数で押されれば戦力の少ないこちらはたまりもない。その理屈はサヤカとて重々分かっているのだろうが、それにも関わらず、呼びかけを止める素振りは見られなかった。

「もうその辺にしておけ。これ以上やると、こつちが危ない」

「いえいえ、ご心配なく。全てうまくいく筈でございませぬ」

「お前な、一体何の確証が…」

「…お静かに」

業を煮やし、サヤカのレシーバーに手をかけようとしたその矢先、エリクの眼前にサヤカの人差し指が立てられた。一転して意志の強さを感じさせる一文字に閉まった唇に、エリクもぐ、と言葉を飲み込む。

雑音が強まってしばし、通信を震わせたのは男の声。

——それも招かれざる、最悪の声だった。

《ヴァレー空軍基地に告ぐ。こちらは第8494部隊所属、『ガルム1』。貴基地にガルム隊を名乗る偽物が降り立ち、盛んに風説を流布しているとの情報を受けている。即刻当該集団を拘束し、当方に引き渡されたし。対応なき場合ヴァレー空軍基地は反乱を企図したとみなし、空域到達とともに攻撃を開始する。繰り返す…》

「お…おい…これ…」

通信の内容に、エリクは思わず絶句する。

ガルム1——正しくはガルムを名乗るベルカ残党の偽物。間違いない、サヤカの通信を傍受し、こちらを芽のうち潰すべく速攻を仕掛けて来たのだ。その言から察するに、じきにこの基地まで到達するのには違いない。

言わんこつちやない。

言外のその思いが体を動かし、言葉一つ発しないサヤカの肩を掴むエリク。しかし、それに応じるようにこちらを振り向いたサヤカの顔には、ぞつとするような微笑が浮かんでいた。——全て、織り込み済み。そう、口にするように。

「エリク様、『フオージヤー』のエンジンに火を入れて下さいませ。彼らは、じきにこちらへ到達します」

「……お前、まさか。連中をおびき寄せるために、わざと……」

「説得が効果を得られない以上、あとはヴァレーの方々には、現実を見て頂く必要がありますから。私は司令部に赴き、通信を拡声器に繋いで頂くようお願いして参ります。エリク様にはパスカル様が『例の機体』で出撃されるまで、上空護衛をお願いしたく」

「淡々と、そして冷静にやるべきことを口にするサヤカのように、今度こそエリクはぞつとした。」

つまり、全てはサヤカの策。ガルトム隊復帰の情報を受けて真つ先に飛んでくるのは偽ガルトム隊と読み、それをヴァレー空軍基地の上空で『本物の』ガルトム隊が叩き潰す——そのためのお膳立てだったのだ。上空で繰り広げられる『現実』は、パスカルらが語る真実の信憑性を確かに高めるに違いない。

「全く、怖い女だな。あんたは」

「お褒めのお言葉光栄でございます。それでは、委細よろしくお願い致します」

呆れたように、感心したようにふつと笑い、エリクはC—1Aのコクピットを後にする。基地のオペレーターが拡声器で緊急事態を告げる中、エリクがいち早く向かうのは、傍らのYaK—38Mの操縦席。

機器類、電源オン。エンジン、暖気を開始。間に合うかどうかは正直ギリギリという所である。

武装は胴体下の外付け式23mmガンポッド、他にはAAMが2発のみ。偽ガルム隊の機体がF—35A『ライトニングII』であったことを踏まえると、もとより撃墜は望めない。やはりパスカルが上がるまで、時間を稼ぐのが唯一の手という所だろう。

「エリクさん！」

機外に響く、蒼い声。コクピットから見下ろしたそこには、フライトジャケットを身につけたパスカルの姿があった。遠巻きにはこちらに何事かを叫ぶウステイオのパイロットが数名と、その前に立ちはだかり宥めるレイモンドの姿も見える。ウステイオのパイロット同士が何やら言い合っている様も捉えられ、ヴァレー基地としての対応が固まり切っていないことを如実に物語っていた。

「敵が来る！パスカル大尉、急いで例の機体の所へ！俺もこんな有様だ。連中を落とせるのは、あんたしかない！」

「…10分、いえ5分下さい！すぐに駆け付けます！」

「了解——今から上がる、機体から離れて！」

キャノピーを閉じ、パスカルが機体から離れるのを見計らって、エリクは機体を滑走路へ侵入させる。基地のオペレーターに確認するまでもなく、他にタキシングに入っているウステイオ機は見当たらない。

「こちら『ハルヴ』、離陸する！」

《あ、おい、ちよつと待……》

「上がるぞ！」

オペレーターの声を振り切るように、『フォージャー』が重い機体を徐々に加速させてゆく。回転計が数字を刻み、左右の遠景が後方へと飛んでゆく。

浮遊感。

主脚収納、加速と急上昇。遙か後方、眼下ではレイモンド達が建物の影へと走り去り、パスカルの小さな体が一番端の格納庫へと駆けていくのが見える。

基地上空で旋回し、鼻先を向けるのは西。すでに6つの機影が見える、白い山脈を超えた空。

《ヴァレー空軍基地を離陸した民間籍のYaK—38に告ぐ。ただちに武装を解除し針路090へ変針せよ。指示に従わない場合ただちに撃墜する。これは警告である。ただちに……》

「さて、何とか5分持たせなきゃな。どうしたもんか……」

迫る6機を前に、エリクは一人ごちる。普段の『クファイル』ならまだしも、『フォージャー』で6機相手に5分も持たせるのはいくらエリクでも至難である。かといって逃げ回ってばかりでは、サヤカやパスカルらに攻撃が及ぶことになる。パスカルの存在が作戦の要である以上、それだけは避けなければならない。

エリクは通信機のダイアルを操作し、先の通信へと周波数を合わせた。

応用するのは、かつてカルロスとニコラスが用いていた戦法。まっとうに組み合つては勝てない以上、敵を挑発し引き付け、弾と時間を浪費させるに尽きる。

「久しぶりだな、偽ガルム隊。……いや、この際ベルカの亡霊殿とでも呼ぼうか?」

《何:!:?》

「だが、もう手遅れだ。本物のガルム隊があんたらを打ち倒し、この馬鹿げた戦争を終わらせる。下らない逆恨みもここまでだ」

《――投降の意思無しと判断。各機、交戦を許可する。奴を殺せ!》  
放たれた殺意は、そのままミサイルアラートへと変わり殺到する。

正面、6発。距離から判断しておそらくセミアクティブ空対空ミサイル。母機のレーダー誘導を利用した誘導性能の高さが売りのミサイルであり、生半可な回避機動では振り切ることは叶わない。



しっ。

舌打ちするように短く空気を吐き出し、操縦桿を前へと押し倒す。同時にフットペダルを深く踏み込み、エリクの『フォージャー』は出せる限りの速度で緩降下へと入った。進路は変わらず正面からの相対。速度を伸ばし、かつ山肌に衝突しないぎりぎりの角度でもって、ミサイルの下方をすり抜ける紙一重の針路。

ミサイルアラートの間隔が詰まる。頭上から降り注ぐようにS A A Mが近づく。上より弧を描き、迫るは6連。

片や機体は重い。

加速は遅い。

伸びろ。もつと、伸びろ。

山肌を扶けるように降下した機体が、衝突寸前に機首を上げる。

こちらの尾を捉えるように曲線を描いたミサイルは、『フォージャー』の尾部を掠めて次々と擦過。近接信管による爆炎を後方に刻み、無数の破片を『フォージャー』の尾部に刻み込んでいった。

《躲した!?!》

「くそっ……遅い!」

頭上を入れ違う敵編隊の下方で、操縦桿を手前に引いて旋回する。

やはり、遅い。自重の重さから来る初速の遅さは致命的ですらある。旋回もやはり鈍く、ようやく180°を回った頃には、既に敵は3手に分かれて反復攻撃の針路に入りつつある所だった。扱い慣れた『ミラーージュ』シリーズと同じ機動をしては、確実に5分も持たないに違いない。

「とは言っても、どうすれば……くっ！」

迫る敵は、右、左斜め上、真上大回り、各2機ずつ。第一波の右の2機に対し、エリクは機体を傾けて山の稜線に隠れ、その射線を遮断。ミサイルの射界に捉えられる前に、その矛先を危うく躲した。

間髪入れず、迫る第二波は直上、F-16XLが2機。旋回すれば横腹を晒し、上昇すれば速度が落ちる以上、直進のまま加速してやりおせる他無い。

上、左右。目を走らせ、フットペダルを緩めることなく踏み続けて、機銃の雨を回避する。二筋の光条はそれでも躲しきれるものでは無く、右翼に数発、弾痕が爆ぜた。

《同じ手は食うか！愚か者め！》

「——ちっ！」

そして、その機動は完全に読まれていた。こちらの加速を見越し、第3波の2機が、左斜め上からこちらの予測進路目掛けて降下して来たのだ。

探るまでもなく、その機影は間違いなくF-35A。それも片や両主翼端を蒼く、片

や左翼端を赤く切り欠いた、ガラム隊の塗装で身を彩った2機である。その機首方向はこちらの直進方向と明らかに直交している所からするに、射程に入ると同時にこちらの上面を狙い打つ積りに違いない。

旋回は自殺行為。垂直推進機構は、咄嗟に使うには不安がある。くそつたれ。

エリクは口内に叫びながら、逆側のフットペダルを踏んで機体を減速。同時に機体を左にロールさせ、上に対する投影面積を抑えながら進路を維持した。

殺到するミサイルが、機銃が、『フォージャー』の鼻先を掠めて爆発とともに山肌を扶る。

直撃は避けた。しかしながら直近で爆発を受けた機体は無事では済まず、無数の破片がエリクの機体に襲い掛かった。金属と岩石が混ざった礫の嵐は、機体表面を引っかき、キャノピーに食い込み、機体を容赦なく傷つけてゆく。

「くっそおおお!!」

爆炎を抜け、動揺する機体をなんとか立て直す。

まだ、何とか飛んでいる。しかし、キャノピーに生じた亀裂や土塊で傷だらけとなつたその姿は、如何ともしがたい性能差を如実に物語っていた。上昇を封じられ、あらゆる性能で後れを取る以上、挽回の手は無いと言つていい。

正面、2機。第一波を仕掛けたF-16XL。ヘッドオンからのAAMで、確実にこちらを仕留める位置取りである。

——挽回の手は無い。しかしそれなら、せめて1機だけでも減らしてやる。同じ短距離用AAMならば、正面から迫る敵機を落とすことはこの『フォージャー』でも不可能ではない。

火器選択、AAM2基。正面、距離1300。  
来る。

迫る。スマートな胴体に、二段階の角度を設けたダブルデルタの機影が迫る。

正面から撃たれて、回避できるかどうかは分からない。だが少なくとも、せめて1機は落としてみせる。

距離1100。

もう少し。

1000。

あと一步。

950。

あと、一瞬——。

「……!?」

爆発。

正面に唐突に割いた黒い花に、エリクは引き金にかけていた指を離して、咄嗟に操縦桿を左へと倒した。降り注ぐ破片が機体に爆ぜ、その下を『フォージャー』は潜るように抜けていく。

AAMは——残弾2。やはり、俺は撃っていない。

振り返った先には、翼を翻して回避行動を取るF-16XLの姿。そしてその背を追う、F-15C『イーグル』とF-104G『スターファイター』。識別反応、——ウスティオ機。

「…ウスティオ軍…」

《L. M. A. の『フォージャー』、生きてるか!?!》

《基地の奴ら、尻ごんで機体に乗るすらしねえ。レイモンドの奴に昔ポーカーでの借りもあるしな、手貸してやるよ!》

「悪い、恩に着る!」

灰色と銀色の2機が、左右に分かれて2編隊を牽制する。

間違いない、数少ないパスカルらへの賛同者。おそらく基地側の制止を振り切つて離陸したのだろう、増槽はおろかミサイルすら最小限しか積んでいないのが見て取れる。

エリクは、それでも心から感謝の言葉を述べた。それは、ベルカ残党との戦いを胸に

してから初めて得られた、数少ない『友軍』だったのだから。

《傭兵風情が、血迷ったか！『ガラム2』、先にヴァレーの滑走路を潰せ！空は旧式ばかりだ、じきに叩き潰せる！》

《まずいな……今は『ガラム1』が発進準備中だ！『フォージャー』のパイロット、奴を止められるか!?!》

「止めるさー！」

上空で互いに弧を描く両軍の中から、機影が一つ抜け出てヴァレーの方向へと向かってゆく。

単発、尖ったエアインテークに菱形翼。そして、左翼を赤く切り欠いた塗装。間違いなく、偽ガラム2の『ライトニングII』。

——行かせるか。

エリクは空を見上げ、彼我の距離を確かめながら、再度深くフットペダルを踏みこんだ。

高度差は概ね200。基地までの距離は同程度ではあるが、加速性能と速度差から、敵との距離は徐々に開き始めている。

しかし、今は落とすことより、時間を稼ぐことが第一である。

兵装は、引き続きAAM。

F-35のステルス性能に妨げられ、ミサイルのロックオンが安定しない。しかしそれに安心しているのか、それともヴァレーを急いで叩くためか、敵は何ら回避行動を取っていないかった。

それなら。

エリクは敵機の斜め後方に位置取りながら、照準の端にF-35の姿を捉え、機首をわずかに上昇。

ミサイルシーカーが敵機をロックオンするのを待たず、目視照準のままボタンを押した。

放つは1発、やや間をおいてもう1発。

ノーロックのまま放たれたミサイルに敵も気づいたらしく、敵は機体を左に傾け、小限の機動で初発を回避。しかしその安堵ゆえか、それともステルスへの過信ゆえか。その回避先を見計らって放たれた第二射への対応が遅れ、それはより近い位置を擦過。近接信管の作動を引き起こし、F-35は爆炎と破片の中に包まれた。

《ぐ……子供騙しを！》

「何とでも言え！とにかく、もう少しで……！」

当然至近弾は至近弾であり、致命傷ではない。それでも爆炎と回避機動の誘発は相応の効果をもたらしたようで、F-35は直進を止め大きく左へと旋回。その間にエリク

は加速を重ね、ヴァレー空軍基地を望む位置まで至りつつあった。

滑走路には、既に滑走準備に入る1機の姿がある。

ガラムの伝説を再現すべく、わざわざヴァレーまで来た目的の一つ。パスカルが駆っているであろうその機体を、エリクは目を細めて俯瞰した。

すらりとした機首と、コクピット両側に設けられたエアインテーク。機体中ほどの切り欠きデルタ翼に、流線型を描いて尾部に至る小柄なシルエット。そして1枚の垂直尾翼を飾るガラムのエンブレムと、両主翼端を斜めに青く切り裂く塗装パターン。

あの、機体は――。

『で、何だよそのガラムいわくの機体ってのは。相当な高性能機なのか?』

『うふふ、そう焦らなくてくださいませエリク様。パスカル様、かの『サイファー』の乗機は何か、ご存知ですか?』

脳裏に想起されるのは、2日前の協議での最後の話題。思わせぶりの発言を繰り返すサヤカに質問したところ、サヤカは勿体ぶりながらそう言ったのだ。

『え? ええと、記録によるところでは、『ガラム1』は一貫してF-15C『イーグル』に搭乗したと聞いています。かの『円卓』での戦闘、終戦後のテロ組織の制圧戦、そのいずれでも翼端を青く染めたF-15Cを駆っていた、と』

『その通り。…ですが、彼はベルカ戦争の初頭から、ずっと『イーグル』に乗っていた訳



ではありません。お高い機体でございますからね。資料を紐解くと、どうやら彼はヴァレー空軍基地着任直後に爆撃機迎撃任務へ出撃。爆撃機6を含む多大な戦功を上げ、相当額の報酬を手にしたようです。戦場に青い翼端のF-15Cが見られるようになったタイミングを踏まえますと、着任前の貯蓄にその報酬を合算して、『イーグル』を購入したようでございますね。そう、最初に乗っていた機体から乗り換える形で』

『…まさか、その錦の御旗ってというのは…』

『その通りでございます。ヴァレー空軍基地に今も眠っているのは、『サイファー』の最初の愛機。ガルムの伝説を再現するのに、これ以上の機体はございません。そう——』  
 『F-5E 『タイガーII』、ガルム1、離陸します!』

機体後方に生じる焔。

青年の声とともにエンジンが咆哮を上げ、翼単を青く染めた『タイガーII』はアスファルトの大地を徐々に進んでゆく。15年前と同じ凍空の下、15年前と同じく迫るベルカの機体を迎え撃つために。

《邪魔を!》

「——させるか!」

旋回を終え、赤羽根のF-35が大きく弧を描いて滑走路の正面から『タイガーII』へと狙いを定める。

機体下部の弾倉庫を開き、ミサイルを放つその瞬間を見定めて、エリクは機体を旋回。正確な23mm機銃の曳光弾をその鼻先に叩きこみ、敵の視界をしばし幻惑した。

F-35からミサイルが放たれる。

焰を帯び、直進する鏃。しかし曳光弾の幻惑によってそれはわずかに上を向き、ほんの数、狙いを外れる。

鋭く飛翔するその下を、青翼の虎は這うように潜り抜け、滑走。滑走路上の後方に爆ぜた炎を振り切るように、『タイガーII』は15年ぶりのウステイオの空へと舞い上がった。

《外した…!?!》

「こっちはもう限界だ。ガルム1、あとは頼む」

《了解!——後は、お任せを!》

F-5Eが機体を捻りながら急上昇し、揚力を帯びながら直上で旋回する。対する赤羽根は、斜め下方。直上から仕掛けるガルム1をやり過ぎ、高度を失った所を仕留める積りと伺い知れた。

性能差は歴然。それにも構わず、ガルム1は直上から背面のまま降下。それに対し、赤羽根は進路を維持したまま加速し、F-5Eの射程に入るより早く射界を超えるべく滑走路を抜けていく。

——逃げられる。エリクがそう感じたその瞬間、ガルム1は急降下のまま機体を右ロール。逃れる赤羽根を追い詰めるように姿勢を変え、機体を引き起こして一瞬でその後方に就いたのだ。

《な…!?馬鹿な、これがタイガーIIの機動か…!?》

男の言葉は最後まで紡がれることなく、20mmの掃射音にかき消される。時間にしてわずかコンマ数秒。高速機動中ではわずか一瞬と言つていいその間に、F-35はコクピットだけを正確に貫かれ、そのまま力尽きたように岩肌へと吸い込まれていった。

《が、ガルム2撃墜!》

《何をやっている、たかが旧式のF-5風情に…: 黴臭い伝説も、ここで終いだ!》

殺気と化した、声。ウステイオ傭兵の機体を突破したF-35から男の声が響くと、その下部の弾倉庫からミサイルが放たれたのは同時だった。彼我の距離は目算で3000前後。おそらくは先ほどと同じSAAAMと見て間違いない。

狙いは、全てがパスカルのF-5E。実に3発を数えるそれに対し、パスカルは真正面に応じるや機体を急降下させ、ぼっかりと口を広げた谷底へと機体を向けた。

矛先を逸らされ上空を抜けた3発は、母機のレーダー波に乗って反転しながらF-5Eの尾部を追尾し始める。先ほどのエリクのように下方を高速で抜けるのならばともかく、真後ろから追うSAAAMはこの程度では回避しきれない。

タイガーⅡ、ミサイル発射。何を思ったか、F-5Eは搭載していたAAMを2発、自身の下方を流れる雪原へと打ち放った。二つの炸裂は雪煙となり、小柄な機体を白い闇に覆い隠してゆく。入り組んだ山岳地帯で自ら目を閉ざすなど、元より自殺行為ではない。

『ライトニングⅡ』のパイロットは迂闊なその様を嘲笑し、哀れな雪煙の中にSAAAMが次々と突入して炸裂する様を見下ろしていた。

——そしてその目は、直後に驚愕で見開かれることとなった。

雪煙を矢のように抜けた機影が1機、谷を抜けて急上昇し向かってきたのだ。識別は、ウステイオ国籍のF-5E。視界に映える青い両翼端は、自らの機体とうり二つの塗装。

——円卓の鬼神の色。

《…なっ!?!》

真正面からの銃撃に火花を散らし、片方の尾翼を吹き飛ばされたF-35がぐらりと揺らぐ。

衝撃でぐらぐらと揺れる視界の中で、彼は遅ればせながら、先のF-5Eの機動の意味を理解した。

機動性ではSAAAMを回避できないと見越し、『タイガーⅡ』はSAAAMの誘導母機で

あるこちらの目を眩ます手を打ったのだ。すなわちAAMで雪煙を生み出して自身の姿を消し、その間に機体を加速。雪煙の下で密かに母機のSAA誘導範囲を抜け、そのまま位置を晦ましてこちらを強襲したのに違いない。

咄嗟の判断力、そして比類ない操縦技能。これほどの腕を持つパイロットが、何人もいるだろうか。

《だが……まだだ！我らの理想は、まだ……！》

喉の奥から男は声を絞り出し、辛うじて安定させた機体を敵に向ける。

ヘッドオン。距離にして1000、AAMはほぼ必中を期せる距離。

機体下部から放たれた短距離AAMは、しかし目標を捉えることなく、敵機のバレルロールによつて後方へと逸らされてゆく。

真正面から迫る曳光弾の筋の中で、F-35のパイロットは確かに感じた。

明らかにこれは只のF-5E、只のパイロットではない。この技量も、機体性能を感じさせない飛行も、15年前の空で感じた脅威そのままである。

そう、まるで。

《——馬鹿、な。……まるで円卓の、鬼神、そのもの……》

機体両側のエアインターク、そして中央のコクピット。正面から機体の急所を貫かれ、青翼のF-35は炎に巻かれながら、モノクロの大地へと堕ちていった。

空気を揺らすのは、爆発の残響。撤退してゆくF-16XLの搭乗員の狼狽。地から空を見上げる者に声は無く、固唾を飲んで鬼神の再来を、青い双翼の『タイガーII』を見守っている。

「鬼神、か」

ひび割れたキャノピーの中から、エリクは地を見下ろして一人ごちた。

地には、未だに濛々と煙る雪。そしてちりちりと燃え、横たわるF-35の残骸。曲りなりにもエースを模した最新鋭機を、パスカルはかすり傷一つ負わず仕留めて見せた。鮮烈なその戦績は、鬼神の再来と言っても何ら遜色は無い。

《——ウステイオの皆さん。勇敢なる諸国の皆さん。卑劣な策謀を打ち破るべく、悲惨な戦争を終わらせるべく、共に戦いましょう。——円卓の鬼神とともに!!》

「…確かに、こういうのを鬼神って言うんだな」

空を見上げる人々は、拳を突き上げ口々に何かを叫んでいる。

地表に対し、こちらの相対高度は300ほど。

耳を済ませば、人々の熱狂が空にまで轟いて来そうな距離だった。

## 第37話 託す想い、宿る想い

格子で区切られたガラス窓の外に、漆黒の闇が広がっている。

黒を彩るものは、窓の枠に沿ってうつすら積もる白い雪と、一面を朧に覆う結露の靄。夕暮れ以降の気温の低下は著しく、日が沈んでから雪も降って来たらしい。この様子では、明日の離陸にも手間がかかることだろう。ただでさえ旧式であるYaK-38Mのエンジンは、低温下での立ち上がりがすこぶる悪い。

来る明日に思いを馳せながら、エリクは湯気の立ち上るマグカップを傾ける。

今宵の一杯はココアを加えたカフェモカ。とろりとした舌ざわりにココアの豊潤なコクと甘みが交わり、温かな感触が喉を伝って、冷えた心を癒してゆく。

懐かしい、かつての日。スポーク隊がレクタのヘルメット空軍基地に着任した日に、ヴィルさんが淹れてくれた味だった。

時に2010年の暮れ、12月29日午後10時。

ウステイオ共和国空軍ヴァレー空軍基地を、穏やかな雪が包み始めていた。

「…あと一步、だな」

マグカップを置き、左手の指先で自らの眼帯を弄びながら、エリクは天を仰ぐ。カ

フエモカで温まった吐息は白い靄となり、ゆらりと揺れて上つていった。

あと一步——そう、ベルカ残党が画策した、不毛な戦争の終焉。事態は、まさにそのあと一步まで迫っていた。

先日のガルム隊と、ベルカ残党が化けた偽ガルム隊による空戦。先代ガルム1——サイファアのかつての乗機を駆り、圧倒的な技量で偽物を屠つたパスカルの方に、ヴァレー空軍基地は熱狂した。青い双翼の機体が単機で圧倒的不利を覆すその様に、皆が『ガルム』の再来を見たのだろう。その出来事以降、パスカルたちの言葉に耳を傾ける傭兵の数はぐんと増え、今や基地の2/3に迫るほどとなっていた。『サイファア』という伝説の下地があったとはいえ、これもやはりエースの技量もたらした結果なのだろう。

もつとも、当の本人たちにエースらしさは微塵も漂っていない。本来ならば尉官である彼らは士官用の個室も使えるのだが、親交を深めるためと称して今夜も下士官用の4人部屋を宿とするのだという。15年前にこの基地に所属していたというパスカルの叔父も飾らない性格で愛されていたというが、あるいはパスカルにもその面影は宿っているのかもしれない。

いずれにせよ、二人の活躍で停戦に向けた意識の醸成はなされつつある。準備が整い次第、オーシア首都オーレッドでオーシア大統領ハーリングとユークトバニア首相ニカ



ノールの両者による停戦の会談がなされる予定にもなっているが、その発表の暁にはこうした地道な下積みが生きて来る筈である。両大国の停戦で動揺する東方諸国の首脳にとって、現場の兵士からも上がる停戦の声を無視することなどではしない。また、必ずや反発も起こる筈であり、それを抑えるための力としてもウステイオ傭兵は生きて来る筈だった。

「……………エース、か」

比類ない力を発揮し、瞬間に信望を勝ち得た二人に重なるのはその言葉。

単に撃墜数を基準にしたエースパイロットという条件ならば、レクタからの通算記録で見れば自分とて立派なエースには違いない。些か自惚れが過ぎるかもしれないが、型落ちもしい所の『ダガーA』でグラオガイスト駆るF-35Aを退けるなど、腕前についての自負もある。

しかし、同じエースという土俵でも、自分とガルト隊——特にパスカルとの在り方は大きく違う。これまでを省み、今一人になって俯瞰すると、やはりそう思わざるを得ない。

どう言葉にするのが適当かは分からないが、言い表すならば…そう、『華』があるかどうかの違いと言うべきだろうか。あるいは、味方を引っ張り、敵を畏怖させうる見えな何かと言ってもいい。

かつてレクタにいた頃、所属していたハルヴ隊は徐々に名を上げ、レクタを代表するエースパイロット部隊と称されるようになった。一時的にロベルト隊長が不在になり、代理として部隊を預かることになった時、自分はその責任の重さに慄いた——いや、有体に言つてしまえば辟易したのだ。自由に、思うままに空を舞いたいのには、他人の想いまで乗せては翼が重くなつてしまふ、と。今思えば、それは人の想いを託される『華』を持ったエースとしての責任から逃避したのでらう。

——復讐の念、そして『奴』の思い通りにはさせないという個人の信念に立つ自分では、今でもきつと同じ選択をするに違いない。

だが、パスカルは違つた。

先に立つ者として、『華』を持つ者として。人の想いを背負い、翼も体も重くなることを厭わず戦う道を選んだ。もしかするとその背景には、かの伝説的パイロットである『サイファー』を継ぐ者として、先の戦争で死んだという叔父の意思を継ぐ者としての想いもあるのかもしれない。いずれにせよ、そこには眩いほどの、理想的な『エース』の姿があつた。

自らを第一とする者と、想いを背負う者。嫉妬などはさらに無く、ただただ尊敬の想いだけがその間に横たわつている。どちらが正しいというものではないが、自分がないものを持つている人間の姿はやはり眩しい。

あれほどに徹したエースはそうはいないに違いない。

身近な例を省みても、サピンのカルロスなどは確実に違うだろう。自らの生還を第一とするあの男の信念は華やかなエースとは真逆の姿であろうし、本人も求めてはいないに違いない。同じサピンならば、まだ『エスクードー』——ニコラスの方がその素質がありそうだった。

ロベルト隊長も、きつとそれとは毛色が異なっているだろう。エースの名に振り回されるな、俺たちはパイロットに過ぎないし、それでいい。そう語った隊長の声は今も耳に残っており、想いは胸に宿っている。おそらく、隊長の師匠——かつてのベルカ空軍の『グリューナー』も、同じ想いを抱いていたことだろう。

脳裏には、これまで空で馳せ合った、聞き知ったパイロットの姿が過ぎってゆく。

先代の『ガルムー』はどうだったのだろうか。カスパルは、『パンディエーラ・トリコローリ』の男達は。大陸戦争で名を馳せたという『メビウス』は。そして、あの『ブレイズ』は。

「はは、こちやこちや考えすぎかな。俺らしくない」

張り詰めた糸を切るように、エリクは一声呟く。

知らず前屈みになっていた体を反らし、椅子の背もたれに預ける体。体重を一身に受けた椅子がぎしりと軋むのと、唐突にドアがこんこん、と鳴るのは同時だった。

「ん?」

「こんばんは、エリク様。お邪魔してもよろしいでしょうか?」

ドアの向こうから届くのは、直属の上司であるサヤカの声。ちらりと目を奔らせた壁掛け時計は既に午後10時20分を回っており、夜も深まりつつある頃合いである。周囲が静まり返っているにも関わらず足音に気づかなかつた辺り、よほどドアの防音に気が遣つてあるのだろうか。

「ああ、いいぞ。ドアは開けてある」

「それでは…お邪魔いたします」

「この椅子を使つてくれ。…にしても、こんな時間にどうしたんだ?」

ドアを開けて入ってくるサヤカは、いつもながらの黒スーツ。あいにく一人用の個室は椅子も一つしかなく、エリクはベッドの方に腰を下ろし、先ほどまで自らが座つていた椅子へとサヤカを促した。

にこりと微笑み、サヤカは後ろ手に扉をロックして、椅子へと腰を下ろす。ふわりと漂う香水の香りは、心なしかいつもより甘いように感じられた。

「いえ、大したことではございません。ちよつとした状況報告のついでにコーヒーでもと思つたのですが、もうお召し上がりになつていたのですね」

「半分ココアのカフェモカだけだな。何か進展があつたのか?」

こくり、とサヤカは首肯し、口紅に彩られたその口を開き始める。曰く、今日の夕方から日没ごろに動いていた、鮮度のいい情報なのだという。

——朗報だった。少なくとも、全てを聞き終えた時にエリクが抱いた感想はそれであつた。

情報の渦中は、かのラーズグリーズ隊を擁するオーシア空母『ケストレル』に関してである。

12月23日に行われたユークトバニア元首ニカノール首相の救出作戦以降、『ケストレル』はユークトバニア軍やベルカ残党による追撃を撤くために迂回を繰り返しつつ、今日の夕刻ごろにはオーシア西方のセレス海に到達。しかし完全に監視の目をすり抜けること能わず、オーシアの内庭と言つていいその地点でユークトバニアの艦隊に捕捉され、攻撃を受けたのだという。ニカノール首相の存在にも関わらず撃沈を辞さないユーク艦隊に対し、『ケストレル』はすぐさまニカノール首相をオーレッドへ出立させるとともに、ラーズグリーズ隊による迎撃を試みた。

結果、ラーズグリーズ隊は進路を阻んだユーク艦隊、ならびに『ケストレル』を離反部隊と見なし襲い掛かったオーシア艦隊をも殲滅し、『ケストレル』は包囲網を突破。薄暮の大艦隊戦は、第三勢力たる『ラーズグリーズ』の完勝に終わったのである。

特筆すべきは、ニカノール首相の停戦の呼びかけに応え、交戦中にユーク艦隊の一部

が離反し『ケストレル』側に就いたことだった。その数、ミサイル駆逐艦を主として3隻。『ケストレル』の護衛艦と情報収集艦『アンドロメダ』を加えてなお少ない数だが、それでも戦争を終わらせるという共通の目的のため、敵味方が国境を乗り越えて手を組んだことに大きな意義があると言つていいだろう。戦火を交えた国同士が手を取り合うその姿は、ここオーシア東方諸国でも目指すべき姿、その嚆矢である。

「そうか…流石は『ラーズグリーズ』。…そして、ニカノール首相がオーレッドに向かったということとは」

「はい。予定を繰り上げ、明日の夜には両首脳による会談とメディア披露が行われます。『ケストレル』は今夜夜半から追跡を撒きつつセレス海をさらに東進。イーグリーン海峡の西方70 kmに到達した時点でラーズグリーズ隊を発進させ、両首脳の会談を空から護衛する予定となっています」

「予定は、だな。この機会をカスパルの息のかかった連中がみすみす見逃す筈はない。両首脳による和平の場をぶち壊しにすれば、反動でヘイトは今まで以上に高まることになる」

「淡々と予定を語るサヤカに、マグカップを傾けてカフェモカを飲み干したエリクが読みを返す。

「これまでのベルカ残党のやり口を見返すまでもなく、策謀を弄して戦争を煽り立てて

来た連中である。終戦へと直結するこの会談を見過ごす訳は無く、必ずや何かしら行動を起こしてくるに違いない。

「流石はエリク様、おっしゃる通りでございます。我々の得た情報と『アンドロメダ』の分析によりますと、レクタ、ゲバート、ラテイオ等複数の前線基地に戦力が集結しつつあるとのことです。おそらくは多国籍の戦力をかき集め、オーレッドを強襲するものと思われませう」

「いよいよなふり構わなくなってきたな。奴らにとつても今が正念場か」

サヤカの言葉を受け、エリクは壁に貼り付けてある周辺諸国の地図を見やる。

サヤカが言及した三国は、東方諸国の概ね中央に縦に連なっている。その三国とオーシア首都オーレッドの間にはサピン王国とオーレッド湾が横たわっているが、距離にすればもの数ではない。——そして、肝心のウステイオはその三国のすぐ西側に位置する。敵対するであろう連合軍を横合いから食い止められる位置であり、ここヴァレー空軍基地はその最前線に当たるのだ。地理的に見ても戦力的に見ても、このヴァレー周辺の空域が決戦の舞台となると見て良かった。

「となれば、俺たちの役割は明白だな。ここで殺到する連中を食い止めて、オーレッドを護る。任務がシンプルなのは助かるな」

「はい。…ですが、今回ばかりはベルカ残党の皆様も相当な戦力を注いで来ることで

しよう。各国のタカ派軍人も黙ってはいない筈です。それこそ、誰もが死んでもおかしくない戦場になるに違いありません。パスカル様然り、：エリク様然り」

空になったマグカップをテーブルに置き、陶器と木が触れる固い音が響く。

その中で、サヤカの言葉の尻は常の彼女らしくなく消えていった。

口元にはいつもの微笑。笑みを湛えた目は、しかしどこか伏している。傍若無人、慇懃無礼。そんな四字熟語が似合うサヤカにしては珍しいしおらしい姿が、エリクには少しおかしかつた。

「なんだ、心配してくれてるのか？」

「え？」

「大丈夫だ、俺は死なない。死んでも奴を殺す、なんて思い詰めた時もあったけど、俺はもう大丈夫だ。奴の策謀を挫くまでは。奴に打ち勝つまでは、死んでも死ぬもんか」

呆気にとられたサヤカに、エリクは包み隠さない自らの思いを口にした。

絶望も挫折も抱き、復讐に沈んだ過去。しかしそれを否定する気は無く、むしろそれを呑み込み、乗り越えなければ今の自分は無かつた。胸に宿るその意思を言葉に託したのだった。

——くす。

くすくすくす。



ぽかんと開いていたサヤカの口は笑みに変わり、口元を覆って笑い出した。それもいつもの皮肉な姿ではなく、心底面白い——そう示すように朗らかな笑顔で。

「笑いすぎだおい！何か変な事言ったか、俺…？」

「いえ、いえいえいえ。最初にお会いたし時と、今のエリク様と。その姿が全く違っていで、思わずおかしくなっちゃいました」

「何だよそれ。人をバカにしてよ…」

「いえ、いえいえ。けっして貶める積りではありません。むしろ喜ばしいと申し上げますか…安心致しました」

「？」

「最初にお会いたし時は、鬱々として、意思を研ぎ澄まして、まるで目的を一心に突き詰めた刀剣のようで。ああ、『三日月』の名前らしい方だと感じたものです。…でも、今は違います。過去を呑み込み未来を見つめて、静かに一歩ずつ歩んでいる。同じ月でも、満月へと向かってゆく十三夜月のようです。…うふふ、傷だらけになって、それでも茨を踏みしだき進んでいく以前のお姿も好みでしたが、今のお姿は、より好ましく思います」

思わぬ話の流れに、今度はエリクの方がぽかんと口を開いた。

何というか、一面と向かってそう評されると恥ずかしいというか。ヴィルさんやクリス

ならばともかく、まさかサヤカとこんな話をするとは全く思っていなかった。

三日月より一步進んだ、十三夜月。希望の象徴である望月には一步足りない、しかし近づいてゆく楕円の月。言われてみれば、今の自分にはふさわしい姿かもしれない。

「照れくさいな、なんか。見た目の雰囲気では言えば、あんたの方がよっぽど月らしいけどな。…いや、月にしては押し…もとい光が強すぎるか」

「まあ、まあまあ。ということとは、わたくしはさしずめ殿方を照らす太陽でございますね。いやですわもうエリク様ったらお上手なんですからあ」

「……………まあ、何でもいいが」

頬に手を添え、照れたようにくねくねと身を振じらせるサヤカ。一言も太陽とは言っていないが、拡大解釈とは恐ろしいものである。垣間見えたしおらしきから一転、結局いつものサヤカが戻って来た。年の頃三十ピー歳、押し来る光は男も枯らす。脳裏に浮かんだキャッチフレーズを、エリクは記憶の彼方に投げ捨てた。

「ともあれ、明日が正念場だ。明日に備えて、俺はそろそろ寝…」

「決めましたわ」

「へ？」

「わたくし、今宵はこちらで夜を共にいたします」

「…はい？」

前触れない唐突なサヤカの発言。その意味が解せず言葉が頭上を通り過ぎる間エリクの体は硬直し、その分反応が遅れた。

サヤカが椅子を立つ。一步踏み、ベッドに手をつけて上半身を押し出す。

傍から見れば勢いに吞まれたエリクは思わず上半身を引き、上半身を乗り出したサヤカが肉薄する構図となっていた。

「先のような熱い告白のお言葉を頂いてしまいましたら、わたくしもお応えしなければなりません」

「おい、何を言ってる…」

「それに、イケメンの殿方をベッドの上で存分にコロコロするのは、わたくしの夢だったのですよね」

「…もしもし？サヤカさん!？」

煽情的に濡れた唇が、上目遣いなサヤカの瞳がエリクの目に流れる。

僅かに襟元を開き、垣間見える膨らみがエリクの胸板に近づく。クリスよりわずかに大きい、豊かな肉感。少なくともパウラよりは格段にあるそれが、明らかな交戦の意図を持って近づいてくる。

——情欲を煽られる以上に、エリクは恐れた。

どう表現すればいいのか分からないが、その心情はへびを目の前にしたカエル、ある

いはA-110を目の前にした歩兵ならば理解できるかもしれない。とりあえず過去の経験から抽出すれば、遠距離から『テュールの剣』に狙撃された際の心境に最も近かった。

「という訳でして、契約項目第3項。通常業務中は、いかなる場合においても指揮権管轄者の指示に従うこと…で、ございます」

ウステイオ空軍管轄、ヴァレー空軍基地。この基地における士官用個室の防音は完璧である。

男一人の悲鳴を、ものの見事に打ち消す程度には。

\*\*\*\*\*

日は明けて、翌12月30日16時。所はヴァレー空軍基地司令部棟の一角、通信機器やテレビ電話を有する作戦会議室の一つ。

テレビ画面を前にして座り、表情を沈めるサヤカ。その傍らに腕を突き、食い入るように画面を見つめるエリクとパスカル。そしてその後方に立ち様子を伺う、レイモンドおよび同調する傭兵の面々。

決戦を前にしたものはまた違う、一室には絶望にも似た張り詰めた空気が漂っていた。

「…やられたな。……とごく先手を打たれた」

画面の中で口早に状況を伝えて来るのは、『ラーズグリーンズ』を支える参謀役のピーター。常ならば『ケストレル』に座乗している筈だが、今は画面の表記を見る限り随伴する『アンドロメダ』からの通信のようである。その言葉に応じるサヤカも、傍らのパスカルも、表情には焦りが滲み出していた。

突然ピーターからの緊急通信が入ったのは三十分ほど前である。

端的に言えば、状況が大きく動いたのだ。それも複数地点で、しかも最悪の形で。

一つには、ベルカ残党の策謀の全容が判明したことである。

戦争継続による荒廃化。それを成し遂げるための切り札の存在が、ついに掴めたのだ。その正体は、かつての戦争でベルカ公国が設計した大量破壊兵器『V2』。ベルカ残党は掌握したオーシアの戦略衛星軌道砲『SOLG』にV2を搭載し、直接オーシアおよびユークトバニアの主要都市を攻撃する積りなのである。

衛星軌道上から放たれる砲撃を迎撃する術は無く、そのコントロールを奪取する他に防ぐ方法はない。ノースオーシア州ステントールにそのコントロール施設があることを突き止めた『ケストレル』は、オーレッド護衛の任務を急遽変更し、ステントール奇襲を行うべくセレス海を北上した。

——しかし、ここに最悪の不運が滑り込んだ。

急遽予定にない航路変更を行ったことが仇となり、『ケストレル』は遊弋していたユー

クトバニア潜水艦に捕捉され、撃沈されてしまったのだ。不幸中の幸いに『ラーズグリーズ』は全機発艦に成功したものの、予定より遠い地点からの出撃となった以上、コントロール施設への攻撃は間に合うかどうか微妙となった。

以上の状況から、スーデントールはベルカ残党にとつての最重要防衛拠点と化した。既にベルカ残党所属機の他、オーシア軍機やファト駐留のユークトバニア軍機の一部もここに合流し、防衛網を構築しつつあるのだという。おそらくは、各国に潜入した残党がタカ派を巧妙に引き込んだ結果なのだろう。

厄介なのは、ここに東方諸国の残党軍も集結すべく動きつつあることだった。現状でもラーズグリーズ隊のみでは荷が重い戦力差がある上に、追加の増援が加わっては奇襲も覚束なくなるのは明白である。目下、この基地に集う諸軍の最重要目標はこの増援の阻止となった。

《…だが、『最重要』は一つではなくなってしまった。落ち着いて聞いて欲しいのだが、さらに二つ、『最重要』な任務が生じた》

絶望の間もなく、ピーター参謀は畳みかける。

一方の新たな任務とは——こちらは希望と言えるかもしれないが——、ユークトバニア内の協力者への支援である。

現状ではスーデントール攻撃について、ラーズグリーズ隊がスーデントール南方から

侵入し護衛部隊を叩いた後、スーデントール北方のバルトライヒ山脈に穿たれたトンネルへと突入。トンネル内部にあるSOLG制御施設の破壊を行うという流れとなっている。この際に、バルトライヒ山脈の北側——すなわち現ベルカ領となるトンネルの出口側からも支援機が突入し、ラーズグリーズを支援するのだという。

協力者のコードネームは『ハートブレイク・ワン』。この協力者への支援のため、ヴァレーからは一部の部隊をバルトライヒ山脈北方へと回す必要がある。

もう一方の任務は、つい先ほど『アンドロメダ』が得た情報である。

何とサピンの秘匿基地にて、形式不明の超大型機が出撃準備段階に入ったというのだ。通信傍受によると、その機体はオーシア首都オーレッドへの航路を取るのだという。情報分析により明らかとなったその正体は、サピンのレーザー列車砲『カリヴルヌス』とセットで運用されていた超大型双胴機『アークトゥルス』。『カリヴルヌス』が機能不全となり、レーザー中継機としての装備が無用の長物と化したため、代わりにミサイルや機関砲を大量に搭載したガンシップへと改造されたのだという。

考えるまでも無く、その目的はオーレッドの空爆。あわよくばハーリング、ニカノール両首脳を会談前に亡き者にする積りだろう。肝心の和平会談が始まる前に空爆が行われてしまえば、憎しみの連鎖は続き、終戦への努力も水泡に帰しかねない。よって、『アークトゥルス』追撃も必ずや成功させる必要がある。

本件は情報を得てすぐさまサピン側へも一報を入れたが、十数分が経った今も返答はまだ届いていないのが現状だった。

すなわち大詰めはこの段階になって、戦場はスーデントール北方、敵増援の阻止、そして『アークトゥルス』追撃へと三分されたのである。

《無理を言っているのは重々承知で、敢えてお願いする。可能な限り戦力を出し、力を貸して欲しい》

「…可能な限り、たつて…」

「PJ、こつちの頭数は？」

「……今朝の時点で25名です。単純割りで、一目標につき8名」

「いや無理だろ…」

絶望に満ちた誰かの言葉が、重石のように皆の腹に沈んでゆく。

単純に言えばそれぞれ2飛行隊で向かう計算だが、まさか三国から出るスーデントール増援の飛行隊が最低でも4飛行隊より少ないことはあるまい。『アークトゥルス』追撃に關しても、サピン領空を横切らなければいけない以上、サピン軍とのゴタゴタも考慮しなければならず、確実性があるとは言い切れなかった。

「ピーター様、バルトライヒ山脈北の敵戦力はどの程度か、判明はしておられますか？」

《スーデントール方面と比べると少ないようだが、地对空<sup>S</sup>ミサイル<sup>A</sup>を中心とした対空陣<sup>M</sup>



地の他、護衛機の存在も確認されている。友軍はバートレット…もとい『ハートブレイク・ワン』以外にもユーク軍機が数機合流する予定だ』

画面の向こうでは、ノイズ交じりの画面の中に該当地域の地図が映し出されている。水路が走り大きく開けたスーデントールとは対照的に、こちらの平地は猫の額のように狭い。要所要所に設置された対空陣地は攻撃しがたい位置に巧妙に設けられているものの、これならばある程度機数を減らしても対応可能なようにエリクには見受けられた。問題は護衛機の種類と数だが、主戦場が南になることを踏まえると、そう多くは割いてくるとは思えない。

頭の中で戦術を組み、武装を合わせてゆく。

『クファイルC10』でないのが残念だが、状況を考えればY a K—38Mでもできないことはない判断された。

「よし、トンネル出口の方には俺が行く。あと2人ほど連れて行かせてくれ」

「エリク様…!?しかし、たった3人では…」

「こつちには友軍もいるんだし、増援阻止に戦力を割いた方がいい。第一俺の『フォージャー』じゃ空戦に出ても足手まといだ」

「そーいや三日月のは『テュールの剣』攻撃でも対空陣地攻撃の経験があつたもんな。確かに適任か」

「となると、あとは2戦場に200人を割く訳だが。…それでも少ないな…」

レイモンドの肯定の言葉に場が落ち着くも一瞬、続く傭兵の一言に再び空気が沈む。何せ目標は大編隊が予想される増援の阻止に加え、怪物機と評している『アークトウルス』の撃墜なのである。間近に巨体を見たことはあるが、護衛も就いているであろうあの巨人機を、わずかな機数で墜とせるとは到底思えない。

動き始めた空気が再び停滞する。澱のように言葉が澱む。費やす余裕のない時を、沈黙は否応なく食い潰してゆく。

廊下、走り寄る音。それはやがて扉を打ち、声となつて空気を破った。

「失礼します。たった今、サピンの空軍基地より秘密裏に電文が入りました。サヤカ様宛てと、エリク様宛て一通ずつです」

「俺にも?」

「…! ありがとうございます。助かりました」

ついと席を立ちあがり、サヤカは通信兵らしい若い兵士からもぎ取るように電文を受け取る。集った皆の前で開いたそれには、白地にさつぱりとした簡潔な文章一つ。

《発：サピン王国空軍第7航空師団第19戦闘飛行隊長 ニコラス・コンテステイ少佐

『さびんノケツハさびンデ拭ク。任サレタシ』

宛：ルーメン・メデイエイシヨナル・エージエンシー サヤカ・タカシナ殿》

「これは……」

『アークトウルス』はサピンで追撃するって事か？……このニコラスって奴、信用できるんだらうな？」

「多分大丈夫だろう。あれはこういう時に嘘を付ける人間じゃない」

「詳細は後程確認致しますが……いずれにせよ僥倖でございます。これならば、戦力を全てスーデントールへの増援阻止に投入できます」

受け取った電報を手にしたまま、エリクもサヤカの言葉に首肯した。

10ずつの分散から、20の一斉投入へ。足し算の上では答えは同じだが、戦場ではその結果は必ずしも同一ではない。一群が大きければ大きいのに越したことは無いのだ。

《サピンの協力が得られるとは。流石はサヤカ女史、御見それしたよ》

「うふふ。わたくし皆さまを希望で照らす太陽でございますので」

《?……ともかく、そちらの戦力配分は一任しよう。こちらは以降、ラーズグリーズへの支援に注力する。『アンドロメダ』の解析情報も逐次送るから、通信には注意してくれたまえ》

「了解しました。——では、整理致しましょう。まずバルトライヒ山脈北方、敵陣地への攻撃はエリク様を中心とした3機」

「おう！」

「スーデントールへの増援阻止に関しては、各基地の位置を考慮しますと——ここ。『円卓』上空が最適と判断されます。こちらはパスカル様を指揮官とした計22機。『円卓』上空に展開し、レクタ等三国からスーデントールへ至る敵増援を阻止します」

「了解しました」

「最後に、『アークトゥルス』追撃はサピン空軍のニコラス様ほか。念のため、ピーター様からオーシア首都防空部隊へもご連絡をお願いしたく」

《ああ、もとよりその積りだ。——ここが正念場だ。私は後方にいることしかできないが……皆、どうか、頼む》

モニターの向こうで、頭を下げるピーター参謀。

苦笑いする者、頭を掻く者、やれやれなどと口にする者。傭兵らしい斜に構えた反応の数々だが、その表情に先ほどもまでの絶望に染まった影はもはや滲んでいない。

今までは、一寸すら見えない暗闇だった。だが今は、細いがはつきりと一本の道が見える。ならば、その道を一心に目指す以外に無い——そう、皆が本能で知っているかのように。

笑い合い、冗談を飛ばし合いながら、兵士たちは場を後にし自らの愛機の元へと向かってゆく。席順の関係で、後に残るのはサヤカとパスカル、そしてエリクの姿。

「パスカル大尉」

「はい?」

「必ず、お互い生きて還ろう。あんたみたいなエースが、ウステイオには…世界には必要だ」

「あはは、それほど私に大した価値があるとは思いませんが…でも、そうですね。この戦争が終わったら、やってみたくとも色々あります。叔父が好きだったというポロも、習ってみようかな…なんて。いずれにせよ、こんな所では死ねません。…エリックさんも、どうかお気を付けて」

「ああ。ありがとう」

爽やかな笑顔を残し、パスカルは踵を返して部屋を後にする。本心を語ったエリックの言葉を、そのまま呑み込み込み背負ったような、エースらしい凜とした笑顔だった。

脚を踏み出すエースを見送り、最後に顔を向けるのは、モニターの前に残ったサヤカの方。

「行ってくる」

「はい。お帰り、お待ちしております。エリック様」

瞳と言葉を交わして、サヤカは笑顔で応じながら自身の下腹部を優しく撫でる。

『…ばあか』

その意を悟り、急にどぎまぎとした感情が胸に迫ったエリクは、その言葉を残して部屋を後にした。赤くなつた頬を、廊下の寒気に漂わせながら。

決戦、である。

バルトライヒ山脈北方、スーデントール、円卓、そしてサピン。

たとえ離れた戦場でも、これまでの縁が一つの理想へと向けて集い、戦いへと向かつてゆく。分かれたれた空は、今こうして、一つへと繋がつてゆく。

扉を開き、露天に駐機した自らの機体へと向かつてゆく。

空はあいにくの曇天、しかしながら、その道は明るい。

「エンジン回せ！『フォージャー』も出すぞー！」

『信念ヲ胸ニ行ケ ヒトツナギノ空へ』。

差出人の名すらない、朴訥とした電報の紙片を胸ポケットにしまつて、エリクは声を張り上げた。

# 第38話 Break of Dawn (前) —くろがねの双頭竜—

キャノピーの防弾ガラスの上天を、真珠色の三日月が照らしている。

冷たく澄んだサピンの空に、はつきりと輪郭を際立たせた上弦は、さながらまさになり下ろされる斧<sup>メツザール</sup>。際立つ刃は星の光をかき消して、黒と白の冷たいコントラストだけが、12月の凍空を彩っている。

眼下には、月夜に朧に浮かぶ田園風景。冬小麦の播種が終わってまだそう日は経っていないらしく、地表には往時を思わせる麦穂一つの面影すら見て取ることはできない。冷たい空、そして生命の息吹もまばらな地表。凍える天と地の間で、自らの呼気の音と、先ほどからラジオを介して流れる知己の男の声だけが、辛うじて人の気配を伝えてくれている。

時に2010年12月30日、午後8時00分。

まるで月光に誘われた蝙蝠のように、翼端を黒く染めた4機の機体が、サピンの月の下を駆け抜けていった。

《ペステータ市郊外上空を通過。航路消化、順調です》

《にしても、ニコラス少佐もやるもんだねえ。反逆の誹りも恐れず演説で義勇軍を募るなんざ、なかなかの男っぷりじゃないか》

「二ムロッド2、私語は慎め。今はどこにベルカ残党の目が光っているか分からん」

欠いた機首に設けられたエアインテーク。葉巻型の胴体に、小さな切り欠き三角翼。そして尾翼を彩る蝙蝠のエンブレム。もはや時代錯誤とすら言っている旧式のシルエット——MiG—21UPG『デイビナス』から、カルロスは後方の列機へと声を送る。2番機のフラヴィは冗談めかして笑ったきり黙りこくり、周りは再び、自ら以外の音すらない静寂に浸されていった。

静寂は、漆黒は、脳裏の想いを想起させる。カルロスはしばし、今に至る経緯を——激動と言っているその流れを、しばし反芻した。

あのレクタの兵隊崩れ——エリクがヴェスパルテ基地を去ってから小康状態を保っていた事態は、今日になって大きくうねりを見せた。

発端は、L・M・A.のサヤカからもたらされた情報である。

実際の所、カルロスの所属するレオナルド&ルーカス安全保障はL・M・A.との企業としての繋がりも深く、エリクがヴェスパルテを去って以降も、サヤカからは頻繁に連絡が入っていた。殊に今月中旬以降からは本格的に対ベルカ残党勢力に肩入れする気になったらしく、オーシア内部の反抗勢力の存在やベルカ残党の暗躍、秘密裏に行わ



れる和平交渉の状況などを逐一伝達するようになってきたのだ。無論一傭兵に過ぎないカルロスには何ら手の出しようもない情報ではあるが、カルロスはそれらを整理し、注意深く伝手を辿って、正規軍のニコラスへ渡るように手配した。ベルカ戦争で活躍し、それ相応に中央とのパイプも持っているニコラスならば、然るべき筋へそれらの情報を繋げるのは不可能ではないという判断ゆえである。

事実それは功を奏し、サピン内においても停戦に向けた準備と空気の醸成は徐々に為されつつある状況にあつた。

——だが、今回の一報は、これまでと一線を画したものだつた。

オーシア・ユーク両首脳による平和会談の実行。ベルカ残党が保有する核兵器『V2』。占拠された戦略衛星軌道砲『SOLG』。——そして、両首脳会談の場であるオーレッドへ向け出撃準備を進める、サピンの大型双胴機『アークトウルス』。戦略上、それどころか現在の世界情勢にさえ大きな影響を及ぼす兵器の存在が、3つ同時にもたらされたのである。

サヤカからの入電は、午後3時過ぎ。最低限の情報交換を済ませたカルロスは、すぐさまニコラスに連絡を取り、上層部への上伸を求めた。いくら秘密兵器とはいえ、結局は軍という組織の管轄にある兵器である。あわよくばトップダウンで『アークトウルス』出撃中止が下命されることを期待してのものだつた。

だが、その目論見はあっけなく頓挫した。

そもそも『アークトゥルス』はその配備地域の関係上第2航空師団の所属になるのだが、今朝から師団長を含めた幹部連と連絡が取れないというのだ。それどころか、上伸した統合本部からも『和平交渉の成り行きを注視するため、各戦闘飛行隊は積極的な戦闘行動を抑制せよ』という事実上の全軍出撃停止が下命される事態となった。これには『アークトゥルス』も含まれるため一応の制止を行ったようにも見えるが、万が一『アークトゥルス』がこれを破り出撃を強行した場合、それを止める戦力が不在ということにもなる。

『上も全く話にならねえ。…なあカルロス、どうすりゃいいんだ、俺』

電話口で成り行きを伝え、絶望と悲哀に声を震わせるニコラス。

状況を呑み込み、サピンの背景を考慮に入れて、カルロスは推測を巡らせた。

ニコラスの上伸を退けずあくまで全軍に行動中止を求めた所から察するに、第2師団による『アークトゥルス』の独断運用は上層部にとって予定の外であったと見ていい。しかしそれならば、離陸前の現時点ならば強権で以て『アークトゥルス』出撃を止める程度は造作もない筈である。この理由は、地域の和平仲介というサピンの大義名分と、オースシア・ユークとも異なる第三勢力としてのサピンの立場を重ねると、おのずと透けて見えて来る。

要するに、サピンにとっては『アークトゥルス』による攻撃が成功した方が都合がいいのである。

もしこの攻撃で両国の首脳が死亡した場合、オーシアとユークトバニアの両大国は確実に弱体化する。同時に、ここ東方諸国における両国の同盟国も動揺し、戦力面で大幅に弱体化するに違いない。そこで独自の立場にあるサピンが仲介に当たることで、一気に東方諸国…否、オーシア大陸におけるイニシアチブを握るといふ筋書きである。当然その結末はベルカ残党にとっても願ったり叶ったりという訳であり、サピン国内のベルカ残党とサピンのタカ派が結んだ可能性もあると見ていいだろう。

勿論、仮に攻撃が失敗し和平交渉が成立する可能性も存分にある。そうなった場合に備えた『言い訳』として、全軍への飛行停止命令は下されたのに違いなかった。

『……冗談じゃねえ、冗談じゃねえぞ！ふざけんな!!俺たちはベルカじゃないんだ。そんなサピンの繁栄なんて望んじやいねえ！糞喰らえ!』

『落ち着け。それに、そうそう筋書き通りに事は運ばない。下手をすれば両同盟からの報復攻撃でサピンは滅亡だ』

『…分かってる。いずれにせよ、これはサピンの手で止めなくちゃならねえ。俺はこれから師団長に出撃の談判に行ってくる。カルロスも手貸してくれ』

『……俺は……』

傭兵としての契約の範疇外。

企業の人間として、部隊長としての理性から口にしかけたその言葉を、脳裏に掠めた本能が押し留めた。

去来するのは、去り際の口論を交わしたエリクの顔。

歯を食いしばって絶望を乗り越え、微かな未来の光に手を伸ばす姿。溢れる熱情と感情を、芯となる信念を宿した、その瞳の色。脳裏を過ぎった記憶の姿は、もがき、足掻いて、ようやく信念を掴んだ、かつてのある青年の姿を思い出させる。

指揮官としての責任を抱き、理性で固めた心。その隙間から、15年前の青年の激情が顔を覗かせた。

『…今回だけで。違約分の金と燃料代は補填してくれるんだろうな』

『1970年物のアルロン産ワインでどうだ？終戦が成ったら打ち上げに一杯』

『お前な、ワイン1本って…いやもういい、いつそ何でもいい。——とにかく、攻撃阻止に全力を挙げるぞ。俺たちだけじゃ手が足りん。何とか人間をかき集めてくれ』

『任せとけ。予測進路を踏まえると…2005時、ペステータ市の西10kmで落ち合おう。そうそう、後で電報送つとくから、そっちからL. M. A. に送ってやってくれ。んじゃ後でな』

がちやり。口早に電話を切り、ニコラスの声が途切れる。あれから15年も経つとい

うのに、調子がいいのは相変わらずと言うべきか。

電報、か。

ニコラスの最後の伝言に、ふとカルロスは興味を覚えた。基地の脱走から同道しているとすれば、エリクは今もL. M. A. のサヤカの元にいるはずである。

ついでに、送っておいてやろう。あの日最後に伝え損ねた言葉を。

国境があり、人と人という存在の境界がある以上、空は一つに繋がることはない。それでもなお、人としての激情を以て目指せ。——<sup>Skiis of Scandinavians</sup>ひと繋ぎの空を。

《隊長、前方に友軍機の反応あり。エスクード隊と思われませう。…隊長?》

「…いや、何でもない。こちらでも確認した」

4番機のアレックスの通信が、カルロスの意識を現実へと引き戻す。物思いに耽っている間にやや進路がずれてしまっていたのだろう、機体方位は真西から5。ほど北へと傾いてしまっていた。

月光に照らしあげられた、朧な空。人の目の行き届かない薄暮の中でも、『ディビナス』のリーダーは目の前を飛ぶ機体の姿を捉え、ヘッドアップディスプレイ上にその姿を照らしあげている。

中央は、大型の四発機に大型レドームを備えた早期警戒機E-3C『センチリー』。その左右に4機ずつ侍る編隊は、コクピット横まで張り出したヒレのような

主翼全縁付け根延長や外向きに傾斜した垂直尾翼と言う特徴から見て、サピンの主力機であるF/A-18『ホーネット』シリーズと見ていいだろう。

そして先頭を先導する4機は、大型のカナードとデルタ翼、双発のエンジンが特徴的な大型戦闘機。月明かりに照らされる赤地に黄色い十字の塗装。パターンも見て取って、カルロスはその機体の横へと機体を進めた。いうまでも無く、『エスクードー』ことニコラスが駆る『タイフーン』である。

《よう、待ってたぜ。たく、慣れない演説モードキなんてするもんじやないな》

「演説ぶち上げて頭数を集めろとまでは言っていないがな…。それより、空中管制機までよく出て来れたな」

《何、師団長が聞き分け悪かったからな。一発『コレ』よ》

キャノピー越しにこちらを向いたニコラスが、左拳を握って前に突き出すジェスチャーを見せる。察するに基地側の理解が得られなかったため、おそらく師団長を殴り倒して出撃して来たのだろう。殴られた師団長に関してはとんだとばっちりと言うベキか、ご愁傷様と言わざるを得ない。

それにしても、全軍への飛行停止命令が下されている中で、これだけの戦力が集まったのは驚くべきことだろう。15年前の戦争を生き残ったエースパイロットとしてニコラスの名はある程度浸透しているが、おそらくはそれだけが理由ではないだろう。

ニコラスが無線で語り続けた、全土への激。融和と協調を語る男の熱い思いが、人を動かしたのではないか。編隊の先頭を切って飛ぶ親友の姿に、少なくともカルロスはそう信じた。

《こちら空中管制機『デル・タウロ』。ニムロッド隊の合流に感謝します。周辺空域に合流を企図する他飛行隊なし。参集各機は方位340へ変針し、『アークトゥルス』追撃を開始して下さい》

《エスクードー了解。各機続け！》

先頭に立つニコラスの『タイフーン』が翼を翻し、『デル・タウロ』を除いた15機がそれに倣って北寄りへと進路を取る。眼下は漆黒の大地から月を反射する水面へと変わり、編隊がオーレット湾に至ったことを物語っていた。こちらの方位を考えれば、オーシアーサピン国境を南下して来る『アークトゥルス』に対し、こちらはオーレットに至る湾上空へ先回りした形になる。

《『デル・タウロ』、目標の状況は？》

《目標『アークトゥルス』は現在フトウーロ運河に差し掛かり、方位190へ変針。そのままフトウーロ運河を南下してオーレット湾に出るものと見られます。相對距離およそ8200、あと数分で可視領域に入ります。周辺には随伴機と思しき反応が6、いずれも第2航空師団所属機と思われまます》

《やれやれ、嫌な感じだ。 15年前を思い出すな》  
「…同感だ」

サピンの超兵器に当たる『アークトゥルス』、そして護衛に就くサピン軍機。苦虫を噛み潰したように声を押し殺すニコラスに、カルロスも声を潜めて応えた。

両名の想いが向かうのは、15年前。ベルカ戦争終息後に勃発した、クーデター組織『国境なき世界』との戦闘である。国籍を問わず集った組織との闘いの中で、カルロスもニコラスも、同じサピンの軍人と戦う羽目になった。味方であった筈の人間と、敵として殺し合う。その記憶と経験は、15年を経た今もなお苦い。

それに加え、彼我の位置から見た予測戦域が、カルロスの心に引つかかった。北西を指すこちらに対し、フトウーロ運河を南下する『アークトゥルス』の速度を鑑みれば、おそらくこのまま行けばフトウーロ運河の出口付近で交戦することになる。紛れもなくその地点は、15年前の『国境なき世界』との戦闘で、カルロスとニコラスが最後に交戦した場所であった。

この地でカルロスは、かつて同じ部隊の先輩であり、後にクーデター軍に合流した男を撃墜した苦い記憶がある。

もし、この地での戦争の終幕も、ここフトウーロ運河で降りるといふのなら。神の悪戯と言うにはあまりにも意地の悪いやりようを、カルロスは呪わずにはいられなかつ



た。

月を照り返す、遮るものの無い水面。揺らぎ、狭まるそれらは北へと延び、やがて五大湖へ至るフトウー口運河へと連なつてゆく。

闇の幕を帯びた、北の空。そこに闇からにじり出たような朧な巨影が遠目に映つたのと、ニコラスが声を上げるのは同時だった。

《あれだな……。エスクードー、敵機視認！一応俺が警告を出す。各機、戦闘用：》

《『デル・タウロ』より各機！『アークトウルス』、ミサイル発射！》

「――<sup>フレイク</sup>散開！――」

ニコラスの通信を、管制官の声が断ち切る。

方位、ほぼ正面。発射数不明。最低限の状況を確かめ、カルロスは増槽を投下。同時に安全装置を解除し、翼下からフレアを放出しながら左へ機体をロールさせた。敵のミサイルも近接信管の感度も不明な以上、ある程度大きく機動する方が回避の上で都合がいい。ちらりと視界を巡らせると、『タイフーン』や『ホーネット』もそれぞれにチャフやフレアをばらまき、ミサイルの矛先を欺瞞しながらそれぞれの回避運動に入っている様が見えた。

正面、ミサイル1。相対速度で音速を優に超えるそれは、誘導で曲がる気配も無くまっすぐにこちらへと飛翔して来る。チャフに欺瞞されたのか、それは最右翼の『ホー

ネット』編隊の傍ら、見当違いの位置を通過し——翼を掠めて通過しかけたその瞬間、凄まじい衝撃波を生じて炸裂した。

その瞬間を、カルロスは見てしまった。

ミサイルの弾頭が炸裂するその瞬間、爆炎に無数の小弾が飛び散るのを。そしてそれらが散布領域内にいた4機の『ホーネット』を粉々に切り裂き、瞬く間に鉄屑の塊に変えるのを。

ただのミサイルでは無い。フレッシュエット弾頭などを仕込んだロケット砲の類でも断じてない。たった今日にした光景が、そして15年前の忌まわしい記憶が、その推測を否定している。

この威力は、光景は、15年前の『ここ』で目にしたことがある。

《こちら『デル・タウロ』。レボルベル隊4機の反応がロスト。何が起こっているのですか?》

《……こちらエスクード2!ミサイルとすれ違ったレボルベル隊が、一瞬で粉々に……!》  
《な……!?!》

《……カルロス》

「……間違いない。『アロンダイト』だ」

《……冗談じゃねえ……!連中、まさかあんなものをオーレッドに撃ち込む積りか!?!くそ、全

機へ！今のは散弾ミサイルだ！絶対に正面からすれ違わず、大きく旋回して回避しろ！  
掠めただけで死ぬぞ！》

狼狽の音が錯綜し、編隊の機動が怯えたように乱れてゆく。カルロスは自らの編隊を  
散開させたまま、千々に千切れて落ちてゆく『ホーネット』の残骸に奥歯を噛み締めた。

コードネーム『アロンダイト』。それは旧ベルカ公国軍が開発し、後にクーデター軍に  
よって運用された多用途炸裂弾頭ミサイルである。一説にはベルカの次期主力機に搭  
載される予定だった散弾式ミサイル『ハイパーシン』と同型、またはそれを元にした量  
産検討モデルとされているが、今となつては定かではない。戦後もサピンで開発が継続  
されたという噂は聞いていないが、秘密裏に接收していたのか。それとも、ベルカ残党  
からもたらされた物なのだろうか。

いずれにせよ、分かっていることはただ一つ。

オーレッドを、『あれ』の射程範囲に入れさせる訳にはいかない。

「エスクードー、高機能<sup>X</sup>長距離<sup>L</sup>空対空<sup>A</sup>ミサイル<sup>A</sup>撃てるか!？」

《いつでも行ける!》

「第一射で敵の護衛機を排除してくれ、その間にこちらが先行して攪乱する。懐に入れ  
ば敵は『アロンダイト』は撃てない……!」

《乗った!グラナーダ隊各機、こちらの後方に就け!エスクード各隊、X L A A用意!—

—発射!—

4機の『タイフーン』の主翼下に炎が灯り、煙の尾を曳いて矢の如く放たれてゆく。その背を追うように、カルロスはフットペダルを踏みこんで増速。軽快な機体に加速性能に優れた形状の『デビナス』は、冷たい夜風を孕んで速度を増していった。『アークトウルス』までは距離3400ほど、機銃はおろか赤外線誘導式空対空<sup>A</sup>ミサイル<sup>M</sup>すらまだ到底届かない。

《はは、あんな訳わからぬものに突っ込ませるなんざ隊長もイかれてるね!—》

《私やそうなたら即脱出しますよ曹長。まだ死にたくないっすからねえ》

「それでいい、ブラッド。全機、『アロンダイト』とすれ違う時は敵ミサイルに腹を向けろ。最低限装甲圧でコクピットは守れる。——来るぞ!—」

4機のMiGを突き放し、XLLAAが敵編隊へ殺到する。

フレアの放出につかの間照らされる巨人機の相貌。それでもなお相殺しきれない矢の掃射に、護衛機のうち2機が瞬く間に炎に包まれ爆発、残るうち2機は真上へ急上昇し、残りは1機ずつ左右へ広がってゆく。

空域に漂う炎の残滓と黒煙を割くように、ミサイルアラートが鳴り響いたのはその直後のことだった。

「散開!—」

主翼外側フレアディスプレイスパークポッド作動、内側ガンポッドよりチャフ弾発射。

熱と電波、二つの要素を欺瞞しながら、カルロスは操縦桿を右、次いで手前へ引き上げる。

心音のようなミサイルアラートが、徐々に大きく、間を詰めて近づいて来る。迫る焔の跡はこちらではなく、散開した左手側。横目に捉えられた、高度を下げて回避行動に入るブラッド機の方向。

「ブラッド、ロールだ！頭上を庇え！」

《あああもう、貧乏くじいい！》

炸裂。

閃光はしばし視界を幻惑し、暗順応した目がつかの間僚機の姿を見失う。

違う。相応に距離は置いた筈だが、近接信管にしては反応が鋭敏過ぎる。母機からのコントロールか、それとも弾道ミサイル同様、事前入力式か。

——ブラッドは。

「ニムロッド3！ブラッド、無事か!?!」

《ぐあー…、つくそ、こちらニムロッド3。体は幸いぴんぴんしてますが、腹で受けたらレーダーも主脚も逝かれちゃいました。エンジンも駄目っばいですこりゃ》

「体が無事ならそれでいい。脱出しろ」

《残念だったねえブラッド！あんたの分までアタシが食つといてやるからさ！》  
《ちえっ！》

水平を取り戻したブラッドの機体からキャノピーが吹き飛び、次いで射出された座席からパラシュートが宙を舞う。これで、残存は3機。目前には既に『アークトゥルス』の巨体が迫り、距離は1500を割っている。

AAM有効射程圏内に至り、カルロスは月明かりに目を凝らして『アークトゥルス』の姿を観察する。

旧ベルカ公国の爆撃機であるBm-335『リントヴルム』を横に2機繋げ、威圧感を醸し出す主翼幅。遠目には定かではないが、ガンシップに改造されただけあり、機体上部には機銃らしき砲身が複数屹立している様が見て取れた。片や機体下部は影になつて判断が付きがたいものの、元々装備していたレーザー偏向機器が機体中央部から排除されているように見受けられる。代わりに二つの胴体を繋ぐ連結部は厚みが増しており、爆弾倉か、何かしらの設備を増設したらしいことが察せられた。

「二ムロッド各機、射程に入り次第AAMを発射。敵機上方を掠めて後方へ抜ける」  
《アレックス、対空砲火に注意しな！》

《了解！》

相對距離、1300、1100、1000。

巨体が眼前に迫る。

機首上部の機関砲から閃光が爆ぜる。至近を擦過する曳光弾の筋は、しかしその数も威力も、せいぜい並の域を出るものではない。

ガンレティクルに納めるのは、向かって右側の胴体。照準からはみ出るほどの威容を浮かべる、双胴竜の片割れ。

引き金と同時に放たれた機銃弾、そして後方の2機から撃ち込まれるAAM。尾翼を掠めすれ違った先で振り返ると、『アークトゥルス』は爆炎にシルエツトを浮かびあげるも一瞬、すぐに元の闇へと包まれていった。

ガンシップとして改造された以上、やはり装甲も相応に強化しているのだろう。戦闘機ならば一撃で撃墜しうるAAMでさえ、『アークトゥルス』は揺らぎすらしていない。

《なんて硬さ……!》

「ニムロッドよりエスクード1、『アークトゥルス』本体への攻撃は望み薄だ。エンジンかコクピットを狙った方がいい。こちらは護衛機排除を優先する」

《頼む。グラナーダ隊は上に抜けた2機を抑えてくれ!この距離じゃ『アロンドナイト』は撃てやしない。ちよつと心は痛むが……きつちり叩き落してやる!》

エスクード隊の後方から離れ、直上の2機に対し急上昇していく4機の『ホーネット』。エスクード隊の4機はその影を振り切りながら、左右2機ずつに分かれて『アーク

トウルス』の真正面から肉薄してゆく。おそらくは左右のエンジンを先に狙う積りと見て取りながら、カルロスは乗機『デイビナス』を右旋回させ、同高度に留まる2機の護衛機の姿を探した。わずかな月の光の下ではあるが、MiG-21bisから換装したレーダーとHUDを搭載した『デイビナス』ならば、機械の眼を以て捉えられる。

——いた。11時方向、エスクード隊に対して横方向に迂回し、後方から襲い掛からんとする『タイフーン』が1機。もう1機右方向にもいるはずだが、そちらは『アークトウルス』の反応と重なり姿を捉えることはできない。

「ニムロッド2、空域にもう1機護衛機がいるはずだ。そいつを探して叩け。あの1機は俺とニムロッド4で対応する」

《あいよ隊長！》

右翼へと離れるフラヴィ機を横目に、カルロスは機体を増速させる。時間的な余裕がない今、エスクード隊の攻撃を妨げさせる訳にはいかない。

右手に『アークトウルス』を追い越しながら、正面にはエスクード3と4の2機、そしてその後方には回り込んだ敵機がほぼ正面。距離にして1800、長距離ミサイルはおろかAAMすら積んでいないカルロス機にはまだ遠い。一方で、XLA Aが搭載可能な『タイフーン』には十分な距離である。

「ニムロッド4、セミアクティブ空対空ミサイル用意。牽制でいい。こちらはエスクー



ドの後方を護る」

《了解しました!》

半月前と比べれば頼もしくなったアレックスの声に、カルロスは微かに頬を和らげる。負傷したオズワルドに代わり戦場に立つようになってまだ日も浅いが、それでも多くの戦場を潜り抜けて成長していく様は、好感の持てる姿だった。もしこの戦争がもつと続けば、と想像するのは不謹慎かもしれないが、その技量は一層のペースで上達していくに違いない。

頼んだぞ。口内にそう呟き、カルロスは操縦桿を右へと倒した。

横倒しにロールした視界の中で、頭上をエスクード隊の2機がすれ違ってゆく。

その先、『タイフーン』。ミサイル発射2連。

通信に『FOX』の音が響く。

『タイフーン』が機首を上げる。

操縦桿、手前。右ロールからの旋回で割り込むのは、エスクード隊とミサイルの間。

照準の中、何も無い空間。そこへ向けカルロスは引き金を引き、翼下の23mm2連装ガンポッドから曳光弾とチャフ弾を撃ち放った。

ばら撒かれた金属片は電波を反射し、電波誘導式のミサイルの眼を狂わせる。

目標を見失い慣性の虜となって落ちていくミサイルを横目に、カルロスは機体の機首

を立て直し、操縦桿を引き上げて天を仰いだ。

天を照らす三日月の傍らには、急上昇からの宙返りでS A A Mを回避する『タイフーン』と、その背を追って必死に追隨するアレックス機の姿。

《く、振り切られる…！》

宙返りの頂点で引き揚げ損ね、『タイフーン』を射界から外すアレックス。機体を水平から下降へ戻し、降下加速する敵機の背を追い始めるも、その距離は徐々に開いてゆく。敵機の機動、そして降下の終点を見定めて、カルロスはその予測地点へ向け操縦桿を倒した。降下の終点、加速が乗り切ったその瞬間は、いくら『タイフーン』といえども横方向への運動性は鈍る。

横合いから回り込み、狙うは機首を上げる『タイフーン』の側面。

引き金、機体から放たれるは光軸五筋。光の網に絡め取られた敵機は、辛うじて機体を捻り致命傷を回避するも、半ばきりもみ状態となり自ら速度を殺してしまっていた。

「今だ」

《は…は…は…！》

空中の的と化した『タイフーン』へ、アレックス機から23mmの曳光弾が殺到する。

頭上を抑えられ、強みの速度を殺された『タイフーン』に回避の術は無く、それは四散五裂しながら、オーレット湾の水面を照らした。

《はあつ……こ、こちらニムロッド4！1機落としました！》

《ニムロッド1よりニムロッド2、こつちも一丁上がりだ。大型狩りは気分がいいねえ》

「よし。引き続きエスクード隊のフォローに入る。残るは……」

フラヴィの通信に応えながら、カルロスは錯綜した戦場を見上げ、互いの機位を確かめる。

頭上、右手に通り過ぎるのは『アークトウルス』の巨体。左右の両翼から火を吐き、エンジンへの損傷が見て取れる。心なしか高度も落ち始めており、エスクード隊の攻撃は功を奏したようだった。エスクード隊の4機はそれと交差しこちらの左手上空、4機が結集し反転に入りつつある。

さらに、その頭上。

護衛機2機を追ったグラナーダ隊の行方を確かめようと頭を上げたその瞬間、カルロスの背は凍り付いた。

エスクード隊の後方上空から、2つの機影が急速に迫っている。敵味方識別装置<sup>F</sup>反応は、敵。上空にグラナーダ隊の4機は——いない。数の差で以て敵機を抑えているはずの『ホーネット』編隊は、たった1機の姿すらも認めることができない。

まさか。

《よーし順調だ。各機、反転してケツを……》

「待てニコラス！加速しろ、早く！」

焦燥したカルロスの言葉を、2機から放たれたミサイルが無残に断ち切る。

先にこちらが示した通り、頭上後方は戦闘機にとつての死角。まさにその形を襲われたエスクード隊に逃げる術は無く、続けざまのミサイルは次々と紅の機体へと着弾。咄嗟に右下方へ回避したニコラスを除き、紅蓮の『タイフーン』の体は、それより鮮烈な爆炎の赤へと飲み込まれ千切れていった。

《な…!?おい、お前ら!?…くそ！なんてこった…!》

「ニムロッド2、エスクード1を援護しろ！こちらは高度を失つてまだ追いつけん！」  
《了解！ち、なんなんだいあいつら…!》

後方のアレックスを確認する間すら惜しく、カルロスは操縦桿を引き、フットペダルを強く踏み込む。『アークトウルス』撃墜は最優先だが、あのような敵機がいてはその追撃すら危険が伴う。今は、ニコラスと連携して護衛機を殲滅するのが先決だった。

まだ遠い空の先で、2機びつたりと揃った敵機は降下から加速を得て急上昇。ニコラスの『タイフーン』を振り切るや2機に分かれ、1機が宙返りの直上から掃射、もう1機は回り込んで後方を捉えんとする構えを見せた。フラヴィイの『デビナス』は加速し、後方を捉えんとする1機の背を捉えつつある。すなわち、逃げるニコラスの背に敵機、さらにその背にフラヴィイという位置取りである。残る1機は再び急上昇し、フラヴィイ機

の背を下から追いつつあった。

遠目には定かではないが、敵機は2機ともデルタ翼機。しかし主翼形状といいエンジン回りの形態といい、サピンはおろか各国が所有する主力機とはいずれも違う姿である。

しかしカルロスは、その姿を、その飛び方を見て、胸騒ぎを覚えていた。垂直方向への機動や2機の連携を主としたあの飛び方は、そして無尾翼デルタの特異な機体形状は、いずれもかつて、別々の場所で見えた記憶がある。

ニコラスが減速旋回し、誘いの機動を取る。フラヴィーがその隙を突くべく、一気に加速する。

記憶の糸が手がかりを掴み、その光景をカルロスの脳裏にまざまざと蘇らせたその瞬間。カルロスはコールサインも忘れ、思わず叫んでいた。

「……ニコラス、フラヴィー、逃げろ!!」

《はあ!!隊長、今更何言っ……うあっ!!》

だが、全ては遅かった。

手を伸ばすように叫んだ声が届く一瞬先、ニコラスを追っていた1機は機首を真上に上げて急減速。フラヴィーのオーバーシュートを誘うと同時に、最後方の1機が急加速してフラヴィーを追い抜き、一気にニコラス機を射程に収めたのだ。

オーバーシユートに動揺したフラヴィが機動を乱す。

速度を失ったニコラスが、辛うじて旋回降下で矛先を躲す。

錯綜した曳光弾の筋は『タイフーン』の右主翼を、『ディビナス』のエンジンを貫き、三日月の下に爆発の炎を描き出した。

《フラヴィ曹長!!》

「ニムロッド2、脱出しろ!」

《…ああくそ、お気に入りの機体だつてのに!!》

炎に包まれる機体から煙が爆ぜ、パラシユートが月下に舞う。フラヴィの生還に安心する間もなく、カルロスは機首を翻し、錐揉みで急降下して逃れたニコラス機の傍らへと位置どつた。敵の2機は再び結集し、頭上でこちらを睥睨しながら旋回している。

《見たことない機体だ。分かるか、カルロス》

「確証はないが、昔エルジアで見た覚えがある。確か：X—02とかいうエルジアの試作機だつた筈だ。尤も飛んでる姿は今が初めてだが」

息を荒げながら問うニコラスに、カルロスは記憶を頼りに答えを返す。

そう、既存の機体に無いその姿を見たのは4年前のユーディア大陸でのこと。大陸戦争終結の後、反抗を画策したエルジア軍残党組織であるところの自由エルジアに雇われた際のことだった。格納庫に数機駐機しているのを見た程度だが、その高性能は自由エル

ジアの青年将校が自慢していたのを記憶している。

尤もそれらの試作機も、あの『リボン付き』の手で全滅させられたという話らしいが。本来存在しない筈の機体が、今まさに敵として飛んでいる。しかしその現実、カルロスの脳裏に兆したもう一つの『現実』ほどに心を動かさない。

《そうか…。妙だと思つたんだ。あの飛び方は知つてるのに、機体が違つてな》

《飛び方…?》

《縦方向への機動戦。デルタ翼機の限界を超えた戦闘機動。息の合つた2機の連携。：

『間違いない』んだろう、これ》

「ああ。——あれは、『エスパード隊』だ》

躊躇っていた言葉に、自らの心臓が拍を早める。耳には、アレックスが息を呑む気配が伝わる。

エスパード隊——それは15年前のベルカ戦争において活躍した、サピンを代表するエース部隊の名である。ベルカ戦争の最中ではカルロスもニコラスも彼らと共に戦い、後に彼らが『国境なき世界』へ移籍した際には矛を交えることにもなった。カルロスにとつてはエースパイロットの矜持を学んだ相手でもあり、信念を築く標ともなつてくれた、恩師といつていい人であつた。

——無論、本人である筈はない。

エスパルダ1、アルベルト大尉は『国境なき世界』との紛争後に自ら交戦し、戦死している。エスパルダ2のマルセラ中尉も今は首都グラン・ルギドに居住しており、空での生活からは身を引いている筈だった。

どう考えても、理由は掴めない。唯一分かっていることは、あの2機は今や、落とさなければならぬ敵である事だった。

現実を前に、絶望が胸に兆す。しかし同時に、何故が胸を浸す感慨と高揚感を、カルロスは覚えずにはいられなかった。

《はっは…はは、はっはっはっは！そっかマジか、怖えなオイ。おっかねえなオイ。…わくわくするな、オイ！》

「全くだ。まさかエスパルダ隊ともう一度飛べるなんてな。ニムロッド4、お前は反転し『デル・タウロ』と合流しろ。AAMもSAAAMも使い切った今、あの2機相手は荷が重い」

《え…し、しかし！3対2なら、数の上でも優位に立てます！》

「いや。…あの2機の技量が本物だとしたら、数は何の優位にもなりはしない。命令だ、急げ」

《…は、はっ！》

戸惑いを残した若い声が、反転する『デイピナス』とともに遠ざかってゆく。どの道



あの2機相手では、アレックスを気に掛ける余裕は無かっただろう。

アレックスを追う素振りも無く、上空の2機は螺旋を描きながら徐々に旋回降下に入ってゆく。ゆつくりと、しかし運動エネルギーを得ながら加速降下でこちらを狙う、さながら剣舞のような機動。

《優しいねえ。信念って奴か?》

「いや。あの2機には、お前と立ち向かいたかった。それだけだ」

《…へへ、照れ臭い事言ってくれるじゃん相棒。——『アークトウルス』も控えてるんだ、遊んでる暇は無いぞ!》

「応!」

左前方、やや斜め上。

相対距離が2000を切った所で、カルロスとニコラスは同時に急上昇。機銃掃射で突撃する2機を下方に躲し、高度を取って垂直に反転した。敵は変わらず2機ひと塊、旋回上昇する態勢。このまま縦の巴戦になれば、自重のある『タイフーン』では不利を免れない。

「俺が囿になる。お前は一撃離脱を繰り返してダメージを狙ってくれ。絶対に尻を追って深追いするなよ!」

《分かっている!そつちこそハマして一発で落ちるなよ!》

拳でジェスチャーを交わし、ニコラスの『タイフーン』が左旋回しつつ離れてゆく。視界の端にその軌跡を捉えながら、カルロスは縦への旋回を止め、右方向へ旋回。上昇旋回中のX-02を強襲すべく加速し、その進路上へ機銃を掃射した。

必中を期しうる距離、正確な弾道の23mmが五筋。あまつさえ横方向への機動が鈍る上昇中でありながら、敵の2機は左右へ開いて射線を回避し、こちらの頭上で背面のまますれ違った。こちらが横旋回で機位を確かめる間に、それらは後方で交差しながら小半径で反転し、瞬く間にこちらの背を捉えつつある。デルタ翼機らしからぬ近距離での格闘機動の切れは、確かにアルベルト大尉を彷彿とさせるものだった。

ミサイル、後方2連。

鳴り響くミサイルアラートにすぐさま指を折り、操縦桿のボタンを押し込む。翼下から放たれる高熱のフレアは、しかしミサイルの誘導を断ち切ることなく、電子音は変わらず耳を苛み続ける。

「電波誘導か！」

引き金を引く先は、虚空の中。旋回と同時に放たれたチャフ弾は機動とともに拡散し、危うい所でミサイルの矛先を皮一枚で躲す。それでもその慣性を殺すことは叶わず、至近に至ったミサイルは近接信管を作動させ爆散。『デイビナス』の小柄な機体は、激流に卷かれる木の葉のように、爆炎の奔流に弄ばれた。

《そこだあああ!!》

そして、攻撃の隙を見逃すニコラスではない。敵編隊の右側から接近したニコラスが、裂帛の気合とともにAAMと機銃を掃射し、横殴りに斬り抜けてゆく。

狙いは鼻先、直撃は回避しおおせても、近接信管の炸裂でダメージは与えうる距離。カルロスの眼から見ても、それは完璧な奇襲攻撃だった。

——であれば。

その結果は、ひとえにあの2機の——エスパード隊の技量によるものだったのだらう。

横合いの射撃に対し、2機は互い違いの方向に大きくバレルロール。両機の旋回半径が最大となるタイミングにミサイル擦過の瞬間を寸分違わず合わせ、AAMは炸裂の焔を上げることなく擦過していったのだ。速度を落とすどころか加速し、カルロス機は赤外線誘導AAMの射程にすら捉えかねない程に接近されている。

「く……もう一回だ!」

《分かっている!カルロス、フレアで目を潰せるか!?その間に死角から狙ってやる!》

「……やるしかないか……!タイミングは合わせる。5秒前にコールしろ!」

横旋回がもたらすGが、肺腑を苛み体を締め付ける。フレアを温存しなければならぬ以上、敵を赤外線誘導AAMの射程外に維持しなければならぬが、果たしてそうう

まくいくかどうか。ちらりと振り返った先では、目算距離でおおよそ1000。わずかでも加速を緩めれば、あつという間に捕捉される距離だった。

ミサイル、今度は1発。射程からするとAAMではない。

旋回、23mm。彼我の位置から素早く判断し、カルロスは引き金を引いてチャフ弾を散布する。今度は先と違って早めに散布したこともあり、ミサイルは爆裂することなく、機体下方をすり抜けていった。

漏れる安堵の息。額を濡らす汗。

それを知覚したということは、偏にカルロスの油断が招いたことだっただろう。

直後に殺到した機銃弾の筋に、カルロスはしたたかに額を打ち据えられた。

「ぐっ!?!…しまった、挟撃か!」

煙を吹く『デイビナス』から、カルロスは遅ればせに自らの機位を把握する。

右主翼には複数の弾痕。真後ろに就いていた筈の2機は、一方が離れて右後方から左後方へと斜めに機動している様が目に入る。

攻め方が変わった。おそらくはこちらの回避のタイミングに合わせて編隊を解除し、こちらの回避先目掛けて一方が先回りし機銃掃射を行ったのだろう。性能差とダメージの蓄積を鑑みれば、これ以上は持たない。

「くそ……ニコラス、まだか!」

《待つてろ…就いた！絶好の射線だ。行くぞ、5カウント！》

ちらと走らせた視界には、敵編隊の斜め下から接近するニコラスの姿が映る。目が届かず、意識の外にもなっているであろう絶好の位置。カルロスは下腹に力を入れて操縦桿を引き、機体を急上昇させた。

速度が落ちる。

敵機が近づく。

しかし目を潰し、死角を活かすにはこの方法しかない。

3。

2。

後方にAAM、機銃の雨。

照準の先には三日月。

ボタンを押し、殆どのフレアを放ちながら、スロットルを絞る。

1。

フレアを背に、機銃弾を浴びながら、失速反転する『デイビナス』。

2機のX-02は夜空の閃光に魅入られたかのように、フレアとAAM誘爆の奔流に機体を呑み込ませていった。

「はあ、はあ…。どうだ、やったか!？」

失速状態から、辛うじて機首を持ち上げ機体を制御する。後方では銃声、そして閃光。ニコラスの追撃が、2機へ到達したに違いない。

状況を確認すべく、振り返ったすぐ先。そこに映ったのは、絶望だった。

「な……!？」

——いる。

炎に幻惑されてなどいない。こちらのほぼ真後ろ、2機のX—02は先ほどと全く変わらぬ位置で、ぴったりと張り付いている。

馬鹿な、そんなはずはない。いくら機動戦に長けたエスパード隊とはいえ、闇夜で急に生じた閃光と爆炎に、目が眩まない筈はないのである。たとえこちらの機動を読んで旋回したにしても、目が慣れないまま正確にこちらを捕捉などできる訳はない。

この正確さは、ぞつとするような精度は、もはや往時のアルベルト大尉ではない。人間の息遣いの無い、まるで機械そのものではないか。

絶望の代償は、曳光弾二筋。速度を失った『デイビナス』になすすべはなく、黒翼の蝙蝠は破片を散らし、炎に包まれた。

《カルロスっ!!……馬鹿な、ありえねえだろ今の!……くそつ、大丈夫か!?!》

「く……!」

左足に痛みが走り、額にどろりと濡れた感触が伝わる。鳴り響く警報はエンジン出力

の低下を告げ、もはや『デイビナス』はその主同様に満身創痍となっていた。

——違う。機動こそアルベルト大尉と似ているが、断じて大尉ではない。あまりにも正確な統制、あまりにも無温な機動。冷徹に目標を叩き落すためだけの、大尉のような『遊び』のない、機械のような在り様ではないか。

そう、目標だけを落とす、機械の…。

「…ニコラス、最後の旋回でそつちに誘導する。ヘッドオンで当たれ。——俺を撃て！」

《は!? 馬鹿なことは止めろ! 死ぬ気か!?!》

「いいから撃て! 俺もまだ死ぬくない。正確に狙えよ!」

《…わあつたよ、信じてやる! 15年前もそうして戦ってきたんだからな!》

閃きはなんの確証も無い、か細い光。しかし、手繰り寄せた確かな光。

カルロスは操縦桿を横に倒し、悲鳴を上げる機体に鞭打つように『デイビナス』を旋回させた。

向かう先は、先の攻撃を終え降下するニコラスの方向。

後方には、離れない2機。殺到するミサイルになけなしのフレアをばら撒き、残弾無しを告げる音が警報に入り混じる。爆炎を割く機銃弾は、その間も機体を削り、命を一瞬一刻と奪っていく。

来た。

正面、ヘッドオン。流石に双発の『タイフーン』は速く、瞬く間に距離は2000を、1500を、1000を割っていく。こちらが攻撃を引き受け、正面からニコラスが迫る。彼我の位置は運命的にも、15年前にグラオガイスト隊と対峙した際そのままの姿。

「撃て!!」

時。

眼に機を計ったその瞬間、カルロスはスロツトルを絞ると同時に、緊急脱出レバーを引いた。

煙に包まれる視界、身を包む浮遊感。中空に投げ出された視界の中、煙の隙間からは、炎に包まれた『デイビナス』と、それらを追い越すべく並走するX-02の姿が見える。そう、目標の戦力消滅と判断し、その残骸に気を払わず、機械的に目標を次へと移したかのように。

その瞬間、ニコラスの『タイフーン』から放たれたミサイルは、『デイビナス』に直撃。すれ違うその瞬間に黒翼の『デイビナス』は爆発し、ガンポッドに満載した弾薬に誘爆して、空に爆炎の花を咲かせた。

焔から、片翼をもぎ取られ落ちてゆく1機。爆炎から抜けた残る1機も、ガンポッド



の銃身らしい破片がコクピット付近に突き刺さり、機体表面に無数の傷が生じているのが見て取れる。その機動は明らかに精彩を欠き、致命傷を負ったであろうことが外目からも判断できた。

鋭角を描くカナード、鋭く機動する『タイフーン』。あつさりと後方を取られたX—0 2はもはや糸を失った操り人形のごとく、煙の筋を引いて微動だにしない。必中の距離まで詰めた『タイフーン』は正確に機銃をエンジンへ突き刺し、紅の残滓を引いた機体を焰の中へと沈め、あつけない幕切れを仄かに彩った。

パラシュートで空を漂うこちらに、ニコラスのエスクードが旋回して横切っていく。得意そうに親指を立てるニコラスに対し、カルロスは『さつさと』アークトゥルス』を落とせ』と言わんばかりにそちらへ指を差してやった。

指の先には、主翼のエンジンを奪われ速度を落とした『アークトゥルス』。尾部に増設したエンジンだけでは到底オーレッドへの接近はままならず、肺を失ったくろがねの双頭竜は意を決したように反転して、巨体を以てニコラスと対峙した。

機体下部に光が煌めき、大型のミサイルが二筋、ニコラスへと向かってゆく。

『アロンダイト』——。なけなしの切り札は、しかし手の内を知ったニコラスを掠めることすらままならない。『タイフーン』はバレルロールで矛先を躲しながらなおも接近し、正面から機銃掃射を加えたのち反転。大鯨を仕留める漁師のように、X L A Aの鉅

をその尾へと突き刺して、微かに残った双頭竜の息の根すらも完全に断ち切った。

揚力を失い、力なく水面へと吸い込まれてゆく『アークトウルス』。

三日月が照る夜空の下、『タイフーン』は紅の翼を真珠色に染めて、誇らしげに獲物の上を舞っている。

「…やれやれ。わが社は一層、火の車かな」

水面に沈む、『デイビナス』の破片が生んだ炎の輪。

凍えそうな海上の風の中、眩きを落としたカルロスは、北の戦況へと意識を馳せた。今頃は『円卓』やスーデントールで、ベルカ残党と有志の軍勢が激戦を繰り広げている頃だろう。オーレッドでの両首脳の会談も、間もなく始まるに違いない。終戦への道は、一歩、確かに近づいている。

三日月の下、カルロスは北の空へと目を向ける。

その彼方、戦空滾る北へと飛んだ『アロンダイト』。それがもたらすものを、まだ知らぬまま。

## 第39話 Break of Dawn (中) — C i

p h e r , —

三日月の淡い光が、峻厳な山肌を抱きこむように照らしている。

鑿<sup>のみ</sup>で大地を彫ったよう——しばしばそう評される眼下の山々は、しかし今は赤褐色の岩肌を雪で白く染め、さながら月光を纏った女王を思わせる優美さを漂わせている。

愛すべきウステイオの大地。遙か昔の戦争から、数多の男たちの血と命を呑み込んできた魔性の大地。遠目には何の変哲もない山岳地帯でありながら、それは拒みがたい魅力を以て男たちを高揚させ、魂を引き付けてゆく。かつてこの空を飛んでいたというパトリック叔父さんも、伝説の傭兵と謳われたサイファーやピクシーも、同じ高揚を抱いて飛んでいたのだろうか。

蛍光を帯びて数多の数値を刻む計器盤。時折しゅー、と抜けた音を響かせる酸素マスク。目にも耳にも、月夜の闇をかき回すものは少ない。

まだ容貌にあどけなさが残る青年——パスカル・ジェイク・ベケットは、静寂に包まれた『円卓』の地を静かに見下ろしていた。

《円卓の空で、また『サイファー』の機体が拝めるとは。胸が熱くなるな》

自らの右後方に就く『ガラム2』ことレイモンド中尉の声は、本当に熱を抱いたかのようにどこか湿り気を帯びている。先代のガラム1ことサイファーと共に飛んでいた彼にとつては、この空もこの機体も、自分以上に感慨深いものなのだろう。

F-5E『タイガーII』。主翼と水平尾翼の両端を青く染めた、ウステイオに着任したサイファーが最初に乗っていた機体。15年前の戦争に参加していたとは思えないほどエンジンや電子機器の状態は良好であり、サイファーが基地を去ってからスタッフが並々ならぬ思い入れで整備を続けていたことが伺い知れる。

サイファーの魂を宿し、人々の想いを乗せた機体。その中に納まる自分を俯瞰して、パスカルは武者震いのような震えを覚えた。不安、畏れ、興奮。ポジティブもネガティブもないまぜとなつた複雑な感情が、今は心の中に渦巻いている。

もつとも軽戦闘機の宿命か、近代化改修を受けていない15年前そのままの機体であることがたり、『タイガーII』の兵装搭載量は非常に心もとない。ハードポイントこそ7か所を有するものの、空対空<sup>A</sup>ミサイル<sup>M</sup>を搭載できるのは両翼端の2か所のみであり、その他は本来対地兵装搭載用のスペースなのだ。そして今回は純然たる空対空戦闘が予想されるため、必然的にそれらの出番はなく、ハードポイントの過半数が無用の長物と化してしまう。

それを補うため、今回パスカルは急ピッチで武装の増設を基地スタッフへと依頼し

た。具体的にはAAMが余分に搭載できないことを鑑みて、胴体真下のハードポイントに30mm4銃身ガトリングガンポッドの搭載を提案したのである。これはA-10『サnderboltⅡ』シリーズが装備する30mm6銃身ガトリング砲をガンポッド化したもので、実際にF-5シリーズに搭載された実績もある武装ではあるが、過去ウステイオ空軍での搭載実績は皆無であった。それを不安視したのか、基地スタッフの引きつった表情は今でも記憶に残っている。30mmガトリング砲はそもそもが対地攻撃を想定した武装であり、空対空戦闘で用いるのは正気の沙汰とは思われなかったのだろう。

それでも自分の腕に期待を寄せてくれたのか、はたまたサイファアの機体という威光ゆえか。整備兵たちは文句ひとつ言わず、自分の無茶な要望に完璧に応えてくれた。

塗料や油の匂いがまだ濃密に残る、整備直後の蒼翼の機体。その下部から正面を覗む、4門の長銃身。出撃前に目にしたその威容は、さながらサーベルタイガーを思わせる姿だった。

余談ながら、同じく機体を失ったレイモンド中尉は旧知らしいヴァレー空軍基地の傭兵に頼み込み、今回はF-15C『イーグル』を借り受けている。慣れたF-16『ファイティング・ファルコン』を貸そうかという申し出もあったようだが、今回は空対空戦闘が予想されたため、より高性能に優れるF-15を選択したのだという。流石にこちらは時間的な余裕が無かったため、右翼の塗装も尾翼のエンブレムも省略した姿と

なっていた。

したがって『円卓』の舞台に展開するのは、レイモンド機も含めたF-15が9機、F-16が12機、そして自分のF-5Eが1機。スーデントールを指す敵部隊を各個に迎撃できるように、小隊ごとに一定の間隔を離しながら布陣した。

《暗天の円卓とは、15年前のサンダーボルト作戦を思い出すな。もつともあの時とは攻守が逆だが》

「サンダーボルト作戦？」

《ああ。PJ、お前の叔父さんもあの時は……いや、昔話をしている余裕は無さそうだ。展開中のウステイオ軍各機へ、空域に航空部隊の侵入を確認。方位030よりファトならびにゲベート所属機25、方位085よりレクタ所属機8。こちらの無線による応答なし、情報にあつた各国のベルカ残党もしくはタカ派将校と思われる》

《来やがったか！》

《『ラーズグリーズ』の背中是我々が護る。奴らをスーデントールへ行かせるな。各小隊、正面の敵に対応せよ》

「了解！ガラム2、アイビス隊、続いて下さい！フェザント隊は後方のフォローを！」  
方位030、北北東へと目を走らせ、操縦桿を左へ倒して舵を切る。

後方に連なるのはガラム2とアイビス隊のF-16、やや遅れてフェザント隊のF-

15C。こちらは10機で、担当正面であるファト・ゲバート連合軍と当たることになる。機数では半分以下ではあるが、主力が歴戦のヴァレー傭兵であることを踏まえると、決して不利な数ではない。

増槽投棄、安全装置解除。火器管制グリーン、兵装は機首20mmを選択。正面の空は暗く、目視でもレーダーでも敵の姿は見取れない。——しかし、確かに近づいて来ている。敵意でも言うべき濃密な気配が、あるいは円卓の魔の息遣いが、キャノピー越しに伝わってくる。

《フェザント1、敵編隊捕捉。『ラファールC』8、『ミラージュ2000』8、MiG-29Gが8、MiG-31Eが1。距離3200、いずれも正面》

「了解。アイビス、フェザント両隊は左右へ散開。私とガルム2が正面から敵編隊を攪乱します」

《フェザント1了解。貴機の技量はサイファーと同じように信頼している。攪乱役はお任せする》

ガルム2との間隔を狭めたこちらの後方で、8機のF-15とF-16は左右にそれぞれ分かれ、上方へ向け大きく散開してゆく。敵機25機に対しわずか2機で正面突破を仕掛けるという自殺行為同然の戦術ながら、それに対する疑義の声は一つとして上がらなかった。

その背にあるのはサイファーに対する今なお衰えない信望であり、そしてその後継として自分に託された想いである。『あいつならやってくれる』『いくつもの不可能を可能にした、サイファーと同じように』と。

ちっぽけで未熟な自分にまた一つ重ねられたその思いに、鼓動がまた一つ高まった。

《連中、素直になつたもんだ。当のサイファーに見せたら大笑いだろうな。ヴァレー空軍基地の上空で大立ち回りしたお蔭かね》

「あはは…どうでしょう。…ガラム2、正面から切り崩します。行きますよ」

《ああ。ケツはフォローしてやる。思いきり行け！》

声に、想いに押され、加速するF-5E『タイガーII』。機体のレーダーが正面の敵影を捕捉し、肉眼でも月明かりの下に臍な姿が捉えられる。集団は左右にやや離れ、向かって右が『ラファール』と『ミラージュ』で構成されたゲバート軍、左が『ファルクラム』を主力とするファト軍。公には目下交戦中である二国の微妙な関係が、わずかに開いた両編隊の位置を如実に物語っている。すなわち、両国部隊の連携は無いに等しいと考えていい。

距離2200、2000。1700。

レーダー警報の低い漣が鼓膜に響く。敵針路はそのまま、突出したこちらの2機を確実に叩く姿勢。



目を閉じ、息を吸う。人の期待を、想いを、信頼を呑み込む。

恐れはない。震えも今はない。エースを、英雄の姿を背負う以上、自分はサイファーを演じ、エースとなって見せる。

目を開く。

距離1000。敵の眼前、円卓の槍袂の一步前。

《全機、撃て!》

聞き慣れない訛りの言語が通信を揺らし、殺意と化したミサイルの槍が殺到する。

フットペダルを離し、やや減速。操縦桿は手前、機首上げを控えた大回りのバレルロール。

進行方向を向いたまま時計回りに廻る機体を、正面のミサイルが次々と掠めて去ってゆく。

4発、5発、近接信管が作動しないぎりぎりの距離。

一周を終え、平行となった機体を右にロールさせ、最後に迫る2発を機体上下にいないして回避する。

あたかも闘牛士のような皮一枚の回避行動を終え、『虎』の牙先に集うのは無防備となった敵の編隊。その右側の中心、先頭を飛ぶ『ラファールC』。

引き金を引いた、わずかコンマ数秒。背面飛行となり敵編隊と正面から擦れ違った後

方では、制御を失い円卓へと吸い込まれていく『ラファールC』の姿が見えていた。

《ば…馬鹿な、避けた!?アザレーが落ちる!》

《上、左右上空だ!ウステイオ機が突っ込んで来るぞ!》

《お、おい…今の敵機!両翼端が青くなかったか!》

《ち…駄目だ、ゲベート軍はあてにならない!『フォックス』よりフロアレ各機、本機の元  
に集え!上空を攻撃を躲してから攻撃を集中させる!》

操縦桿を引き、機首を上げて機体を急上昇。インメルマンターンの要領で機体を平行に戻した先の眼下では、時間差を設けて突撃したアイビス隊、フェザント隊により、さらに2機の『ミラーージュ2000』が脱落してゆくのが目に入る。編成を見る限りゲベートの部隊と思われるが、こちらの攪乱と上空からの攻撃により、その統制は完全に失われ、各個に回避行動に入っているように見受けられた。通信も先ほどからはゲベートの言語による混線がひっきりなしに入っており、その混乱を物語っている。

片や対照的に、ファト軍と思しき集団はMiG-31『フォックスハウンド』を中心として部隊を密集させ、下方へ抜けたアイビス隊への追撃を計り降下に入りつつあった。察するに、おそらく中心のMiG-31が前線空中管制機の役割を担っているのだろう。元来MiG-31は迎撃戦闘を主とする高速戦闘機ではあるが、優れたレーダーと通信装備を有しているため前線における空中管制機の代役を務めることもある。

つまり、あの機体こそがファト軍機の『頭』に違いない。

「ガラム2、目標をファト編隊へ変更。敵編隊中心の『フォックスハウンド』を狙います！」

《了解。アレさえ殺ればファトの連携もズタズタだ！》

敵編隊の後方上空、その大柄な機影を眼下に捉え、パスカルは操縦桿を横に倒して機体をロール。操縦桿の位置を手前に引きつつスロットルを加え、翻るように敵の後方上空から降下を始めた。

頑丈な機体構造を持つMiG-31の特徴を考慮し、兵装は胴体下部30mmガンポッドへ変更。急造の増設兵装である都合上反動抑制や照準補助といった機能は当然無くなるべく至近距離から直接照準で狙う他にない。

ぐんぐんと距離を狭める彼我の距離に、MiG系らしからぬ直線を主とした武骨なシルエツトが浮かび上がる。距離にして、あと1400。

《…ッ！後方から来る！フロアレ5、6、迎撃に当たれ！》

露見した。

混線がファトの言葉を紡ぎ、それに応えるように両脇のMiG-29が2機、鋭角を描いて急旋回しこちらに相對する。敵は第4世代の戦闘機、おまけに中型軽量で空力的にも優れた形状を持ち、近接格闘戦では無類の強さを誇る『ファルクラム』である。旧

式の『タイガーII』で真正面から立ち向かうのは自殺行為でしかない。  
しかし。

唇を噛み、パスカルはきつとその先——MiG—31の巨体を見据える。

位置取りは絶好、旋回半径が極めて大きい『フォックスハウンド』になれば、一度接近してしまえば確実に撃墜できる。この一撃で敵の連携を崩せるならば、ある程度のリスクは甘受すべきだ。

《突っ込むんだな!》

「行きます—」

《分かった! FOX2!》

阿吽のごとく短い言葉に、巡らせるは互いの意図。

一層速度を上げたこちらに対し、二歩後方を飛ぶレイモンド機からAAMが放たれ、こちらを追い越して正面の『ファルクラム』へと飛翔する。もつともAAMの射程限界から放ったこともあり、比類ない運動性能を持つ『ファルクラム』はいずれもこれを回避。あるいは機首を下げ、あるいは正面からバレルロールで矛先をいなして、AAMは虚しく彼方へと飛び去っていった。

だが、パスカルの眼には別のものが見えていた。

回避行動のため、わずかに左右に開いた2機の敵機。その両者の間、MiG—31に

向けてぼっかりと空いた空間が。

「開いた!」

瞬間、パスカルはぐんとフットペダルを踏みこみ加速。軽量な機体に双発エンジンという推力の利を活かし、2機の間をすり抜けてMiG-31への距離を詰めた。

相対距離、600、500、まだ遠い。しかし斜め後方からの接敵であり、最大となった投影面積は数値以上に近くに見える。

引き金を絞る。照準を見据える。狙いは、そのコクピット。

距離、300。

目が数値を読んだ瞬間、パスカルは引き金を引き——直後に、衝撃に見舞われた。

「うわっ!」

凄まじい振動が機体の下部から響き、照準を大きく揺さぶる。みしりとキャノピーが軋み、機首が上方へとずれてゆく。放った曳光弾もその軌跡は大きく散り、わずかに一発を機首に掠めるに留まって、パスカルのF-5Eは有効打を得ないままに『フォックスハウンド』の斜め下方へと抜けていった。

そもそもが、大量の炸薬を使用する大口径砲はえてして反動が大きいものである。30mmガトリング砲の本案であるA-10『サンダーボルトII』ではこれを機首内蔵式とし、かつ重い自重と高い安定性でもって初めて安定的に運用しているのだ。いくらA-

10のものより幾分軽量な4銃身モデルとはいえ、A-10より遥かに機体が軽いF-5Eで、なおかつ外付け式ガンポッドとして運用しているとすれば、その凄まじい反動で命中精度が犠牲になることは避けられない問題であった。

《く…何だ、今の衝撃は。奴は対空砲でも積んでいるのか!?!》

《どうしたPJ、照準装置の不良か?》

「いえ、30mmガトリング砲の反動です。予想以上だ…」

《だからそんな妙なもんやめとけと…。まあいい、一旦引き離してからAAMで…》

「でも、もう反動は覚えました」

なに?

呟くように声を漏らしたレイモンドをよそに、パスカルは操縦桿を大きく引いて急上昇。左手側上方に旋回して逃げる『フォックスハウンド』を視界に納め、その背を取るべく機体を左へ旋回させた。加速で逃げられれば追いつけないが、旋回で回避している間はF-5Eでも追隨できる。

《PJ!斜め上から来てるぞ!さっきの2機だ!》

レイモンドの声に、顔を上へと向ける。

空の三日月を背にした敵影は、確かに二つ。左旋回上昇に入るこちらに対し、下降する敵の針路はこちらと直交。こちらの投影面積が最も大きくなるタイミングで、敵の射

程内に入ることになる。

まさに死地と言っている、最悪のタイミング。——しかしそのタイミングが分かっているのなら、却って回避はしやすい。少なくとも、サイファーならそう考えるに違いない。

上方、ミサイル2。

ミサイルアラートが鳴り響くのも構わず、パスカルは進路もそのままに、回避行動を取るMIG—31を追い続けた。音速を優に超えるミサイルの飛翔は速く、その焰と矛先はあつと今に青翼の機体へと迫ってくる。

いずれにせよこの距離と機位では、回避行動を取った所で後ろを取られる。ならばタイミングを計って最小の運動で敵の攻撃を躲し、攻撃を続行する方がはるかにいい。

上。

矛先が迫る。

時が迫る。

着弾まであと3、2。

信じる。この機体を、自らの中に宿った『サイファー』を。

タイミング——。

「今——」

時が至ると同時に、パスカルは操縦桿を左へと倒し、機体を横へとロールさせる。背面となったF―5Eは、その瞬間投影面積を減らし、敵ミサイルを腹の下へと掠め――わずか数m下方にその鏃を退け、健在な翼を『フォックスハウンド』へと向けた。敵後下方、旋回中。こちらは背面飛行のまま。先ほどより遥かに難易度の高い姿勢だが、一度発砲した反動の感覚は掌に染みついている。

2. 5。反動のずれは、照準中心に対し概ね4。と少し。背面なので若干縦方向に修正し、約

《くそー護衛は何をしているーフロアレ隊各機、ザコはいい！あの機体を、蒼い翼のF―5Eだけを狙え!!》

言葉に混じる焦りと恐慌が、敵の動揺を物語る。照準の中の機影は刻一刻と大きくなり、30mmの牙の圏内へと、その身を徐々に近づけてゆく。

距離350、300。両牙が噛み合う、その瞬間。

《行け!》

激しい反動とともに放たれたのは、わずかに数発。それだけでありながら、30mm口径の弾丸は『フォックスハウンド』の巨体を正確に捉え、獲物の首をもぐかのように機首を千切り飛ばして、残骸を微塵に空へと散らした。

粉々に散った『フォックスハウンド』の残骸、落ち行く火の残滓と、傷一つ受けず飛



ぶ『タイガーII』。

その様に人は声を失い、一拍後には現実を伴った恐慌となつて、人々を襲つた。

《ふ、フォツシヤが落ちた!》

《円卓の鬼神だ……!間違ひなく本物だ!敵う訳が無い……!》

《黙れ!まだ機数ではこちらが上だ!ゲベート軍と連携して大勢を……ぐあつ!》

動揺で回避行動が鈍つた『ファルクラム』をレイモンドのF-15Cが撃墜し、さらに別の1機も四分五裂しながら落ちてゆく。もはや統制を取れる機体はいないのか、ファート軍の『ファルクラム』は各個に回避運動を行つており、小隊での連携らしい連携も見られなくなつていた。周辺に目を向ければゲベート軍も同様のようだが、こちらは辛うじて『ラファール』4機が連携を維持して友軍のF-15『イーグル』と相對している。

機体を傾ける。

文字通り空を切るように、翼端を青く染めた切り欠きデルタの翼が月夜を駆ける。

眼下、『ラファールC』4機。孤立した友軍のF-15を追い格闘戦の最中。背を取り取られ合う闘争の渦中へ、パスカルは迷ふことなく『タイガーII』を降下させた。

目前の獲物を追う敵は回避行動が疎かとなり、加えて夜間、死角からとなれば発見も遅くなる。

敵編隊の中心、尾翼を緑に染めた隊長機らしいその機体は、すんでの所で突撃する。パスカル機に気づいたものの回避すること叶わず。空を切った30mmによつてコクピットを正確に貫かれ、機首ごともぎ取られ落ちていった。残された僚機が、蜘蛛の子を散らすように統制を乱したのは言うまでもない。

「ガルムよりイーグルアイ。ファトならびにゲベート軍機の指揮系統を寸断。じきに掃討戦へ移行します。周辺域の情報を知らされたし」

一旦高度を取り、パスカルは戦況を俯瞰しながら通信を送る。眼下では乱れた敵編隊に突入したレイモンドが新たに『ラファール』1機を屠り、残るウステイオ機も敵部隊を追い回している状況となっていた。通信ではじきに掃討戦へ移行と言ったものの、眼下の戦況は既に掃討戦と何ら変わらない。

《こちら空中管制機イーグルアイ。対レクタ軍の方でも、こちらはレクタ軍機を圧倒しつつある。また現在、方位080より敵増援と思しき反応8を確認した。円卓空域へ向け接近中、機種不明》

「了解。敵増援にはガルム隊で当たります。空域の指揮権はフェザントーへ：」

数で勝る敵を相手に主導権を得、目下にその反応は数を減らしてゆく。これに対し、ウステイオ側の損失は現状ゼロ。この調子ならば、新たな増援が加わってもスーデントールへの進行を阻止することは可能だろう。

——だが、これまで卓越した技量で常に主導権を握っていたパスカルは知らなかった。戦場には時として、個の力では太刀打ちできない強大な力が存在するということを。

そう、敵の新たな増援に呼応するように飛来する、空を灼く悪魔の存在を。

《スーデントールへ向かう三国の飛行隊へ、この戦場は我々が請け負った。諸君は直ちに高度3000まで上昇し、速やかにスーデントールへ向かわれたし》

《…：増援か、助かった！全機、高度3000まで上がるぞ、急げ！》

《逃がすかよ！ウステイオ全機、フルスロットル！全速で追撃する！》

増援の機体かららしい通信に、ファトとゲベートの戦闘機が一斉に機首を上げ、高度を取り始める。高度域3000といえどもこちらの約500下方だが、その地点目掛けて敵味方が殺到する様はどこか奇妙な光景でもあった。

とはいえ、敵は統制を乱したといえども機数は依然多い。ここで離脱を許せば20機以上の戦闘機がスーデントールになだれ込むことになる以上、こちらとしても突破は全力で阻止する必要がある。

ならば、高高度に位置するこちらは先回りし、敵の鼻先を押さえるべき。

結論を下し、操縦桿を手に機体を傾けかけたその刹那。

異変は、突如として起こった。

《…!?この反応は…!?ウステイオ各機、すぐに空域から離》  
「うっ!?」

焦ったようなイーグルアイの聲が流れた直後、激しいノイズが耳を苛み、パスカルは反射的に顔を顰めた。イーグルアイの聲が雑音に遮断されて聞こえない。リーダーへと目を向けると、捕捉していた筈の敵の反応が安定せず、その姿は完全にノイズの幕に隠れてしまっている。

敵方のジャミング。しかし今、いったい何故。追撃の阻止にしては、タイミングがおかしい。

解釈を得ない敵の挙動に、パスカルの手の動きはしばし凍る。

敵の動きは、一体何なのか。そして何より、先ほどから感じるこの悪寒はなんだ。まるで背筋を粟立たせるような、悪魔が凝視するような、この肌寒い感覚は。

——南。

直感が、神経を介して体を突き動かす。

反射的にその方向を向いたパスカル。その目の前、距離を隔てた南東の空に爆ぜるような眩い光が生じたのはその直後だった。

「な…!?」

大きな光が一つ、次いで周囲にいくつも爆ぜる小さな光。それらはやがて赤い炎とな

り、彗星のような尾を曳いて、円卓の大地へと散るように墜ちていく。震えは止まらない。背筋の粟は収まらない。まだ、終わっていない。

先ほどの光は、レクタ軍機と交戦中の友軍がいる空域に近かった。ならば。

——ならば。

「……!!…みんな、すぐに逃げて!!」

青年の必死の声を、ジャミングの雑音は無慈悲にかき消していく。

急ぎ機首を下げようと下方を見下ろした矢先、パスカルは見てしまった。

南の空から一筋の光が飛来し、高度3000付近に位置する両軍の間で爆ぜるのを。

そしてその弾頭から無数の散弾が光り、周囲の戦闘機をずたずたに引き裂いて、爆発の奔流に呑み込んでいくのを。

眼下で地に墜ち行く焰は、まさに無数。男たちの無念を宿したかのように、それらは揺蕩い、揺らいで燃えながら、諸手を広げた円卓の大地へ吸い込まれてゆく。

「…そんな、な。…そんな、嘘だ…!こちらガルトム1、誰か、誰か応答してくれ!レイモンド中尉、フェザント1、アイビス隊…!みんな!!」

《く…!ようやく回復したか。……………いや、待て。何だこれは、レーダーの故障か》

「…イーグルアイ!」

《ガルトム1、か。…どうなっている。アイビス隊もフェザント隊も、…いや、あれだけ飛



「…レイモンド中尉!! 無事ですか!？」

《おお…生きてたかPJ。体はいいが、機体は少々厳しいな。F-16の連中は全員墜ちた。残ったのは、俺たちだけ》

《まあ戦力は無いに等しいですがね…。フェザント3ならびにフェザント4、健在です。辛うじて》

レイモンド以外の声にはたと気づき、パスカルはその先へと目を凝らす。

確かに、レイモンド機の向こうに隠れるように飛ぶF-15が2機。しかしいずれも機体の一部を失うなど損傷が激しく、到底空戦には耐えられそうにない。すなわち22機を数えたヴァレー空軍基地の精鋭も、残るは自分1人ということになる。

《巡航ルート照合。…間違いない、今のはサピン軍の情報にあつた巡航ミサイル『アロンダイト』だ。…連中の狙いは、最初から三国軍による円卓の突破には無い。奴らを囮に我々をおびき寄せ、一網打尽にするのが狙いだつたんだ…!》

《いかれてやがる。俺らさえ始末できれば他人が何人死のうと知つたこつちやないつてか…!》

《…ガラム隊、フェザント隊、悪い知らせだ。先述したレクタの増援機が急速接近中。機種も判明した。X-02:『ワイバーン』のコードを持つ機体が8。戦力差は言うまでもない。…もはやこれまでだ。全機、ただちに空域を離脱せよ》

どつ、どつ、と心臓が鼓を刻む。

ウステイオ機を——おそらくは『ガラム』を葬り去るためだけに投入された巡航ミサイル。他国兵を巻き込んだ大量虐殺すらも躊躇わない冷徹な作戦。おそらくはこの空域を離れた所で彼らはこちらを追い、確実に始末してからスーデントールになだれ込むだろう。手負いの『イーグル』では到底逃げ切れることは叶わず、全滅は必至に違いない。どうする。どうしよう。どうすればいい。

機体を捨ててすぐに脱出する？しかし、彼らがそれを見過ぐすとは思えない。エリクさんの言葉によると、彼らはパラシュートすらも狙い打つ。

全機で迎撃する？だが、『イーグル』はたったの3機、それも中破以上。戦闘機動には耐えられない。

逃走しながら援軍を要請する？いや、間に合わない。電波状況が悪い円卓では、外部へ届く保証もない。

どうする。

こんな時、『サイファー』ならどうした。

皆が謳う英雄の彼ならば。パトリック叔父さんが敬愛し、レイモンド中尉が往時を偲び、ヴァレーの皆が口々に語る彼ならば。

——そんなの、決まっている。



どくん。——どくん。

鼓動が、鎮まる。

自らの中の『サイファー』は、答えを既に告げている。

迷うことは何一つ無い。自分は、『ガルム1』なのだから。その名を名乗った時から、サイファーを全うする覚悟はしてきたのだから。

「拒否しますネガティブ。ガルム2、フェザント隊を率い撤退してください。私が、殿を務めます」

《な…!?》

《お…おい！PJ、何を言ってる！あの数だ、無駄死にするだけだ！機体だっていつものF-2じゃない、ポンコツのF-5Eなんだぞ！》

「全機で逃げてでも速度差で追いつかれます。その上、彼らのスーデントール到達を許すことになる。ラーズグリーズ隊が側面攻撃を受ける形になる以上、ここで時間を稼ぐ必要があります」

《な…なら俺も残るぞ！ガルム隊が2機揃わなかったんじゃ格好が付かないだろうが！》

「レイモンド中尉の機体では対空戦闘は不可能です。それに、フェザント隊を護衛する戦力も必要です」

《で、でもな…！……俺は、俺たちはお前の叔父さんを…PJを最前線に送り出して死な

せちまった。お前まで死んじまったら、もう俺はあいつに合わせる顔が無いんだ。：頼む。考え直せ、一緒に退こう》

感情を帯びた声が、引き止めるように身に纏う。

死なせたくない。叔父のように、一人だけで死なせたくはない。その振り絞るような言葉に、パスカルは胸が詰まりそうになった。レイモンド中尉は、おそらく15年前の戦争の事を今でも悔やんでいるのに違いない。

だが。同じように、自分もレイモンド中尉たちを死なせたくはない。サイファーもきつと、少しでも多く敵を落とす、少しでも多く味方を助ける道を選んだ筈である。

「ありがとうございます、レイモンド中尉。でも、ガルム1：サイファーなら、きつとこの場に残ったと思います。皆が語るような人なら、きつと」

《……違う！お前は、サイファーじゃない！パスカルっていう人間だ！》

「この機体に乗る、このエンブレムを身に着けている以上、俺はサイファーです。敵にとつても味方にとつても、俺はサイファーでなくちゃならない。：お願いです、行つて下さい、ガルム2」

レイモンド中尉のF-15Cに並び、想いを伝えるようにまつすぐにその目を見つめる。

瞳がこちらを見る。尾翼のエンブレムへと流れ、それが再び視線と交わる。暗闇の中

の筈だが、パスカルにはそう感じられる。

バイザーを上げた目を、殴るように拭いたレイモンド中尉。半壊した『イーグル』はそれを最後に、機体を傾けて西の方へと向かっていく。残る2機もパイロットの敬礼を残し、その軌跡に追隨した。

《…死んだら、承知しねえからな。覚悟しとけよPJ!》

にこり、と微笑を返し、パスカルは機体を反転させる。既に東の空からは殺意が迫ってきていることが、素肌にも濃厚に感じられた。

「イーグルアイ、そちらも撤退してください。敵は、そちらすらも標的にしかねません。こちらは一人で大丈夫です」

《E-767の走査範囲を舐めて貰っては困るな、PJ。ぎりぎりまで支援はさせて貰おう。敵は変わらず真東、進路変化なし。…妙な隊形だ、2機ずつ4分隊に分かれた》

イーグルアイの怪訝な声が鼓膜を揺らし、その様をリーダーで確かめたパスカルも首を傾げる。空戦時の編成といえれば4機小隊単位がオーソドックスだが、眼前の敵は2機ずつの分隊に分かれ、しかもそれらがまっすぐ梯子状の列に並んでいるのだ。探りを入れるための隊形なのかもしれないが、自身の感覚はそれを否と告げている。機数に対して殺意はわずかだが、その分より鋭くこちらを貫いている。

この位置は、まずい。

「させない！」

矛先を逸らすように右旋回したその瞬間、敵の先頭の2機は弾かれた矢のように突貫。距離1800の中距離からミサイルを発射しながら、速度を増して突っ込んで来た。

右、次いで左下方。機体の近くをミサイルが掠め、危うい所で擦過してそれらは飛び去り、機銃弾とともに2機の戦闘機が過ぎ去ってゆく。

ミサイルアラート、第二波。やや高度を落としたこちらに對し撃ち下ろす態勢で2機4発。予測より加速は速く、1発が避けきれずに至近で炸裂の華を散らす。

来る、第三波。

操縦桿を引き、機首を上げて加速する。腹を見せ隙を生じたこちらに乗じるように、2機のデルタ翼機が突撃して来る。反転して来ているであろう先二波は振り返る余裕もない。

ミサイルは同高度、同じく4発。

背面、機首上げ、操縦桿を引き敵と正面から相對。近接信管で炸裂した4発を突っ切り、20mmを放ちながらすれ違う。

正面、残る2機。これまでより突撃のスパンが短い。

歯を食いしぼる。下腹に力を籠め、操縦桿を斜め手前へ引きながら加速する。互いの

バレルロールの渦の中で、神経が昂り、より研ぎ澄まされていくのが分かる。

音速と音速、ミサイルの炸裂すらも後方に置いていく、わずかコンマ数秒の擦過。

引いた引き金はわずかに一発が敵機に弾け、F-5Eは左に身を振った。

《似ている…。オーシアの『ソーサラー』隊の戦術じゃないか、これは。PJ！第一波が反転、後方から接近して来ている！》

「やっぱり……」

フットペダルから足を離し、減速しつつ旋回を続けながら、パスカルはバイザーを落ろし反転した敵を振り返る。

先の攻撃で、敵の戦術は概ね分かった。おそらくは小規模分隊で続けざまに一撃離脱を繰り返し、こちらに回避行動を強いて機動を制限。こちらが攻勢に入る前に第一波から反転し、連続して攻撃を繰り返す積りなのだ。

それなら。

敵第一波、こちらよりやや上、右旋回中のこちらに直交する位置。打ち下ろされる2発のミサイルを機首上げと左旋回で大きく躲し、敵機を腹の下へいなした。パスカルは、そのまま敢えて第二波に対して背を向けた。一撃離脱を繰り返すこちらの攻撃のタイミングを潰すという戦術は一見弱点が無いようだが、至近距離を擦過していくその一瞬ならば、わずかだが攻撃の時間はある。まして、その離脱方向が分かっていたら。ここ

らが尻を向けた以上、後方から襲い掛からずにはいられない状況ならば。

「今だ！」

第二波の2機が迫り、ミサイル発射を狙うまさにその一瞬。パスカルは『タイガーII』を急激に減速させるとともに、機体をやや右に傾けて30mmガンポッドの引き金を引いた。

ぐんと増した速度差に、敵機が轟音とともに入れ違う。

その進路上に『置かれた』射線に、そのうちの1機が突っ込んでゆく。

反動を熟知した30mmの弾道に、当初のようなブレはもはや無い。4銃身から放たれた光軸の網に絡め取られ、デルタ翼のその機影は主翼を蜂の巣のように引き裂かれ、炎を纏って墜ちていった。

「よしー！」

《オーシア仕込みの俄か戦術ではこの程度か。『ヴァルハラ』、コード変更。T-08-WL-GL》

《気を付けろ、PJ。連中、何かを仕掛ける積りだ》

続いて背後に迫る、第三波。それらに備えるべく操縦桿に力を込めた瞬間、通信に聞きなれない男の声が入り混じった。何らかの暗号のようだが、言葉に前後して迫っていた2機は左右に散開し、先ほど通過していった3機もまっすぐ反転することなく、左右

に大きく旋回を始める機動へと変わっていった。よく見れば敵機は先ほどのデルタ翼機から一変し、角ばった前進翼を持つS U—47のようなシルエットへと変化している。

つかず離れず、こちらの周囲を旋回する7機のX—02。まるで渦の中に呑み込まれた格好だが、これでは敵の出方が全く分からない。

《これは『ゴルトの巣』：旧ベルカのゴルト隊か!? 馬鹿な、一体どうなっているんだ!》  
「ゴルトの巣…?」

《すぐにその包囲を突破するんだ! 渦の中で颯り殺しにされるぞ!》

「っ!」

まずい。

敵の機動、イーグルアイの言葉、そして何より一層増した殺気。それらが同時に本能を揺り動かし、パスカルはフットペダルを踏みこんで間隙へ向けて機体を加速させた。

後方、ミサイルアラート。

息を詰め、機体を左へ旋回させ回避する。

続けざま、ミサイル——否、衝突警報。

目の前を黒い影が横切り、思わず機体を右へ急旋回させる。

その正面、今度は別のX—02。ヘッドオンと同時の機銃掃射。旋回半径の都合上、

こちらの30mmの弾道は届かない。

被弾。キャノピーがびび割れ、機首に弾痕が刻まれる。

敵は、先ほどすれ違った1機が後方、2機が下。1機上。他は。

レーダーが走り、目が奔り、機体が駆ける。加速しても旋回しても、まして急降下や減速でも、7機の網は執拗に絡みつき、『タイガーII』の小柄な機体を渦の中に取り込んでくる。

「このままじゃ……せめて数を減らして、突破口をー」

時を追うごとに増える弾痕。研ぎ澄まされた神経と裏腹に、摩耗してゆく機体。

側方、1機。キャノピー横に着弾。それと入れ違う瞬間、パスカルは意を決して操縦桿を倒し、機体を急旋回。減速を組み合わせた最小半径旋回で、上方を通過した敵機の後ろを素早く捉えた。気流に翻弄され横滑りする機体の中でも、そのレーダーは正確にその背を見据えている。

距離、わずかに150。外す筈もない距離。

「FOX2!」

——少なくとも、常識の範囲ならば。

瞬間、眼前の『ワイバーン』は信じられない素早さで旋回、次いで急降下。扶るような角度の回避機動は短距離AAMですら追尾すること叶わず、それらは敵機の尾部を遠



く掠め、虚しく飛び去っていった。

ありえない。今の機動では、到底中のパイロットは無事では済まない。いくら耐G技術が向上してしようと、人間が操縦できる限界は存在する。——その、筈なのに。

渾身を躲され、パスカルの機動が一瞬鈍る。

前方に1、後方に2。1機の死角を必ず複数の僚機が補う、徹底した集団戦法である『ゴルトの巣』。その瞬間、パスカルの『タイガーII』はその巣の中に、完全に絡め取られた。

《所詮はその程度だ。鬼神の紛い物》

宣告の声が殺意となり、ミサイルと機銃の雨となつて機体を襲う。

右、急旋回。間に合わない。

「ぐ……あつ!!」

《PJ!!》

近接信管の炸裂に翻弄された機体に、複数の射線が殺到する。

被弾。衝撃。熱。痛み。視界は一瞬黒く染まり、爆炎の渦が機位さえも見失わせる。

腕が、額が痛い。

胸が、苦しい。

揺れる機体の平衡をようやく取り戻し、酸素マスクを外して息を吐く。

口から流れたのは吐息ではなく、ごぼつという重い音。そして今まで見たことのない、大量の鮮血だった。

「あ……」

血で、計器が見えない。左足の足首は半分千切れ、そこから先が機体の振動でぶらぶらと揺れている。下腹部に突き立っているこれは、何だ。照準器の破片か、割れたパイプか。目も霞んでよく見えない。耳元ではイーグルアイが何か叫んでいるようだが、何を言っているのか、もはや分からなかった。

《ここまでだ。下らない鬼神の伝説はここに潰える。ベルカの栄光を汚した鬼は、この地で無様に、醜く果てるのだ》

男の声も、もはや遠い。しかしなお胸の闘志は、サイファーは死んでいない。

戦術を見て、弱点は見切った。死角を僚機が補うというのなら、先ほどと同じだ。敵機の位置は、自ずと把握できる。

『サイファー』は撃墜される訳にも、無為に死ぬ訳にもいかない。  
《つー！往生際の悪い！》

もはや脳が意識するより早く、体は本能のように機体を操作する。

健在な右脚で機体を加速させ、渦からの離脱を計る。

後ろ、ばらけて左右と上。正面左右にいた2機は回り込み、こちらの針路を塞ぐべく

迂回してくる。先ほど同様、こちらの目前を遮って速度を殺す積りに違いない。加速性  
能も彼我の差は大きく、後方はあつという間に追いついてくる。

来た。見えなくても、もはや感覚で感じる。眼前を遮るべく、こちらの右下から上昇  
に入る1機。

この1機は最も攻撃を受けやすい位置の機体である。目前を過ぎる目標は、追わずに  
はいられない。遮り擦過するその背中を追われる危険は最も高いのだ。言い換えれば、  
必ずこの1機のアローは近くにいます。読み通りなら、その位置は。

来る。轟、というエンジン音を響かせ、X-02が目の前を右下から左上へ横切つて  
いく。

ここで左上に上昇すれば、敵の背。しかし狙いはそちらではない。

操縦桿を引く。機体が右へ傾き、次いで背面となつて下を向く。

増加するG、口から零れる血。鮮血の海となったコクピットから、しかしパスカルは  
確かに『それ』を見つけた。

いた。先のX-02をアローすべく、ほぼ同じ機動で上昇する『ワイバーン』。最も  
危険な機体の背中を、僚機がアローしない訳がない。

敵は上昇中、推力を上げている今、横方向への機動は制限される。片やこちらは急降  
下の最中で、機動も速度も存分に活かせる。軌跡は交差、互いのベクトルはわずかな距

離で交わる。

距離300。200。前進翼の機体が迫る。

150。敵機、わずかに針路を右へ。機首を上げ、こちらも機位を修正する。

距離100。50。

眼前一杯に敵機が広がり、スローモーションとなった光景の中でいくつもの声が頭を過ぎる。

レイモンド中尉、ごめん。イーグルアイも最後まで心配をかけてしまった。

エリクさん、まだ見ぬラーズグリーンズ隊。どうか、作戦の成功を祈っています。

サイファー、あなたの機体とエンブレムを汚してしまつて申し訳ない。私は、やっぱりあなたにはなれなかつた。

でも。

パトリック叔父さん。私は、俺は、あなたがいつも自慢していたサイファーに、少しでも近づけましたか。天国で、笑つて迎えてくれますか。

——激突。轟音。

『ガラム』のエンブレムを刻んだ『タイガーII』は、そのまま獲物を噛み砕くように『ワイバーン』へと突き刺さり爆発。純烈な青年の想いを白い光に溶かし、灰色の残骸と一体となって、月夜の円卓へと吞まれていった。

静寂の中、円卓を飛ぶ機影は6。数多の男の魂と想いを呑み込み、円卓は重く静まり返っている。

《…くだらん。伝説など所詮はこの程度だ》

《中佐、各機ミサイルを想定以上に消耗しました。残弾数4割です》

《やむを得ん、一時帰投し補給後にスーデントールへと向かう。…最後まで邪魔をしてくれたな、鬼神め…!》

灰色の機影は翼を翻し、東を指して飛んで行く。その方向は激戦を前にしたスーデントールではなく、彼らの本拠たるレクタを指していた。

僚機の離脱、そして援軍の阻止。

自身を伝説のエースと見立てて、人々の想いを背負い、身命を賭し散っていった若者へ、未だ向かう言葉は無い。

雪を纏った円卓の山肌。そこに横たわる擦れ焦げた『ガラム』のエンブレムは黙して語らず、ただただ月光を静かに浴びていた。

## 第40話 Break of Dawn(後) — The

## chained war —

「これで…5つ!」

押し込んだ指の動きに連動するかのように、機体の腹ががこん、と鳴る。

正面を彩るは、鮮血のような深紅の炎と黄金色の対空砲火。そして空に屹立する対空砲の砲身と、逃げ惑う人の姿。天を照らす三日月よりも遙かにまばゆい地上の炎は、熱と赤い光でもって地上を照らしあげていく。

放物線を描いて地を指すのは、主翼下の無誘導爆弾<sup>B</sup>2つ。

それらは鏃を揃えたような地対空ミサイル<sup>M</sup>発射台の傍らに突き刺さり、粉塵と爆炎の中にその姿を沈めていった。

操縦桿を引き、緩降下から地上すれすれの低空飛行へ遷移する。重く鈍重なYaK—38M『フォージャー』にはこれでも堪える機動だが、それでもUGBを一つ一つ捨てていく内にくらかマシにはなってきた。

右旋回に入り、機体を傾けながら俯瞰した地上はまさに魔女の釜。山の麓を削り取ったように狭い空間には白亜の施設が寄り添い合い、それらの一部を紅蓮の炎が舐め始め

ている。地上に咲いた爆炎の華の中には崩れ落ちた砲身や黒焦げとなった死体が転がり、近代的な街並みに相応しからぬ戦争と血の匂いが、こちらの高度まで届いてきそうな光景となっていた。

空には三日月、そして幾何学模様を描きながらその下を舞う、いくつもの機影。こちらの低空侵入と同時に突入した和平派のユークトバニア軍機とベルカ残党機の交戦は、数十分が経過した今となっても止む様子は見て取れない。加勢しようにもウステイオから付いてきた護衛2機の姿は既に無く、時折こちらを狙って降下してくる敵機を回避するので精一杯であった。

時に2010年12月30日、午後10時45分。

ベルカ残党が拠る最後の地、ノースオーストラリア州スーデントールにおける戦闘は、ここバルトライヒ山脈北方においても既に佳境へ入りつつあった。

《南はもうゲートに取りついたらしいぞ！こっちはまだか!?!》

《こちらユーク第88歩兵中隊!……くそっ!コントロール施設前の防衛陣地が邪魔だ! 奴らT-90まで配備してやがる!》

《民間企業が聞いて呆れるな。『サンダーヘッド』より『ハルヴ』、トンネル正面の敵陣地攻撃を頼む》

「了解!」

オーシアから派遣された空中管制機『サンダーヘッド』の指示を受け、エリクは横旋回のまま目標の陣地を目で探る。場所としては、バルトライヒ山脈に南北に穿たれたトンネルの入り口付近。目を凝らせばそこには確かにいくつものバリケードが築かれ、ひっきりなしに戦車や歩兵が応戦の砲火を上げているのが見て取れる。道路を挟んで北側にはユークトバニアの歩兵部隊と思しき集団が物陰に隠れ、攻めあぐねている様も上空から捉えることができた。

兵装選択、残った全てのUGB、残弾4。侵入方位は眼下の道路に沿って真西、敵の横腹を突く位置。鈍足な『フォージャー』とはいえ、高度500に満たない極低空では眼下を流れる光景も速く、速度が圧迫感を以て感じられる。距離にして1900、1700。この陣地さえ突破すれば、あとは――。

『『ハルヴ』、注意しろ。後方より敵機』

「……このタイミングで！」

サンダーヘッドの声と同時に、ロックオンアラートの電子音がコクピットを揺らす。『フォージャー』のキャノピーの構造上直接後方を振り返ることはできないが、キャノピー上面に据え付けた後方警戒ミラーには確かに機影が2つ、こちらへ迫っているのが見て取れた。位置にしてこちらの斜め後方、鈍足のこちらを捉えるには絶好の位置取り。片やこちらは核攻撃のタイムリミットがある以上、余計な回避行動を取る余裕はな



い。『フォージャー』の垂直離着陸機構を用いた回避は——不可能。未だこの機体に慣れていない以上、下手をすればそのまま墜落する。

それなら。

「——か、八かッ……！」

警報音が、ミサイル発射を示すものへと変わったその瞬間。エリクは歯を食いしばりながら操縦桿を前に倒し、地面に腹を擦る直前まで機体を降下させた。

もとより周囲が炎に包まれている今、短距離空対空<sup>A</sup>ミサイル<sup>M</sup>の赤外線誘導は当てになりはしない。地に刺さるAAMの爆炎を後方に振り切った所で、後方の2機は速度差を受けてこちらの上空を飛び抜けて行った。低空から見上げたその姿は、片方は前進翼を持つ大型機。そしてもう一方は、翼端を黄色く染めた、鶴のような流麗な首筋にカナードを設けた機体——Su-37『ターミネーター』。

「しつこいッ……またあの『黄色』か……！」

上空を抜けた2機の背をユーク軍機が追い、小さな半径で反転した『黄色』が巴戦を仕掛けてゆく。どうやらあの『黄色』がこの敵部隊のエース格らしく、攻撃開始からこのかた、既に多くの機体が奴に喰われていた。並外れた格闘戦能力を持つ機体特性と相まってその機動は驚異的であり、目下応戦しているユーク軍機も早くも劣勢に追い込まれている。

しかし、今は好機である。一瞬の隙とはいえ、眼前の敵陣地は無防備となり、わずかに対空砲がこちらを狙って撃ちあげているに過ぎない。ここを叩きさえすれば、歩兵部隊の道は開ける。

低高度のまま投弾すれば、こちらも爆発に巻き込まれる。エリクは距離1200ほどで機首を上げ、機体がわずかに上を向いた時点でUGBを投下。慣性で速度を得たUGBを放り投げるように投弾し、一気に機体を加速させた。

上昇する機体の下で、4つの黒い塊は放物線を描いて徐々に地へと迫る。

逃げ惑う装甲車、物陰に隠れる敵兵。UGBは次々に着弾し、それらを非情に薙ぎ払いながら爆風へと飲み込んで——新たに咲いた爆炎の華に、誘爆の花弁が幾つも加わっていった。

《正面陣地沈黙！我々はこれより突入する！》

「トンネル正面の対空砲も叩いた！空挺降下もすぐに……！」

炎に包まれる陣地を迂回し、トンネルゲートの制御施設へ列をなして突入する影。支援のため後方のヘリ部隊へも通信を送りかけたその刹那、南に生じた凄まじい衝撃と轟音が、エリクの声を詰まらせた。

南——スーデントール市、ではない。着弾と思しき光の残滓と舞い上がる塵は、空を赤く焼いたスーデントールとは幾分位置がずれている。目算では、爆発の位置はバルト

ライヒ山脈の中。事前情報でオーシアの歩兵部隊が進行している筈の搦め手に当たるルートのように見て取れた。

《何だ、今の衝撃は！》

《まさか…。『サンダーヘッド』より展開中の各部隊へ。衛星軌道上の『SOLG』が砲撃を開始した。核弾頭ではなく通常弾頭のようなのだが…。電波状態悪化。山中の歩兵部隊と通信途絶》

「いよいよなすりわり構わなくなってきたな。トンネルごと潰れるぞー！」

衛星軌道という超高高度から放たれる砲弾がどれほどの運動エネルギーを持つかなど、想像の域すら超えている。ましてそれを自らの制御施設を抱えたトンネルの真上に放つなど、もはや正気の沙汰とは思えない。

やはり、自身の破滅すら省みないほどに、奴らの怨恨は。

脳裏に掠めたある少女の面影を打ち消して、エリクは下腹に力を籠めながら機体を左旋回させた。旋回の先には、墜ち行くユーク軍のMiG-29。そしてその傍らを掠め、こちらの地上部隊へと鼻先を向けた『黄色』の姿。トンネルを開放すべく殺到する歩兵を狙った機動であることは言うまでもない。

「ここまで来て、邪魔させるかよー！」

横滑りする機体に舌打ちを向けつつ、半ばあてずっぽうに引き金を引く。

まっすぐ緩降下する敵機に対し、こちらは横合いかつ至近距離からの銃撃。それにも関わらず、『フォージャー』の23mm機関砲は虚しく吠えたに留まり、『黄色』は右ロールで機体を翻しこちらの射線を巧みに回避していった。攻撃を妨害できたのは収穫だったが、やはり最強の呼び声高い制空戦闘機相手に、鈍重鈍足の襲撃機では相手にならない。

——レーダー警報、ロックオン。

不意に鳴った電子音に心臓を跳ね上げ、エリクは咄嗟に高度を下げる。斜め上空から襲い来た二筋のミサイルは、危うく傍らを掠め、炎上するガンタワーに吸い込まれて炸裂した。汗を拭う間もなく見上げれば、三日月を背にして降下してくる前進翼の機影が二つ。さらにその背を追うように、いくつかの機影が徐々にその姿を大きくして来ている。

「く……敵編隊が一斉に降下して来たか！ユーク軍機、フォローしてくれ！こつちじゃ手に余る！」

《今行く！とはいえ……くそ！トンネルはまだか!?!》

《こちら第119工兵小隊だ。少し待て、もうすぐ……よし！トンネルを開放するぞ！突入機、準備はいいか!?!》

大型カナードを持つ前進翼機、そしてそれを追って次々と降下するユークトバニアの

Su-27。高度にして1000未満という低高度に互いの機体が集い、廻り、喰い合う様は、もはや地上の合戦と何一つ変わらない混沌とした光景を作り出している。

行き交い、飛び交う混戦の渦の中、上空から1つの機影が急降下してきたのはその時だった。

直径の太い大型の機首。尾部に2枚並んだ垂直尾翼に、意思があるかのように速度によつて角度を変える後進の可変翼。赤い尾翼端を残し全身を黒に染めたその姿は、『ラーズグリーズ隊』のF-14D『スパー・トムキャット』とうり二つの姿である。彗星のように降り立つその機影は、六角形の開口部を露にしたトンネルへ向け、一直線に降下してゆく。

《準備万端だ。『ハートブレイク・ワン』、これより突入する》

《バートレット、後はもう君たちに頼る他にない。…武運を、祈っている》

《へっ。お祈りなんざ、丸くなったなサンダーヘッド。『あいつら』への伝言があれば持つてくぜ?》

《…いや。あの時、彼らを信じきつてやれなかつた私に、もう何も言う資格はない。…祈ることしか、できない》

《はああ…。どつかのバカみてえに生真面目な奴め。これが終わつたら、大統領のオゴリであいつらと飲みに行くぞ。——その時までを考えとけ。お祈りとやらじゃなく、お

祝いの言葉を》

《………。……あ。必ず》

——仲間。思わずその二文字を想起させる二人の通信に、心の中で淡い安らぎと苦みが入り混じる。あのような隔ての無い言葉を交わし合える存在も、かつて自分の周りにはあつた。……この戦いで戦争が終わつたとしても、彼らは、もう。

「……感傷に浸つてる場合じゃない、か！」

吸い込まれるように、トンネルへ突入してゆく『トムキャット』。それに呼応したかのように鋭角の弧を描いた敵の姿を目にして、エリクは予断を振り切つた。纏わりつくユーク軍機をAAMで薙ぎ払い、螺旋の機動で銃弾を躲しながら、いくつかの機影は明らかにトンネルの方向を向いている。先頭は言うまでも無く、あの『黄色』。

「追わせるか！」

燃料、弾薬、残量ともに僅か。それでも構わず、エリクはありつたけの速度でトンネルを指し、いち早くその上空へと回り込んだ。速度差ではSu-37に及ぶべくもないが、元々トンネル前の陣地攻撃の直後であり、トンネルに近かつたのが幸運だつたと言えるだろう。トンネルを眼下に正面を向いたこちらに対し、『黄色』もまたトンネルへ向け正面から突つ込んで来る。行き先が決まっている以上針路も固定される道理であり、ヘッドオンならばある程度の性能差は無視できる。

距離2000。1500。流石に新鋭の制空戦闘機と言うべきか、距離は瞬く間に近づいてくる。

レーダー警報がロックオンアラートへと変わり、矛先が過たずこちらを指したことを告げる。

致命の距離。しかし、ここで引く訳にはいかない。退く訳にはいかない。連鎖を断ち、終戦を導くその背中から。

距離、1000。短距離AAMの有効射程へ至る一瞬前、エリクは一拍早く引き金を引き、機体がロックオンを告げると同時にもう一発を放った。

ミサイル、正面からも二筋。迫る黄色の翼。

一瞬早く放った一発は敵を捉えることなくその眼前に着弾し、土煙を上げる。

煙を貫くは二筋、まっすぐこちら。ついで抜けた敵の機影は機首を上へ上げ、トンネルではなくこちらを指している。土煙でトンネル入り口を晦まされた以上、衝突のリスクを甘受するほどに敵は愚かではない。

バレルロールでAAMを回避する『ターミネーター』。それと入れ違いに殺到したミサイルが機体に突き刺さる一瞬前、エリクは緊急脱出レバーを引いて、噴煙の中にその身を消した。

爆発、轟音、飛び散る破片。

耳を聳するような衝撃の中で、衝撃がエリクの体を襲う。脚、脇腹。——何かが当たった。

体が熱と浮遊感に包まれ、煙を抜けた。パラシュートから体が吊り下げられる。

煙が染みる目に映るのは、煙を避けるように旋回する『黄色』の背、眼下で跡形もなく燃える『フォージャー』。

そして。…そし、…：…てててて。

「痛、てててて…畜生、ギリギリまで引きつけ過ぎた…！」

脇腹の鈍痛が、一拍置いて鋭い痛みに変わり、聴覚すらも妨げる。

痛みの元は、左の脇腹。脱出の瞬間に機体の破片が掠めたのか、フライトジャケットの下から血が溢れ、赤い染みを広げている。左のふくらはぎも同様らしく、切ったような傷口がじわりと赤く染まっていた。左目といい、どうしてこう左側ばかり負傷するのか。

「破片が残ってなきやいいが…ぐつ！あいたててて…：…ちゃんと治るんだろぅなコレ…！」

左脇腹を押さえながら、エリクの体はふよふよと中空を漂う。下方の炎が上昇気流を生み出しているのか、早く降りたいのにも関わらず高度は容易に落ちてはくれない。寄る辺の無い身が空を漂う中で、包围されたベルカ残党機は一つ一つと数を減らしてい



き、残る機影が意を決したようにトンネルへと突入して姿を消してゆくのが目に入った。先頭から2機はS u —47『ベルクート』、それに続いてあの『黄色』。その背を、残るS u —47が追っていく。

腕時計をちらりと見れば、『ハートブレイク・ワン』の突入から一分と少し。『トムキャット』の加速ならば、トンネル内でよほど減速していない限り振り切ることができらう。あとは彼らの手で『S O L G』制御施設が破壊されれば、この馬鹿らしい戦争も終わりを迎えることになる。

眼下の砲火は、既に下火に向かっている。残るベルカ残党も抵抗を断念したのか、上空のヘリに照射された地上では、ベルカ兵と思しき人の列が少しずつ被害の少ない広場へと向かっていた。

咳き込んだ瞬間に脇腹が痛み、エリクは顔を顰める。

掌に、吐血は無い。幸い表面の皮が裂けただけで、内臓までダメージはなかったのだろう。脇腹から溢れる血から目を背け、エリクはそう思うことにした。

\*\*\*\*\*

「スーデントールの友軍が全滅した、だと……? S O L G 制御施設はどうなった!」

「……申し上げにくいのですが、制御施設は『ラーズグリーズ』を名乗る飛行隊によつて破壊されたそうです。施設を管理していた同志は全員戦死、ないし自決されたとのこと」

「……………ッ!!……………!!故国の為に同志たちが奮戦していたというのに、私は…!!」

エドワルド中佐の声にならない慟哭が、格納庫の空気を湿っぽく揺らす。憎悪と疲労で頬が削げ、がっくりと項垂れたその姿は、さながら幽鬼。カスパル少佐が戦死してから数週間と経っていないにも関わらず、特徴的な中佐の赤髪は前にも増して色が褪せ、もはや名乗るその名と同じ灰色に近くなってしまうていた。精神をすり減らすほどの執念と責任は、人をこれほどまでも老いさせるものなのだろう。

私は、どうだろうか。カスパル少佐を喪った時から、…いや、仲間を裏切ったあの時から、姿は変わってしまったのだろうか。

失意に沈むエドワルド中佐を遠目に、少女——パウラ・ニーダーハウゼンは鏡を覗くように、傍らに佇むX—02の外装へと目を向ける。漆黒の装甲は少女の視線すら吸収し、何の像も結ばずに、ただただ黒い肌を横たえるだけだった。

夜半を超えて日付が変わり、2010年12月31日、午前2時半。レクタ中部スヴォレフホイゼンの地に、円卓より帰還した黒衣の翼竜ワイバーンは翼を休めていた。

「…中佐、まだです。まだ、我々は終わってはいません。『SOLG』は信号制御を失うと同時に、地上に落下するようプログラムされています。計算より得られた着地点は、オーシア首都。午前6時半ごろに、オーレッドの市街地中心へ到着します」

「何…?!」

「情報を受け、残存したグラীবāk、オヴニル両隊は機体を整備したのち払曉に出撃し、到着まで『SOLG』を護衛すること。この攻撃さえ完遂できれば、我々の目的は達成できます」

『ワイバーン』を前に机を引っ張り出し、がさがさとおもむろに地図を広げるのは中佐を含めて6人。皆が皆ベルカ公国時代からの生き残りであり、復讐を誓った同志なのだという。尤もそのほとんどは非パイロットである技術系の軍人であり、ベルカ戦争当時『グラオヴエスペ隊』に属していたエドワルド中佐だけがパイロット出身という背景を持つている。言うなればここに残るのは灰色の復讐心に身を焦がした、根っからの国粋派だった。

「両隊が『SOLG』を護衛するとして、その障害になるものといえば」

「近隣のサピン軍やファトに駐留しているユークトバニア軍は被害が大きく、既に出撃が可能な状態にはありません。オーシア内部の空軍戦力もその多くは対ユーク戦で消耗しており、大半はユーク方面に張り付いています。機動部隊もない以上、残るは首都周辺の首都防空大隊のみです」

「加えて、スーデントールに出現した『ラーズグリーズ』を名乗る隊もオーレッドのハイウェイ上に着陸し補給中とのこと。これらさえ叩けば、『SOLG』着落は確実です」  
「オーレッド防空大隊の基地に割ける戦力は？」

「我々に同調したサピン第2航空師団機が一部残存しています。利を以て釣れば可能かと」

「よし、防空大隊の押さえにはそれらを充てる。我々は整備が終わり次第出撃。オーレッドに先行し、補給中のラーズグリーズを叩く。『ワイバーン』の整備を急げ!」

声を張り上げるエドワルド中佐。その傍らで整備担当班長が僅かに顔を曇らせるのを、パウラは見逃さなかった。急ぐべきその『ワイバーン』の整備に、問題が生じているのだ。

問題となっているのが、このX-02に搭載されている空戦機動用OS——通称『ヴァルハラ』である。平たく言えば『無人機にエースパイロットの機動を再現させる』システムであり、ベルカ伝統の小隊単位による戦闘機運用を重んじる姿勢に、エルジアからもたらされた無人機運用ノウハウが合わさった結果の産物である。

すなわち、過去の空戦記録および所属者による機動の再現から、エースと称される各部隊の戦術機動をデータ化。OS上でシミュレートされる機体制御に、可変機構によって幅広い飛行特性を再現可能なX-02を組み合わせることで、あらゆるエースの機動を再現したものである。そのシステム特性上、入力データが多いほど再現性が高くなるため、旧ベルカのエースと比べてデータの少ない他国のエースは再現性に乏しいと言える。事実、かつてのサピンのエースを再現した『エスパーダ』や同じくオースシアの『ソー

サラール』は、容易く機動を見破られ被害を被る結果となった。

数多の英雄の魂を集め、戦に備える宮殿と神話に謳われる『ヴァルハラ』。あらゆるエースをこの世に顕現させうるそのシステムに欠陥が生じたのは、つい先ほどのことであつた。

わずかに数時間前、円卓上空でウステイオ戦闘機隊を退けた直後、システムが突然ダウンしたのである。そのエース部隊で想定される本来の機数を下回つた結果がシステムに負荷を与えたのか、その原因は未だに判然としていない。そもそもこのシステムを実戦に投入するのは今回が初めてであり、運用ノウハウが圧倒的に不足しているのだ。

原因は定かではなく、しかし時間には限りがある。方針を定め一同が解散した後も、残つた整備担当班長は暗い顔でため息をついたままだつた。

「パウラ」

「はい」

様子を窺っていたこちらを目にとめたらしく、エドワルド中佐が声をかける。遠目にも老いが目立つ姿だったが、近くではそれが一層際立つて見て取れた。目元にはわずかに皺が増え、疲労とすり切れた精神を映し出している。

「スーデントールは残念だったが、この作戦さえ完遂されればオーシアは再起不能の痛手を被り衰退する。東方諸国の泥沼化が進むのは勿論だ。犠牲は多かつたが、報復の達

成まであと一歩だ」

「は、」

「…どうした、准尉。我々の悲願の達成だ、もつと喜ばないか。亡くなった君の父上も、壮絶な最期を遂げたカスパル少佐も、それでは浮かばれまい。荒廃した諸国の中で、<sup>たか</sup>崇く厳然と聳える理想のベルカ——その理想まで、もうすぐなのだぞ」

「ええ、勿論喜んでおります。…申し訳ありません、先の戦闘で少し疲労したようです」  
「…それならばいい。君はもはや数少ないベルカ再興の同志だ。期待している」

報復。理想。目の前で語られる謳に、言葉が浮かばない。おそらくベルカに対する記憶も想いも濃厚な中佐に対して、からつぼの記憶しかない私はベルカに対して虚ろな想いしか浮かべることができない。

口数を語らないこちらに興ざめたのか、エドワード中佐はそれきり踵を返し、司令部の収まる建物へと向かっていく。

『アシユレイ大佐へ繋げ！』外から聞こえるその声だけを、残響のように残しながら。ベルカ——今や姿を変えた、かつての祖国。

皆がそう言う存在だが、物心付く前にベルカを離れたパウラにとって、その存在は夢や空想のような、実体のない空虚なイメージでしかなかった。周りの皆が口々に語るその様から、さぞ素敵な国であったのかもしれないし、またその復讐の為に自ら精神をす

り減らしてゆく様を見れば、恐ろしい存在だったのかもしれない。

かもしれない、かもしれない、かもしれない——。そんな仮定でしかない空虚な概念に対して、喪失感や復讐心を抱くなど、パウラにとっては無理な話だった。他のベルカ出身の軍人とは違い、復讐心はパウラの原動力たりえなかつたといつていい。

理想に向かう原動力も無く、拠つて立つべき根も無い浮き草のような存在であるパウラにとつて、指向性ある唯一の原動力とは、身近な人の言葉——意志持つ人の言葉、それだけだった。生まれてからずっとその立ち位置にいたのがカスパルであり、その命じるままに彼女は飛び、戦い、殺してきた。

意思も無く、言われるままに動き、それを当然と信じる操り人形。そう言つて差し支えない彼女に意思らしきものが芽生えたのは、彼女を上司や部下ではなく、『仲間』として扱つた存在が現れたことであろう。命令ではなく、それは時として提案であつたり他愛ない雑談であつたり、時として喧嘩であつた。そんなやりとりを繰り返していくうちに、パウラの中には確かに自分自身を想う意思が育まれていったのだ。だからこそパウラはロベルトを警戒しつつもどこか信頼し、エリクにどこか父性にも、恋心に似た想いも寄せ、それゆえにしばしばクリスとぶつかつた。自らの立場を考えればロベルトを速やかに処断し、エリクにも確実に止めを刺すべきだったのに、それすらもせず見逃した。だが、今やもう——エリクを裏切り、カスパルを失つた今、パウラの中の意思は再び

死んでいた。もはや仲間と呼べる存在はおらず、雑談を交わす相手すらいない。理想も復讐も抱きようが無く、過去も未来も描きようがない今のパウラは、もはや自らの機体に搭載されたOSと何ら変わりがなかった。復讐を謳われればそれに従うし、殺せと言われれば殺す。カスパルを喪つてからからっぽとなった心の中には、今も何一つ無い空虚のままである。きっと今から出撃し、眼下にラーズグリーズを見下ろしたその時でさえも、おそらく無感情のまま彼らを殺しきるだろう。

「…三日月…」

格納庫のシャッターをくぐって注ぐ淡い光に気づき、一步、外へと歩き出す。

西の空には、傾いた黄金色の三日月。ちやり、という金属音に、自らの右手へ目を落とすと、手首に巻いたブレスレットの三日月が、月光を反射して淡く輝いていた。

いつだったか、エリクやクリスと一緒に外出した際にこっそり買った、二人とお揃いの意匠の品。脳裏に過ぎるのは二人の相貌、クリームロールの甘い香り、もう二度と戻ることのない日々。

右腕を下ろし、俯いて、パウラはその思い出を一つ一つ嘔み潰し心の虚無へと沈めていく。

踵を返し、キャノピーを開けた『ワイバーン』へと、パウラは一步、向かっていく。

空に浮かんだ三日月から、まるで逃げるかのように。



\*\*\*\*\*

「こんな、ことが。…ありえませんか」

「……………この期に及んで、これかよ…!!」

今夜夜色深い窓の外、それを映すかのように仄暗い室内。キーボードを擁した正面のディスプレイを前に、エリクは呻くように声を漏らした。

ノースオーシア州、ルーメン郊外。スーデントール上空で脱出したのちL・M・Aのヘリに拾われ、そのままL・M・Aの本拠へ帰還してから、わずかに4時間ほど。無事『S O L G』制御施設が破壊され、全てが終わったと信じていた矢先の凶報に、エリクの心は絶望に沈んだ。

これまでの溢れる情報量に、頭はただでさえ沸騰している。カルロス、ニコラスによるオーレッド襲撃阻止の成功、その傍らでパスカル率いるウステイオ部隊の壊滅、オーレッドにおける両首脳の会談、スーデントールの制圧。

終戦に向けて築きあげられたそれらの階段を一拳に崩壊させる情報が、情報収集艦『アンドロメダ』に拠るピーター参謀からもたらされたのだ。

『天文台による観測だが、間違いなく『S O L G』は落下軌道にある。到着予測は午前6時32分。場所は…オーレッド。その中心街とみられる』

「地上や艦艇からミサイルによる迎撃はできないのですか？」

《難しいだろうね。突入する『S O L G』の前面は非常に強固だ。突入角の関係から、構造上脆弱な各モジュール接合部や砲塔内部を地上から狙い打つのは無理がある。戦術核での迎撃も、オーシア国土上空と考えるとリスクが高すぎる》

「じゃあ…」

《そうだ。残された手段は、戦闘機で『S O L G』の弱点に回り込み、ミサイルでその弱点を狙い打つ他に無い。オーシア軍の大半はユーク前線、東方諸国はもはや迎撃に割く戦力が無いことを踏まえると、頼みの綱は『ミラーージュ』を装備する首都防空大隊とラズグリーズしかないことになるね》

ピーター参謀の説明と同時に映し出される『S O L G』の3D画像に、エリクは思わず絶句した。

全長、およそ1km。砲身基部のメインモジュールからは弾倉や加速器などの各モジュールが十字に延び、概観としては尻尾の生えたバドミントンの羽根、あるいは骨が4本しかない傘のような姿をしている。比較として傍らに表示された『トムキャット』の画像からもその大きさはけた違いであり、さながら天そのものが落ちて来るかのような錯覚すら感じされた。こんな巨大な物を、果たして戦闘機が墜とせるのか。

生唾を下し、ごくり、と鳴る喉。一同の曇る相貌。ただでさえ重い絶望の空気の中、背後の廊下の方から、足早に駆ける音が響いてくる。

それは、さらなる絶望を重ねる凶報だった。

「た、大変ですサヤカ主任!」

「あらあら、通信中ですよ、ノックして下さいませ。お尻スパナの刑に致しますよ?」

「か、勘弁して下さい…。って、それより緊急連絡です! レッドミルの首都防空大隊基地が急襲を受け、機能を喪失したとのこと!」

《な…》

「何だつて!?!」

「襲撃機はサピン国籍とされていますが詳細は不明。全機を撃墜したものの滑走路全てを損傷し、復旧までに最低でも半日とのことですよ!」

書類の束を纏めたバインダーを手に、叫ぶように口にする通信兵。もはや絶望する間すら惜しく、エリクは壁面から地図をはぎ取り、傍らの机に押し張った。レッドミルはオーレッドの南に位置する最も近い駐屯地であり、確かにサピンとは運河を隔てて隣合わせの位置にある。

「他に近傍の基地は?」

《クランストン、ハイエルラーク、ワズワース…いずれも遠い。到着にはおそらく間に合わないだろう。所属機をユーク方面に回してしまい、空になっっている基地もかなりある》

ピーター参謀が口にする地名を地図で見取り、それぞれの位置を探る。迎撃にはミサイルを満載しなければならぬ以上、たとえ全速を出した所で到着できる範囲には無い。こうなれば、オーレットに駐機しているラーズグリーズだけが頼りだった。だが。

「続いてもう一報なのですが……レクタから大型の航空機が6機飛び立ち、南西へ向かって飛行中とのことです。離陸地点はレクタ中部、スヴォレフホイゼン付近とのこと」

「スヴォレフ……!!」

「エリク様。スヴォレフホイゼンといえば、確か……」

瞬間、記憶の奥底にある地名が脳裏を過ぎり、電流を受けたように体を突き動かした。スヴォレフホイゼン——そう、確かスポーク隊の裏切りに遭ったあの時、本来行くべき目的地だった場所。前後の事情を踏まえると、あれがベルカ残党の拠点であったことは存分に考えられる。

背筋に冷や汗が走る。

スヴォレフホイゼンは、レクタ中部。そこから南西に向かった先と言えば。

指先がスヴォレフホイゼンを指し、そこからゆっくり地図の左下へと動いてゆく。指先はラティオオ北部を通り、サピンを横切り、オーレット湾を通つて——首都オーレットへ、至る。

「そいつらの位置は!？」

「え!?!…ええと、10分前の時点で…ラティオとサピン、ウステイオの国境付近になります。もうサピン領内に入った所かなと」

現時点で、三国の国境付近からサピン内陸。機体の速度と装備にもよるが、並みの戦闘機が最高速度を出せば1時間も経たずにオーレッド湾へ到達する。予測到達時刻は、おおむね5時半。

「ピーター参謀、ラーズグリーズ隊の補給終了時刻は分かりますか?」

《詳細は分からないが、場所が只のハイウェイ上だ。どんなに急いでも6時近くになるだろう。可変翼機の『トムキャット』では、通常機の倍は整備の時間がかかる》

「離陸まで30分は足りない、か…。くそ! 練習機でもせめて上げられる基地があれば…!」

どう計算しても、時間が致命的に足りない。既にこの敵と思しき編隊はサピン国境まで到達しており、それほど近距離にある基地は他に無いのだ。

せめて民間空港でもいい。どこか、無いか。エリクの指はサピン国境を指し、右へ、左へと揺れ——同じ緯度を左へ、左へと行った時、ある地点で不意に止まった。

ノースオースリア州、ルーメン。今いるこの地は、奇しくも敵がいるであろう現在地と、オーレッドへの距離はほぼ等しい。今から飛び立てば、オーレッド湾上空で敵の眼前に

先回りできる。

ルーメンにある発着施設といえば、ここL・M・Aの滑走路以外に無い。

機体はといえば、Y a K—38 Mこそ失ったものの、元々の乗機『クファイルC10』は整備を既に終え、万全の状態にある。

そして、今それを駆ることのできるパイロットといえば。

——。

「分かった。ピーター参謀、そつちから可能な限りラーズグリーズの整備を急がせてください。…俺は今から出撃し、オーレッド湾に先回りします。『クファイル』なら、今からでも間に合う」

「え…。エリック様!」

《………すまない。エリック君、どうか彼らを護ってやってくれ》

ディスプレイの向こうで、ピーター参謀の顔に哀悼のような色が過ぎる。ふっ、とそれに微笑んで応じてから、エリックはすぐさま踵を返し、早足で廊下へと出、格納庫へ向かうルートへと歩を進めた。後ろからはぱたぱたと慌てたように、サヤカの足音が続いてくる。

「エリック様! エリック様、少々お待ちを!」

「サヤカ、すぐ整備班にエンジンの火を入れるよう伝えてくれ」

「え…エリク様!!」

「増槽は3本。兵装は短距離AAMをありったけ積んでくれ。あと…」

「待って!!」

建物から出たのと同じタイミングで、追いついたサヤカが左手を握る。慣れない早足で体力を使ったのか、その息遣いは常に無いほどに震えていた。

「り、離陸するだけでしたら、わが社には輸送機のパイロットもいます。足止めだけでしたら、わが社の人員でも可能です! エリク様が上がられる必要はありません。…これは、管轄権限者の命令です!」

掌を掴む力がぎゅつと強まり、伝わる熱が一際高まる。常でない断言するような鋭い口調と激しい息遣いは、普段のサヤカらしからぬ様だった。これほどの感情を、今までサヤカからぶつけられたことがあっただろうか。

「いや、連中が本当にスヴォレフホイゼンから上がったのなら、その中の一人はたぶん俺が知ってる奴だ。互いの為にも、俺は決着を付けなきゃならない。——それに、戦闘機に慣れた奴じゃなきゃ『ラズグリーズ』の離陸までは持たせられないだろう。唯一の戦闘機パイロットでもあるし、ここまで首突っ込んだ責任もある。行くのは、俺でなきゃならない」

「つ…しかし、…しかしその傷では。……エリク様の、命、が…」

感情を抑えられないように言葉を詰まらせ、俯くサヤカ。その目元に一筋流れた涙に、今度はエリクの方が言葉を詰まらせた。

パウラ、クリス、カルロス。喜怒哀楽の感情をむき出しにして言葉を交わした面々の顔が過ぎり、エリクはそつと、サヤカに向き直る。なぜか初めて、今サヤカと繋がった気がした。

「傷は……まあ脇腹は妙な機動しない限り大丈夫だろ。脚の方は遠心力で出血しないよう、きつめに包帯巻いて行くさ」

「でも……でもっ……」

ぼろり、ぼろりと零れる涙。

——残っていたい。本能が呟く。

——行かねばならない。心が叫ぶ。

こみ上げるものを堪えるように、エリクは瞼を閉じ、天を仰ぐ。

呑み込み、見上げた先には、西の空を彩る淡い三日月の姿。自らの——皆の誇りを託した、黄金色の象徴。

顔を下ろし、交わしたサヤカの濡れた瞳には、朧な月の光が映っている。

意思是、固まった。ベルカの策謀を破り、カスパルの怨恨に打ち勝つため。下らない報復の連鎖を断ち切るため。そんな、己が信念のため。——いや、それ以上に。



「サヤカ、行かせてくれ。俺は、行かなくちゃならない。報復の連鎖を乗り越えるために。決着を付けるために。——それに、何より。俺の周りの大切なものを、護るために。……行かせてくれ、サヤカ」

そこで言葉を切つて、エリクは右の拳を握り、静かにサヤカの下腹部に押し当てた。これ以上、言葉はいらない。この手の意味は、言葉の意思は、お互いがよく知つていゝる筈だから。

紅潮した頬。潤んだ瞳。

ほろ、と落ちた涙滴を最後に、サヤカは涙を拭いて、ぷい、とこちらに背を向けた。慙無礼、年齢不詳な常とはらしからぬ、子供のようなその仕草が、エリクには可笑しかった。

「AAMはオーシア製の最新のものがあります。すぐに手配致しましょう。燃料も最上のもので。命令違反による違約分は、のちほど請求致します」

「ああ、頼む」

「……武運を」

「ああ」

一步、一步。サヤカを背に、エリクは脚を踏み出してゆく。

向かう先は、三日月照らす格納庫。愛機クファイルの末裔、『クファイルC10』が翼を休

めるシャッターの先。手首を彩る三日月のブレスレットは、月光を反射して淡く輝いている。

12月の夜は長く、東の空は今なお暗い。しかし確かに、  
Break of Dawn  
 夜明けは近づいてい

る。  
 「エンジン回せ！『クファイル』、すぐに上がるぞ！」

The chained war —— 連鎖する、報復と悲劇。その先へ向かうための翼の下へ、エリクは一步、進んでいった。

## 第41話 Break of Dawn + 一ヒカリ

東の空が、仄かに明るみを帯びている。

水平線を彩るのは、藍色を薄める白い夜明けの幕、そして運河を隔てたサピンの大地。眼下には、未だ無数の人々が眠るオーレッドの街並みと、その傍らのハイウェイに駐機する4機のF-14D『スーパー・トムキャット』。そして翻った西の空には、地平線へと下端を接する三日月の姿。

操縦桿を握る手に力が籠る。長らく相棒であった『クファイル』の末裔であるC10は、それに応えるようにエンジンを響かせる。

右目に光を、眼下に希望を、そして三日月を象った右腕のブレスレットに記憶を。全てを己の胸に詰めて、エリク・ボルストはまっすぐ前を見据えながら、乗機『クファイルC10』をオーレッド湾上空へと向けていった。落下しうる増槽や破片のことを考えても、敵の予測進路から考えても、迎撃はオーレッド湾の上空で行った方が望ましい。

報復の連鎖に、決着を。

時に2010年12月31日、午前5時25分。夜明けの空を間近に控え、左翼に三

日月を染め抜いたその機体は、決意を胸に空を舞った。

《こちらユークトバニア空軍空中管制機『オーカ・ニエーバ』。話は聞いてるよ、三日月のパイロットくん。『ラーズグリーズ』の発進までの支援になるが、よろしく頼むよ》

「了解、『オーカ・ニエーバ』。こっちのTACネームは『ハルヴ』だ。エスコートは頼むぜ」

《あー、あー。聞こえるかね？ピーターだ。ユーク軍の回線を介し『アンドロメダ』から通信を送っている。——エリク君、やはりラーズグリーズ隊の離陸まであと30分は要するようだ。今オーレットを飛べるのは、もはや君しかない。∴彼らを、頼む》

「ピーター参謀∴。もちろんです。それに、これは俺の戦いへの決着でもある。負けません、絶対に」

通信回線に入る声は、ユークの訛りが入った空中管制官のものと、聞きなれたピーター参謀のそれ。戦闘空域に入って通信を送るのは邪魔になるとサヤカは同行を辞退し、今はルーメンで『アンドロメダ』の通信に耳を傾けているため、この場に姿は見られない。ぐいぐいと前に出て来るのが信条のサヤカからしからぬ、空気を讀んだ控えめな対応だった。

だが、今のエリクにとつてはその方が都合が良かったと言えるだろう。自身の中で下した、『報復の連鎖を断ち切る』という信念への答え。もしサヤカが傍にいては、きつと

決断が鈍ってしまうであろうから。

それにしても、サヤカ自らが丹精込めて整備した——少なくとも本人はそう自称していたが——という言葉通り、『クファイル』の機体はすこぶる快調である。純正の部品を使つてあるらしく、コクピット内装の計器類は軍用の制式機と瓜二つ。前回の戦闘で損傷したにも関わらず、エンジン回りもかつての愛機『クファイルC7』と比べても遜色無い。兵装に関しても短距離空対空<sup>A</sup>ミサイル<sup>M</sup>4基に加え、今回はサヤカがとつておきと豪語する最新型の高機動<sup>Q</sup>ミサイル<sup>A</sup>2基を備えており、スタンドアローンでの迎撃戦を行うには最適解とも言える武装が用意されていた。予想される敵機がクリス達を落とした例の可変機——X—02ということを考えると、目標への命中までロックオンが必要なセミアクティブ<sup>S</sup>空対空<sup>A</sup>ミサイル<sup>M</sup>を悠長に構えている余裕などなく、また射程に勝るもの誘導性は並みの域を出ない高機能<sup>X</sup>中距離<sup>M</sup>空対空<sup>A</sup>ミサイル<sup>A</sup>は回避される可能性が高いため、これも選択するメリットが薄い。それを踏まえれば、近接戦のリスクを冒すとはいえ、誘導能力が高く一度放てば目標に確実に食らいつけるQAAを装備するのは理に適っているとも言えた。

問題は、体の方である。

バルトライヒ山脈北側での戦闘で受けた大きな傷は、左脇腹と左ふくらはぎの二か所。一応いづれも止血し応急処理を施してはあるものの、身体に高いGがかかる格闘戦

が予想される以上、いつまで持つかは不明瞭だった。特に旋回戦で遠心力が働く脚は、他の部位と比べて血液が集まりやすく、一度出血すれば致命傷になる危険も考えられる。念のため負傷した左ふくらはぎはミイラ男がごとく包帯を固く巻いてあるが、この気休めがどこまで効くかどうか。

『オーカ・ニエーバ』より『ハルヴ』。方位040より機影6だ。どうやらジャミングを張っているらしく、反応が安定しない。注意してくれ』  
「了解。初撃で落っこちないように気を付けるよ」

無意識に傷口へと落としていた目を、改めて正面へと向ける。計器盤のレーダーサイトには、管制官の言う通り円形にノイズが奔り、迫る敵の正確な位置や数が読み取れなくなっている。目視で空を探ろうにも、夜明けの白色に眩む目では夜色残る上空を凝視するのも骨が折れる。ましてこの広大な空から、暗色の戦闘機を探し出すとなればその困難さは一入というものである。

この状況では、接敵と同時の格闘戦も覚悟を――。

「ッー」

警報音。ロックオンアラートとほぼ同時の、間髪入れないミサイル警報。

反射的にエリクは増槽を捨て、操縦桿を手前に引いて機体の高度を上げた。投げ槍を放つかのような遠距離からの狙撃に対しては、少しでも高度を取り回避の手数を増やし

た方がいい。

「敵編隊、ミサイル発射！母機相對距離、約3000…何て数だ、ミサイル12発！」  
「大盤振る舞いだな…！惜しんでる余裕は無いか！」

高度3600、左ロールで背面航行へ移行。先ほどのこちらとほぼ同高度から放たれたらしく、ミサイルは煙の筋を引きながら、こちらを指して上昇しつつあるのが見て取れた。高速で飛行する『クファイル』の針路を見越すように、それらは列となつて殺到して、その行く手を塞ぎ来る。

数を存分に活かした飽和攻撃に、出し惜しむ余裕は無い。

エリクは操縦桿の横に設けられたボタンを押し、機体後部からフレアを射出しつつ、背面飛行のまま操縦桿を引いて機体を降下。切り上げる軌跡を描くミサイルに対してに組むがごとく、飛来するそれらの上方を抜ける針路を取った。

こちらの尾部、その後方のフレア目掛けてミサイルの群れが円弧を刻む。

後方、連なる炸裂の衝撃。その数は2を、4を、6を数え、その度に高性能爆薬仕込みの華が夜空を赤く照らしてゆく。

それが12を数え終えたのち、夜空を揺さぶる爆炎を抜けて、『クファイル』は背面のまま機首を僅かに下げて眼下を俯瞰した。

仄かに明るみを帯びたオーレッド湾の水面。その上に、無尾翼デルタの機影が6つ、

影絵のように浮かんでいる。見覚えのあるあのシルエットは、間違いなく。

「…来たか…!」

《たった1機…それも旧式の『クフィール』ごとき物の数ではない。『ヴァルハラ』、コード変更。T—04—WL—RT》

X—02『ワイバーン』。あの時、目の前でクリスを屠った忌まわしい機体。

記憶から導いた像が結論を結ぶのと、聞き慣れない男の声が回線を揺らしたのはほぼ同時。その声に弾かれるように、敵編隊の左右両翼に位置していた4機は一斉に進路を変え、左右両翼に分かれながら上昇に入って距離を詰め始めた。

気づけば止んでいるジャミングは、おそらく敵が戦術を変えたことの証左だろう。咄嗟の判断が求められる格闘戦では、ジャミングによる妨害はメリットよりも意思疎通不全によるリスクの方が大きい。まして、数が多い側にとっては猶更のことである。

敵機は左右下方から2機ずつ、デルタ翼形態のまま上昇しつつある。残る2機は眼下をすり抜け、まっすぐにオーレッド市街地へと鼻先を向けつつあった。位置取りとしては左右いずれかに格闘戦を挑みたい所だが、眼下の2機を放っておく訳にはいかない。

『ラーズグリーズの元へは行かせない』。

下した結論にリスクを放り出し、エリクはGで脚へ圧力がかかるのも構わず操縦桿を思いきり引き、機体を下方へ急旋回させた。ほぼ真下への急降下となる針路、その鼻先



には下方を抜ける2機。

敵の投影面積が最大となったその瞬間、エリクは引き金を引き、照準器の中心目掛け30mm機関砲を撃ち放った。

夜空を照らす曳光弾の閃光に敵機の姿が浮かび上がり、糸に引かれたかのようにそれらは射線を躲して左右へと散る。右の機体はデルタ翼のまま加速し、左の機体は瞬時に主翼を前進翼へと変形させ、鋭い弧を描いて反転した。

あの機動——見覚えがある。

小半径旋回で180度反転したその機体に対し、エリクの『クファイル』が直上から掠めて下方へと抜ける。互いが同高度になるその一瞬、そのコクピットに収まる小柄な人影と、エリクは確かに目が合った。

《『三日月』の……『クファイル』……!》

「……やつぱり、来たか。パウラ」

《ッ……!!》

聞き覚えのある細い声が、息を呑む心配が、レシーバー越しに鼓膜を震わせる。

今更、驚きはしなかった。いや、むしろこうなることを自分はどうに予想していたに違いない。信念は、そして心の奥底で固めた覚悟は、それを物語るかのように揺動一つなく据わっている。

そう、この連鎖に決着を付けられる存在は。

きつと怒りや怨恨の中にあるであろう、あいつが向かうべき相手は。

「――なんて、考えてる余裕も無いか!」

背後から迫るミサイルアラートに、エリクは下腹と脚に力を込めて操縦桿を引き上げる。

平衡を取り戻し、再び上昇に転じる機体の下方を掠めるのは2発のミサイル。後方を振り返るまでもなく、先ほど上昇しながら仕掛けて来た4機が追いつき、隙を見せたこちらの上方から仕掛けて来たのに違いなかった。上昇を諦め横方向への旋回に入り、旋回半径の中心を望むように見上げた先には、果せるかなデルタ翼の機影が4。加速性能ならば現行機に引けを取らない『クファイル』を相手に猛追し、その距離は刻一刻と狭まってきた。

「ち…どうあつてもこつちを格闘戦に持ち込みたい肚か」

《エリク君、気を付けたまえ。ウステイオのガルム1も、『ワイバーン』の包囲攻撃に遭い撃墜された。彼らが同じ戦法を狙ってくる可能性は大いにある》

「そうは言っても…ちっ!」

性能で劣るこちらをあざ笑うかのように、後方の4機はさらに加速を重ね、ロックオン警報はやがてミサイルアラートへと音色を変える。後方に迫るは二筋、次いで機銃の

雨。

こうなれば、速度で振り切る手は捨てざるを得ない。エリクはフットペダルを緩め、操縦桿を手前へ引き上げつつ減速。敢えて速度を殺すと同時に機首上げによる空力低下で強引に回避機動を取り、次いでロールで機体を捻り上げて、迫るミサイルに対し機体側方を向けた。敵正面に対して投影面積を減らし、少しでも被弾を避けるためであることは言うまでもない。

腹側へと抜ける二筋のミサイル。しかし速度が乗った状態での咄嗟の機動では回避を全うすること叶わず、一方が至近弾となつて炸裂し、破片の雨が機体を襲う。次いで迫る機銃の筋を縦旋回とロールで危うく躲したその直後、エリクの脇腹にびり、と痛みが走った。

被弾ではない。しかし、高Gをもたらず戦闘機動を短時間に繰り返したことで、傷が破れた可能性は大いにある。

——それがどうした。今更止まっては堪らない。回避を緩める余裕もない。

爆炎を抜け、見据えた先。こちらを追い抜き散開した敵機のうち一番左端の機体を見定め、エリクは操縦桿を倒し照準を覗き込んだ。爆炎を抜けた際に破片が障害を引き起こしたのか、この機体だけが左右方向への機動が鈍い。

「まずはいっつをー」

ヘッドマウントディスプレイ<sup>H</sup>をダイヤモンドシーカーが走り、『ワイバーン』の背をその掌中に捉える。距離にしておおよそ600、AAMで狙うには誘導が万全に乗り、近すぎず遠すぎない絶妙の距離。彼我の位置を踏まえれば、万一外しても急加速で一步踏み込み機銃掃射へ移るのは容易な距離でもある。

貰った。

口中に眩き、視線はそのままに操縦桿のボタンへと力を籠める。

確信とともに放つ、極至近の射撃。しかしそれは直後に、予想だにしない驚愕へと変わった。

「な…!?!」

『クフィール』の主翼下部からAAMが放たれたその瞬間、眼前の『ワイバーン』は今までの鈍い挙動がまるで嘘かのように鋭角の急旋回を描いたので。それも急角度の右旋回だけではなく、直後に左へと切り返す極小のS字旋回でもってAAMの誘導を振り切りながら、なおかつ先とほぼ同じ機位に就いてみせたのである。その機動力はまさに桁違いであり、人間が操縦しているものとは到底思えない。

何より奇妙なのは、これだけの運動性能を持ちながら、こちらの射界からけして外れないことである。先ほどの攻撃を見る限り『ワイバーン』の速度はこちらより速く、速度の面でも機動力の面でも、こちらの死角を取るのは容易だというのに。

——死角。

思考がその語へ至ったその瞬間、エリクの背筋にぞつと悪寒が奔った。

この眼前の敵を追い始めてから既に数十秒経っているが、俺はその間、自らの死角を一度も確認していない。今にも落とせそうな敵機に意識を集中するあまり、周囲への警戒を疎かにしてしまっていた。

ならば、今敵機は。

纏わりつく背筋の悪寒は徐々に明瞭な棘となり、射抜くように体を貫き始める。これは、まるで視線——いや、それ以上に意思の籠った、明確な敵意。

警報。

「やべえっ!!」

コクピット内にミサイルアラートが鳴り響いたその瞬間、エリクは理屈も思考もかなくなり捨て、利き手の右腕で操縦桿を思いきり左奥へと倒した。

傷が痛むのも構わず、『クファイル』が左へ急旋回し弧を描く。ちらりと走らせた右目、その端には先ほどまでの位置を貫く3筋の射線とミサイルの雨。あと1秒でも回避が遅れていれば直撃していたであろうタイミングだが、躲しえたのは果たして幸運と言っているのかどうか。察知が遅れたことの代償は大きく、左旋回からバレルロールへ移行し、そこから推力を活かした急上昇へ移行しても、なお後方の3機は離れる気配も見せ

ない。こちらがGで機体も体も軋ませながら回避行動を取る中、敵は距離を離すことなくぴったりとくつついて来る。本来軽戦闘機が得意とする筈の格闘戦でここまで追い込まれるとは、立つ瀬がないとはまさにこのことだった。

「囲戦術に嵌ったか……くそ、何か打てる手は……」

《気を付けろ『ハルヴ』！正面から機影2！》

「くっ!？」

距離、500。

管制官の声と接近警報に正面を向き、辛うじてエリクが凶り取れたのはその数値のみ。

真正面から2つの機影が迫る。

ロックオンはおろか、機銃の射線を合わせる余裕は無い。

一瞬とはいえ水平飛行に移った今、左右へ旋回する暇もない。何よりリスクが大きすぎる。

迫るは曳光弾二筋。

避けられない以上、狙うはその隙間。

瞬間、エリクは覚悟を固め、機体を左ロールさせつつ加速。放たれた射線の鋏の中目掛け、正面から突っ込み馳せ違った。

被弾音。警報、そしてガラスの割れる音。

幸い、体には当たっていない。機体も飛ぶのに支障はない。

左ロールから背面、次いで操縦桿を引いて背面急降下。追撃を避けるべく高度を下げ、高度1800で引き揚げてから、エリクはようやく戦場を仰ぐ余裕を得た。

状況は、極めてまずい。今のところ完全に向こうのペースである。

おそらく最初にばらけた4機の『ワイバーン』は、1機がわざと囷となり残る3機が攻撃手となる戦術だろう。単純な囷戦法ながら、あの凄まじい機動力を誇る『ワイバーン』の性能と戦術が噛み合い、厄介極まりない相手となっている。

それに輪をかけて厄介なのが、明らかに4機の連携の外にある残り2機が存在である。状況を考えればパウラともう一人の男の機体だろうが、あの2機の機動はイレギュラーであるがゆえに、攻撃のタイミングが読みづらい。

裏を返せばこの2機と先の4機の連携は不完全とも言え、そこに付け入る隙があると見ていいのではないか。実際、パウラ達の正面突撃に際し回避運動を要したため、こちらを追撃していた3機の『ワイバーン』と『クフィル』の距離は先ほどよりも開いている。辛うじて探りえた僅かな隙だが、現在の彼我の位置はその推論を裏付けてくれた。

だが、それをどう活かす。

刻一刻と痛む脇腹に歯を食いしばり、エリクは降下を始める3機の『ワイバーン』を見上げながら思案する。

考える。ロベルト隊長も言っていた筈だ、『観察しろ』と。先の失敗を繰り返さないためにも、戦場を窺って勝利を見いだせ。機動を、連携を、環境を、数値を。全てを読んで。

今だ勝機の見えない、混迷の空。空と数値を交互に行き来し、頭を巡らせたエリクの眼に奇妙な物が映ったのはその時だった。

「……ん？……何だ、あいつは」

こちらから見て右側、ほぼ同高度。そこには大型の無尾翼デルタ機が1機、こちらと前方で直交する針路のまま、よたよたと飛んでいる姿があったのである。機種は確かめるまでもなくX-02『ワイバーン』、消去法で考えれば最初の囷となつて飛んでいたはずの1機。見る間にそれはこちらの前方に躍り出て、距離800前後を維持しながら右へ左へと緩く旋回を始めた。

心に沸く、疑念一つ。

おかしい、この敵は——こいつを含めた4機は、明らかに何かがおかしい。攻撃手がこちらの背を抑えた以上囷を再び演じる必要は無い筈なのに、戦術に固執しすぎてい。まるで人ならざる、命令を忠実に実行し続けるロボットのように。



…いや、待て。

——『ロボット』。人以外の手に拠る、戦闘機の操縦形態。

まさか。

「こいつら…無人機か!？」

《なんだって!?!》

《…いや、可能性はある。元を正せば、X-02は軍事大国エルジアの機体だ。エルジアは無人機の研究で先進しており、非公式ながら実戦に投入されたという情報もある。『灰色の男達』がX-02を自らの戦力とするに当たり、エルジアの無人機制御技術をそのまま流用したと考えるても不思議はない》

ピーター参謀の分析に、エリクも首肯で応じる。あくまで状況証拠からの判断に過ぎないが、そう考えれば先ほどのようなパイロットへの負担を考慮しない回避運動も、融通の利かない戦術も説明が付くのだ。

後方には迫りくる3機。イレギュラーなパウラ達2機も、次はいつ仕掛けてくるか分からない。賭けの要素は非常に多いが、時間の猶予も無い以上、今は微かなこの勝機を活かす他にない。

決断は一瞬。エリクはグラスコクピットのコントロールパネルへ手を伸ばし、エンジン出力のモード選択画面へと切り替えた。この期に及んで選ぶものといえ、もはや一

つしかない。

今、自らの手の中にある最高の切り札——推力強化機構『コンバット・プラス』。

「全力だ、『クファイル』!!」

踏み込んだフットペダルに応じるように、『クファイル』の尾部に焰が灯る。ぐん、と増加したGに押し付けられる体、そして見る見る数値を刻んでいく速度計。あたかも獅子の咆哮のようにエンジンが唸りを上げ、風を孕んだ翼は速度を増して、三日月を刻んだ『クファイル』は瞬く間に眼前の『ワイバーン』を追い抜いた。

追い抜いた敵機はほぼ平行しつつ、やや右後方。あと一步減速すればこちらの後方に就ける位置にありながら、『ワイバーン』は逆に加速し、こちらの前方に出んとする挙動を示している。

思った通りである。こいつは案の定、与えられた任務である『囿』を、今なお忠実に演じようとしている。まるで一切の融通が利かない、頑なな機械のように。

では、狙うべき目標が自らを無視したとしたら、この機体は果たしてどうするか。ましてその『目標』<sup>クファイル</sup>が、自身より速度で勝るとすれば。

「いい子だ。囿なら……囿以外できないってんなら、当然そう来るよな」

横目に映るのは、アフターバーナーの光を灯し、速度を上げてこちらを徐々に追い越す『ワイバーン』の姿。

読み通りであった。今のこいつの役割が目を引き付ける罠であり、かつこちらが余計な機動で速度を殺さない以上、この『ワイバーン』は増速してこちらを追い抜く他に取るべき手を持たない。つまりこちらの前に出るまでは、この機体は横方向への機動を自ら封じている訳である。

十分に速度が乗ったタイミングを見計らい、エリクはフットペダルを緩め、同時にスロットルを一気に絞って急減速。兵装を機銃へと変更し、その引き金へと指を移した。

操縦桿を右に倒して機首を僅かに右へと傾け、照準器に納めるのは何も無い虚空。

自身の右手側、こちらを追い越そうと躍起になっている『ワイバーン』が通過するであらう、その未来位置――。

「追いかけてこの1位はくれてやるよ。…30mmのゴールテープ、全身で切るんだな！」  
相対距離、僅かに50。

手が触れ合うような至近を30mmの曳光弾が奔り、光の筋となって『ワイバーン』の機首を薙ぎ斬る。

炸裂、飛び散る破片。

装薬の炸裂で抉れた機首は、曲がりへし折れ脱落して、風圧に揉まれて墜ちてゆく。首無し竜と化した『ワイバーン』もまた渦巻く風の虜となつて、光湛えるオーレッド湾目掛けて吸い込まれていった。

《馬鹿な…!? 『クファイル』ごときに!?》

《『ワイバーン』 2番機ロスト。コードRT、機能停止します》

「つ………まだまだ!!」

急減速の瞬間に脇腹がずきりと痛み、エリクは思わず呻き声を漏らす。奥歯を噛みながら視線を落とすと、左の脇腹にじわりと広がる暗色の染みが目に入った。傷が開いたのは確実、おまけに先ほどの被弾でキャノピーに穴でも開いたのか、コクピットの気圧も徐々に下がってきている。

だが、まだ。まだまだ。『コンバット・プラス』が機能している間に、1機でも多く落とさなくては。

頭が眩むような鈍痛の中、操縦桿を引いて縦へと旋回。その頂点でロールを行うインメルマンターンの機動で、エリクは素早く機体を反転させた。真正面やや下方には、こちらを追撃していた『ワイバーン』が3機。しかしその機動は先ほどと比べ明らかに鈍く、何の変哲もない直進のままこちらの下方を抜けようとしている。

「そっ……」

選択はAAM2発、次いで機銃。狙いは中央の1機。

ボタンとともに放たれたミサイルは、飛竜の頭目掛け鏃のごとく飛翔する。

炸裂、両主翼。さらに距離400を見計らい駄目押し機銃掃射。

敵の頭上から斜め下方に抜け、振り返った先。そこには焔に包まれた『ワイバーン』が1機、先の機動が嘘のようにあつけなく墜ちていく様が見て取れた。

《『ハルヴ』、2機撃墜を確認。いやあ凄いね君、後でユーク軍に來ないかい?》

「冗談言ってる場合かよ……残りは……!」

インメルマンターン、そして急速に増したGに痛みはより強く、染みもより広がってゆく。心なしか酸欠の時のように、頭もうまく回らない。

やつと2機。まだ2機。

時刻は午前5時40分前。ラーズグリーズの離陸まであと20分少々。

片や、『コンバット・プラス』と自らの限界まではあとわずか。前者はエンジンへの負担、後者は脇腹の出血量を考えてといずれも5分というところか。それを過ぎれば、どちらも自滅は避けられない。

《よもや2機も失うことになるとは……。これ以上ベルカ空軍の名譽に泥を塗ることはできません。コード変更、T-04-WL-GR。速やかに『三日月』とラーズグリーズを屠る!》

「くそつ、時間が無いってのに……!」

男の声が通信に響くと同時に、『ワイバーン』に魂が戻ったかのように機動の精彩が蘇る。こちらの後方上空で旋回するそれらはやや大振りの弧を描きながら、徐々に接近し

つつあるように見えた。よく見れば機体形状も先ほどまでのデルタ翼形態ではなく、両主翼を前方へと開き尾翼を立たせた前進翼形態へと移行している。こちらの頭上を抑えるべく、上方から急降下しつつあるパウラ達の2機も同様だった。形状、そして機動から見ても、明らかに先ほどから戦術が変わっている。

《ふむ…先ほどの彼らの戦術だが、かつてのベルカ空軍のとある部隊と酷似している。『ワイバーン』と接敵した皆の情報を総合すると、どうやらあの機体にはエースパイロットの機動を模倣するシステムのようなものが搭載されているのではないかな。もちろん先ほどのような、機械ならではの脆さもあるようだが》

「つてことは、俺は実質一人でベルカのエース部隊と戦ってるも同然か…。…ああくそ、頭が痛くなる」

《敵の戦術も変わったようだ。こちらでも『アンドロメダ』のデータベースと照合し、可能な限り分析してみよう》

「なるべく早く、頼みます。俺も、いつまで持つか分からない」

『なに?』最後に通信から洩れた声を意識の外に、エリクは操縦桿を握り直す。

一度目を瞑り、深く息を吸う。脇腹に奔るのは、刺すようなところでなく、体の芯まで熱した鉄棒で突くような痛み。息を吸うのもはや苦痛だが、今は少しでも酸素を吸い込み、少しでも頭を回転させなければ、目的を達することすら覚束ない。咳き込みそ

うな痛みの中で、敵は四方に散開しながら、こちらを徐々に包囲しつつある。

悠長に敵の出方を待つ余裕も、まして観察に徹する時間も、もはや無い。

「なら……こつちから！」

仕掛ける。

末尾を口の中に結び、狙いを定めるは2時方向同高度から回り込みつつある『ワイバーン』。

余計な旋回は出血を誘発する以上、狙うはエスクード隊よろしく一撃離脱戦法に限る。

エリクはフットペダルを踏みこみ、強化された推力を活かして瞬く間に敵機への距離を詰めてゆく。照準の中心は、先ほど同様に予測される敵の未来位置。

引き金とともに放たれた光軸は、しかし虚しく虚空を抉り彼方へと抜けてゆく。航跡と射線が交わるタイミングにきっかり合わせ、まるで風に舞う木の葉のように『ワイバーン』は機体をロールさせて、擦過弾一つなく機銃弾を躲しきって見せたのだ。『ワイバーン』の比類ない運動性はもちろんだが、射線そのものを避けるのではなく射撃を完全に見切った辺りに、人の気配が滲んでいる。

パウラ、か。衰えない技量を横目に焼き付けながら、エリクは追撃を行うことなくその頭上を抜けていった。

とはいえ、初撃はあくまで見積もりの一手。機体を横に倒した左旋回から頭上を見上げると、敵の内2機はこちらへ直進し、残る2機はひとまとまりとなつて上方から迂回する様が見て取れた。1機ずつの散開包囲から、2機×2のロットテ戦術へ。先ほどの戦い方と違い、まだ敵の手の内は見えてこない。

空を見、地を見、手元を見て状況を計る。

機内気圧を見る限り、これ以上の高度上昇は厳禁。となると正面の2機を目標とする他なく、加速を活かして突撃すれば頭上の2機が迂回しこちらの尻を捉えるまでに、その射界を抜けるのは不可能ではない。現高度はおおよそ2000、万一被られた所で、ダイブして逃れることも可能な高さでもある。

すなわち、徹すべきは一撃離脱。狙うべきは回避方向が限定される真正面。

エリクは正面を見据え、機体を水平へと戻して再び加速させた。兵装選択はAAM。虎の子のQ A A Mは可能な限り温存したい。

正面、2機。

距離2000、1500、1200。

相対速度は音速をとうに超え、距離は見る間に縮まってゆく。

短距離AAMが有効射程に入る一拍前。エリクは機体がロックオンを告げていないにも関わらず、残った最後のAAMを撃ち放った。



射程外からの攻撃に眼前の2機が揺動し、左右へわずかに開く。機首を修正しないままに放たれた4つのミサイルは明らかにその先端をこちらから外し、明後日の方向へとその鎌を向けていた。当然こちらのAAMも誘導性を発揮することなく、正面の2機の間を抜けていったことは言うまでもない。元よりエリクのAAMは攻撃の本命ではなく、攻撃の矛先を避けながら回避運動を強制させるためのものに過ぎないのである。

「そっ……!!」

散開した2機のうち右へ回避した『ワイバーン』へ、エリクは補助翼までも動員して強引に機首を向ける。

距離おおよそ400、照準の中心に捉えられたのはW字に折れ曲がった『ワイバーン』の主翼。

過たず引き絞った引き金、放たれるのは本命たる30mmが二筋。

眼前を、急角度で旋回した『ワイバーン』が抜けていく。

夜色薄まる空を背に、散るのは火花と金属片。傷としては浅いが、今度は確かに手応えがあった。機体特性とコンバット・プラスさえ活かしきれれば、『クファイル』でも立ち向かうことはできる。

掌に感じた、確かな手応え。しかしその余韻は、不意に頭上から降り注ぐ焔の雨に断ち切られた。

「…っ…しまった！速度が…！」

こちらの鼻先を制する、ミサイルと曳光弾の雨。

フットペダルを離し操縦桿を反射的に右奥へと倒して、エリクは急旋回でその火線を危うく躲す。幸いにして、被弾は無い。しかしその代償に『クファイル』は速度と高度を失い、一度手にした勝機を捨てざるを得ない羽目に陥った。

左頭上を過ぎ行くのは、攻撃手らしい1機の『ワイバーン』。先のこちらの攻撃を上空から見定め、咄嗟に反転してこちらの鼻先を抑える戦法に変更したのだろう。有人機の方なのかもしれないが、今度はいやに融通が利き過ぎている。

確か、先ほど頭上に回り込んだのは2機。では、残る1機は。

「——後ろ！」

左ロール。

ミサイルアラート。

次いで擦過するミサイルと、その母機たる黒い影。痛みの増す身体とは裏腹に、勘は、目は、常以上に研ぎ澄まされているのを感じる。目が利きづらい夜明け前にも関わらず、まるで梟の目でも得たように、戦況を見渡す目は冴えている。

瞬時に走らせるのは、残った右目。敵の位置を、風を、高度を、残弾を読み、自らの出血の程度を見積もって、エリクはこちらを追い越した『ワイバーン』へと照準を合わ

せた。

速い。旋回半径もコーナー速度も『クファイル』とは比べ物にならず、HMD上のダイヤモンドシーカーが捉えるより速く『ワイバーン』はその追尾を躲してゆく。元より彼私の性能差は歴然であり、今はAAMを使い果たし軽くなつた機体とコンバット・プラズによる推力強化で辛うじて食いついてはいるのに過ぎない。おまけに他の3機はこちらを引きはがすかのように、隙を狙つて機銃掃射で傷を刻んで来る。

だが、まだ耐えられる。機銃の威力はどうやら並程度であり、急所さえ避ければさして問題にはならない。問題は、刻一刻と内臓を圧するGに、体がいつまで持つかどうか。右旋回。操縦桿を倒し、スロットルを絞つて旋回半径を稼ぐ。

そこから増速、わずかに機首上げ。フットペダルを踏みこみ、進路を先読みして速度を上げる。

間髪入れずの左切り返し、同時に右後方から1機。補助翼で強引に揚力を制御し、横滑りを堪えながら、辛うじて機首を敵の尾部へと向ける。後方から喰らつた弾痕は3、ないし4。エンジンにさえ喰らわなければ今は問題ない。

限界を超えたGに圧迫され、視野が狭まる。濡れたような温かい鼻の感触は、鼻血が出ているのか。脇腹はもはや見るまでも無い。既に血の染みは腰の辺りにまで広がっている。

息が荒れる。視界がぼやける。しかし度重なる旋回で速度を失い、『ワイバーン』の機動は徐々に鈍りつつある。

左旋回、下降。

もう少し、あと一歩。

コンバット・プラス、増速。

緑のダイヤモンドシーカーがHMD上を走り、敵のエンジンを捉えて赤く変わる。甲高い電子音が告げるのは、ロックオンを示す確死の音色。

ついに、捉えた。

「捕、まえた。……これで、墜ち——」

血を振り絞るような声は、しかし唐突に機体を襲う振動によって断ち切られる。

被弾、損傷：否。正面、エンジン制御モードを操作するコントロールパネルには、『コンバット・プラス稼働時間超過／強制停止』の表示。回転計の数値はみるみる下がり、推力が瞬く間に奪われていく。

「くっ！」

咄嗟に放ったQAAAMも、間一髪でロックを外れた『ワイバーン』を捉えること叶わず、虚しく空を切る。QAAAMの残弾は、これで1。損傷と敵残数、そしてコンバット・プラスの機能停止を含めれば、状況は絶望的である。

だが、まだ。——まだ。

推力が低下した機体で、なおも敵の背を追うべく旋回を加えるエリク。

しかしその旋回の頂点、『ワイバーン』が翼を翻して逃げおおせた先に目を向けたその瞬間、エリクの目は驚愕と絶望に見開かれることとなった。

正面同高度、敵影3。先ほどまで各機ばらばらに行動していたにも関わらず、いつの間にか敵は3機ひと塊に集って、こちらへ鼻先を向けている。

この変幻自在な戦術は、見たことがある。俺は、確かにこの飛び方を知っている。

心に漂う確信は、続く嵐に打ち砕かれる。機体正面、回避の術すらない機位から放たれた、3機分の機銃掃射によって。

「ぐ、が、ああああああつ!!」

《『ハルヴ』!!》

咄嗟に操縦桿を前へと倒し、射線を頭上に躲すべくとつた機動。それでも位置取りの不利と門数の差は埋めがたく、『クファイル』はほぼ真正面から弾丸の雨を受ける形となった。

正面から入れ違い、轟と鳴る風圧に『クファイル』が揺らぐ。

右側、補助翼とカナードは全損。主翼と胴体には弾痕がいくつも生じ、エンジンは咳き込むようにその損傷を告げている。左翼を彩る三日月の塗装も、今や被弾の衝撃で至

る所が剥げ落ちて、無残な姿となり果てていた。

辛うじて、コクピットへの着弾は1発のみ。しかしそれは頭部を掠めてヘッドレスト後部で炸裂し、座席後部はもはや原型を留めていない。掠めた衝撃でヘルメットの右上部分は凹み、HMDにもノイズが奔るようになっていた。エリク本人はといえば、被弾のショックで右側頭から血を流し、背には細かな破片がいくつも刺さっている。着弾で頭ごともぎ取れなかったのが幸運といふべきか、この際いつそ不運だったと言ふべきだろうか。

血が目に入り、視界が赤く染まる。

計器盤が見えない。敵の位置はHMD上のシーカーが辛うじて捉えているものの、それもぼやけて見えにくい。体は至る所が軋み、もはやどこが痛いのか、そもそも痛みがあるかどうかすら分からなくなっていた。

『ハ：ヴ』、聞……………『……………ヴ』、応答……………！ラー……………リリースは……………だ！……………、脱出し……………！』

遠距離通信機器も損傷したのか、『オーカ・ニエーバ』の声も雑音交じりでよく聞き取れない。この調子では、他の内部機器もガタがきていることだろう。もう体も、機体も、限界だった。

もう、いいのではないか。旧式機で、たった1機で、できる限りのことはやった。ラー

ズグリーズの離陸まであと僅か。あとはきつと、彼らが。

《…リク君、聞こえ……か。……………結果……………の戦…パターン…、『グリユーン隊』の……………間違…ない……………う。くれ……………？…エリ……………？『ルヴ』、聞こえ……か。応……………》

グリユーン隊。ロベルト隊長が、かつて所属していたというベルカのエース部隊。

ピーター参謀らしき声が告げたその単語に、茫漠としていたエリクの脳裏に光が過ぎる。

そうだ、戦況に応じて瞬く間に編成を変えるあの変幻自在な戦術は、確かに見覚えがあるものだった。——否、あれは、俺たちもやってきたものだった。ロベルト隊長の指揮による『ハルヴ隊』の戦術が古巣の『グリユーン隊』を下敷きにしたものだとしたら、両者が似通っていても不思議はない。敵の機動性ばかりに気を取られていたが、俺はいつの間にか隊長の影と戦っていたのだ。

ならば。奴ら以上に熟知し、直接手ほどきを受けた『グリユーン隊』の戦術というのなら。戦闘機パイロットとして空に上がってから、ずっと体に叩きこんできた『ハルヴ隊』の戦術だというのなら。俺にもきつと、読み切ることがができる。

絶望と諦念に包まれかけた心を、かつての記憶が光となつて照らす。

まだ、終われない。護るために。そして、終わらせるために。

《まだ醜く飛び続けるか、『三日月』め。…もういい、目障りだ。速やかに撃墜し、『ラーズグリーズ』撃破に向かう。もはや時間は無い》

短距離通信は生きているらしく、存外に明瞭な声がレシーバーから洩れ聞こえる。

指示を受け、迫る敵は正面左右から2機ずつ。右を第一分隊、やや遅れた左を第二分隊とするならば、さしずめ右はロベルト隊長とヴィルさんの位置、左は俺とクリスの位置という所か。

右はヘッドオンを誘発しつつ牽制、本命は左。

その読みに——否、自らの記憶と技術に従い、エリクは先行する2機と相対。攻撃を意識し回避を疎かにする愚を犯さず、正面に対し左回りのバレルロールで以て、2機の射撃と突撃を回避する。二番手たる左の2機とはベクトルがほぼ直交しており、速度を上げれば攻撃は当たらない。

射撃を後方にいなし、左旋回で反転。背を取られた第二分隊は左右に散開し、一目散に逃げる『ように見せかける』。

スロットルを振り絞り、追撃を仕掛けるのは俺の位置に当たる右の機体。『ワイバーン俺』は逃げ惑うように旋回を続けながら後方の『敵』を誘導し、その隙に死角に忍び寄った『クリス』が後方から討つ手。

——来た。



右後ろやや下方、こちらの主翼の影に隠れるように接近する『ワイバーン』。クリスより速く躊躇いの無い接敵だが、それだけに機動は単純で読みやすい。

距離2000。1500。軌道修正、一撃離脱で仕留めるべく速度を上げながら1100。頭の中で描く機動そのままに、後方の『ワイバーン』は距離を詰めて来る。

ふ、う。

吐き出した息は、血と鉄の澱。

距離が1000を切ったその瞬間、エリクは操縦桿を右横へ倒し、同時にスロットルを絞って機体を急減速。進行方向に対し機体を傾けることで強引に速度を落とし、後方の『ワイバーン』のオーバーシユートを誘発した。

上げた速度に絡め取られ、右方を過ぎる『ワイバーン』。照準の中心で狙うは一点。かつて目の前でクリスが受けたのと同じ、機体の中枢たるコクピットへの狙い撃ち。

赤く染まった照準のさ中を、鶴の細首のような機首が過ぎる。

そこへ目掛け、引き金を引くのは僅かにコンマ数秒。

『クファイル』の30mm機関砲は、まるでこめかみを貫くように『ワイバーン』のコクピットに風穴を開け、一瞬にしてその首を抉り飛ばした。

《え…!?!》

《何だと…!?!偶然だ、ありえん!!》

頭上を見上げれば、直上より迫る2機。初撃の後にインメルマンターンで反転していたらしく、既に2機はこちらをAAMの射程に捉えている。あちらは有人機である男の方がコントロールしているらしく、流石に細かな機動までは読み切れない。

《手負いの旧式ごときに『ワイバーン』が…栄光のベルカ空軍の戦術が破られるなど!》  
読み切れはしない、が。

《——あつてはならない!!》

ミサイル、4発。こちらの鼻先を塞ぐような射線で放たれたそれらは近接信管を作動させ、『クファイル』の機体を無数の破片と爆炎に包んでいく。エリクの体にもまた新たな破片が突き刺さり、太陽のような閃光は目を眩ませた。

だが、眩まされたのはこちらの目だけではない。夜空に生じた閃光で視界が妨げられるのは敵も同じであり、この一瞬、敵はこちらの位置を確実に見失った。

フットペダルを踏み、爆炎からいち早く抜けたエリクが目指すのは、あの2機が位置するであろう未来位置。機動が読み切れない隊長機とは裏腹に、確実にその一步後方に付き従うヴィルさんの位置ならば読み切れる。

爆炎から抜け出した『クファイル』が、速度を速めて『ワイバーン』の後方から肉薄する。

デルタ翼に細い機首を持つその機影は、さながら鎌。回避の間すら与えず、その機影が瞬く間に『ワイバーン』を追い越した一瞬後——その『ワイバーン』は30mmの弾痕

に左翼を食い破られ、中ほどから翼を失い墜ちていった。

残るは、有人機と思しき2機。戦意を喪つたかのようにふらふらと飛ぶ1機とは対照的に、『ヴィルさん』の隣にいた1機は鋭く機首を返してこちらに対し横旋回で対峙している。おそらくは、あれが隊長と思しき男の機体に違いない。

《馬鹿な……！変幻自在を誇る『グリーン隊』の戦術が、たかがパイロットに……》

「見積もり損ねたな。あんたらのお手本がエースのコピーだつていうなら、俺の手本は本物のエースだ」

《……何だと……！》

「俺は戦闘機パイロットとして飛び始めてからずっと、あの人の飛び方を一番近くで見えて来たんだ。……覚えとけ。そんな玩具じゃ、『グリーン』の飛び方には遠く及ばない」

《……！》

《……黙れ。黙れ黙れ！貴様如きが！ベルカが誇るエースを騙るなアアア!!》

裂帛の気迫が鼓膜を揺らし、エリクは僅かに顔を顰める。耳元で大声が響くと、今は単純に頭が痛い。

正面、やや上方。男が操る『ワイバーン』は鋭く機首を引き上げ、こちらと真つ向から相対するヘッドオンの位置取りとなり、こちらとの距離を詰め始めた。

旋回は鋭く、速度は確かに速い。しかしそれゆえに機動は単調で、陽動も無く真正面

から突っ込んでくる。せめて本物の隊長よろしく自機の性能を省みれば、あるいはこちらの損傷や残弾数を見積もれば、他の手でいくらでも圧倒できたであろうに。

エリクは正面から相対し、操縦桿に力を込めた。これが、超えるべき最後の壁。戦うべき最期の空。

《我らの誇りを、今取り戻す。貴様の血で：オーシアとユークの、奴らの血で!!》

正面、ミサイル4連。

手早く左手で計器盤を操作し、操縦桿下のボタンを押す。流血で視界が赤く潰れていようとも、長く慣れ親しんだ『クファイル』ならば、たとえ目を瞑っていても操作できる。

選択は、残る全てのチャフとフレア。機体後部から四方に弾き出された銀色の雨と焔の渦は、正面のミサイルを引き寄せて次々と後方で炸裂させていく。

距離600、500、400。

『ワイバーン』から機銃弾が嵐の如く降り注ぐ。威力は並、しかしそれゆえに正確な弾道が容赦なく機体を抉り、カナードが、キャノピーが、次々と穴を穿たれ砕けてゆく。飛び散ったキャノピーの枠はエリクの頭部を打ち、ついに割れたヘルメットが床へと転がる。

距離300、200。

黒煙と炎を吹く機体、燃え尽きんとする命。

勝利を確信し、衝突を避けるべく敵はこちらの右側を指す。

「…変幻、自在。…それが『グリユーン隊』の戦術だつて、あんたは言ったな」

《…何…!?!》

「じゃあ、やつぱり。あんたは失格だ」

距離、100。

まさに機体が入れ違うその一瞬前、エリクは操縦桿のボタンを押し込んだ。選択は、言うまでも無くI発残ったQAAAM。

翼の下からQAAAMが落とされ、一拍遅れて点火する。

傍らを『ワイバーン』が擦れ違う。

瞬く間に後方へと過ぎた『ワイバーン』。しかし優れた誘導性能と運動性能を併せ持つQAAAMは、発射前にロックオンを外されさえしなければ、たとえ視界外になろうとも目標へと食らいつく。

そう、それはまさに今。わずかに前進したQAAAMがくるりと真後ろへ向きを変え、まるで意思を持つかのように『ワイバーン』の背を追い始めた様のように。

衝突を回避するのに専心し、横方向への機動を疎かにした敵にとつて、いくら『ワイバーン』といえども回避の術は無い。

その様は、まるで神話に言う必中の槍<sup>ゲイボルグ</sup>。

Q A A Mの穂先は『ワイバーン』の尾部へと突き刺さり、漆黒の破片をまき散らしながら、致命を物語る紅蓮の華を空へと咲かせた。

《中佐！》

《………我らの誇り。我らの悲願。こんな、所で……。…アシュレイ大佐。どうかS O L Gを。朽ち果てることない、我らの怒りを……！！》

焰が一際膨れ上がり、その意志と、折り重なった憎悪もろとも、爆炎の中に吞み込まれてゆく。

時刻、午前5時52分。東の空は既に明るく、西の空には三日月が地平線に沈もうとしている。夜明けまで、あと少しだった。

息が、苦しい。頭が朦朧とし、意識が吞まれそうになる。

目の中の血が流れ落ち、ようやく色を取り戻した朧な視界の中。エリクは虚ろな瞳で、求める最後の姿を探した。

——いた。こちらとほぼ同高度、距離にして1800ほど。水平線に届き始めた太陽を背に、惑うように一人飛ぶパウラの『ワイバーン』。

「パウ、ラ………」

《エリク。…エリク・ボルスト……！》

通信を揺らすパウラの声に、エリクはおや、と違和感を覚えた。

まるで機械のような、先ほどまでの声音と違う。平易な抑揚とは異なり、今は言葉尻が昂り、溢れる感情を堪えようとしているようにも感じ取れる。その様は、かつて仲間だったころ、稀に垣間見せたパウラの姿を思わせた。

——当然だろう。ベルカによる復讐で俺は仲間を奪われ、その復讐としてアルヴィンとフィンセントを殺した。元を正せば、ベルカによる復讐も15年前の戦争での諸国の成しようが遠因であり、さらに遡ればその元もあるのだろう。いわば復讐の連鎖の末端、復讐を実行する最後の立場となつているのが、今のパウラなのだ。気が昂らないはずはない。あれほどまで彼女が慕っていたカスバルを、俺はこの手で殺したのだから。そんな相手が、今日の前にいるのだから。

《私は……、私はっ……カスバル少佐を殺したあなたが、憎い……恨めしい、……私の手で、殺したい!》

エリクの口角に、微笑が浮かぶ。

これほどに、パウラが感情を露にしたことがあつただろうか。まるでその心に溜まりに溜まった感情と言葉を吐き出すかのように、その声はとめどもなく溢れて来る。

ようやく、本音と本音で語り合えた。そう思うと、むしろ今の気分は好ましい。俺もまたその道を歩んだ以上、復讐という選択を否定する資格もない。

パウラ、お前は、お前の意思は、それでいい。だから——。

《…だけど。……だけれど、でもっ……!……殺したいけれど、憎い、けれど……!でも、……私  
 は皆が、……あなた、が……っ!》

「——もういい。パウラ」

《…え?》

嗚咽交じりのパウラの言葉に、エリクは紡ぎを重ねた。

報復の連鎖を止めるといふ決意。パウラの心に残る、報復の意思。それぞれを、そして消えそうな自分の灯を考えれば、今できることはただ一つしか無かった。もしどこかが、何か一つが違いさえすれば結末も変わったのかもしれないが、今の俺にできることは、もうこれしか思いつかない。

エリクは残った力を振り絞り、喉に力を込めて、できる限りの声で通信に向けた。想いを、希望を、パウラへ伝えるために。

「もう、いいんだ。お前の望みは、じき達成される。——報復の連鎖は、俺たちで、もう終わりだ」

《え……?……待つて、エリク》

「俺はもう、レクタでは死んだ身だ。復讐を思いつく奴なんて誰もいない。俺が死んでも、連なる怨恨はもうない。……だから、パウラ。全部終わったら、お前は日常に戻れ。パウラ・ヘンドリクスとして、報復の連鎖の先に、生きてくれ」



《待つて、エリク。……待つて、違う。の。……私は、……わたしは……！》  
 未来への、願い。

それを告げきつた直後、唐突に襲う嘔吐感に、エリクは胸からこみ上げたものを吐き出した。

鮮やかな、鮮血。限界を超えたGは、既に体を中からも崩し始めている。

頭が、重い。まるで徹夜の哨戒任務明けのように眠い。

視界の端に光が溢れ、水平線から朝日が顔を覗かせる。

——ああ、そうだ。朝日が昇れば、月は沈まなければならない。夜明けの先には、三日月はもうお役御免だ。

「……ああくそ、……重い。たまらなく、疲れた。……そういう、訳だ。……パウラ。……夜は、……沈む俺たちが、持つて……行くから。……お前は、……光の、中へ……」

《エリク……エリ、ク……！私は、……わたしは、あなたが……！——！》

「——元気で、な」

最後の力を使い果たし、腕がだらりと垂れ落ちる。

制御を失った『クファイルC10』は項垂れる馬のようにその機首を下げ、眼下に佇むオーレッド湾へと、炎に包まれたその翼を向けていった。

視界の端にはオーレッドのハイウェイ。そこに駐機する黒衣のF-14には既に尾

部に光が灯り、周囲へ群がる人影が徐々に離れていつている。どうやら離陸の準備が整ったらしく、広げた主翼に補助翼を上下させながら、大柄な機体は少しずつ進み始めていた。

護り切った。全てを賭して、報復の連鎖へも決着を下した。

確かめるべきものを見届け、エリクの眼は静かに閉じられる。

険の奥には、残した人々の面影。

カルロス、ニコラス。ニムロッド隊の面々。

支えてくれたピーター参謀。

まだ声しか知らない『オーカ・ニエーバ』、そして『ラーズグリーズ』。

パウラ。

サヤカ。

——すまない。俺は結局、お前に頼ってばかりで、与えられるばかりで、何も残すことができなかった。

臆となる現実感に、生きる人々の面影もまた、闇へと静かに消えていく。

最期の最後、エリクの目の前に見えたのは、暗闇を照らす黄金色の三日月。そしてその下、歩みを止めて振り返る、3人の姿。

クリス。ヴィルさん。ロベルト隊長。

良かった。今度は、俺を置いていかないでくれよ。

さあ、行こう。今度はいつも通り4人で。

報復の連鎖の果て、その先に広がる、ヒカリ溢れる広大な空へ。

\*\*\*\*\*

夜明けに満ちる、1年最後の空。

文字通り暁を払い朝日と呼ぶように、オーシア首都オーレットを走るハイウェイ上から、翼端を赤く染めた漆黒のF-14Dが離陸していく。

時に2010年12月31日、午前6時6分。

後の世に、環太平洋戦争と謳われる一連の戦いの終結日と言われるこの日。戦争の規模から顧みればあまりにもちっぽけな、名も無き青年が一人、オーレット湾へと散った。

4つの機影が集う空を、朝日が穏やかに照らしてゆく。

夜明けの訪れを祝福するかのよう、三日月は語らぬまま、西の地平線へと沈んでいった。

## 最終話 The chained belief

《お前の望みは、じき達成される。——報復の連鎖は、俺たちで、もう終わりだ》

言葉が喉へ問つかえたように息が詰まる。

蒙昧とした闇の中——否、背に朝日を控え、明るみを帯びた空。眼下には揺蕩うオーレッド湾の水面、手元には液晶を多用したX—02『ワイバーン』の計器盤、そして眼前には炎を纏い満身創痍となった『クフィルC10』。幾度となく瞼の裏を過ぎった光景の中で、記憶の澱をかき混ぜるように、青年の声が鼓膜の奥へと響いてくる。

《俺が死んでも、連なる怨恨はもうない。…だから、パウラ。全部終わったら、お前は日常に戻れ。パウラ・ヘンドリクスとして、報復の連鎖の先に、生きてくれ》

待って。

違う。それは違う。

カスパル少佐やオットーを、私の周りにいた全てを奪ったあなたは確かに憎い。憤りしいし、憎いし、殺したい。それは偽らざる真実に違いない。

でも、だけど。殺したいけれど、一方であなたには生きてほしいという思いが確かにある。生きてほしいし、また口喧嘩もしたいし、謝りたいし、話したい。今まで溜めに

溜めた感情が胸の底から溢れ出て、自分でも整理が付かない。胸の内はあまりにも混沌として矛盾に満ちているけれど、殺したいのも、生かしたいのも、きつとどちらも本当に違いない。

胸の中には怒りがある。罪悪感もある。そして、その間で揺れる好意も――。

ああ、うん、そうか。そうだ。興味や父性といった言葉で誤魔化すまでもなく、やっぱり私は、どこかであなたのことが好きだったのだ。無駄口は多く、おせっかいでお調子者で。でも世話焼きで、無口な私にまで無駄口を叩いて、そして劣勢でもあらゆる困難を跳ね返してきて。『あの時』反射的に否定したけれど、私はきつと、あなたのことを好きだった。

だから。

怒って、殴って、謝って、叱らりたいから。ようやく動き始めた自分の心で話したいから。報復の連鎖の先へ、あなたも。

《夜は、沈む俺たちが持つていくから。…お前は、光の中へ――》

待つて。違う。そんなものは、私一人だけで連鎖の彼方へ生き残ることは、誰も望んでいない。

一緒に行きたいし、生きたいのに。

なのに、声が、言葉が出ない。自らの言葉で真意を紡ぎたいのに、虚しく手が伸びる

だけで、声は意味を成してはくれない。溢れかえった感情の洪水が喉に詰まってしまうたかのように、唇からは言葉一つ漏れてはくれない。

伸ばした掌の中から、炎に包まれた『クファイル』がするりと抜けて、水面目掛けて墜ちてゆく。

待つて。行かないで。まだ、話したいことがいっぱいあるのに。伝えたいことがいっぱいあったのに。

待つて——。

\*\*\*\*\*

伸ばした手。補強の鉄骨が走る天井。

白色と黒鉄、モノクロ二色の殺風景な色彩を、窓から注ぐ朝日が照らしている。枕元の目覚まし時計は午前7時30分にわずかに届かず、まるで熟睡しているかのように沈黙を保っていた。

何の変哲もない、朝の光景。

目覚まし時計のアラームを解除し、ゆっくり上半身をもたげながら、少女——パウラ・ヘンドリクスはぼんやりとした眼で周囲を見渡した。書類やファイルが山積みとなつたデスクに小さな丸テーブルと二脚の椅子、空になった隣のベッド。先ほどまで目の前にあつた夜明け前の空の光景は既に面影一つ無く、見慣れた部屋の内装だけが、淡く色

彩を与えてくれている。

壁にかけられたカレンダーが告げるのは、2012年10月9日の朝。オーレッド湾の上空で全ての終止符が打たれてから、既に2年近くが経過していた。

ふるふると頭を振るって意識を覚まし、ベッドの上にパジャマを脱ぎ捨てて、ベッド下の衣装ケースから白いTシャツを引っ張り出す。床にぺたりと足を付け、素足のまま向かうは壁掛けの鏡の方。胸元から上を映し出すサイズのそれに向かい、寝癖の目立つ部分を適当に手串で整えながら、パウラはぼんやりと自らの顔を見つめた。

成長期も終わりとはいえ、風貌といい背丈といい、2年前とほとんど変わっていない。大きな目も、色素の薄い銀色のような髪もそのままである。

彼女なりに髪を整え、顔をごしごしと擦り、シャツへと腕を通しかける。ふと視線が落ちたその時、少女は自らの体の方へと視線を落とし、意味深に自らの掌を胸へと当ててから、もう一度正面の鏡を見やった。

胸元に当てた手は、そのまま引っかかりなくするりと降りて、滑らかに下腹部へと至っていく。姿は2年前からそのままと評したが、パウラにとつて誠に遺憾なことながら、ここもまた結局、2年前から変わることはなかった。血筋か、はたまた幼少ころの栄養状態のせいなのか、肝心の両親の姿すら記憶に朧なパウラにとつては、今更詮索のしようもない。

ため息一つ、脳裏に過ぎるのはハルヴ隊のクリスの姿。なかなか豊かなものを持っていた彼女だが、一体何を食べればあなるのやら。

…そういえば、エリクはどちらが好きだったのだろう。そんな益体の無い疑問を意識の外に、パウラはシャツに頭を通し、次いで壁に掛けてあったツナギ型の作業着へ脚を通していく。淡い青色の色調に、胸元に白く記されたのはL・M・Aの文字。

腕を通し、前のジツパーを胸元まで引き上げると、廊下からこつこつと足音が聞こえ始めたのはほぼ同時。パウラの鋭い嗅覚は、そこから漂うコーヒートの芳しい香りもち早く感じ取っていた。数秒の後、扉を開けて姿を見せたのは、この二年余りでよく見知るようになった人の姿である。

「あら、あらあら。おはようございませう。パウラさん。今日はお早いですね」

「ん、サヤカこそ。おはよう」

黒スーツに身を包み、胸からルーメン・メデイエイション・エージェンシー（L・M・A）のネームカードを下げたサヤカが、携えていたトレイをテーブルに下ろしながらパウラへ声をかける。

先の疑問が不意に脳裏を過ぎり、パウラはちらりとサヤカの胸元へと視線を向ける。…小さくは、ない。と言うよりは、むしろ。

盗み見て、省みて、項垂れて。2年近くの時を経て垣間見えたエリクの好みに、パウ



ラは人知れずため息を付きたくなった。

2年前の戦争の後、パウラがこうしてサヤカの庇護に入り、L・M・Aの一員となったいきさつは一応の説明を要する。

スーデントールにおけるベルカ残党との交戦、スペイン一部部隊による反乱とオーレツド強襲、円卓における大航空戦、そしてラーズグリーズによる『SOLG』迎撃。夜半から早朝にかけて行われた一連の戦闘によりベルカ残党の目論見は潰えたものの、その後が続く混乱はけして短いものでは無かった。中でも早朝の航空戦と『SOLG』迎撃の余波による首都オーレツドの混乱は大きく、一時は軍や警察の通信回線すらもパンクし機能不全に陥る有様だったのだ。

その状況で、情報収集艦『アンドロメダ』経由で『SOLG』迎撃戦の終息とエリクの戦死を知ったサヤカは、L・M・Aの輸送機とヘリを動員しオーレツド湾へ急行。その際に引き連れていた一部の部隊がオーレツド湾北岸に不時着したX-02『ワイバーン』を発見し、情報収集のためパイロットのパウラごと機体を回収したのであった。

回収されたパウラから報復の連鎖の結末を知り、サヤカは逡巡の後にパウラの保護を決断。オーシア軍の混乱がこれに幸いし、サヤカはオーシア軍に察知される前にパウラとともにルーメンへと帰還して、偽装の為にL・M・A職員としたのだった。公式にはパウラはレクタ軍所属であったため、ほとぼりが冷めたところを見計らい『レクタ軍と

してオーレッド救援へ向かった際に僚機は全滅。直後に自らも軍を退役し、オーシアへ移住』という筋書きを仕立てて手続きを済ませたのである。レクタのロベルトよろしく戸籍を偽装すればここまで回りくどい手続きをする必要は無かったのだが、事が戦争の暗部にも関わる関係上、少しでも脛の傷を負わない方法が選ばれた。

なお当然ながら、パウラのX—02もどさくさに紛れてL・M・Aにより回収された。翼の一部や主脚を失った無残な姿ではあるが、今も既存の部品を流用しながら、格納庫の奥で細々と修復されている。

ともあれこのような紆余曲折を経て、パウラは正式にL・M・A 安全保障部門所属の航空特技官となった。階級はかつてのエリクから一段下がった三等特技官が与えられ、サヤカ付きとしてその身を護る傍ら、社所有のF—5E『タイガーII』を駆って輸送時の護衛任務等に従事しているという訳である。

心身の治療、表裏もろもろの手続きを含め、パウラが正式にL・M・A 職員となつたのは2011年の7月。当初は互いに複雑なものを抱えていた両者も、今や1年以上の付き合いである。今ではL・M・Aの宿舎でサヤカと同じ部屋に住み、上官と部下と言うよりは姉妹、あるいは親子のような、隔てない関係となっていた。

「はい、朝食をお持ちしました。お砂糖は？」

「2個。苦いの嫌い」

「ふふ、いつも通りですね。そういえばエリクさんもよくカフェモカを飲んでおいでしたっけ」

サヤカが持ってきたトレイの上には、香ばしい香りを漂わせるコーヒーと、バターの甘い匂いに包まれたシユガークロワツサンが二つ。微笑しながらコーヒーに砂糖を入れるサヤカの向かいで、パウラはクロワツサンを手に取り、薄い唇を開いてかぶりついている。その様だけを見れば、昨今の世界情勢とは裏腹に、平穏な日々を象徴する穏やかな朝の光景そのものと言っている。

「クロワツサン、お好きですか？」

「バターの香りが好き。このクロワツサンは甘いし、おいしい」

「うふふ、それにお月様の形ですしね。甘いのがお好きでしたら、今度はあんぱんを調達して来ましょう。きつと、気に入りますよ」

「…あん、ぱん？」

「はい、あんぱん。私の故郷では馴染み深い菓子パンで、甘くておいしいですよ」

「そっか…楽しみ」

ちよつと甘くなつたコーヒーを片手に、パウラの脚が嬉しそうに椅子の下で揺れる。無邪気な幼児のようなその仕草は、些か18歳という年齢には不相応な様に見えるかもしれない。

そもそも幼年期から同年代の女子とは切り離されてきたパウラにとっては、その年頃の女子らしい生活や仕事というものを肌で感じる暇が無かった。まして彼女は一人前の兵士として、報復を企図する人々の中で感情を押し殺して生きて来たために、少女としての自我の形成すら未発達なままここまで至つて来たという背景もある。サヤカとの穏やかな生活の中で少女らしい情緒が今更ながら醸成され始めて来たのも、いわばこれまででの人生の反動というべきものだった。

一方のクロワツサンをおいしそうに平らげ、マグカップを両手で支えるパウラのように、サヤカは笑ましく目を細める。二つ目のクロワツサンに手を伸ばした所でパウラもその視線に気づき、怪訝そうに首を傾げて応じた。

「なに？サヤカ」

「いえ。パウラさんが、よくお喋りするようになったと思ひまして、つい」

「……」

そう、かもしれない。サヤカからの言葉に口内で思いを紡ぎ、パウラは内省するように手にしたクロワツサンを眼前に掲げた。鋭角の両端と弧を描く形と相まって、それはさながら夜空に浮かぶ三日月のようでもある。

「……あの時」

「え？」

「オーレッド湾の上空で、エリクと対峙したあの時。言いたいこと、話したいことがたくさんあったのに、私はほんの少ししか話すことができなかつた。話した所で、もう手遅れでもあつた。…もし、もっと早く。あの時の空戦で出会つた時から、…レクタにいた頃からもつと話して、感情をぶつけて、真意を伝えていけば、こうはならなかつたかもしれない」

「…後悔、ですか?」

サヤカの言葉を前に、パウラの首は横にも、縦にも動かない。

後悔は、もちろん多分にある。まだ互いが仲間だつた頃に本音をぶつけあい、信頼を繋いでいけば。あるいはベルカのための復讐という念が心に既に無く、あるのは個人的な怨恨と好意という複雑な愛憎の念のみだつたことが伝えられていけば。もしかしたらエリクは死なずに済んだのかもしれない。それを想えば、今のパウラの在り様が後悔に根差しているというサヤカの読みは、あながち間違ひではない。

だが、それだけかと言われれば断じて違う。

それを裏付けるように、パウラの脳裏に浮かぶのは在りし日のエリクの姿だつた。

たとえ相手が初対面であろうが反りの合わない人間であろうが、エリクは自らの意思と感情を、自らの言葉で隠すことなく表現する。それが一時の感情的な衝突になつたとしても、結果的にはそれが互いへの理解を深め、信頼を作り出すことに繋がつていたの

だ。少なくともレクタではそうだったし、おそらくサピンに移ってからはサヤカやサピンの人々に対してもそうだったのだろう。結果的にはエリクのそのやり様が繋がりを生み出し、一時的とはいえサピンやウステイ才有志の連合軍を形成して、ベルカ残党の企図を挫くに至った。

言葉と感情は信頼を生み、信頼は繋がりを形作っていく。そんなエリクの生き様から生じた思いが、今の自らの在り様へと脳裏で繋がりを、パウラはゆつくりと首を横に振った。

「エリクを見習った」

「うふふ、そうでしたか。なるほど、エリクさんを」

「感情と、意思と、言葉で人と繋がること。そうして人を信じること。私は、エリクからそれを学んだ」

嬉しそうに目を細めたサヤカと目を合わせ、パウラは手にしていたクロワツサンを一口齧った。さくさくという軽やかな食感と口いっぱいに広がるバターの香りに、続いてもう一口。それを見つめるサヤカの目は、細くも確かに澄んでいる。

「だから、私は我慢しないことにした。欲しいものは欲しいと言つて、怒りたい時には怒つて、話したいことは話す。きっとエリクも、それは間違いだとは言わないと思う。……だから」

「だから？」

「おかわり」

クロワツサンを平らげると同時に、差し出した空っぽの皿。それを見て一瞬きよとん、としたサヤカの顔は、一拍置いて微笑へ変わった。

「ふふ、分かりました。2つでよろしかったですか？」

「うん、2つで」

「はい。それでは少々お待ちを。今日は昼頃にお客様もお見えになるので、お昼はちよつと遅くなりますしね。お腹を満たしておくのは正解です」

空の平皿を手に、席を立つサヤカ。自らのマグカップも持って立ち上がった辺り、どうやら自分もコーヒーをおかわりしに行くらしい。

ほどほどにお腹が膨らんだ所で、パウラはおや、とあることに気づいた。常にサヤカと一緒にいる、とある姿が見当たらない。

「そういえば、あの子は？」

「え？…ああ、今日も朝から格納庫で整備の見学中です。まだ何も分からない筈なのに、よっぽど飛行機が好きなんです。もう、誰に似たのでしょうか」

愚痴のような言葉とは裏腹に、サヤカの横顔に浮かぶ幸せそうな微笑み。その様と脳裏によぎったもう一人の面影に釣られて、パウラも口角が思わず緩んだ。

平穏な日々、一口傾けたコーヒーからは苦みに混じった甘み。マグカップをこことん、と置いた後も、パウラの顔には微笑が浮かんでいた。

2年前、報復の連鎖のさなかに在った頃には、ついぞ浮かべることの無かったその表情を。

\*\*\*\*\*

尾から響くジェットエンジンの轟音が、振動となつて古びたキャノピーを軋ませる。

高度120、100。地表近くまで高度を落とした今となつては、地面からの反響も生半可なものではない。年代物と言つて遜色ない老体が酷使に耐えかね、機体全体がびりびりと震えているかのような錯覚すら感じられた。

主脚展開、固定よし。エンジン回転数低下。下がり行く高度と速度に、目下の滑走路は圧迫感を以て徐々に迫ってくる。

タッチダウン。

心の中でのコールと同時にどん、と重い音が鼓膜を揺らし、地面との摩擦が速度を急速に奪っていく。

機体の停止を見届け、滑走路の脇から走り出て主脚止めを嵌めてゆく作業員。それらを見届け終えてから、男——カルロス・グロバールはキャノピーを開け、アスファルトの地上へと降り立った。後方を省みれば、アレックスが駆るMiG-21UPG『デイ



「ピナス」も同様に翼を休める様が見て取れる。2年前には5機のMIG-21UPGを保有していたニムロッド隊も、今は他に機影を見て取ることはできなかった。

「アレックス、書類の処理の方は頼む。俺は挨拶回りをしてくる」

「了解しました。行つて来ます」

指示を受けたアレックスが書類の束を携え、L. M. A. の管理棟へと向かつてゆく。思いの外立派な建物の様に、カルロスは思わず息を漏らした。

今回、カルロスらがわざわざブルーメンのL. M. A. まで足を運んだ目的は、帰還がてらの事務作業である。すなわちサピンの契約切れに伴いお役御免となったニムロッド隊はレオナルド&ルーカス安全保障の本拠へ戻ることになった訳だが、その途上のL. M. A. で滞っていた資材費等の精算を済ませるといのが、この訪問の目的であった。

片や経営が傾き人材の雇用すらままならないというのに、ここの繁盛ぶりは何ということか。ここ数年でめつきり景気が悪くなった自らの社を省みて、カルロスは溜め息が出るのを抑えられなかった。

「あらあら、カルロス様。ようこそいらつしやいました。お待ちしておりましたわ」「サヤカか。久しぶりだな。景気もいよいよで何よりだ」

不意にかけられた声に、カルロスはそちらへと体を向ける。

いつも微笑んでいるような細い目に、きつちりと纏った黒いスーツ。いついかなる時でもその出で立ちを崩さない様は、見間違えるはずも無くサヤカ・タカシナのものであった。

「諸事情あつて、サピンを離れることになった。これまで世話に……」

別れの挨拶に手を差し伸べたその刹那、サヤカの影からさつと抜け出た小さな体軀。それは素早くサヤカとカルロスの間割り込み、その身でもってカルロスの握手を遮った。

びたりと手を止めたカルロスは、怪訝な顔でその姿を見やる。身長は150cm前後というところか。子供のような姿だが、L・M・A.の作業用ツナギに身を包んでいるのが些かアンバランスでもある。透き通った白髪のような髪はよほど適当に梳かしているのか、毛先がしばしばあらぬ方向を向いており、小柄な体軀と相まってまるで路地裏の白猫か何かのようだった。

「……………」

「……………」

「（こちら、パウラさんいけませんよ。この方が今朝お話したお客様です）」

「……そうなの？」

「ええ。ここは私で大丈夫ですから、パウラさんは通常業務に戻って下さいませ」

「そう。サヤカが言うなら、分かった」

サヤカの言葉にこくこくと頷き、小柄な姿は背を向けて、すぐ傍の格納庫へと走っていく。布に覆われた奥の黒い機体にちりりを目を奔らせながら、カルロスはその白髪の少女が乗機と思しき『タイガーII』の下に蹲るのを目で追っていった。

見覚えが無いが、あれもここの職員なのだろうか。もしそうだとすれば、サヤカとい妙な職員を揃える会社だとしか言いようがない。

「失礼致しました、カルロス様。何分世間に疎い子なものでして」

「…そのようだな。戦闘機乗りには見えんが、新しい航空技官か？」

「はい。ご心配ならずとも、空戦経験豊富な方です。技量も保証付きですわ」

「何？」

「カルロス様でしたら申し上げてもよろしいでしょう。——2年前の、オーレット湾上空での航空戦。あの子は、それに参加したベルカ残党の生き残りです」

少女の風貌から予想だにできなかったサヤカの言葉に、カルロスは息を呑み言葉を失った。

2年前、オーレット湾上空。となれば、その戦闘とは戦争の最終盤、『SOLG』迎撃に際しエリクが出撃した最期の戦闘のことに他ならない。それに参加したベルカ残党であるならば、いわば当時は敵味方の間柄だった相手ではないか。それも、間接的にと

はいえエリクを殺した相手と言つていい。

「…らしくないな」

「…？とおつしやいますと？」

「あの子供は、つまりはエリクの仇になる訳だろう。それを平然と懐に入れるとは、あんならしくもない」

互いの姿を、そして両者の平穩な間柄を見て取り、カルロスは浮かんだ疑問を口にす  
る。

言葉にこそ出さなかったが、サヤカがエリクに対し悪くない感情を抱いていることを、カルロスはそれとなく察していた。いつの頃からか他の傭兵連中とは異なつて深入りするようになり、頼まれもせずに乗機を用意し、あまつさえサピンからの脱走計画では主導まで演じて見せた。サピンとの関係悪化すら起こりかねないリスクを抱えてまで、敢えてそれを犯すほどにサヤカはエリクに入れ込んでいたのだ。

そんなエリクを殺した仇を、サヤカが平然と受け入れているのがそもそも不可解である。

そもそもカルロスが知るサヤカといえば果断にして伶俐、退くことを知らない強靱な精神を持つ女である。かつてとある傭兵に言い寄られた際にも、話だけでも聞く、他の同僚に相談するといった面倒な応対を挟まず、実力行使——具体的には回し蹴りで昏倒

させた後、尻にスパナをねじ込む——で解決したという所からもその一端が伺い知れる。

そんなサヤカが、今こうして愛した男の仇とともに、穏やかに一つ屋根の下にいる。その様が、カルロスの中ではどうしても過去の姿と結びつかなかったのだ。

しばしの沈黙。サヤカは身じろぎせず、細い目を薄く開いてカルロスを凝視している。

ふう、という息の音とともに、先に口を開いたのはサヤカの方だった。

「……お節介、でございますよ、カルロス様」

「……気を悪くしたのなら、悪かった。言いたくなければいい」

「いいえ。……実を申し上げますと、あの子をオーレット湾の北岸で発見し、救助した時。本当は、私はあの子を殺そうとしました」

「……………」

視線を逸らしたサヤカが、やや目を伏せながらぼつりぼつりと語り始める。どこを見ているのか焦点が判然としないその瞳は、彼女が懐かしいものを思い描いているようにも、自らの中へと目を向けているようにも見えた。

「わが社の社員によって、あの子がコクピットから抱え出された時。私はそこに歩み寄って、あの子の襟元を掴み上げました。何と言っても、間接的とはいえあの人を殺

した人ですからね。殺す、私の手で殺さなければならぬと思いました。事実、そうすることは容易だったでしょう」

「……」

「でも、掴み上げてあの子の目を見た時、その思いが変わってしまったんです。ぐつたりと力の抜けた体、虚ろに開いたままの唇、止まらない涙で感情が全て流れ出てしまったような空っぽの瞳。その姿はまるで、復讐を果たしてしまい、空っぽになったエリクさんそのままの姿でした」

サヤカの言葉に、記憶の中にあるエリクの姿が蘇る。

宿敵である『グラオガイスト』を自らの手で屠った直後から、エリクは目的を失った空っぽの存在となり、まるで蟬の抜け殻のようになっていた。それを省みれば、復讐すべき相手も仲間も失ったその瞬間は、エリクと同じ状態になっていたとしてもおかしくはない。

「エリクさんの面影が過ぎると同時に、あの人の声も頭に蘇りました。『復讐の連鎖を断ち切る』と、そうおっしゃって再起したエリクさんの姿が。——そうして、思ったのです。あの人は、その言葉通りに信念を全うして死んでいった。もし私がこの子を殺して復讐を果たしてしまえば、それはあの人の想いを汚してしまうだけだ、と」

「……信念、か……」

「けして諦念や忍耐とは思わないでやって下さい。…あの人の思い出も、思いそのものも、大切にしていきたい。そう考えただけの結果でございます」

結びを付け、サヤカの瞳がカルロスと交わる。こんなにも澄んだ瞳をする女だったか。真つ先のその思いが浮かび、カルロスは開きかけた口を閉ざした。

信念。サヤカやエリクがそう表現し、それに殉じて死んでいった言葉ではあるが、カルロスは複雑な思いを抱かずにはいられない。

サピンにいる時には詳しくその中身を聞くことは叶わなかったものの、後に聞いた所では、その信念とは『ベルカ残党の策謀を阻止し、報復の連鎖を断ち切る』ことだったという。

カルロスに言わせれば、信念とは生き方の柱であり、選択肢を定める際の指標である。生き方の筋である以上、それが死を招き入れるものであつてはならず、まして途中で消えてしまうものであつてはならない。特に後者のそれは目標というべきものであり、信念とは似て非なるものである。

その思いを信じるサヤカの前で口には出せないが、エリクの言う信念とはすなわち目標の域を出るものでは無かった。この点、信念についてエリクと十分に言葉を交わして想いを伝えられないまま、結果的にエリクを送り出してしまった手前、カルロスも責任は感じざるを得ない。

だが。

戦闘の最期、自らの『信念』を信じ抜いたエリクは、その命で以て実際に報復の連鎖を断ち切った。あくまで結果論かもしれないが、事実その信念を柱にして、生き方を全うしたのである。

矛盾を内包し、自らの信念によつて死へと引き寄せられていったその様は、かつての『ヴァイス』やフィオン同様、カルロスにとつてけして肯んじられる在り様ではない。しかしながらその短くも太く真つすぐな生き様に、清廉な風を感じられずにはいられないのもまた事実だった。

「報復の連鎖の否定……今の人類には高尚過ぎる命題なのかもしれないがな。昨今の世界情勢を見ると、それも歴然だ」

湿りを帯びた空気を払うように、カルロスはそれとなく話題を変える。事実エリクの信念が清々しく見えるほどに、世界は今なお戦争の気配が色濃く漂っていた。

オースシアとユークトバニアの両首脳による直接会談により、2年前の戦争は電撃的に終戦。それに伴い、サピンを始めとする東方諸国における戦争状態も、ひとまずは終わりを迎えることになった。

しかし、状況が戦前へ戻ろうとも、戦闘と侵攻の事実と記憶が消える訳では無い。諸国間には隙間風が入るような空々しい空気が漂い、諸国間の交流も奥歯に物が挟まった



ような状態となつていた。

各国の国交にヒビが生じたことも問題ではあるが、それ以上に深刻なのが各国の経済的な窮乏である。

特に大規模な侵攻を許したラテイオ、早期に参戦し兵器人員を大量に失つたウステイオやレクタにおいては影響が著しく、国家経済は一気に悪化することとなつた。中でもラテイオは国土の荒廃が著しく、経済はおろか軍事や公共サービスすら崩壊寸前という有り様であり、一説には海外のとある多国籍企業を誘致して、各種サービスの大規模な民営化を図ることすら検討されているという。国という枠組みそのものを企業に委任するかのような対応だが、裏を返せばそれだけラテイオが窮乏しているという証拠でもあつた。

経済不安の波は、周辺諸国へも影響を及ぼす。ユークによる支援が薄くなつたファト、戦時中の両端を持つ姿勢から信用を失つたゲバートでも不況の影は忍び寄つており、いつ第二のラテイオとなるかは予断を許さない。東方諸国随一の大国であるサピンも例外ではなく、目下の厭戦ムードから軍備の縮小と国土復興を余儀なくされていた。図らずも、ベルカ残党の目論見は遅ればせながらに達成されつつあるといえる。

ついでながら、各国の軍備縮小の機運は、所属する軍人たちの進退へも影響を及ぼした。

ウステイオにおいては、エースパイロット部隊として名高い『ガルフ隊』の一番機は円卓において戦死。生き残った二番機の男も、軍縮の機運の中で軍を退役した。風の噂によるとオーシアでNGOを立ち上げ、円卓をはじめとした各地で未回収となっている戦没者の遺骨回収事業を始めたのだという。

サピンのニコラスに関しては、そもそもがあの性格と経歴である。本人も退く気がなければ、サピンも手放す気は毛頭無い。『アークトゥルス』追撃に係る命令違反は不問に処されたばかりか、戦中の戦果とサピン第2航空師団によるクーデター未遂の鎮圧から大佐へと特進。第2航空師団の飛行隊長を務める傍ら、副師団長として同航空師団の綱紀粛正に当たっているという。

「左様でございますね。…しかしカルロス様にとつては、そのような戦場がある方が都合がよいのではございませんか？ 傭兵さまは、戦場があればこそでございます」

「そうだとやりたい所だがな、これだけ続けば先に社の体力に限界が来る。あんな機体を支給してくるようじゃ、わが社もどの道長くはない」

親指を立て、自らの後方で燃料補給を受ける乗機を指すカルロス。その姿を見て、サヤカもまた『ああ…』と声を漏らして、その真意を察したらしい。

M i G - 21 同様に切り落とされたような機首。中翼位置に設けられた強い後退角を持つ主翼に大きな尾翼、そして丸みを帯びた胴体断面と小さなキャノピー。『フィッ

シユベッド』とは異なりキャノピー後方からドーサルスパインは伸びておらず、キャノピーはいわゆる涙滴型に象られている。

MiG-17F『フレスコC』。戦争でMiG-21UPG『デイビナス』を失った後、本社から支給されたのが、旧式と言うも愚かなこの機体であった。

驚くべきことに、ベース機の初飛行は60年以上前。支給されたこのF型も近代化改修モデルではなく初期量産型に当たるタイプであり、ご丁寧なことにリーダーすら搭載していない。カルロスはかつて一時的にMiG-19『フアーマー』やSu-22『フィッター』に搭乗したことはあったが、更に旧式のこの機体が支給されてきた時には流石に言葉を失った。

余談ながら、この機体は社が購入したものではなく、何とルーカス会長が所有していた私物を無理やり再武装したものだという。ここに至ればいつそ財産をわずかでも金に換えて社を畳めばいいようなものを、少しでも儲けを上げて資金捻出に当てようとする辺り、社の末期的な症状にカルロスは頭を抱えなくなった。

機体がこうなら、人員も人員である。人件費削減のため人手は減りに減らされ、パイロットとして残るのはカルロスとアレックスのみという有り様であった。

二ムロッド隊のうち、二ムロッド2のオズワルドは傷の治りが悪く、パイロットをリタイアして社の整備部門へ異動。二ムロッド3のフラヴィは軍の再編成を進める母国

エルジアに招聘され、今は再びエルジアの軍人として活動している所だった。ニムロツド4のブラッドはスリル極まる戦場に嫌気が差し、故郷に戻ってパン屋を始めると言っていたが一体どうなったことやら。

とはいえ、2人は2人であり、それ以上増えようもない。サヤカの言う通りに世界で紛争が起こった所で、もはやできることは限られていた。

「…同情はしてくれるな。無いものはもうどうしようもない。…それより、あんたはどうなんだ。戦場があればこそなのは、仲介業のそちらもだろう」

「はい、その点は心配しておりません。人が人である限り、きっと戦争は続きますからお仕事は無くなることはございません」

「…あんなたちの兵器が、それを助長してもか?」

あつけらかんと言いつつサヤカに、カルロスは言葉を投げかける。

探るような、カルロスの瞳。サヤカは一瞬首を傾げ、一拍応じて口を開いた。予想以上にしっかりとした、芯のある言葉でもって。

「矛盾している、とは私は思いません。兵器が、力がどのような使い方を成されるかは、用いる人間の想い次第。確かに憎しみを煽り立てるための力にもなりますが、同時にそれを断ち切るための力にもなります。…そう、2年前の戦いのように。兵器はあくまで無色。それを使う人間の『色』にまで、我々は干渉するべきではありません」

そこで一息置いて、サヤカは一度目を閉じた。

まるで、心に浮かんだ誰かに問いかけるような、静かな時間。間を置いて開いたその瞳は、先と同じく澄んだものだった。

「だからこそ、私は話します。話して、語り合つて、心を交わして、その人間の『色』を確かめます。——誰かの為を想う人の為に、力を貸す。少なくとも私は、これからそうしていくでしょう。…あの人とあの子から学んだ、その想いを以て」

サヤカの口元に浮かぶ、慇懃でも無礼でもない、ただ穏やかな微笑。その様を見て、その言葉を聞いて、カルロスもつられるように口を緩めた。

なるほど、そうか。

エリク、お前は自らの信念を立てることに誤つたかもしれないが、こうして人の想いを繋げることは成し遂げていたんだな。

戦争は続き、人の心は分断されてゆく。しかし、たとえ空は一つに繋がらなくとも、こうして人の心は未来へ繋がっていくのかもしれない。報復の連鎖とは趣の違う、さながら正の連鎖として。

「そうか。…野暮なことを聞いたかな。エリクと…あの子というのは、さつきの子供か？」

「ええ、二人とも大切なパートナーであり、ある意味師匠ですから。…ほら、樽をすれば」

ちら、と横目を向けるサヤカに釣られるように、カルロスもちらへと目を向ける。『タイガーⅡ』が収まっていた方の格納庫からのそのそと歩み寄って来たのは、先ほどの白髪の少女と、その腕に抱えられた幼児の姿。黒い髪とやや朱を帯びた肌の色は、サヤカのそれと共通して見える。

「あらあら、パウラさん、どうしましたか？」

「ペンキをひっくり返したら放り出された。床のにつまづいた」

「あらあら、そうでしたか。今度から気を付けましょうね」

少女の腕の中から小さな手を伸ばす幼児。サヤカは少女から幼児を受け取り、慣れた素振りですらの腕の中へと抱きかかえた。幼児はあう、あううと声を上げながら、嬉しそうにこちらへ——正確にはこちらの背後の『プレスコ』へ腕を伸ばしている。

「あなた…まさか子持ちだったのか」

「はい。…うふふ、飛行機が好きなので、見たことが無いカルロス様の機体に興味を持ってみたいですね」

「…ふうむ…」

サヤカと子供。仕事第一の気配が濃厚だったサヤカの印象と今の光景が今一脳内で結びつかず、カルロスは名状しがたい呻き声を漏らした。傭兵稼業ゆえに致し方ないが、何を隠そうカルロスは未婚である。

「しかしいつの間にも…。名前は何？」

「ヒカリ——ヒカリ・B・タカシナ。それがこの子の名前でございます。私の故郷では漢字で以て名を宛てるのですが、このように記します。字の成り立ちは日の光を示すもので、本来は『ヒカル』と読みますが、敢えて崩して記しました」

幼児を抱えたまま、サヤカは器用に携帯を操作して文字を表示する。かくかくとした線で『晃』と記されたその文字は、そのような文字体系を用いる習慣のないカルロスにとっては難解な記号にしか見えなかった。

なるほど、これでヒカリと読むのか。ヒカリ・B・タカシナ。——『B』。

不意に引つかかりを覚えながら、カルロスはまじまじと幼児の顔を見る。見慣れない『フレスコ』を見て大層嬉しいのか、初めて顔を見るこちらに気づく素振りもなく一心に機体を見つめる瞳。その様を見ながら、カルロスはふと既視感を覚えた。

黒髪ながら、僅かに色素が薄く赤みがあった色調。そして、サヤカと比べて幾分薄い肌の色。何より、その澄んだ瞳の姿。

まさか。

「…サヤカ」

「はい？」

「この子供の父親は、もしや…」

「カルロス隊長！」

脳裏に過ぎったその名を問いかけた刹那、唐突にかけられたアレックスの声に、カルロスの言葉は飲み込まれた。どうやら精算事務は終わったらしく、ヘルメットも被つてすっかり離陸準備を整えている。

「お待たせしました、こちらは準備OKです。燃料も注入が終わったとのことですよ」

「ああ、それは重畳でございました。：時にカルロス様？先ほど、何か：」

「……いや、何でもありません。アレックス、すぐに上がるぞ。駐機の手数料がこれ以上増えては叶わん」

「あらまあまあ。それでは、お気を付けて」

アレックスに倣ってヘルメットを被り、手早くアレックスに指示を出すカルロス。サヤカに一礼を返して、自らも乗機『フレスコ』へと歩を進めていく。

エリクと、サヤカの子供。それを口にして確かめるのは、今更野暮なことだっただろう。あとは二人の：いや、あの様を見れば白髪の少女を含めた三人の問題なのかもしれないが、いずれにせよ部外者である自分が立ち入る話ではない。今はただあの子供の笑顔と、未来へと思いを繋いだ人々の姿がただ眩しい。

コクピットに収まり、キャノピーを閉じて、計器類を手早くチェックする。

車輪止め、解除。エンジン回転数上昇。



甲高い音が響き、風圧が周囲を揺らしていく。操縦桿から伝わる振動は、エンジンの調子が良好であることを告げていた。

滑走路へ出、ブレーキを解除して、機体の速度を徐々に上げていく。空は快晴、途上にも曇雨天の予報は無し。このままならば、帰路は平穩のまま終わるに違いない。

速度を上げる機体の中から、カルロスはちらりと横を見やる。

食い入るようじいっとこちらを凝視したままの白髪の少女。その隣で目を細めるサヤカ。子供——ヒカリはその腕の中で、きやつきやと笑いながらこちらへ手を振っている。

ふわり、と脚をもたげる浮遊感。風の虜となった『フレスコ』の翼は、徐々に速度を上げながら、蒼空の彼方へと駆けてゆく。

エリクの、人々の想い。全てが未来へと繋がっているかのように、空は遥かに澄んでいる。

このポンコツも、たまには思いきり走らせてやるか。

後方にアレックスの『デイビナス』を捉えながら、カルロスはフットペダルをひとしきり強く踏み込み、『フレスコ』の機速を上げていった。

ヒカリに満ちた、広い空の向こうへと。

## 番外編 2 (前) Skies of despair

ざくりと踏み出した靴の端に、粘り気を帯びた土の塊がこびりつく。

アスファルト舗装もされていないむき出しの地面、遠景に広がる豊かな植栽、そしてそこここに穿たれた爆撃後を思わせるクレーター。照りつける日照は嫌が応にも緑を映えさせ、その傍らで乾き始めた泥はさらさらと崩れて舞っていく。

眼前には急ごしらえの粗末な施設、乱雑に戦闘機が留まる滑走路。傍らには幾分小柄な機体が翼を休め、緑と灰の迷彩と黒く染まった翼端を影絵のように落としている。

自らの機体の主脚に靴を二三度叩きつけ、褐色肌に古傷だらけの男——カルロス・グロバールは靴にへばりついた泥を叩き落した。眼光こそ衰えぬ往時のままではあるが、幾分腹は出始めて、青年から中年へとその様相は移り変わりつつある。

時に2020年10月、オーシア大陸南端に位置するオーレリア連邦共和国。国土西部に開けた平原のさなか、プナ野戦飛行場。絶望的な戦況にありながら今なお抵抗を止めぬ絶望の巷に、カルロスの姿はあった。

「……あれか」

戦場慣れした鋭敏な聴覚が、まだ暗い西の空から響く唸りのような音を感じ取る。早

朝を迎えた空は最も輪郭を捉え難い時間帯だが、カルロスは目を凝らすまでもなくその主の姿を探り当てた。黒い染みのような小さな点はやがて翼を持った黒い機影となり、滑走路との距離を探るようにつくりと高度を下げて来る。

アヒルの嘴のように、やや扁平な機首。首元に設けられた三角形のカナード翼にデルタ翼の主翼。一見遠目には『タイフーン』にも似た姿ではあるものの、凹凸を以て明瞭に判別できる2基のエンジンポッドと、その外側から延びる1対の垂直尾翼の存在が『タイフーン』や『ラファール』と一線を画するシルエットを醸し出している。主翼にはオーレリアの国章を示す青地に白い雪の結晶、尾翼にはその本籍を示すGRDF——ゼネラルリソース・デیفエンス・フォースの文字。間違いなく、海を渡つてはるばる来訪したわが社の新型機であった。

XFA-24『アパリス』。近年名を上げ始めた多国籍複合企業『ゼネラルリソース』によつて設計開発が行われた、試作マルチロール機。それこそが、今まさに眼前で着陸しつつあるその機体の素性であった。吹き荒れる風の下、ばさばさと裾をたなびかせるカルロスの上着の右胸には、『アパリス』のそれと同じGRDFのエンブレムが刻まれている。

カルロスとゼネラルリソース、そして今立つオーレリアの地。それぞれの現状には、一応の説明を要するだろう。

10年前の環太平洋戦争ならびにその代理戦争に当たる東方戦争、5年前のエメリア・エストバキア戦争、そしてつい昨年勃発した灯台戦争。わずか10年という短い間に国家対国家となる大規模な戦争が立て続けに発生し、その度に世界は揺動した。その余波は未だに収まらず、資源の欠乏や経済不安は恐慌を招き、2010年代後半には中小国が相次いで経済破綻に追い込まれていた、というのが目下の状況である。その予兆は2003年の大陸戦争終結後から顕れてはいたのだが、それが度重なる戦争によって拡散し顕在化してきたという所だろう。

破滅の淵に立つ中小国は軍備を削り、予算を切り詰め、諸外国に援助を請う。それでもなお衰え行く国力を補うことはままならず、やがて行政サービスも立ち行かなくなる国すら出始めた。ある程度同一の文化や人種、宗教を内包し、その安寧を保証するため境界を国家して定義するならば、その存在意義が方々から崩れ始めたのである。

国民の生活と安全を保障できなくなった国家に、いかに存在意義があるのか。

そんな末期的な世論が蔓延し始めた中で頭角を現したのが、多方面の技術やサービスに関するノウハウを有する多国籍複合企業であった。その代表選手たるゼネラルリソースはこれらの国家に介入し、各種サービスの大規模な民営化を条件にした大規模投資を提言。メディアや各種インフラ整備、ライフライン等の行政サービスに至るまで、傘下のグループ企業で完結する体制を整備するに至ったのである。

当然ながら、行政サービスには安全保障——平たく言えば軍事分野も該当する。本来対テロの社内警備組織であったGRDFが各国の防衛も代替するようになり、軍勤務経験者や民間軍事会社を次々と吸収・雇用して、その規模を爆発的に増大させたのもこの時期に始まるものであった。

このような安全保障分野においても大規模企業が台頭した以上、民間軍事市場に大きな影響が生じたのは当然の帰結だった。大なるは提携や買収を繰り返してより大規模となり、小なるは人員資源ごとあつさり吸収されて、大企業鼎立の様相を示すようになったのである。

カルロスが元々所属していたレオナルド&ルーカス安全保障もまた、この世相の中で泡沫のように消え去った。詳説すれば、傾く社運の起死回生として介入したエメリア・エストバキア戦争で却って大損を被り、半ば買い叩かれる形でゼネラルリソースに買収されたのである。この時を境として、カルロスらニムロッド隊はGRDFへ移籍することとなった。

片や、目下のオーレリアの状況である。

控えめに称して、オーレリアは滅亡の危機に瀕していた。内戦に喘いでいた隣国レサス共和国が、その終結から間を置かずしてオーレリアへと宣戦布告し、怒涛の電撃戦を以て侵攻を開始したのである。

瞬く間に国土を蚕食する陸空の兵器群、そして投入されるレサスの超兵器——空中要塞『グレイプニル』。首都の 그리스ウオールは瞬く間に占領され、指揮系統を失った三軍は各地で蹴散らされて、開戦からのわずかな期間のうちにオーレリアは国土の実に9割以上をレサスに占領される憂き目に遭った。サピンで例えるならば、前線がル・トルウーアの辺りまで後退したと思えばいいだろう。国家としては、もはや滅亡したのと同義の状態と言つていい。

ところが、10月中旬に入りオーレリアは残った戦力を結集させ反撃に転じる。国土西南部のオーブリー基地に残るわずかな航空部隊をここに奇襲を敢行し、国土の一部奪還および残存戦力の結集に成功したのである。現時点ではオーレリア西南部に勢力を確保し、依然劣勢ながらレサスに対抗しうる戦力を持つに至っていた。ゼネラルリソースがこの戦争に介入を決定したのは、決した帰趨にオーレリアが懸命の抵抗を見せるこのような時期であつた。

ベルカ戦争におけるウステイオ共和国の例に漏れず、滅亡寸前の国はおおよそ傭兵に頼るものと相場が決まっている。傾いた国軍に存亡を託すよりは、金に糸目を付けず優秀な傭兵と契約した方が幾分でも勝機がある為だ。当然ながら傭兵——民間軍事企業側にとつてもこれは大きな商機であり、今回ゼネラルがGRDFの派遣を決断した第一義もこれに当たる。

もつとも一民間軍事企業ならばいざ知らず、自ら兵器の生産販売を担うゼネラルリソースにとつては別の事情もある。

というのも、レサス共和国——正確にはそれを牛耳る指導者デイエゴ・ナバロは国内の軍需企業と太いパイプを持っており、今回の戦争を一種のデモンストレーションとして諸外国からの兵器受注を狙っているとの観測がかねてからなされていたのである。国自らが安価かつ優秀な兵器受注を目論み他国へ売り込むという手法は、言うなればかつてのベルカ公国の後継を担うものと言つて良いだろう。

兵器の自家生産、そして軍事の代替を図るゼネラルリソースにとつて、これは誠に困ることであつた。もとよりゼネラルは『安全保障サービスの提供』を行う側であり、各国が自前で軍事力を整備する事態を望んでいないのである。加えて、大規模な兵器供給拠点の存在が安全保障分野の寡占状態を崩しかねないことは言うまでもない。言うなれば、レサス共和国はゼネラルにとつての商売敵に当たるといふ訳である。利潤追求を図るにしても、敵対企業への対抗を図るにしても、ゼネラルは是が非でもオーレリアに肩入れしたい立ち位置にあるといふ訳であつた。

以上の背景を下地として、GRDFはオーレリアの支援に本腰を入れた。具体的には航空部門の人員派遣の他、社で生産した兵器の供給、そして対化学・生物兵器を専門とする特殊部隊の派遣である。後者に関しては、レサス軍が特殊工作部隊である『スキュ

ラ隊』を有していることから、万が一の対策としてオーレリア側から特に要請されたものであった。

かくしてカルロスは、派遣第一陣としてプナ平原に降り立つに至ったという訳である。首都奪還に備えた第二陣派遣ではS u—27『フランカー』シリーズで編成された部隊の派遣も決定されており、並々ならぬゼネラルの注力を感じさせる体制となっていた。

轟音、濛々と立ち込める土煙。地に降り立った『アパリス』から降りた人影は、傍らのオーレリア兵士に携えた書類を手渡し、一礼して踵を返す。巡らせた頭にこちらを認めたのだろう、ヘルメットを外してこちらへ歩み来るその姿は、ニムロット隊の2番機たるアレックス・ウルフのものであった。カルロスと同時にプナ基地へ着任したのち、西に位置するパターソン港に到着し組み立てられた『アパリス』を空輸すべく、昨晚からパターソンの野戦飛行場へ赴いていたのである。

東方戦争から既に10年、当時18歳だったアレックスも今や28歳となり、経験・技量ともに円熟期を迎え、一人前の傭兵として成長していた。

「カルロス隊長、ただいま戻りました。受け取り予定のパイロットは不在とお伺いしました…」

「ああ、数時間ほど前に出撃していった所だ。…あれ一人でオーレリア軍は持っている



ようなものだから、無理もないが」

想起した先の光景に、頭は自然と東を向く。

先にオーレリアは国土の9割を占領されたと述べたが、殊軍事面に関してこの事實は非常に深刻であった。戦力の損耗もさることながら、国土の失陥とはすなわち本来命令を下すべき指揮系統の喪失をも意味するためである。事実、唯一残存したオーブリー空軍基地は指揮系統を——それどころか当の基地の幹部級すらほとんどを失い、戦況を俯瞰して指示を下す人間が一切不在となってしまうていたのだ。

この状況をひっくり返したのが、件のオーブリー基地の航空部隊の指揮官だった人物である。外様ゆえにその本名は教えられていないが、『グリフィス』のコールサイン、あるいは『南十字星』<sup>サザンクロス</sup>の綽名でもってその人物は知られていた。

一小隊長に過ぎない人間でありながら、その手腕は出色と評せざるを得ない。旧式機の航空部隊に若干数の陸戦部隊。数少ない手札を最大限に活用した戦略的判断を行い、パターンソング港を始めとした要衝の奪還まで巻き返すことに成功したのである。オーレリアの兵から聞いたところによると、現在では空軍の小隊長を務める傍ら、オーレリアの残存部隊を糾合しそれぞれの戦略的方針を定める総指揮官としての立場も兼任しているとのことだった。

今回空輸した『アパリス』は『南十字星』の乗機となる予定だったが、その到着を待

つまでもなく出撃して行ったのも、このようなオーレリア軍内での事情を踏まえての仕方のないことだったのだろう。総指揮官である『南十字星』の停滞は、ひいては軍そのものの停滞にも繋がるのである。

余談ながら、『南十字星』は昨晩夜半から連続で出撃を行っていた。昨晩から出撃した先はオーレリア本土から南東の海上に位置する極地の諸島群、ターミナス島である。数日前までレサスの超兵器である航空要塞『グレイプニル』が本拠としていた島であり、現在には氷に覆われた駐屯地にレサス艦隊や対潜哨戒機などの部隊が駐留している筈であった。

本来であれば『グレイプニル』が離れた時点で戦略的価値はほぼ無くなった拠点であるが、秘密裏にここターミナス島から『グレイプニル』開発に携わった技術者の亡命の打診を受け、『南十字星』は陽動とオーレリア艦隊支援のために出撃していったという訳である。オーレリア空軍は『グレイプニル』の有する新兵器に辛酸を舐めさせられた経験もあり、ここでの技術者確保は『グレイプニル』攻略に繋がるものとして重要視されたのだ。

時間間隔が狂う白夜の下での戦闘。体力を消耗したに違いないにも関わらず、『南十字星』はプナ基地への帰還後、すぐさま燃料弾薬を補給し出撃していった。なんでも東の要衝であるサンタエルバ方面へ向けレサス陸軍部隊が撤退を始めているらしく、それ

への追撃なのだという。劣勢を覆すのには仕方のない事だが、それにしても時間を問わないその働きぶりは頭の下がる思いだった。

『グレイプニル』を前面に押し出したレサス軍の電撃作戦は相当に急だったようだが、脆さが出た格好だな。補給路の構築や散在した部隊の連携がままならず、『南十字星』の揺さぶりに翻弄されて各個撃破されている。戦略決定権が一人に集中しているのも、速攻を行う上では効果的だろう」

「確かに、守勢に回ってからレサス軍は後手に回り続けています。この調子では、首都グリスウォール奪還もそう遠くはないのではないでしょうか？」

「…どうだかな。グリスウォールはオーレリアの北の端、おまけに今やレサスの首魁、ナバロ將軍のお膝元だ。ベルカ戦争時のスーデントールよろしく、相当に防備が固められていてもおかしくはない」

オーレリア軍による逆電撃戦を目にしたアレックスが、やや興奮気味に口にする。過去、窮地に陥る国々を目にして来た経験から、カルロスが返した言葉はいささか懐疑的な気配を帯びていた。

これまでが順調だったからといって、今後もほとんど拍子で進むとは限らない。態勢を整えたレサス軍が防備を敷くことは当然である上、その拠点となる要衝も首都グリスウォールまでに複数が存在しているのだ。

地図を概観すれば、その現状と課題は見えて来る。

オーレリアの国土は、概観してほぼ方形となる南部と、その右半分からオーシア方面へ向けて北東に延びる細長い首が組み合わさった形に見て取れる。プナ基地は方形の左端中ほどからやや内陸へ入った辺り、当面の目標である要衝サンタエルバはその対称に当たる右端中ほどというべき位置にあった。

仮にサンタエルバ奪還が達成されたとしても、『首』のほぼ先端に当たるグリスウオールまでの道のりは長い。『首』の根本には河川が流れる森林地帯が、中ほどには峻厳なネベラ山脈が広がっており、地理的に首都グリスウオールを隔てているのである。特に前者は旧オーレリア軍最大の空軍基地であったスキヤナ空軍基地を擁しており、レサス軍の抵抗やサンタエルバの逆占領を担う足場として最重要の拠点と言っていいたいだろう。地理的、戦力的な以上の条件を踏まえて、GRDF首脳部もグリスウオール奪還は早くて8か月後と踏んでいた。

「GRDFの第二陣が到着するまでに、スキヤナ基地かネベラ山脈の観測基地攻略で一仕事もあるだろう。いずれにせよ、レサス軍がこのまま逼塞するとも思えん」

「……あの、カルロス隊長」

「何だ」

「その……隊長は、確かレサスの出身とお伺いしました。……辛くは、ありませんか？」

「……………」

潜める声、歯切れの悪い口調。不意に変わった気配にアレックスへと目を向けると、アレックスは目をやや伏せ、恐る恐るといった様子で口を開いた。

アレックスの言う通り、カルロスはレサスの出身である。内戦と混乱真つただ中のレサスで少年時代を過ごし、当時要請を受けて派遣されたニムロッド隊に半ば懇願する形で雇用を申し込み、そのままレサスから連れ出して貰ったという経緯があるのだ。

以降、カルロスはレサスに戻ることなく諸国を転々とする。事の真相を知るのはレサスに残ったカルロスの兄ただ一人であり、戸籍上でもカルロスは行方不明の扱いとされた。

当時としては往々にしてある出来事でもあり、実際にそうせねばならない事情もあつたとと言える。カルロスは6人兄弟の次男であり、父は内戦の中で戦死。日々の生活にすら困窮するグローバル家としては、口減らしがてら海外への出稼ぎで金を稼ぐ以外に取るべき手が無かつたのである。事実カルロスも給料の多くを兄の元へと送っており、出稼ぎ労働者としての役割は十分に果たしていた。もつとも内戦終結後も家の生活は苦しいらしく、数年前には兄から仕送りの増額を請う電報も受け取っていた。相当に困窮していたのか、どこかよそよそしく急を求める文面が今でも記憶に残っている。

沈黙、数瞬。それを悪い意味に受け取ったらしく、アレックスは目を伏して頭を下げ

た。

「……………申し訳ありません。隊長の気持ちも考えず、無礼なことを…」

「いや、いい。仕事に私情は持ち込めん。……………それに」

「……？」

「俺自身、不思議と辛いという思いが湧かないんだ。レサスにいた時間より傭兵として戦場を駆け巡っていた期間の方がよっぽど長く、レサスにいた頃の記憶も楽しかった思い出はほとんど錆びついて残っていない。冷淡な人間だと笑ってくれて構わん」

「い……いえーそんな、決してそんなことは！故郷への想いも人それぞれでしょうし……」  
慌てたアレックスが、見るも見事に狼狽しながらフオローの言葉を接ぎ紡ぐ。生真面目に過ぎるその様に、カルロスは思わず苦笑を履いた。

思い返せば確かに、レサスにいたころの記憶で楽しかったものといえれば数えるほどしか覚えていない。多くは空腹の記憶であり、街中でも聞こえる悲鳴と銃声であり、銃を携え巡回する迷彩服の男達であり、狭い家の隅で身を寄せ震えていた記憶である。それを思えば、レサスを連れ出して欲しいと切り出したのも口減らしや出稼ぎといった殊勝な心ではなく、単に現状から逃げ出したいという退き足の意思だったのかもしれない。死と隣り合わせの傭兵生活で母国を省みるゆとりもなかったと言えれば聞こえはいいが、結局のところ国という存在に根を張らない傭兵稼業を続ける中でレサスの人間という

意識が自然と削ぎ落ちてもいったのだろう。事実、これからレサス軍との戦争に参戦するに当たっても心の中に引け目はさらに感じられず、我ながらなんと冷淡なことだと呆れる程だった。

わずかに笑んだカルロスの顔に、きよとんと硬直するアレックス。そんな早朝の穏やかな光景は、司令部棟から走り寄ってくる人影によつて脆くも断たれることとなった。灰色系統のオーレリア軍服から察するに、おそらくは司令部付きのスタッフという所だろう。

戦場の到来を告げる男の声は若く、同時に不慣れな状況下で憔悴しきつた色を帯びていた。

「き、緊急出撃要請です！GRDFニムロッド隊は、ただちに出撃準備に入るように、とこのことです！」

「何があつた？」

「分かりません。詳細は通信を介して令達することです！」

任務すらきつぱり不明と言つてのけた若いスタッフに、アレックスがかくりと躡く。任務や目標すら不明とあつては、兵装選択すらままならないではないか。よほど重大な案件が生じたか、不慣れな状況で基地全体が混乱しているのだろう。

こうあつては仕方がない。会話を打ち切つたカルロスとアレックスは、やれやれ、と

眩き残して、それぞれの乗機へと向かっていった。

「緊急出撃だ。兵装そのまま、増槽3本。エンジン立ち上げ急げ」

GRDFのスタツフからヘルメットを受け取り、カルロスはコクピット横のタラップへと脚をかける。

後退角を帯びた切り欠き三角翼、主翼の半分にはやや優る水平尾翼に、2枚の垂直尾翼。F-15『イーグル』シリーズに似た外見こそ持っているものの、そのサイズは一回り小さく、主翼前縁からコクピット横まで伸びるLRFXの存在が『イーグル』との相違を鮮明に際立たせている。

MiG-29M1『ファルクラムE』。ゼネラルリソースに所屬を移し、新生したニムロッド隊の新たな機体。主翼端を黒く染め、尾翼に蝙蝠のエンブレムを刻んだその機体へと、カルロスは脚を上げて乗り込んだ。

機体制御システム、電源オン。通信回線確認、状態良好。操作系にも異常なし。状況自体が不明なことを除けば、異常な点は見当たらない。

「こちらニムロッド1、出撃準備を進めつつある。司令部へ、何があった」

《…あつ、失礼しました。こちら司令部『クラックス』。前線の隊ちよ：『グリフィス』より通信があり、サンタエルバ方面よりレサスの航空部隊が南下、海上へ出たとのこと。沿岸部レーダーがその後の針路を捕捉した結果、ターミナス島からパターソン港へ航行



中の潜水艦『ナイアッド』への攻撃を企図している可能性が生じました。沿岸部に残るレサス残党も、小型艦艇を出撃させたとのことです。ニムロッド隊のお二方はただちに  
 出撃し『ナイアッド』に合流、友軍勢力圏下への離脱まで護衛に就いて下さい》

《…潜水艦ならば潜航すればいいのでは…?》

《あ、すみません。説明が足りませんでした。本日未明の作戦で『ナイアッド』は機雷に  
 接触し、現在潜航能力を失っています。友軍も護衛艦艇を割く余裕が無く、現在は単艦  
 で洋上航行中になります》

こちらにも不慣れなのか、『クラックス』と名乗る通信の声は、要領を得ない冗長な作戦  
 指示を耳元に寄越す。ひとまず状況を整理すれば、地点はターミナス島沖合からパター  
 ソン港間の洋上。来襲が予想される敵航空機および小型艦から潜水艦を防衛せよ、とい  
 う所だろう。遮蔽物が少ない洋上に加え、高緯度となるターミナス島付近は白夜を迎え  
 る地帯であり、敵の捕捉はそう難しくはないに違いない。

現在、MiG-29M<sup>1</sup>に装備された兵装は短距離空対空<sup>A</sup>対空ミサイル<sup>M</sup>4発に20連装の  
 無誘導ロケットランチャー<sup>C</sup>が2基。敵の兵力を踏まえれば、現状で問題は無いと判断さ  
 れた。

「ニムロッド了解した。離陸後、合流予測地点の座標を送られたし。これより離陸に  
 入る」

ブレーキを緩め、車輪は徐々に土を蹴って円を巡る。

ヘッドマウントディスプレイ<sup>H</sup>、表示異常なし、感度良好。エンジンの立ち上がりは低温もあつてやや鈍く、様子を見ながら徐々に回転数を上げていくしかないだろう。

むき出しの地面、その上で徐々に滑走を速めていく『ファルクラム』。黒翼は風を孕み、揚力を受けて、飛び立つその時を待っている。

離陸<sup>ディクォ</sup>。脳裏がタイムリングを計ると同時に、カルロスは操縦桿を手前へと引く。

小柄な機体はふわりと風を得て、朝の白い光へと舞い上がった。

\*\*\*\*\*

「こちらオーレリア空軍隷下ニムロッド1。『ナイアッド』、これより護衛に就く」

《こちら潜水艦『ナイアッド』。話は聞いているよ。護衛、感謝する》

白々と光を帯びる太陽が、凍てつくような果ての空を照らしている。

眼下には、ぼつりと浮かぶ潜水艦の細長い艦影。そこから響く間延びしたようなオペレーターの声は、ともかくもターミナス島から脱出を果たした安心感によるものだろうか。海上には流氷も他の艦影も見当たらず、まさに大海のさ中に浮かぶ漂流者と言つて良い風情だった。

航行中に聞いた『クラックス』の言によると、『ナイアッド』には件の『グレイプニル』に関わった研究者が乗っているのだという。オーレリアにすれば侵略の先鋒だった『グ

レイプニル』の攻略は必要不可欠であり、レサスとしても『グレイプニル』の喪失はオーレリア攻略の要を失うことと同義になる。オーレリアがなけなしの艦隊を派遣してまで確保に固執するのも、レサスが撤退を始める中で追撃部隊を送り込むのも、当然と言えれば当然だった。

《上空の護衛機へ、早速だが敵性反応を感知した。方位095、距離7000に小型の機影4。レサスの追撃機と思われる。こちらは潜航も、まして迎撃も不可能だ。空対艦<sup>A</sup>ミサイル<sup>S</sup>を撃たれる前に対応を求む》

「ニムロッド1了解。ニムロッド2、上空護衛を引き継げ。こちらは敵編隊への迎撃を行う」

《ニムロッド2、了解しました。お気を付けて》

間延びした独特のイントネーションのまま、周辺を監視していた『ナイアッド』が急を告げる。方位は東、機数は4。方位から察するに、『ナイアッド』の予想の通りサンタエルバ方面から飛来した攻撃機というのが妥当だろう。ただでさえ装甲の薄い潜水艦ならば、空対艦ミサイルの一撃で容易に撃沈するであろうことは想像に易い。

操縦桿を引き東へと舵を切つて、カルロスは乗機『ファルクラムE』を敵機の方向へと向けた。あいにく長距離戦に適したミサイルは搭載してきていないものの、『ファルクラム』の運動性ならばある程度の機体は短距離AAMでも相手取れる。

「距離7000…あれか」

彼方の正面。光を背に、黒い染みのような点。

逆光まばゆい東の空中に、カルロスの目は求める機影を捉えた。高度にしておよそ1200、こちらからは約1000ほど低い。互いに相対する針路でもあり、その距離は6000を、5000を、4000を瞬く間に割っていく。

安全装置解除、レーダーレンジをコンバットモードへ移行。過去に乗った数々の機体と比べ段違いに優れたレーダーを搭載する『ファルクラムE』は、交戦域外の遠距離でも敵の様子を明確に教えてくれている。

HMD上には、迫る機影に重なるように囲う緑色のシーカー。先頭の1機はF-15C、残る3機はF-15Eと見て取ることができた。攻撃隊の本命は3機の『ストライクイーグル』と見えていい。

増槽を捨て、操縦桿を右、次いで手前へ引き、背面降下の形で機体を急降下させる。眼下では敵編隊の先頭、護衛と思しきF-15Cが増槽を捨て、縦方向への巴を描くようにこちらに相対する様が見て取れた。『イーグル』はこちらの針路へ割り入るように、鼻先を向けて上昇しながらヘッドオンの体勢へと入っていく。

彼我の火力、搭載機銃の精度、そして横方向への運動性を加味するに、ヘッドオンでのF-15CとMiG-29M1は五分。しかし、こちらは1機でも突破を許せば負け

である。カルロスは真正面から勝負を挑む愚を犯さず、射程距離ぎりぎりの位置からAAMを1発打ち、操縦桿を引いて早々に真正面の撃ち合いから手を引いた。

フレアを放ち鎌をいなした『イーグル』が、なおも正面を狙い接近する。

距離400、こちらの鼻先を狙い放たれる機銃。操縦桿を左へ倒し、同時にスロットルを絞って速度を殺して、曳光弾の筋を右翼側へといなす。放たれるAAMも、『ファルクラム』の尾を掠めることは叶わない。

轟音、一瞬。

F-15Cの大柄な機体を傍らに掠め、カルロスはなおも急降下を続けた。狙いはもとより視線の先、3機編隊を組むF-15E。

操縦桿を引いて機首を引き起こし、敵編隊の斜め上後方で平衡を取り戻す。距離にしておおよそ1000、AAMで狙うには一步遠い。しかしこれ以上踏み込めば、ミサイルアラートを感知した敵機はその時点で編隊を崩す。『ナイアッド』まで距離が無い以上、不慮の突破を防ぐためにも乱戦は避けたかった。

兵装変更、無誘導RCL。HOTAS概念を導入し多様な機能を集約された操縦桿は、片手だけで兵装の変更をも迅速にこなしうる。HMD上の兵装コマンドがAAMからRCLへ切り替わると同時に、正面に表示されていたレティクルもまた二回り大きな緑色の円へと姿を変えた。

ロケット弾の散布域を示す円を覗き込み、カルロスはおよその狙いを定める。

眼下に敵編隊を控え、狙うはその進行方向。弾頭の炸裂範囲を見越し、荒れ狂う弾雨の中に自ら飛び込むであろう距離。

距離にして900。

敵編隊が散開すると同時に進行方向へと放たれたロケット弾は、左右よりしめて12発。炎の尾を曳くそれらは『ストライクイーグル』の翼を掠めると同時に、信管を作動し立て続けに炸裂した。

「怪我の功名というのはまさにコレか。護衛任務に使うことは無いと思っていたが……」

破片の散布域を避けるため、カルロスの『ファルクラムE』はわずかに上昇したのち敵編隊の真上でロールし、天地を逆に見下ろす。それぞれの方に爆炎を抜けた3機は、依然健在ながらもそここに破片を突き立て、薄く煙を曳く無残な姿になり果てていた。左翼側へ抜けた1機などは右の垂直尾翼をほとんど失い、キャノピーにも亀裂が入っている。

今回カルロスの『ファルクラムE』が装備していたのは、サーモバリック弾頭に近接信管を組み合わせたものである。サーモバリック弾頭とは、平たく言えば固体の化合物を使用した燃料気化爆弾の一種であり、爆薬の体積に比べて高い威力と爆風、凄まじい音響を発生する特徴がある。もとより直撃を狙うものではないため対戦闘機相手では

威力こそ劣るものの、破片と爆風による機体そのものへの損傷は決して無視できないものであった。まして、極近距離で轟音を、それも連続で受けたパイロットが果たして無事でいられたかどうか。

もつとも、RCLそのものが無誘導兵器の域を出ないものであるため、本来は歩兵や非装甲目標、目いっぱい見積もってせいぜいヘリ相手に用いる兵装である。今回は敵編隊が『ナイアド』への距離を詰めるのに専心し、ぎりぎりまで編隊を保っていたことが利した格好であった。

眼下をよろめく敵機、海を指して落ちてゆく破片。

瞬間、見下ろすカルロスの背を穿つようにロックオンアラートが耳元で鳴り響いた。

機体を水平へ戻し、カルロスは操縦桿を握りながらスロットルを上げてゆく。

警報、ミサイル。後方より2発。レーダー上でおおよそ1600はある敵との距離からして、高機能中距離空対空ミサイル<sup>M</sup>を放ったに違いない。

「あくまで攻撃は諦めんか！」

舌打ちするように言い放ち、カルロスは操縦桿を左手前へと引く。

徐々に乗っていく速度、フライ・バイ・ワイヤを介した高い反応性。左上方へと旋回した『ファルクラムE』はカルロスの手捌きに従って鋭く右へと切り返し、ロールを交えて螺旋を描いてゆく。

背後に迫る1対は螺旋を追うこと叶わず、慣性と自らの速度の虜となって、彼方へと飛び去って行った。

カルロスはちらりと振り返り、彼我の位置と距離を見定める。

F-15Cはこちらのほぼ真後ろ、距離はやや縮んで1300。その速度と機動から察するに、短距離AAMを用いた格闘戦に持ち込もうという意図は明白だった。

F-15C『イーグル』といえはかつて目にした『円卓の鬼神』の愛機であり、同世代機の中でも最優と称される機体である。大型の機体でありながら空力特性とエンジン出力を活かした格闘戦にも強く、F-22『ラプター』の登場まで長らく最強の戦闘機とされてきた。

Mig-21bis、Mig-23MLD、そしてMig-21UPG。これまで乗って来た機体では到底敵う相手ではなく、何かしらの戦術を打たない限り今の状況は『詰み』であった。まして、今は朝。身を隠す雲も闇も無く、眼下は海である以上利用できる地形も無いならば、勝敗は自ずと明らかと言っていいたいだろう。

しかし。

そう言外に呟いて、カルロスは操縦桿を右へ、次いで手前に引く。鋭い機動でミサイルを避け、高い反応性で機銃の射線を躲しながら、上昇した機体はすぐさま反転して急降下に入った。



しかし、そう。今の手元には、このMiG-29M1『ファルクラムE』がある。

急降下から引き起こし、すぐさま左旋回。レーダーで敵の位置を確認しつつ、こちらの予測進路目掛け加速したのを確かめてから右へと切り返し。『イーグル』の加速性能と出力を逆手に取り、その隙を伺ってゆく。その様は傍目から見れば、猛牛の突進を紙一重でいなす闘牛士の身ごなしにも近い。

戦闘の要諦は、いかに敵を自らの土俵へ持ち込むか。これまで旧式機で戦わざるを得ず、戦術での勝負を強いられたがゆえに、カルロスはそのセオリーを学び、かつ徹底した。

読むのは空気、機動、彼我の長所。『ファルクラムE』の長所とはすなわち運動性であり、軽量で小回りに優れる点であり、反応性の良さである。——ならば、狙いは一点。幾度の切り返しで翻弄したのち、カルロスは右ロールで機体を上下反転させる。

急降下の前兆——。ちらつく赤布を意識の外にしたかのように、『イーグル』は急降下するであろう『ファルクラム』の下方へと照準を合わせて直進した。急降下は、すなわち左右への機動が鈍る降下でしかない。ならば、その入り際を狙い打つのは容易と言わんばかりに。

待つこと、二拍。敵の速度と進路を見定めたカルロスは、その瞬間に機体を右側へとロールし一回転。水平へ戻ると同時に機首を上げ、機体を僅かに上昇させた。

狙いを外され、加速しつつ緩降下に入る『イーグル』。その頭上で、上昇し速度を殺す『ファルクラム』。素早く操縦桿を前へと倒すと、眼下にこちらを追い越し無防備な頭上を晒すF-15Cの姿が照準のさ中に捉えられた。

空戦機動の一つ、縦方向への機動とオーバーシユート誘発を絡めたロー・ヨー・ヨー——その小半径版。

兵装選択をAAMに戻したカルロスの眼前で、『ファルクラム』の機動に絡め取られた『イーグル』は無慈悲にミサイルシーカーへと捉えられた。

「FOX2」

放つAAMは1発。眼下の『イーグル』は身を振るように左へ旋回し、同時にチャフとフレアを放出してその矛先を躲してゆく。

隙は、その機動。そして主たる人の心。

回避しおおせたと錯覚し一瞬鈍った機動を穿つように、カルロスは機体を加速させ、一投足の位置から引き金を引く。

旋回し投影面積を増大させた『イーグル』に回避の術はなく、30mm口径の弾丸に心臓たるエンジンを貫かれ、赤い炎に包まれていった。

削ぐように墜ちてゆく尾翼、白い空を汚す黒い煙。先のRCLで計器類を損傷したのか、3機のF-15Eは東を指して、既に空域を離れつつある。

あとは、確か情報では敵の艦艇が接近中だったか。

周囲に敵影がないことを確かめ、カルロスはリーダーレンジを索敵モードへ切り替えながら、手元のボタンで通信を開いた。

「こちらニムロッド1、敵編隊の迎撃に成功した。周囲に他の敵性反応なし。ニムロッド2、そちらはどうだ」

《こちらニムロッド2、『ナイアッド』は無事です。友軍の増援もあり、接近中の敵艦艇は排除されました。他に脅威は存在せず》

「増援?…了解した、そちらに合流する」

事前に無かった増援の情報に、カルロスは首をひねる。よほどに状況が混乱していたのか、それとも単に『クラックス』が情報を把握していなかったのだろうか。

疑問を胸に、カルロスは『ファルクラム』を西へと駆けさせる。右手に艦艇の沈没跡らしき黒煙の筋を確かめ、彼方に『ナイアッド』を認め——同時に、その疑問は氷解した。

数が、増えている。海上には、『ナイアッド』を囲うように駆逐艦が2隻。空にもアレックスの『ファルクラム』の他に機影が3つ増え、当初の寡勢が嘘のような光景となっていた。

距離を詰め、アレックスの隣へと機体を向ける。合流していたオーレリアの機体は2

機のF-16Cと、群青の塗装を施され、尾翼に南十字星と鷹のエンブレムを刻んだF-4E『ファントムII』。

「『南十字星』…」

《二ムロッド隊の合流を確認。これで、レサス追撃部隊の排除を確認しました。隊長、そろそろプナへ戻って休んで下さい》

通信には、安堵を帯びた『クラックス』の声。傍受を警戒してか、『ファントムII』は眼下の駆逐艦へ向けて光信号を送ったのち、翼を翻して北の方へと飛んでいった。

「…一体、何が…」

《レサスの追撃部隊が発進したのを知って、『南十字星』が急遽増援を編成して派遣してくれたようです。まさか、本人が駆け付けるとは思いませんでした》

「…なんと、まあ」

アレックスの説明に、カルロスは今度こそ心底から呆れ声を上げた。

アレックスの話の踏まえるに、どうやら『南十字星』は敵の進発を確認した時点でサントエルバ方面での戦闘を切り上げ、パターンソン港へ直行したようである。停泊中の艦隊から一部を割いて『ナイアッド』護衛に進発させると同時に、自らはそのまま南下。沿岸警備隊と連絡を取り合って敵のミサイル艇を捕捉し、僚機と連携し撃退したのちに『ナイアッド』に合流したというのが、事の真相のようであった。

呆れたパイロット——それが、カルロスの包み隠さぬ評価だった。

これまで、比類ない技量を持つパイロットは何度も見て来た。『円卓の鬼神』、ベルカのヴァイス隊やゲルプ隊、アルベルト大尉にフィオン。『リボン付き』、そしてハルヴ隊。いずれも、個、あるいは小隊単位で、戦場をひっくり返す力を持っていたと言っている。しかし、『南十字星』はこれらのいずれにも属さない極めて特殊なパイロットである。戦場ではなく戦争を俯瞰し、三軍の垣根を超えて増援を差配し、地上とも連携を取って任務を達成する。戦場では無く戦争を動かすという点で言えば、もはやその存在は一軍の総司令に匹敵するのではないか。

空は、広い。変わりゆく世界の果てでも、絶望のさ中にある国でも、綺羅星のように輝くこんな人間がいる。

目元のバイザーを上げて、カルロスは『南十字星』が去った北の空へと目を向ける。雲なき空、白夜の残照が残るまばゆい光。

バイザー越しの光景に慣れた目には、その光が少し眩しかった